

津寺三本木遺跡 津寺一軒屋遺跡

主要地方道箕島高松線改良工事に伴う発掘調査 1

1999

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 142

津寺三本木遺跡
津寺一軒屋遺跡

主要地方道箕島高松線改良工事に伴う発掘調査 1

1999

岡山県教育委員会



1. 津寺三本木遺跡 溝 -14遺物出土状況（南東から）



2. 津寺三本木遺跡 溝 -14出土遺物



1. 津寺三本木遺跡 溝 - 10出土遺物

C2



599

2. 津寺三本木遺跡 出土裝飾器台



400

3. 津寺三本木遺跡 溝 - 14出土遺物「おこげ」



81

4. 津寺一軒屋遺跡 河道 - 1出土遺物



1. 津寺一軒屋遺跡 鍛冶炉－1（東から）



2. 津寺三本木遺跡 溝－48牛・馬骨出土状況（北から）

序

県都岡山市は県南部に位置し、中四国圏域内の政治経済の中心として栄え、また古くから山陰と瀬戸内、九州と畿内を結ぶ交通の要衝として知られています。さらに近年、広域基幹交通網の整備とともに本州四国連絡橋陸上ルート、山陽自動車道の開通など交通条件の改善が進み、アクセス道路や、従来の関連生活道の整備改良が大きな課題となっていましたところであります。こうしたことから大内田・高松地域を結ぶ一般県道大内田高松線の改良工事が計画され、岡山県古代吉備文化財センターでは、この工事に先立ち平成3年2月より岡山市津寺の路線内に所在する津寺三本木・一軒屋遺跡の発掘調査を実施したわけであります。

当該地には古くから開けた足守川の平野や丘陵上を中心にして、縄文時代から中・近世遺跡の存在が広く知られています。なかでも、吉備の大首長の勢威を物語る墳頂の立石群・30個をこえる特殊器台・長さ3.5mの木櫛・棺底におかれた32~33kgの朱の出土などで著名な楯築弥生墳丘墓が南の丘陵にあり、西の平野には全国第4位の規模（全長360m）を誇る前方後円墳、造山古墳と6基からなる古墳群があります。これらの代表的な墳墓または古墳以外にも、吉備の歴史を解明するに必要な遺跡が、数多く残されています。

今回の調査では、弥生時代後期から、古墳時代前期～後期、古代、中世、近世に至るまでの集落遺構を検出しました。さらに、山陽自動車道建設に伴い、発掘調査が実施された津寺遺跡と同じ微高地に形成された同時期の集落の一端を確かめることもできました。とりわけ、注目される遺構は、県内最古の可能性を持つ弥生時代後期末の鍛冶炉の存在であり、その構造の一端が明らかになった意義は大きい、といえましょう。

この報告書が今後の調査研究、文化財の保護・保存のために活用され、一方で地域の歴史研究を深める資料として広く利用いただければ幸いと存じます。

なお、現地調査の実施、報告書の作成にあたって、岡山県文化財保護審議会委員、岡山県道路建設課、岡山地方振興局建設部工務第二課、ならびに地元の関係各位から暖かい御理解と御協力をいただきました。末筆ながら、記して厚くお礼申し上げる次第です。

平成11年3月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 葛原克人

例　言

1. 本書は、主要地方道箕島高松線（旧一般県道大内田高松線）改良工事に伴い、岡山県教育委員会が岡山県土木部道路建設課改良係・岡山地方振興局建設部工務第二課から依頼を受けて岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した、津寺三本木遺跡・津寺一軒屋遺跡（岡山市津寺）の報告書である。
2. 調査期間は、第一次調査が平成2年2月～3月、第二次調査が平成2年12月、第三次調査が平成3年4月～平成4年6月、第四次調査が平成7年7月～9月である。
3. 発掘調査は、第一次調査を氏平昭則、第二次調査を松本和男・長川優が担当した。第三次調査については、平成3年度を高畠知功・速水章人、平成4年度を山磨康平・速水章人が担当、第四次調査は、高田恭一郎・小嶋善邦が担当した。
4. 発掘調査および、報告書作成にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の近藤義郎・水内昌康両先生から現地指導およびご助言を賜った。記して深謝の意を表す次第である。さらに、多数の県内外の研究者の方々から、様々なご助言、ご教示を得た。記して、感謝の意を表す次第である。
5. 特殊な遺物および自然科学分野における鑑定、同定等については、下記の諸氏に依頼し、有益な教示を得、一部の成果については、報告文をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

・動物遺体鑑定	富岡直人（岡山理科大学理学部）
・鉄滓鑑定	大澤正己（九州テクノリサーチ株式会社）
・陶磁器の年代産地鑑定	大橋康二（佐賀県教育委員会）
・石材鑑定	妹尾 譲（倉敷芸術大学助教授）
・土器胎土分析	白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）
・木材の樹種同定	パリノ・サーヴェイ株式会社
・花粉・植物珪酸体の同定	〃
・花粉分析	古環境研究所
6. 報告書の作成は平成9年度に高畠・速水が担当し、岡山県古代吉備文化財センターにて行った。
7. 本書の執筆は、高畠・山磨・大橋・高田・速水・氏平が行い、文末に文責を記した。全体編集は高畠が行った。
8. 遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を仰いだ。
9. 本報告書に関係する遺物、実測図、写真、マイクロフィルム等は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

1. 本報告書に記載された高度値は海拔高であり、方位は、特に示さない限り磁北であるが、第1～第3図は、国土座標系の座標北を示す。遺跡付近の磁北線偏差は西偏 $6^{\circ} 30''$ を測る。

2. 本報告書掲載の各遺構・遺物実測図の縮尺率は、可能な限り下記の通り統一し、例外については、縮尺率を明記した。

遺構 墓穴住居・掘立柱建物・柱穴列・凹地・水田層：1/60

袋状土壙・焼土壙・土壙・土器溜まり・鍛冶炉・溝：1/30

遺物 土器：1/4 土製品：1/3 金属器：1/3 石器・石製品：1/2・1/3 玉類 1/1

3. 遺構番号・遺物番号は、津寺三本木・津寺一軒屋各遺跡の連番である。

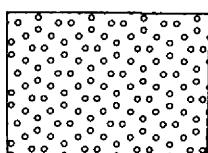
4. 遺物番号は、材質を示すため、土器以外のものについては下記の略称を番号の前に付した。

土製品：C 石器・石製品：S 金属器：M 木器・木製品：W

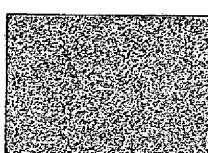
5. 土器実測図で表現する中軸線左右の白抜きは、小破片のために口径復元に不確実性があるものを示す。

6. 本報告書における土層名称については、基本的に各発掘調査の担当者の表記方法に従っている。

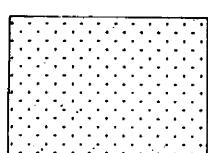
7. 炭・灰や粘土・焼土の分布・被熱範囲は、下記のスクリーントーンで表示した。なお、津寺一軒屋遺跡の鍛冶炉-1については、別途明記した。



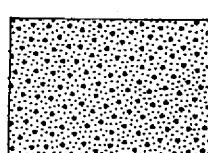
粘 土



炭・灰



焼 土



被熱範囲

8. 遺構名を省略する場合の略称は、以下の通りである。

墓穴住居：住 掘立柱建物：建 柱穴列：柱 袋状土壙：袋土 焼土壙：焼土 鍛冶炉：鍛 土器溜まり：土溜 砂利道：道 土壙墓：墓 溝状遺構：溝遺 水田層：水田 水田畦畔：水畦

また、遺物名については、壺型土器・甕型土器・高杯型土器などを壺・甕・高杯のように略称して用いる。

9. 本報告書にもちいた遺構・遺物の時期については弥生時代から古墳時代前期については表-1の編年対比表のように表記し、それ以外の時期については各執筆者の意向に沿っており、統一していない。なお、本報告書における古代・中世については7世紀から16世紀までを指している。

10. 第2図は、建設省国土地理院発行の1/25,000の1地形図の総社西部・倉敷を、第3図は複製し、加筆したものである。

表一 編年対比表

		津 寺 (註1)	上東・川入 (註2)	百 間 川 (註3)	雄 町 (註4)	岡 山	
弥 生 時 代	前 期	弥・前・I	百・前・I	百・前・I		津 島	弥生時代前期前葉
		弥・前・II		百・前・II	雄町1	門 田	弥生時代前期中葉
		弥・前・III		百・前・III	雄町2		弥生時代前期後葉
	中 期	弥・中・I		高 田		南 方	
		弥・中・II		百・中・I	雄町3		弥生時代中期前葉
		弥・中・III		百・中・II	船山5		
	後 期	鬼川市0		百・中・III	菰 池	菰 池	弥生時代中期中葉
		鬼川市I		百・中・IV	雄町4		
		鬼川市II		百・後・I	前山東	前山II	
	後 期	鬼川市III		百・後・II	雄町5		弥生時代中期後葉
		才ノ町I		百・後・III	雄町6		
		才ノ町II		百・後・IV	雄町7	仁 伍	弥生時代後期前葉
					雄町8		
					雄町9		弥生時代後期中葉
	古 墳 時 代				雄町10		
		古・前・I	下田所	百・古・I	+	上 東	弥生時代後期後葉
		古・前・II	亀川上層		雄町11		弥生時代後期末葉
		+			雄町12		
		古・前・III	川入・大溝上層	百・古・II	雄町13		古墳時代前期前葉
					雄町14	王泊六層	
					雄町15		古墳時代前期後葉

註1 「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会 1995年

註2 「川入・上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会 1977年

註3 岡山県教育委員会が1977年から実施している「百間川遺跡群」の発掘調査で用いられている編年である。

(文献『旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査 I ~ XIII』岡山県教育委員会 1980~1997年)

註4 「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告1』岡山県教育委員会 1972年

目 次

卷頭カラー写真図版

序

例 言

凡 例

目 次

序 説

I	津寺三本木・津寺一軒屋遺跡の地理的・歴史的環境	1
II	津寺三本木・津寺一軒屋遺跡の調査経緯と経過.....	5
III	調査・整理の組織.....	7
IV	調査の概要と報告書作成.....	8

第1章 津寺三本木遺跡

第1節	遺跡の概要と調査区.....	10
第2節	弥生時代の遺構・遺物.....	13
第3節	古墳時代の遺構・遺物.....	40
第4節	古代の遺構・遺物.....	97
第5節	中世の遺構・遺物.....	112
第6節	近世以降の遺構・遺物.....	126

第2章 津寺一軒屋遺跡

第1節	遺跡の概要と調査区.....	141
第2節	弥生時代の遺構・遺物.....	142
第3節	古墳時代の遺構・遺物.....	161
第4節	古代の遺構・遺物.....	173
第5節	中・近世以降の遺構・遺物.....	181

第3章 小結

第1節	発掘調査成果の概要.....	192
-----	----------------	-----

津寺三本木遺跡遺構名称対照表・津寺一軒屋遺跡遺構名称対照表	195
-------------------------------------	-----

付載 自然科学分野における分析・鑑定

付載1	津寺三本木・津寺一軒屋遺跡出土鉄滓の金属学的調査	大澤 正己	196
付載2	津寺三本木・津寺一軒屋遺跡出土土器の胎土分析	白石 純	203
付載3	津寺三本木・津寺一軒屋遺跡出土の動物遺存体	富岡 直人	208

写真図版

報告書抄録

図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/1,250,000)	1	第35図 土壙-19 (1/30) ・出土遺物.....	31
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3	第36図 土壙-20 (1/30) ・出土遺物.....	32
第3図 津寺三本木・一軒屋周辺地形図 (1/8,000)	5	第37図 土壙-21 (1/30)	32
第4図 調査区位置図 (1/3,000).....	6	第38図 土壙-22 (1/30) ・出土遺物.....	33
第5図 発掘調査範囲 (1/3,000).....	8	第39図 土壙-25 (1/30) ・出土遺物.....	33
第6図 津寺三本木・一軒屋遺跡調査区名称 (1/2,000).....	9	第40図 溝-1 (1/30) ・出土遺物.....	34
第7図 調査区土層断面 (1/60)	10	第41図 溝-2 (1/30)	34
第8図 津寺三本木遺跡弥生時代全体図 (1/400)	11~12	第42図 溝-3 (1/30) ・出土遺物	34
第9図 竪穴住居-1 (1/60) ・出土遺物.....	14	第43図 溝-5 (1/30)	34
第10図 竪穴住居-2, 3 (1/60) ・出土遺物.....	15	第44図 溝-6 (1/30)	34
第11図 竪穴住居-2 出土遺物.....	16	第45図 溝-4 (1/60) ・出土遺物	35
第12図 竪穴住居-3 出土遺物.....	16	第46図 溝-8 (1/30) ・出土遺物	36
第13図 竪穴住居-6 (1/60) ・出土遺物.....	17	第47図 溝-11 (1/30) ・出土遺物.....	36
第14図 竪穴住居-7 (1/60) ・出土遺物.....	18	第48図 溝-12 (1/30)	37
第15図 竪穴住居-8 (1/60)	19	第49図 遺構に伴わない遺物 (1)	38
第16図 竪穴住居-9 (1/30) ・出土遺物.....	19	第50図 遺構に伴わない遺物 (2)	39
第17図 竪穴住居-9 出土遺物.....	20	第51図 津寺三本木遺跡古墳時代全体図 (1/400)	41~42
第18図 柱穴列-1 (1/60)	20	第52図 竪穴住居-10 (1/60)	43
第19図 袋状土壙-1, 2 (1/30) ・出土遺物.....	21	第53図 竪穴住居-10出土遺物.....	44
第20図 袋状土壙-2 出土遺物.....	22	第54図 竪穴住居-11 (1/60) ・出土遺物.....	45
第21図 袋状土壙-3 (1/30) ・出土遺物.....	23	第55図 竪穴住居-12 (1/60) ・出土遺物.....	46
第22図 袋状土壙-4 (1/30) ・出土遺物.....	23	第56図 竪穴住居-13出土遺物.....	46
第23図 袋状土壙-4 出土遺物.....	24	第57図 竪穴住居-13 (1/60) ・出土遺物.....	47
第24図 袋状土壙-5 (1/30) ・出土遺物.....	25	第58図 竪穴住居-14 (1/60) ・出土遺物.....	48
第25図 袋状土壙-6 (1/30) ・出土遺物.....	26	第59図 竪穴住居-15 (1/60) ・出土遺物.....	49
第26図 袋状土壙-7, 土壙-9 (1/30)	27	第60図 竪穴住居-16 (1/60) ・出土遺物.....	50
第27図 土壙-1 (1/30) ・出土遺物.....	27	第61図 竪穴住居-18 (1/30) ・出土遺物.....	51
第28図 土壙-2 (1/30) ・出土遺物.....	27	第62図 柱穴列-2 (1/60)	52
第29図 土壙-3 (1/30) ・出土遺物.....	28	第63図 土壙-24 (1/30) ・出土遺物.....	52
第30図 土壙-4~14 (1/30)	29	第64図 土壙-26~28, 30, 31, 33, 35~37 (1/30)	53
第31図 土壙-15 (1/30) ・出土遺物.....	30	第65図 土壙-32 (1/30) ・出土遺物.....	54
第32図 土壙-16 (1/30) ・出土遺物.....	30	第66図 土壙-34 (1/30) ・出土遺物.....	54
第33図 土壙-17 (1/30) ・出土遺物.....	30	第67図 土壙-39 (1/30) ・出土遺物.....	54
第34図 土壙-18 (1/30) ・出土遺物.....	31	第68図 土壙-40, 41, 43~46 (1/30)	55
		第69図 土壙-47 (1/30) ・出土遺物.....	56

第70図 溝－4 (1/60) ・出土遺物	57	第109図 溝－29出土遺物 (1)	90
第71図 溝－7 (1/30) ・出土遺物	58	第110図 溝－29出土遺物 (2)	91
第72図 溝－10 (1/30) ・出土遺物	59	第111図 溝－29出土遺物 (3)	92
第73図 溝－14 (1/35)	60	第112図 溝－32 (1/30) ・出土遺物	92
第74図 溝－14出土遺物 (1)	61	第113図 遺構に伴わない遺物 (1)	93
第75図 溝－14出土遺物 (2)	62	第114図 遺構に伴わない遺物 (2)	94
第76図 溝－14出土遺物 (3)	63	第115図 津寺三本木遺跡古代全体図(1/400)	95～96
第77図 溝－14出土遺物 (4)	64	第116図 土壙－48 (1/30) ・出土遺物	98
第78図 溝－14出土遺物 (5)	65	第117図 土壙－49 (1/30)	98
第79図 溝－14出土遺物 (6)	66	第118図 土壙－49出土遺物	99
第80図 溝－14出土遺物 (7)	67	第119図 土壙－50, 51 (1/30) ・出土遺物	100
第81図 溝－14出土遺物 (8)	68	第120図 土壙－52 (1/30) ・出土遺物	101
第82図 溝－14出土遺物 (9)	70	第121図 土壙－53 (1/15)	101
第83図 溝－14出土遺物 (10)	71	第122図 土壙－54～56 (1/30)	101
第84図 溝－14出土遺物 (11)	72	第123図 土壙－57 (1/30)	102
第85図 溝－14出土遺物 (12)	73	第124図 土壙－58 (1/30) ・出土遺物	102
第86図 溝－14出土遺物 (13)	74	第125図 土壙－59 (1/30) ・出土遺物	103
第87図 溝－16 (1/30)	74	第126図 土壙－63 (1/30) ・出土遺物	104
第88図 溝－16 (1/100)	75	第127図 溝－30 (1/30)	104
第89図 溝－16 (1/40)	76	第128図 溝－31 (1/30)	104
第90図 溝－16出土遺物 (1)	77	第129図 溝－33 (1/30) ・出土遺物	105
第91図 溝－16出土遺物 (2)	78	第130図 溝－34 (1/30)	105
第92図 溝－16出土遺物 (3)	79	第131図 溝状遺構－1 (1/60)	106
第93図 溝－16出土遺物 (4)	80	第132図 土器溜り－1 (1/30)	106
第94図 溝－16出土遺物 (5)	81	第133図 土器溜り－1 出土遺物	107
第95図 溝－16出土遺物 (6)	82	第134図 土器溜り－2 出土遺物	107
第96図 溝－16出土遺物 (7)	83	第135図 鍛冶炉－1 (1/15)	107
第97図 溝－16出土遺物 (8)	84	第136図 遺構に伴わない遺物 (1)	108
第98図 溝－17, 18, 19, 20 (1/30)	84	第137図 遺構に伴わない遺物 (2)	109
第99図 溝－21 (1/30) ・出土遺物	84	第138図 遺構に伴わない遺物 (3)	110
第100図 溝－22, 24 (1/30) ・出土遺物	85	第139図 遺構に伴わない遺物 (4)	111
第101図 溝－23 (1/30)	86	第140図 津寺三本木遺跡中世全体図(1/400)	113～114
第102図 溝－25, 26 (1/30)	86	第141図 建物－1, 柱穴列－1 (1/60)	115
第103図 溝－27 (1/30)	86	第142図 土壙－60～64 (1/30)	116
第104図 溝－27, 28 (1/60)	86	第143図 土壙－65 (1/30)	117
第105図 溝－28 (1/30)	87	第144図 土壙－66 (1/30) ・出土遺物	117
第106図 溝－29 (1/30)	87	第145図 土壙－67 (1/30)	118
第107図 溝－28出土遺物 (1)	88	第146図 土壙－68 (1/30)	118
第108図 溝－28出土遺物 (2)	89	第147図 土壙－69 (1/30) ・出土遺物	119

第148図 溝-35~40 (1/30)	119	第184図 調査区名称	142
第149図 溝-44 (1/30)	119	第185図 津寺一軒屋遺跡弥生時代全体図 (1/400)	
第150図 溝-45, 48 (1/30)	120	143
第151図 溝-47 (1/30)	120	第186図 土壙-1 (1/30) ·出土遺物	144
第152図 溝-49 (1/30, 1/60) ·出土遺物	120	第187図 土壙-2 (1/30)	144
第153図 溝-49 (1/30) ·出土遺物	121	第188図 土壙-4 (1/30)	144
第154図 溝-49出土遺物	122	第189図 土壙-3 (1/30) ·出土遺物	145
第155図 溝-50, 52 (1/30) ·出土遺物	123	第190図 鍛冶炉-1 (1/30)	146
第156図 溝-54 (1/30) ·出土遺物	123	第191図 鍛冶炉-1 出土遺物	147
第157図 溝-56 (1/30)	124	第192図 鍛冶炉-1 (1/30) ·出土遺物	148
第158図 溝-55, 溝状遺構-2 (1/30, 1/60) · 出土遺物	124	第193図 土器溜り-1 (1/30)	149
第159図 鍛冶炉-2 (1/15)	124	第194図 土器溜り-1 出土遺物	150
第160図 砂利道-1 出土遺物	125	第195図 水田-1 (1/60)	151
第161図 遺構に伴わない遺物	125	第196図 3区西壁土層断面(1/90)	152
第162図 津寺三本木遺跡近世以降全体図 (1/400)		第197図 河道-1 (1/30) ·出土遺物 (1)	153
.....	127~128	第198図 河道-1 出土遺物 (2)	154
第163図 土壙-71 (1/30)	129	第199図 河道-1 出土遺物 (3)	155
第164図 土壙-72 (1/30)	129	第200図 河道-1 出土遺物 (4)	156
第165図 土壙-73 (1/30) ·出土遺物	129	第201図 遺構に伴わない遺物 (1)	157
第166図 土壙-75 (1/30)	130	第202図 遺構に伴わない遺物 (2)	158
第167図 土壙-74 (1/30) ·出土遺物	130	第203図 遺構に伴わない遺物 (3)	159
第168図 溝-58 (1/60) ·出土遺物	131	第204図 津寺一軒屋遺跡古墳時代全体図 (1/400)	
第169図 溝-59 (1/30)	131	160
第170図 溝-60 (1/30, 1/80)	132	第205図 竪穴住居-3 (1/60) ·出土遺物	162
第171図 溝-60出土遺物	133	第206図 竪穴住居-4 (1/60)	163
第172図 溝-61 (1/30)	134	第207図 竪穴住居-4 出土遺物	164
第173図 溝-62 (1/30)	134	第208図 竪穴住居-4 出土遺物	165
第174図 溝-63~65 (1/30)	134	第209図 竪穴住居-5 (1/60) ·出土遺物	165
第175図 溝-67, 68 (1/80)	135	第210図 土壙-18 (1/30) ·出土遺物	166
第176図 溝-69~72 (1/30)	136	第211図 土壙-5 (1/30) ·出土遺物	166
第177図 溝-73 (1/30)	136	第212図 焼土壙-1 (1/30)	166
第178図 溝状遺構-3 (1/30) ·出土遺物	136	第213図 溝-1 (1/30)	167
第179図 遺構に伴わない遺物 (1)	137	第214図 溝-2 (1/30)	167
第180図 遺構に伴わない遺物 (2)	138	第215図 溝-3 (1/30)	167
第181図 遺構に伴わない遺物 (3)	139	第216図 溝状遺構-1 (1/30)	168
第182図 遺構に伴わない遺物 (4)	140	第217図 柱穴出土遺物	168
第183図 2, 3, 7区土層断面 (1/60) ·出土遺 物	141	第218図 遺構に伴わない遺物 (1)	168
		第219図 遺構に伴わない遺物 (2)	169
		第220図 遺構に伴わない遺物 (3)	170

第221図 遺構に伴わない遺物（4）	171	第238図 土壙－7（1/30）・出土遺物	183
第222図 津寺一軒屋遺跡古代全体図（1/400）	172	第239図 土壙－8（1/30）	184
第223図 掘立柱建物－1（1/30）	173	第240図 土壙－9～14（1/30）	184
第224図 土壙－6（1/30）・出土遺物	174	第241図 土壙－15（1/30）・出土遺物	185
第225図 溝－4（1/30）・出土遺物	174	第242図 土壙－17（1/30）・出土遺物	185
第226図 溝－4出土遺物	175	第243図 土壙－19（1/30）・出土遺物	186
第227図 柱穴出土遺物	175	第244図 土壙－20（1/30）・出土遺物	186
第228図 1区東壁・中央トレンチ（1/100）	176	第245図 土壙－21（1/30）・出土遺物	186
第229図 河道－3出土遺物	177	第246図 水田畦畔－1（1/30）	187
第230図 2区東壁北半（1/100）・河道－4出土遺物	178	第247図 溝－5（1/30）・出土遺物	187
第231図 遺構に伴わない遺物	179	第248図 溝－6, 7（1/30）	187
第232図 津寺一軒屋遺跡中・近世以降全体図（1/400）	180	第249図 溝－16～22（1/30）	188
第233図 掘立柱建物－2（1/60）	181	第250図 溝－19（1/30）	188
第234図 掘立柱建物－3（1/60）	181	第251図 溝－23（1/30）・出土遺物	188
第235図 掘立柱建物－4（1/60）	182	第252図 溝－8～15（1/60）・出土遺物	189
第236図 柱穴列－1（1/60）	182	第253図 溝状遺構－2（1/30）	190
第237図 土壙墓－1（1/30）・出土遺物	183	第254図 柱穴出土遺物	190
		第255図 遺構に伴わない遺物	191
		第256図 周辺地形図（1/12,000）	192

表 目 次

表－1 編年対比表	9
表－2 津寺三本木・一軒屋遺跡発掘調査一覧表	6
表－3 発掘調査の概要	9
表－4 津寺三本木・一軒屋遺跡関連遺構・遺物消長表	193

巻頭図版目次

卷頭図版 1	3. 津寺三本木遺跡溝－14出土遺物「おこげ」
1. 津寺三本木遺跡溝－14遺物出土状況(南東から)	4. 津寺一軒屋遺跡河道－1出土遺物
2. 津寺三本木遺跡溝－14出土遺物	卷頭図版 3
卷頭図版 2	1. 津寺一軒屋遺跡鍛冶炉－1(東から)
1. 津寺三本木遺跡溝－10出土遺物	2. 津寺三本木遺跡溝－48牛・馬骨出土状況(北から)
2. 津寺三本木遺跡出土装飾器台	

写真図版目次

図版 1	3. 壺穴住居－7(北から)
1. 津寺三本木遺跡遠景(西から)	図版 3
2. 津寺三本木遺跡全景(南から)	1. 袋状土壙－1, 2(東から)
図版 2	2. 袋状土壙－4(南から)
1. 津寺三本木遺跡壺穴住居－2, 3(北から)	3. 袋状土壙－5(東から)
2. 壺穴住居－6(東から)	図版 4

1. 壺穴住居-10, 11 (南から)
2. 壺穴住居-10, 11 土壙-29, 30, 31 (南から)
- 図版 5
1. 壺穴住居-13 (北から)
2. 壺穴住居-14 (北から)
3. 壺穴住居-15, 16 (南から)
- 図版- 6
1. 溝- 9, 10, 14 (南から)
2. 溝-10, 14 (北西から)
3. 溝-16 (南東から)
- 図版 7
1. 溝-16, 17, 18, 19, 20 (北から)
2. 溝-16 (南東から)
- 図版 8
1. 溝-26 (南から)
2. 溝-26 (南東から)
3. 溝-26, 27, 28, 29 (北から)
- 図版 9
1. 溝-27, 28 (北から)
2. 溝-32 (南から)
3. 土器溜り- 1 (北から)
- 図版10
1. 土壙-48, 49, 50, 51 (南から)
2. 土壙-51 (西から)
3. 土壙-49 (東から)
- 図版11
1. 建物- 1, 柱穴列- 3 (北から)
2. 建物- 1 (南から)
3. 凹地- 2 (北から)
- 図版- 12
1. 溝-49 (北から)
2. 溝-49 (東から)
3. 溝-49 (東から)
- 図版- 13
1. 鍛冶炉- 2 (北東から)
2. 鍛冶炉- 2 (南から)
3. 砂利道- 8 (北から)
- 図版- 14
1. 凹地- 2 (東から)
2. 溝-60 (南から)
3. 溝-60 (南から)
- 図版15
- 弥生時代の土器 (壺穴住居- 2, 袋状土壙- 5, 土壙- 3)
- 図版16
- 溝-14出土遺物 (1)
- 図版17
- 溝-14出土遺物 (2)
- 図版18
- 溝-14出土遺物 (3)
- 図版19
- 溝-14出土遺物 (4)
- 図版20
- 溝-14出土遺物 (5)
- 図版21
- 溝-16出土遺物
- 図版22
- 奈良時代の土器 (土壙-49・51, 溝-33)
- 図版23
- 近世・近代の遺物
- 図版24
1. 津寺一軒屋遺跡溝- 3 (西から)
2. 溝- 4 (北西から)
3. 溝- 4 (東から)
- 図版25
1. 河道- 1 (西から)
2. 壺穴住居- 4 (南東から)
3. 焼成土壙- 1 (北東から)
- 図版26
1. 土器溜り- 1 (西から)
2. 河道- 1 (南東から)
3. 河道- 1 (北西から)
- 図版27
1. 鍛冶炉- 1 (南西から)
2. 鍛冶炉- 1 (西から)
3. 鍛冶炉- 1 (東から)
- 図版28
- 河道- 1 出土遺物

図版29

鍛冶炉－1 出土鉄片・上層出土遺物

図版30

竪穴住居－4 出土遺物

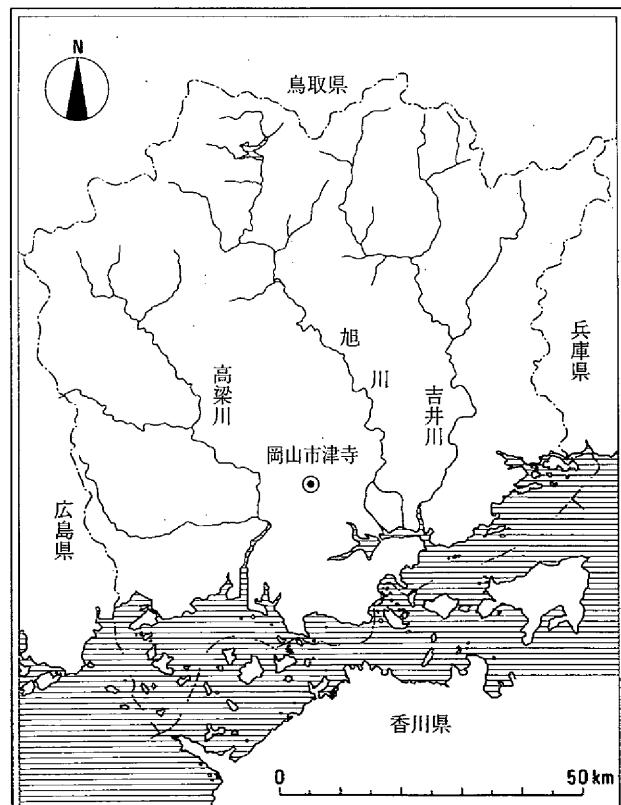
序　　説

I 津寺三本木・津寺一軒屋遺跡の地理的・歴史的環境

本報告に掲載した津寺三本木・津寺一軒屋遺跡は、岡山県岡山市津寺に所在し、北緯34度40分、東経133度49分に位置する。岡山市の北西部にあたり、総社平野を含めて古高梁川の氾濫原と考えられており、肥沃な谷底平野が形成されている。現在では吉備高原に水源を求める足守川がこの平野を南流し、児島湖に注ぎ込んでいる。津寺三本木・津寺一軒屋遺跡は、この足守川の東岸にあり、津寺遺跡（3）の東側に位置し、同じ微高地上に所在をしている。現地表では海拔4.5m～5m前後であり、現在は水田の景観が望める。

遺跡南西側には、仕手倉山（標高223.8m）を高峰とする小起伏の丘陵地が高さを減じながら周辺に広がっている。これらの丘陵地は主として花崗岩、閃錫岩質岩石といった中生代の深成岩からなり、一部が礫がち堆積地、泥質岩といった固結堆積物、また流紋岩質岩、輝緑岩質岩といった火山性岩石からなる。遺跡東側は標高200m以下の名越山、鼓山、三光山を高峰とする大起伏、小起伏の丘陵地が南西に高度を減少させつつ広がっている。これらは基本的に花崗岩により形成されているが、ホルンフェルス化した砂質岩石、凝灰岩および凝灰角礫岩等の固結堆積物や火山柱岩石で形成された丘陵も存在する。この南側には、ホルンフェルス化した古生代の砂質岩石、泥質岩石で形成された標高162.3mの吉備の中山丘陵が位置する。

津寺三本木・津寺一軒屋遺跡は以上のような環境下にあり、足守川を中心とする沖積地、および北東、南西の丘陵には古くから人間の足跡を辿ることができる。もっとも古い遺物では甫崎天神山遺跡（93）、雲山遺跡（92）のナイフ形石器、矢部堀越遺跡（82）のポイント（尖頭器）等の約10点が見られるが、旧石器時代の遺構の存在は明らかではない。縄文時代の遺物は早期から晩期にわたって少なからず見ることができる。標高15～16mをはかる倉敷市矢部奥田遺跡（83）では中期末を中心とする矢部貝塚が形成されており、後期においても集落が営まれた痕跡をとどめる。後・晩期は矢部貝塚から直線距離にして1km北にある甫崎天神山遺跡付近に居住を移した可能性も窺える。弥生時代になると遺跡数は



第1図 遺跡位置図 (1/1,250,000)

序　　説

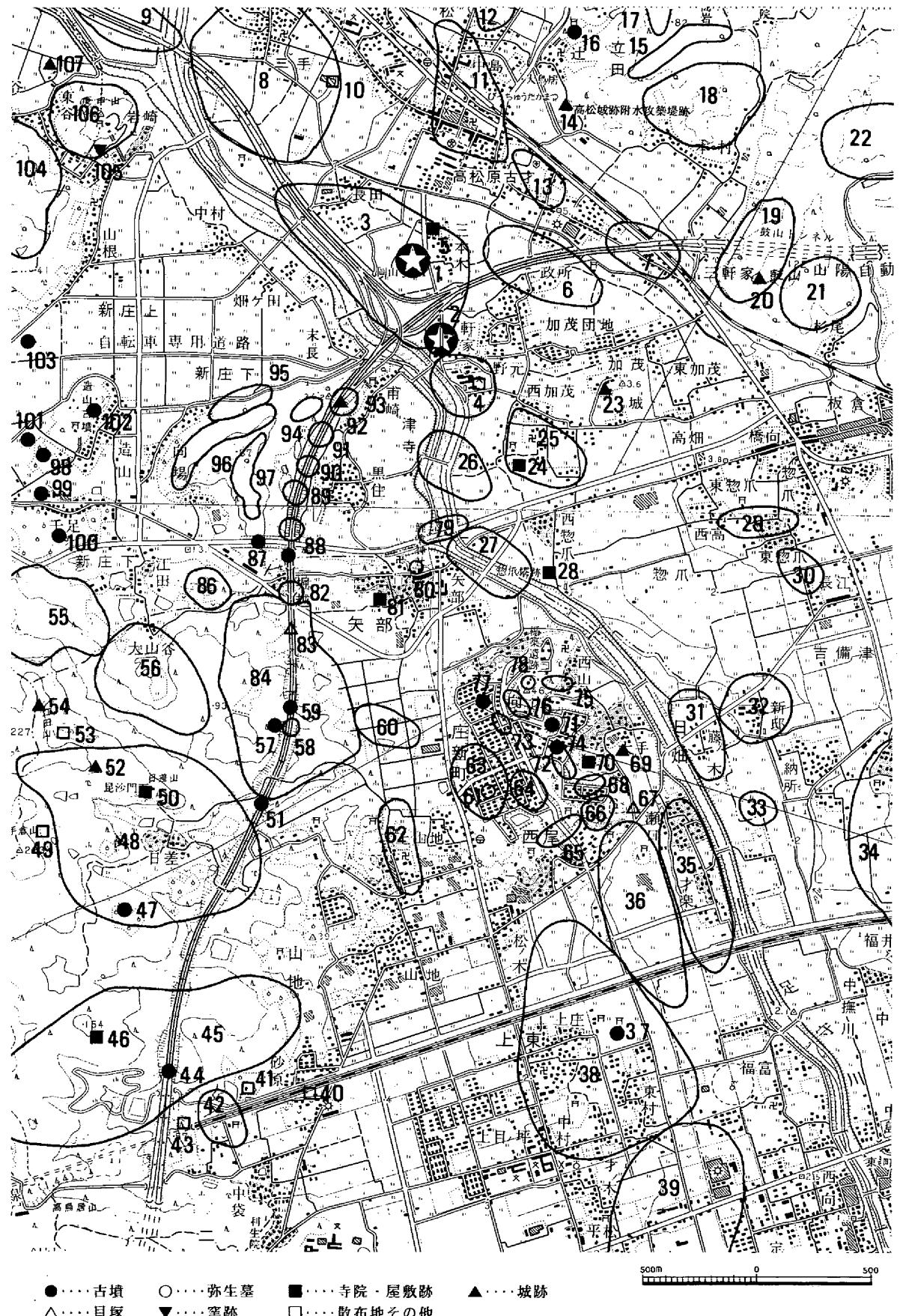
多くなり、なかでも中期後葉の時期からの増加が顕著である。中期後葉の集落は丘陵上に所在し、矢部古墳群B（51）、矢部堀越遺跡、雲山遺跡、後池内遺跡（90）、前池内遺跡（89）等がある。平野部では津寺遺跡（3）、足守川加茂B遺跡（79）、足守川矢部南向遺跡（27）が見られる。後期では丘陵上の集落は見られず、甫崎天神山遺跡のように丘陵上に箱式木棺、土器棺からなる後期前葉の集団墓地が造られ始めている。一方、津寺遺跡、足守川加茂A遺跡（26）、足守川加茂B遺跡、足守川矢部南向遺跡、政所遺跡（6）では微高地上に中規模～大規模な集落が形成されており、従前からの水田経営がさらに安定、拡大されたことが窺われる。後期の上東式の指標遺跡として著名な上東遺跡（38）も足守川下流域に所在する。後期後葉の墳墓遺構に伴う吉備特有の特殊器台形土器、あるいは特殊壺形土器は、甫崎天神山遺跡、女男岩遺跡（61）、辻山田遺跡（63）、楯築弥生墳丘墓（78）、鯉喰神社弥生墳丘墓（80）、雲山鳥打弥生墳丘墓群（94）等から出土している。墓地以外の出土例では足守川矢部南向遺跡の竪穴住居・土壙出土の特殊器台形土器があり、製作地の存在を髣髴させられる。

古墳時代前期前葉の集落では弥生時代後期後葉から継続的に発展、拡大をしており、津寺遺跡、足守川加茂A・B遺跡、足守川矢部南向遺跡、政所遺跡等が大規模な集落を形成している。これらの遺跡では、東海・北陸・畿内・山陰・四国・北部九州などの土器の出土が多く見られ、従前に増した人的交流が行なわれたことを物語っている。墳墓にも変化が見られ、溝・列石で方形区画を有する小形の古墳が丘陵上に出現し、金属製品の副葬等が目立っている。甫崎天神山古墳群、郷境墳墓群（88）、矢部古墳群A・B、矢部堀越遺跡等があり、矢部堀越遺跡では特殊器台形埴輪が棺に転用されたり、矢部古墳群Bでは特殊器台形埴輪が墳丘上に散布していた。西南側に位置する出現期の大形前方後円墳である大丸古墳（57）との関連が考えられる。また、中山茶臼山古墳でも特殊器台形埴輪が出土している。古墳時代中葉では、吉備における古墳時代の頂点である造山古墳（102）の時代を迎えており、政治・経済・文化の多面で朝鮮半島の影響を色濃く反映させている地域である。同時期の有黒斑の埴輪を使用する一辺10m前後の方墳が甫崎天神山古墳群、前池内古墳群、後池内古墳群、王墓山法伝山古墳（71）にみられる。集落では高塚遺跡（9）が著名である。後葉にも、日差山丘陵に甫崎天神山古墳、前池内古墳、雲山古墳、矢部古墳群A等の横穴式石室を内部主体とする古墳群が分布する。王墓山丘陵にも群集墳（72）（73）（75）（76）（77）が造営されている。最近では津寺遺跡や政所遺跡において飛鳥寺様式の軒丸瓦の出土が報じられ、古墳の造営から寺院の建立指向への一端を窺い知ることができる。日畠廃寺跡（70）、惣爪廃寺跡（28）、津峴駅推定地の矢部廃寺（81）がそれに続く時期のものである。奈良時代中頃の官衙遺構では、南北123.80m、東西94.00mの長方形区画構内に掘立柱建物を規則的に配置した津寺遺跡が本遺跡の西側に接し、南方0.8kmには「お幸利さん」と呼称される神社地が都宇群衙推定地（24）に比定されている。

中・近世のこの地は、戦乱の舞台としてしばしば歴史上に登場する。特に著名なものが、羽柴秀吉の行った備中高松城の水攻めであり、現在も高松城附水攻築堤跡（14）を見ることができる。江戸時代初期には榎原職直が三本木に知行所（5）を開いている。

以上、既観したように津寺三本木遺跡、津寺一軒屋遺跡の所在するこの地域は、備中南部における経済・政治・文化の中核として古くから歴史に関わってきたことが理解できる。　　　　　　　(高畠)

I 津寺三本木・津寺一軒屋遺跡の地理的・歴史的環境



第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

序　　説

- | | | |
|--------------------|--------------------|---------------------------|
| 1. 津寺三本木遺跡 | 37. 荒神古墳 | 73. 王墓山半俵古墳群 |
| 2. 津寺一軒屋遺跡 | 38. 上東遺跡 | 74. 王墓山古墳（赤井西1号墳） |
| 3. 津寺遺跡（ジャンクション部分） | 39. 下庄遺跡 | 75. 王墓山西山古墳群 |
| 4. 津寺（加茂小）遺跡 | 40. 砂原北遺跡 | 76. 王墓山向山古墳群 |
| 5. 津寺知行所 | 41. 岩部奥遺跡 | 77. 王墓山西の平古墳群 |
| 6. 政所遺跡 | 42. 二子御堂奥古窯址群 | 78. 梶築遺跡（梶築弥生墳丘墓） |
| 7. 立田遺跡 | 43. 御堂奥遺跡 | 79. 加茂B遺跡 |
| 8. 三手遺跡 | 44. 二子14号墳 | 80. 鯉喰神社遺跡
（鯉喰神社弥生墳丘墓） |
| 9. 高塚遺跡 | 45. 二子古墳群 | 81. 津峴駅推定地 |
| 10. 三手（庄内幼）遺跡 | 46. 御堂奥廃寺（二子御堂屋敷跡） | 82. 矢部堀越遺跡（矢部堀越貝塚） |
| 11. 高松遺跡 | 47. 勝負谷古墳 | 83. 矢部奥田遺跡（矢部奥田貝塚） |
| 12. 高松城下層遺跡 | 48. 日差山古墳群 | 84. 矢部古墳群 |
| 13. 上沼遺跡 | 49. 日差遺跡 | 85. 矢部大丸古墳 |
| 14. 高松城附水攻築堤跡 | 50. 日差廃寺跡 | 86. 江田山古墳群 |
| 15. 觀音山古墳群 | 51. 矢部古墳群A | 87. 高坪古墳 |
| 16. 御崎神社古墳 | 52. 日差山城跡 | 88. 郷境内墳墓群 |
| 17. 堂山裏古墳群 | 53. 日差山北遺跡 | 89. 前池内遺跡 |
| 18. 勝負谷古墳群 | 54. 鷹ノ巣城跡 | 90. 後池内遺跡 |
| 19. 鼓山古墳群 | 55. 江田山山麗古墳群 | 91. 黒住遺跡 |
| 20. 蜂谷城跡 | 56. 矢部大山谷古墳群 | 92. 雲山遺跡 |
| 21. 杉尾古墳群 | 57. 大崎古墳 | 93. 甫崎天神山遺跡（天神山城） |
| 22. 名越山裏山古墳群 | 58. 矢部大崎遺跡 | 94. 雲山鳥打弥生墳丘墓群 |
| 23. 加茂城跡 | 59. 矢部古墳群B | 95. 津寺C遺跡 |
| 24. 都宇郡衙推定地 | 60. 矢部伊能軒遺跡 | 96. 向場古墳群 |
| 25. 幸利神社遺跡 | 61. 女男岩遺跡（弥生墳丘墓） | 97. 黒住山古墳群 |
| 26. 加茂A遺跡 | 62. 山地遺跡 | 98. 造山古墳附第1号墳（榊山古墳） |
| 27. 矢部南向遺跡 | 63. 辻山田遺跡 | 99. 造山古墳附第5号墳（千足古墳） |
| 28. 捏爪廢寺 | 64. 王墓山大池上古墳群 | 100. 造山古墳附第6号墳 |
| 29. 高田遺跡 | 65. 王墓山真宮古墳群 | 101. 造山古墳附第2号墳 |
| 30. 東惣爪遺跡 | 66. 王墓山東谷古墳群 | 102. 造山古墳 |
| 31. 藤ノ木遺跡 | 67. 西尾貝塚 | 103. 車塚古墳 |
| 32. 新邸遺跡（新邸貝塚） | 68. 王墓山赤井南古墳群 | 104. 雲上山古墳群 |
| 33. 柿梨堂遺跡 | 69. 日畑城跡 | 105. 窯跡 |
| 34. 川入遺跡 | 70. 日畑廃寺跡 | 106. 庚申山古墳群 |
| 35. 才樂遺跡 | 71. 王墓山法伝山古墳 | 107. 赤浜城山城跡 |
| 36. 岩倉遺跡 | 72. 王墓山赤井西古墳群 | |

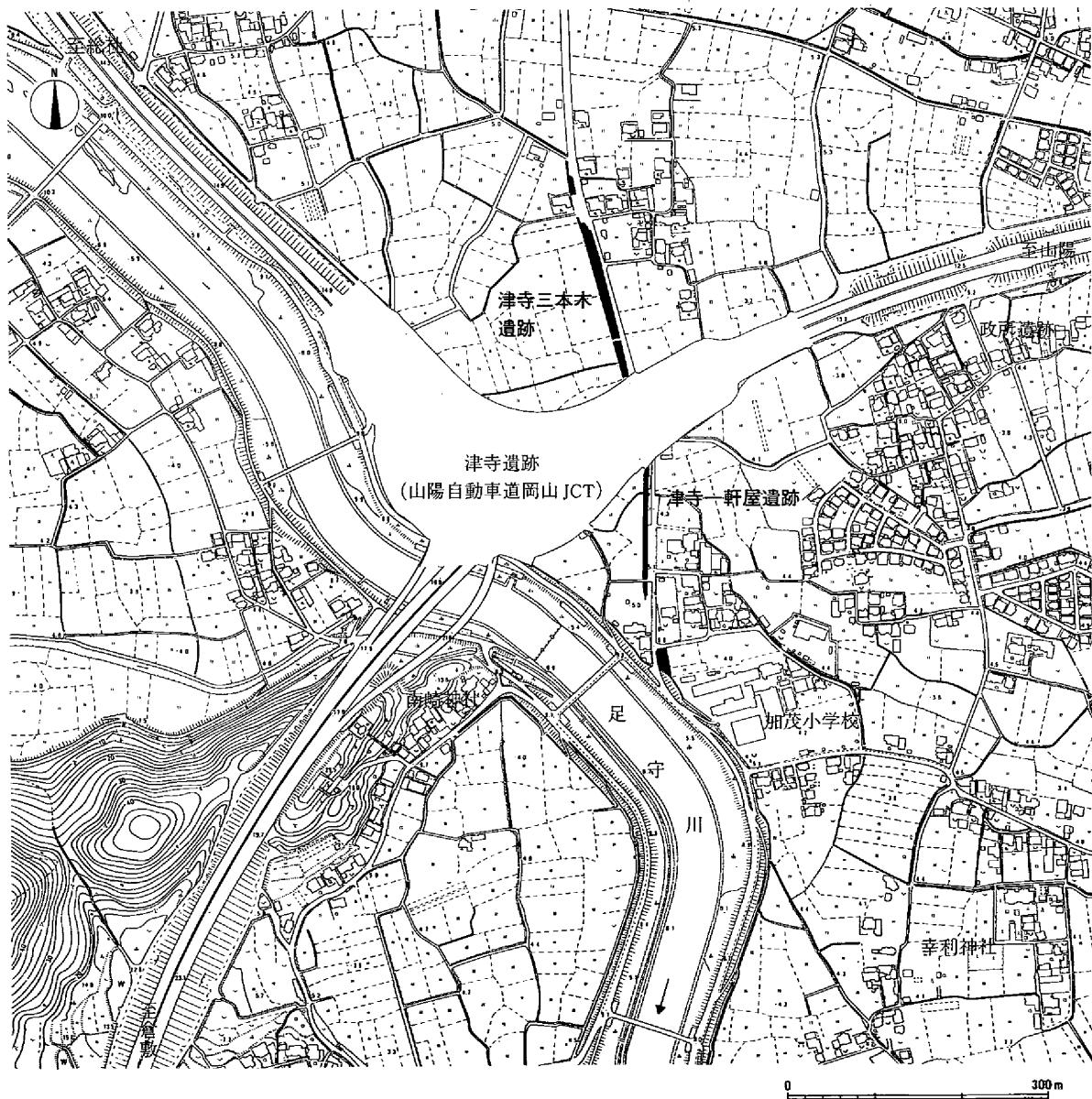
参考文献

- 桑田 俊明 「地理的・歴史的環境」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告85 赤浜散布地ほか 県営土地改良総合整備事業に伴う確認調査』岡山県教育委員会 1993
- 島崎 東 「地理的・歴史的環境」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86 雞木薬師遺跡 前川河川改修工事に伴う発掘調査』岡山県教育委員会 1993
- 正岡陸夫他 「収載遺跡の歴史的・地理的環境」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89 1. 郷境墳墓群 2. 前池内遺跡 3. 後池内遺跡 4. 黒住・雲山遺跡 5. 甫崎天神山遺跡 山陽自動車道建設に伴う発掘調査8』岡山県教育委員会 1994
- 浅倉 秀昭 「環境」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90 三手遺跡 津寺遺跡 山陽自動車道建設に伴う発掘調査9』岡山県教育委員会 1994
- 島崎 東 「遺跡の環境」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94 足守加茂A遺跡 足守加茂B遺跡 足守矢部南向遺跡 足守川河川改修工事に伴う発掘調査』94
- 大橋 雅也 「津寺遺跡の地理的・歴史的環境」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98 津寺遺跡2 山陽自動車道建設に伴う発掘調査10』岡山県教育委員会 1995
- 久保恵里子 「遺跡の位置と環境」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100 南溝手遺跡1 岡山県立大学建設に伴う発掘調査』岡山県教育委員会 1995
- 亀山 行雄 「遺跡をとりまく環境」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104 津寺遺跡3 山陽自動車道建設に伴う発掘調査12』岡山県教育委員会 1996
- 正岡陸夫他 「地理的・歴史的環境」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告115 前山遺跡 鎌戸原遺跡 国道429号線改良工事に伴う発掘調査』岡山県教育委員会 1997
- 亀山 行雄 「遺跡をとりまく環境」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116 津寺遺跡4 山陽自動車道建設に伴う発掘調査14』岡山県教育委員会 1997
- 久保恵里子 「遺跡の位置と環境」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告120 雞木遺跡1 岡山県立大学建設に伴う発掘調査』岡山県教育委員会 1997
- 草原 孝典 「位置と環境」『吉野口遺跡－岡山市立鯉山小学校給食棟建築事業に伴う発掘調査報告－』岡山市教育委員会 1997

II 津寺三本木・津寺一軒屋遺跡の調査経緯と経過

大内田高松線は、流通センターの所在する岡山市大内田地域から山陽自動車道、中国横断自動車道の結節点にあたる岡山市津寺、岡山自動車道岡山ジャンクションを睨んでの道路網整備の一環である。ひいては、倉敷岡山間のバイパス機能、国道2号線の交通渋滞等の解消等々を目的とした道路改良事業である。

大内田高松線の事業内容が岡山地方振興局長から発掘の通知（第57条の3）として提出され、文化課と協議がなされたのは平成2年4月21日である。すでに新規の事業は動き始めており、63名の調査員が山陽自動車道、中国横断自動車道、県立大学、国道2号バイパス、御津町工業団地造成、前川河川改修、旭川放水路（百間川）改修等の大規模事業に伴う発掘調査・報告書作成に従事し、緊急に対



第3図 津寺三本木・一軒屋周辺地形図 (1/8,000)

序 説

応できる調査員は全員出払っている状況であった。

スケジュールの合間を縫って平成2年度末になって文化課によるトレンチ調査が実施される。そして、能登谷孝雄氏宅の北側に微高地の所在を確認し、津寺遺跡の調査実績を合わせると、路線内の南側全域はほぼ遺跡地であることが判明した。当面、さしこまつた工事期限と地元関係者との事業説明の齟齬を来たさない方法が道路建設課改良係、岡山地方振興局建設部工務第二課、文化課、岡山県古代吉備文化財センターの4者で協議され、平成2年度内にA調査区（第4図）の発掘調査の実施が決定される。他現場から急拠対応の職員が異動を行い、発掘調査の通知（第98条の2）を平成3年1月28日に提出し、測溝工事に伴う北側Aの調査を2ヶ月、平成3年12月に南側Bの調査を1ヶ月間実施をした。この調査でさらに山陽自動車道周辺まで遺跡の存在が明白となり、平成4年度は調査員2名調査補助員1名の体制で道路改良部分Cを中心に1年間、ひきつづき平成5年度も南部部Dの発掘調査を3ヶ月間実施した。山陽自動車道北側の東測溝Dは、事業主体が計画変更の連絡を怠り無届で掘削を行った場所であり、掘削途中で作業の中止を願い、文化課より顛末書の提出を指導し、その後は発掘調査と工事立合で対応を行った。道路部Eは従前の懸案であった立退き・補償等の問題が解決後、平成8年7月から家屋立退き跡地の発掘調査を約2.5ヶ月間実施した。

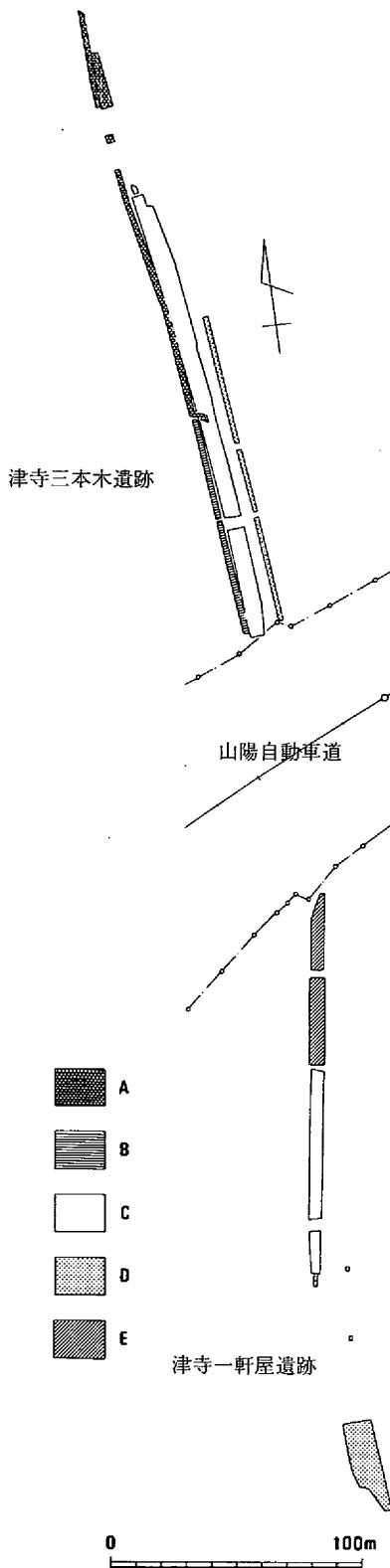
諸々の問題を包蔵し、調査の中止もあった津寺三本木・一軒屋遺跡の発掘調査は足掛け6年におよぶものとなった。この間には道路延長部にあたる加茂小学校西側の護岸工事の立会等の対応も行い、特殊器台形土器の出土を見ている。

（高畠）

表-2 津寺三本木・一軒屋遺跡発掘調査一覧表

遺跡名	調査年度	調査期間												担当
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
津寺三本木	1990													
A														
津寺三本木	1991													
B														
津寺三本木	1992													
C														
津寺一軒屋	1992													
C														
津寺三本木	1993													
D														
津寺一軒屋	1993													
D														
津寺一軒屋	1996													
E														

第4図 調査区位置図 (1/3,000)



III 調査・整理の組織

平成2年度(1990年度)発掘調査体制

岡山県教育委員会

教育長 竹内康夫

岡山県教育庁

教育次長 杉井道夫

文化課

課長 鬼澤佳弘

課長代理 光吉勝彦

課長補佐 伊藤晃
(埋蔵文化財係長)

主査 藤川洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所長 長瀬日出男

次長 河本清

総務課

課長 竹原成信

課長補佐 藤本信康
(総務係長)

主任 平松郁男

主任 坂本英幸

調査第一課

課長 河本清

課長補佐 柳瀬昭彦
(第一係長)

主事 氏平昭則

平成3年度(1991年度)発掘調査体制

岡山県教育委員会

教育長 竹内康夫

岡山県教育庁

教育次長 森崎岩之助

文化課

課長 鬼澤佳弘
(12月31日まで)

課長 渡邊淳平
(1月1日以降)

課長代理 大橋義則

課長補佐 柳瀬昭彦
(埋蔵文化財係長)

主査 時長勇

岡山県古代吉備文化財センター

所長 横山常實

次長 葛原克人

総務課

課長 藤本信康

課長補佐 小西親男
(総務係長)

主任 平松郁男

主任 坂本英幸

調査第一課

課長 森崎岩之助

課長補佐 松本和男
(第一係長)

文化財保護主事 長川優

平成4年度(1992年度)発掘調査体制

岡山県教育委員会

教育次長 森崎岩之助

文化課

課長 渡邊淳平

課長代理 松井新一

課長補佐 柳瀬昭彦
(埋蔵文化財係長)

主査 時長勇

岡山県古代吉備文化財センター

所長 横山常實

次長 河本清

文化財保護参事 葛原克人

総務課

課長 北原求

課長補佐 小西親男
(総務係長)

主査 石井茂

主任 石井善晴

主任 三宅秀吉

調査第一課

課長 森崎岩之助

課長補佐 高畠知功
(第一係長)

主事 速水章人

平成5年度(1993年度)発掘調査体制

岡山県教育委員会

教育次長 森崎岩之助

岡山県教育庁

教育次長 岸本憲二

文化課

課長 渡邊淳平

課長代理 松井新一

課長補佐 高畠知功
(埋蔵文化財係長)

主査 時長勇

岡山県古代吉備文化財センター

所長 横山常實

次長 葛原克人

総務課

課長 北原求

課長補佐 小西親男
(総務係長)

主査 石井茂

主査 石井善晴

主任 三宅秀吉

調査第一課

課長 正岡睦夫

課長補佐 山磨康平
(第二係長)

主事 速水章人

平成8年度(1996年度)発掘調査体制

岡山県教育委員会

教育次長 黒瀬定生

文化課

課長 大場淳

課長代理 松井英治

課長代理 白井洋輔

参考事務官 葛原克人

課長補佐 平井勝
(埋蔵文化財係長)

主査 若林一憲

岡山県古代吉備文化財センター

所長 河本清

次長 高塚恵明

次長 葛原克人
(文化課本務)

文化財保護参事 正岡睦夫

総務課

課長 丸尾洋幸

課長補佐 井戸丈二
(総務係長)

総務主任 守安邦彦

主査 木山伸一

調査第三課

課長 柳瀬昭彦

課長補佐 岡田博
(第三係長)

文化財保護主任 高田恭一郎

主事 小嶋善邦

平成9年度(1997年度)

報告書作成体制

岡山県教育委員会

教育長 黒瀬定生

岡山県教育庁

教育次長 平岩武

文化課

課長 高田朋香

課長代理 白井洋輔

課長代理 西山猛

参考事務官 葛原克人

課長補佐 平井勝
(埋蔵文化財係長)

文化財保護主任 大橋雅也

主事 三宅美博

岡山県古代吉備文化財センター

所長 篠本克之

次長 正岡睦夫

総務課

課長 小倉昇

課長補佐 井戸丈二
(総務係長)

主査 木山伸一

調査第一課

課長 高畠知功

課長補佐 江見正巳
(第一係長)

文化財保護主任 速水章人

調査・整理協力者 多田正保 濱本雅樹 上田匡文 錦戸正 政田孝 大山知子 村岡雅子 柳晴美

IV 調査の概要と報告書作成

発掘調査は平成2年から平成4年まで4回、平成8年に1回の計5回に分けて実施され、総面積2,960m²をはかる。調査対象地は南北に長く、路線延長610m、道路幅平均9.0mである。津寺三本木遺跡では道路拡幅部分に沿って幅約2.0mの用水路が南流しており、拡幅に先立ち用水路の移設を西側に行った。用水路長は260m、幅2.0mをはかり、道路幅を含めて約11.0mの調査が必要であった。路線延長610mのうち、津寺三本木・一軒屋遺跡間は山陽自動車道建設に伴い発掘調査が実施された津寺遺跡の中屋・高田調査区境、幅約100mが所在した。津寺一軒屋遺跡では少し広い道路の曲り部分を除けば、幅6.0mが調査対象となった。しかし、宅地・道路に近接した場所、通学路等の安全確保の面から5・6区のようにトレンチ調査にとどめざるを得なかった場所が存在する。

調査は北側の西側溝A、南側の西側溝B、道路C、道路D、道路E、(第4図)の順序で実施した。津寺三本木遺跡の測量基準杭は側溝肩部に沿う格好で原点を設け、10m間隔で北方に7本、南方に17本を設定した。調査区の名称は道路西側にある水田地番に符合させ、1区～7区(第6図)とした。たとえば、1区が278-2、3区が277-2、4区が276-2、5区が259-3、6区が258-3、7区が257-3である。側溝名は西側溝・拡張区とし、道路に近い調査区名を付した。また、調査区内をA・B・Cに分け、4区A等と呼称して遺構・遺物の実測、取上げの基本名とした。現地作業は大形重機を使用して発掘区の遺構面近



津寺三本木遺跡 小学生の遺跡見学



第5図 発掘調査範囲 (1/3.000)

くまでの表土掘削を行い、ダンプカーによる排土の搬出から始まる。遺構面付近では人力によって堅穴住居、溝、土壙等の検出を行い、各々の遺構の掘下げと清掃、写真撮影、遺構・遺物の実測図作成、遺物の取上げを行う。この一連の作業を発掘区ごとに反復し、現地 津寺三本木遺跡では弥生時代後期から近世の遺構228、遺物箱数214を数え、弥生時代後期、古墳時代前期・後期、中世、近世の集落遺跡、一軒屋遺跡では弥生時代中期から近世の遺構52、遺物箱数54を数え、弥生時代後期末の鍛冶遺構、古墳時代中期、中世の集落跡の一端が把握できた。

報告書作成のための整理作業は平成9（1997）年度の一年間、高畠知功、速水章人の2名が実施した。両遺跡の発掘調査総面積は2,960m²、遺構総数280、遺物箱数268であった。出土遺物の水洗、注記は発掘調査時に終了しており、センターでの整理作業は土器の復元から開始し、各遺構の時期、土器の特徴等を記録しながら実測土器の選定・抽出を行った。土器復元作業と並行して、石器、木器、金属器、土製品なども抽出し、台帳の作成、実測用の選定を行った。

遺物については、津寺三本木遺跡の土器が848点、石器37点、木器4点、金属器32点、土製品13点、津寺一軒屋遺跡では土器が327点、石器15点、金属器48点、土製品4点を掲載した。実測作業はおもに補助員、整理作業員が行い、実測図の検討、トレースは石器を除きすべて調査員が行った。

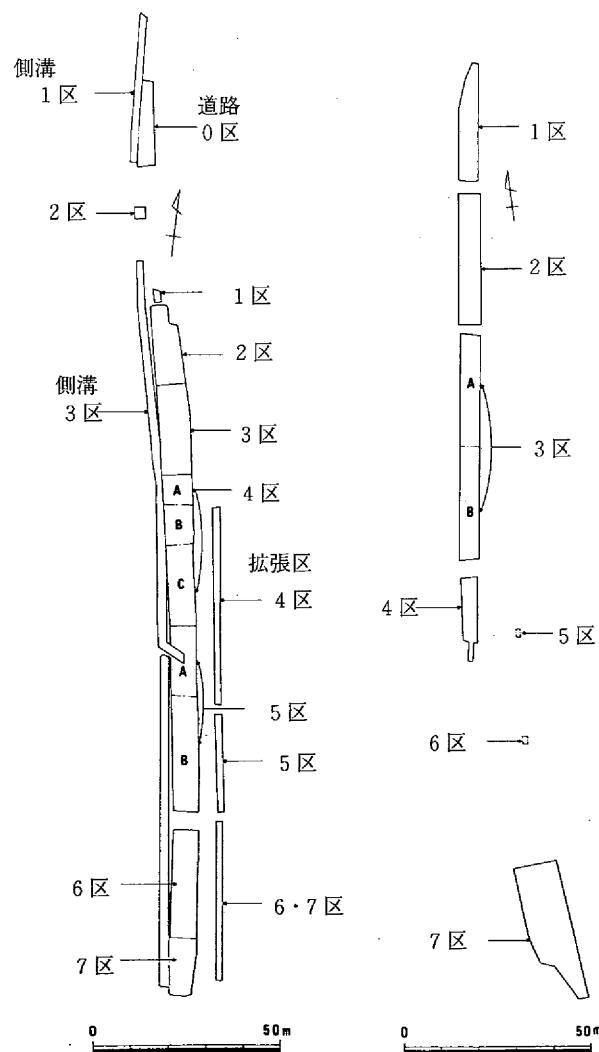
遺構については調査員が図面整理と下図の作成を行い、トレースは調査員の指示のもとに整理作業員が行った。遺構・遺物についての説明は主に調査を担当した調査員が行った。

今回の報告書では、発掘調査段階で遺構と認識していたものについては、ほぼ掲載している。

（高畠）

表-3 発掘調査の概要

遺跡	調査期間	調査面積 (m ²)	遺物 (箱)	遺構数
三本木	1991. 2. 1～1991. 3. 25	355	61	60
三本木	1991. 12. 2～1991. 12. 17	197	8	27
三本木	1992. 4. ～1992. 12. 17	1,228	144	135
一軒屋	1993. 1. ～1992. 12.	400	21	30
三本木	1993. 4. 1～1993. 4. 12	156	1	6
一軒屋	1993. 4. 1～1993. 6.	244	29	15
一軒屋	1996. 7. 1～1996. 9. 18	380	4	7
三本木	1991 (立会)		1	1
一軒屋	1995 (立会)		4	8
総合計	21ヶ月	2,960	273	289



第6図 津寺三本木・一軒屋遺跡調査区名称 (1/2,000)

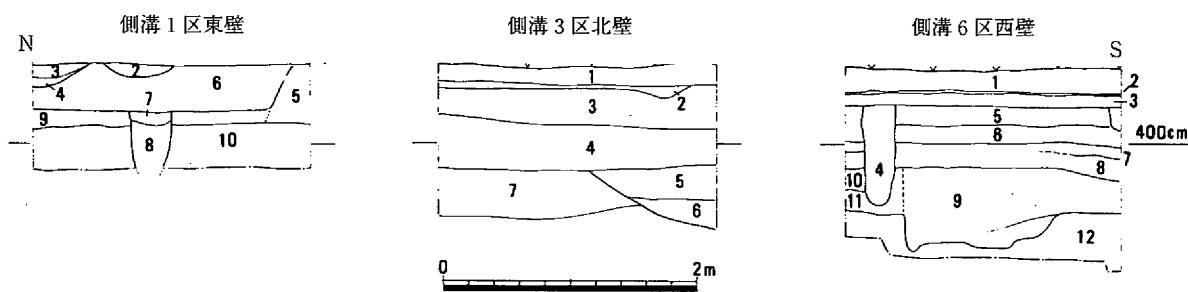
第1章 津寺三本木遺跡

第1節 遺跡の概要と調査区

津寺三本木遺跡は足守川東岸に位置し、地形は北東から南西に高さを減じ、現地表では海拔4.5~5mをはかる。現在は水田景観が望める。

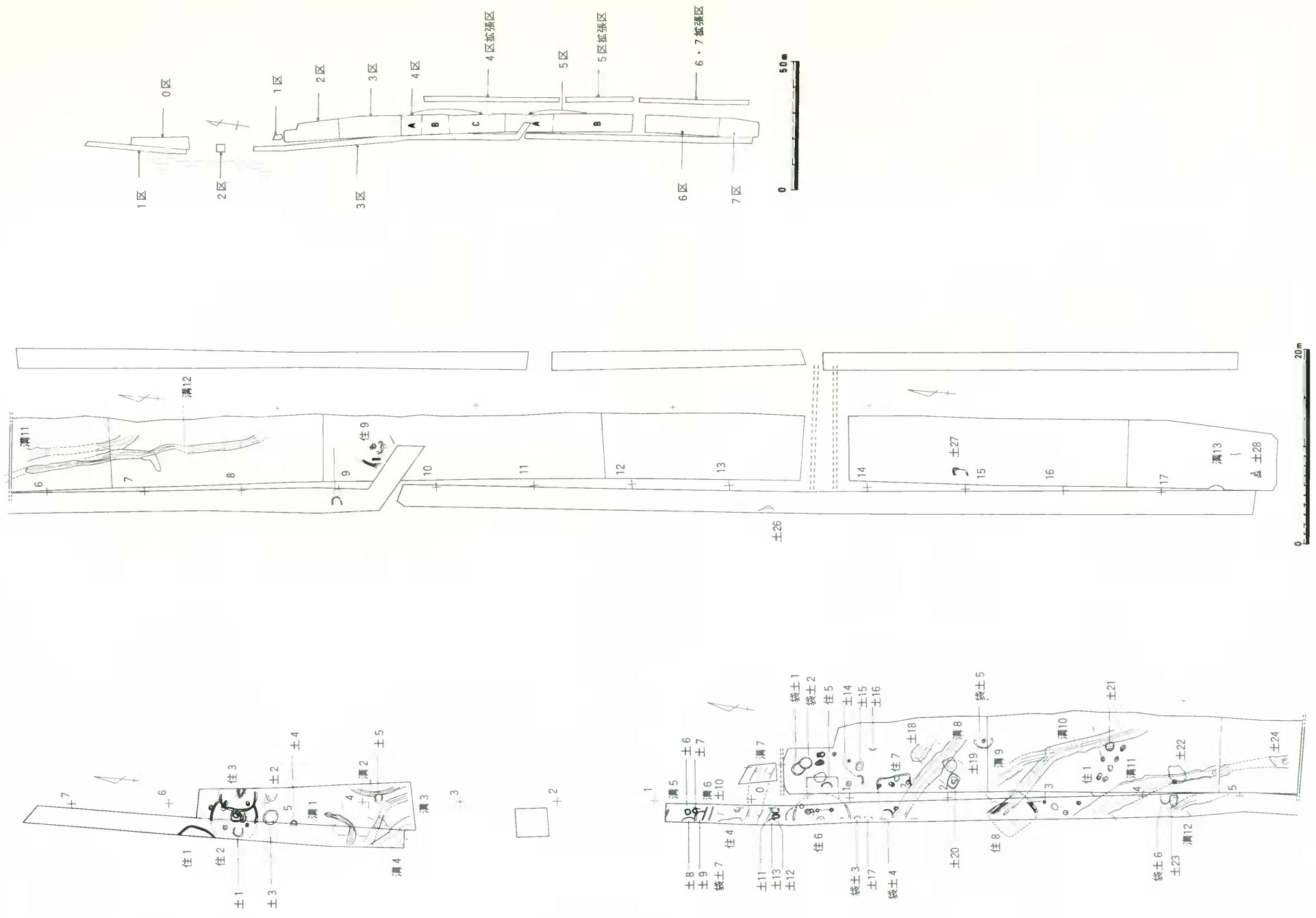
調査区は南北に長く、南流する糸田川を含む西側11.0mの幅と延長約260mが調査対象地である。側溝1区東壁の第10層（基盤層）は海拔4.1m、側溝3区北壁の第7層（基盤層）が海拔3.8m、6区付近では海拔3.0mにおいても基盤層は確認できず、旧地形が南に向かって傾斜をしていることが理解できる。本微高地の利用は時代によって異なるが、おおむね弥生時代後期の遺構が安定をした様子を見せていく。遺物は縄文時代晩期と考えられる土器片が若干出土している。南北に長い調査区の遺構分布は、弥生時代後期前葉、古墳時代前期・中期・後期、7世紀中葉、8世紀中葉、14世紀前葉～中葉、18～19世紀代の大きく8時期の住居、掘立柱建物、溝、土壙等が所在する。それらの占地は、おおむね弥生、古墳、古代、近世では4区付近を境にして北側を居住域、南側は用排水を行う溝を中心とする場所とに分かれている。中世では居住域が5・6区にまとまっている。また、弥生、古墳時代を通して南側にみられる溝群は、北西から南東に流走するものが圧倒的に多く、中・近世では東西、南北方向の小溝が多いようである。古墳時代までは微高地の形状に左右された集落の占地が認められるが、古代以降は方位に規制された占地形態への移行傾向が認められる。遺物は、総遺構数148のうちの103遺構を占める弥生時代後期前葉、古墳時代前期の土器類が最も多く出土をしている。

(高畠)



- | | | |
|----------------------------------|-------------------|---------------------------|
| 1. 暗灰色粗砂（耕作土） | 1. 暗青灰色粗砂（耕作土） | 1. 耕作土 |
| 2. 灰白褐色微砂（土層に鉄分） | 2. 灰白色粗砂 | 2. Fe層 |
| 3. 灰白褐色微砂（溝の埋土） | 3. 黄褐色微砂 | 3. 茶色土 |
| 4. 明灰白色微砂（） | 4. 褐灰色微砂 | 4. 暗茶褐色粘質土（中世の柱穴） |
| 5. 灰褐色微砂
(上層鉄分集積 2cm・Mn集積数cm) | 5. 灰褐色微砂（溝-16） | 5. 茶褐色粘質微砂 |
| 6. 暗灰褐色微砂
(下層に土器・炭化物多く含む) | 6. 灰黄色微砂（下層に炭化物層） | 6. 暗茶褐色粘質微砂（Mn層） |
| 7. 暗灰黄色微砂（柱穴埋土 土器片含む） | 7. 灰褐色微砂（基盤層） | 7. 暗茶褐色粘質微砂（Fe層） |
| 8. 黄灰色微砂（柱穴埋土） | | 8. 茶灰色粘質土（硬質） |
| 9. 黄褐色微砂（住居跡床面） | | 9. 茶灰色粘質土
(古墳・前期の住居埋土) |
| 10. 黄灰色微砂（基盤層） | | 10. 灰茶色粘土 |
| | | 11. 茶色粘質粗砂 |
| | | 12. 茶色粗砂 |

第7図 調査区土層断面 (1/60)



第8図 津寺三本木遺跡弥生時代全体図 (1/400)

第2節 弥生時代の遺構・遺物

(1) 弥生時代の概要

0区～7区の調査区では、弥生時代の遺構が0区から側溝3区、道路5区Aの約155m間（第8図）に集中しており、竪穴住居、土壙、溝、袋状土壙等が見られる。9軒の竪穴住居は時期の明らかでない竪穴住居-4、5、8を除くと、6軒とともに弥生時代後期前葉～中葉のものである。0区北側に3軒、側溝3区・道路2区に2軒、道路5区Aに1軒が距離を置いて3ブロックに分かれている。

竪穴住居-2、3が切り合い関係にあり、竪穴住居-2が竪穴住居-3により住居東側を切られている。両者に含まれる土器を参考に竪穴住居の前後関係をみてみると、竪穴住居-2、7が古く、竪穴住居-1、3が新しく、その間に竪穴住居-6、9が入る格好となる。すなわち、弥生時代後期前葉～中葉の竪穴住居が3時期により構成されているわけである。なかでも、竪穴住居-2の土器が高塚遺跡の「貨泉」共併遺物と近いものである。竪穴住居の平面形は円形、隅丸方形の2種類があり、主柱穴4本、中央穴、壁体溝等の内部施設を持つ。竪穴住居-2、3、9では中央穴の周縁に盛土による幅約15cmの土手が巡っている。しかし、狭い範囲ゆえに竪穴住居1軒の完掘はできておらず、細部については不明な点がある。竪穴住居内の出土遺物は土器が多くみられる。鉄製品の存在は確認できなかったが、竪穴住居-6では流紋岩製の砥石が出土している。ほかに、大型蛤刃石斧の欠損品を転用した敲石、サヌカイト製の石鏸、打製石包丁等がみられ、竪穴住居-3の石包丁は長さ7.6cm、幅4.25cm、厚さ1.25cm、重さ50.9gをはかる小形化した石器である。ちなみに、周辺遺跡のサヌカイト製の石器類は香川県坂出市金山のものが圧倒多数である。

袋状土壙について見てみると、側溝3区に4基、道路2区に3基の計7基が出土しており、竪穴住居の分布域に一致をしている。袋状土壙1～5、7が竪穴住居-6、7の周辺にまとまり、袋状土壙-6がそのまとまりより18m南側に位置している。これらは、時期の明らかでない袋状土壙-3、7を除けばすべて弥生時代後期前葉の時期である。弥生時代後期前葉の中でも竪穴住居と同様に若干の時期差があり、切り合い関係にある袋状土壙-1、2では袋状土壙-1に切られた袋状土壙-2が古く、袋状土壙-1が新しい。その間の時期に袋状土壙-5、6が入る。袋状土壙-4は袋状土壙-1とほぼ同時期である。竪穴住居とは若干時期差が認められ、最も古い袋状土壙-2に伴う竪穴住居はなく、最も新しい竪穴住居-1、3に伴う袋状土壙が見られない状況である。袋状土壙-5、6と竪穴住居-2、7がほぼ同じ時期と考えられる。一方、袋状土壙-1、4と竪穴住居-6、9がほぼ同時期と考えらる。竪穴住居と袋状土壙の位置関係において明瞭な規則性はないが、集落内に居住と貯蔵の施設として併存をしている。袋状土壙の口部径は98～135cm、底径116～170cm、深さ52～127cmの幅があり、平均値は口部径114cm、底部径124cm、深さ71cmをはかる。土壙内には破損した土器が投棄されており、使用最終時にはごみ穴に利用されている。

土壙は最も多く24基が確認されており、遺物の伴うものが12基前後である。そのうち、土壙-3、19は袋状土壙の可能性が強いものである。これらも弥生時代後期前葉の時期にて、袋状土壙との併存関係にある。溝は9条からなり、流走方向は北西から南東であり、微高地の形状に沿って用排水路として掘開されている。弥生時代後期の時期、それも前葉から中葉の一部にかかる集落である。（高畠）

(2) 竪穴住居

竪穴住居-1 (第9図)

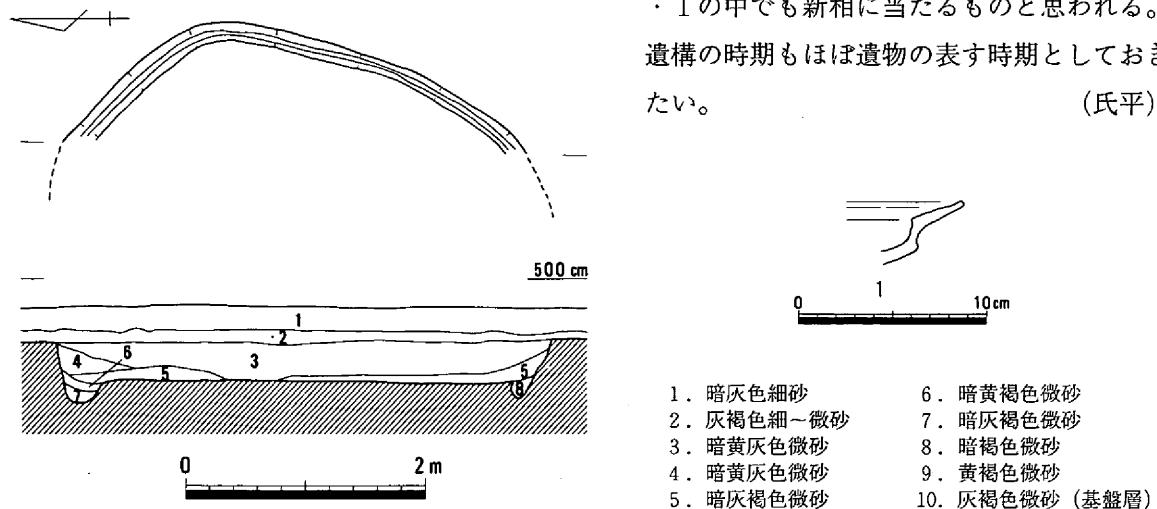
側溝1区中央部に位置し、西壁に接する。住居の大部分は調査区外である。表土掘削時に掘り下げが遺構より下に及んだため、検出面では壁体溝のみが検出できたにすぎない。柱穴は確認していない。平面形は壁体溝の形状により隅丸方形と推定した。

埋土は断面図第3層以下6層からなる。第3層では少量の、第5層では多量の炭化物が確認された。土層観察では、貼り床は認識できなかった。

遺物は少なく、埋土中から出土したものでは1の高杯口縁端部が図示できる。にぶい橙色～赤褐色を呈し、口縁端面は拡張するが凹線は見られない。口縁端面の拡張が新しい様相を感じさせ、弥・後

・Iの中でも新相に当たるものと思われる。

遺構の時期もほぼ遺物の表す時期としておきたい。
(氏平)



第9図 竪穴住居-1 (1/60) ・出土遺物

竪穴住居-2 (第10図、図版2-1)

側溝1区中央部～道路0区北端に位置し、竪穴住居-3に切られる円形の住居である。西側で表土掘削が深く及んだため、壁体溝の一部が検出できなかった。柱穴は4本であるが、竪穴住居-3の柱穴に1本が切られている。住居の埋土は第16層、中央穴埋土が第17・18層で炭化物は含まれなかった。中央穴には周囲に土手状の高まりが取り付き、その南側にも窪みを隔てて高まりがある。北東の柱穴の北、壁体溝上に完形に近い高杯8が置かれていた。

遺物は床面上から8、北西隅柱穴内から4が、その他は埋土中から出土した。2の甕の口径は15.5cmで煤が付着する。4の甕片にも煤の付着がある。5は取手付甕で、口径は9.4cmを計る。6は甕底部で、底径5.1cmである。7の底部は底径7.6mである。8は高杯で脚部を欠く以外完形で、口径23cm、底径12.8cm、器高21.72cmを計る。これらの土器から、この住居は弥・後・Iの時期に埋没したと思われる。

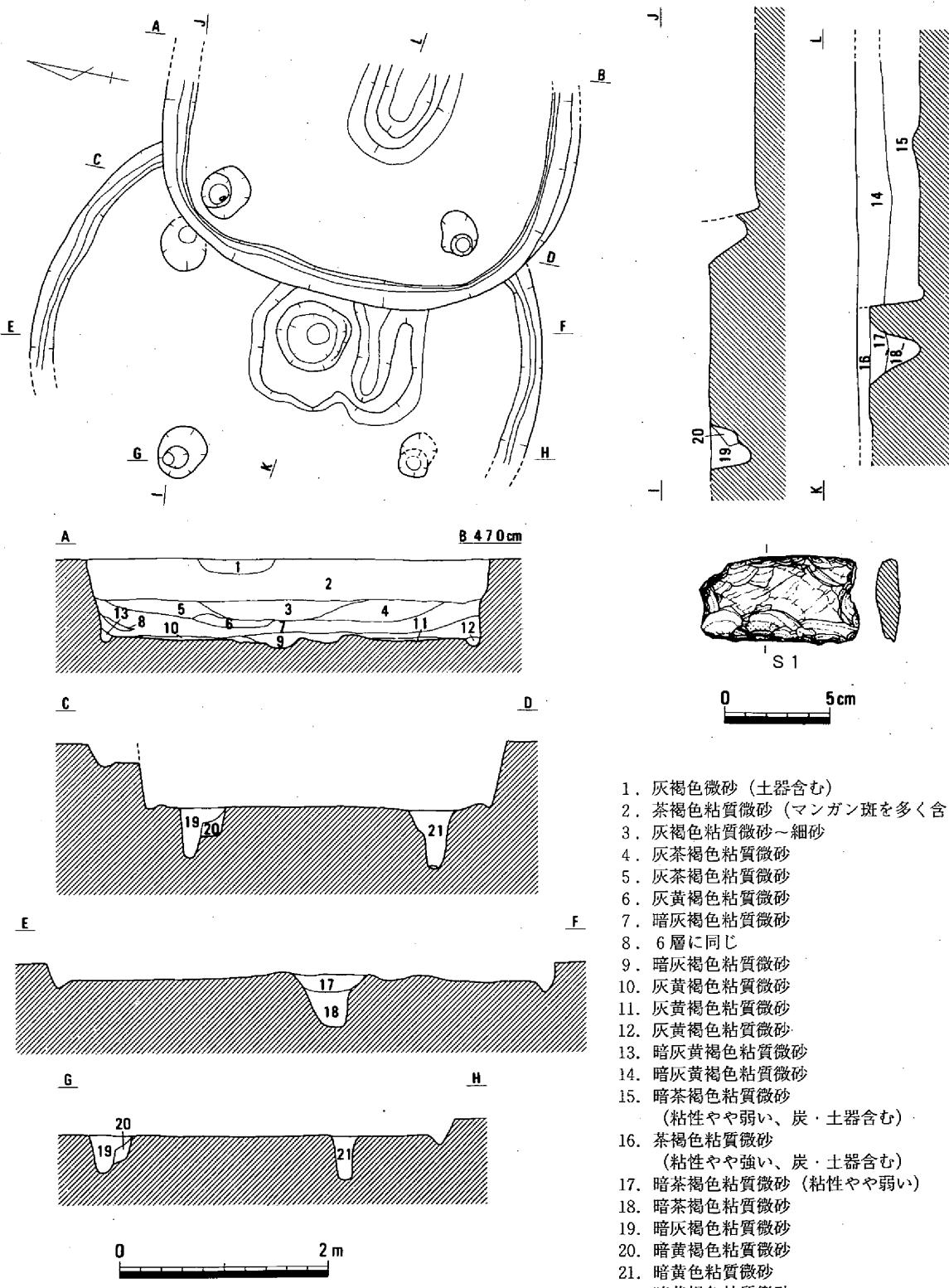
(氏平)

竪穴住居-3 (第10図、図版2-1)

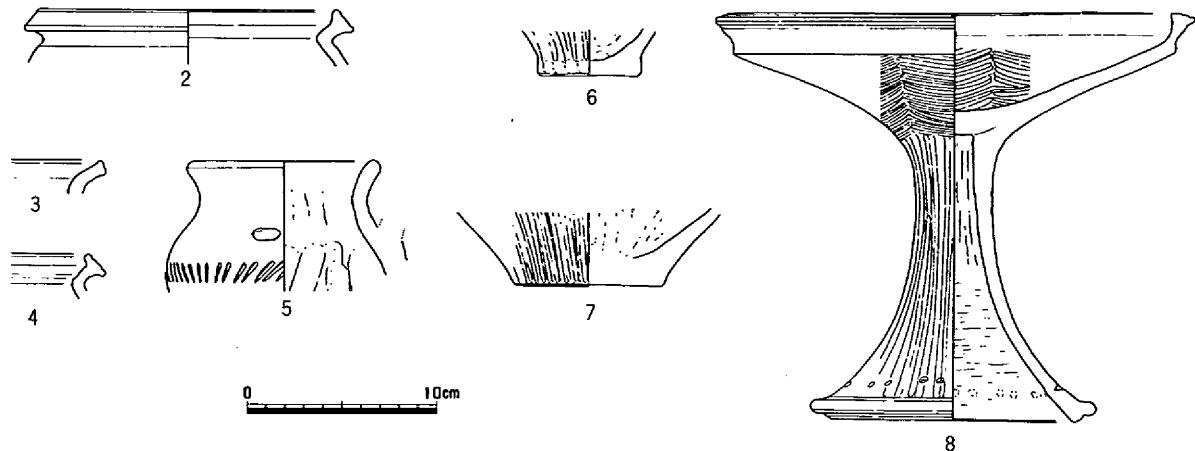
道路0区北端に位置し、竪穴住居-2の後に構築される隅丸方形の住居である。埋土は第2層までと第3層以下に分かれ、いずれにも炭化物・土器を含んでいる。第10・11層が貼り床であろう。柱穴は4本と想定される。中央穴には竪穴住居-2と同じく土手状の高まりが取り付くが、中央穴自体は

浅く埋土に炭化物を含まない。中央穴南側に存在する窪みには底に炭化物が層状に見られた。

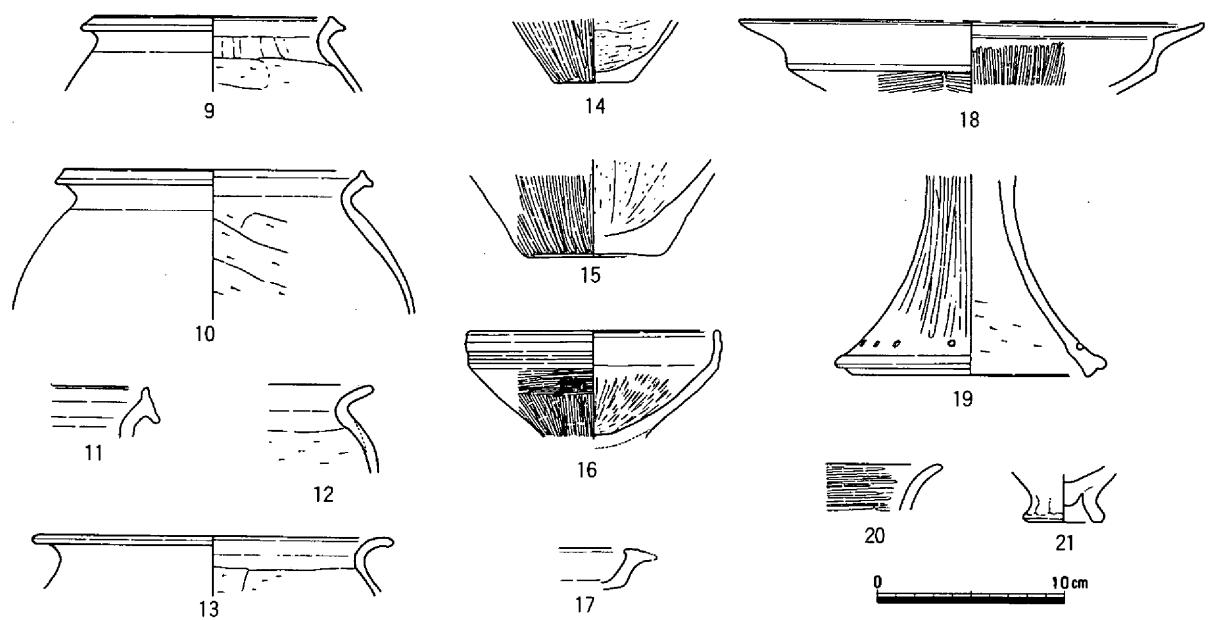
遺物は、いずれも埋土中から出土している。S 1 はサヌカイト製の石包丁で、刃部に珪酸が付着している。9～15は甕で口径は 9 が 12.4cm、10 が 15.53cm、13 が 18.3cm を計る。10、14、15には煤の付着が見られる。16～20は高杯で、16は口径 12.93cm、19は底径 12.4cm である。これらの土器は、甕口縁端部や高杯 18 に新しい様相が見られるものの、弥・後・I と判断してよいだろう。(氏平)



第10図 竪穴住居-2, 3 (1/60)・出土遺物



第11図 穫穴住居－2 出土遺物



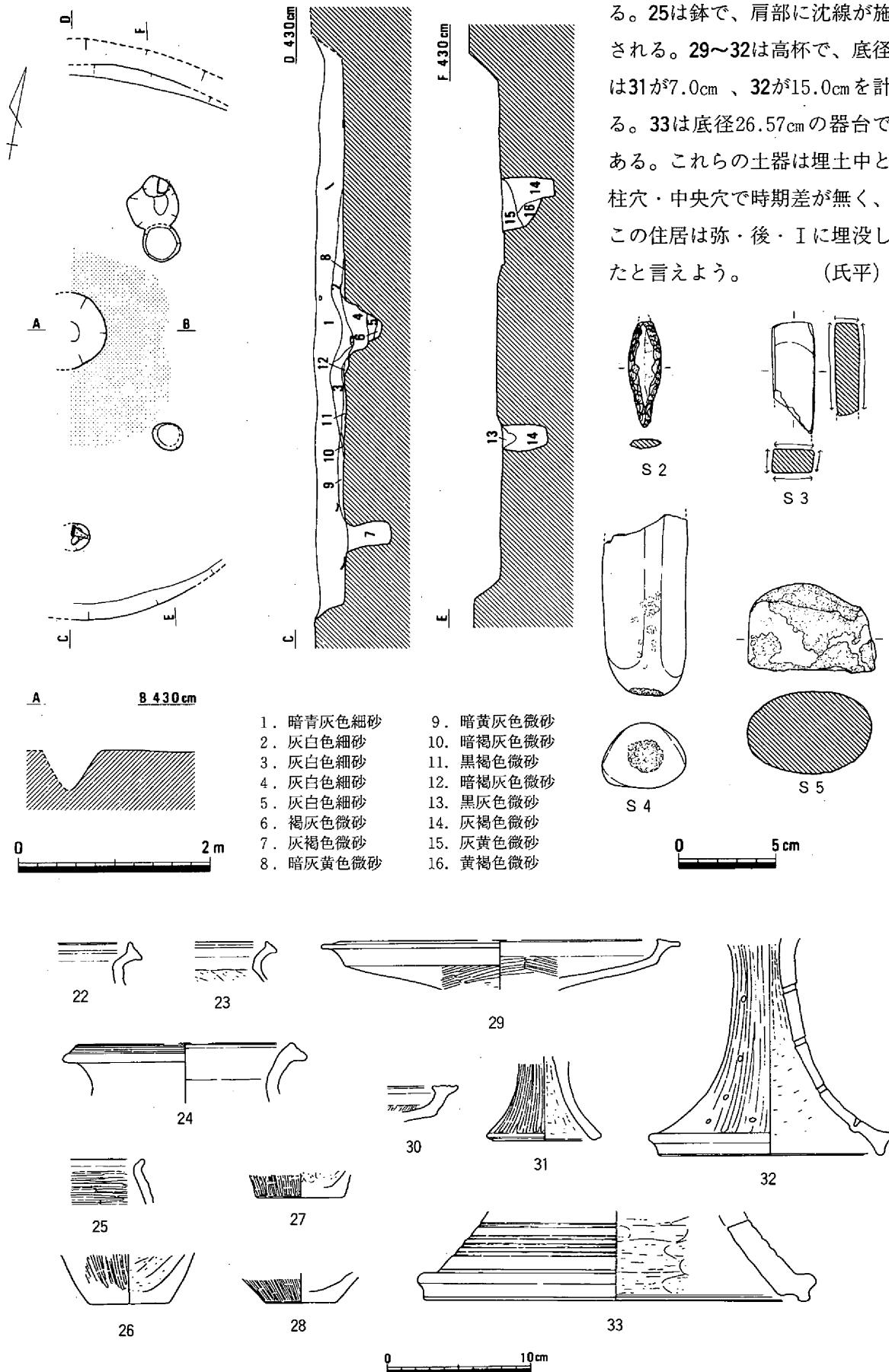
第12図 穫穴住居－3 出土遺物

竪穴住居－6（第13図、図版2-2）

側溝3区北端に位置する円形の住居である。道路3区では検出できなかった。柱穴は3本を確認し、6本柱と想定できる。平面では確認できなかったが、中央穴には土手状の高まりが取り付くものと思われる。中央穴を中心に、北側50cm、南側では80cmの範囲で、輪状に炭化物の分布が見られた。その範囲の中でも特に南側で炭化物の量が多かった。

土層は第1～3層が住居埋土、第4～6層が中央穴埋土で第5層は炭化物層である。また第8、9、11、12層は貼り床、第10層は炭化物層である。土層観察からは炭化物層が貼り床と折り重なり、互層状の堆積を成していることがわかる。壁体溝は確認できなかった。また、南端の柱穴内には、礫と高杯の脚部32が検出できた。これについては意図的な埋設の可能性が指摘できる。

遺物は石器と土器がある。S 2はサヌカイト製の石鏃で、先端を欠損している。S 3は流紋岩製の砥石、S 4は流紋岩、S 5は安山岩製の敲石である。31が中央穴から、32は南端柱穴内からで、それ以外は埋土中からの出土である。土器に完形品はない。22～24、26～28は甕で、22、23に煤が付着す

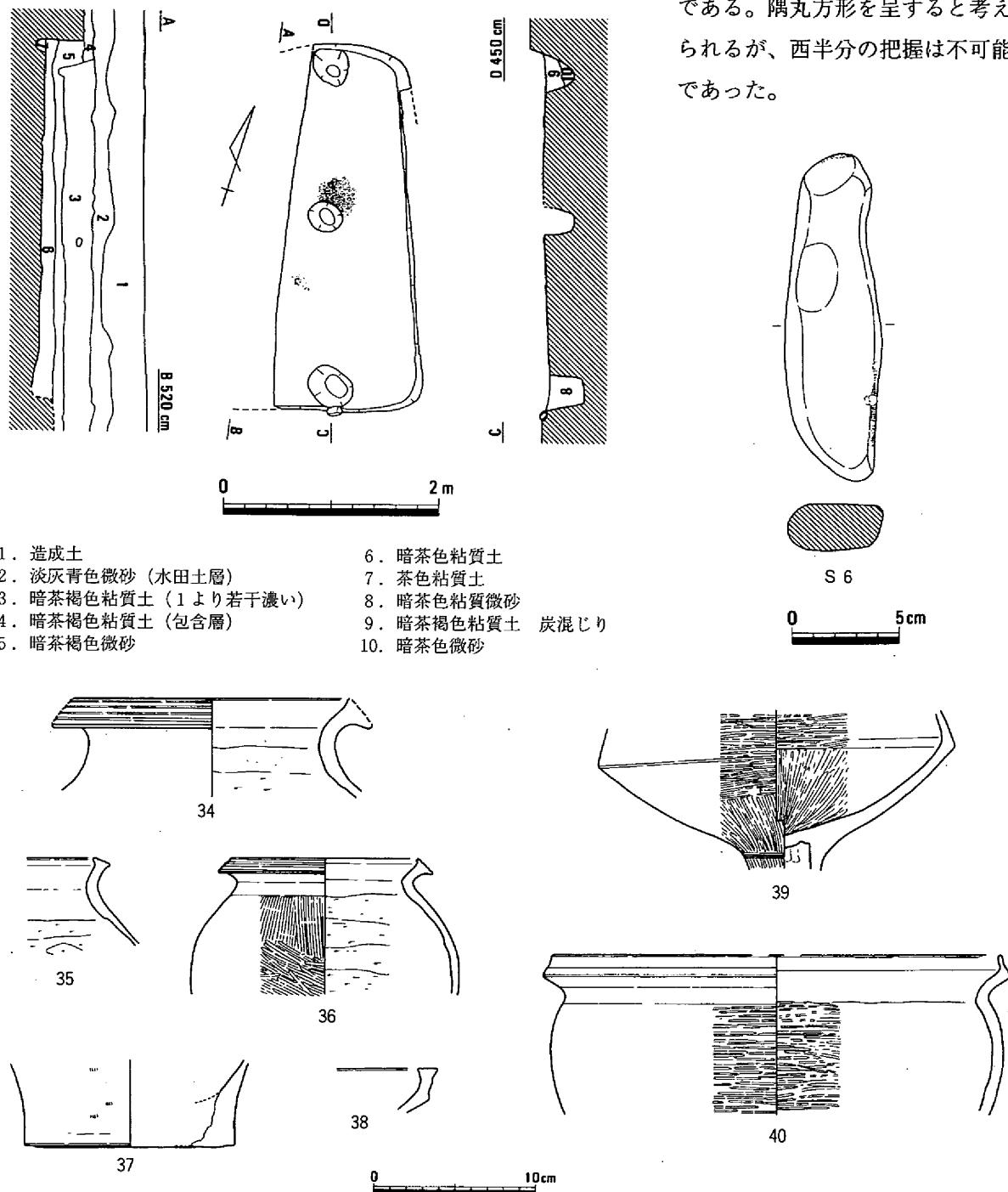


第13図 穫穴住居-6 (1/60)・出土遺物

竪穴住居-7 (第14図、図版2-3)

道路2区の中央西側に位置し、弥生時代後期前葉の溝-8により住居南西部分を切られた火災住居

である。隅丸方形を呈すると考えられるが、西半分の把握は不可能であった。



第14図 竪穴住居-7 (1/60)・出土遺物

長軸336cm、床面海拔高410cmをはかり、床面に小穴3、中央東側の小穴周辺に焼土、南側に焼土面、薄い炭層の分布が認められた。南北にみられる小穴の機能は不明であるが、住居に伴う柱穴の可能性も考えられる。

遺物は土器片が約30点と安山岩製の敲石が1点であり、甕36と敲石S 6が床に接着した実測可能な遺物である。他の6点は埋土中からの出土である。鉢40のように後期後葉のものまで含むが、後期前

葉の遺物を包含する溝-8により、切られた事実と甕36のもつ特徴から弥・後・Iの中相、竪穴住居-2、袋状土壙-5、6、土壙-2、3、17、19と同じ時期と考えられる。
(高畠)

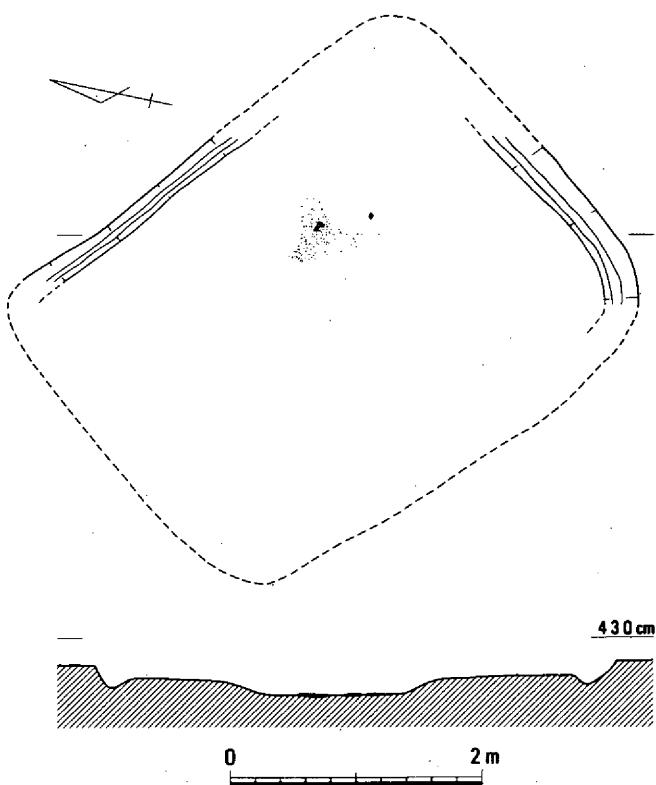
竪穴住居-8 (第15図)

側溝3区北側に位置する方形の住居である。道路3区側では検出できなかった。平面で壁体溝のみが確認できた。柱穴は検出できなかった。住居中央が周囲に比べやや壅み、炭化物と熱影響がごくわずかに残る。

遺物は、床面に土器片が存在したが、器種は不明である。

この住居の時期であるが、周辺の状況から弥生時代後期の可能性が高い。

(氏平)



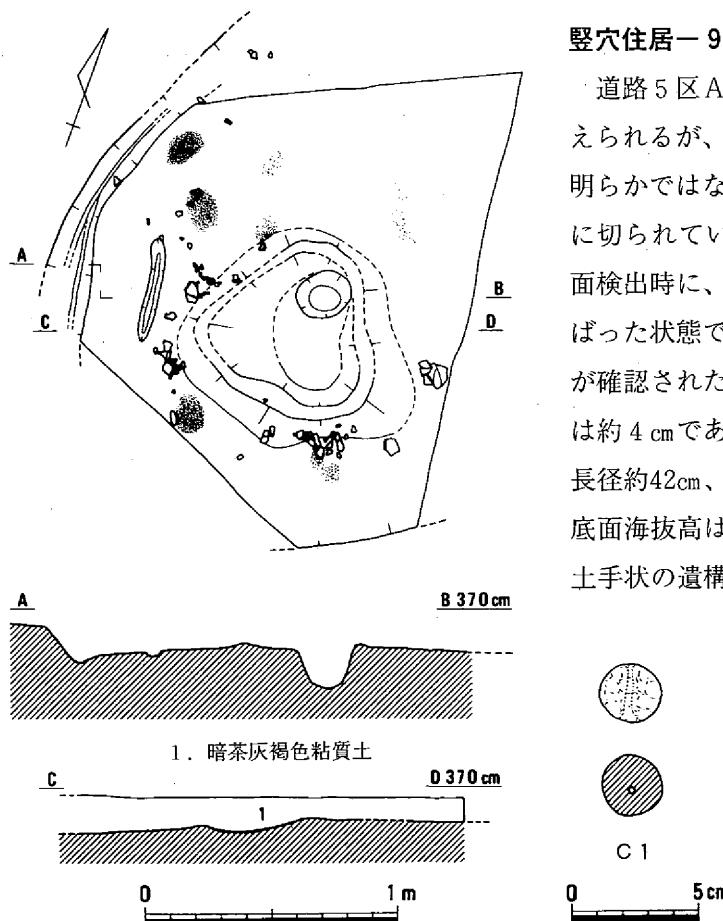
第15図 竪穴住居-8 (1/60)

竪穴住居-9 (第16・17図)

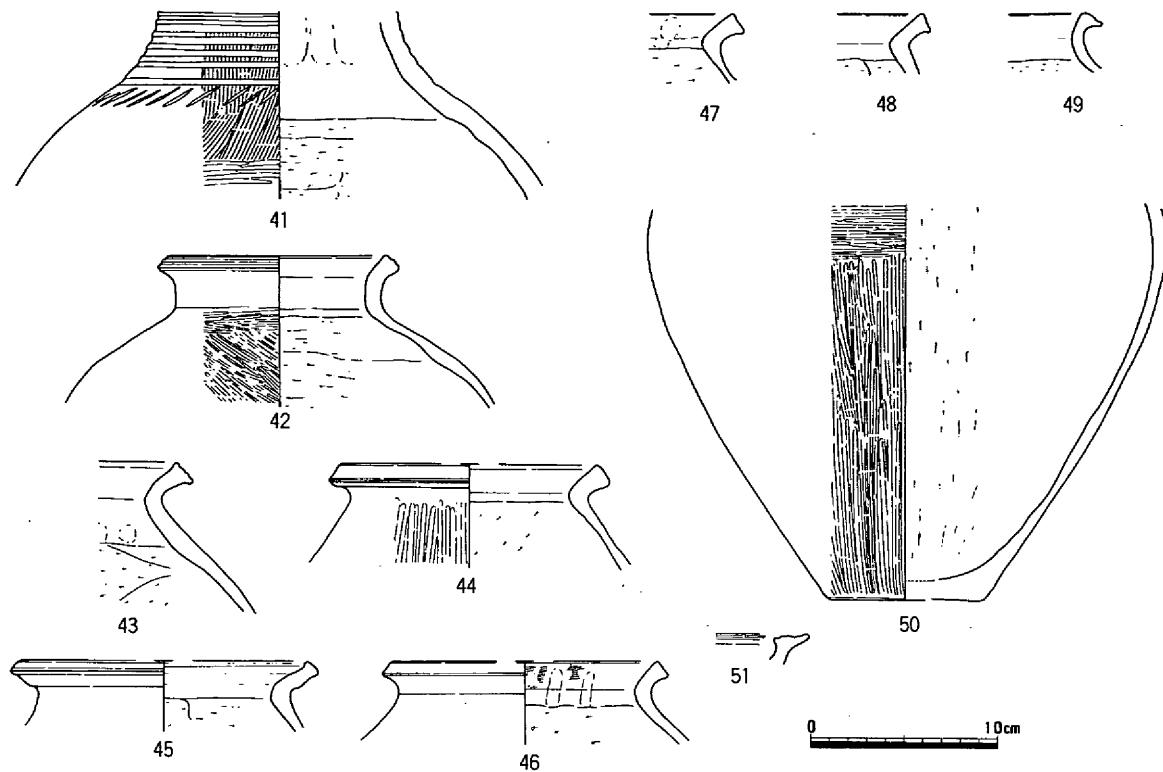
道路5区Aの北側に位置する。円形を呈すると考えられるが、後世の削平や調査区の制約等もあって明らかではない。また、床面の一部は、溝-19、20に切られている。底面海拔高は約337cmである。床面検出時に、土器とともにいくつかの焼土面も散らばった状態で見つかった。壁体溝は住居西側の一部が確認された。幅は約20cm～35cm、床面からの深さは約4cmである。柱穴は1本のみ確認されている。長径約42cm、短径約35cm、床面からの深さは34cm、底面海拔高は306cmである。また、柱穴の周囲には、土手状の遺構が巡っている。土手の幅は約30～55cm、

床面からの高さは約4cmである。

土製品は、C1の土玉が出土している。弥生土器は、41、42が壺、43～49が甕、51が高杯である。50については壺・甕のいずれかははっきりしない。弥生土器の型式より、弥生時代後期のものと考えられる。
(速水)



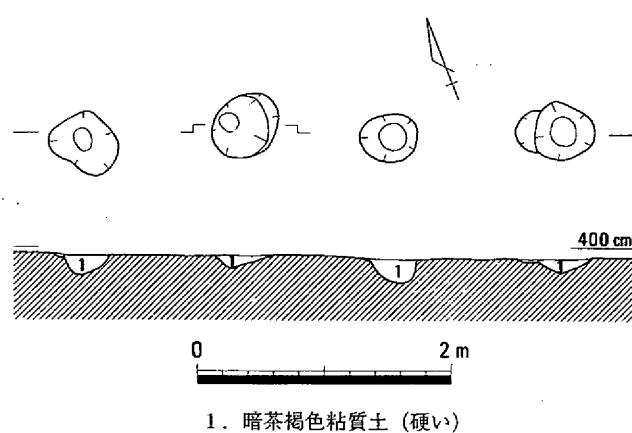
第16図 竪穴住居-9 (1/30)・出土遺物



第17図 竪穴住居-9 出土遺物

(3) 柱穴列

柱穴列-1 (第18図)



第18図 柱穴列-1 (1/60)

道路3区の中央、溝-11の北側に位置する。4本の小穴からなり、N-70°-Wの東西方向に直線的に並び、そのうちの浅い2穴に切り合いがみられる。直径45~55cm、深さは西端から18.1cm、10.1cm、17.7cm、東端8.2cmをはかり、深浅が交互になる。断面形状は皿形を呈し、埋土は硬質の暗茶褐色粘質土の1層からなる。埋土の上面、土層断面からは柱痕は確認できなかった。埋土の性質、色調から弥生時代と判断した。 (高畠)

(4) 袋状土壤

袋状土壤-1, 2 (第19・20図、図版3-1)

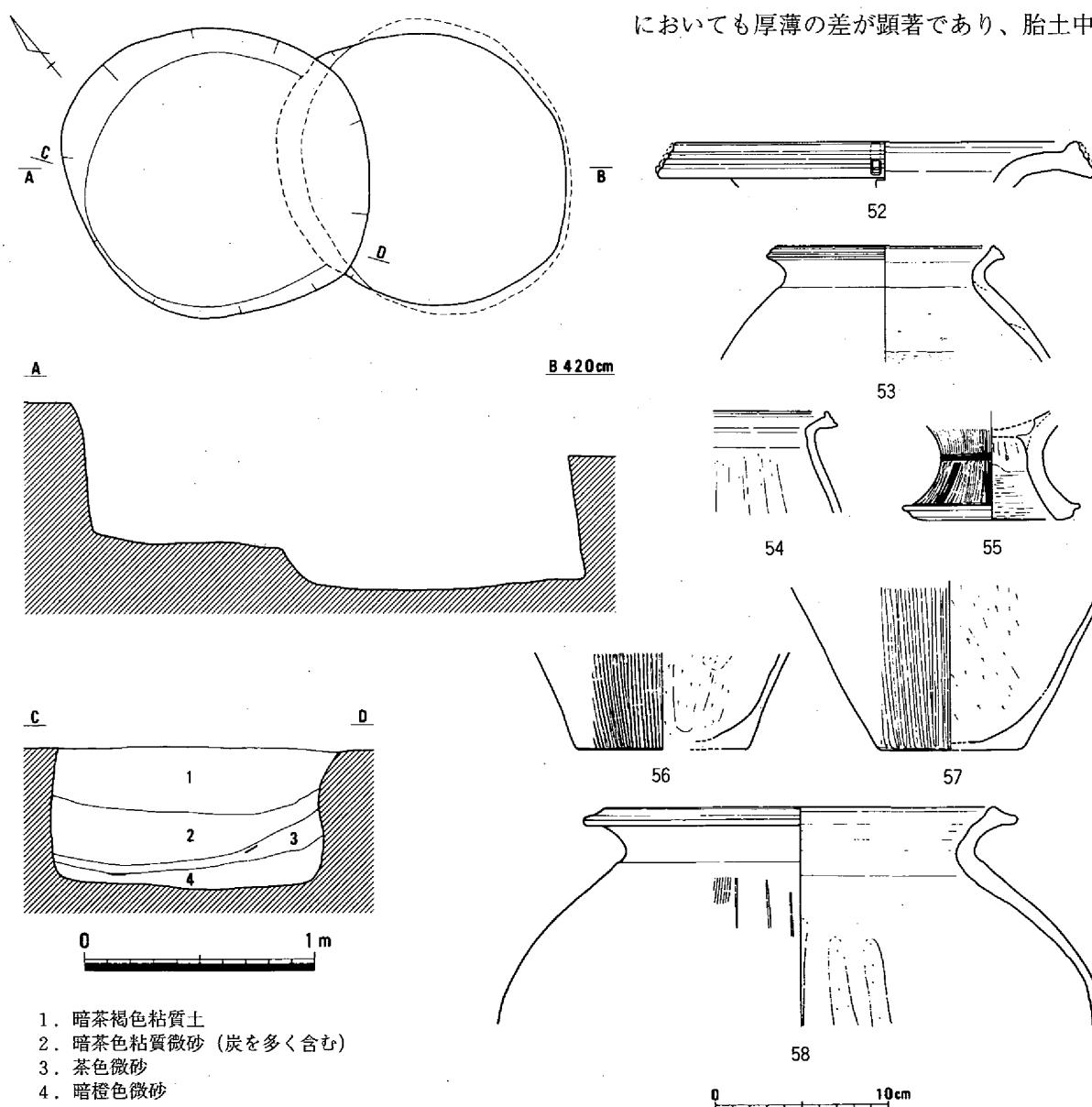
道路2区の北側、竪穴住居-6の3.0m東に位置し、袋状土壤-2と切り合い関係にある。袋状土壤-2の埋没後に袋状土壤-1が新しく西側に掘り込まれており、平面形は円形を呈する。

袋状土壙-1は口部径140×125cm、底径110cm、深さ60cmをはかり、断面形は箱形になる。埋土は4層からなり第2層中に炭層、第1～3層に土器片が認められる。

遺物等は壺、甕等の土器片が出土しており、それらの特徴から弥生時代後期前葉、弥・後・Iの新相と考えられる。また、第2層出土の炭化材のC¹⁴年代測定では2150±80・200・BCが出ている。この炭化材は燃料材と考えられ、樹種はコナラ属コナラ亜属クヌギ節である結果を得ている。

袋状土壙-2は袋状土壙-1より古い段階で掘られたものである。口部径135×115cm、底径130×115cm、深さ80cmをはかり、断面形は三角フラスコに似る袋状を呈する。

遺物は壺、甕、高杯、鉢の器種があり、器形・調整を観察するのに比較的残りの良好な大形品が認められる。壺60、61、64、65、69、70は均一化した薄手の器壁、折返し状の口縁部の特徴、器内面胴部の中位のヘラケズリ、上位のユビオサエ、ハケメ等の調整は弥生時代中期後葉からの形状を残している。甕61、70の器外面には横位のタタキメがみられる。59をはじめとする他の壺、甕を前者と比較すると、口縁部は肥厚し鈍重となり、器壁においても厚薄の差が顕著であり、胎土中

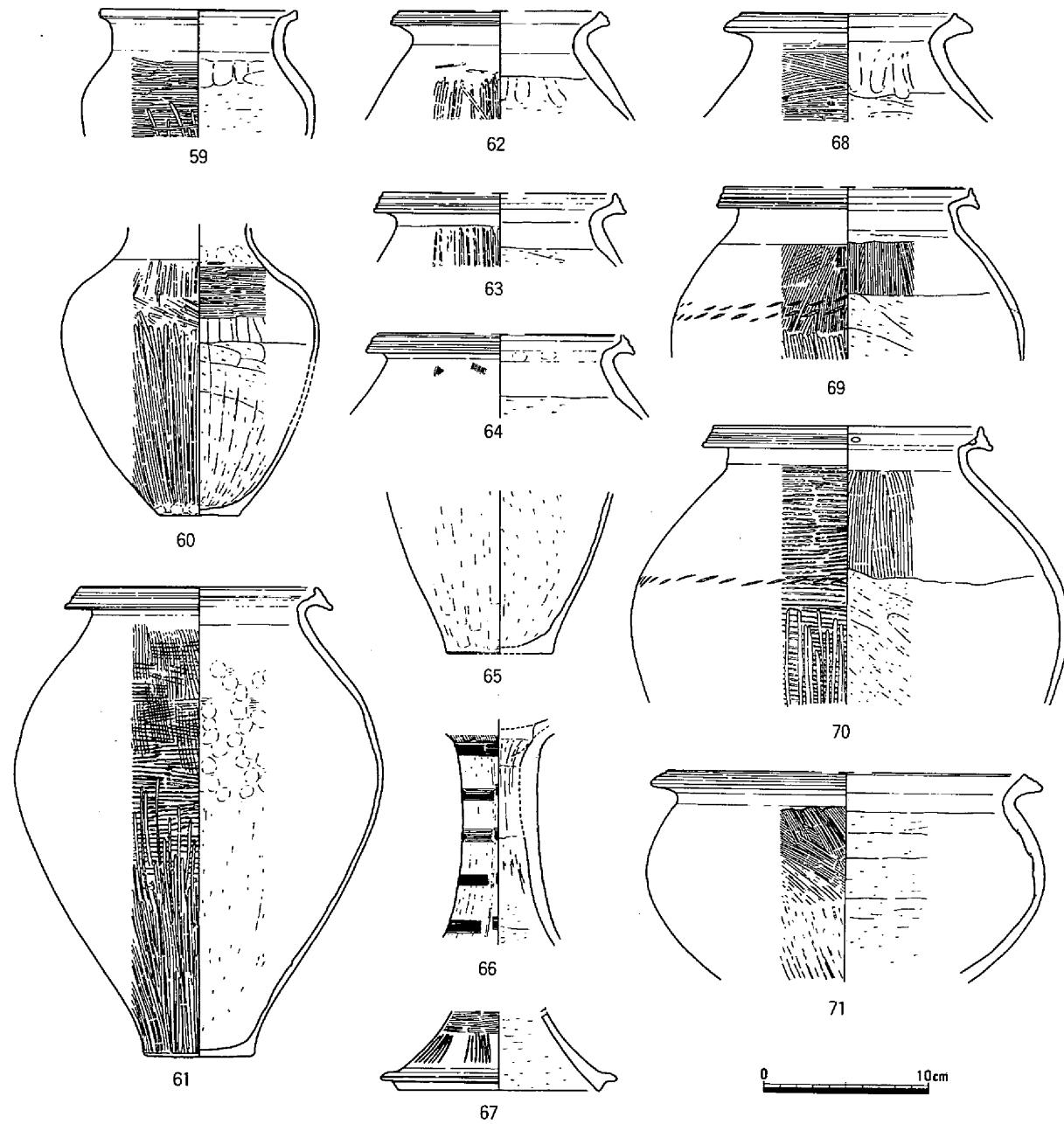


第19図 袋状土壙-1, 2 (1/30) • 出土遺物

には比較的大粒の石英、長石が多く混在するようである。器内面のヘラケズリはさらに上位に近くなつておき、頸にはシボリメ状の痕跡が一部に認められる。これらの土器は前者より若干新しい様相を呈しており、弥生時代後期前葉、弥・後・Iの古相の特徴を有する。

この時期の竪穴住居はみられないが、他に土壙等数基が点在する。

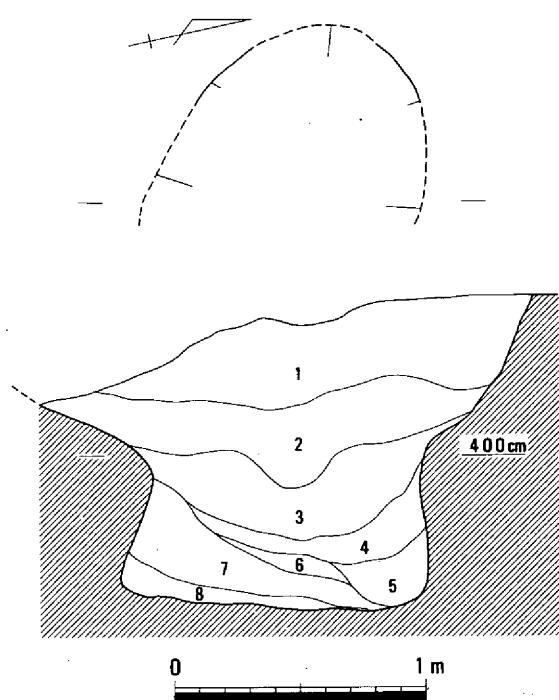
(高畠)



第20図 袋状土壙-2 出土遺物

袋状土壙-3（第21図）

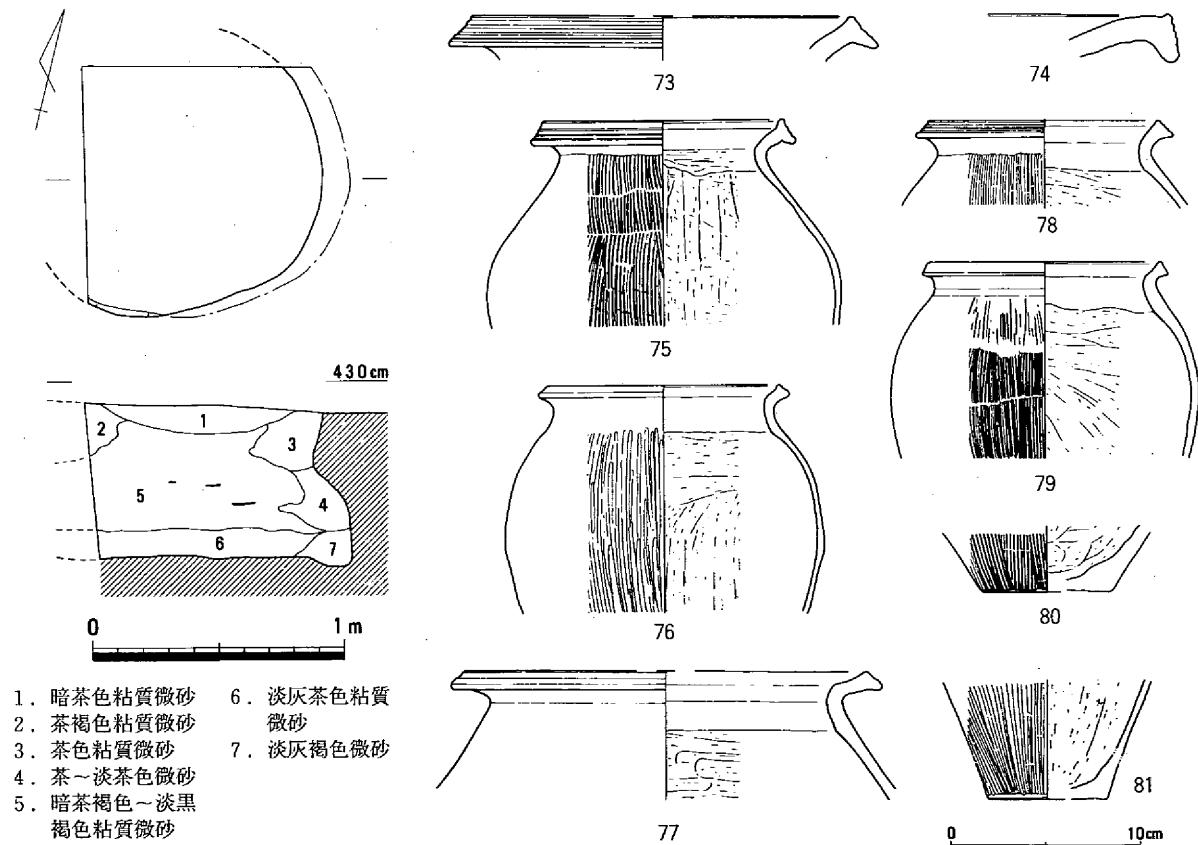
側溝3区北側で、西壁に接している。検出面の海拔高3.8m、底面の海拔高は3.4mを測る。調査区壁面に近く掘り下げが困難であったため、上端を検出後断ち割りを実施した。その結果、断面から袋状土壙であることが確認できた。埋土は大きく第4～8層の初期堆積とそれ以上に分けられる。第2



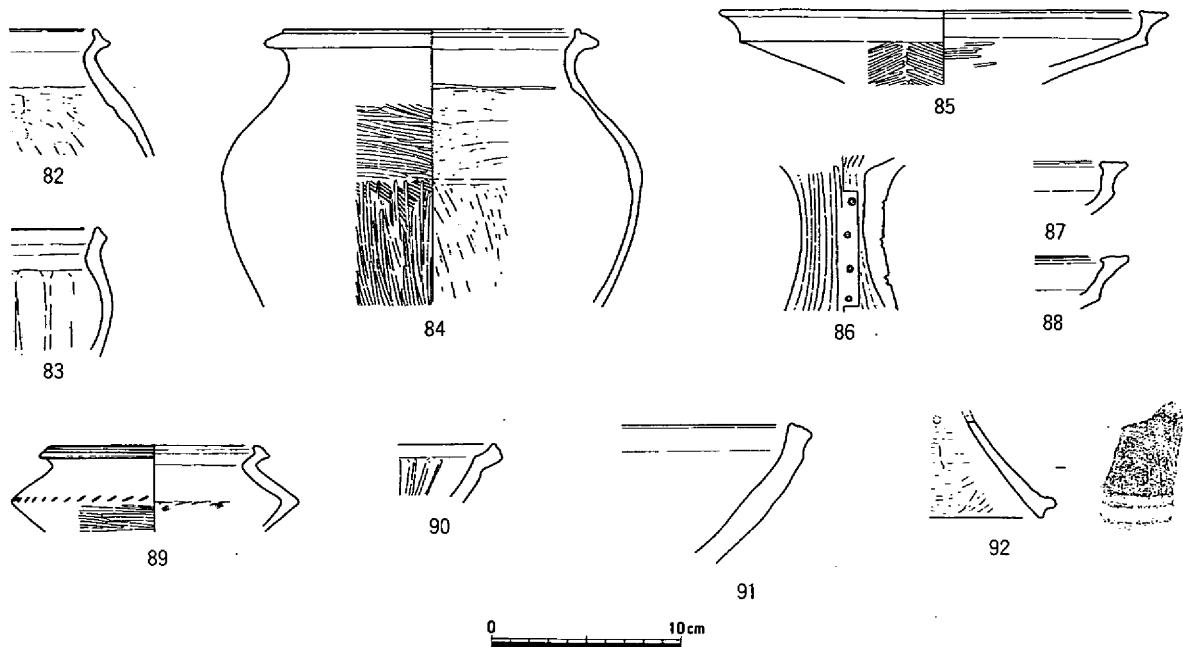
第21図 袋状土壌-3 (1/30)・出土遺物

袋状土壌-4 (第22・23図、図版3-2)

側溝3区北側で、袋状土壌-3の南に位置する。西壁に接しているが、土壌の大半は調査区内であつ



第22図 袋状土壌-4 (1/30)・出土遺物



第23図 袋状土壙—4 出土遺物

た。平面の形状は円形である。検出面の直径は121cm、底部の直径は127cm、検出面からの深さは52cmを測る。埋土の堆積状況は多少不規則なように感じられるが、第2・3・4・7層が側壁の崩壊によるもので、第6層が初期流入土と解釈している。第5層には土器片と炭化物が互層状に多く含まれていた。

遺物は土器で、甕・壺・高杯・台付鉢片などである。73は壺の口縁であるが、74は器台の口縁の可能性がある。75の甕は口径12.5cm、76は口径12.1cm、79の口径は12.0cmで、75、76、79のいずれも煤が付着する。84の甕は口径15.2cmである。85～88、92は高杯である。85は口径20.8cmを計り、口縁端面には4条の凹線文がみられる。89の台付鉢は口径10.4cm、最大径15.0cmで煤が付着している。90、91は鉢であろう。

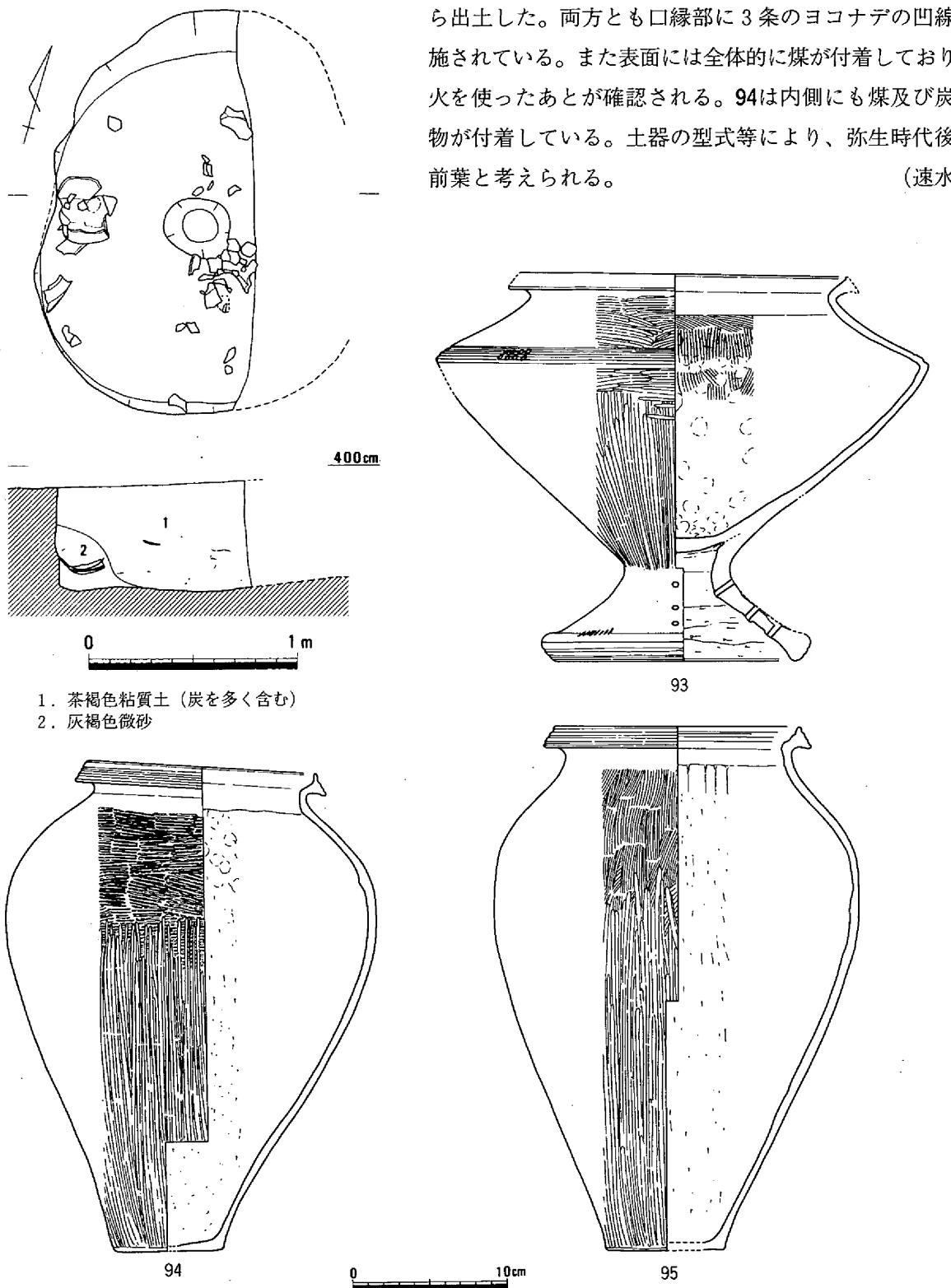
この遺構の埋没した時期は、出土した土器から弥・後・Iと思われる。

(氏平)

袋状土壙—5 (第24図、図版3-3)

道路2区と3区の境界のやや東よりに位置する。楕円形を呈するが、東側が溝-60の削平により一部失っている。長軸は約200cm、短軸は不明である。深さは54cm、底面海拔高は約340cmである。側壁がほぼ直立するが、中間の部分がやや外側へ出ていることや底面がほぼ平坦であることなどから、袋状土壙と考えてよいであろう。断面形は長方形状を呈しており、2層からなる。両層とも土器片が多く含まれ、第1層では炭も多く含まれ、3cm粒程の大きさまで見られる。このことからなんらかの形で焼却物を廃棄したことが確かめられる。底面付近からも土器が多く出土している。また、土壙内中央部にピット状の浅い窪みが1ヶ所ある。長径約30cm、短径約26cm、深さ約20cm、底面海拔高は約315cmである。

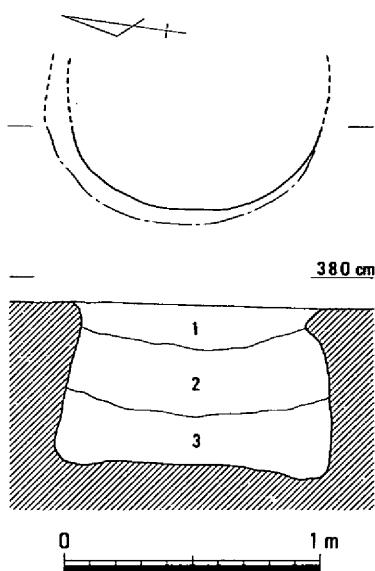
遺物は、弥生土器を中心に出土している。93は台付き鉢である。土壙の底の西端隅から出土した。口縁部は欠損して文様はよくわからない。肩部には3条の凹線文のほか、8個の竹管文が横に4個が2列ずつ並ぶように施されている。脚部には3個の穿孔が確認される。脚端部には、タテに8条の沈線を入れた下に2本のヘラ描き沈線を施している。94、95は甕である。ピット状の浅い窪みの付近か



第24図 袋状土壙—5 (1/30) • 出土遺物

袋状土壙—6 (第25図)

側溝3区中央に位置する。東壁に接し、土壙の大半は調査区内にある。平面は円形で、検出面の直径は98cm、底部の直径は108cm、検出面からの深さは60cmを測る。埋土の堆積状況は、第2層が互層



1. 明黄色粘質微砂
2. 暗茶灰色粘質微砂（微砂多く含む）
3. 炭層

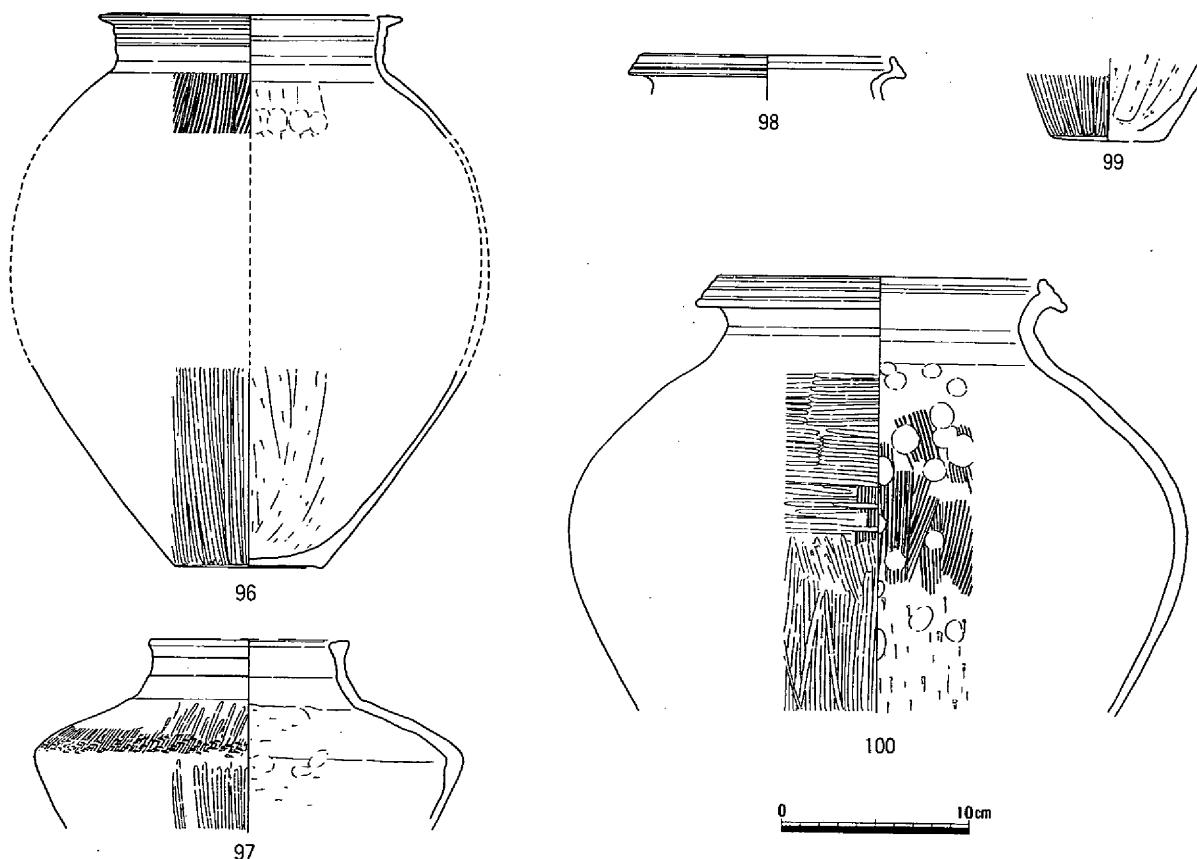
状に炭化物を含み、第3層ではさらに土器・炭化物が多い。

遺物は甕・壺片が検出されている。96は直口壺である。口径14.1cm、底径7.6cmで口縁部に黒斑が見られる。97の壺は口径9.7cmを計る。98は口径13.2cmの甕口縁部である。99は甕の底部で、底径は5.8cmである。98、99にはいずれにも煤が付着している。100は甕と考えられる。口径17.0cm、胴部最大径32.7cmを計り、外面ヘラミガキの上からタタキメ風の痕跡が見られる。この甕にも煤の付着が見られる。

以上の出土遺物から、この袋状土壙は弥・後・Iの時期に埋没していったものと思われる。 (氏平)

袋状土壙-7, 土壙-9 (第26図)

側溝3区北端で、竪穴住居-6の北に位置する。袋状土壙-7の上層に土壙-9が存在した。土層の内、第1・2層を土壙-9の埋土と認識した。第3層は炭化物を多く含み、第6層はさらに炭化物・焼土・土器を多く含んでいた。底面は

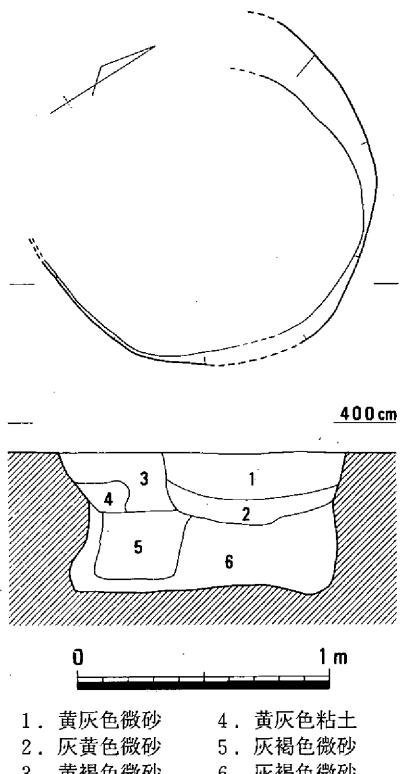


第25図 袋状土壙-6 (1/30)・出土遺物

南側の方が北に比べて4cmほど低く、全体的に北から南へ掘り込んでいる。

遺物は図示できなかった。遺構の時期は周囲の様子から見て弥生時代後期にあたるのでないだろうか。 (氏平)

(5) 土壙

第26図 袋状土壙-7,
土壙-9 (1/30)

土壙-1 (第27図)

道路0区北側で、竪穴住居-3の南に位置する。検出できたのは西側半分で、残り東側半分は調査区外に延びる。検出面は海拔高420cmである。平面の形状は不整で、断面は皿状に窪んでいる。検出面からの深さ17cm、底面の海拔高は4mである。埋土は2層で、下層には炭化物と土器を含んでいる。

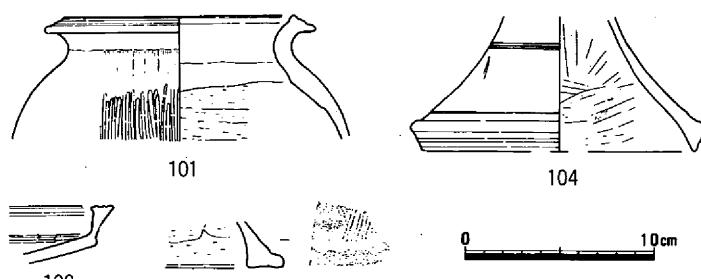
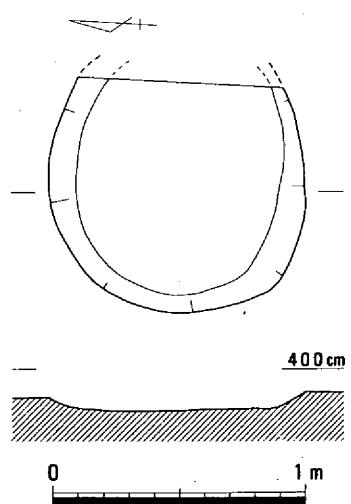
この遺構の時期は、周囲の状況から考えると弥生時代後期に当たるのが適当であろう。

(氏平)

第27図 土壙-1 (1/30)
・出土遺物

土壙-2 (第28図)

側溝1区中央で、竪穴住居-2に重なって位置する。検出時には竪穴住居-2に伴う土壙と考えていた。平面は楕円形を呈し、断面はごく浅い皿状である。埋土はほとんど認識できなかった。



第28図 土壙-2 (1/30) · 出土遺物

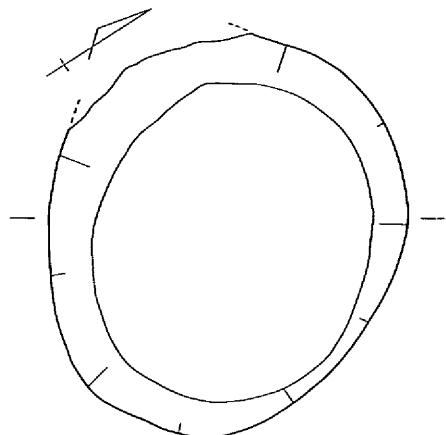
遺物は、甕・高杯片などを確認している。101は口径12.6cmを計る甕で、煤が付着している。102は高杯の口縁端部で、103は高杯の脚端部である。104の高杯脚部は底径が14.2cmを計る。これらの遺物から、時期は弥・後・Iと考えられる。

(氏平)

土壙-3 (第29図)

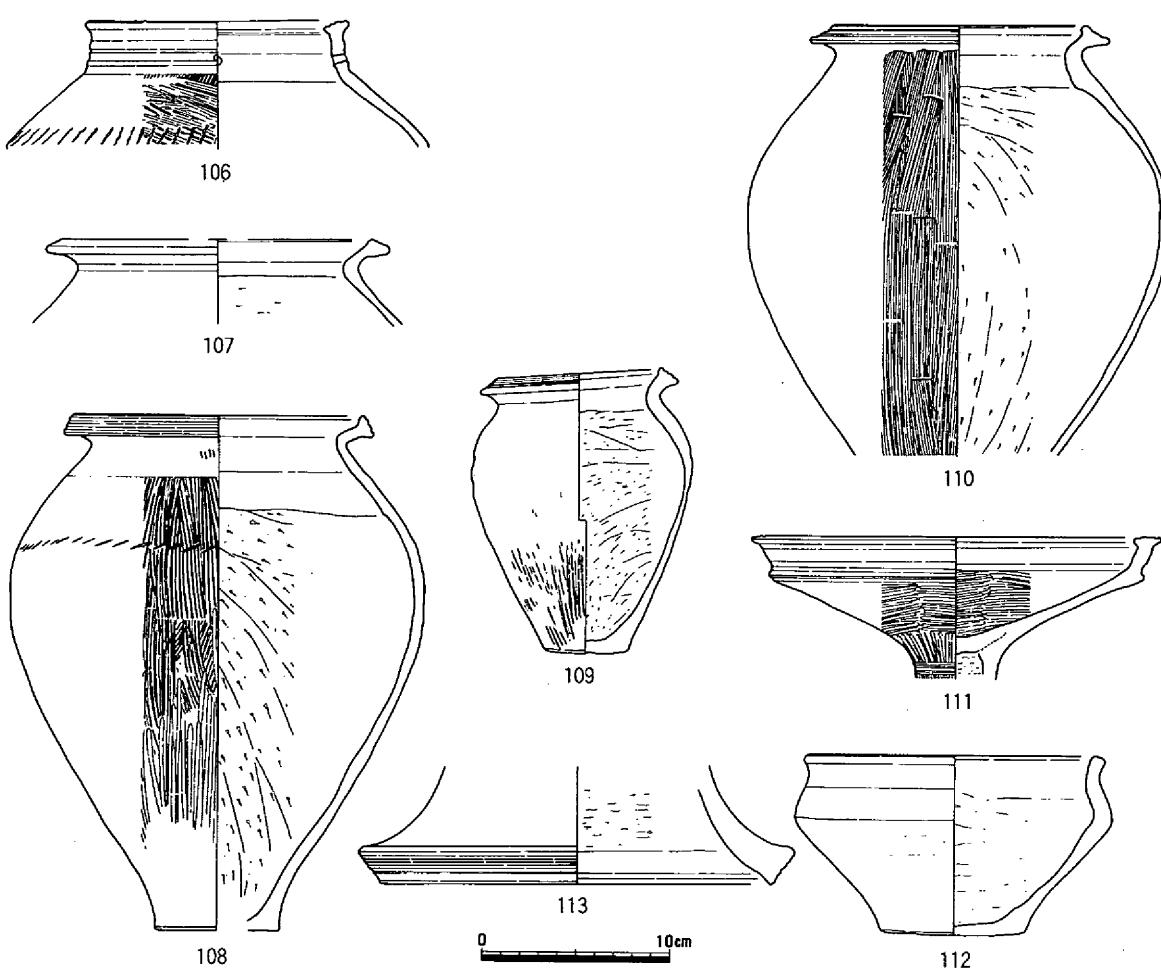
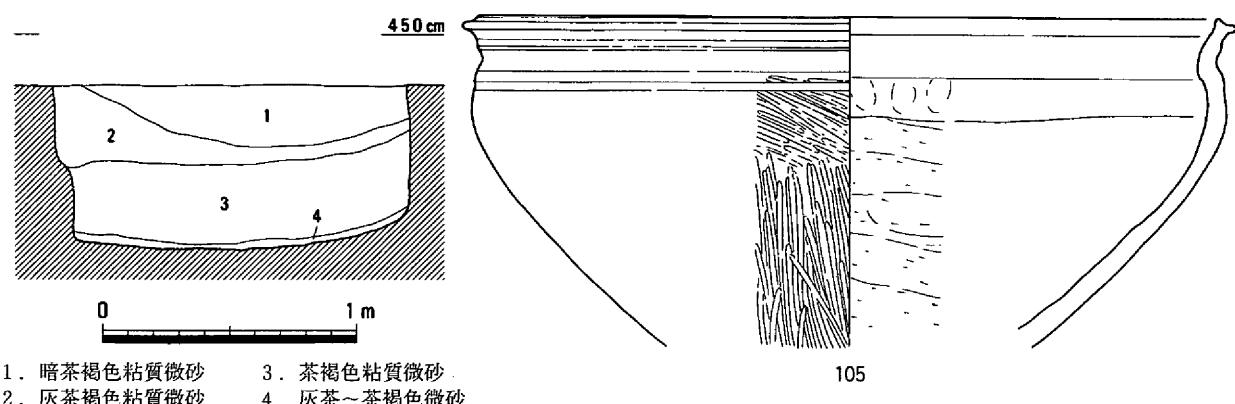
道路0区北側で、竪穴住居-2南側に位置する円形の土壙である。壁面は垂直に落ち、形状から袋状土壙になるかもしれない。埋土は4層で、第2層中に層状に炭化物を含む。

遺物は土器がある。106は台付壺になる。口径13.5cm、最大径22.1cmを計る。胴部には黒斑が見ら

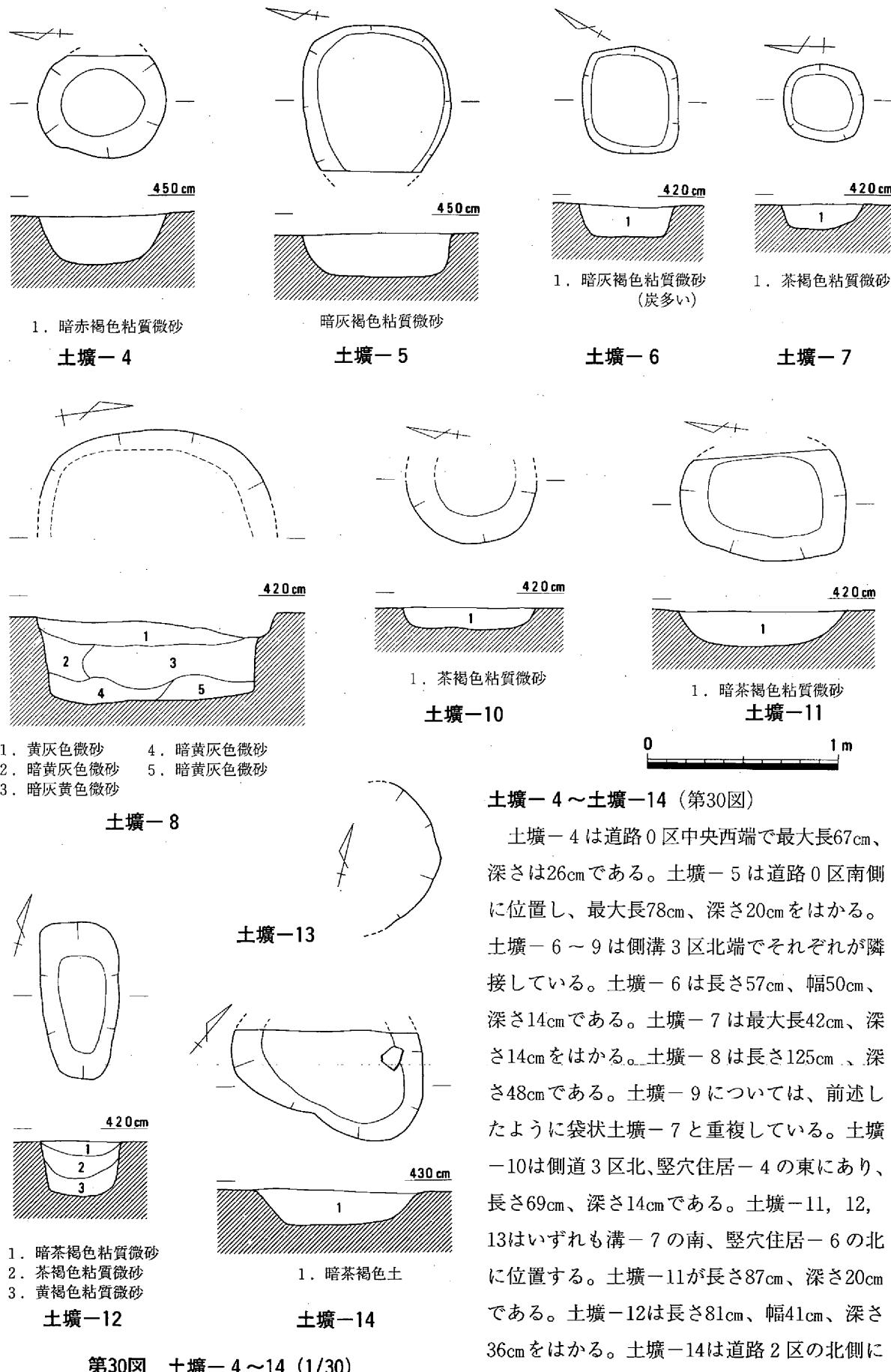


れる。108は口径15.1cm、器高27.1cm、底径6.4cm、最大径21.7cmを計る甕で、外面に煤が付着する。109はほぼ完形の甕で、口径8.7cm、器高15.0cm、底径4.1cm、最大径11.7cm、煤が付着している。110の甕は口径13.3cm、最大径22.2cmを計り、やはり煤の付着が見られる。111は口径21.8cmの高杯口縁部である。112は鉢で、口径14.9cm、器高9.5cm、底径7.5cm、最大径16.9cmを計る。113は底径20.6cmの器台である。以上の遺物より、この遺構の時期は弥・後・Iであると言える。

(氏平)



第29図 土壙-3 (1/30)・出土遺物



第30図 土壌-4~14 (1/30)

土壌-4~土壌-14 (第30図)

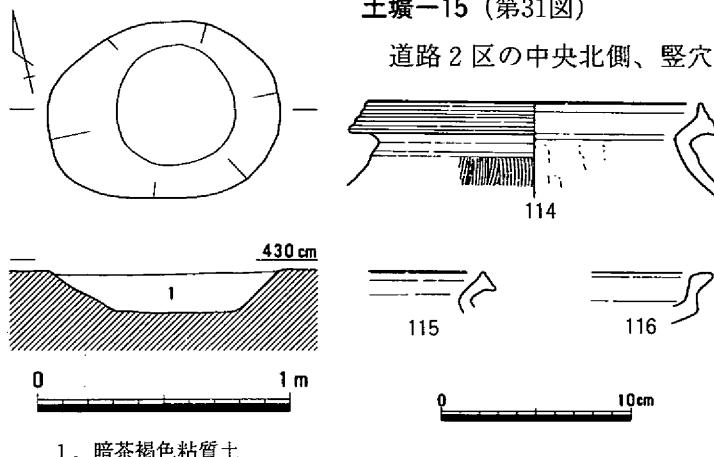
土壌-4は道路0区中央西端で最大長67cm、深さは26cmである。土壌-5は道路0区南側に位置し、最大長78cm、深さ20cmをはかる。土壌-6~9は側溝3区北端でそれが隣接している。土壌-6は長さ57cm、幅50cm、深さ14cmである。土壌-7は最大長42cm、深さ14cmをはかる。土壌-8は長さ125cm、深さ48cmである。土壌-9については、前述したように袋状土壌-7と重複している。土壌-10は側道3区北、竪穴住居-4の東にあり、長さ69cm、深さ14cmである。土壌-11, 12, 13はいずれも溝-7の南、竪穴住居-6の北に位置する。土壌-11が長さ87cm、深さ20cmである。土壌-12は長さ81cm、幅41cm、深さ36cmをはかる。土壌-14は道路2区の北側に

存在し、長さ102cm深さ18cmである。

形状であるが、土壙-6, 7, 11, 12は方形に近い掘り方を呈し、土壙-4~7, 12については壁面の立ち上がりが垂直に近い。土壙-8は断面形から袋状土壙の可能性がある。

土壙-5の埋土は、周囲の奈良時代遺構埋土と比較して色調が暗く粘性がある。土壙-6, 7の埋土には炭を含んでいる。土壙-8では第2~5層に炭を含むが、第3層で特に顕著である。（氏平）

土壙-15（第31図）



第31図 土壙-15 (1/30)・出土遺物

道路2区の中央北側、竪穴住居-7の北東1.6mに位置する。上端部の径は92×70cmで、深さ17cmをはかる楕円形の土壙である。平坦な底面は海拔408cmをはかり、埋土は暗茶褐色粘質土の1層である。

遺物は甕、高杯片が3点出土しており、それらの特徴より弥生時代後期前葉、弥・後・Iの古相である。（高畠）

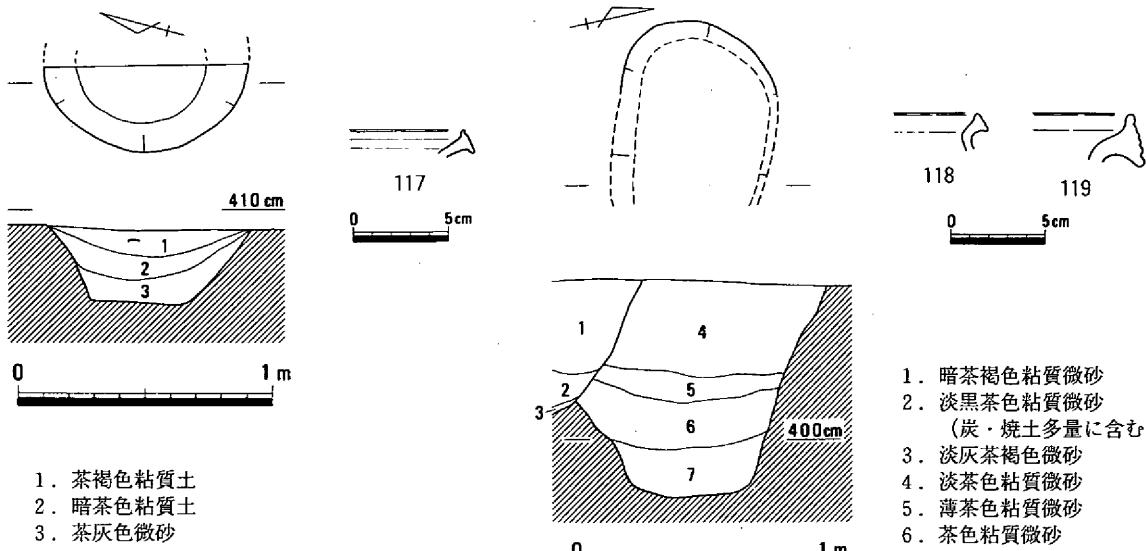
土壙-16（第32図）

道路2区の中央北側、土壙-15の1.4mに位置する。上端部の径は80cm、深さ21.5cmをはかる円形の土壙である。埋土は2層からなり、第3層はベースの茶灰色微砂である。遺物は第1層から出土した甕の小片1点である。古い様相を残すが、弥・後・Iの古相に比定をする。（高畠）

土壙-17（第33図）

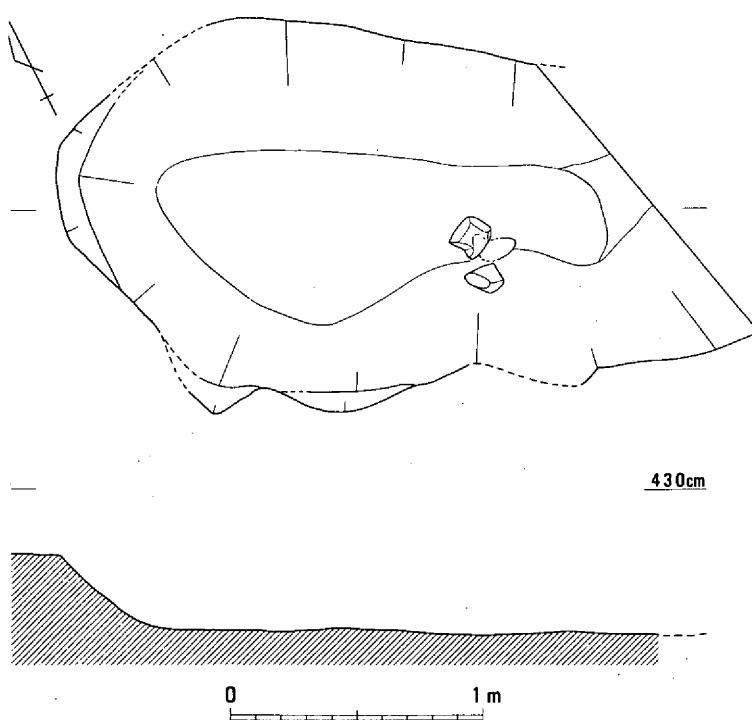
側溝3区北側で西壁に接し、袋状土壙-3の北に位置する。埋土は第4~7層の4層からなる。検出面の海拔高4m、底面は3.8mを測る。袋状土壙-3に切られ、それより古いことが分かる。

遺物は118、119の2点で、これらからこの土壙は弥生時代後期前葉のものといえよう。（氏平）



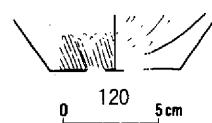
第32図 土壙-16 (1/30)

第33図 土壙-17 (1/30)・出土遺物



土壙-18 (第34図)

道路2区の中央よりやや南東に位置する。不整な橢円形を呈するが、溝-60の削平により東側の一部を失っている。短軸は約155cmをはかる。深さは、約30cmである。断面形は皿形を呈すると考えられる。遺物は、120の弥生土器の甕が出土している。これより、弥生時代後期前葉のものと推定される。(速水)

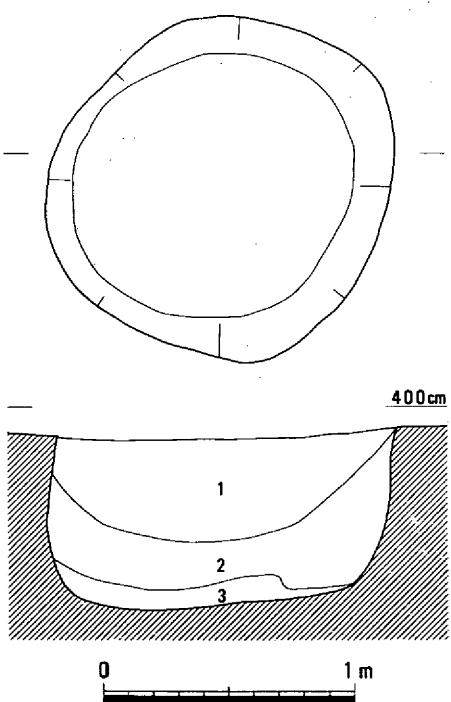


第34図 土壙-18 (1/30)・出土遺物

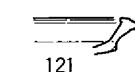
土壙-19 (第35図)

道路2区南側、溝-8の南に接して位置する。上端部径145×135cm、深さ72cm、底面海拔高320cmをはかる円形の土壙である。断面形は、下位にゆくにしたがい少し丸みを持って広がる袋状土壙に近いものである。埋土は自然堆積の形状を呈する3層からなり、第2層の暗茶褐色粘質土中に炭の分布、土器片が認められる。

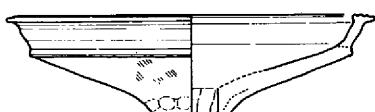
遺物は高杯、甕、器台等が出土しており、高杯121、124は蓋に転用されたために煤が付着している。高杯122は胎土中に角閃石を含み、器外面に丹塗りされている。(高畠)



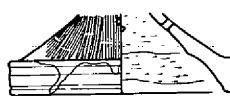
1. 暗茶褐色粘質砂
2. 暗茶褐色粘質土(炭を含む)
3. 淡茶褐色粘質土



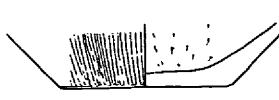
121



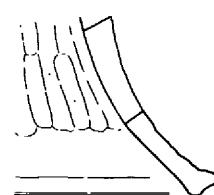
124



122



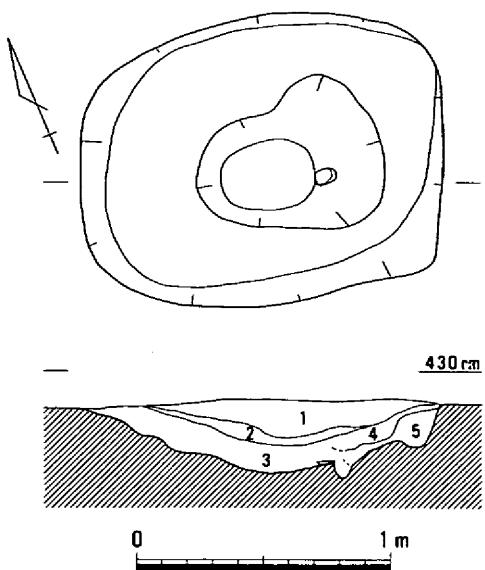
123



125



第35図 土壙-19 (1/30)・出土遺物



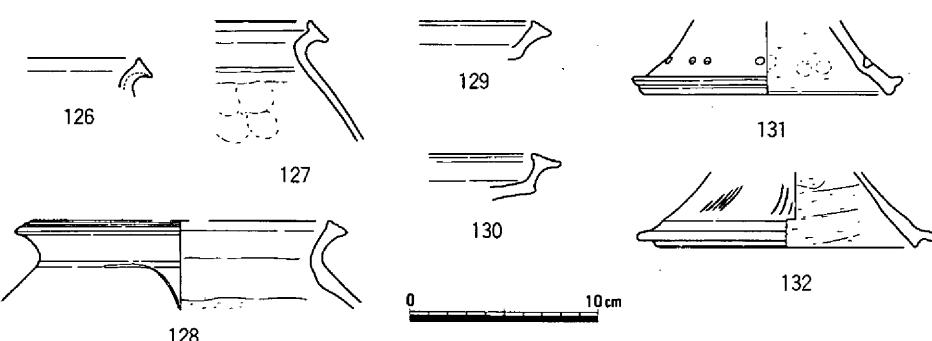
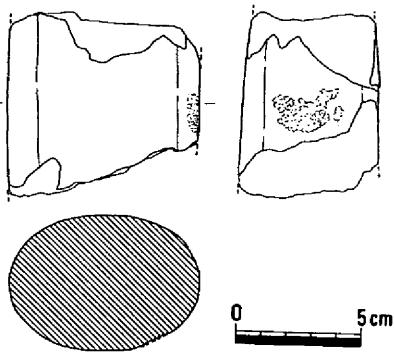
1. 暗茶黒褐色粘質土
2. 黄茶色砂質土
3. 1に近いが、焼土・遺物が多い
4. 炭・焼土粒を含む
5. 暗黄茶褐色砂質土

土壌-20 (第36図)

道路2区南側、土壌-19の両隣りに接して位置する。上端部径は $143 \times 114\text{cm}$ 、深さ27cm、底面海拔高390cmをはかる隅丸方形の土壌である。断面形は浅い椀状を呈し、5層からなる。

遺物は第3層出土が多く、土器片と玢岩製の大型蛤刃

石斧転用の敲石等があげられる。S7は最大長7.45cm、幅7.6cm、最大厚5.6cm、重量492.1をはかる。甕、杯の特徴から弥・後・Iの新相に近く、土壌-19より新しい。(高畠)



第36図 土壌-20 (1/30) ・出土遺物

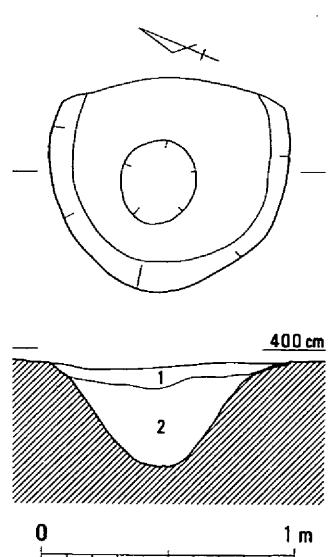
土壌-21 (第37図)

道路3区中央、柱穴列-1の北側50cmに位置する。上端部径97cm、深さ41cm、底面海拔高354cmをはかる円形の土壌である。断面形は深い椀形となり埋土は2層である。遺物は出土しなかったが、土質等から弥生時代後期前葉に位置づけておきたい。(高畠)

土壌-22 (第38図)

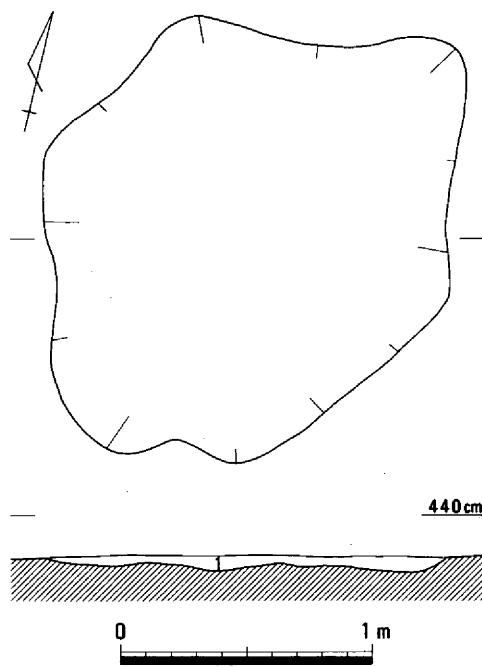
道路3区南西側、袋状土壌-6の約1m東側に位置する。長径 $210 \times 153\text{cm}$ 、深さ12cm、底面海拔高418cmをはかる。土壌平面は不整形を呈し、非常に浅いものである。断面形はまさに皿形であり、埋土は1層からなる。暗茶褐色粘質微砂内に炭粒を比較的多く含み、小土器片が少し混じる。

遺物実測の可能な土器は甕133のみである。口径14.55cm、残位高7.7cmをはかり、口縁部外面に3状の凹線文が巡る。器外面上位は縦方向の粗いハケメ、肩部下位は粗いハケメの上にヘラミガキが施

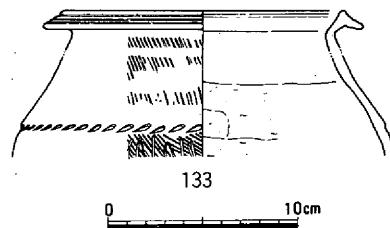


1. 暗茶褐色粘質土 (微砂)
2. 茶褐色粘質土 (上位より淡い)

第37図 土壌-21 (1/30)



1. 暗茶褐色粘質微砂
(1 mmの炭片・小土器片を多く含む)

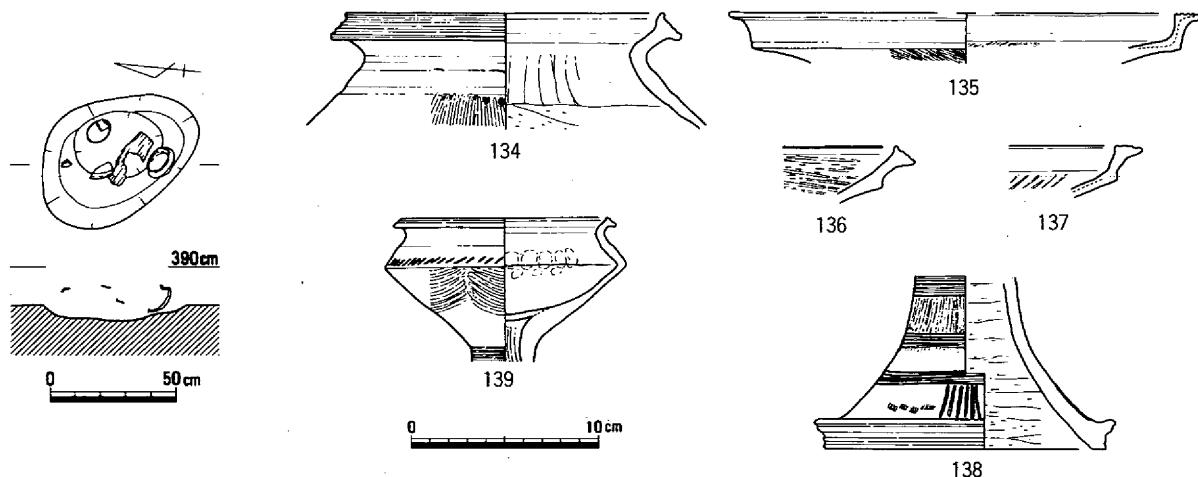


第38図 土壙-22 (1/30) ・出土遺物

土壙-75 (第39図)

道路3区の南側、土壙-22の南東に位置する。上端部径は $68 \times 47\text{cm}$ 、深さ6.5cm、底面海拔高368cmをはかり、平面形は楕円形を呈する。断面形は浅い楕形にて、底面は少し深浅が認められる形状である。この土壙は古墳時代前期の堅穴住居-11の床面下位から検出されたものである。

遺物は6点の土器片と $23 \times 8\text{cm}$ の長方形をした板状の炭化材が出土しており、土壙底に接着するものではなく、すべて浮いた状況である。甕134は口径 18.59cm をはかり、口縁部は3~4条の凹線文、器内外面の頸部下までおよぶ一連のヨコナデ、外面は縦位のハケメ上にヘラミガキを施している。内面屈曲部の 2.8cm 下位より斜、横位のヘラケズリがみられる。139のヘラミガキは5分割による。土器の特徴から弥・後・Iの新相に比定できる。
(高畠)

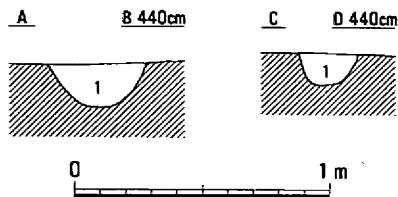


第39図 土壙-75 (1/30) ・出土遺物

(6) 溝

溝-1 (第40図)

道路0区南端から側溝1区南端に位置し、北から西へ流れる溝である。断面はU字形で、埋土に炭と土器を多く含む。遺物の内140、141の甕は上層包含層からの出土である。

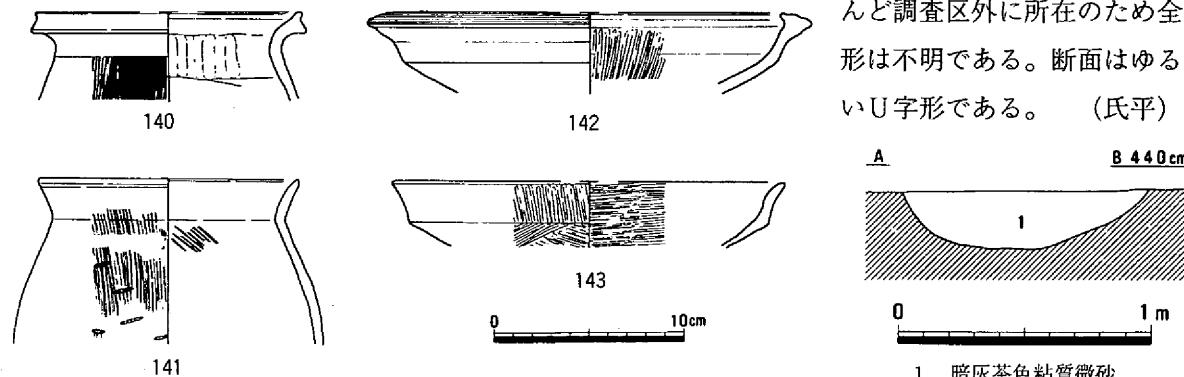


1. 黒茶褐色粘質微砂
(多量の炭・土器を含む)

140は口径が13.7cmで煤が付着し、141の口径は13.5cmである。142、143は高杯で、142の口径が20.3cm、143は20.5cmである。時期は弥・後・IVの可能性が高い。(氏平)

溝-2 (第41図)

道路0区南東端に位置し、北から南へ流れる溝である。ほとんどの調査区外に所在のため全形は不明である。断面はゆるいU字形である。(氏平)



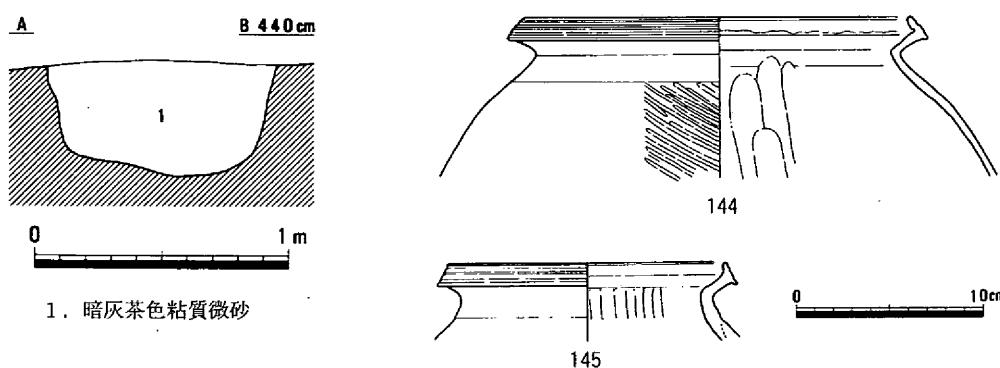
1. 暗灰茶色粘質微砂

第40図 溝-1 (1/30)・出土遺物

第41図 溝-2 (1/30)

溝-3 (第42図)

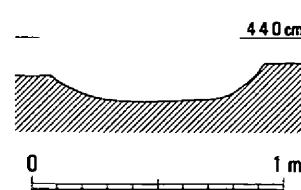
道路0区南側に位置し、北東から南へ流れる溝である。断面は方形に近い。埋土に炭と土器を多く含む。遺物の内376の甕は口径が20.1cm、377の甕は口径14.5cmである。遺構の時期は弥生時代後期前葉であろう。(氏平)



第42図 溝-3 (1/30)・出土遺物

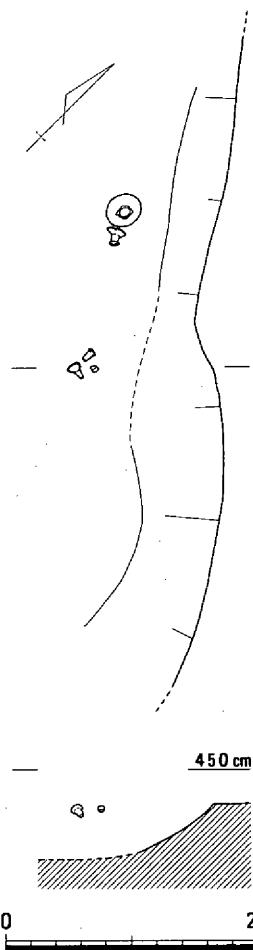


第43図 溝-5 (1/30)



第44図 溝-6 (1/30)

溝-4 (第45図)



側溝1区南端と道路0区南端に位置し、おそらく北西から南東方向へ流れる溝である。平面図で出土状況を示しているのは、上層の古墳時代初頭の土器で、この溝の上層に伴うものである。下図に示した土器は下層に伴う土器である。

146は口径15.4cmを計る壺である。147は口径15.4cmを計る甕であろうか。148の甕は口径17.4cm、149は甕底部で底径は5.5cmを計る。150の高杯は口径18.4cm、151の高杯は口径22.0cmである。

遺物より、弥・後・Iには機能していた溝であると考えられる。(氏平)

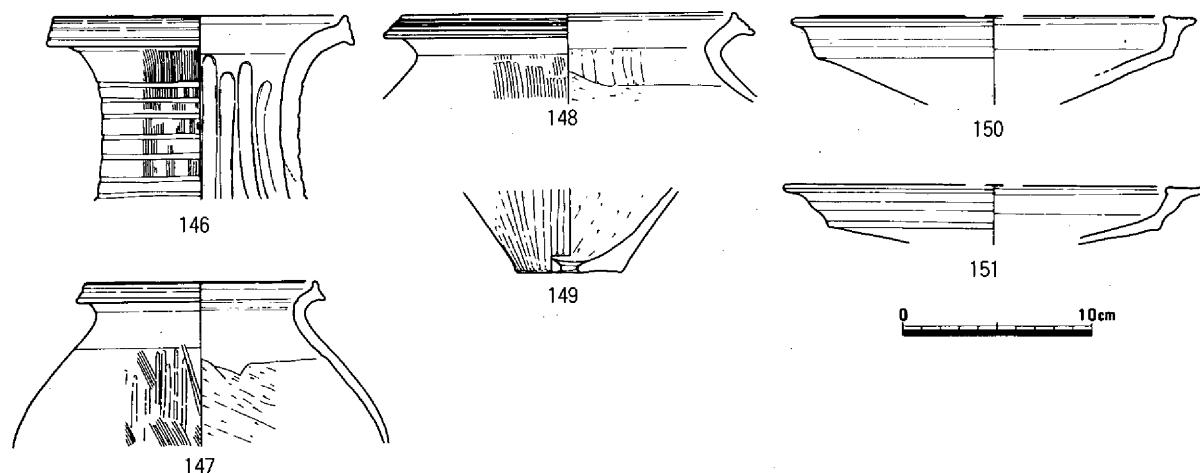
溝-5 (第43図)

側溝3区北端に位置し、おそらく西から東方向へ流れていた溝であろう。調査区内では南側の掘り方のみ確認したため、形状は不明である。深さは検出面から11cm以上はあり、調査区内では底面は存在しない可能性が高い。

時期は、出土遺物が存在しないため不明であるが、周囲の状況から弥生時代後期と思われる。 (氏平)

溝-6 (第44図)

側溝3区北端に位置し、おそらく西から東方向へ流れていた溝であろう。調査区内を東西に横切る。断面はゆるいU字形である。深さは検出面から29cmを測る。時期は弥生時代後期と思われる。 (氏平)

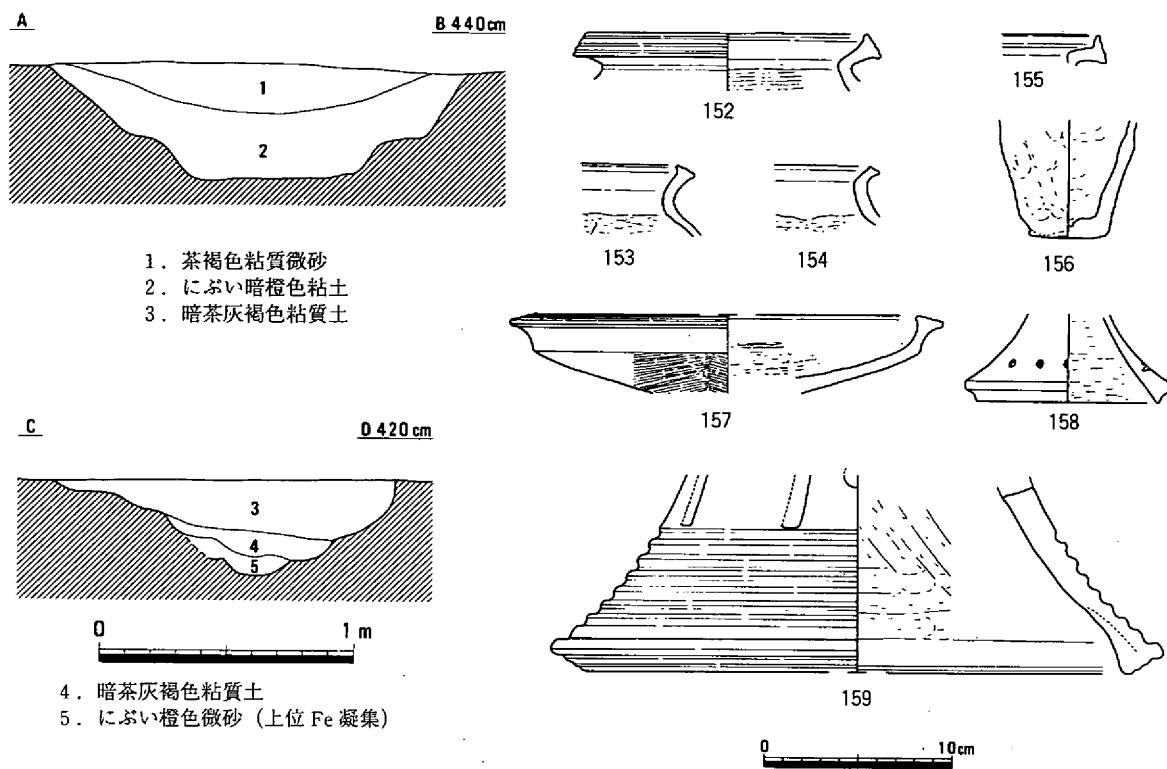


第45図 溝-4 (1/60)・出土遺物

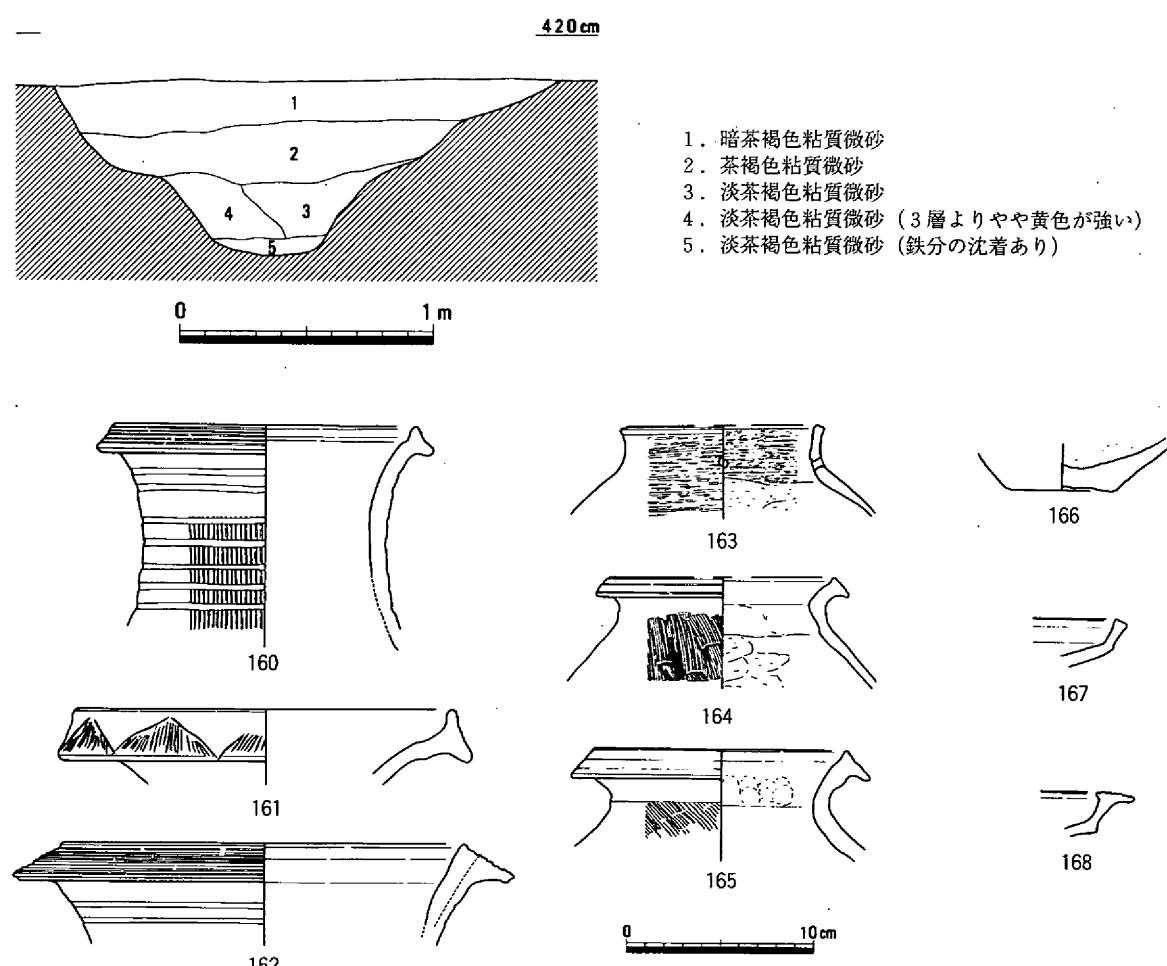
溝-8 (第46図)

西側溝3区北側から道路2区南東に向かって走る溝であり、竪穴住居-7を切って南側に位置する。弥生時代後期前葉では最も早い時期に掘られた溝である。溝の上端部160cm、下端65cm、深さ約45cm、底面海拔高は381cmをはかり、南東に流走する。断面は2段の構成で平・丸底部があり、底面全体にマンガン粒、鉄分の凝集が認められる。埋土は2~3層からなり粘質土が中心に堆積している。

遺物は甕、高杯、鉢、器台等の土器が出土をしており。すべて小破片である。土器の特徴等から弥・後・Iの中相に比定できる。 (高畠)



第46図 溝-8 (1/30) ・出土遺物

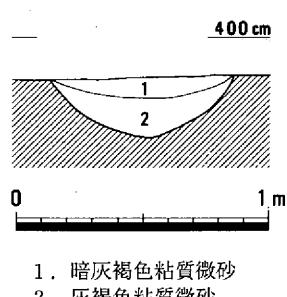


第47図 溝-11 (1/30) ・出土遺物

溝-11（第47図）

側溝3区中央から道路3～4区Cに位置し、おそらく北西から南方向へ流れる溝である。測道3区内では明瞭に確認できたが、その下流にあたる道路3区から4区にかけては断片的にしか捉えられていない。埋土は5層からなり、第1・2層と第3層以下で堆積が異なるものと思われる。また、第5層上面には鉄分の沈着が見られる。断面はゆるいV字形を呈しているが、前述したとおり堆積の時間差がある関係上、第1・2層部分がそれより下部と比べて傾斜が緩くなっている。溝の幅は最大1.94m、深さは30～40cmを測る。

遺物は土器が多数を占める。160は口径15.7cmを計る長頸壺である。161は口径19.8cmの壺であろうか。162も壺で、口径21.0cmを計る。163は壺で口径17.4cm、丹彩がある。164は甕であろうか。165は甕で口径は13.3cmを計る。166は底径5.4cmの甕底部、167、168はいずれも高杯口縁部である。



第48図 溝-12 (1/30)

出土遺物からみると、弥・後・Iには機能していた溝であると考えられる。
(氏平)

溝-12（第48図）

側溝3区中央、溝-11の南に位置し、これもおそらく北西から南方向へ流れるものと思われる。道路3・4区では検出されていない。断面形は緩いU字型で、埋土は2層である。この溝が溝-11の分流である可能性もあるが、断面形状が異なることもあって可能性の指摘だけに留めておきたい。
(氏平)

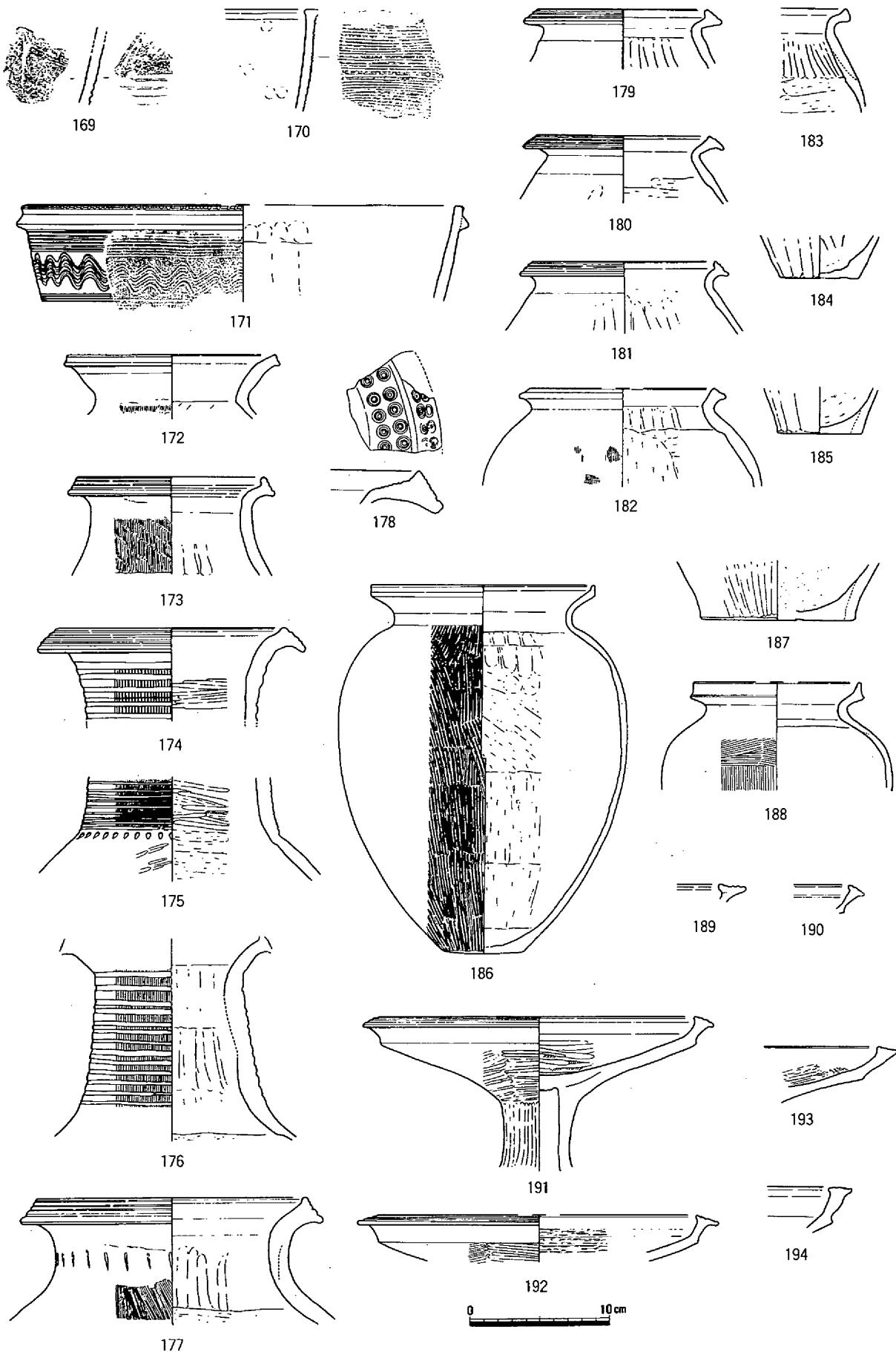
(7) 遺構に伴わない遺物

ここでは0区～7区において、包含層あるいは本来の遺構に伴わず時期の異なる遺構から出土した土器、石器を取上げて掲載をしている。古い順番で時期を追ってみると、弥生時代前期後葉、中期前葉、後期前葉～中葉、後期後葉～末葉の土器が認められる。大きくは4期に分けることが可能であり、第1・2・4期の遺構は無く、遺物も非常に少ない。第3期の後期前葉～中葉の遺物が最も多く、遺構の出土量に比例をしている。

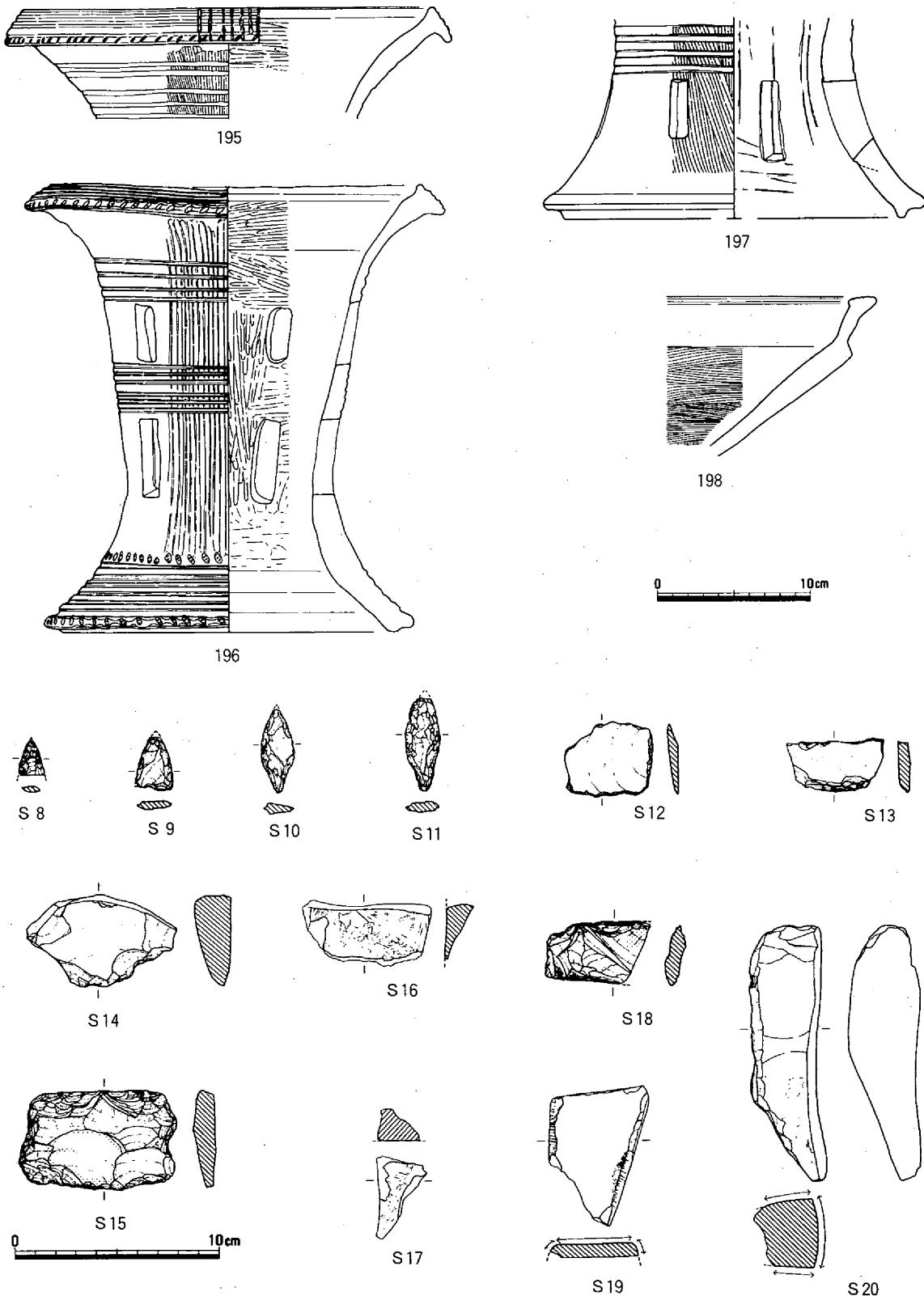
弥生時代前期後葉の土器は溝-16から出土した甕170の1点である。口縁端を外側に向って水平に張出す「逆L字形」の甕であり、一巡する円形刺突文の上位に16条、下位に13条のヘラ描き沈線文が施されている。

弥生時代中期前葉では中世の溝-56付近で出土した甕171が一点である。推定口径30cm、残存高6.9cmをはかり、色調は浅黄橙色を呈する。口縁部は平坦面を持ち、外面端部に刻目を有するが、貼付け突起部には刻目が明瞭でない。突起下位には上から順に8条の櫛描き平行文、櫛描き波状文、櫛描き平行文が一巡している。形態の特徴は東九州に分布する同時期の甕に類似品があるが文様構成は地元の土器に似る。

弥生時代後期前葉～中葉は169～171、186、188の5点の土器を除いたすべての土器であり、壺、甕、高杯、器台、鉢の器種がみられる。172～175、177～181、183～187、190～195、197、198の22点は古墳時代前期の溝-14の埋土中からの出土であり、長頸壺174は古墳時代の壺298と共に併せてある。弥生時代の遺構を破壊して溝-14が造られたり、溝の埋没に関連して投棄された可能性もある。本集落で



第49図 遺構に伴わない遺物（1）



第50図 遺構に伴わない遺物（2）

使用された土器、石器と考えられ、調査を行った竪穴住居、袋状土壙、土壙、溝との時期等の整合性が認められる。

S16、17は古銅輝石安山岩製で表面が磨滅っている。大形の石器の破片であろう。

(高畠)

第3節 古墳時代の遺構・遺物

(1) 古墳時代の概要

ここでは、古墳時代前期、中期、後期を同一の全体図（第51図）で掲載を行なった。前期の遺構が最も多く、中期では少なくなり、後期ではさらに少なくなっている。

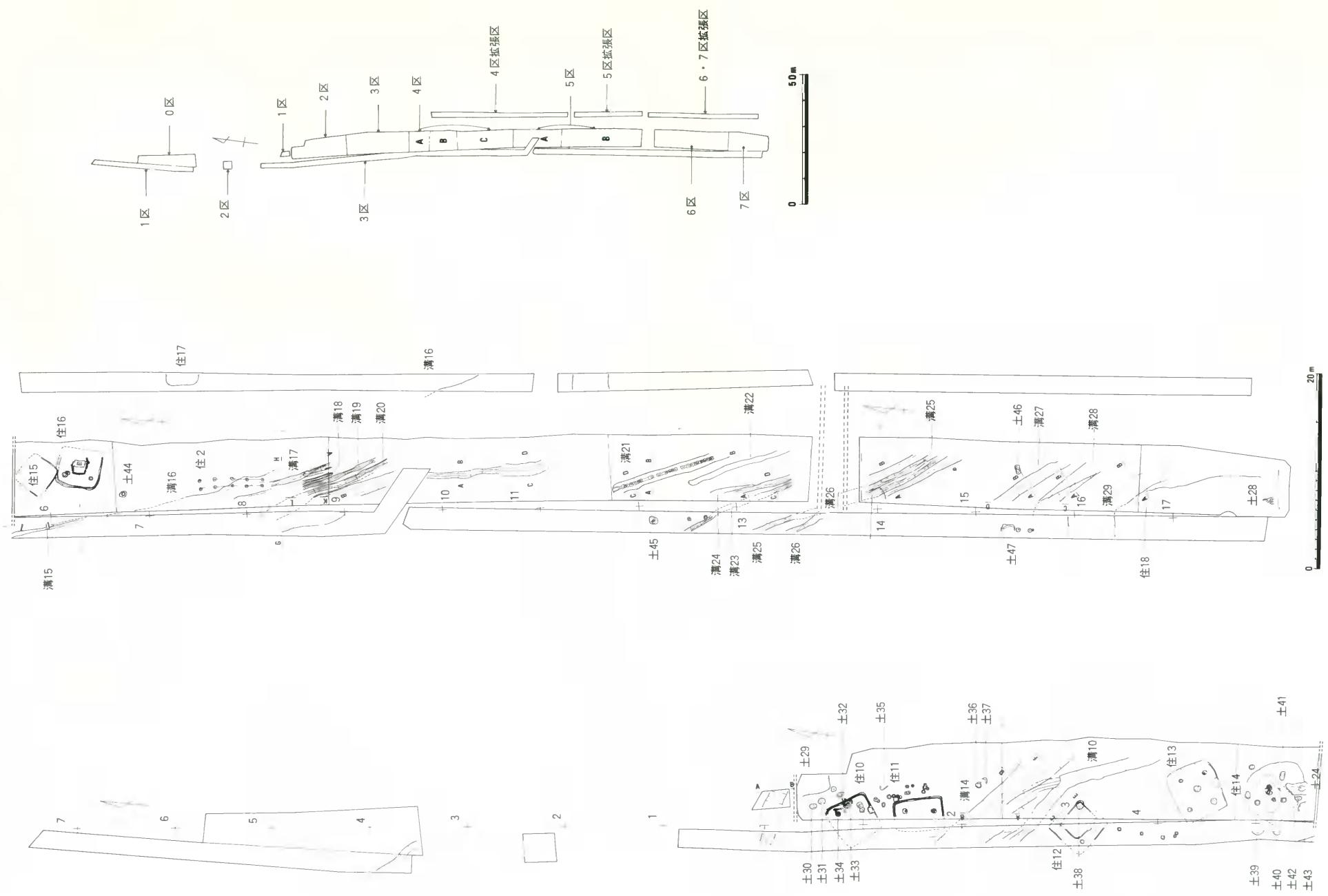
古墳時代前期は、0区から7区までのほぼ全域に竪穴住居、土壙、溝、柱穴列等が分布する。竪穴住居-12~17の6軒、土壙は16基、そのうち時期の明らかなものが、土壙-24、33、35、39の4基、他は土師器小片が出土しているのみである。小規模で性格不明の土壙が多い。溝では溝-4、7、10、14、16~20、22~29の17条、このうち溝-14、16、29等は規模が大きく、埋土中に非常に多くの土器が投げ込まれている。これら16条の溝はすべて北西方向から南東方向に南流しており、北側に所在した河川から取水を行い、下流の水田等に給水する機能を持つものと考えられる。前述の弥生時代後期前葉においても同一方向に流走しており、同じ機能を持つものであろう。

竪穴住居の6軒は前期でも同一時期ではなく、切り合い関係が認められる。竪穴住居-12、13、18が古く、竪穴住居-15が新しい、その間に竪穴住居-14、16が位置する。少くとも3時期の竪穴住居があり、道路3区、道路4A・B区を中心とする集落のまとまりが認められる。溝も竪穴住居とほぼ同様に3時期があり、前期集落の北側に溝-4、7、14、10の4条、南側に溝-16~20、22~29の13条が分かれて所在をしている。溝の性格上、一時期には限定しがたく、規模の大きい溝では1時期以上の継続が認められる。溝-7、10が古く、溝-28が新しい様相を持つ。その間に溝-16、14、29等が入り、2~3時期の継続使用が認められる。竪穴住居の存続と同時現存する状態で機能していたものと考えられる。

古墳時代中期では、竪穴住居-11の1軒、土壙-30~32、34の4基、溝-21の1条が所在する。竪穴住居-11は前期集落の位置から少し北側の道路2区に土壙とともにまとまっている。溝-21は道路5区Aの南西隅から道路5区Bの南東隅に向っており、弥生時代後期前葉、古墳時代前期の溝と同方向に流走をしている。集落が北東側の微高地上に営まれ、南流する溝が南西側を流れる土地利用が明瞭になっている。

古墳時代後期では、竪穴住居-10が一軒、溝-32の1条が確認されている。竪穴住居-10は道路2区、古墳時代中期の竪穴住居-11の北側に所在し、微高地高所部を占地している。溝-32は道路5区A・Bを南北に流走し、南東に抜けるものと考えられる。この時期も中期と同様に遺構数が非常に希薄になっており、遺構の占有形態は近いものを残している。6世紀の末頃に比定できる時期である。本遺跡の西側で発掘調査を実施した津寺遺跡の中屋調査区も古墳時代前期の竪穴住居を中心とする多くの遺構が認められ、中期、後期では遺構数が減少するという同傾向が表れている。同微高地に形成された集落の消長と共に在り方を示しており、比較的広範囲において共通意識を持って営まれた集落の占地形態がうかがえる。本遺跡南側の高田調査区では中屋調査区と異なり、中期段階の集落はみられず、後期（6世紀末~7世紀初頭）の大規模集落が形成されている。本遺跡の竪穴住居を、しいて言えば、南流する東側の微高地に位置することより、中屋・高田の両集落とも異なる三本木の集落を形成する一部の可能性もある。

（高畠）



第51図 津寺三本木遺跡古墳時代全体図 (1/400)

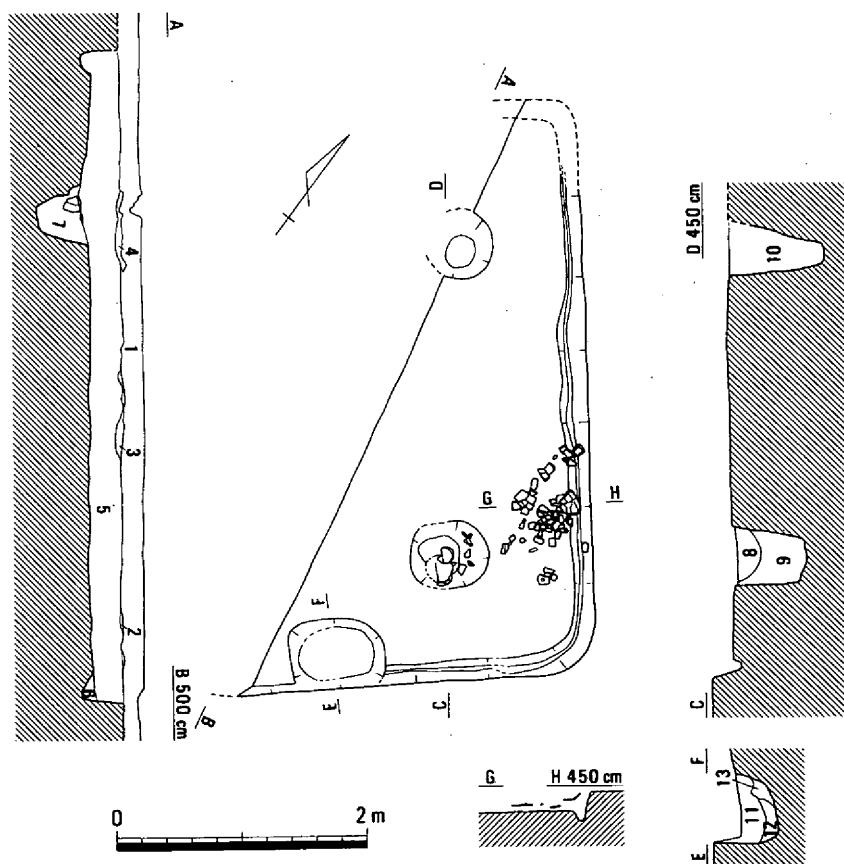
(2) 竪穴住居

竪穴住居-10 (第52・53図、図版4-1・2)

道路2区の北西部、古墳時代中期の竪穴住居-11の1.5m北側に位置する隅丸方形の竪穴住居である。西側溝3区の検出では把握できていない。おそらく、長軸は南北方向と考えられ東辺450cm、南辺(420)cm、床面海拔高432~438cmをはかる。主柱穴は4本からなると思われ、壁体溝が巡り、住居内南辺中央に方形土壙が付設されている。南北主柱穴の距離は243cm、柱穴径50~60cm、深さ63~75cm、南側の柱穴底の海拔高は367cmをはかり、柱穴内上位には焼土塊、炭が認められた。方形土壙は75×55cm、深さ35cmをはかり、茶褐色の粘質土がつまっていた。

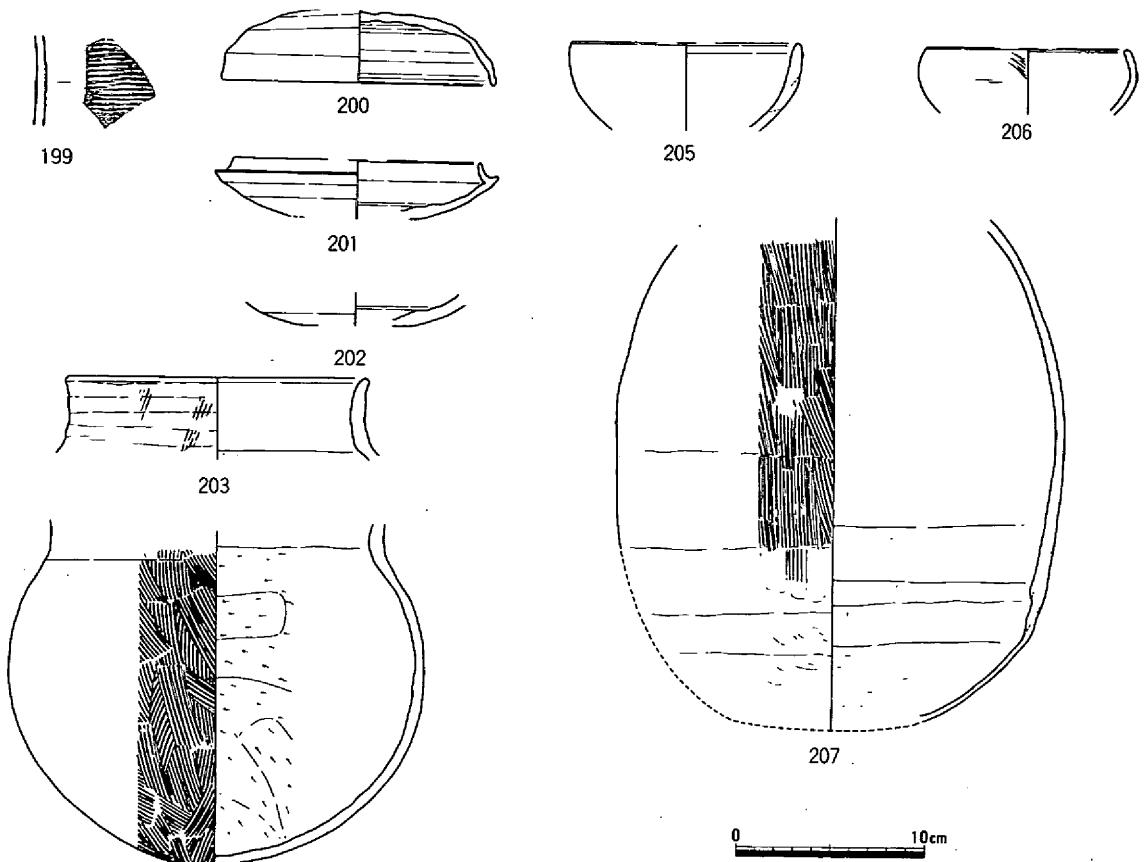
遺物は埋土中からのものが多く、特に住居東辺南から投棄された長胴甕619等の破片がまとまって出土している。本住居に伴うと考えられる遺物は、北側に所在する柱穴内の上位から出土した土師器甕203、204、須恵器杯200等があげられる。柱根の抜取り後の埋戻し段階でこれらを置いたことが考えられる。杯身201は床面下、202は方形土壙内出土である。200、201、203、204、207の土器から、本住居の廃棄は6世紀の末葉と考えられる。

(高畠)



- | | |
|---------------------|----------------------------|
| 1. 灰茶色微砂 (水田耕作土) | 9. 茶褐色砂質土 (橙色ブロック
土混じり) |
| 2. 明茶褐色微砂 | 10. 暗茶褐色粘質土 |
| 3. 明茶褐色微砂 | 11. 茶褐色粘質土 |
| 4. 明茶褐色微砂 | 12. 暗茶褐色粘質土 |
| 5. 茶褐色粘質土 (住居跡覆土) | 13. 茶褐色粘質土 |
| 6. 暗茶褐色微砂 | |
| 7. 茶褐色粘質微砂 | |
| 8. 暗灰茶褐色 (焼土・炭ブロック) | |

第52図 竪穴住居-10 (1/60)



第53図 竪穴住居-10出土遺物

竪穴住居-11（第54図、図版4）

道路2区の中央西端に位置する。平面形は隅丸方形状を呈するが、調査区の制約等で東半分のみの確認である。長軸が約520cmで、短軸は不明である。底面海拔高は428cmである。断面は、第54図の第3層である。住居内東辺を中心に床面付近から炭化材・焼土が多量に検出され、火災を受けたあとが伺われる。炭化材は住居構築材と考えられ、分析の結果、広葉樹・スダジイ・モミ属の種であることが判明した。壁体溝は調査区内全辺にわたって確認された。幅は約14~18cm、床面からの深さは3~6cmである。柱穴は2本確認されたが、4本柱と推定される。長径50cm、短径40cmである。断面形は逆台形で、柱痕も確認されている。柱痕の径は15~18cm、床面からの深さは45cmである。

208~211は須恵器である。208は甕の破片で、内側に無文の当て具が使われている。209は甕の底で、接合痕と思われるものがある。210は直口壺である。211の高杯は、住居の北東隅より北東方向約2.5mのところより出土した。212~215は土師器である。212~213は甕で、212には頸部に接合のあとが見られる。215は甕の底の一部である。2つの楕円形状の穴と1つの円形と思われる穴が認められ、当初は計5つの穴が存在したものと推定される。その他、S21~23のような蛇紋岩製の白玉も出土している。遺物及び住居の平面形から、古墳時代中期のものと考えられる。

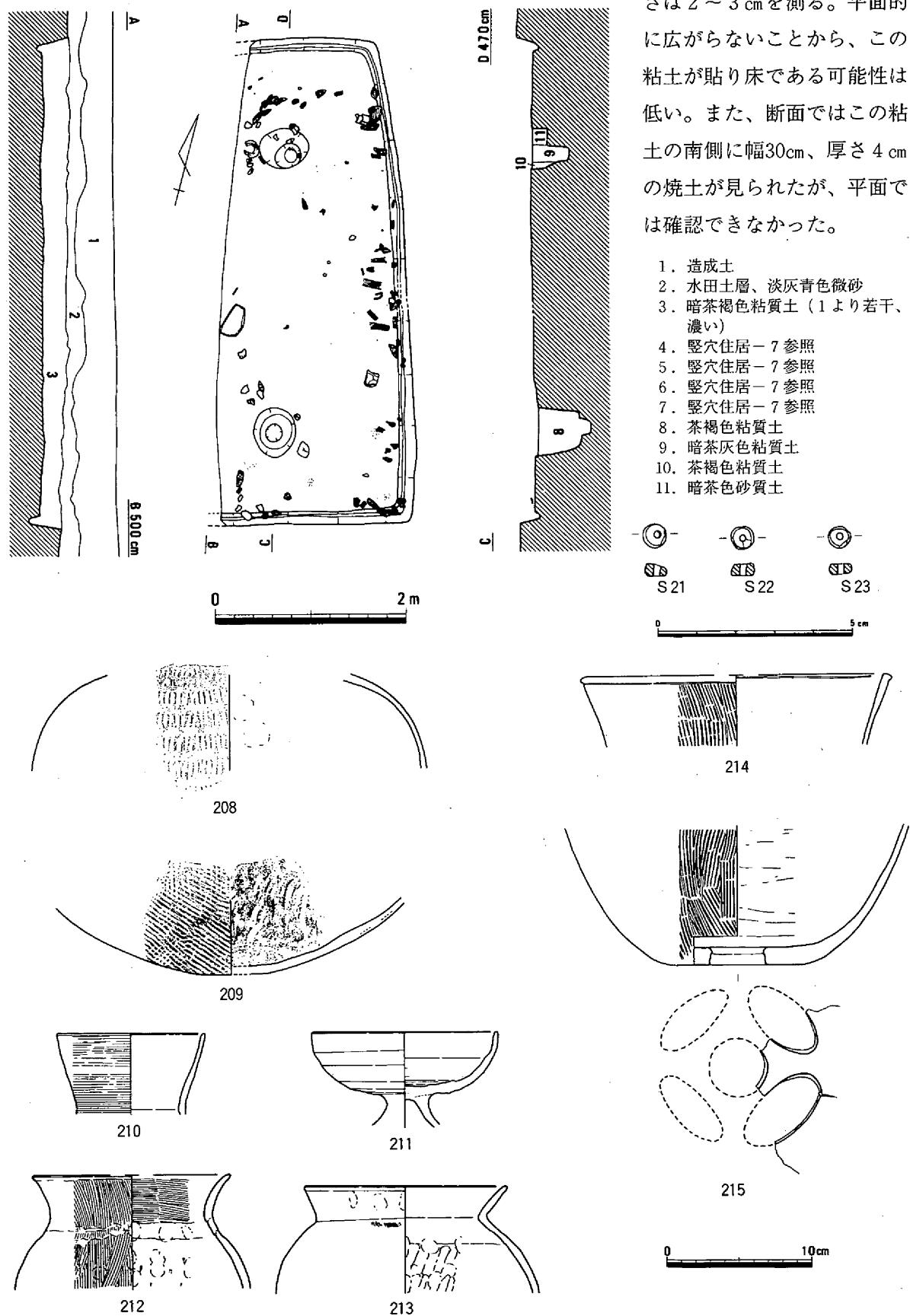
(速水)

竪穴住居-12（第55図）

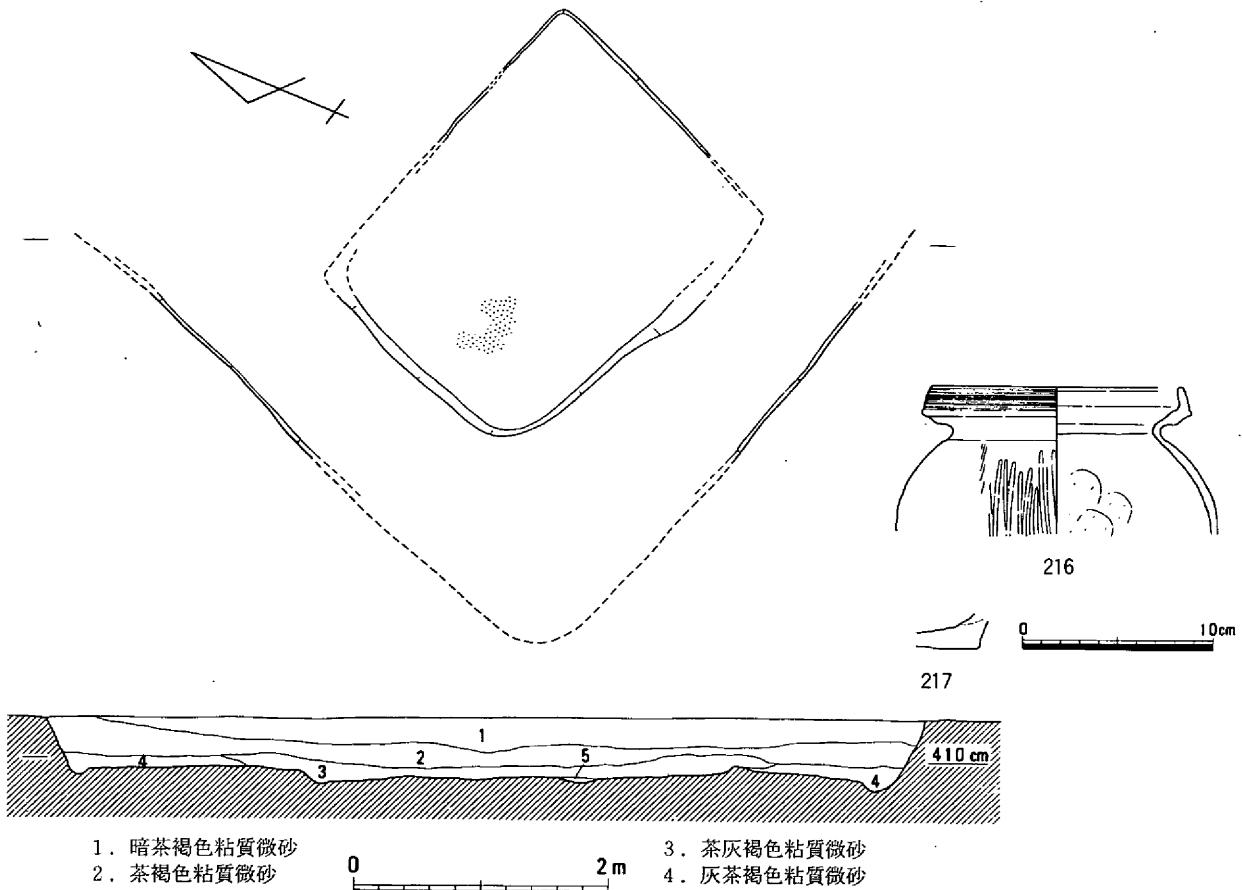
側溝3区中央から道路3区に位置する方形の住居で、ベッド状遺構を有する。規模は一辺が約4.8m、ベットより下部は約3×2.2mと推定できる。精査したが、柱穴は見つからなかった。壁体溝は平面では認識できなかった。土層は4層からなり、徐々に埋まっていった様子を示している。

住居中央部のスクリーントーンは明黄褐色に灰白色が混ざる粘土塊である。平面形は不定形で、厚

第3節 古墳時代の遺構・遺物



第54図 壺穴住居-11 (1/60)・出土遺物



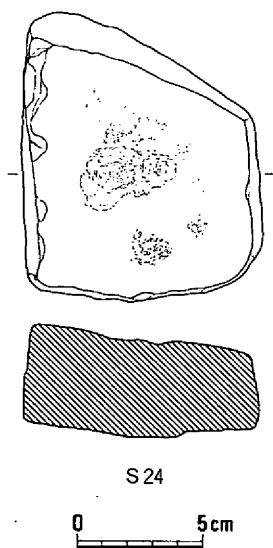
第55図 壺穴住居-12 (1/60)・出土遺物

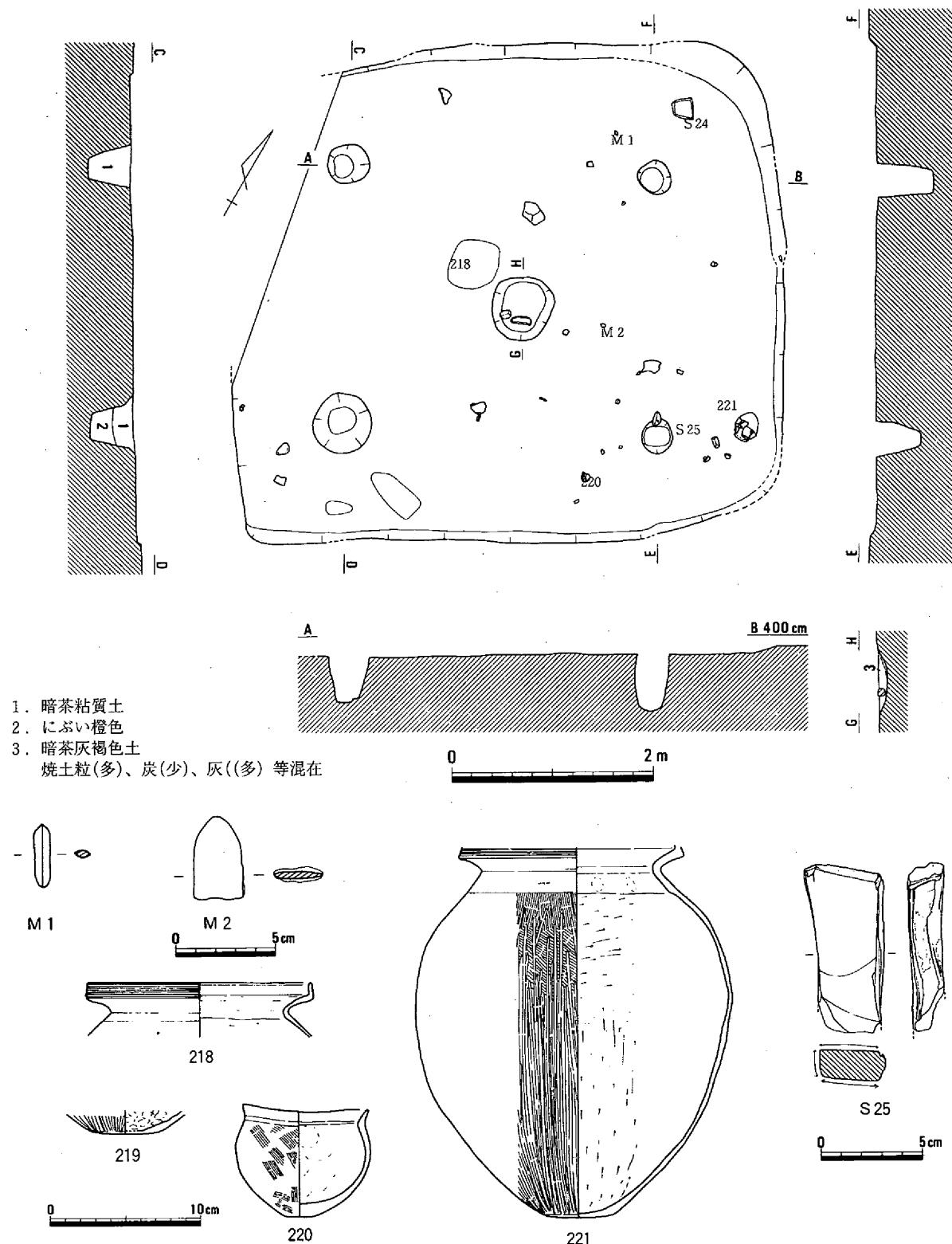
遺物は土器がある。216は壺で、口径13.0cmを計る。口縁端面は柳描沈線である。217は壺底部であろうか。遺物の出土は少量であるが、これら遺物と住居の形態からこの住居の時期は古・前・Ⅰ期であるといえる。
(氏平)

豎穴住居-13 (第56・57図、図版5-1)

道路3区の南側、古墳時代前期の豎穴住居-14の1.5m北側に位置する隅丸方形の豎穴住居である。長軸560cm、短軸495cm、床面海拔高378~384cmをはかり、東面に少し長い。主柱穴4本、中央穴1が付設されており、遺物が分布する状況である。主柱穴間は北辺305cm、東辺243cm、南辺312cm、西辺256cm、中央穴は62×61cm、深さ8.0cm、南東部が被熱している。主柱穴と中央穴間の床面は非常に硬い状況を呈する。遺物は床面から壺218、220、221、M1、2、C24、25が出土している。M1は長さ3.65cm、重量3.3gの銅鏡である。図面が天地逆の可能性もある。M2は長さ4.1cm重さ12.30gの鉄鏡である。S24は花崗岩製の凹石、S25は流紋岩製の砥石である。218、219、221の壺の口縁屈曲部の鋭さ、底部の平底の残存等の特徴から、本住居の廃絶は古墳時代前期、古・前・Ⅰの古相と考えられる。

(高畑) 第56図 豊穴住居-13出土遺物





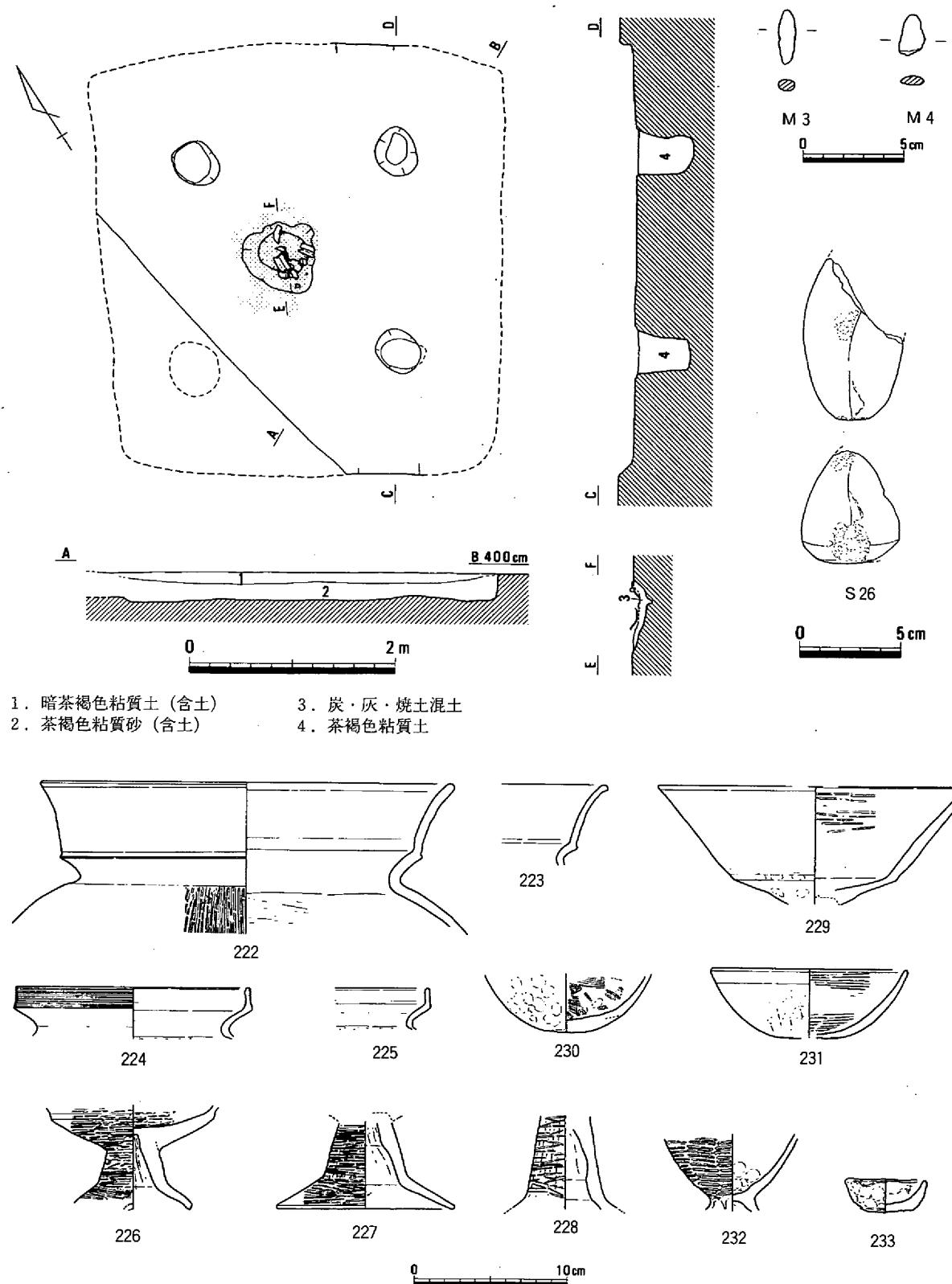
第57図 墓穴住居-13 (1/60)・出土遺物

墓穴住居-14 (第58図、図版5-2)

道路4区Aの中央、古墳時代前期の墓穴住居-13の南側に位置する。検出に困難を極めたが、一応平面形態は方形と判断したものである。南北に長い方形であり、長軸425cm、短軸400cm、床面海拔高363~367cmをはかる。主柱穴4本、中央穴1からなり、北辺主柱穴間の距離は195cm、東辺200cm、中央穴は70×70cm、深さ14cmをはかる不整形な土壙である。中央穴内に鉢222が炭、灰、焼土塊とともに

に入っており、南東部縁が被熱している。

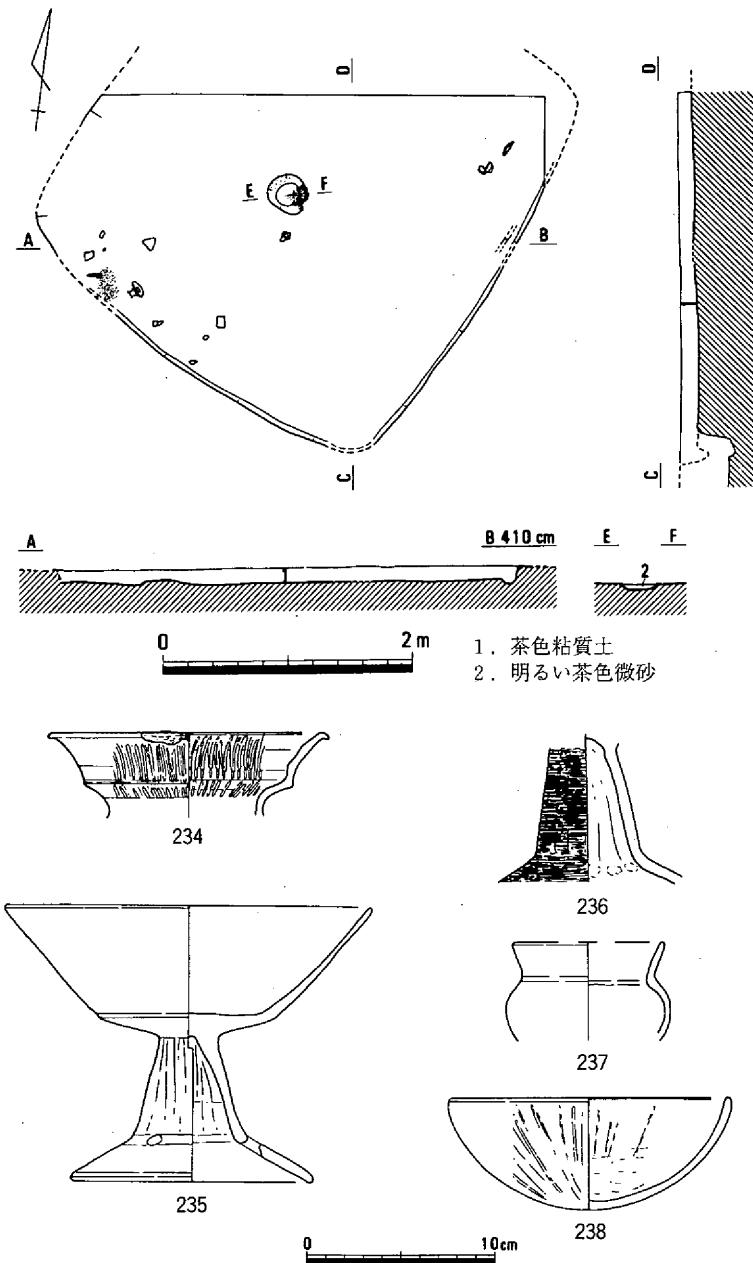
遺物はM 3、4の鉄片、S 26は安山岩製の敲石、222～233の土器片が出土している。甕224、高杯226～229等の特徴から古墳時代前期、古・前・Iの中相に比定が可能である。(高畠)



第58図 穫穴住居-14 (1/60) ・出土遺物

豊穴住居-15（第59図、図版5-3）

道路4区Bの北側中央、古墳時代前期の豊穴住居-16を切って北側に位置する。南北に少し長い豊穴住居であり、南北(360)cm、東西340cm、床面海拔高363cmをはかる。床面には32×29cm深さ5.0cm



第59図 豊穴住居-15(1/60)・出土遺物

柱痕は確認されていない。中央穴は長径45cm、短径30cm、深さ約40cm、底面海拔高約320cmである。断面は5層からなり、どの層も灰が多く含まれている。尚、中央穴のまわりを取り囲むように、溝状の遺構が巡っているのが確認された。幅は約8~12cm、深さは約3cmである。

遺物は土師器がほとんどである。このうち、239は壺か甕のどちらかであると思われるが、器種は明確ではない。口縁部に凹線のヨコナデが施されている。240~252は甕で、それぞれ6条~10条の櫛描き沈線が口縁部に施されている。248は高杯、249、250は鉢、251は器台、252は製塩土器である。遺物および住居の平面形から、古墳時代初頭のものと考えられる。

(速水)

の円形の中央穴が付設されており、西側に炭分布、東側の縁が被熱を受けている。住居の南隅130×130cmの床面範囲が硬くしまった状況を呈する。

遺物は234、236、238が床面に近い埋土中からであり、235、237が床面からである。壺234は口縁部内外面に粘土紐を貼り付け、破損部の補修をしている。高杯235は口径19.2cm、脚底径12.4cm、器高14.45cmをはかる。住居間の切り合い関係、土器の特徴等から古・前・Iの新相に比定できる。

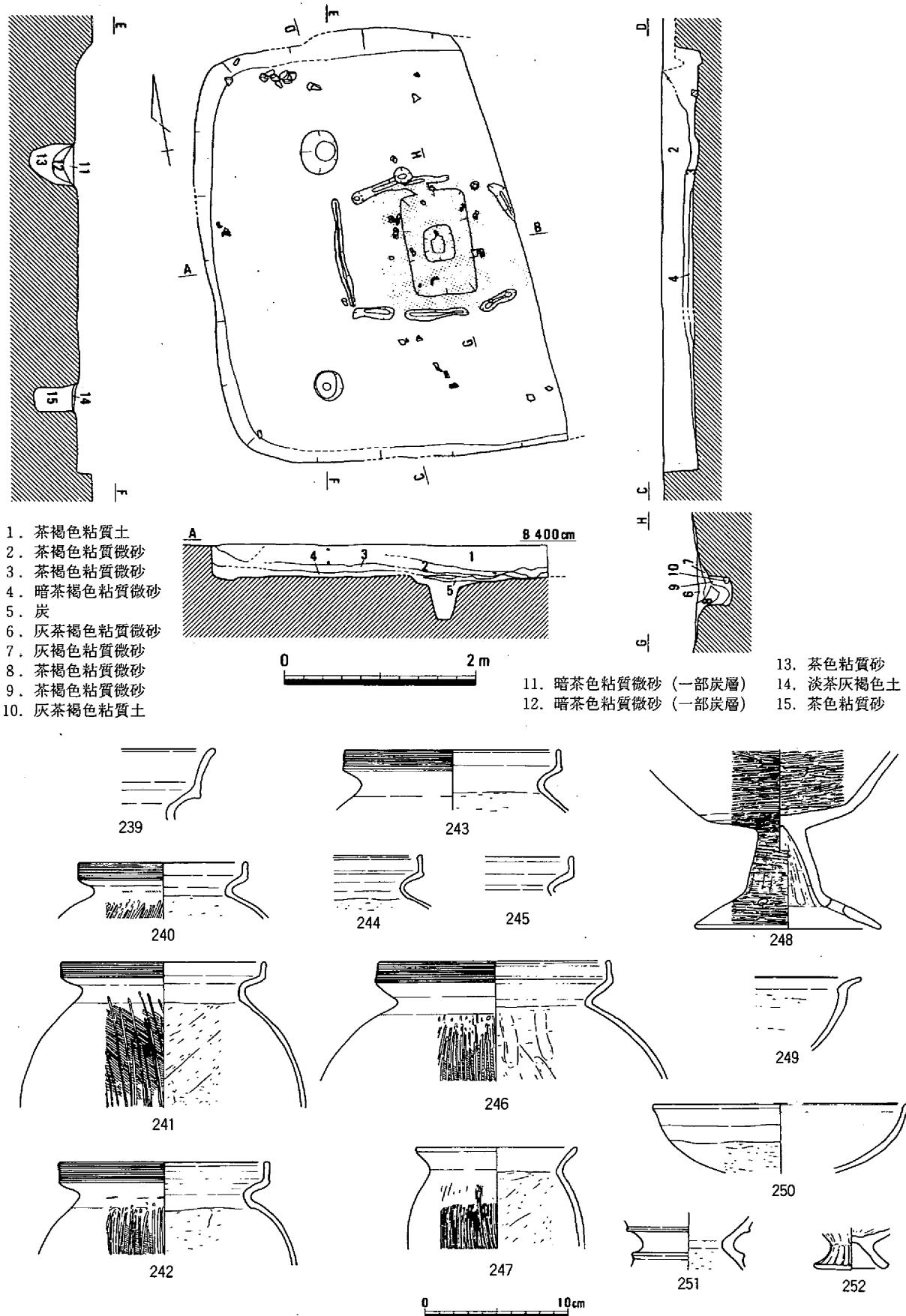
(高畠)

豊穴住居-16

(第60図、図版5-3)

道路4区・Bの中央よりやや南東に位置する。隅丸方形を呈するが、溝-73の削平により、東側を3分の1ほど失っている。底面海拔高は約360cmである。断面は5層からなり、床面近くの第5層には炭が中央穴付近を中心に多く検出された。柱穴は調査区内で2本確認されているが、4本柱と考えられる。

断面は2~3層よりなるが、



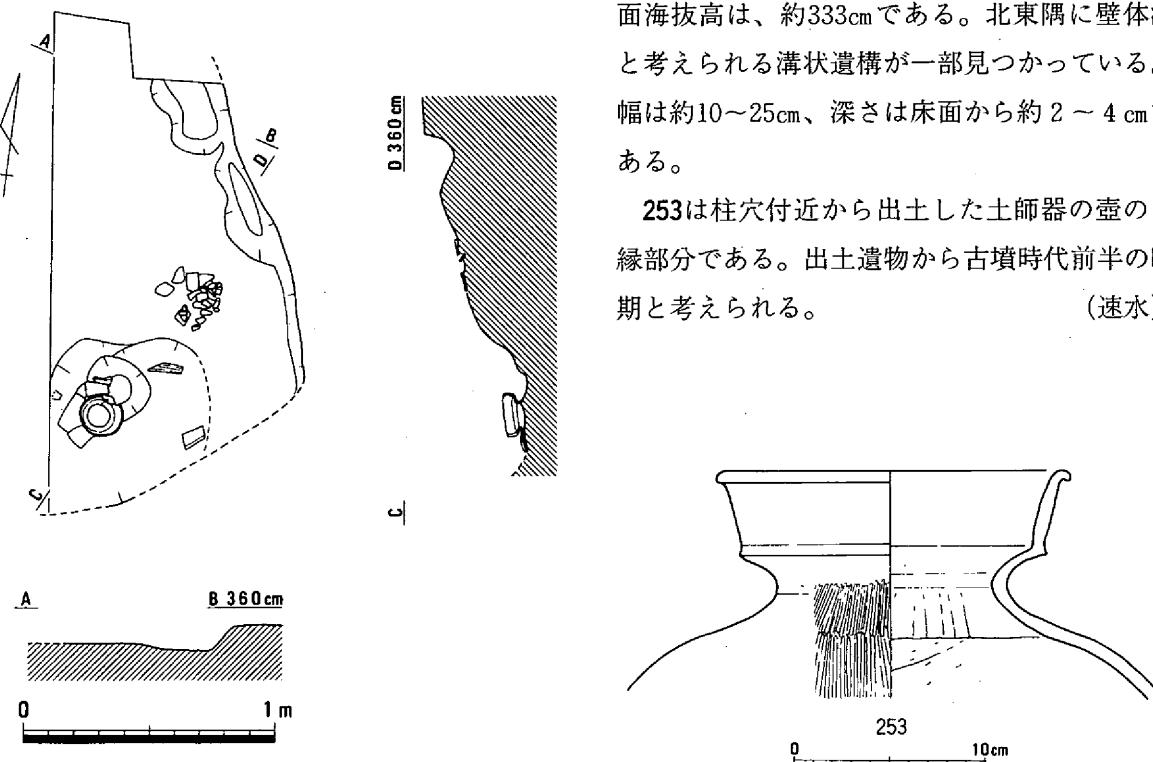
第60図 積穴住居-16 (1/60) · 出土遺物

豊穴住居-18（第61図）

道路7区の北西隅に位置する。調査区の制約等により、明瞭な平面形は認められなかった。柱穴と考えられる穴も1つ見つかっているが、柱痕は確認されず、柱構造も明らかではない。調査区内の底

面海拔高は、約333cmである。北東隅に壁体溝と考えられる溝状遺構が一部見つかっている。幅は約10~25cm、深さは床面から約2~4cmである。

253は柱穴付近から出土した土師器の壺の口縁部分である。出土遺物から古墳時代前半の時期と考えられる。
(速水)



第61図 豊穴住居-18 (1/30)・出土遺物

(3) 柱穴列

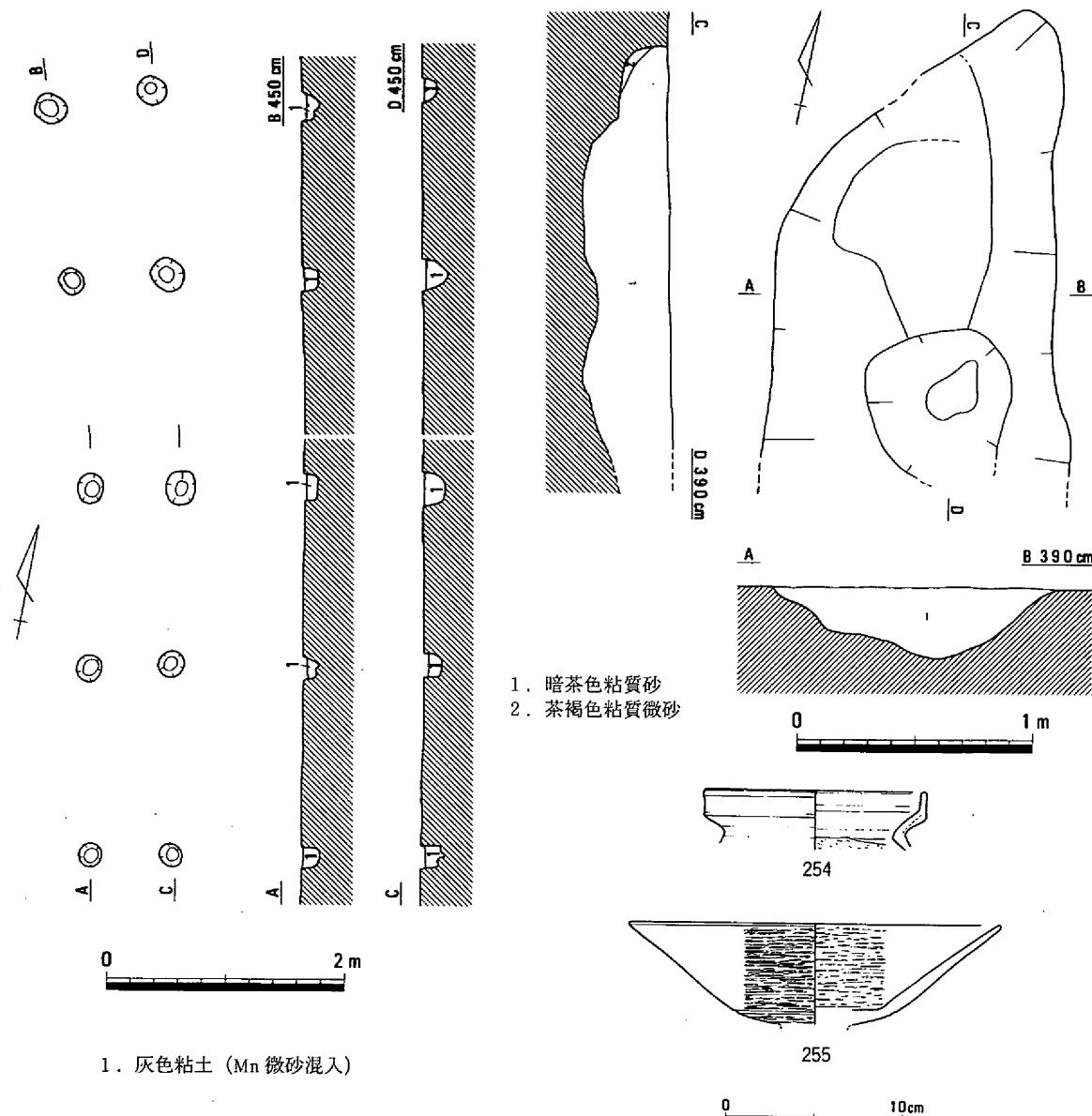
柱穴列-2（第62図）

道路4区Cの中央、南東に流れる溝-16の上部に位置し、南北に長く2列からなる柱穴列である。東側の5穴の延長が650cm、西側の5穴の延長が640cmをはかり、東西間は60~70cmで北側の柱穴間が少し広い。柱穴列西側の柱間は147~177cm、柱穴列東側の柱間は148~180cmをはかり、対向する柱間に同数値はみられないが、2~10cmの差で近い数値を示している。北側の4穴の方向と南側6穴の方向が少し異り、北側の4穴が少し西側に張っている。規模、形状、埋土等から同時に存在していたものと考えられる。柱穴埋土は灰色粘土の1層であり、埋土中に若干の土器小片がみられた。古墳時代前期の甕片に混在して早島式土器の細片が存在したことから、中世の柱穴列と考えたい。
(高畠)

(4) 土壙

土壙-24（第63図）

道路4区Aの南側中央、豊穴住居-14の南東辺に接して所在する。弥生時代後期前葉の溝-11の流走方向上に位置するが、北側には上位からの掘り方が認められ、上部長軸は200+α cm、幅130cm、深さ40cmをはかる土壙であろう。底面海拔高は343~350cmをはかる。遺物は埋土中から出土をしており、甕254、高杯255が認められた。精製高杯であり、古・前・Iの範中におさまる。
(高畠)



第62図 柱穴列-2 (1/60)

第63図 土壙-24 (1/30)・出土遺物

土壙-26～28, 30, 31, 33, 35～37 (第64図)

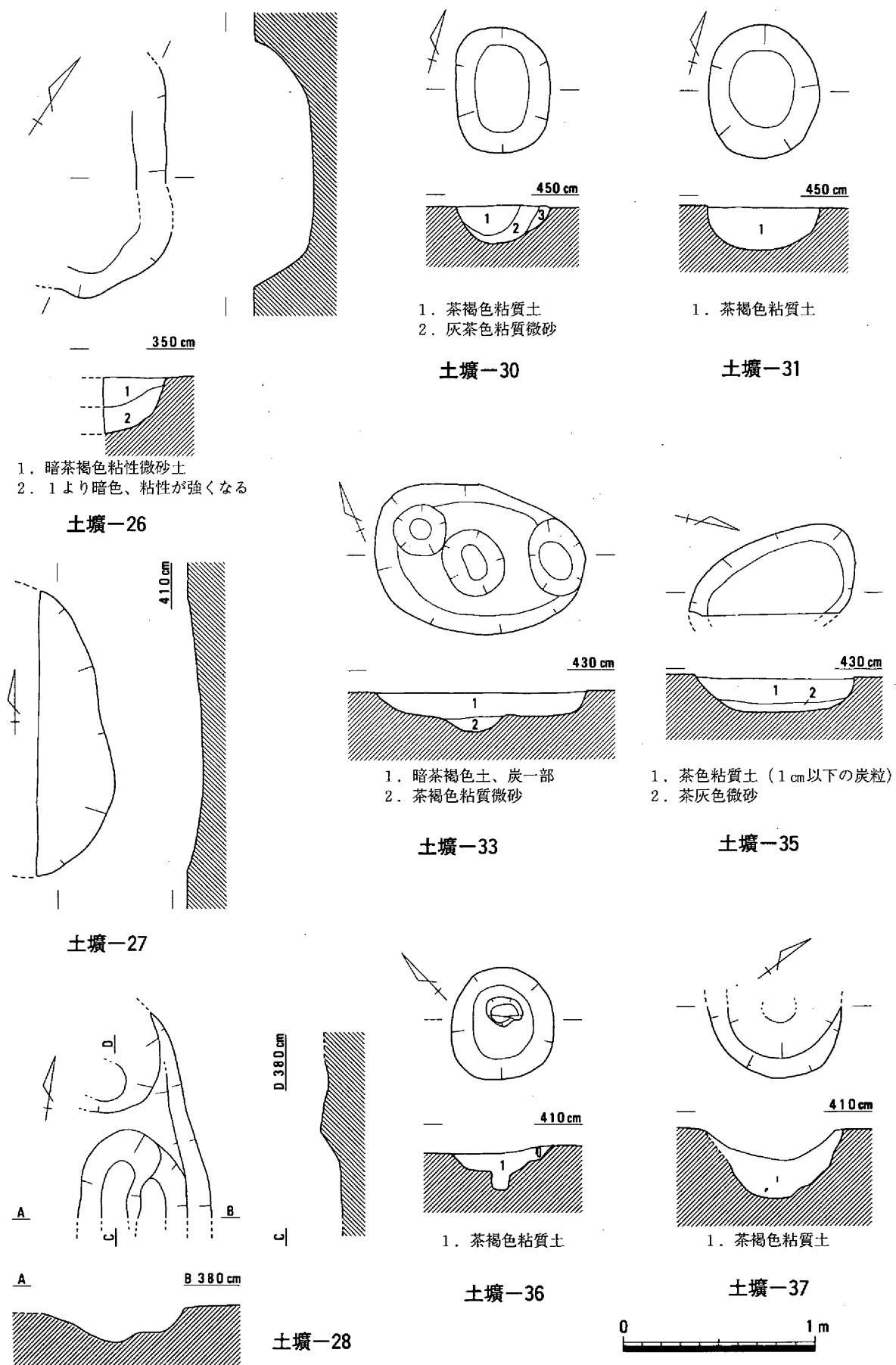
9基の土壙は埋土中に古墳時代前期、中期の土器小片を含むものと、古墳時代の遺構検出面において同レベルで確認できたものである。

土壙の分布は道路2区の全体、側溝4区中央、道路6区西側中央に分布しており、特に平面形、断面形、方向等の規則性は認められず、土壙墓、柱穴の可能性は無いものと考えられる。

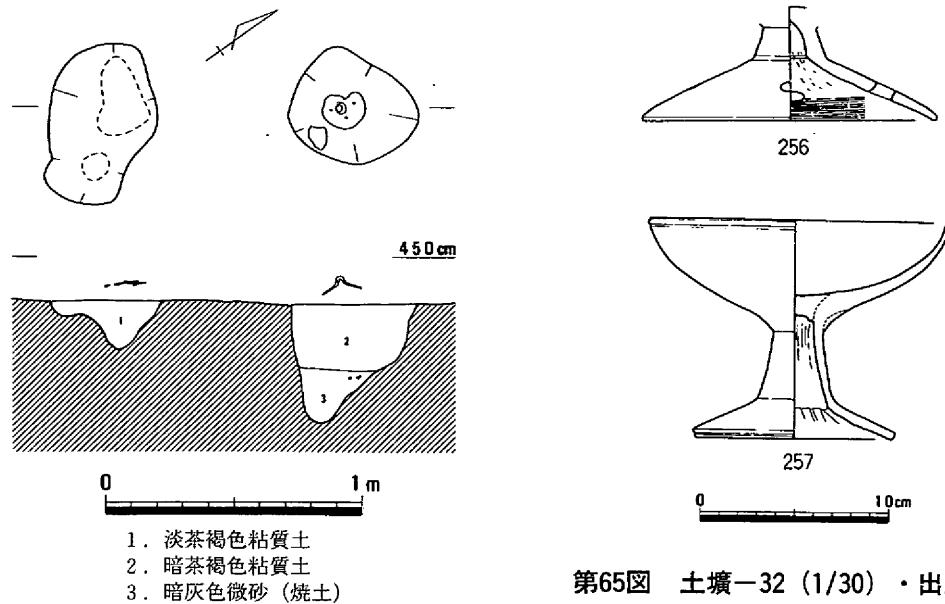
平面形態は円形、橢円形、不整円形の種々がみられ、小さい土壙は58×53cm、深さ20cm、大きい土壙は111×70cm、深さ20cmをはかる。土壙-26～28は大形であるが計測不能である。

断面形は皿形、椀形の2種類が認められ、埋土は茶色、茶褐色の粘質土が多く、炭の粒を含むものもみられ、1～2層で構成されている。土壙-26～28には遺物は無く、土壙-30, 33, 35～37に古墳時代の土師器の小片、土壙-33, 35では20点ほどの小片が含まれており、土壙-31では古墳時代中期の須恵器片が出土している。

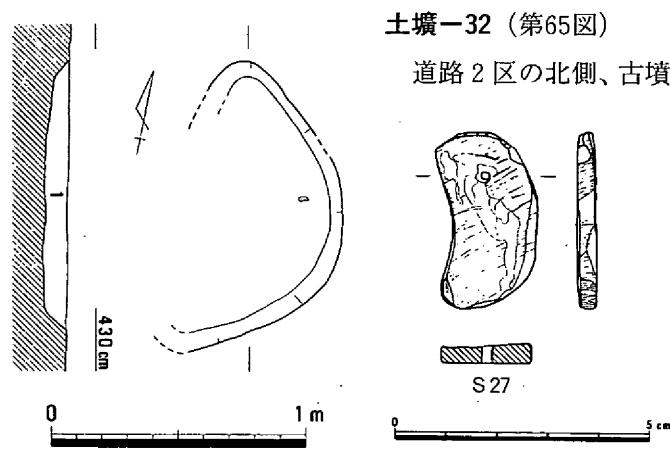
(高畠)



第64図 土壌-26~28, 30, 31, 33, 35~37 (1/30)



第65図 土壌-32 (1/30)・出土遺物



第66図 土壌-34 (1/30)・出土遺物

土壌-34 (第66図)

道路2区の北側、古墳時代の竪穴住居-10の柱穴により北西部を切られている。土壌は115×70cm以上、深さ7cm、床面海拔高410cmをはかる。遺物は長さ3.5cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm、重量5.36gの蛇紋岩製の勾玉S 27が出土している。竪穴住居-10を造る時点で削半を受けた土壌と考えられ、199、205、206等の土器から古墳時代中期に比定できる。(高畠)

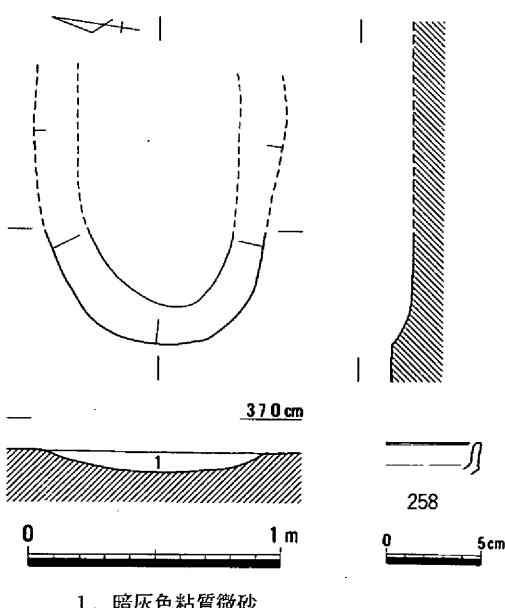
土壌-39 (第67図)

側溝3区中央に位置し、南側に土壌-40が存在する。東側は調査区外で、確認できなかった。平面はだ円形で、断面は皿状を呈する。遺物は少ないが、出土した甕口縁部から、古・前・Ⅰ期に相当する遺構であろう。

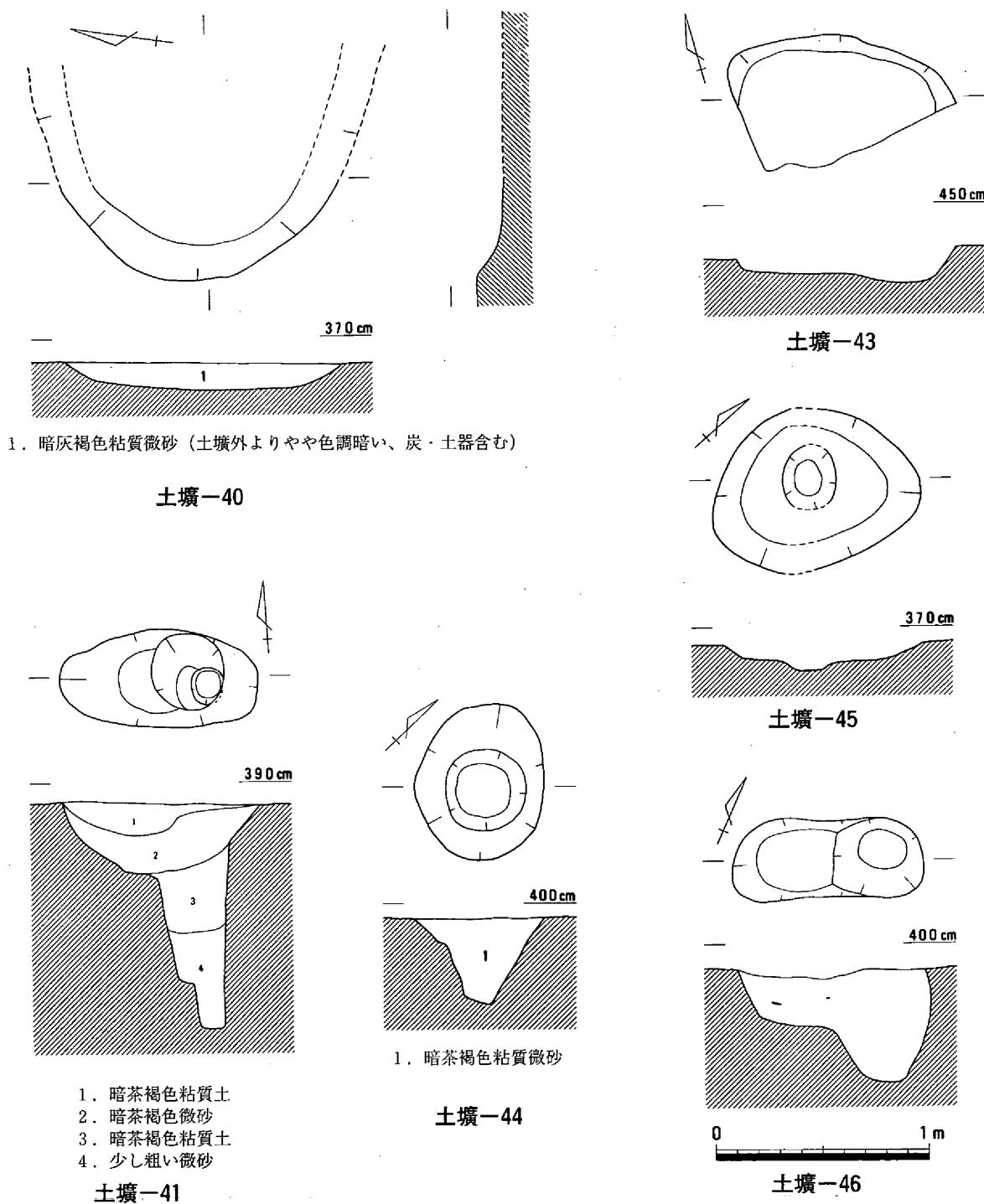
(氏平)

不整形な小土壌であり、柱痕跡は明瞭ではないが柱穴の可能性も考えられる形状である。高杯256は北側土壌上面から出土しており、古・前・Ⅰの古相と考えられる。高杯257は南側の土壌上位よりの出土であり、口径15.6cm、底径10.25cm、器高11.5cmをはかる。形態的な特徴から古墳時代中期の時期に比定できる土師器の高杯である。

(高畠)



第67図 土壌-39 (1/30)・出土遺物



第68図 土壙-40, 41, 43~46 (1/30)

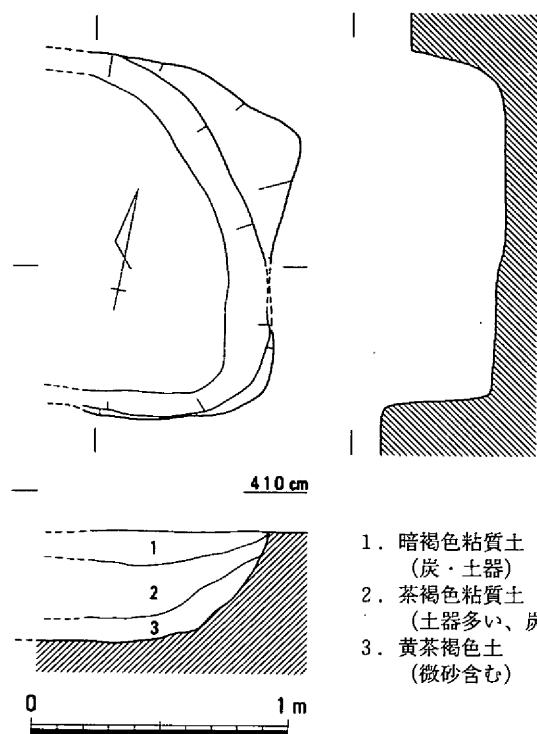
土壙-40, 41, 43~46 (第68図)

土壙-41, 44, 46が柱穴と柱穴の可能性が強いものである。他の土壙は前述した土壙-30~37とはほぼ同様のものであり、平面形、断面形、埋土等は基本的に異なるものではない。土壙-40~43は4区A、土壙-44は4区C、土壙-45は側道4区、土壙-46は6区中央に位置する。土壙内は炭粒、小土器片を含んでおり、土壙-44, 46は古墳時代前期の土器が入っていた。他の土壙も含め、古墳時代の幅の中で納まるものと考えられる。

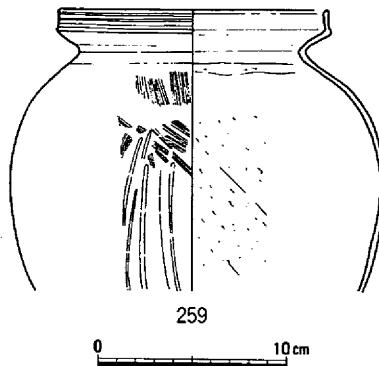
(高畠)

土壤-47 (第69図)

側溝4区の南側、溝-27、28間に位置する土壤である。西側が用地外であり、不明な点が多いが、南北140cm、東西85+ α cm、深さ44cmをはかる。底面海拔高350cmにて断面形は椀形を呈しており、埋土は3層からなる。第1層中に炭粒、小土器片、第2層の茶褐色粘質土中に少し大き目の土器片がみられた。



遺物は全体で半分弱を残す甕259が実測可能であった。口径14.0cm、残位高15.0、銅部最大径19.7cmをはかる甕である。いわゆる吉備型の甕であり、口縁立上がり部に櫛描き沈線が7条、胴部は比較的丸みを持ち、器外面はハケメ上に縦位のヘラミガキ、内面は斜・横位のヘラケズリである。古・前・Iの中相であろう。
(高畠)



第69図 土壌-47 (1/30) ・出土遺物

(5) 溝

溝-4 (第70図)

側溝1区南端と道路0区南端に位置し、おそらく北西から南東方向へ流れる溝である。この溝の最も古い段階は弥・後・Iにさかのぼる。古墳時代では、弥生時代の頃で述べたとおり検出面に近い高さで土器溜まりが存在した。古墳時代にこの溝が溝として機能していたのか、あるいはたわみとなつて土器などの捨て場になっていたのかは判断しがたいが、いずれにしても古墳時代にこの溝が消滅したことは間違いないだろう。また、本来は溝-14や溝-16のように土器などが多く捨てられていた可能性も指摘できるが、調査範囲の中ではとらえることができなかった。溝-16検出時に土器溜まりが見られたことから、ほぼ同じ検出面、時期の溝-4が削平されているとは考えにくい。

遺物は、ほとんど土器である。260は口径18.8cmを計る壺である。261は最大径23.5cm、底径7.6cmを計る壺である。262はおそらく高杯で、口径20.3cm、丹塗りである。263はほぼ完形に復元できる甕で、口径14.8cm、最大径22.2cm、底径は4.8cm、器高22.5cmを計る。264の高杯は精良な胎土を使っている。265の高杯は底径11.8cmである。266は器台で口径9.0cm、底径は10.4cm、器高11.3cmを計る。

遺物から、最終的にこの溝が消滅するまで堆積が進んだのは古・前・Iの中相であると考えられ

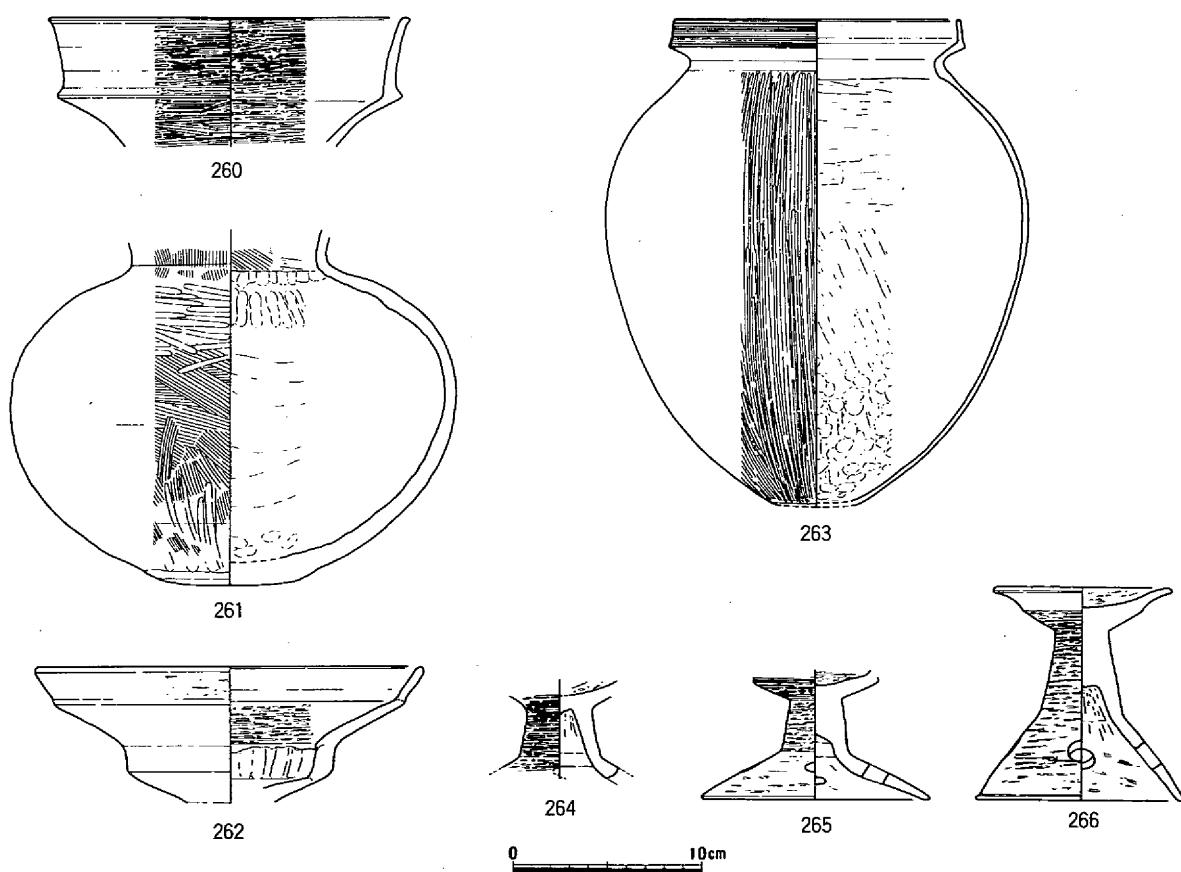
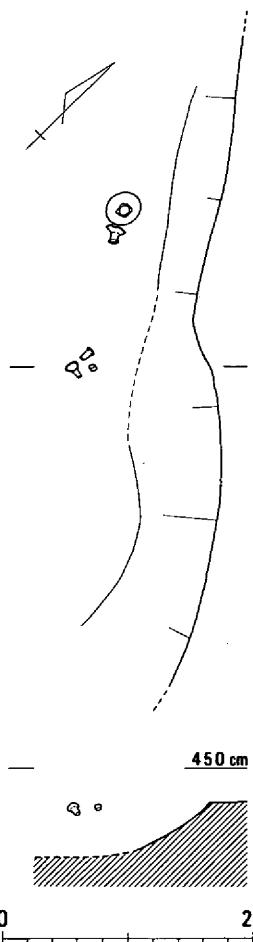
(氏平)

溝一7 (第71図)

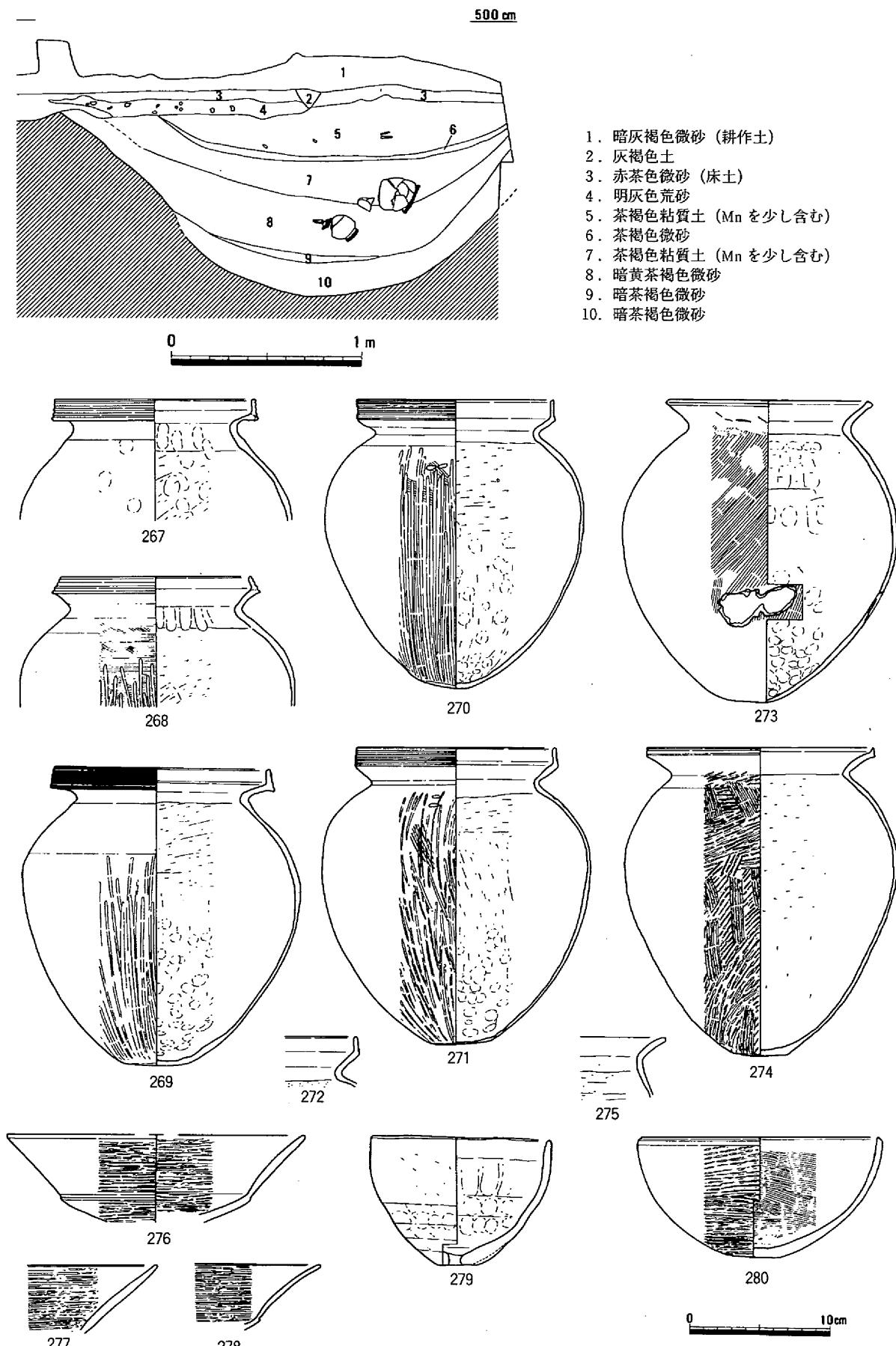
側溝3区北側から道路1区にかけて東西方向へ流れており、津寺遺跡の大微高地の北端付近と考えられる。幅は約175cmで、検出面からの深さは約73cmである。底面海拔高は、約350cmをはかる。断面形は南側の肩を欠いているが、皿型を呈していると考えられ、第71図の第5層～第9層の5層からなる。このうち、第5層には、少量の土器の破片が含まれ、第7、8層からは、完形に近い土師器を中心とする多量の土器が出土した。9層の下辺が底にあたり、鉄分を含む。

遺物は、267～275が土師器の甕である。このうち、267、268の口縁部には4条の凹線文、269～271の口縁部には9～10条の櫛描き沈線が施されている。273には表面にふきこぼれの跡がある。276～278は土師器の高杯である。279は土師器の甕である。内側の底の部分に、焼きむらとみられる黒斑の跡がある。底の穴は焼成前に穿孔したものと思われる。280は土師器の鉢である。弥生土器も一部見られるが、土師器の型式から古・前・Iの古相のものと考えられる。

(速水)



第70図 溝一4 (1/60)・出土遺物

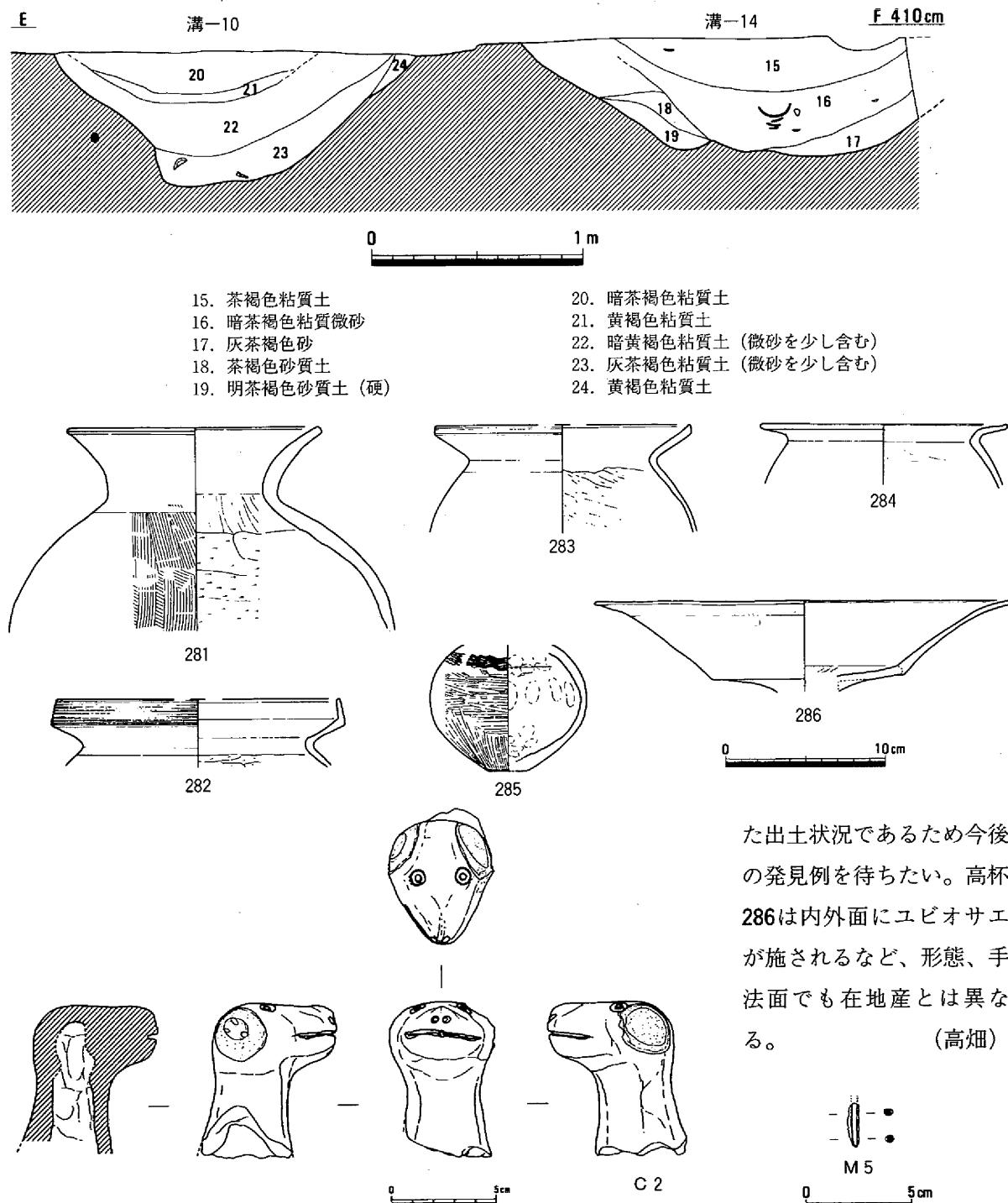


第71図 溝一7 (1/30)・出土遺物

溝-10（第72図、巻頭図版2-1、図版6-1・2）

側溝3区中央から道路3南に向って流走する溝である。北側にはほぼ同方向を流れる古・前・Iの溝-14が所在する。溝-10の上端は検出面にて120~160cm、深さは50~54cmをはかり、ほぼ平坦ではあるが、底面の北側海拔高は351.5cm、中央が342.6cm、南側で340cmである。下流部が上流部より少し高い格好となる。

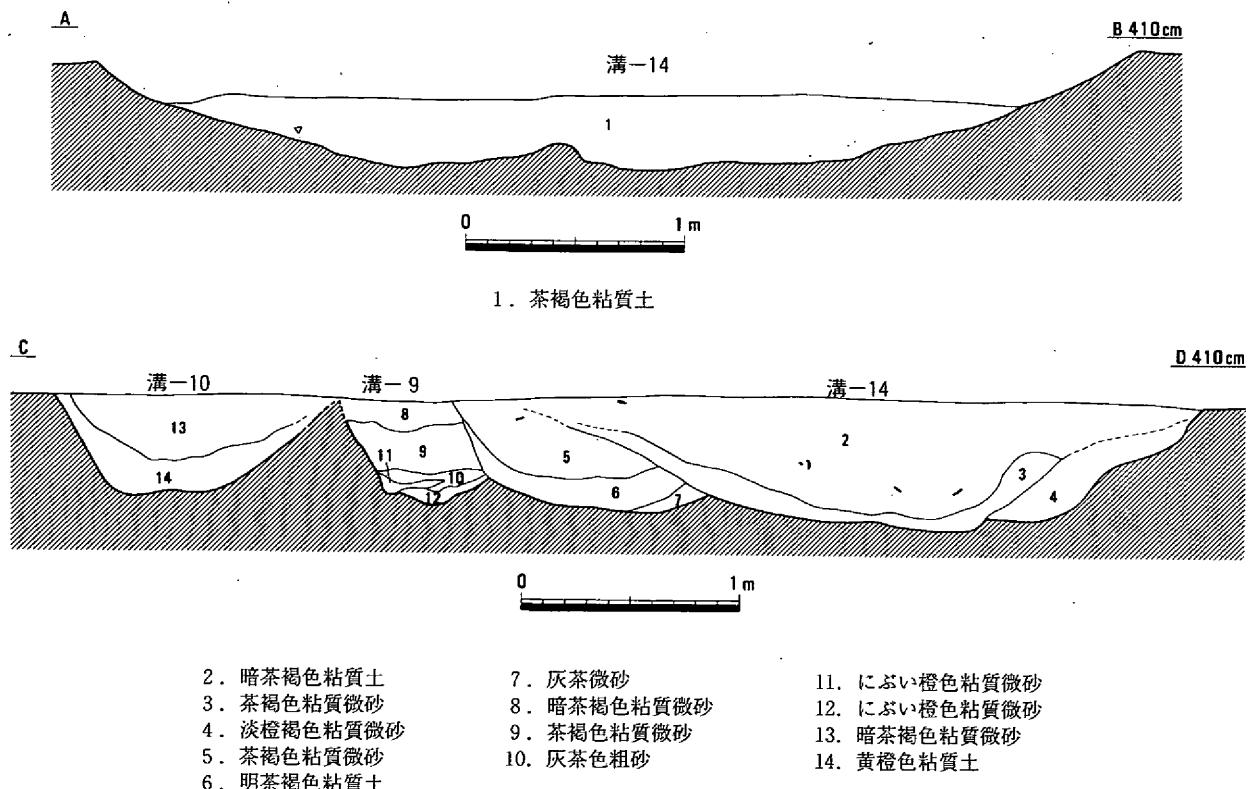
遺物は弥・後・I、古・前・Iの土器が混在した出土状況である。C 2の動物形土製品は溝-10の東側屈曲部、第24層上面付近で出土しており、281~286の土器に伴う可能性もある。しかし、遊離し



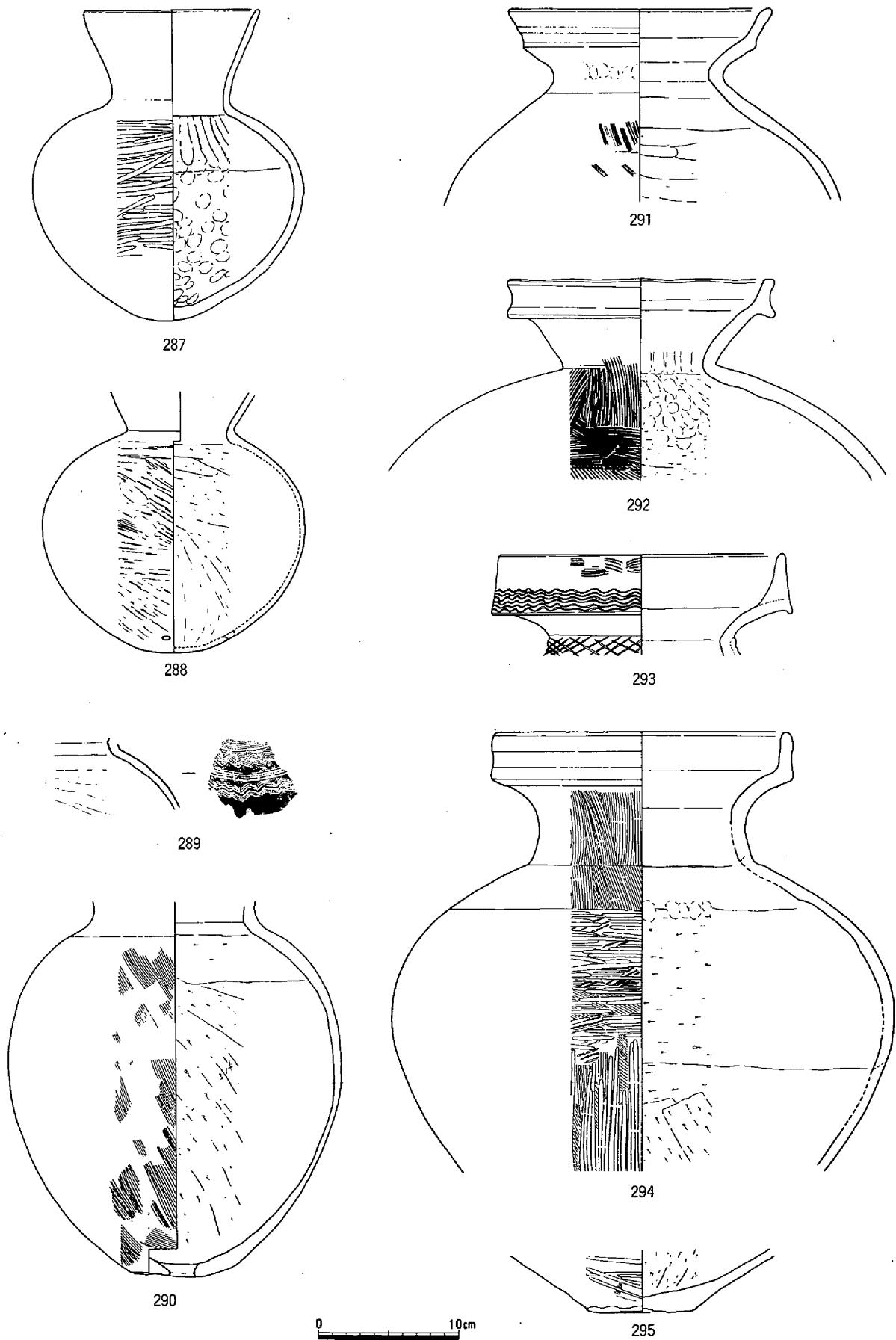
第72図 溝-10 (1/30) ・出土遺物

溝-14（第73~81図、巻頭図版1・2-3、図版6-1・2、図版16~20）

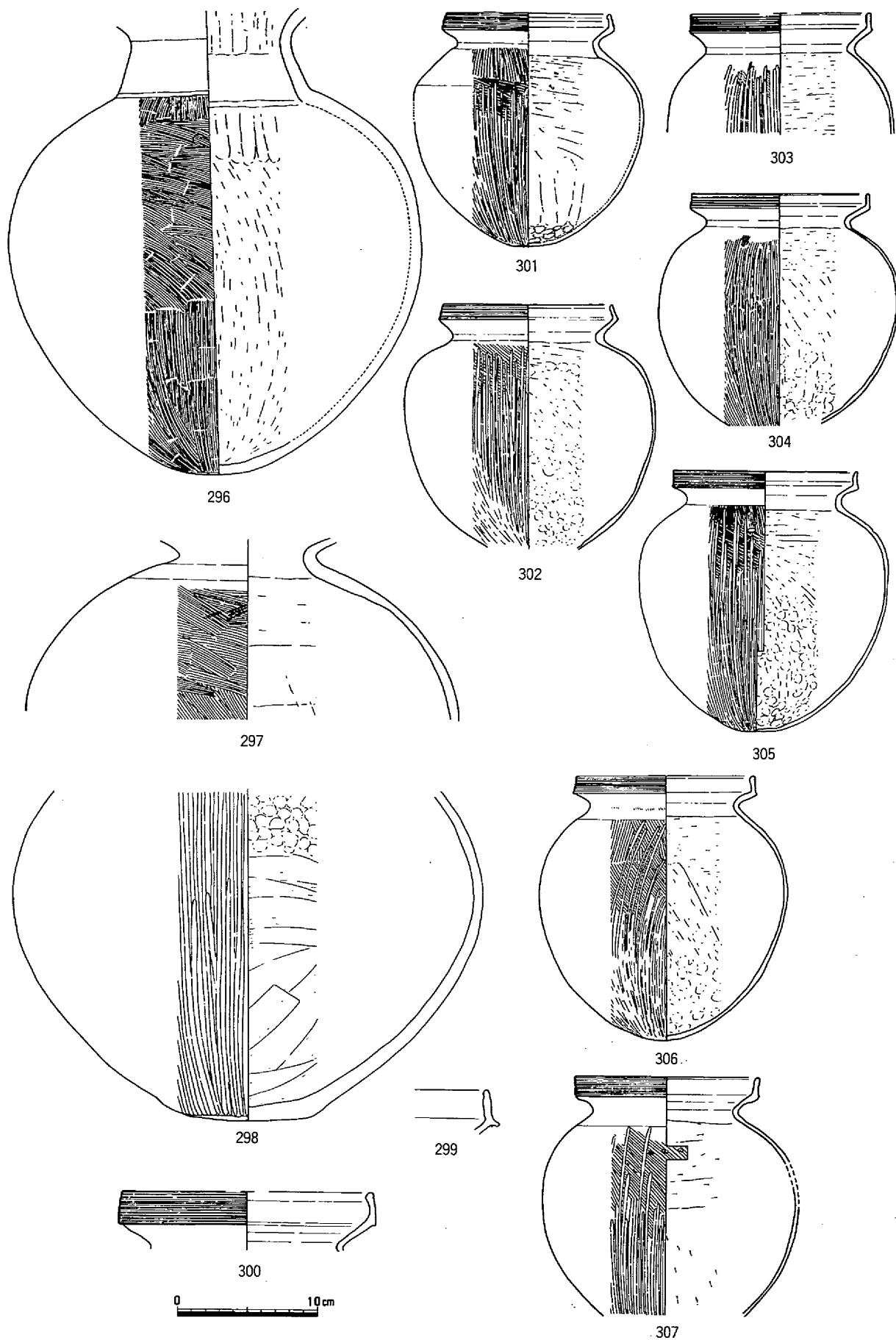
側溝3区北側から道路3区の南東に向かい、溝-10と併走する幅の広い大溝である。検出上面での溝の幅は300~350cm、深さ60cm、北西側断面（A・B）の底部海拔高は346cm、中央部断面（C・D）の底部海拔高は343cmをはかる。溝-14の底面は溝-10より平坦であり、下流が少し低い状況である。断面形は椀形を呈し、底より緩やかな角度で上端にいたる。溝-14は古い溝を切る状態で掘削をされているが、以前の溝をまったく破壊してしまっている部分（A・B）と古い溝が残る部分（C・D）とがみられる。埋土は第3、4層等の下層において自然堆積の状況を留めており、第2層の下位付近から完形に近い土器が出土はじめ、遺物の少ない間層において、再びまとまって投棄された完形に近い土器が多く出土する。その範囲は南北に少し長く、280×200cmに分布している。それらの土器の内部に他の土器の破片が入っているような場合もあり、土の詰まる間隙があまりないほど密着した出土状況である。そこからの出土遺物は壺287~299の13点、甕300~331の32点、高杯332~339の8点、鉢340~346の7点、器台348~350の3点、製塩土器347の1点、計64点である。このうち、器形・調整・胎土等の形状が少し在地産と異なる感じを受けた壺289、292、293、299と在地の産と考えている甕300の胎土分析を依頼した。まず、讃岐・山陰・畿内・東海・吉備南部の領域設定に分析数値を照合すると289は吉備南部とどの領域にも属さない、292はどの領域にも属さない、293は吉備南部・讃岐（東部）・山陰の領域、299は讃岐（西部）領域とどの領域にも属さない、300は吉備南部領域との結果が出ている。壺289、292、293、299の肉眼鑑察による違和感から生産地の確定まではおよばないが、分析による結果との整合性により吉備南部以外の領域から土器が搬入されていることの把握が可能である。



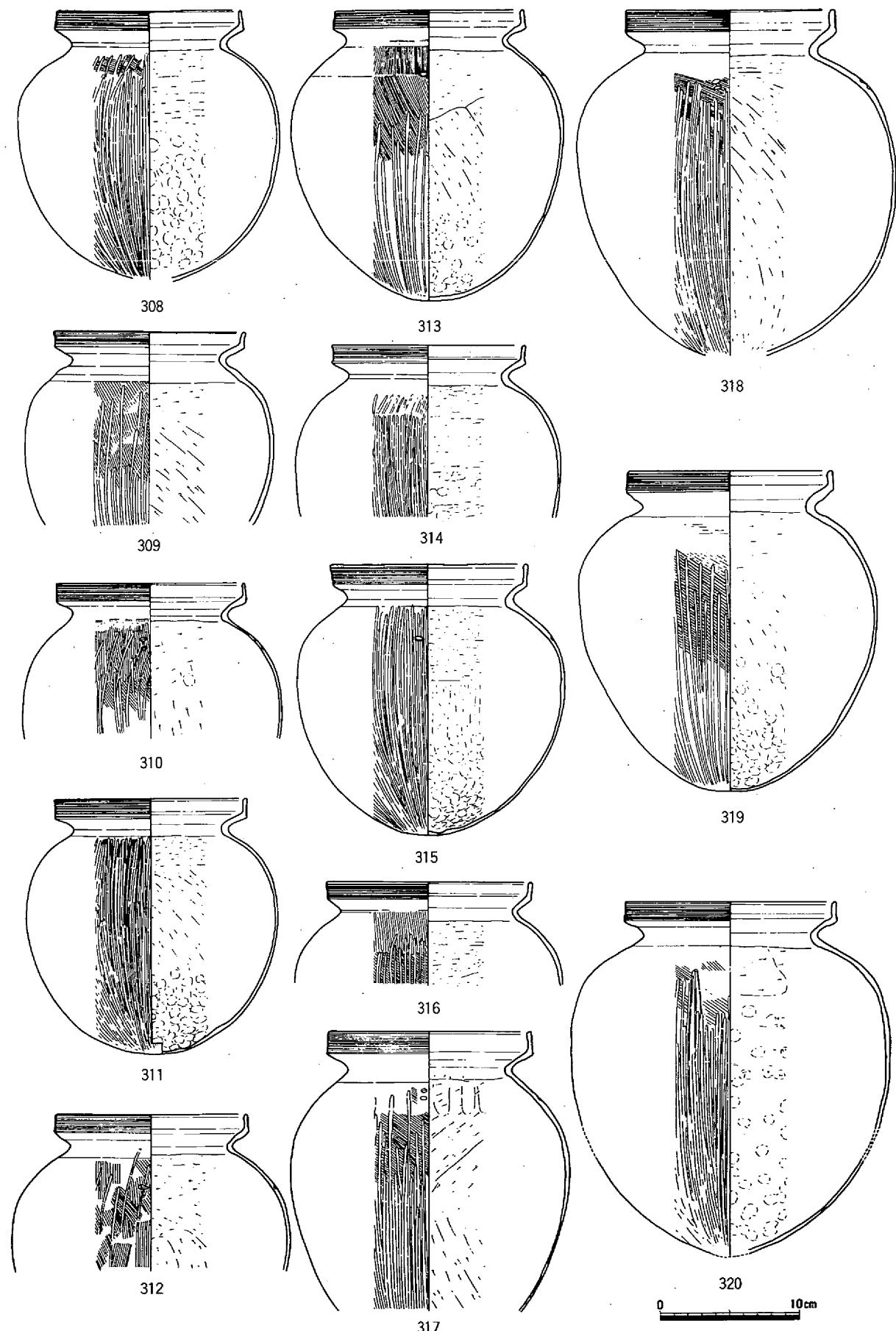
第73図 溝-14 (1/35)



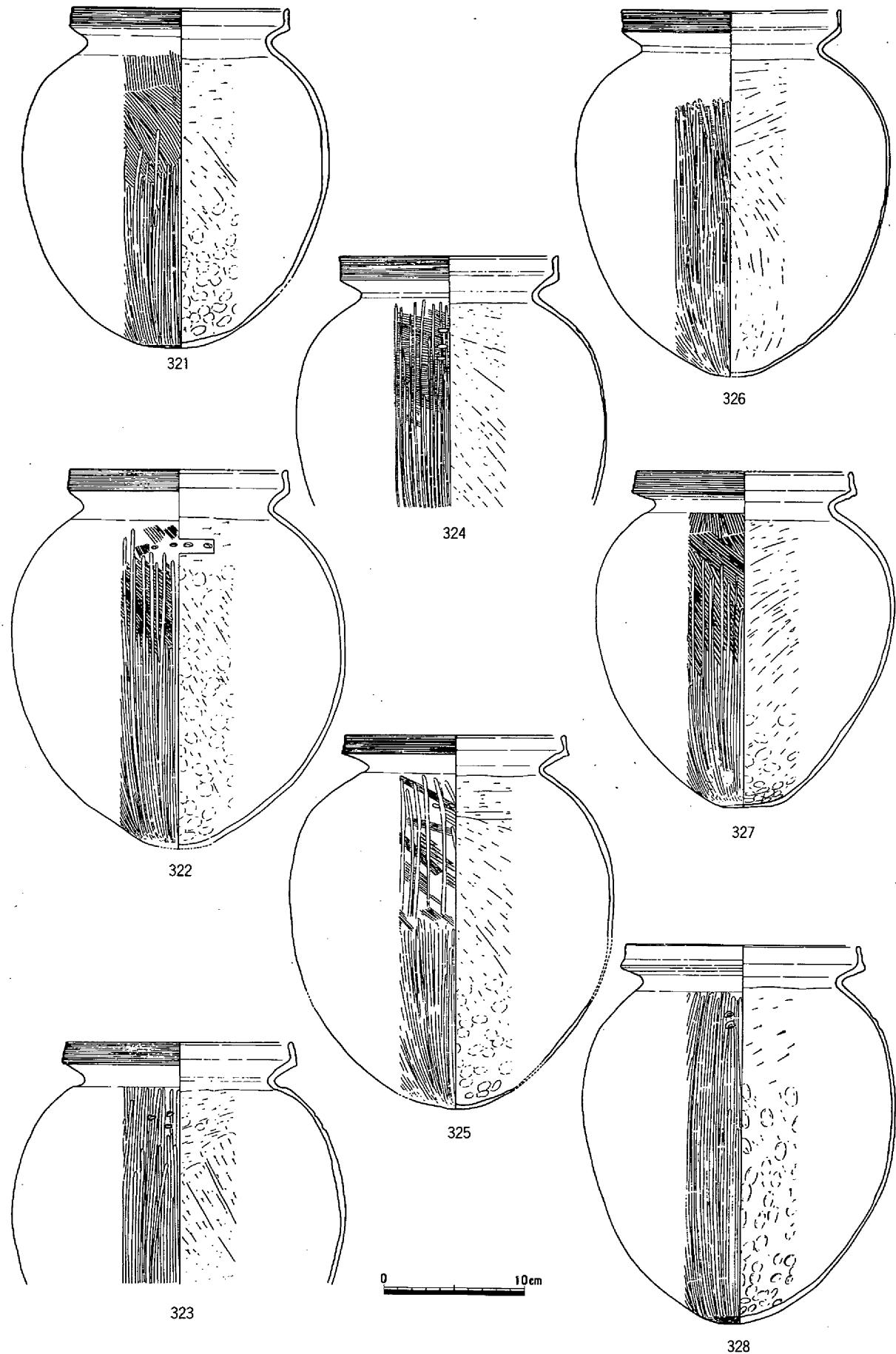
第74図 溝-14出土遺物（1）



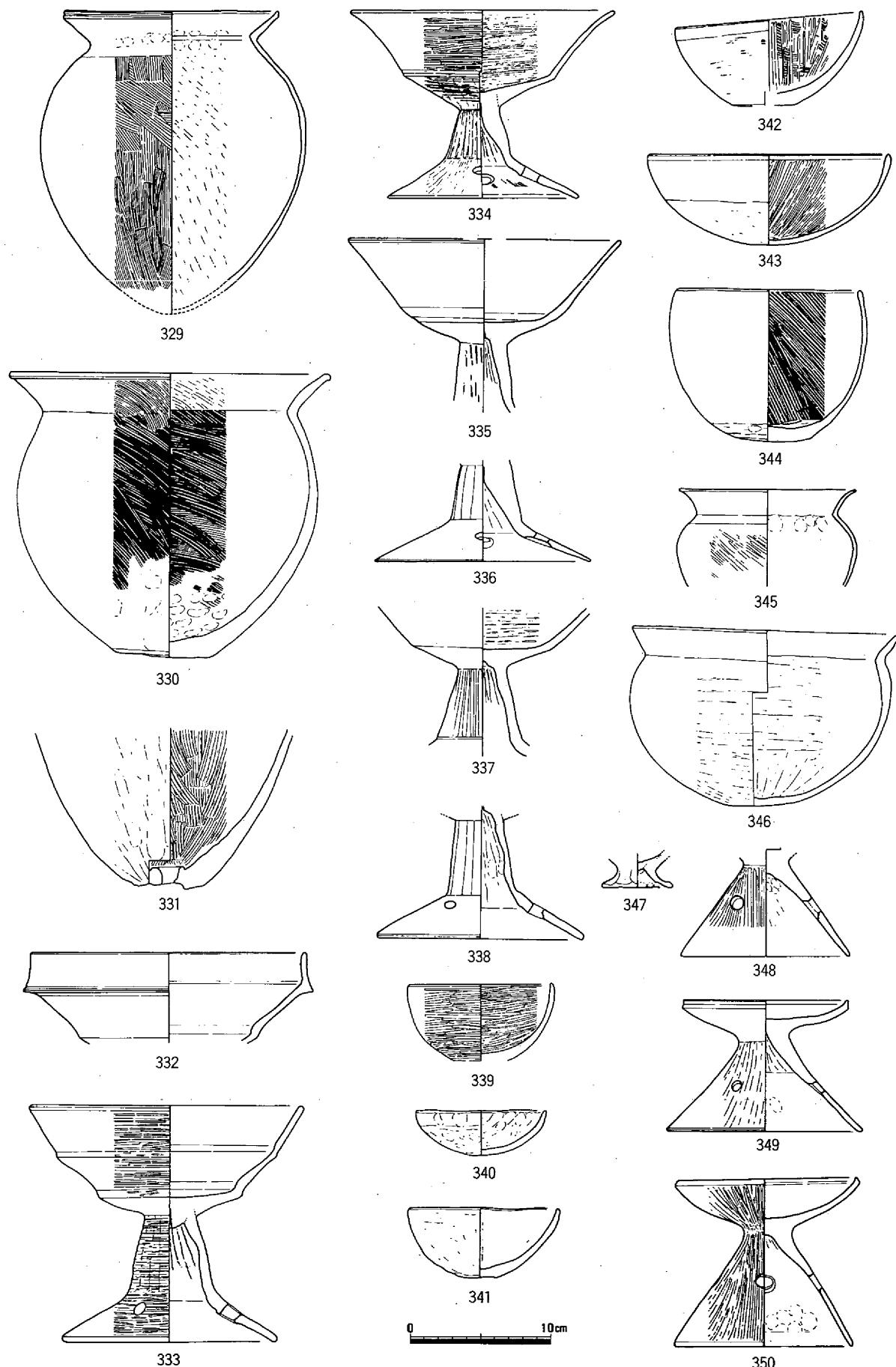
第75図 溝-14出土遺物（2）



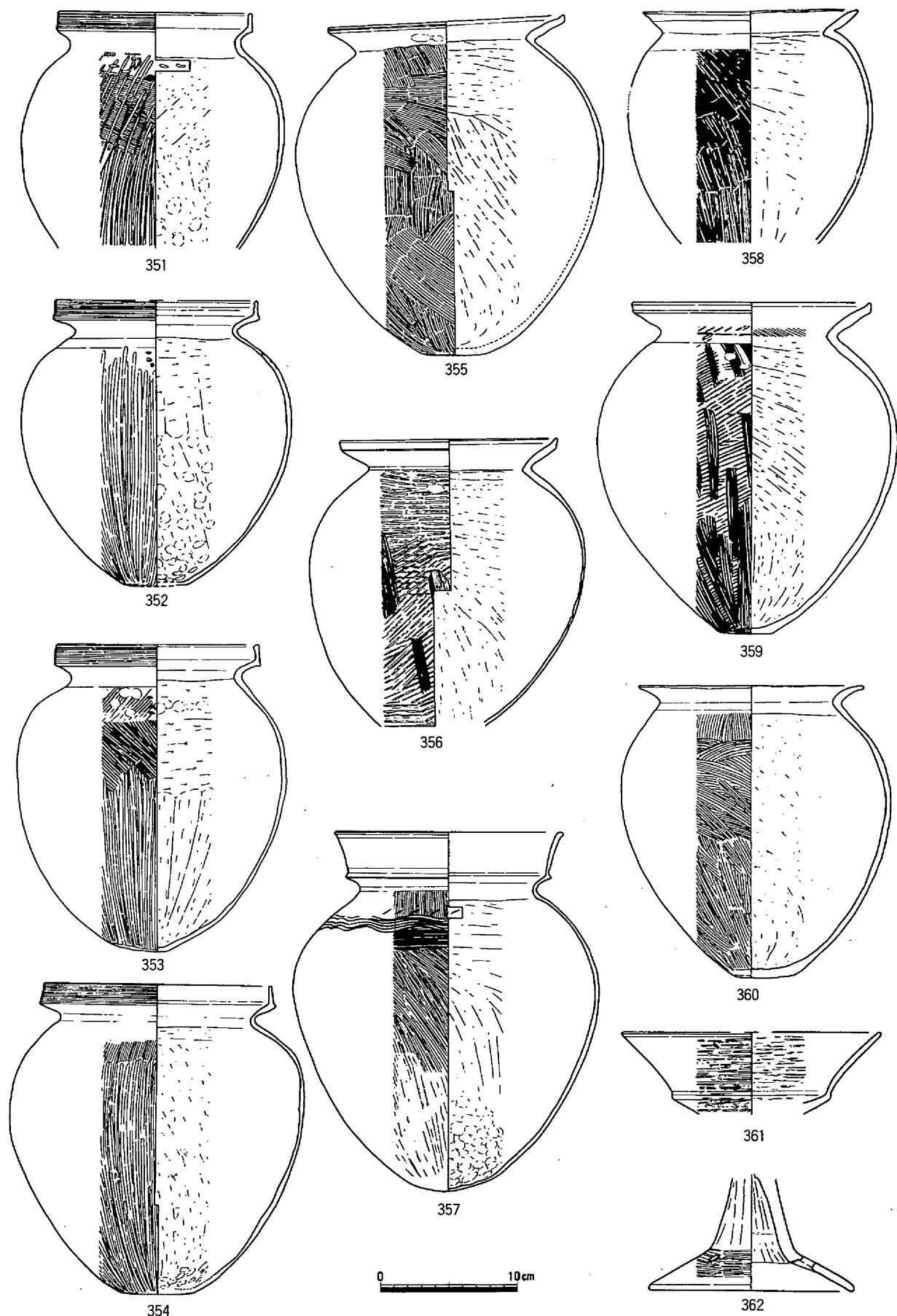
第76図 溝-14出土遺物（3）



第77図 溝-14出土遺物 (4)

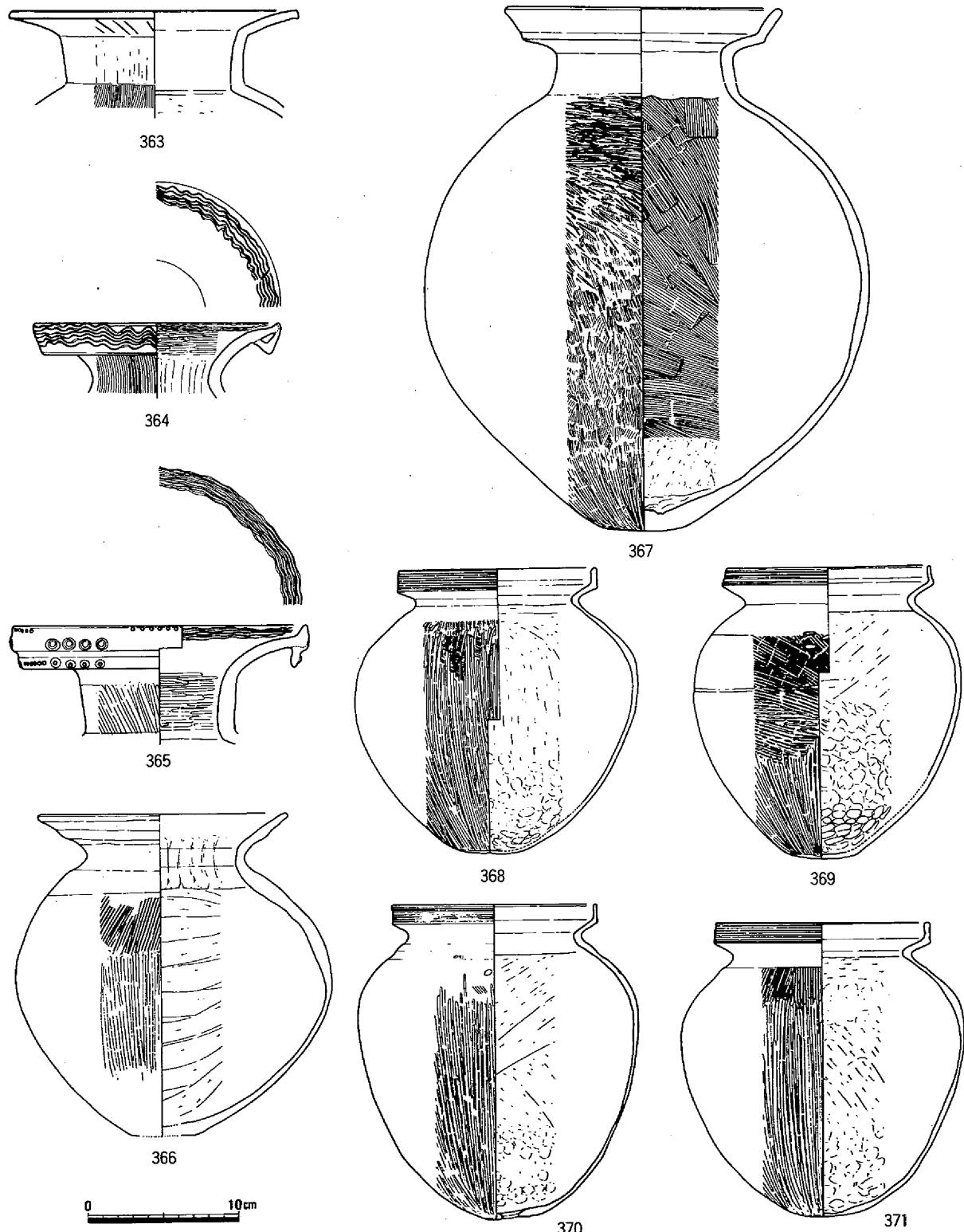


第78図 溝-14出土遺物（5）



第79図 溝-14出土遺物（6）

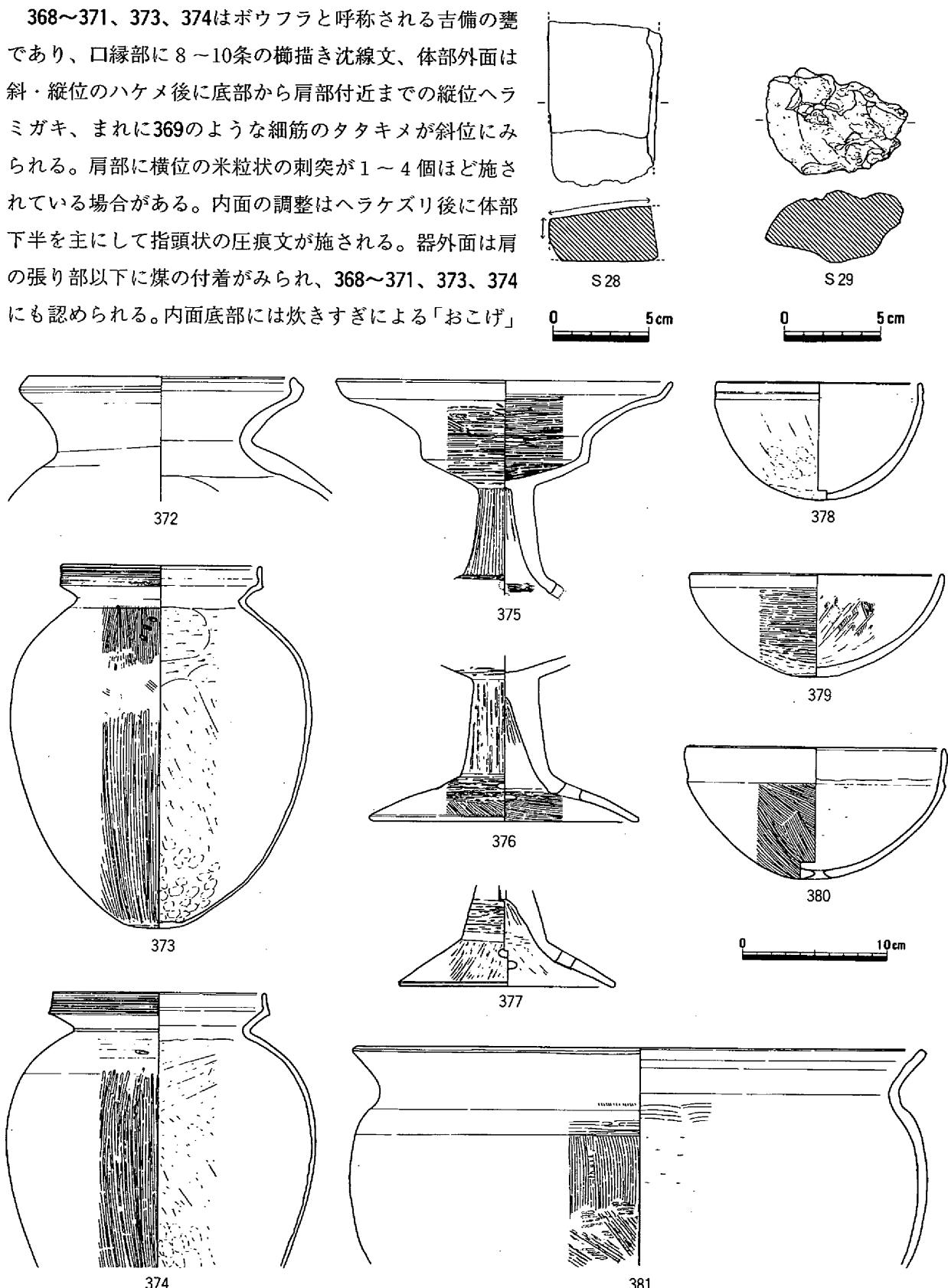
次いで、溝-14の底面に近い下層部分を中心に出土した土器群に351～381がある。上層のように1ヶ所にまとめられた投棄ではなく、比較的完形に近い土器が散布する状況であった。壺363～367が5点、甕368～374が7点、高杯375～377が3点、鉢378～381の大小が4点の計19点である。上層と同じく、生産地が在地以外と考えられる鉢381、壺363～367、372のうち365を除いた土器の胎土分析を行った。壺363は吉備南部・山陰・讃岐（東部）、壺364はどの領域にも属さない。壺366は讃岐（東部）・山陰・



第80図 溝-14出土遺物（7）

吉備南部、壺372は吉備南部、鉢381は山陰・吉備南部・讃岐（東部）との結果が出ている。少くとも壺372は吉備南部の領域に入ることが明らかである。壺363の形態は従来讃岐系の土器として周知されているものであり、口縁の開き等に特徴を持っている。

368～371、373、374はボウフラと呼称される吉備の甕であり、口縁部に8～10条の櫛描き沈線文、体部外面は斜・縦位のハケメ後に底部から肩部付近までの縦位ヘラミガキ、まれに369のような細筋のタタキメが斜位にみられる。肩部に横位の米粒状の刺突が1～4個ほど施されている場合がある。内面の調整はヘラケズリ後に体部下半を主にして指頭状の圧痕文が施される。器外面は肩の張り部以下に煤の付着がみられ、368～371、373、374にも認められる。内面底部には炊きすぎによる「おこげ」



第81図 溝一14出土遺物（8）

の痕跡がみられる場合がある。

高杯375～377は脚裾部に4孔を有しており、脚柱の器壁は厚く、脚内は完全な中空とは言いがたいものもある。他には石器も混在しており、S28は蛇紋岩製の砥石、S29は軽石の浮子と思われ、重さ38.3gをはかる。

上層遺物と下層遺物を比較すると、上下の関係における時期差を認めることができる。まず、上層では壺、甕の丸底化が進み、甕311のように胴部の球体化が目立つ。下層出土の壺、甕はわずかであるが平底がすべてみられ、古い様相を残している。高杯においても上層では333、337、338のような脚柱部の中空が多く、下層の高杯375～377では脚柱部の壁が肥厚しており、古い様相を残している。鉢にも共通しており、上層の343の器外面下半にヘラケズリが施された浅い鉢の出現、下層は378～380のようにヘラケズリがみられず、器高の高い鉢が多くみられる。

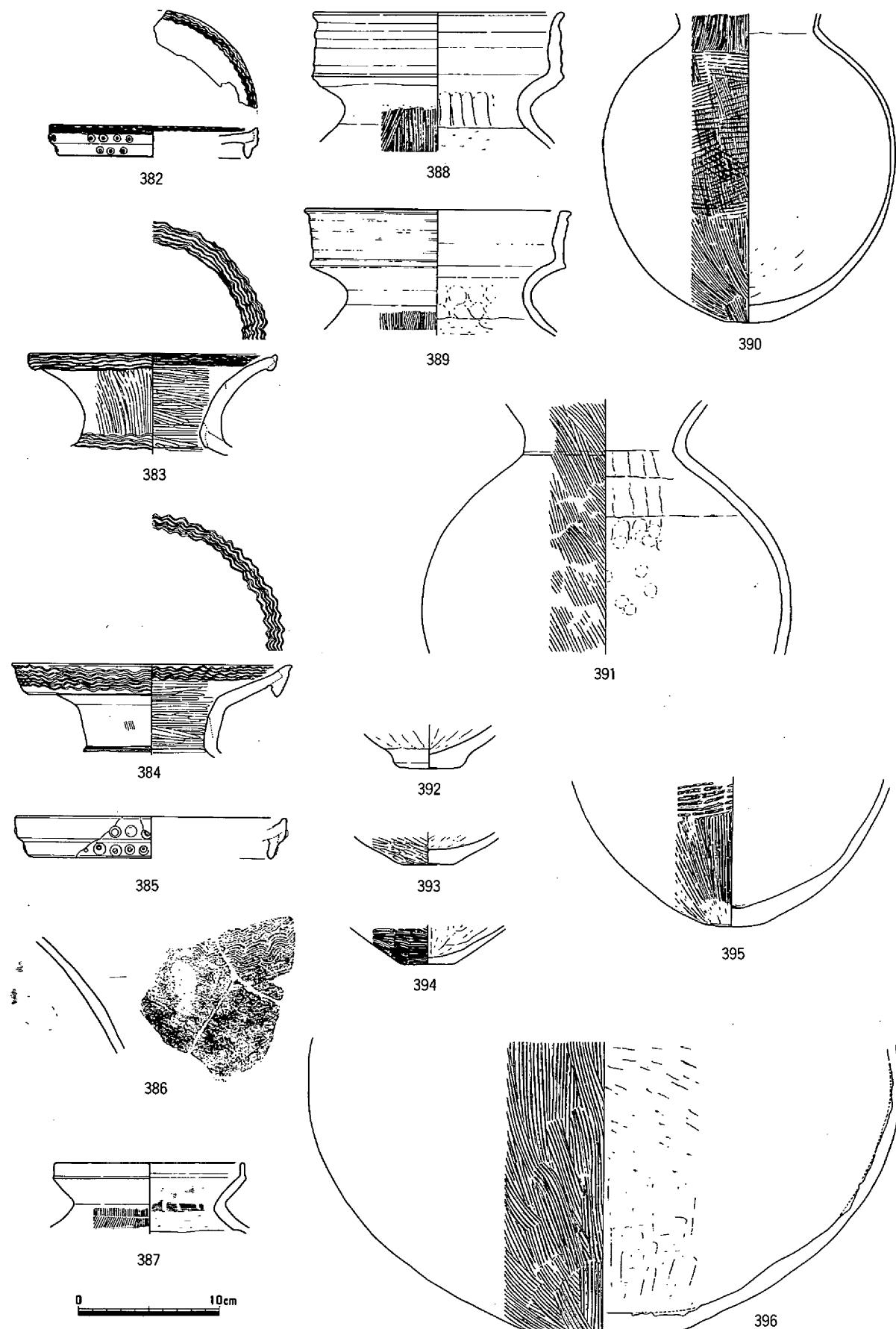
土層の上下関係と土器型式の新旧関係から上層遺物が新しく、上層遺物が古い一群であることが判明した。ここでは、下層土器を古・前・Iの古相～中相、上層土器を古・前・Iの中相～新相に比定しておきたい。

甕382～鉢462の81点は溝-14内において、上下の分層関係があまり明瞭でない土器群である。第一次調査時の出土遺物（404、408～412、424、426、427、429、462）が11点、溝-14の上下層間の層内にみられた70点である。上下層でもみられたように在地産以外と考えられる土器が出土をしており、胎土分析を行なっている。壺382～386、390、395、甕407、409～413、鉢442、高杯433、434等である。壺382は吉備南部・どの領域にも属さない、壺383は山陰・吉備南部・どの領域にも属さない、壺384～386は山陰・吉備南部、壺390は山陰・東海系、壺395は東海系、甕407は山陰・吉備南部、甕409はどの領域にも属さない・畿内、甕410は畿内、甕411はどの領域にも属さない・讃岐（高松平野）、甕412はどの領域にも属さない、高杯433、434は吉備南部・讃岐（東部）、鉢442は山陰・吉備南部との結果がでている。

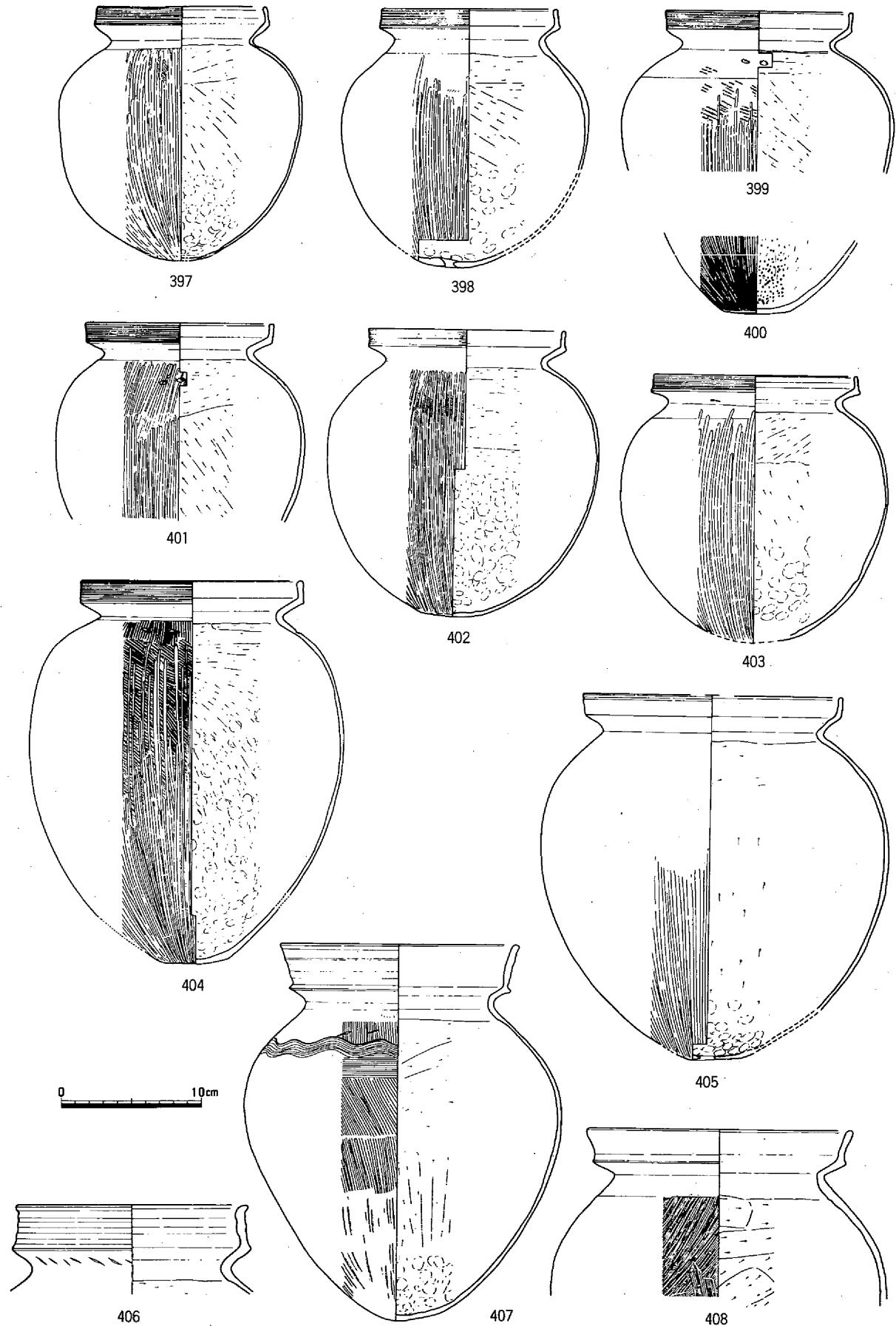
これらの土器を上層・下層遺物と比較をすると、上層遺物の時期に近い甕397、398、403等の丸底を呈するものもみられるが、大半が上層遺物よりは下層遺物の時期に近いものと考えられる。

少し珍しいところでは、外面に煤の付着した甕400の内面底部に米粒の焦げ目が全面に残る「御焦げ」痕跡が認められる。いわゆるボウフラ、吉備甕が米を炊いた容器であることを証明する資料である。この時期の遺構から最も多く出土するボウフラの容量差はさまざまである。溝-14、16の甕（50点）でもって、くびれ部より以下の容量を計ってみると、1.75l～7.5lとなり5.0l以上の差が認められる。口径、器高を含めて容量順からA、B、C、Dのグループに分れそうである。しかし、厳密な意味での規格品ではなく、各グループにあって近い容量の甕は存在するが、かならずしも同形同大ではない。4グループの法量を紹介すると、A（322、325、357、499、501）は口径15.1～16.6cm、器高26.08～28.23cm、容量5.6～7.5lをはかる。B（318、319、321、327、343、353、354、391、422、439、477、487、489、492、493、510）は口径13.35～17.0cm、器高22.35～25.05cm、容量3.75～5.7lをはかる。C（305、306、308、311、315、393、394、396、402、480、482、486）は口径12.7～14.0cm、器高18.2～20.9cm、容量20.0～3.5lをはかる。D（301、302、397）は口径10.7～12.0cm、器高16.8cm～18.25cm、容量1.75～2.7lをはかる。B、Cグループの甕が多い傾向がでており、なかでもBグループの口径15.0cm前後、器高24.5cm前後、容量4.0～5.0l、Cグループの口径12.7～14.0cm、器高18.2～20.1cm、容量2.5～3.5lの規模が多く出土している。

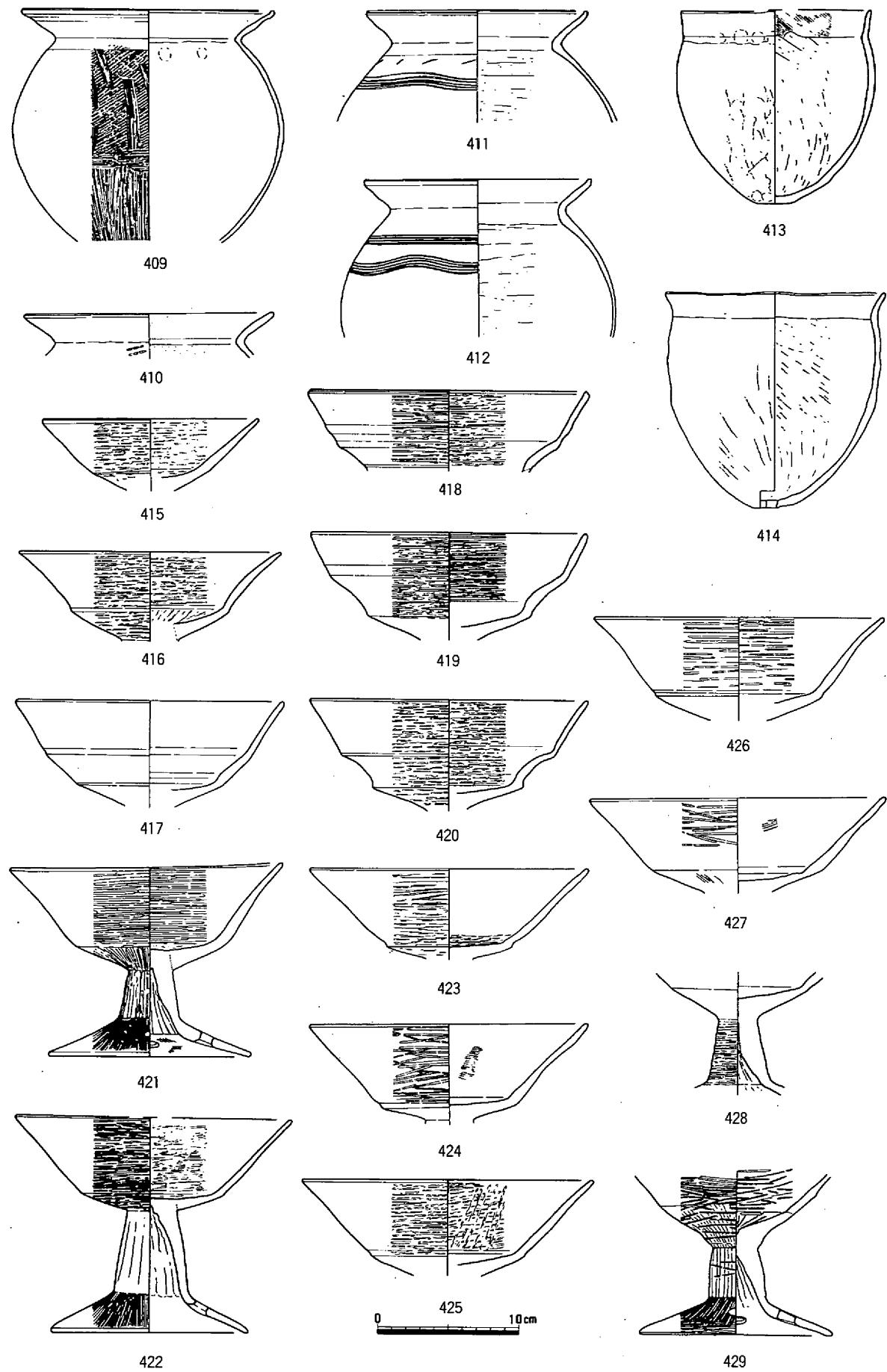
（高畠）



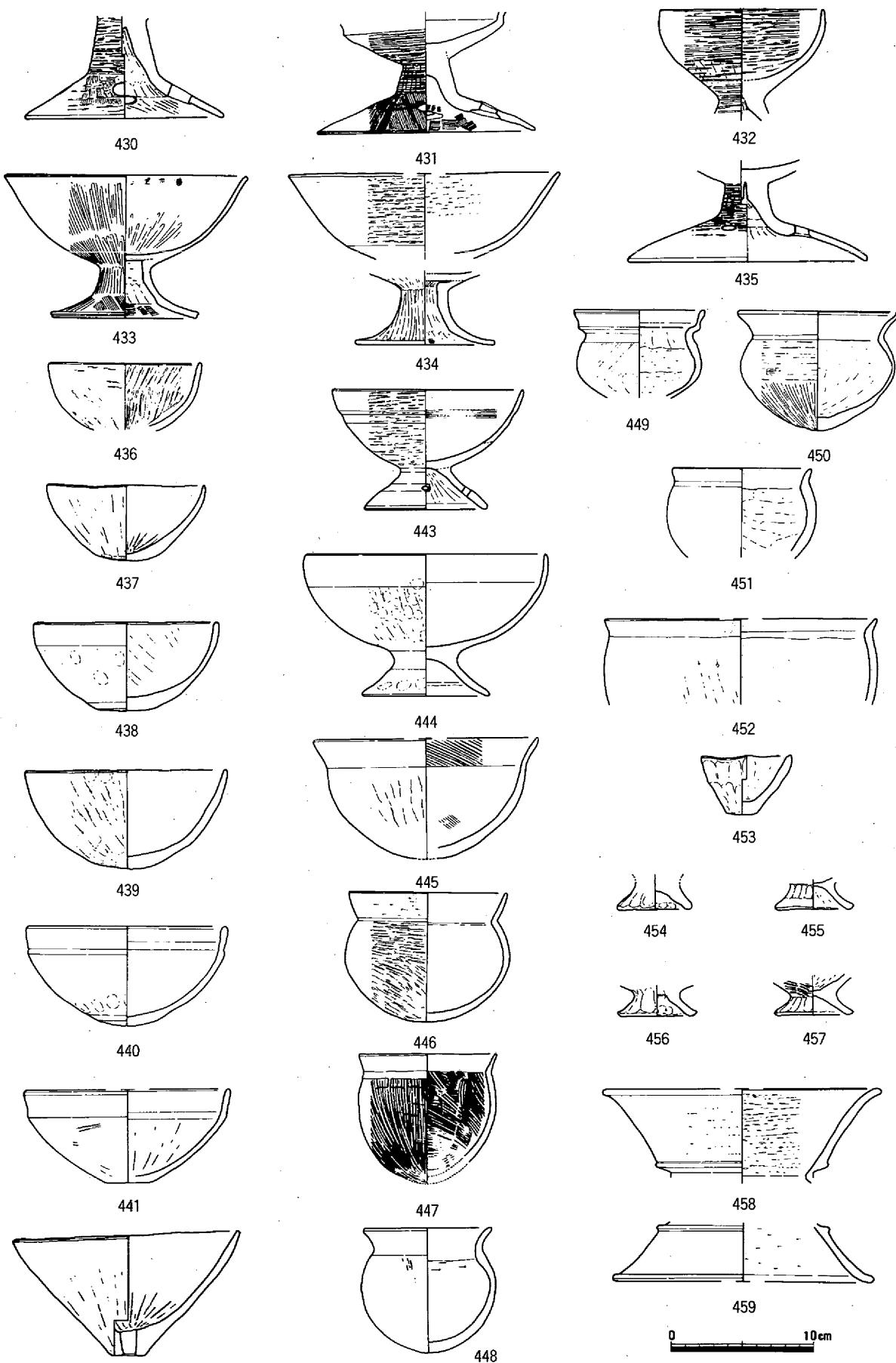
第82図 溝-14出土遺物（9）



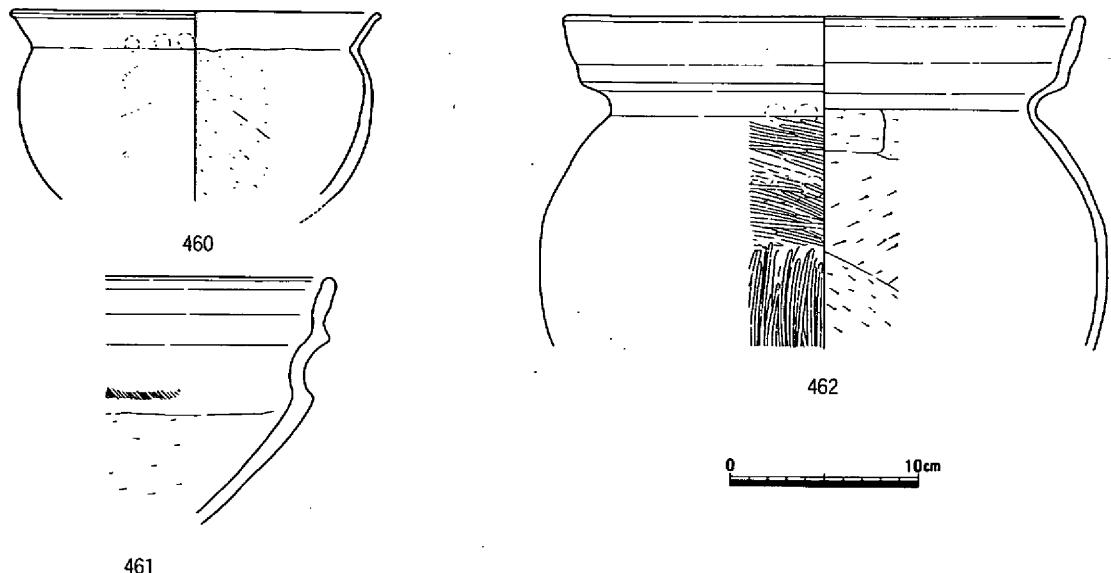
第83図 溝-14出土遺物 (10)



第84図 溝-14出土遺物 (11)



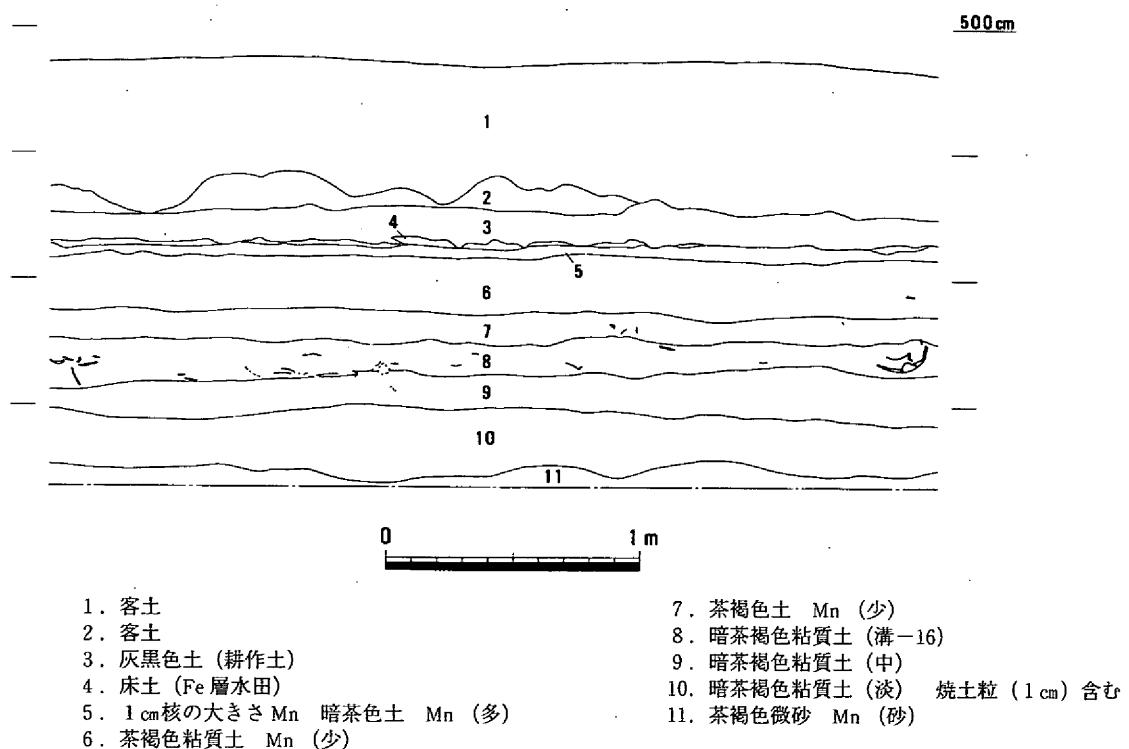
第85図 溝-14出土遺物 (12)



第86図 溝一14出土遺物 (13)

溝一16 (第87~97図、図版21)

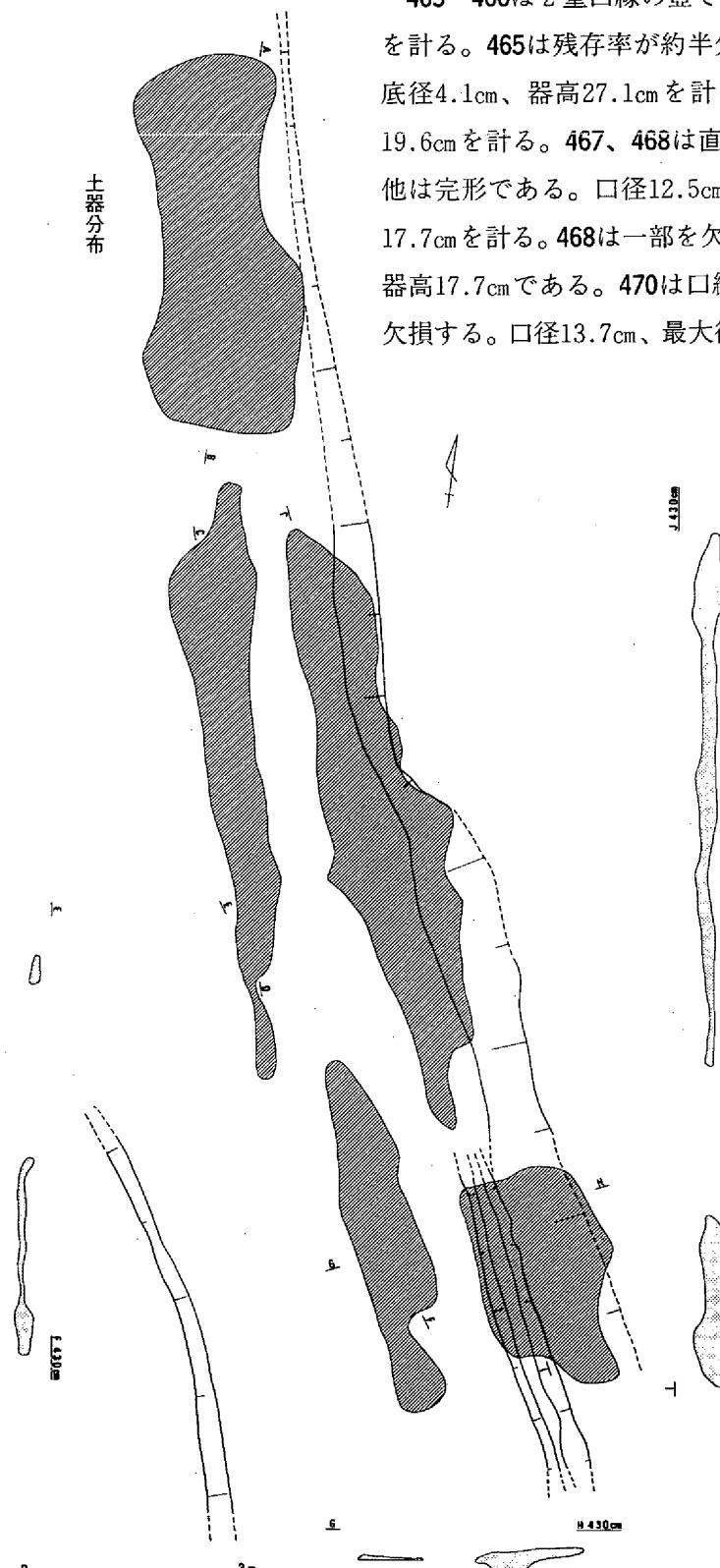
側溝3区南側と道路4区C~5区Aに位置し、北西から南東方向へ流れる溝である。幅最大5.7mに達するもので、深さは検出面から最大68cmを測る。道路調査区側では内側に数条の溝が確認でき(溝18~20)、断面を見ても底面に凹凸があるので、いくつかの溝が合流・分流しながら全体として大きな枠内に存在したものといえよう。この溝の廃絶に際して土器溜まりが形成されている。土器溜まりの中でもC-C'で示したものは最も密集していて、完形に近い土器が多く見られた。こ



第87図 溝一16 (1/30)

の土器溜まりは帶状に土器が並び、遺物の海拔高では北からいたん高くなり、同レベルで堆積した後南側で急激に下がるという特徴的な堆積を示している。

遺物は、ほとんど土器で、砥石、鉄鎌も入っていた。土器については壺・甕・高杯・鉢など主要な器種は全て見ることができ、器種ごとに細分が可能である。

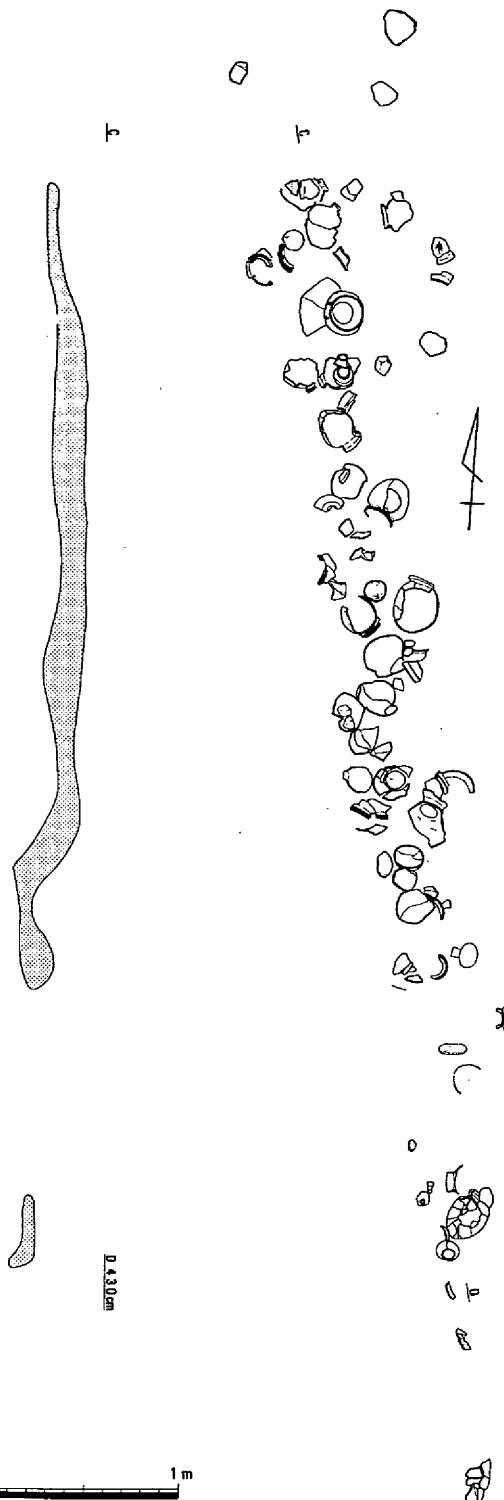


第88図 溝-16 (1/100)

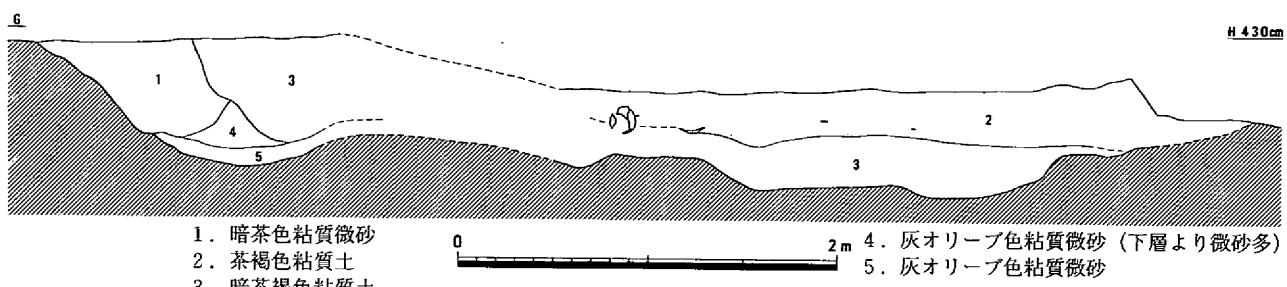
463～466は2重口縁の壺である。463は3/4の残存率で口径18cmを計る。465は残存率が約半分で、口径16.4cm、最大径23.7cm、底径4.1cm、器高27.1cmを計り、丹の塗布がある。466の口径は19.6cmを計る。467、468は直口壺である。467は頸部を一部欠く他は完形である。口径12.5cm、最大径16.2cm、底径4.1cm、器高17.7cmを計る。468は一部を欠損する。口径6.3cm、最大径14.7cm、器高17.7cmである。470は口縁が直立する直口壺で口縁部ほかを欠損する。口径13.7cm、最大径28.3cm、底径4.7cm、器高は28.3cmを計る。471は口縁端部が内傾する2重口縁壺で、口径19.4cm。形状から西部瀬戸内系と思われる壺である。472は形態が讃岐系の壺である。底部付近に穿孔が1つ見られ、口径17.4cm、最大径27.2cm、底径8.0cm、器高31.0cmを計る。473は胴～底部の破片で、最大径約26.7cm、底径6.1cmである。形態は畿内系か。474は頸部より上がほぼ完存し、口径は20.3cmである。

甕478～504はいわゆる吉備甕で、口縁端部がほぼ直立する2重口縁を持ち、外面に櫛描き沈線が施される。胴部最大径は器高中央より上部にあり、底部はすぼまり小さく底面を残す。

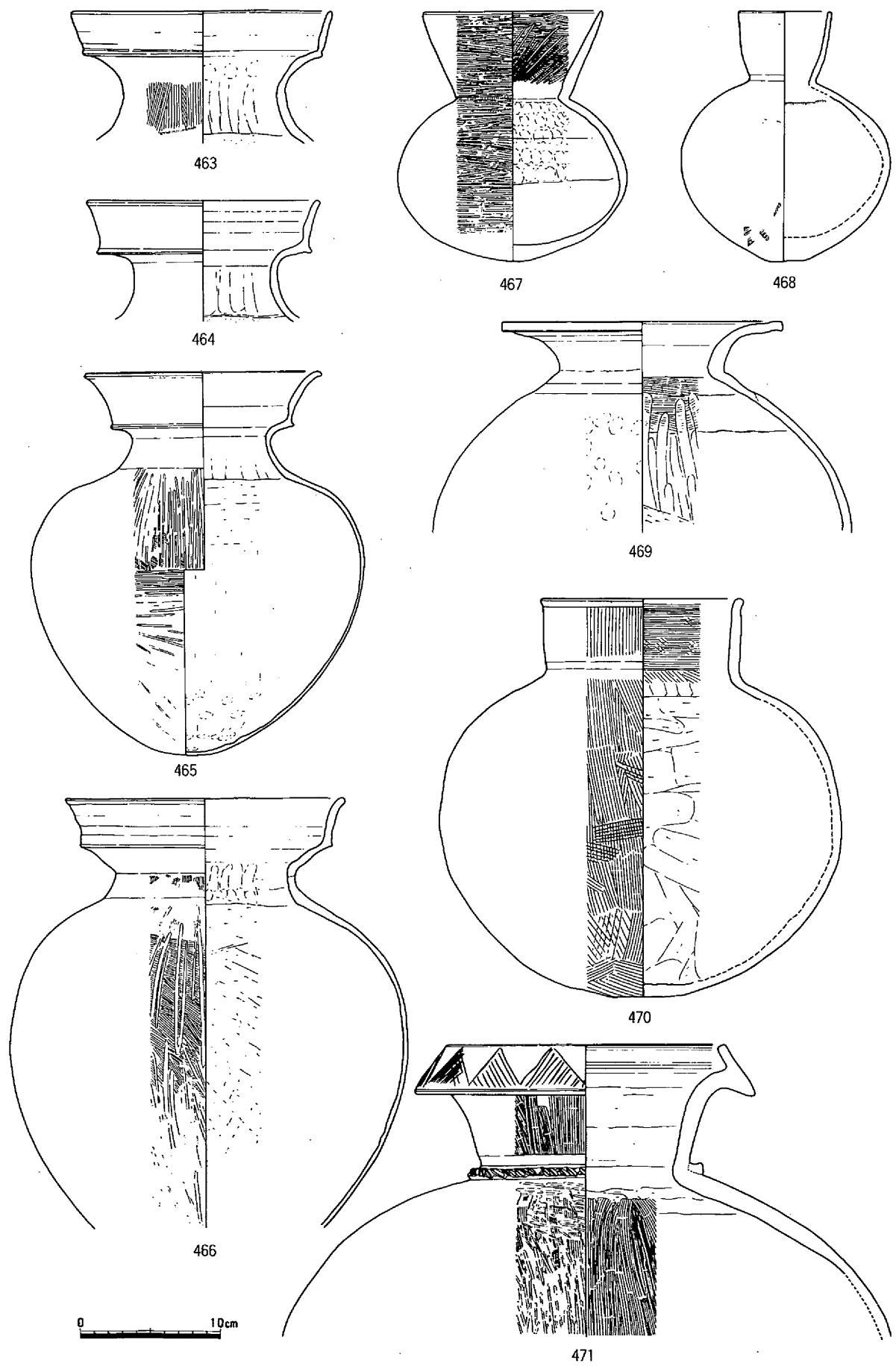
478は口縁～胴部を一部欠く。口径10.7cm、最大径17.9cm、底径4.8cm、器高17.7cmである。481は口縁から胴部が完存している。口径は13.1cm、最大径16.6cm、底径は3.7cm、器高18.2cmであり、外面胴部から底部まで煤が付着する。482は口縁・底部を一部



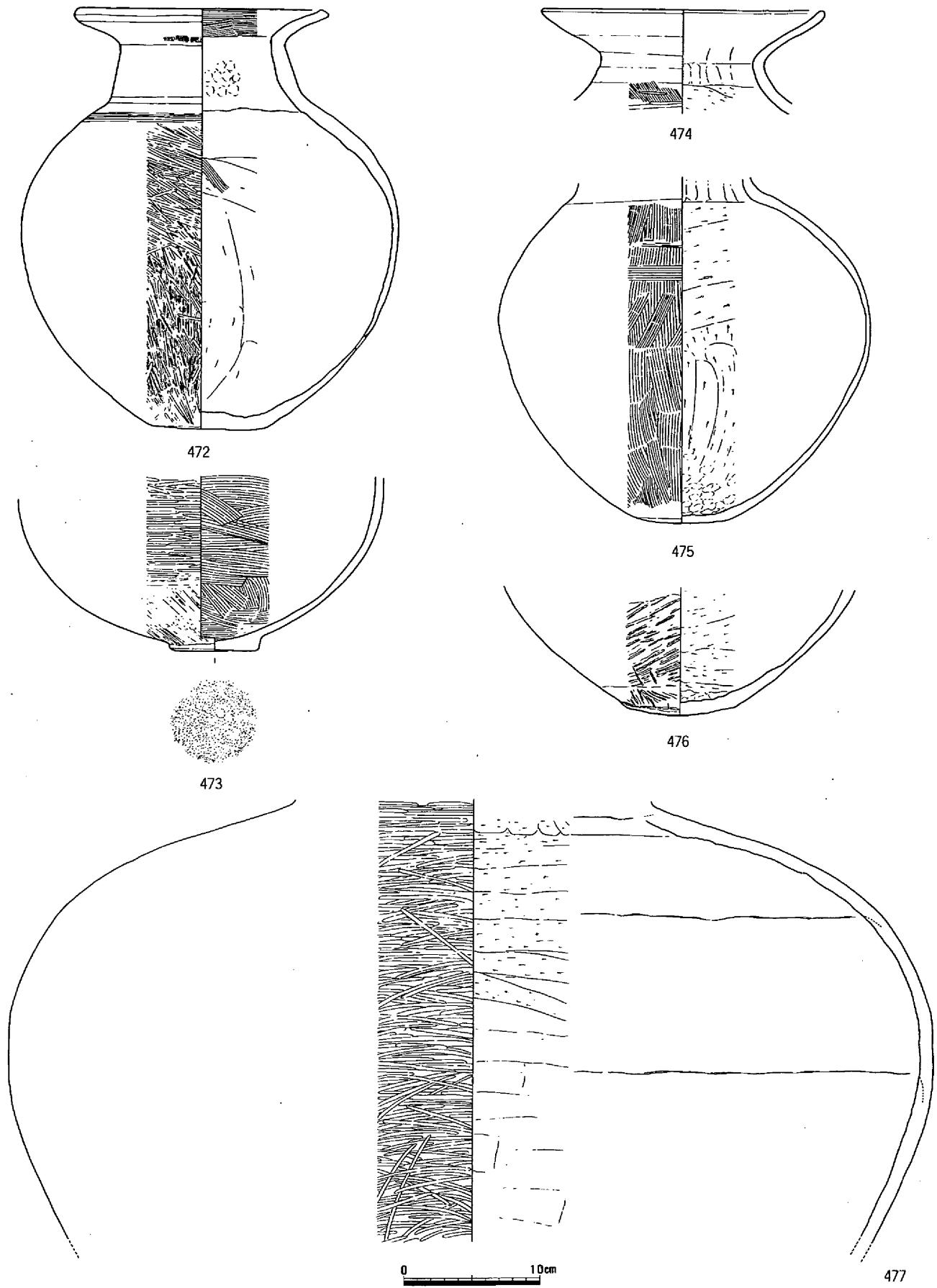
欠いている。口径13.3cm、最大径17.8cm、底径は3.5cm、器高19.2cmであり、外面最大径付近から下と内面底部付近には煤が付着する。**485**は口縁から肩部が2/3の残存率で、口径14.0cm、最大径18.6cm、底径は3.9cm、器高19.7cmを計る。**486**は口縁と胴部を一部欠き、口径13.7cm、最大径約18.7cm、底径は3.8cm、器高20.9cmを計る。**489**は全体が2/3程度残り、口径約14.3cm、最大径約21.6cm、器高24.7cmを計る。頸部以外に煤が付着する。**490**は口縁・胴部を一部欠く。口径14.5cm、最大径30.4cm、底径4.1cm、器高24.0cmである。底部付近に黒斑が見られる。**492**はほぼ完形である。口径14.5cm、最大径21.1cm、底径は5.3cm、器高25.0cmを計る。胴部～底部に煤が付着する。**493**は口縁を一部欠くがほぼ完形である。口径14.9cm、最大径約21.2cm、底径は4.7cm、器高24.7cmを計る。煤は頸部以下に付着する。**494**は胴部を一部欠くがほぼ完形である。底部付近の穿孔は内面から力が加わっている。口径15.0cm、最大径20.8cm、底径4.5cm、器高25.0cmである。外面口縁直下を除いて煤が付着する。**496**は口縁～胴部を反転復元している。口径15.6cm、最大径21.0cm、底径5.0cm、器高24.5cmである。外面胴～底部に煤が付着する。**497**は口縁から肩部は1/2の残存率で、口径15.4cm、最大径21.7cm、底径は4.5cm、器高23.2cmを計る。煤は胴部から底部に付着する。**498**は底部を一部欠くがほぼ完形である。口径15.0cm、最大径20.7cm、底径5.5cm、器高23.6cmである。外面に煤が付着する。**499**は胴～底部を欠く。口径15.8cm、最大径21.8cm、底径4.7cm、器高26.9cmである。外面に煤が付着する。**500**は



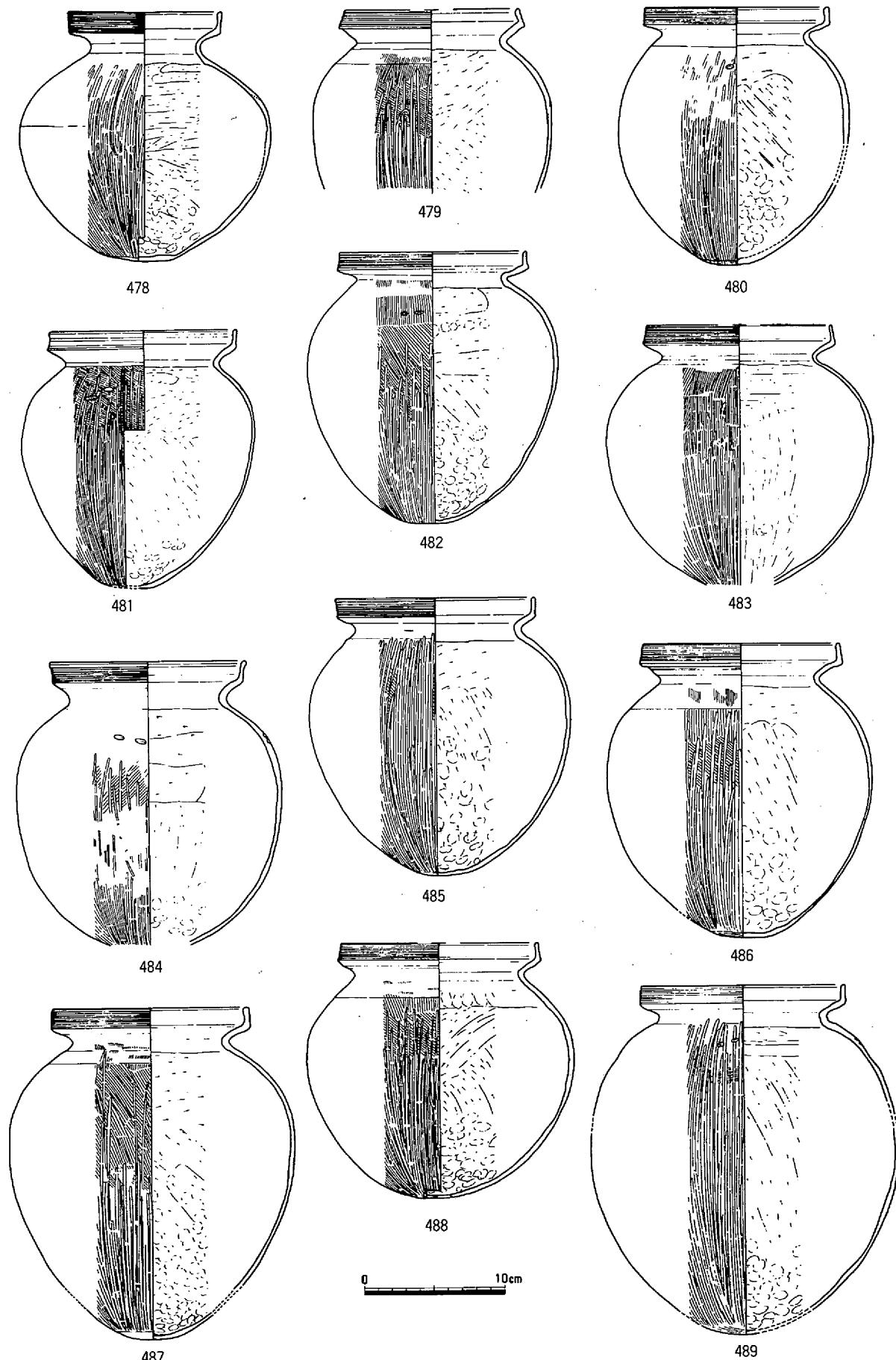
第89図 溝-16 (1/40)



第90図 溝-16出土遺物（1）

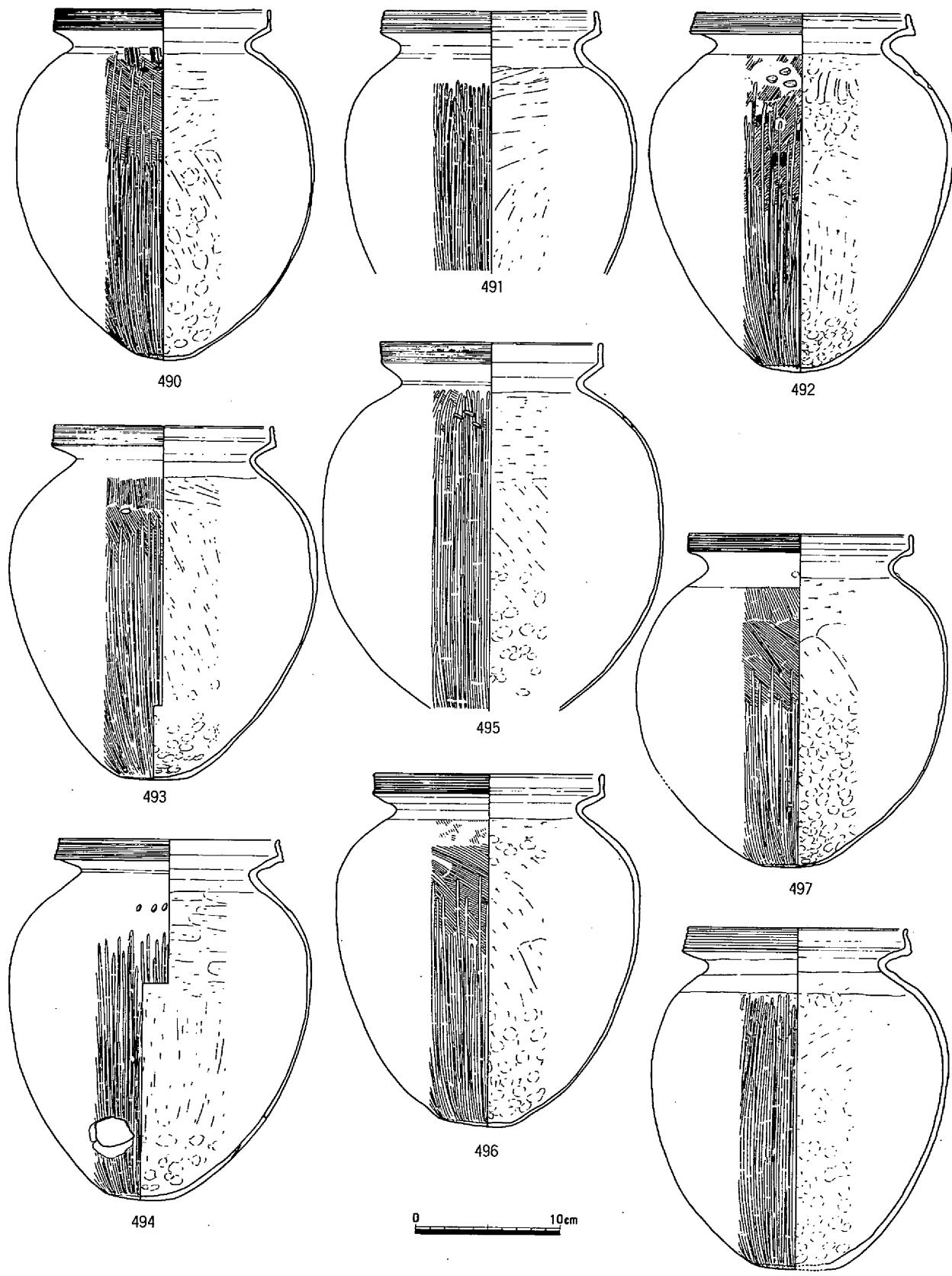


第91図 溝-16出土遺物（2）

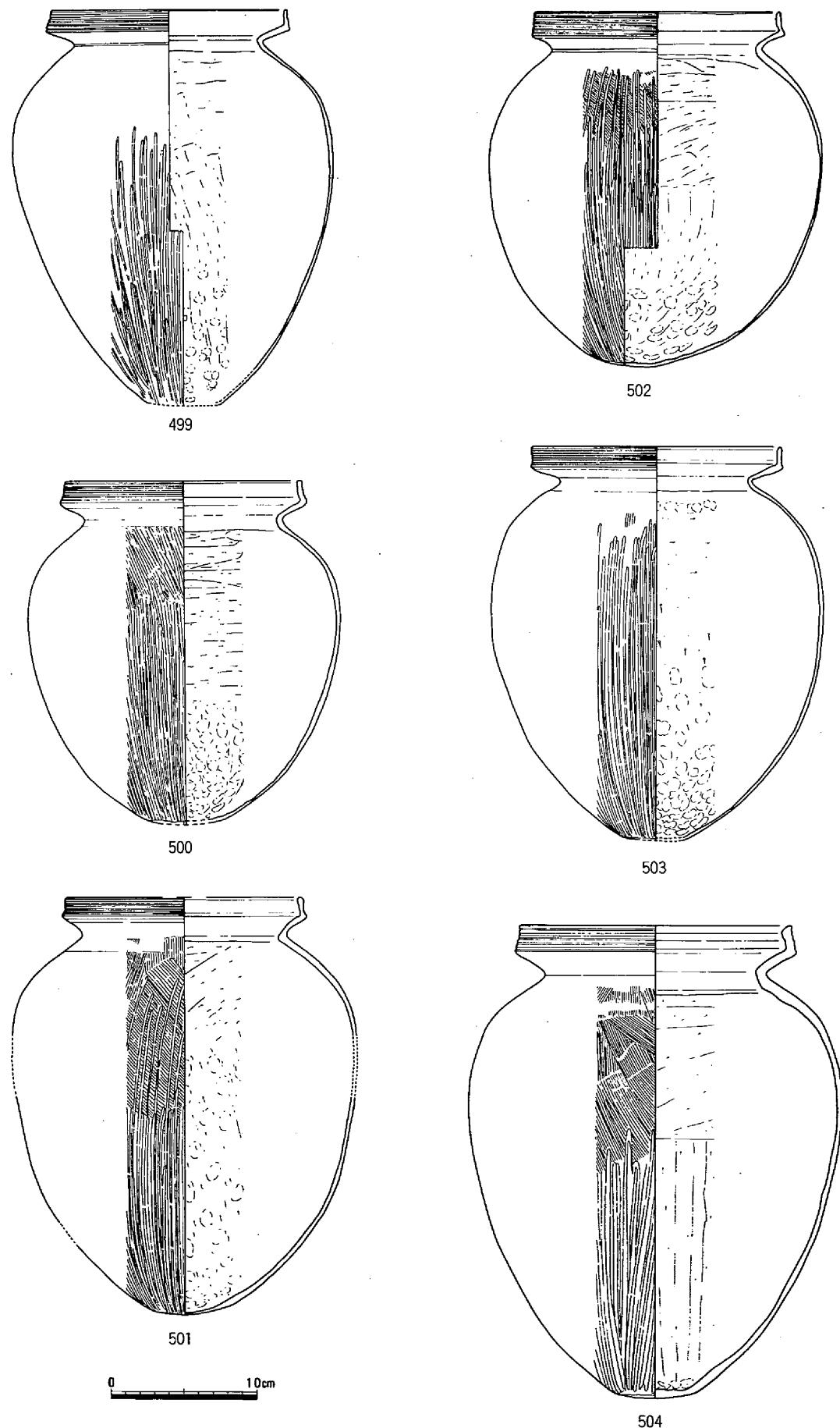


第92図 溝-16出土遺物（3）

口縁～胴部1/2残の復元である。計測値はいずれも推定で口径15.8cm、最大径21.3cm、底径5.3cm、器高23.3cmである。煤は頸部をのぞいて付着する。501は口縁～胴部を欠く。口径15.8cm、最大径23.5cm、底径5.4cm、器高28.2cmである。外面胴～底部に煤が付着する。502はあまり残存率がよくない。口



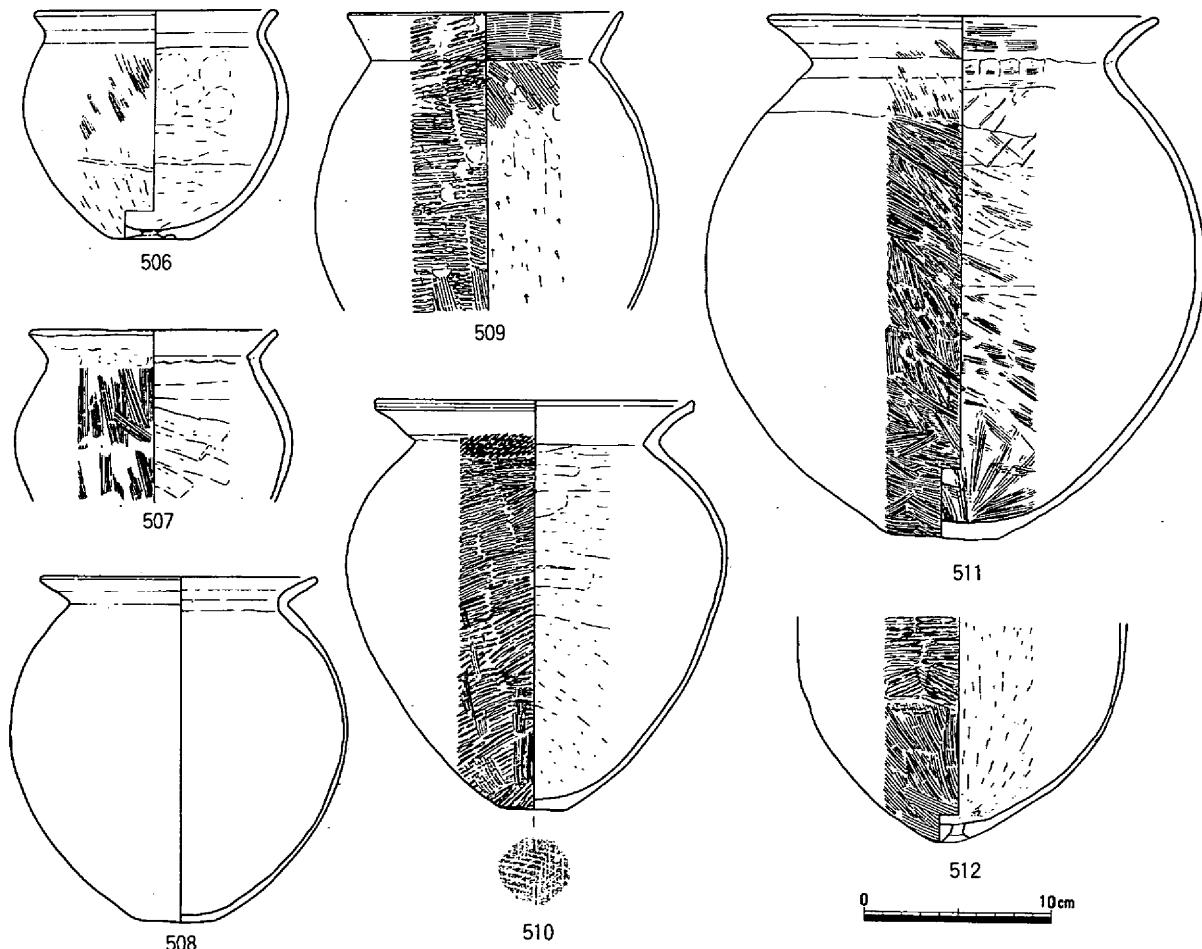
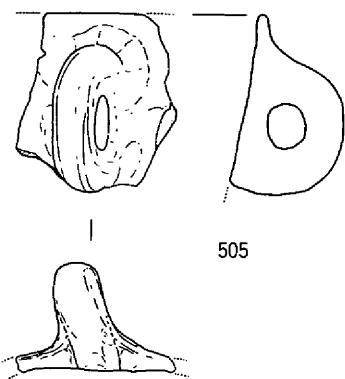
第93図 溝-16出土遺物 (4)



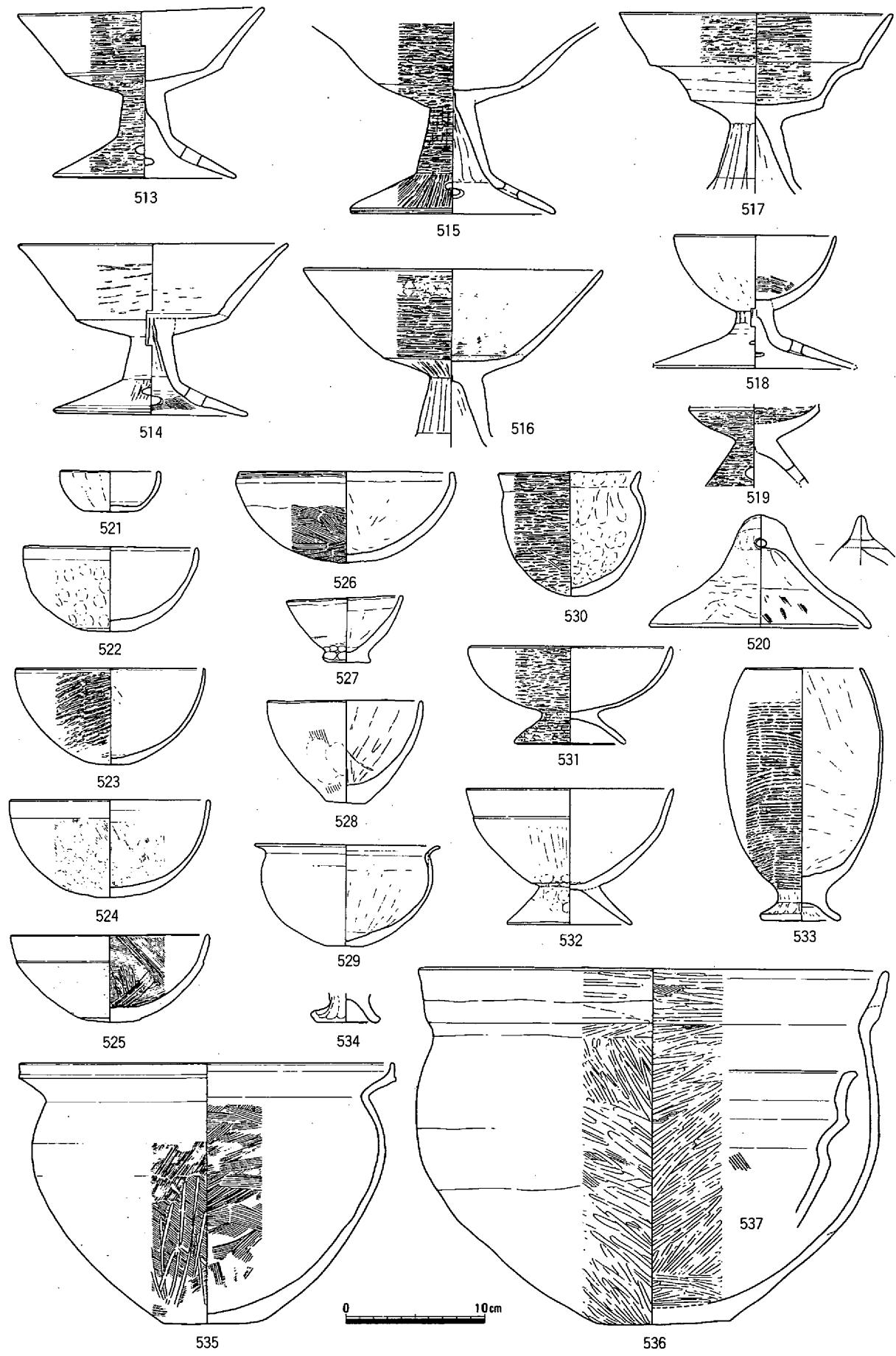
第94図 溝-16出土遺物（5）

径16.2cm、最大径約22.4cm、底径は約4.0cm、器高24.1cmを計る。504は口縁部のみ1/2欠損する。口径18.2cm、最大径25.2cm、底径5.0cm、器高32.0cmを計る。505はおそらく顎型土器の取っ手になるとと思われる破片である。色調は橙色を呈し、調整は摩滅で不明である。506はほぼ完形である。口径12.3cm、最大径13.9cm、底径4.3cm、器高12.3cmである。508は口縁・胴部を欠く。口径約14.2cm、最大径約17.6cm、底径4.2cm、器高18.3cmを計る。510はほぼ完形である。口径16.5cm、最大径20.0cm、底径3.5cm、器高21.7cmである。外面胴～底部に煤が付着する。511は底部付近を一部欠く。口径20.2cm、最大径26.5cm、底径5.5cm、器高27.8cmである。

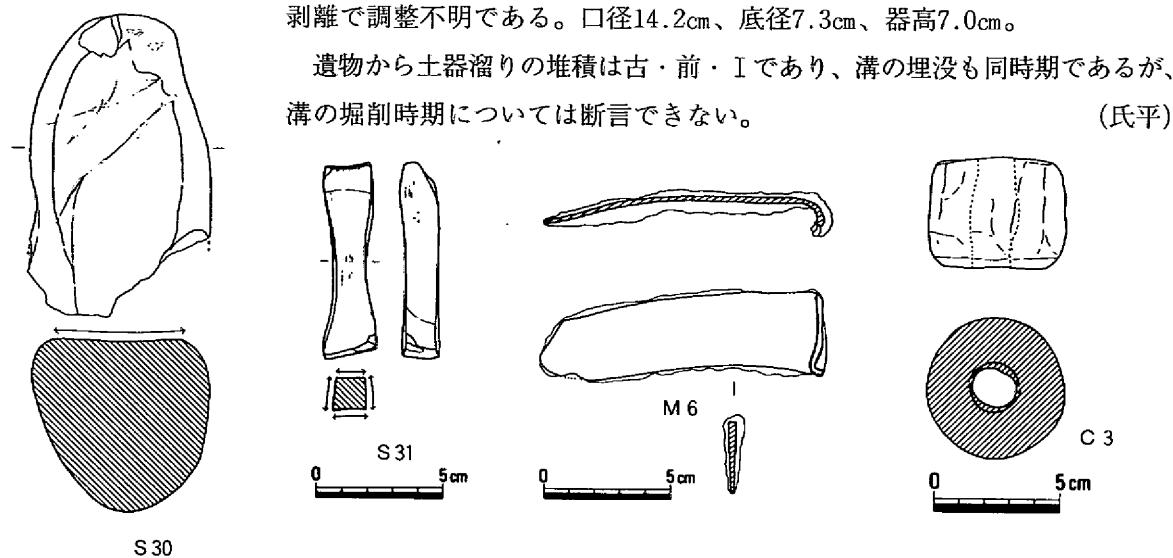
513～518は高杯である。513は杯部を図上で反転復元し、口径約17.5cm、底部12.9cm、器高12.3cmを計る。胎土は精製粘土である。514は口縁部を反転復元し、口径19.1cm、底径13.4cm、器高12.5cmを計る。胎土は精製粘土。518は一部反転復元で口径11.4cm、底径14.0cm、器高9.5cmで、胎土は精製粘土である。520は蓋で口縁部は反転復元である。口径約15.5cm、器高8.1cmを計る。523の鉢は口縁部1/2と底部が残り、内面はハケ状工具のナデである。口径13.5cm、底径2.8cm、器高6.9cmを計る。525の鉢はほぼ完形、内面はハケ状工具ナデで口径14.0cm、底径3.6cm、器高6.3cm。530の鉢はほぼ完形で、口径9.1～9.9cm、器高8.9cmを計る。531の台付き鉢は1/2の残存率で、内面は



第95図 溝-16出土遺物（6）



第96図 溝-16出土遺物 (7)

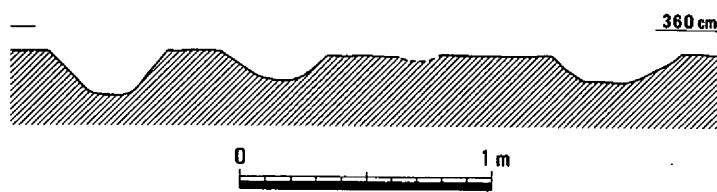


第97図 溝-16出土遺物 (8)

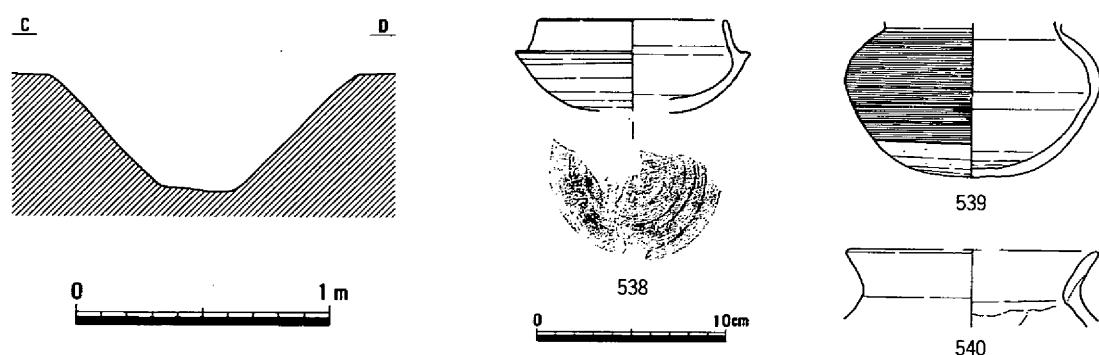
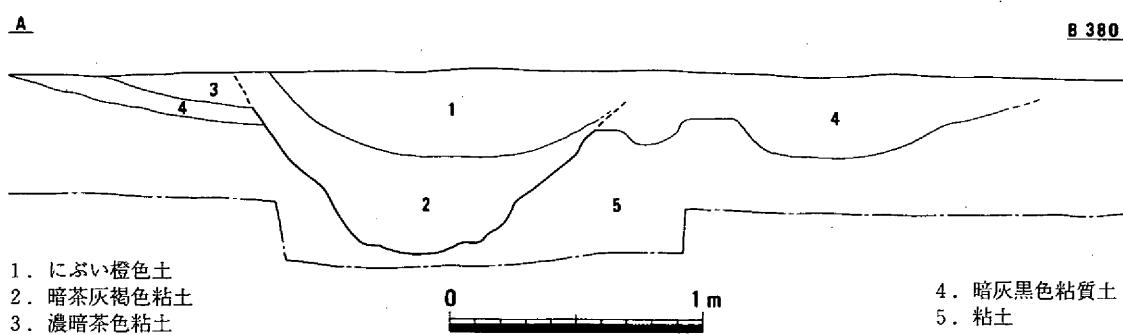
溝-17, 18, 19, 20

(第98図、図版7-1)

側溝3区中央から道路4区Cを通
過し、東側の4区拡張区へ向い南東
に流走する溝群である。溝-16の底
面(海拔355cm)下からの検出であり、
溝-16に先行する溝群である。これら4本の溝底海拔高は333~334cmをはかり、溝-18の埋土から古



第98図 溝-17, 18, 19, 20 (1/30)



第99図 溝-21 (1/30)・出土遺物

墳時代前期の小土器片が出土している。溝-16の多量の遺物は溝-17~20が埋没した直後から投棄されている。溝-17~20は古・前・Iの早い時期に埋没し、古・前・Iの中相まで遺物の投棄が継続しているようである。

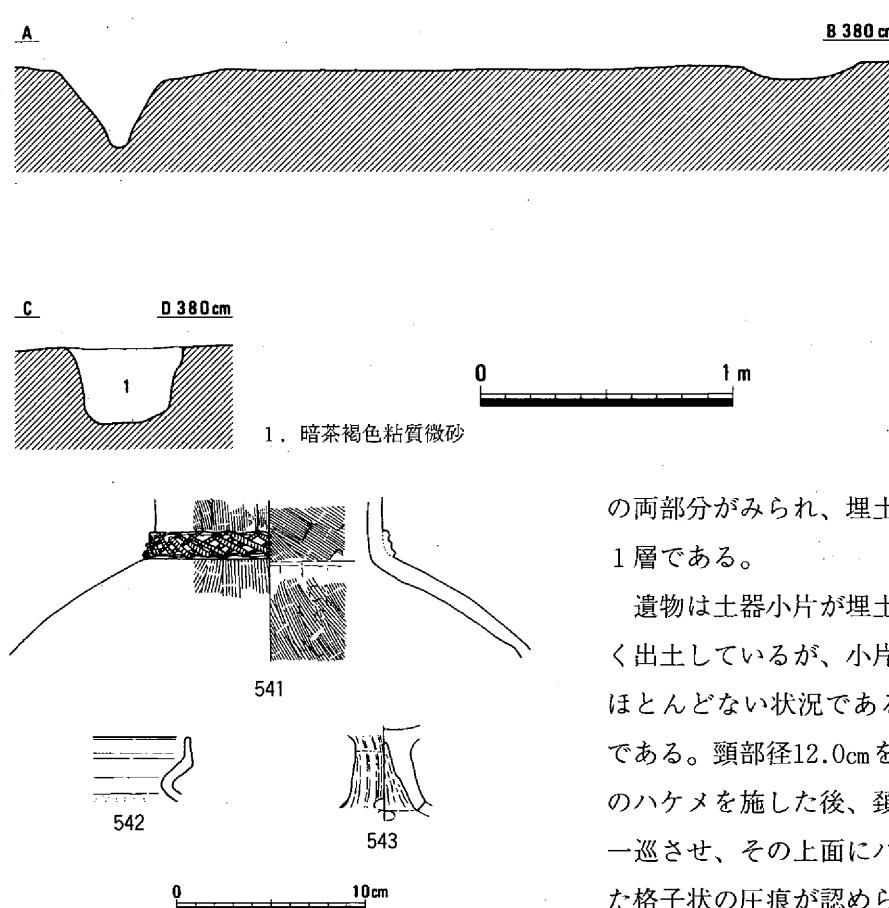
(高畠)

溝-21 (第99図)

道路5区Aの南西隅から5区Bの南東方向にはほぼ直線的に流走する古墳時代中～後期の溝である。溝の上端部幅120~150cm、下端部幅26~32cm、深さ約75cm、底面海拔高275~284cmをはかる。他の時期の溝と異なる点は、溝底面に直径33×28cm~44×36cmの皿形の小穴が数珠つなぎ状に掘られていることである。あたかも、溝内を歩くときの滑り止めの役割を果たしているかのようである。断面形態は逆台形状に掘られ、底面に小穴が付属する。埋土は2層からなり、第1層がにぶい橙色土、第2層が暗茶灰褐色粘土であり、小穴内には砂等の堆積はなく、第2層と同質の粘土がみられた。

遺物は第2層中からの出土であり、それも底面に接しての出土である。杯身538は口径9.8cm、最大径12.5cm、器高4.9cmをはかり、色調は灰色を呈する。短頸壺541は最大径13.5cmをはかり、胸部はカキメが施されている。ヘラケズリの方向は2点とも左廻り、土器の回転は右廻りである。5世紀末～6世紀前半と考えられ、本調査においての古墳時代の溝では新しい時期である。

(高畠)



第100図 溝-22, 24 (1/30)・出土遺物

古・前・Iの時期に機能した溝であろう。

溝-24は溝-22の200m東側に並んで南流する浅い溝である。上端部幅45~60cm、深さ31~41cm、底面海拔高は365cmをはかる。埋土中に土師器小片と鉄滓1点が認められた。

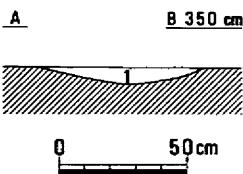
(高畠)

溝-22, 24 (第100図)

両溝は道路5区Bに所在し、約200cmの間隔をもって北西方向から南東方向に並んで流走する。溝-22は上端部幅45~60cm、深さ31~41cm、底面海拔高は326~337cmをはかる。断面形は箱形と台形状

の両部分がみられ、埋土は暗茶褐色粘質微砂の第1層である。

遺物は土器小片が埋土の中～下位から比較的多く出土しているが、小片ゆえに実測可能なものがほとんどない状況である。壺541は頸、肩部のみである。頸部径12.0cmをはかり、器外面には縦位のハケメを施した後、頸部下位に貼り付け突帯を一巡させ、その上面にハケ状工具の先端を使用した格子状の圧痕が認められる。器内面もユビオサ工後、外面同様に斜、縦位のハケメが施されている。



1. 茶灰淡褐色粘質微砂

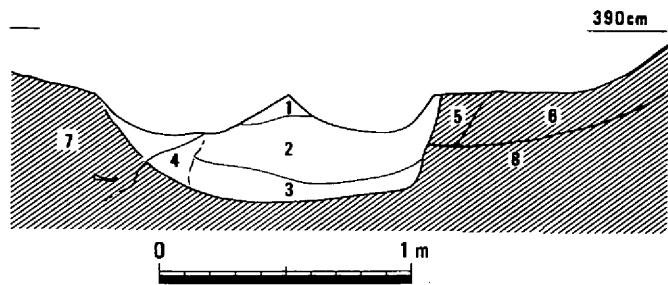
第101図 溝-23 (1/30)

溝-23 (第101図)

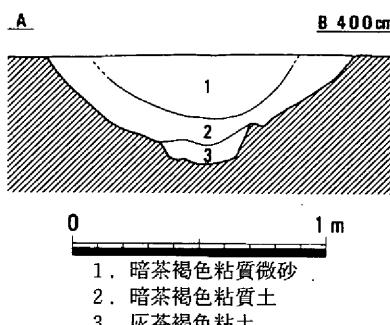
側溝4区北側から道路4区Bに向い南流する溝である。溝-22、24、25、26等と同一の流走方向をとっている。上端部幅30~40cm、深さ約10cm、底面海拔高351.5cmをはかる浅い溝である。断面は皿状を呈し、埋土は茶灰淡褐色粘質微砂の1層である。層中より土器小片が出土をしており、古・前・Iの前半と考えられる。(高畠)

溝-25、26 (第102図、図版8)

側溝4区中央から道路6区中央東に向う2条の溝である。溝-25は溝-26が埋没後に新たに埋土内東側に掘削された溝であり、第2層があたる。上端部幅65cm、深さ23cm、底面海拔高348cmをはかる。断面は楕形を呈し、埋土は茶灰色粘土の1層である。溝底には鉄分の沈着、凝集が認められる。



- | | |
|-------------------------|-------------------|
| 1. 暗茶灰色粘土 | 5. 淡茶灰色微砂粘土 |
| 2. 茶灰色粘土 (溝-25) | 6. 淡茶灰橙色土 (Feを含む) |
| 3. 淡茶灰色粘質微砂 | |
| 4. 淡茶灰色橙色粘質微砂 (Fe層が混じる) | |



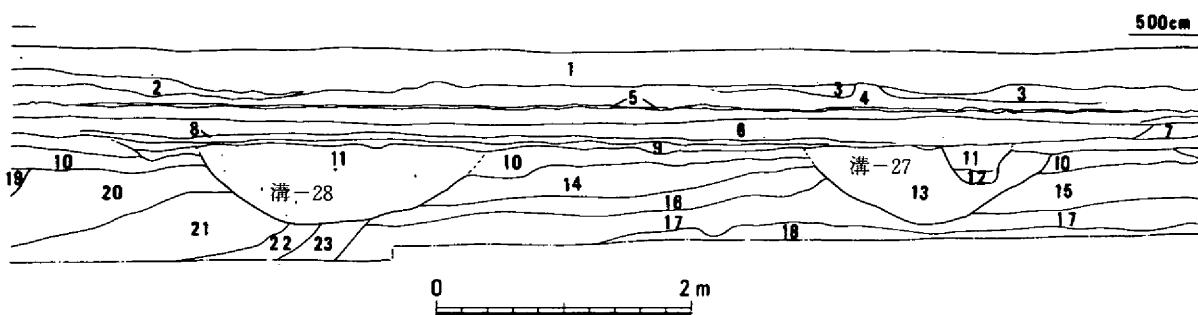
第103図 溝-27 (1/30)

第102図 溝-25, 26 (1/30)

遺物は埋土中に小土器片がみられたが、実測は不可能であった。古・前・Iの範疇と考えられる。

溝-26は上端部156cm、深さ55~61cm、底面海拔高318~324cmをはかる。断面は楕形を呈し、埋土は第3層~第6層からなる。遺物はほとんど無く、溝-25と同様にボウフラの小片が数点みられただけである。両溝とも古・前・Iの範疇である。

(高畠)

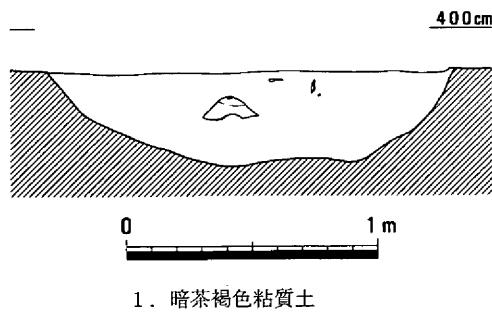


1. 黒灰色粘質微砂
2. 赤黄褐色粘質微砂
3. 淡茶褐色粘質微砂
4. 茶褐色粘質微砂 (水田)
5. 淡茶褐色粘質微砂
6. 茶褐色粘質微砂
7. 茶褐色粘質微砂
8. 淡茶褐色粘質微砂

9. 暗茶褐色粘質微砂
10. 橙茶色粘質微砂
11. 淡橙茶色粘質微砂 (溝-28)
12. 黄茶褐色粘質微砂
13. 橙茶色粘質微砂 (溝-27)
14. 暗茶褐色粘質微砂
15. 茶褐色粘質微砂
16. 暗茶褐色粘質微砂

17. 茶褐色微砂
18. 黄茶褐色粘質微砂
19. 黄茶褐色微砂 (溝-29)
20. 暗茶褐色粘質微砂
21. 橙茶褐色粘質微砂
22. 黄茶褐色粘質微砂
23. 淡黄茶褐色粘質微砂 (溝-29下層)

第104図 溝-27, 28 (1/60)



第105図 溝-28 (1/30)

遺物は少量の破片のみであるが、土師器の型式及び溝-28との関係から、古墳前期のものと考えられる。

(速水)

溝-28 (第105図, 図版8-3, 図版9-1)

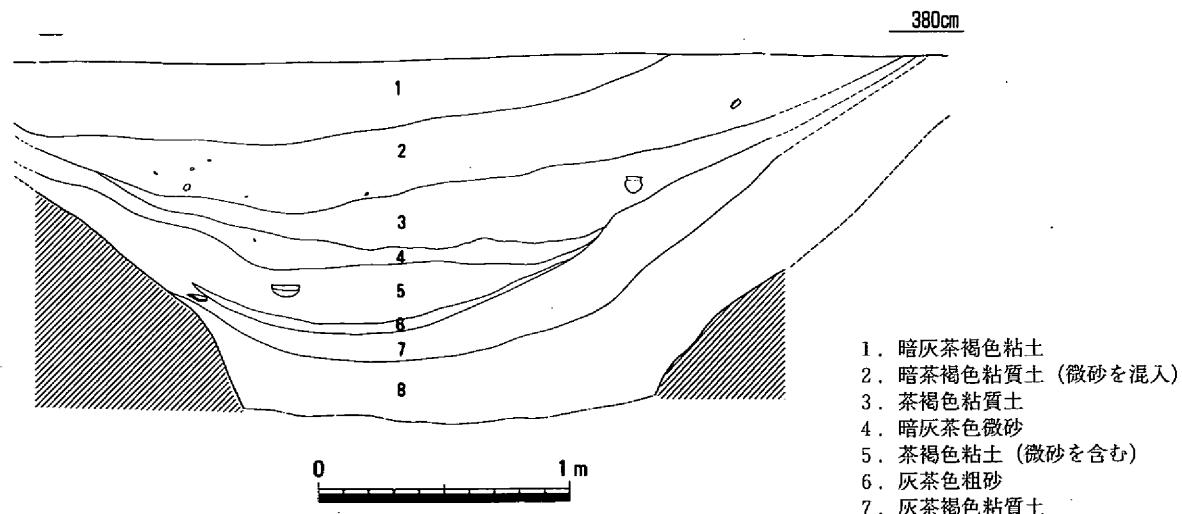
道路6区の南部を溝-27とほぼ平行しながら北西から東西南北方向にななめに横切るように流れている。幅は152~163cmで深さは約38cmである。底面海拔高は、約345cmである。断面形は皿状を呈し、1層からなる。

遺物は、土師器を中心に多くの土器が出土した。調査区内の溝の北西部を中心として全面的に一括して廃棄するようななかたちである。544~549は土師器の壺である。548は焼成後の穿孔が行なわれている。550~555は土師器の甕である。550~553はいずれも口縁部に7~10条の櫛描き沈線が見られる。甕・壺ともにどれも煤がよく付着しており、火を使った形跡が見られる。556~559、565は土師器の高杯である。胎土はどれも精良である。559は、すかし穴が3つ存在したと考えられる。560~564は土師器の鉢である。560は手捏ね風であり薄手で口縁が非常に歪んでいる。563は内側に暗文が見られる。564は焼成の前に底の部分に穿孔が行われている。566は鼓形の器台と呼ばれるもので、山陰に多く見られるものである。土師器の型式などから古墳前期のものと考えられる。

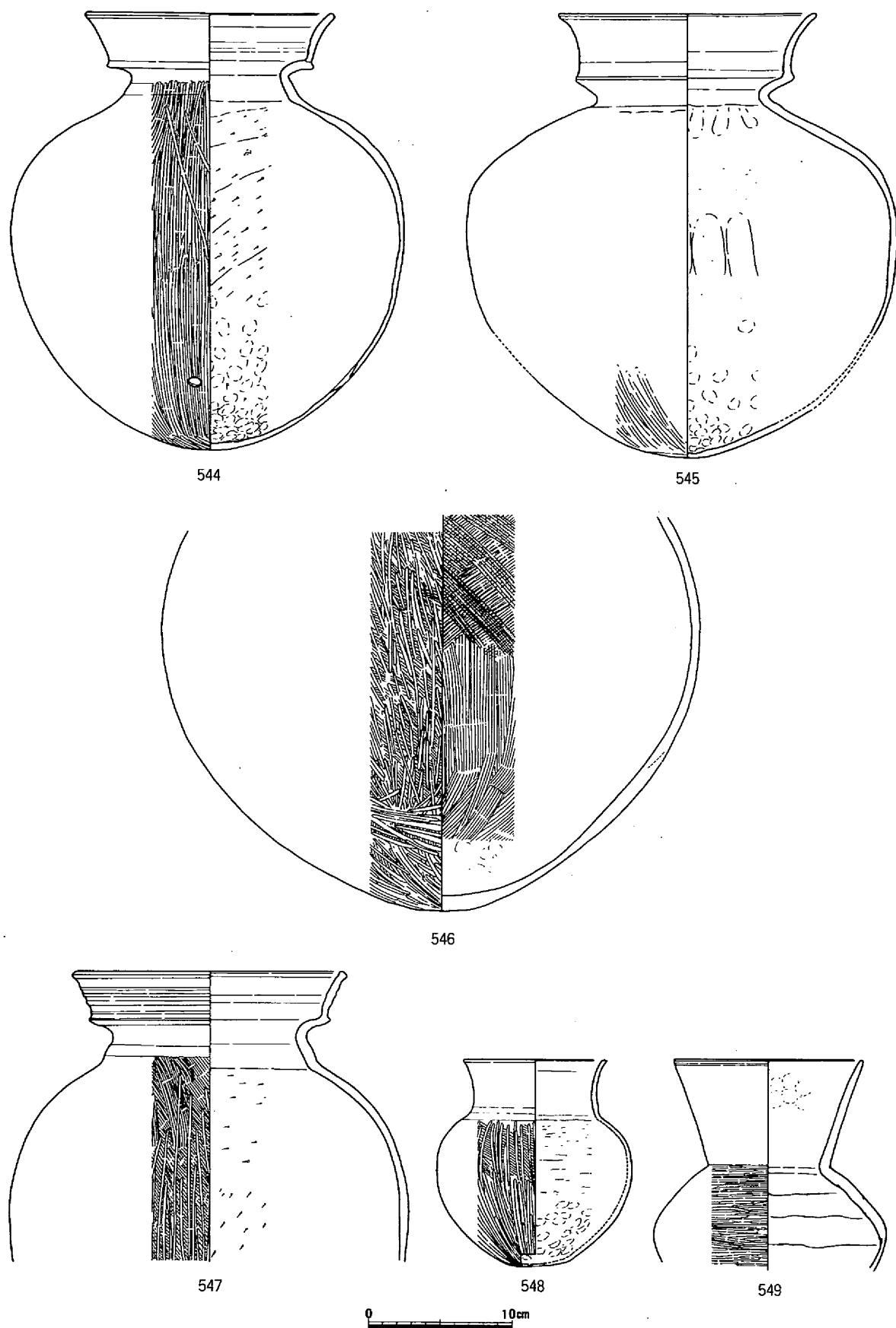
(速水)

溝-29 (第106・109~111図)

側溝4区南から道路6区・7区を貫流し南東方向に流走する大きい溝である。まずは、すぐ南に所在する津寺遺跡高田調査区に集合する用排水路の一群であろう。上端部の幅は西側用地外と東側の旧用水路の為に計測できていないが、残存幅370cm以上、深さ145cm以上、掘削停止面で海拔225cmをは

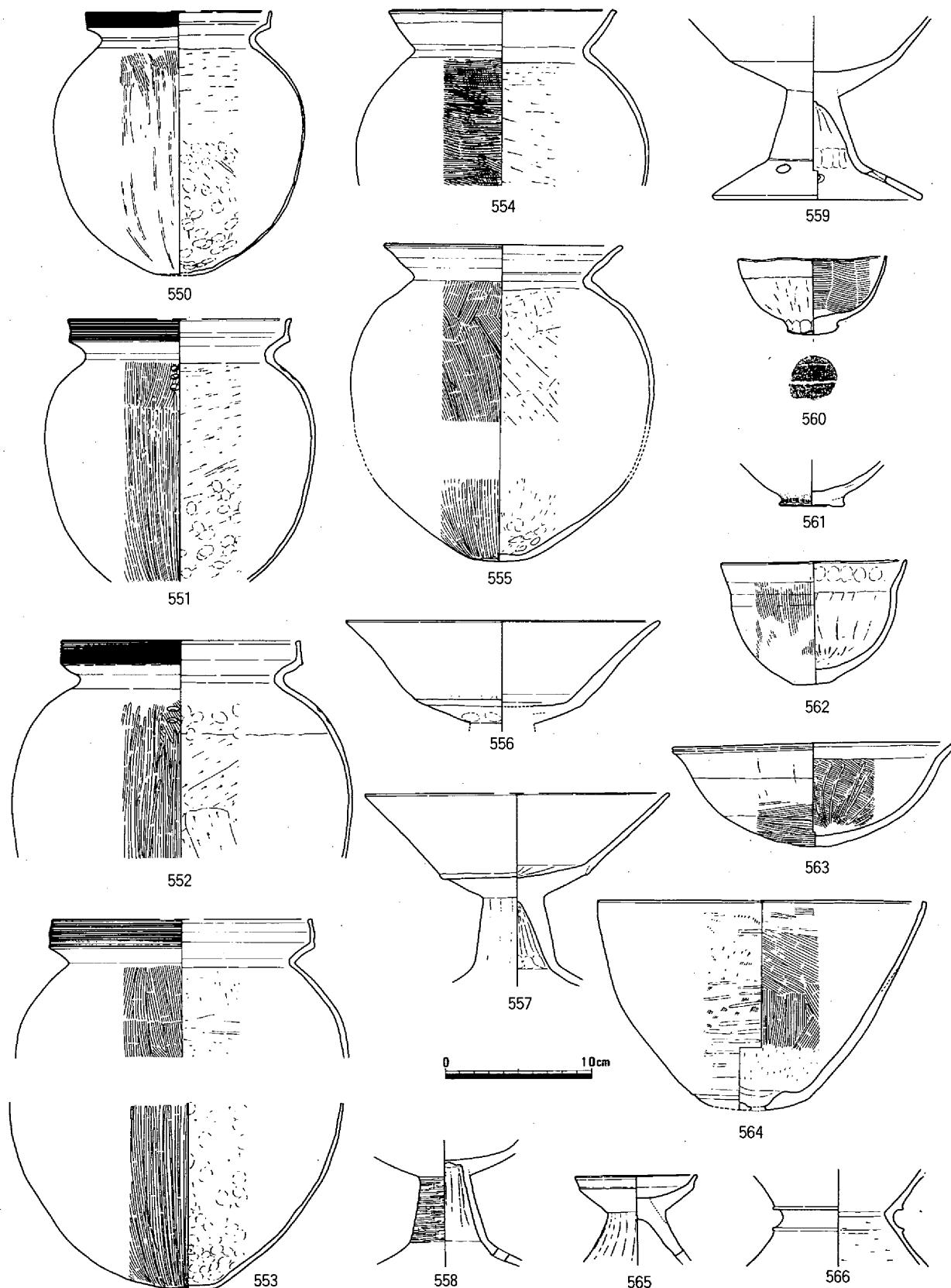


第106図 溝-29 (1/30)



第107図 溝-28出土遺物(1)

かることが判明している。断面形態は椀形を呈し、埋土は第1～第8層までが確認できている。第1～第3層、5、7、8層が粘土あるいは粘質の強い土壙であり、粗砂をかむものが第4層、第6層で

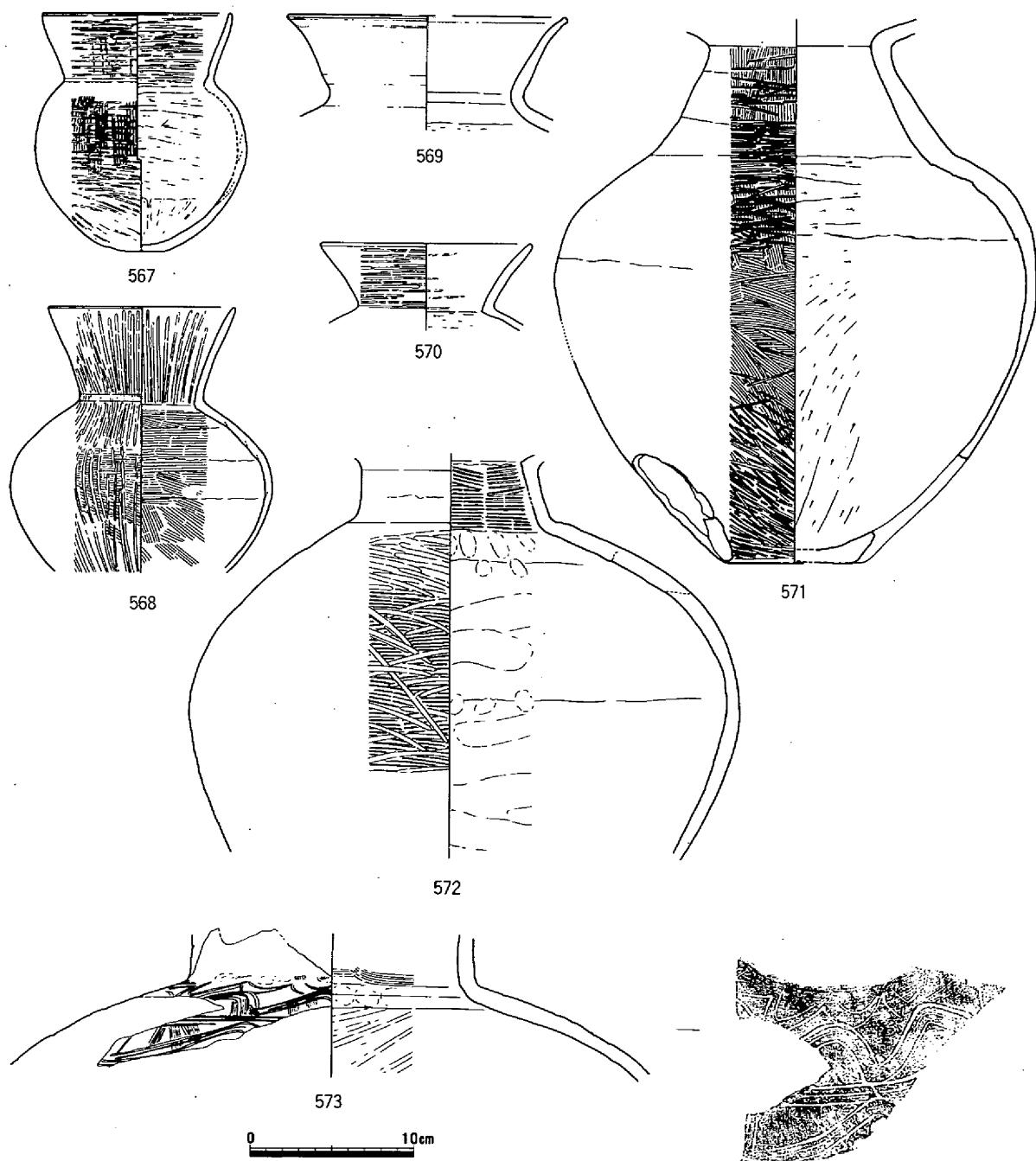


第108図 溝-28出土遺物(2)

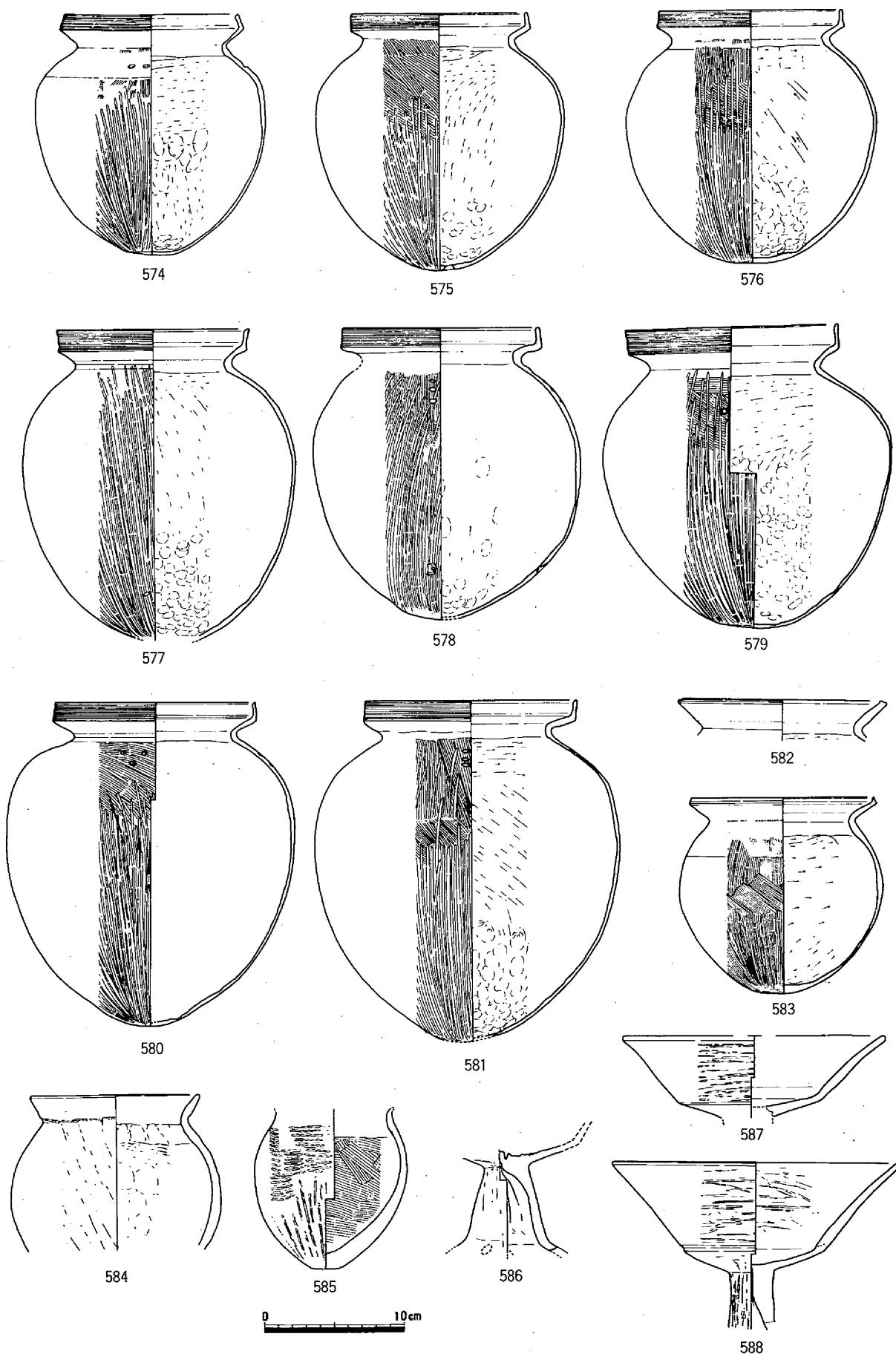
ある。遺物は各層に認められるが、なかでも第3層中に多く、東側から投棄された状況であった。まとまって出土をしており、第3層東側の下位に帶状に並んでみられた。567～572、575～583、586～588、590、593等がある。ほかでは、第5層において585、591が出土しており、他は第3層より上位での出土である。

遺物は壺、甕、高杯、鉢等があり、なかでも甕が多い。壺573は肩部に櫛状工具による波状の沈線文様が描かれている。甕574～581は吉備甕であり、体部から底部に向い窄んでいるが、平底はみられず丸底化が進んでいる。ちなみに、甕574は口径12.5cm、器高17.4cm、容量約2.5ℓ、甕581は口径14.9cm、器高24.3cm、容量約4.7ℓをはかる。甕583は色調にぶい黄橙色を呈し、胎土中に角閃石を含む。在産地ではないだろう。切り合い、土器の特徴から古・前・Iの中相に比定できる。

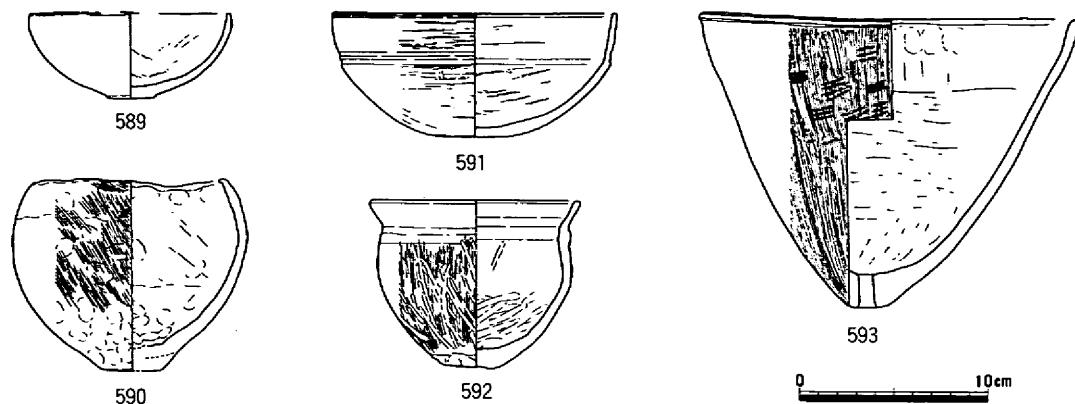
(高畠)



第109図 溝-29出土遺物(1)



第110図 溝-29出土遺物(2)



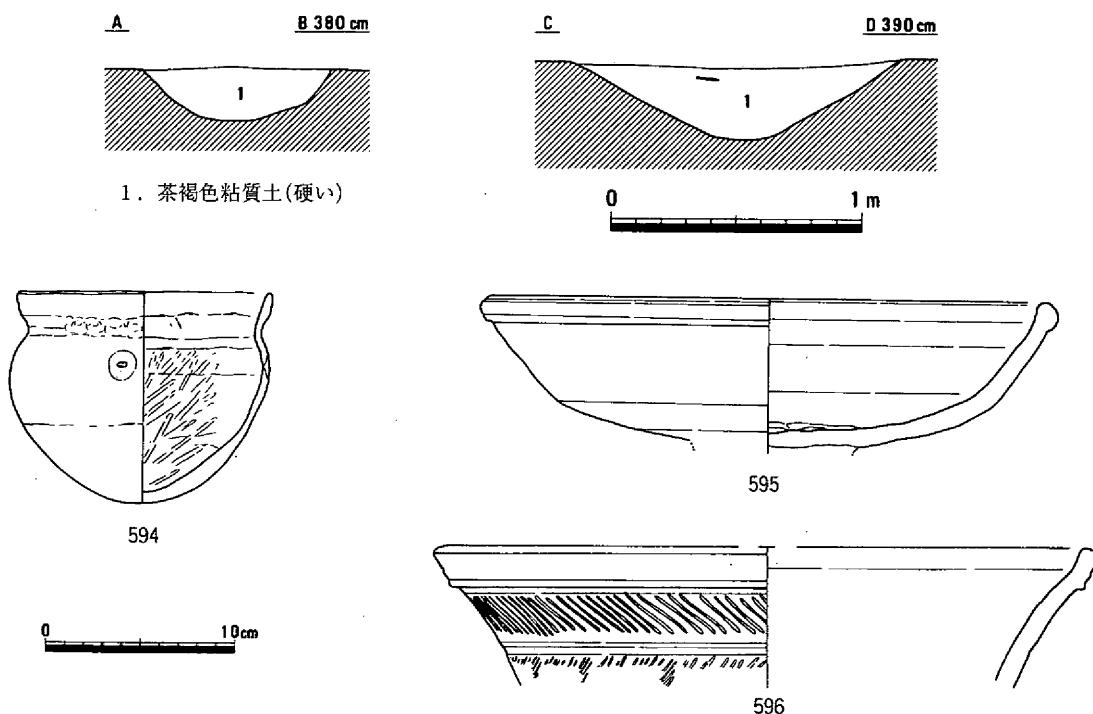
第111図 溝-29出土遺物(3)

溝-32 (第112図、図版9-2)

5区Aの南側に所在し、南北延長13.0mを検出したが、さらに南側については把握が困難であった。溝-31とは同じ溝の可能性が考えられ、基本的には南東方向に流走したであろう。溝の上端部幅130cm、深さ20~30cm、底面海拔高は349cm、溝-31では367cmをはかり、上流が少し高い状況を示す。断面形態は椀形を呈し、埋土は茶褐色粘質土の1層である。

遺物は、小土器片が溝内全体に散布する状況であった。12ブロックに分け、遺物の取り上げを行ったが、接合可能な土器はほとんど無く、破片になったものが東西から投棄された状況が判明した。

器台595は少し焼成が不良の須恵器であり、灰白色を呈する。口径29.3cm、残存高7.8cmをはかり、脚部は欠損しており、底面に直径9.0cmの脚の筒部痕跡がみられる。甕596は口径33.65cmをはかる大甕の口縁部である。制作時の土器の回転は右廻りであり、内面と外面の一部に自然釉がみられる。鉢594は溝の近く出土であるが、伴う土器ではない。古墳時代後期の範疇での溝である。(高畠)



第112図 溝-32 (1/30)・出土遺物

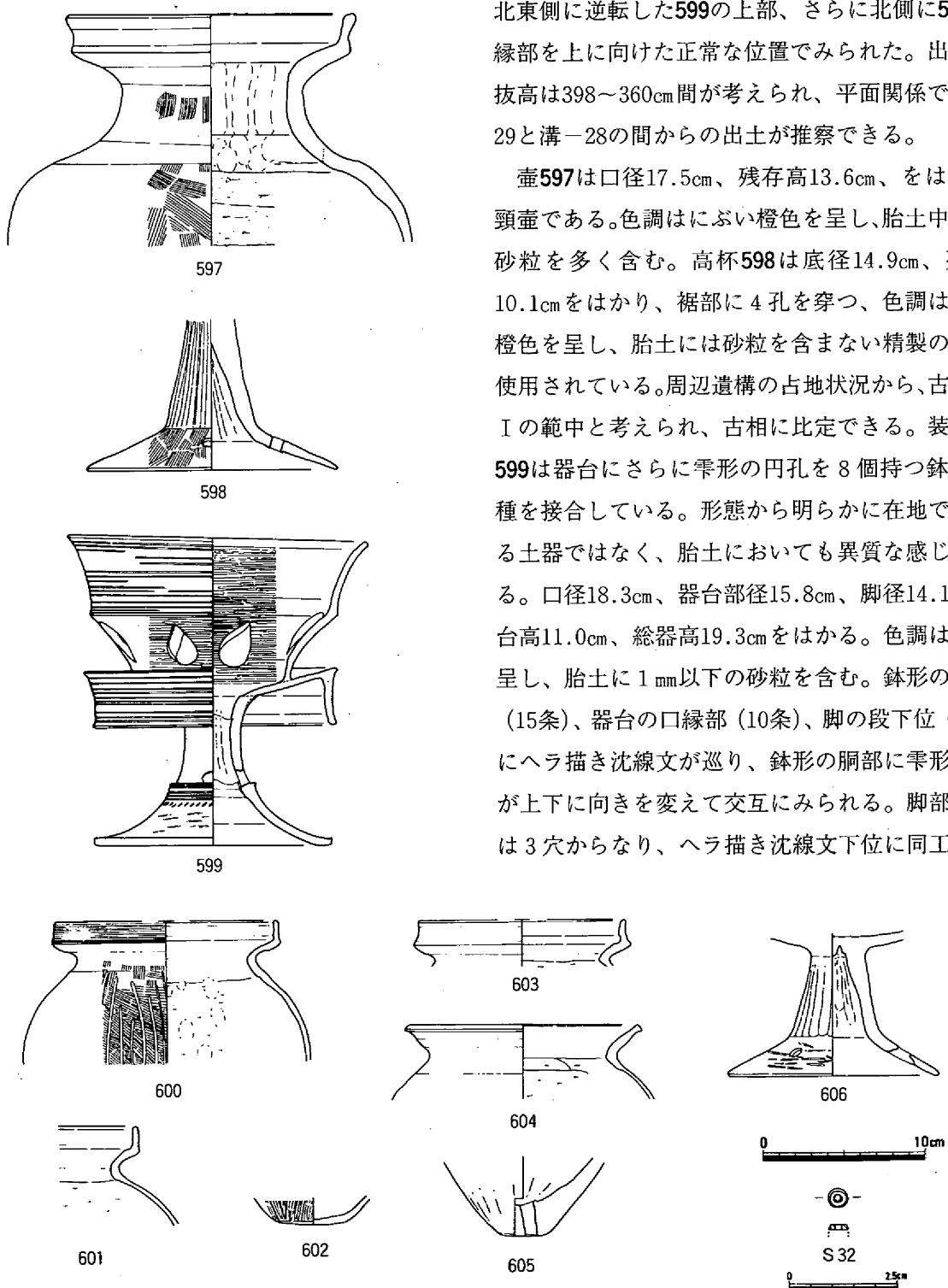
(6) 遺構に伴わない遺物

古墳時代の遺構に伴わない遺物は、調査区ほぼ全体に散布する状況であり、古墳時代前期が多く、古墳時代中期、後期と出土遺構数に順ずる出土である（第113図）。

597～599は側溝4区の南側、溝-29付近ということで、確実な位置が押えられていない遺物である。出土状況は、幅26cmの南北側溝内の約42cmの範囲に3点がまとまり、南端に器台599の脚、その少し

北東側に逆転した599の上部、さらに北側に597が口縁部を上に向けた正常な位置でみられた。出土の海拔高は398～360cm間が考えられ、平面関係では溝-29と溝-28の間からの出土が推察できる。

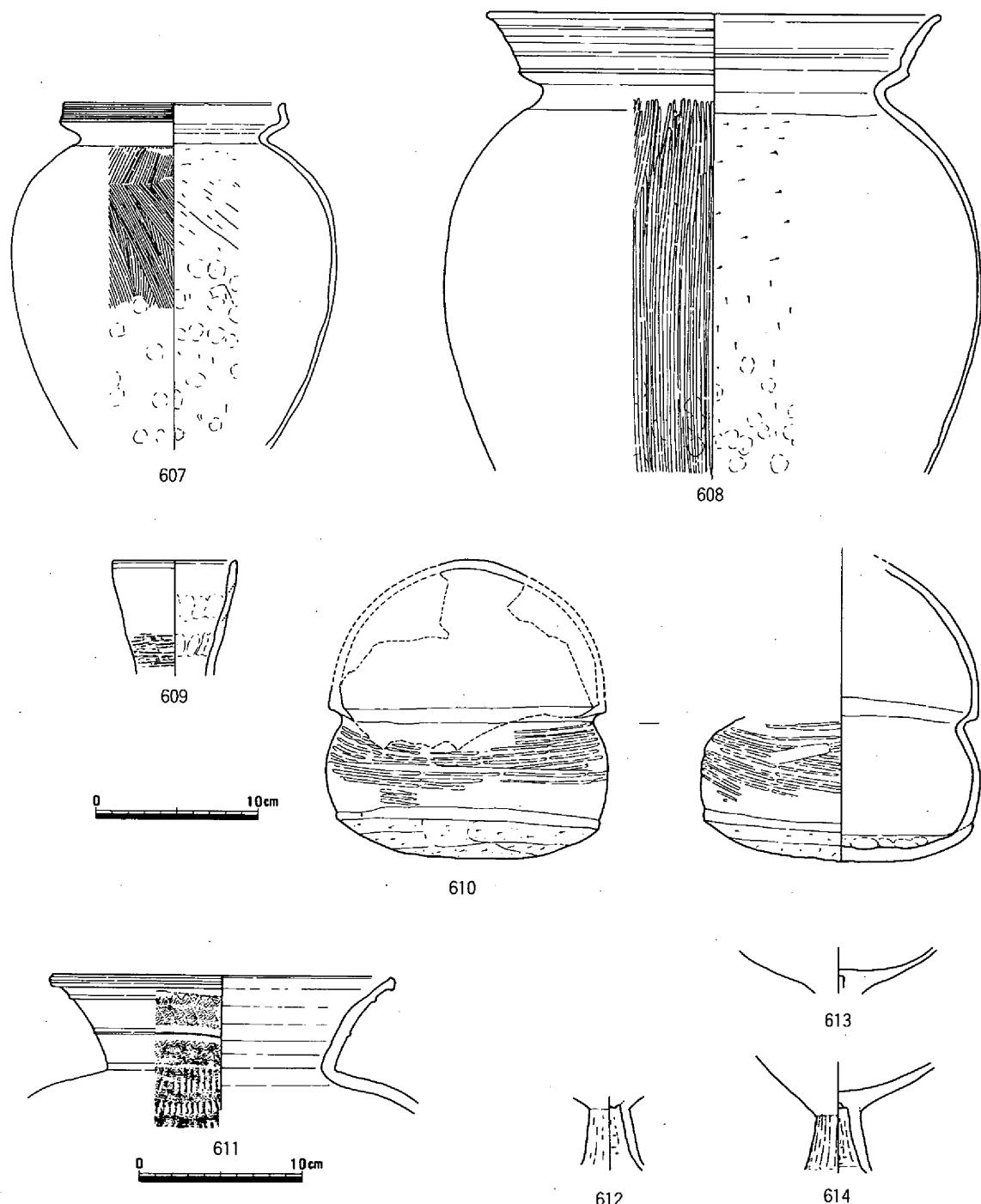
壺597は口径17.5cm、残存高13.6cm、をはかる長頸壺である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に礫・砂粒を多く含む。高杯598は底径14.9cm、残存高10.1cmをはかり、裾部に4孔を穿つ、色調はにぶい橙色を呈し、胎土には砂粒を含まない精製の粘土が使用されている。周辺遺構の占地状況から、古・前・Iの範中と考えられ、古相に比定できる。装飾器台599は器台にさらに円形の円孔を8個持つ鉢形の器種を接合している。形態から明らかに在地でみられる土器ではなく、胎土においても異質な感じを受けける。口径18.3cm、器台部径15.8cm、脚径14.1cm、器台高11.0cm、総器高19.3cmをはかる。色調は橙色を呈し、胎土に1mm以下の砂粒を含む。鉢形の口縁部(15条)、器台の口縁部(10条)、脚の段下位(4条)にヘラ描き沈線文が巡り、鉢形の胴部に円形の円孔が上下に向きを変えて交互にみられる。脚部の円孔は3穴からなり、ヘラ描き沈線文下位に同工具によ



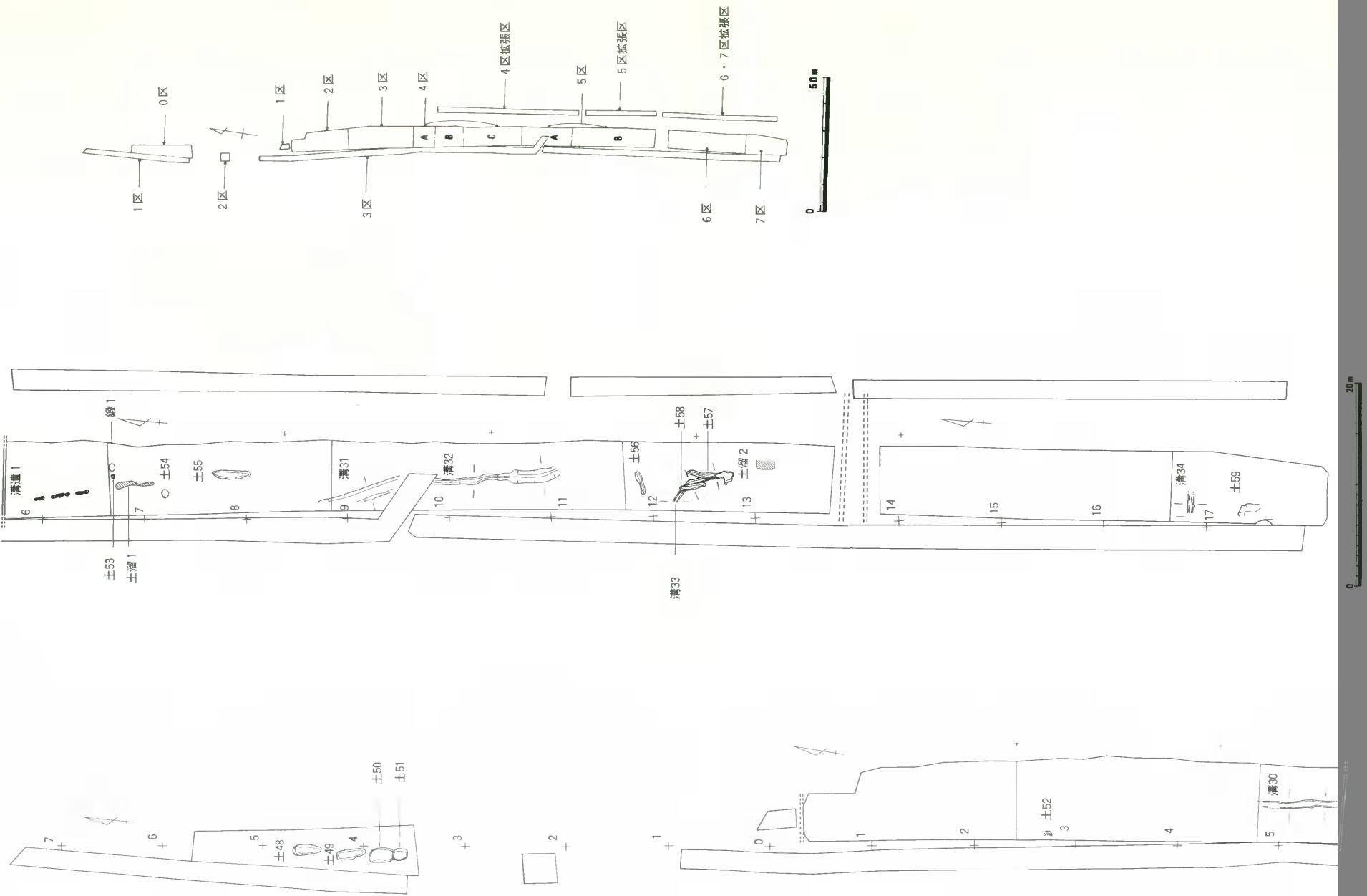
第113図 遺構に伴わない遺物(1)

る列点文が一巡する。器壁は総じて薄く、端整な土器である。胎土分析では山陰領域が生産地である推定結果が出ている。

600～607は道路4区Cにまとまりをもって散布した土器であり、溝-16に関連する可能性がある一群である。S32は5区の包含層から出土した滑石製の勾玉であり、直径0.43cm、厚さ0.12cm、孔径0.15cm、重量0.03gをはかる。608が6区、609が3区、610が4区からの出土である。611は須恵器の甕であり、口径20.5cmをはかる。道路3区の出土であり、竪穴住居-11の208の器外面のタタキメに近い文様をもつ。612～614もほぼ同じ場所からの出土であり、竪穴住居-11に伴う可能性がある。
(高畠)



第114図 遺構に伴わない遺物(2)



第115図 津寺三本木遺跡古代全体図 (1/400)

第4節 古代の遺構・遺物

(1) 古代の概要

津寺三本木遺跡では古代の遺構・遺物の出土数はあまり多くない。継続性があり、安定していたと考えられる遺構は道路0区から検出された土壙-48~51である。土壙-49, 51からは須恵器、土師器、瓦、製塩土器、鉄塊等が一括投棄された状態で出土をしており、8世紀の第2四半期から第3四半期にかかるあたりに比定できるものである。南西250mに位置する津寺遺跡の長方形区画溝（123.80×94.00m）にみられた繭溝と酷似をしており、官衙的な施設に関連を持つ遺構の一部の可能性がある。ほぼ同時期と考えられる遺構は道路3区の土壙-52、道路6区の土壙-59、道路5区Bの溝-33の4遺構、計9遺構のみであり、建物、溝等の大規模な遺構の存在は確認できていない。

しかし、一般の消費地ではあまり出土をみない遺物がみられる。土壙-48の杯身616、土壙-51の杯身638、639、溝-33の高台付の杯身656、5区A包含層の杯身684・高杯685、5区B包含層の高杯717には丹塗りが施されている。656は器内にヘラ先による螺旋暗文の描かれた丹塗りの土師器である。また、685、717のように筒部に面取りが施された丹塗りの高杯等がある。よって、公約施設そのものではないが、広い意味での官衙域内にある生活の場として把握を行うことが可能であろう。また、輪の羽口（C4～C6）の存在等からも、鍛冶関連の場所の周辺に位置する可能性が考えられる。この地域が津寺遺跡の長方形区画溝（11,637.2m²）、建物施設等と有機的な関連をもつ場所であることが判明した。

この時期より古い7世紀の第2四半期から第3四半期にかかる遺構、遺物が若干認められる。遺構は4区Cの土器溜り-1のみである。この遺構は上部に削平を受けた溝状遺構内の底面に土器片が直線上に並び、残されたものと考えられる。須恵器の杯身セット657、658は非常に小振りになった器種であり、時期決定の目安になるものである。包含層にも同時期の遺物がみられる。

この時期に近い遺構では、南側約130mに位置する津寺遺跡高田調査区において94軒からなる古墳時代後期の竪穴住居が所在する。数軒でまとまりのある竪穴住居が小溝により区画され、小単位を形成しており、横穴式石室との関連において重要な資料を呈示した集落でもある。

土器溜り-1の遺物は、前述の竪穴住居とも時期を同じくするものはほんのわずかであり、一軒程度である。ほぼ同じ時期と考えられる須恵器は数点のみであり、それも溝内の埋土、包含層からの出土である。すなわち、高田地区の集落の繁栄時には津寺三本木遺跡での同時期の遺構はほとんど無く、次のステージ段階で土器溜り-1が現われている。この現象は津寺遺跡の西川、中屋、高田調査区にも共通している点である。

8世紀の第2四半期から第3四半期より新しい遺構もまた少なく、遺物の出土しているもので明確な遺構は土器溜り-2、土壙-57、土壙-58等である。土壙-57、土壙-58の埋土中からは内黒の土師器小片が出土している。土器溜り-1は須恵器杯身718、土師器719が出土しており、719は口径12.6cm、底径8.4cm、器高2.47cmをはかる。9世紀末～10世紀初頭の時期に比定できる。この地区的古代は7世紀前半、8世紀中葉、10世紀前後の3時期が認められる。

（高畠）

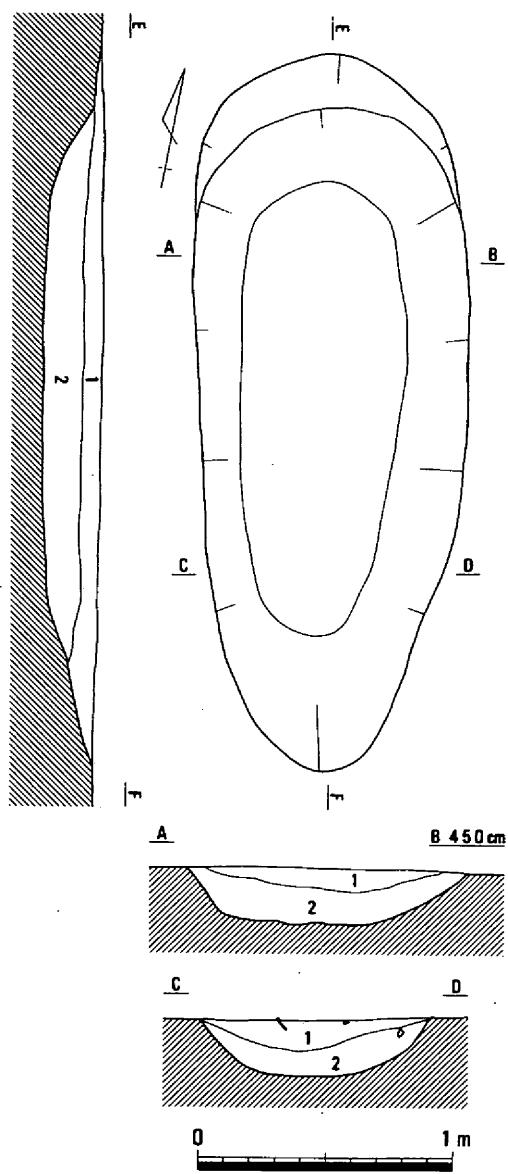
(2) 土壌

土壤-48 (第116図、図版-1)

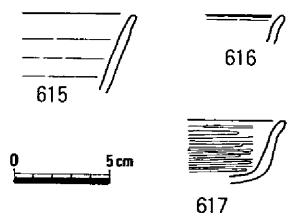
道路0区に所在し、南北方向に縦列に並ぶ土壤-49~51の計4基のうち、最も北に位置する。長さ286cm、幅109cm、検出面からの深さ22cmを測る。底面の海拔高は418cmである。掘り方はやや歪な長楕円形であり、2段になっている。埋土は灰褐色を基調とする砂質土であった。

出土遺物は615~617の土師器を図示した。615は杯あるいは直口蓋か。616、617は杯か皿の口縁部であり、616は丹塗りである。時期は奈良時代前半と推測される。

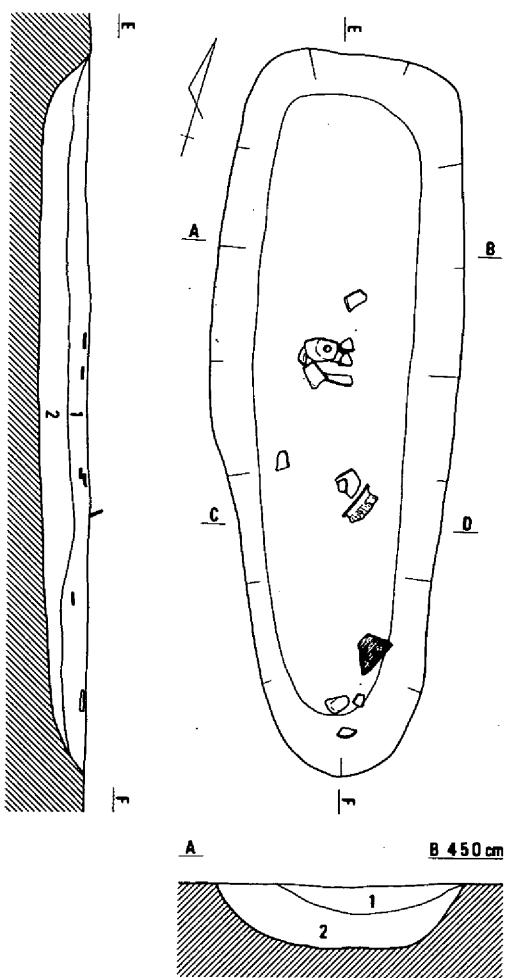
(大橋)



1. 暗褐色粘質微砂 (土器含む)
2. 灰褐色粘質微砂



第116図 土壌-48 (1/30)・出土遺物



1. 灰褐色微砂 (炭・焼土を含む)
2. 灰茶色微砂 (炭・焼土を含む)

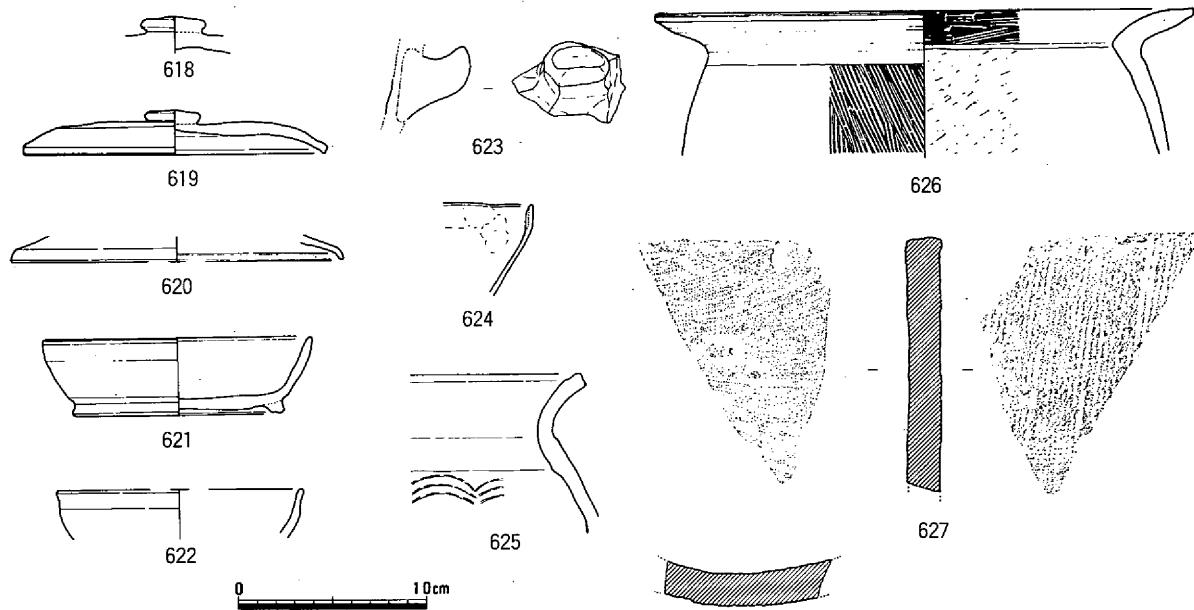
第117図 土壌-49 (1/30)

土壙-49（第117・118図、図版10-1・3）

土壙-48の南隣に位置し、規模もほぼ同じである。掘り方は不整な長楕円形を呈し、長さ287cm、幅100cm、検出面からの深さ22cmを測る。底面の海拔高は419cmであった。埋土は灰褐色を基調とし、わずかに焼土も含まれている。

出土遺物は、その多くが上層にある。618～620は須恵器蓋、621、622が須恵器杯、625は須恵器甕である。623は土師器甕の把手、624は製塩土器、626は土師器甕である。627は布目の平瓦である。時期はこれらから奈良時代前半と判断した。

(大橋)



第118図 土壙-49出土遺物

土壙-50, 51（第119図、図版10-1・2）

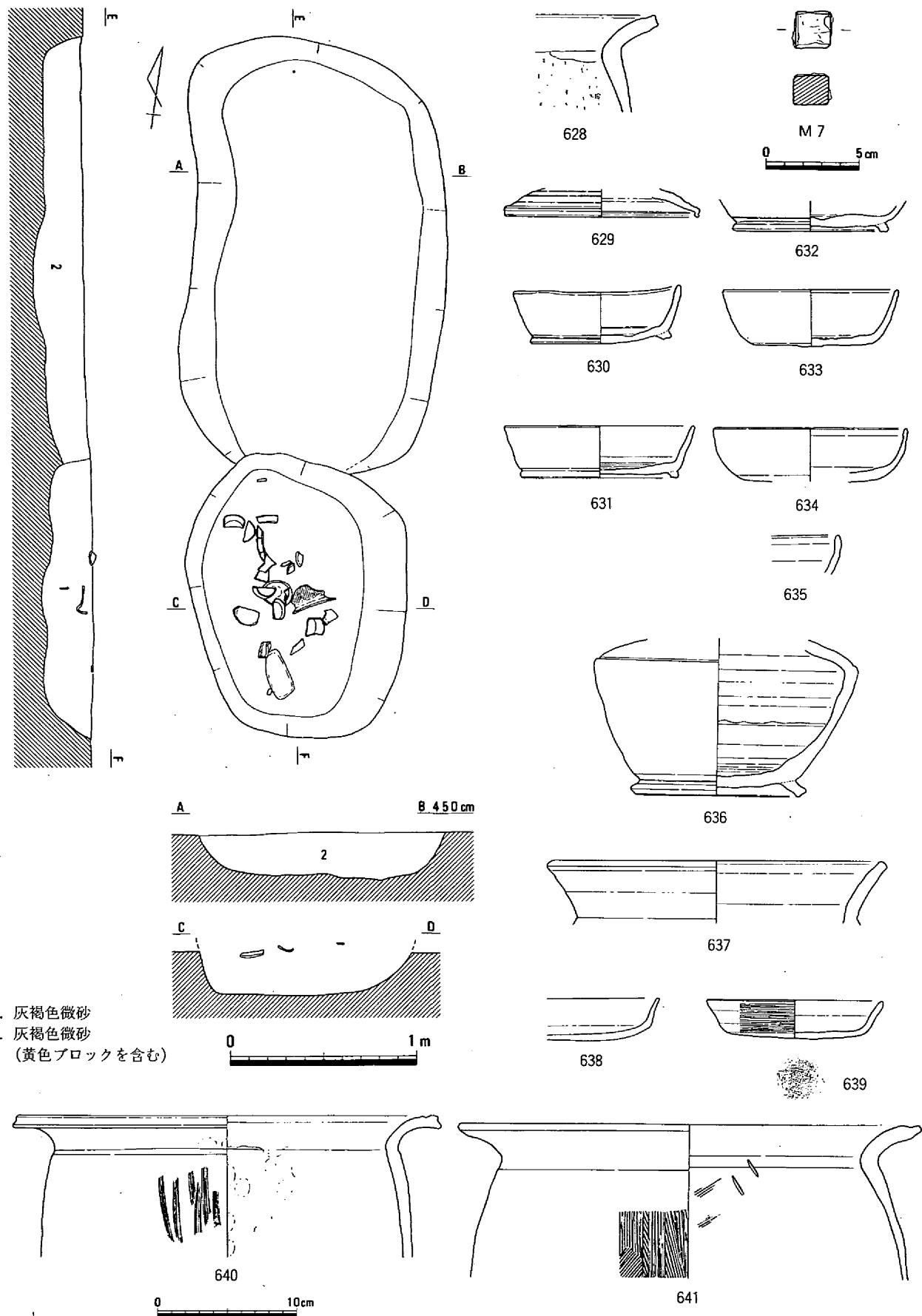
土壙-49の南隣に位置する。調査時においては土層観察により、土壙-51が後出すると判断したが、同時存在の可能性が高い。両者とも埋土は土壙-48・49同様、灰褐色を基調とする。

土壙-50は不整長楕円形の掘り方を持ち、長さ226cm、幅138cm、深さ27cmを測る。底面はやや中央部が低く、その海拔高は413cmである。土壙-51は不整円形の掘り方を持ち、長さ151cm、幅128cm、深さ23cmを測る。底面海拔高は417cmを測り、土壙-48～51の4基はほぼ同じである。

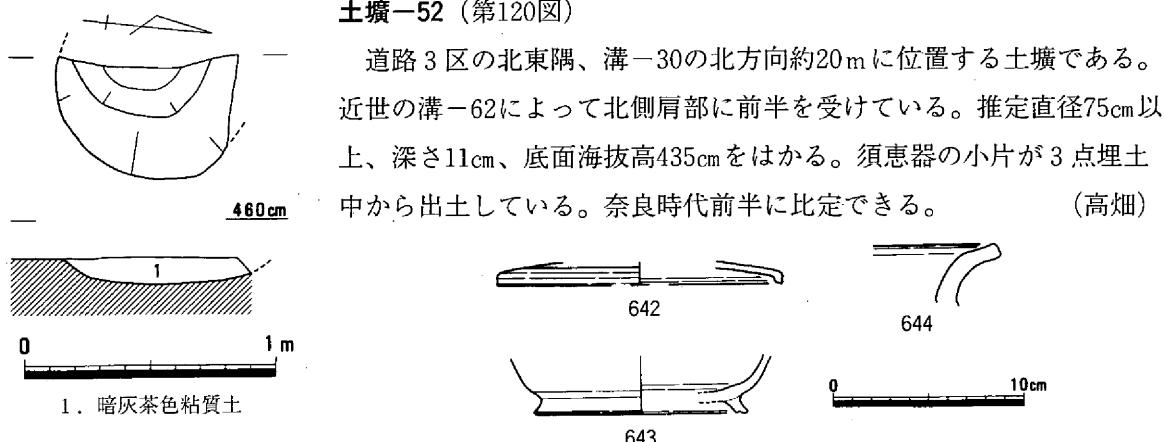
図示した遺物は、628が土壙-50、その他は土壙-51の出土であり、比較的多くの土器とともに礫も出土している。629～637は須恵器、638～641は土師器である。M7は不明鉄製品である。638、639の土師器は丹塗りであり、639の底部外面にはヘラ記号が認められる。なお、639の同一個体が土壙-49から出土している。時期は、奈良時代前半と判断した。

土壙-48～51は、その埋土、出土遺物、配列状況などを勘案すると同時に存在していたものと考えられる。また、その形状は近隣の津寺遺跡の長方形区画溝と酷似しており、これら4基の土壙は本来上部が削平された溝の下底部の残存状況を示すものと判断される。建物群は今回の調査では検出されなかったものの、この地域に別の区画が存在したのか、あるいは道路状遺構の側溝の可能性がある。なお、4基の土壙の長軸線方位はN-3°Wであり、津寺遺跡の長方形区画溝より西偏するが、いずれにせよ、津寺遺跡の長方形区画と有機的に結びついた遺構の一部と推測される。

(大橋)



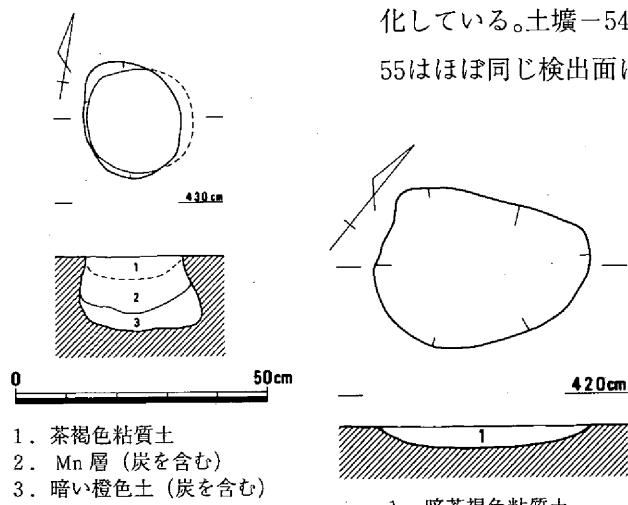
土壌-52（第120図）



第120図 土壌-52 (1/30)・出土遺物

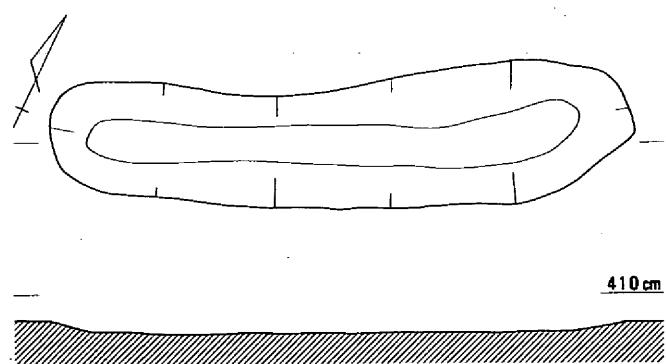
土壌-53～56（第121・122図）

道路4区Cに所在し、土壌-53が最も北にあり、約5.0m間隔で土壌-54、土壌-55と南に下がって分布する。土壌-53は23～20cm、深さ15cm、底面海拔高405cmをはかる。断面形は袋状を呈し、埋土の第2、3層には炭粒が多く含まれ、内壁は上から8.0cmまでが被熱し、焼土化している。土壌-54、55はほぼ同じ検出面に



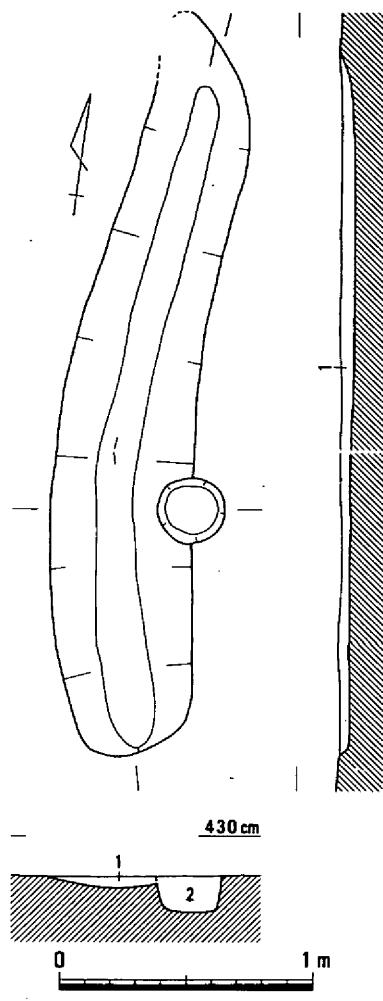
第121図 土壌-53 (1/15)

土壌-54

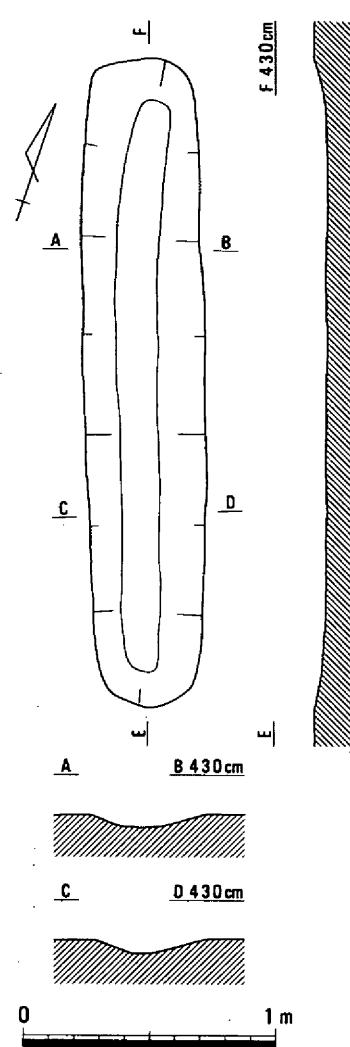


第122図 土壌-54～56 (1/30)

おいて確認されたものであり、断面形は浅い皿状を呈する。土壙-54の埋土は暗茶褐色粘質土であり、土壙-53に近い土質のものである。土壙-56は5区Bに所在し、 $230 \times 55\text{cm}$ 、深さ5.0cm、底面海拔高は394cmをはかる土壙である。遺物は奈良時代の土器小片が少しみられる程度である。(高畠)



第123図 土壙-57 (1/30)



第124図 土壙-58 (1/30)・出土遺物

土壙-57 (第123図)

道路5区B中央、土壙-58の東隣に位置する細長い土壙である。 $290 \times 55\text{cm}$ 、深さ60cm、底面海拔高409cmをはかる。土器小片約30点を含む。(高畠)

土壙-58 (第124図)

道路5区Bの中央、土壙-57の西隣に位置する。 $260 \times 48\text{cm}$ 、深さ5.0cm、底面海拔高は409cmをはかる細長い土壙である。土壙-57に近似する形状であり、埋土内から土師器片が約20点出土している。そのうち内黒の杯破片がみられる。

(高畠)

土壙-59 (第125図)

道路6区の西側中央、溝-34の2.0m北側に位置する。西側は用地外となり不明であり、南側は側溝にて削平を受けた不整形な土壙である。現存長 $220 \times 125\text{cm}$ をはかり、北東部分が現状をとどめている。

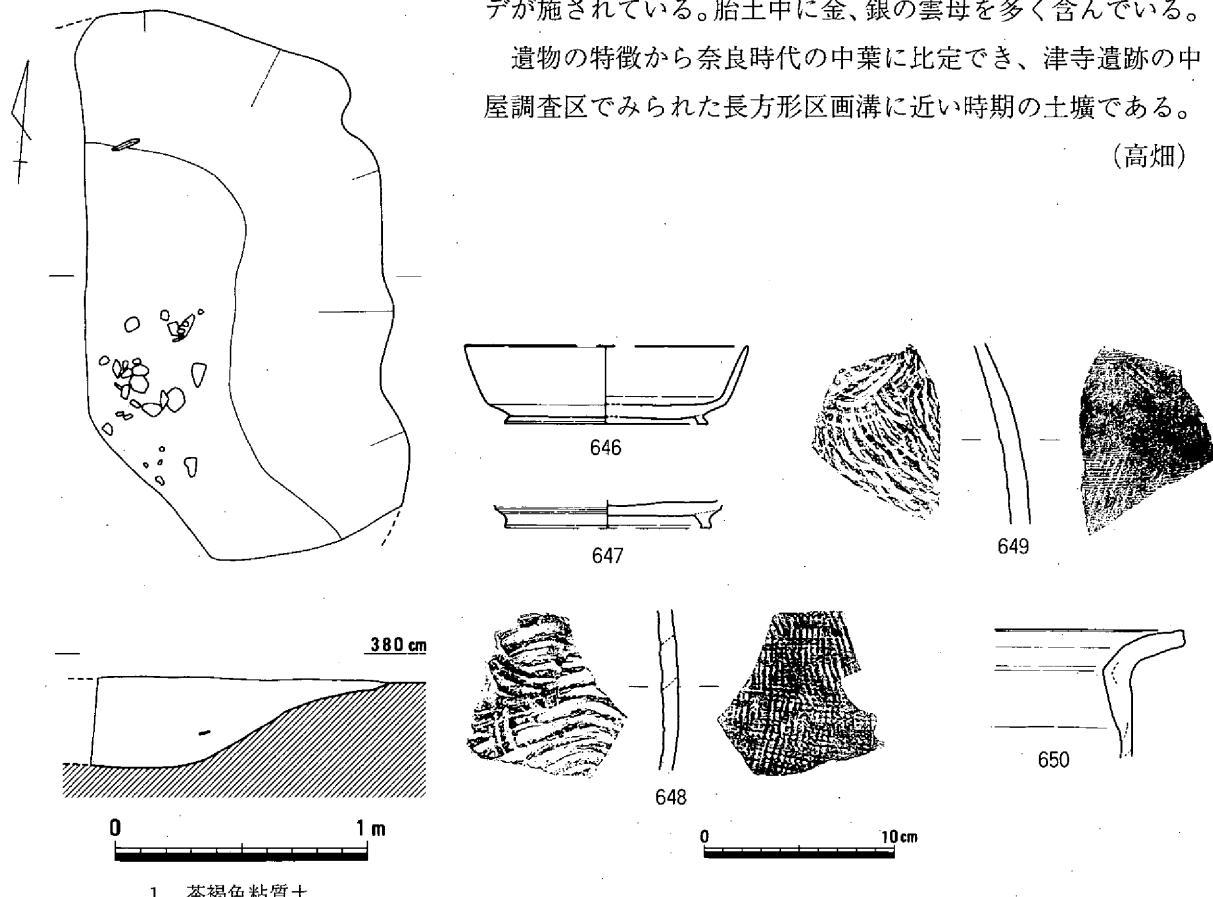
田面表土層は海拔高453cmであり、そこより63cm下位の円礫を含む暗茶褐色粘質土上面から土壙-59の掘り込みがみられ、土壙底は灰色粗砂を基盤としている。南北に長い土壙と推測され、南北350cmまで計測でき、深さ60cm、底面海拔高332cmをはかる。断面形態は椀状を呈し、中央部が約10cm高まり上底になっている。埋土は細かく観察すると5層からなり、粘土が中心の土質であり、中層下位の暗灰茶色粘土層中に $50 \times 80\text{cm}$ の範囲で土器片に混在して、骨片が認められる。その分布は土壙内の底面南側に寄る状況である。

遺物はすべて土器片であり、須恵器の杯身、大甕、土師器甕がみられる。高台付きの杯身646は口径14.75cm、底径10.52cm、器高4.15cmをはかる。色調は灰色を呈し、0.15cm以下の石英、長石粒を含

む。内面底は仕上げナデがみられ、外面底は左方向のヘラケズリ、土器の回転は右廻りである。647は底径10.7cmをはかり、調整等の技法については杯身646とほぼ同じである。648、649は外面タタキメ、内面に青海波文の残された大甕片である。内面の同心円文様は648が649より太筋の当て具が使用されている。650は土師器の甕であり、口縁部はヨコナデ、器外面は斜、縦位のハケメ、内面は押圧のナデが施されている。胎土中に金、銀の雲母を多く含んでいる。

遺物の特徴から奈良時代の中葉に比定でき、津寺遺跡の中屋調査区でみられた長方形区画溝に近い時期の土壙である。

(高畠)



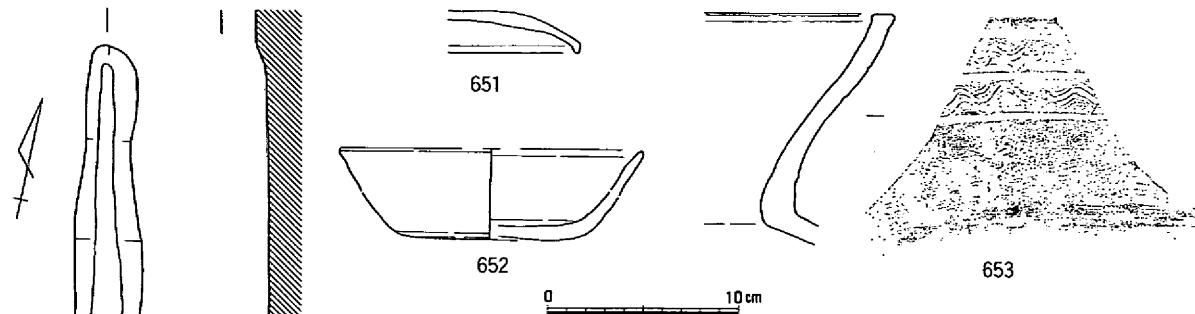
第125図 土壙-59 (1/30) ・出土遺物

土壙-63 (第126図)

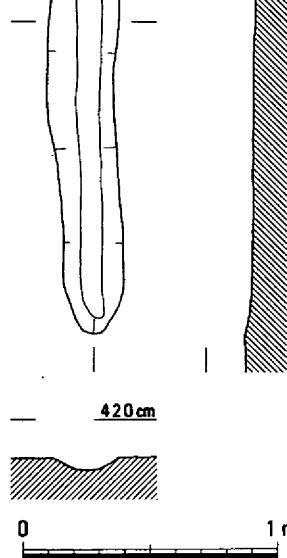
道路5区Bの北側、中世の溝-49に北端を切られ、その南側に位置する。南北に細長い溝状の土壙であり、長軸310cm、短軸17~28cm、深さ5cm、底面海拔高は400cmをはかる。周辺には溝-57、58のような同一形状の土壙が所在するが、性格等については明らかではない。断面形態は椀形を呈し、埋土は暗灰茶色粘質土の1層のみである。溝として南北に継続するものではなく、関連をもつ遺構はみいだせない。

遺物は土壙内から須恵器、土師器の破片が約30点出土している。杯蓋651は須恵器の小片であり、口径を出すまでに至っていない。天井部に自然釉が付着、焼成は良好であり、色調灰色を呈し、胎土は砂粒を含まず、堅緻である。天井内面は仕上げナデが施されており、土器の回転は左廻りである。杯身652は口径15.7cm、底径10cm、推定器高4.8cmをはかる瓦質の須恵器である。内面底は仕上げナデが施されており、外面底はヘラキリ離しであり、その後の使用にて円滑になっている。大甕653は12×17cmの破片である。色調灰色を呈し、胎土は砂粒をあまり含まず堅緻である。器外面の3条沈線間に櫛描きによる波状文が施されている。土器の特徴から奈良時代の中頃に比定できる。

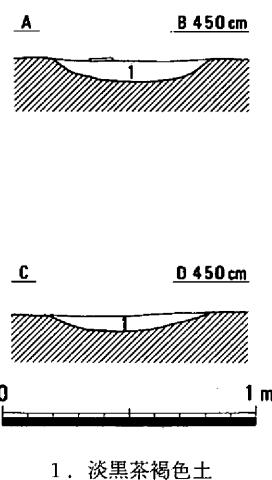
(高畠)



第126図 土壌-63 (1/30)・出土遺物



溝-30 (第127図)



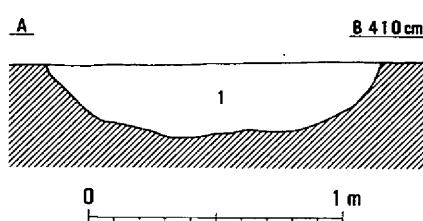
第127図 溝-30 (1/30)

ず、A・B断面の淡黒茶褐色土上面から1点出土している。海拔高437cmで須恵器の長頸瓶の破片、 9×6 cmのみである。奈良時代の中頃の溝の可能性が強い。

(高畠)

溝-31 (第128図)

道路5区A北側、北西から南東方向へ直線的に流走する溝であり、全長8.7mを確認している。すぐ南側を南下する溝-32の北側に位置する。弥生時代後期前葉、古墳時代前期～後期の溝と同一の流走方向を取る溝である。

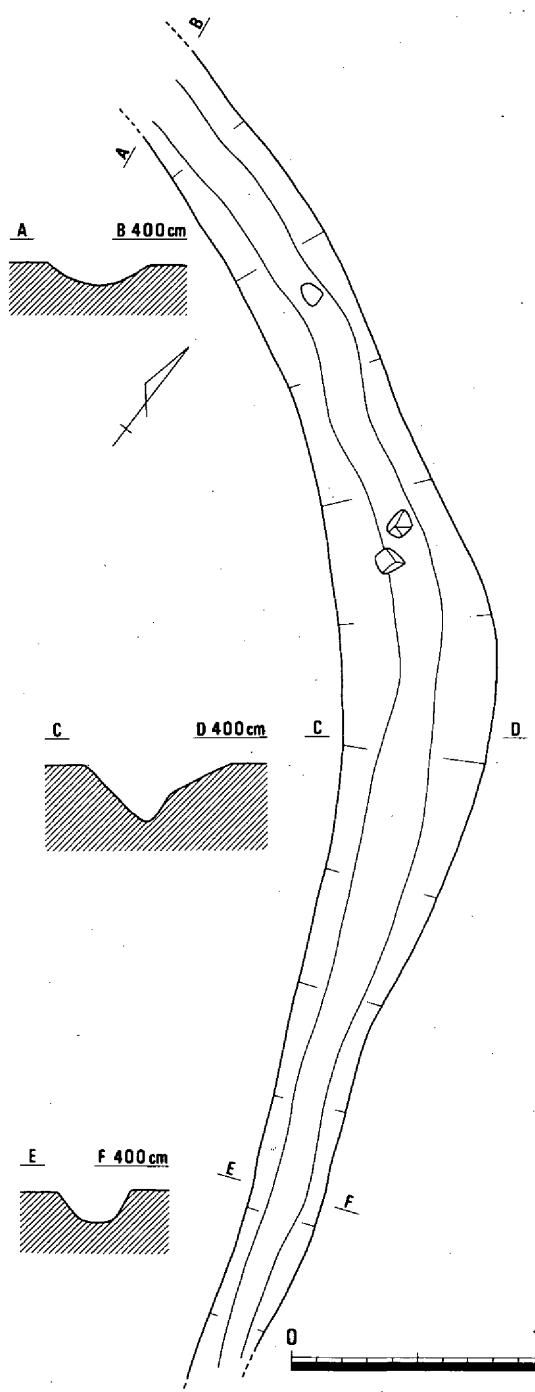


1. 茶褐色粘質土

第128図 溝-31 (1/30)

溝の上端部幅は約130cm、下端部幅約75cm、深さ29.8～32.3cm、底面海拔高は約370cmをはかり、溝底はほぼ平坦な面を形成している。断面形状は楕円形を呈し、埋土は茶褐色粘質土の1層からなる。古墳時代後期の遺物を出土した溝-32の埋土も茶褐色粘質土であり、接続する同一の溝とも考えられる、しかし、底面の海拔高が約20cmも異なる点からは若干、疑問が残るところである。

(高畠)



第129図 溝-33 (1/30)・出土遺物

溝-33 (第129図)

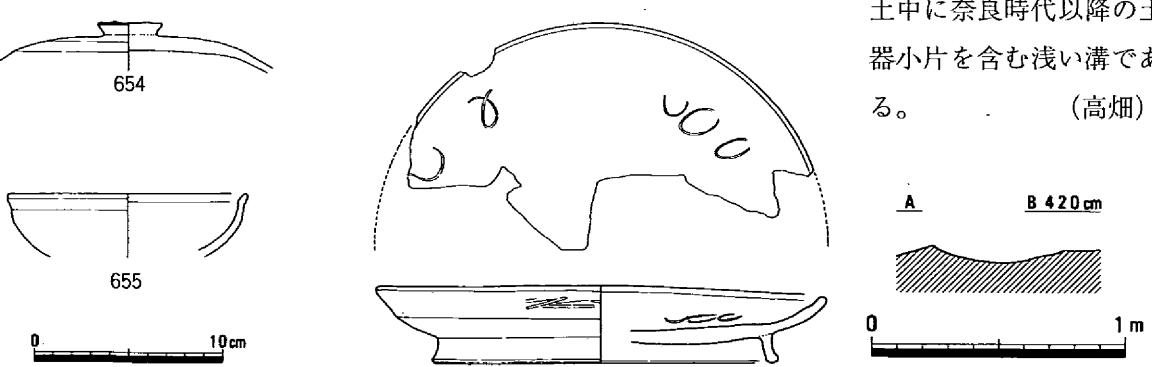
道路5区Bの中央北側、土壌-57、58とほぼ同一の場所に位置する。溝-33は土壌-57、58により切られており、両土壌より古いことが判明している。流れの方向は北西から南東方向に向っていたものと考えられる。上端部幅25~60cm、深さ8~23cm、底面海拔高367~382cmをはかり、底面はあまり平坦ではなく、溝の幅も一定ではない。断面の形状は楕形、皿形の両部分が認められ、埋土は淡茶褐色粘土層の1層である。溝内には15×20cmの2石、鉄滓、そして土器片がみられた。なかには、5区Bの海拔400cm付近で出土した土器片と接合関係にあるものがみられる。

遺物の実測可能なものは3点である。654は天井部につまみの付く須恵器の杯蓋であり、天井部はヘラ削り後にヨコナデ、内面は仕上げナデが施されている。色調は灰色を呈し、胎土中に白色小粒を含む。土器の回転方向は右廻りである。655も須恵器の杯であり、土器の回転方向は右廻りである。656は土師器の高台付杯身であり、丹塗りが施されている。内面には螺旋暗文がみられ、外面はヘラミガキが認められる。口縁端に2×1.5cmの黒斑があり、器内外面の剥落が著しい。胎土は精製された粘土が使用されている。奈良時代の所産である。(高畠)

溝-34 (第130図)

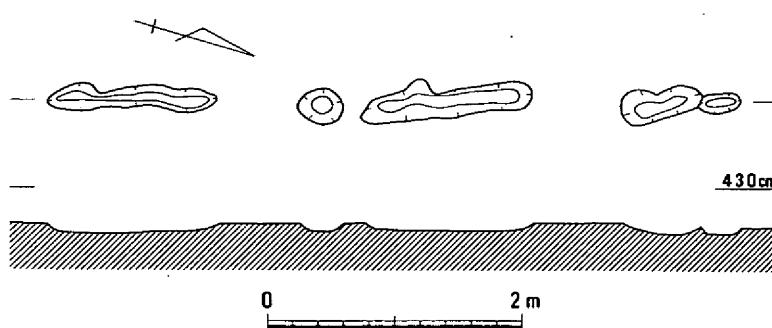
道路7区の北側、土壌-59に接して南側に位置する東西溝である。すぐ南側から微高地の下がり形状を呈する変換点となっている。上端部幅53cm、深さ10cm、底面海拔高249cmをはかる。断面皿状にて埋

土中に奈良時代以降の土器小片を含む深い溝である。(高畠)



第130図 溝-34 (1/30)

(4) 溝状遺構



第131図 溝状遺構-1 (1/60)

溝状遺構-1 (第131図)

4区Bの西側、土器溜り-1の2.5m北側に位置する。南北に延長5.45m、その幅内で5個の細長い小土壙にわかれる。幅20cm、深さ6.0cm、床面海拔高395cmをはかり、若干凹凸がある。断面形態は皿形を呈し、埋土は淡黒色土の1層である。(高畠)

(5) 土器溜り

土器溜り-1 (第132・133図)

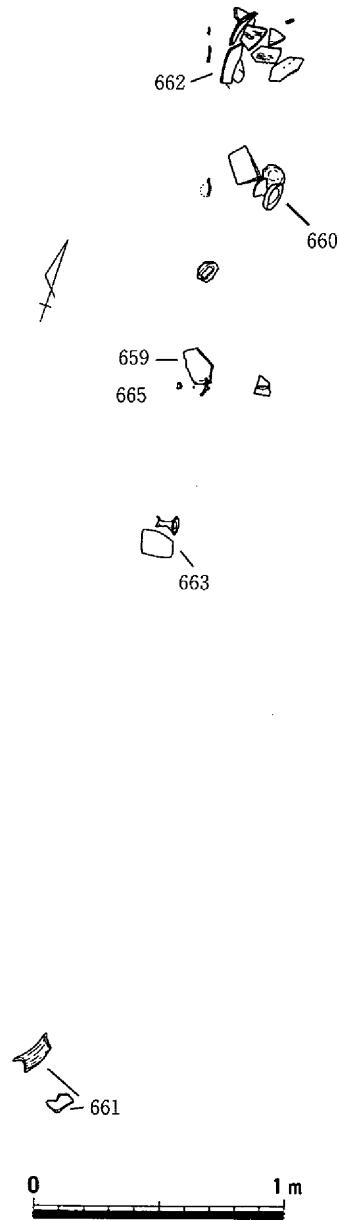
道路4区Cの北側中央、溝状遺構-1の南側延長線上に位置する。南北方向に3.5m、幅35cmをはかり、一直線上に遺物が散布する。遺物は北側から662、660、659、665、663、658、661の7ブロックに点在して出土している。662の接地海拔高は423.5cm、665で海拔420cm、661は海拔393.3cmをはかり南に下降する状況が認められる。土器溜りとして取り扱ったが、溝状の遺構が所在した可能性がうかがえる。

遺物は完形ではなく、すべて破損した須恵器、土師器の破片であり、土師器より須恵器の方が多い。図化できていないが、土師器の把手等も含まれている。657～663が須恵器、664、665が土師器である。657、658はセットになるものであり、657は口径10.05cm、器高3.95cm、658は口径8.56cm、最大径10.44cm、器高3.4cmをはかり、ヘラオコシ後に天井、底部はナデによる調整がみられる。土器の回転は左廻りである。659は瓦質の杯身であり、付高台が施されている。内面底は仕上げナデがみられ、胎土中に僅かであるが雲母が認められる。高杯660は口径11.55cm、脚径8.02cm、器高7.99cmをはかり、土器の回転方向は左廻りである。杯内底に直径8.09cmの円形痕跡がみられ、同種の高杯脚の重ね焼き跡と考えられる。これらの土器の特徴から7世紀の第2四半紀以降に比定できる。

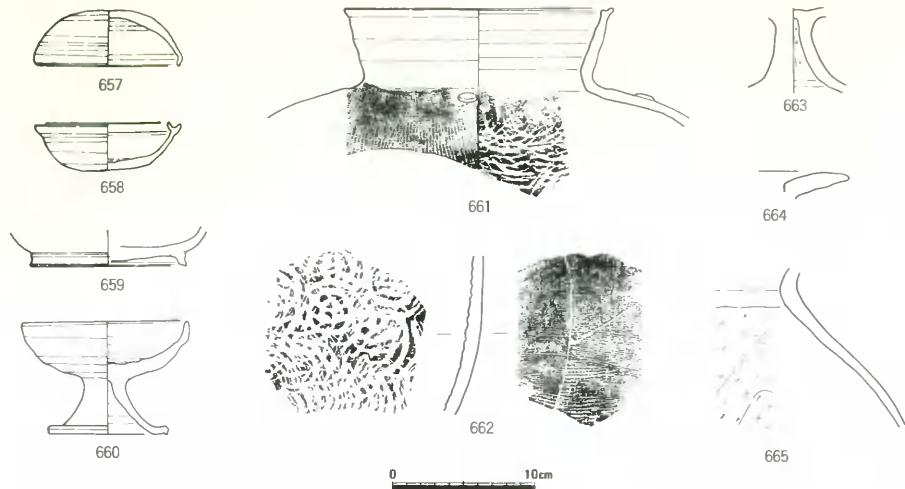
(高畠)

土器溜り-2 (第134図)

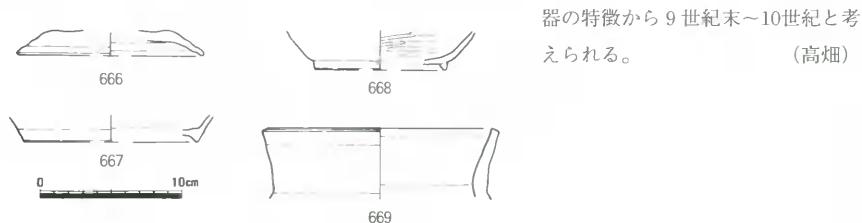
道路5区Bの南側、土壙-57の3.5m南に位置する。大部分は東側用水路により破壊を受けており、南北4.0m、幅1.0mの範囲内に須恵器、土師器、轍の羽口、骨等の破片が出土している。土



第132図 土器溜り-1 (1/30)



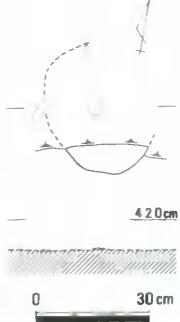
第133図 土器溜りー1出土遺物



第134図 土器溜りー2出土遺物

(6) 鍛冶炉

鍛冶炉ー1 (第135図)



道路4区Cの北端、土壌-53の東隣りに位置し、用水路により大半を削平されている。南側に20×10cmほど被熱部分を残し。本体と思われる中央部分は黒ずんだ被熱ブロックが30×30cmの範囲に散布するものである。用水路の底面になっていた場所であり、グライ化の現象が著しく進んでいる。

被熱部分の海拔高は409cm、被熱ブロック部分は海拔403cmをはかり、6.0cmの差が認められ、炉の原形を留めていない。被熱部分に南から北に向い「U」字形に下がる焼土帯がみられ、幅1.0~2.0cmをはかる。鍛冶炉の具体性が充分伴うものではない (高畑)

第135図 鍛冶炉ー1 (1/15)

(7) 遺構に伴わない遺物

古代の遺構に伴わない遺物は、比較的多く出土しており、須恵器、土師器、瓦、土製品（羽口）、鉄滓がみられる。その出土量は須恵器、瓦、土師器、土製品、鉄滓の順序である。

奈良時代では道路0区で検出した溝状の土壙4基が最も整然とした遺構であり、道路5区においては溝状の小土壙は数基検出できたが、建物、大溝等の遺構は所在しない場所である。しかし、全調査区を通して古代の遺物が最も多く出土したのは道路5区A・Bであり、5区Aより5区Bに集中する傾向が認められた。

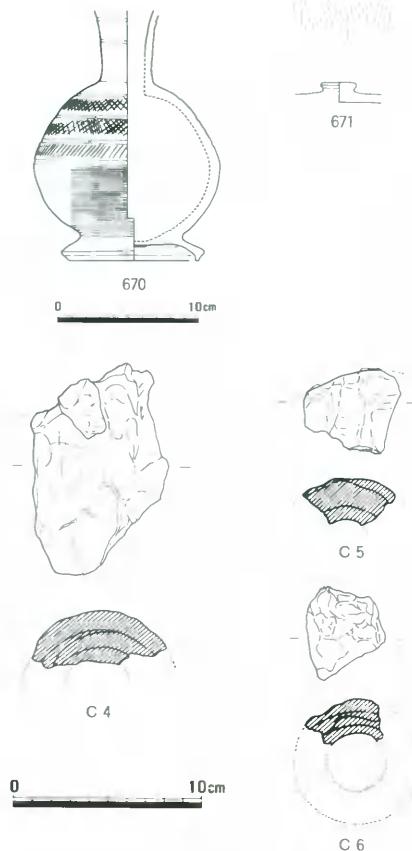
5区Aの遺物は基準杭9の北側付近から基準杭11付近まであり、北西から南東に貫流する弥生・古墳時代の溝とほぼ同コースに分布の流れをみることができる場所と、そうでない部分が存在する。基準杭9を中心とする場所では、海拔375~415cm間に遺物が包含されており、海拔388cm付近に分布が集中する。基準杭10を中心とする場所では海拔371~416cm間にみられ、海拔394cm付近が最も多い状況である。ちなみに、672、676が5区Aの北側出土であり、海拔402~412cm、673、674、677が5区Aの中央出土であり、海拔385~388cm、675、

678が南側出土であり、海拔371cmをはかる。

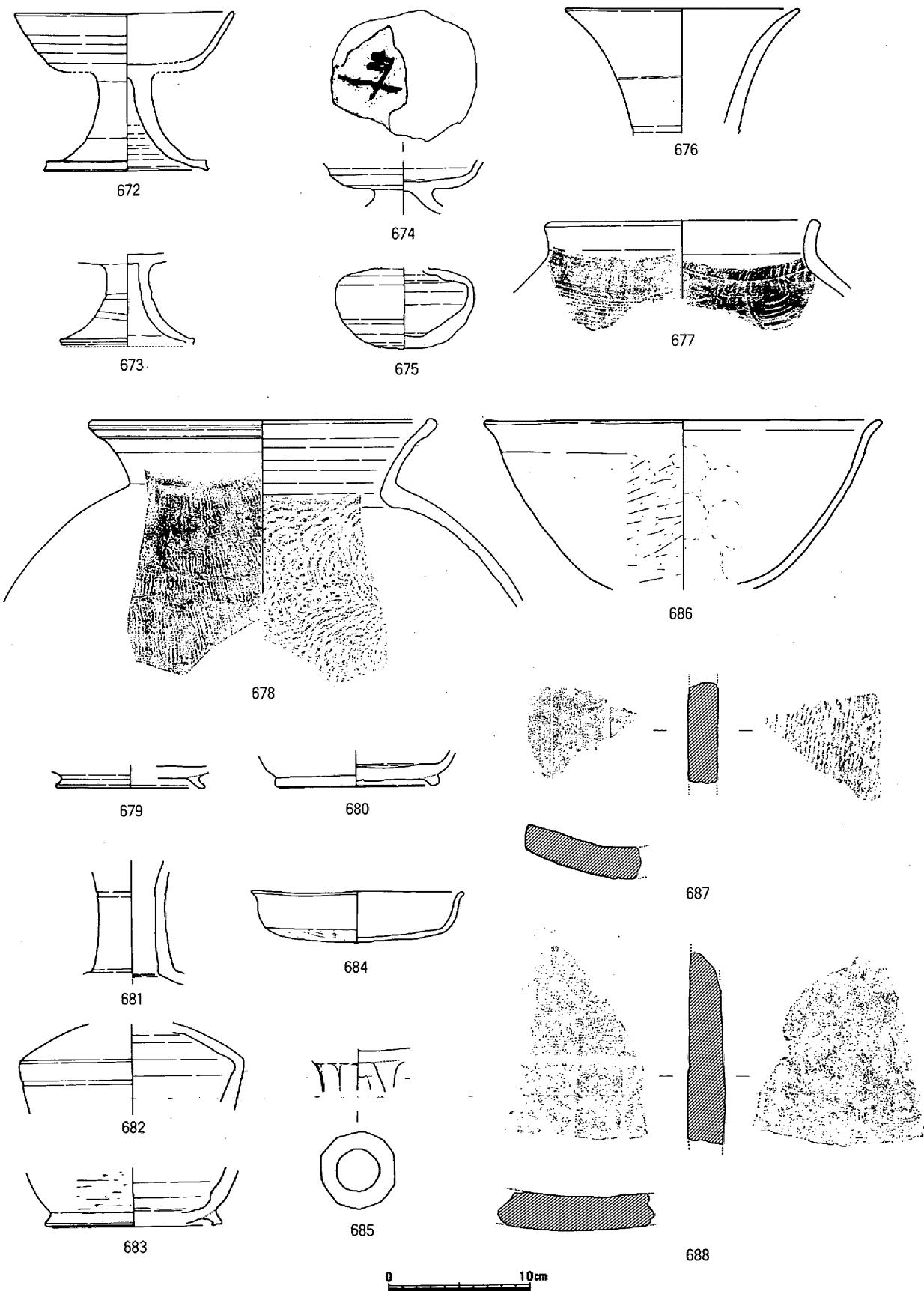
遺物は17点（第137図）であり、684、685、が丹塗りの土師器、686が土師器、687、688が平瓦、他はすべて須恵器である。高杯674は杯部内面に「年」と読めそうな墨書きがみられ、転用硯の可能性がある。677、679は瓦質の須恵器である。

5区Bの遺物は基準杭11から基準杭13・14間の出土で、海拔360~427cm間に包含されていたものである。遺物の出土レベルは総じて5区Bが高い位置を示しており、海拔390~415cm間の出土が多い。

遺物は41点（第136・138・139図）であり、C4~C6がの羽口、717~720が土師器、721~724が平瓦、725が丸瓦であり、他は須恵器である。718、719は平安時代の土師器であろう。瓦類は破片であり、15×8.0cm位のものが大きい方であり、成形時の布目、縦目タタキの規格はそれぞれ異なるものである。須恵器は29点あり、杯蓋、杯身、高杯、壇、壺、甕、コシキ等の器種が豊富である。このうち硬質に焼成されている土器と瓦質に焼成されている土器の2種類の須恵器が存在する。杯蓋689、杯身692、696、高杯699~701、703、甕713、714、甕の10点が



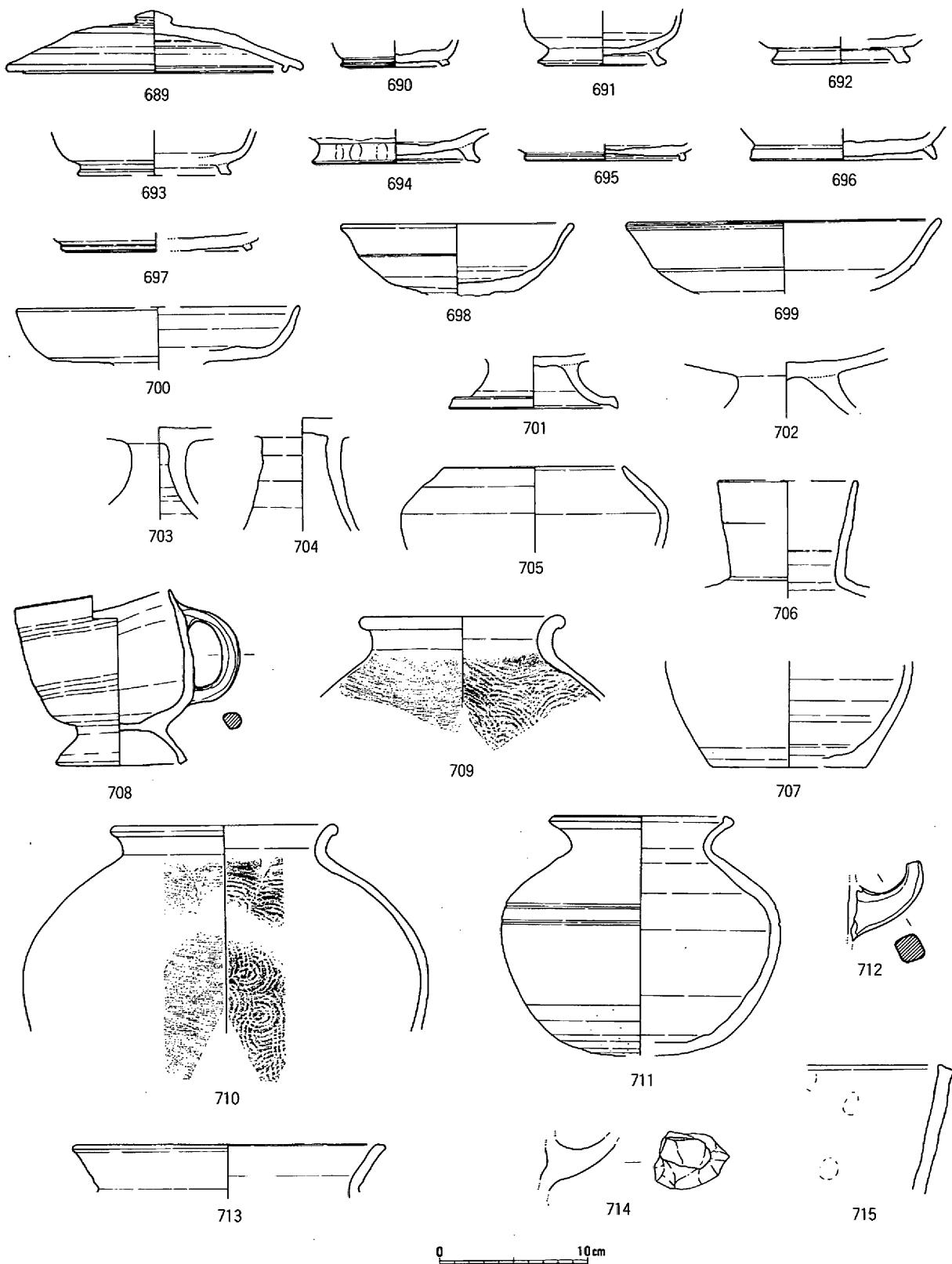
第136図 遺構に伴わない遺物（1）



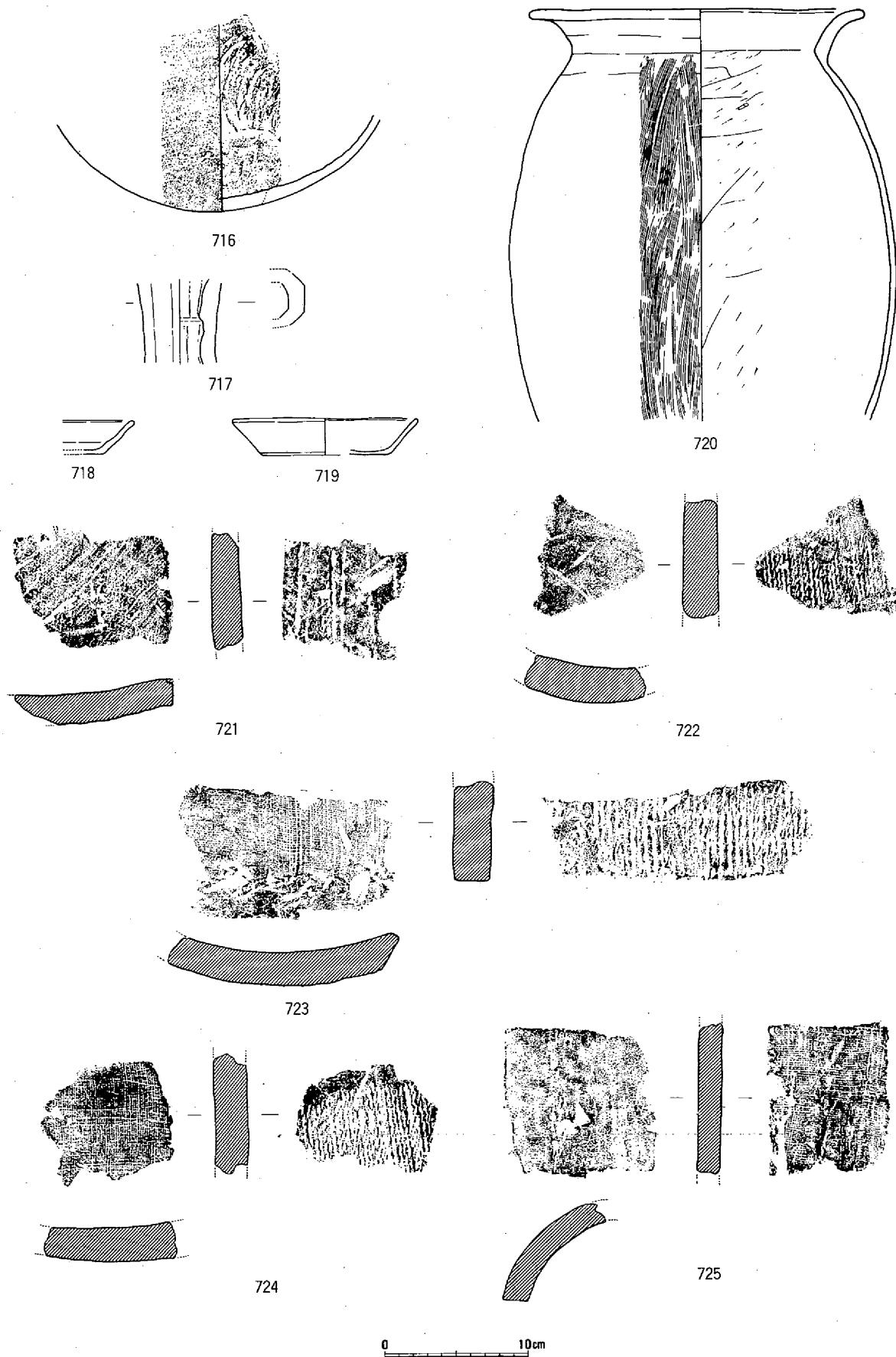
第137図 遺構に伴わない遺物（2）

瓦質焼成の須恵器である。胎土分析では甕677、高杯700、703の3点が、末の奥瓦窯跡領域に入っている。他の杯身679、杯蓋689、杯身692、高杯697、甕714、コシキ715はどの領域にも納まっていない。

(高畠)



第138図 遺構に伴わない遺物（3）



第139図 遺構に伴わない遺物（4）

第5節 中世の遺構・遺物

(1) 中世の概要

中世における調査区内の遺構の占地状況は、全面的な利用ではなく、道路5、6区を中心にその痕跡を留めている。

遺構は土壙-60~70の11基、溝-35~57の23条、掘立柱建物-1・柱穴列-1・溝状遺構-2・鍛冶炉-2の各1、柱穴列等が分布する。

この時期には平野の区画整備が施行されており、東西南北の方位を基本に作られた掘立柱建物、溝等の遺構が多い。そのうちでも東西方向の各種の溝が多く所在するのが目につき、大規模な溝に溝-49、溝-54がある。この2条は上端部幅240~335cm、深さ70~100cmをはかり、微高地における重要な用排水路の役割を果していたと考えられ、西・南側に所在する津寺遺跡の中屋調査区、高田調査区方面に流走、連結する可能性のある溝である。溝-49、溝-54はともに早島式土器のヘソ椀を埋土中に包含しており、下限を14世紀の第2四半期に求めることができる。この時期の遺構、遺物では溝-49の廃絶期を示す早島式土器の椀738が最も新しい土器であり、法量は口径9.5cm、器高3.5cmをはかる。その他の溝、土壙、建物は14世紀の第2四半期より新しく、上限は砂利道-1から出土した早島式土器の椀763から13世紀の第4四半期頃と考えられる。ちなみに、椀763の法量は口径11.0cm、底径3.6cm、器高3.2cmをはかる。

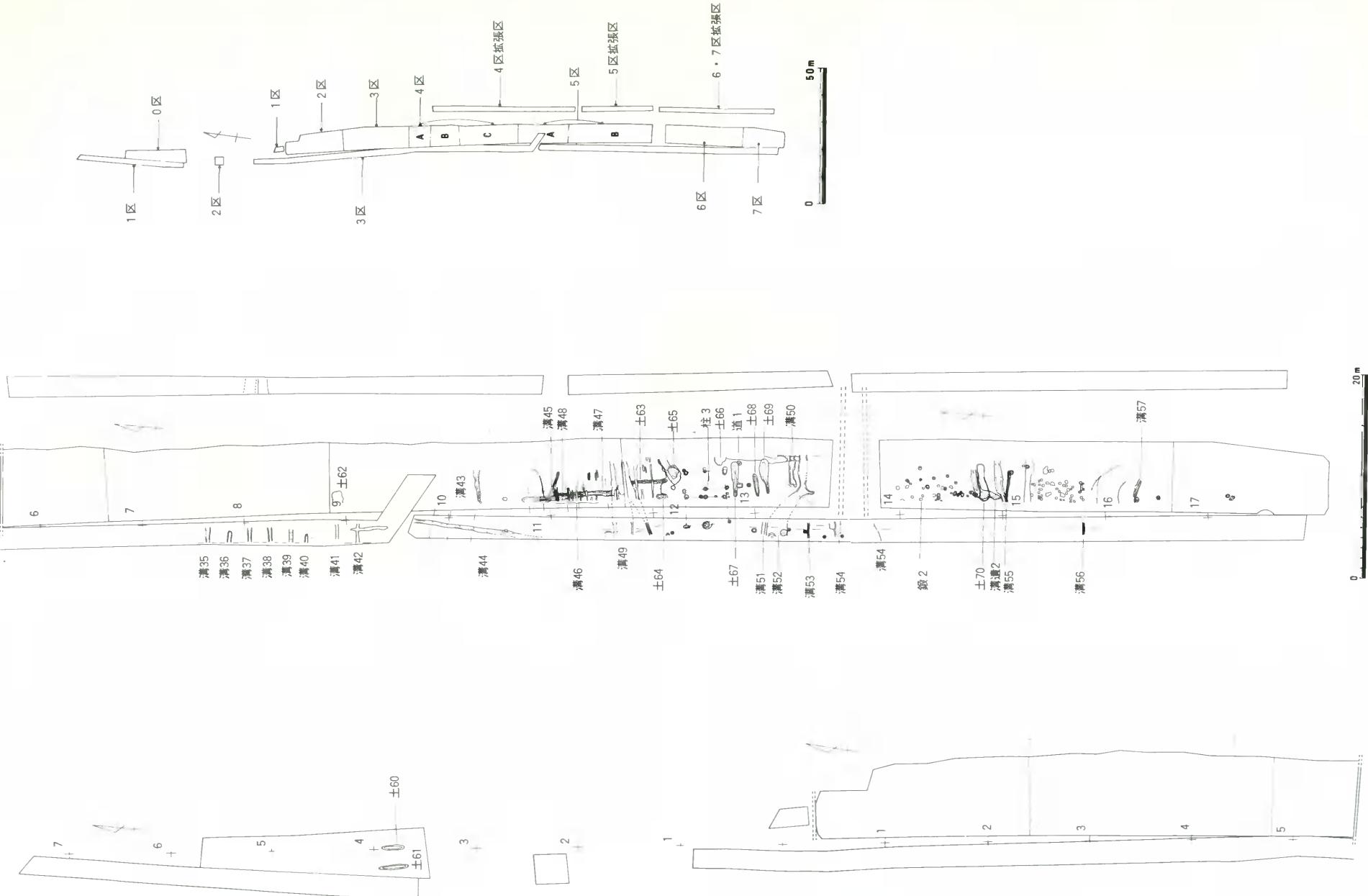
これらの遺物から、およそ50年の間に機能していた溝が廃絶し、建物、土壙等とともに姿を消していったことが推測できる。掘立柱建物-1・柱穴列-1にも新旧関係が認められ、柱穴掘り方の埋土内出土という点を考えれば、13世紀末~14世紀初頭頃の遺構であり、溝-52等にも近い時期であろう。土壙-66が溝-49、溝-54に近い時期のものである。

ここまで説明を行った溝-49、掘立柱建物-1・柱穴列-1、土壙-66、溝-50・52、溝-54、砂利道-1はすべて道路5区Bの南北30m内に所在する。5区Bにおけるこのような遺構配置は、中世集落を構成する一部分であると考えられる。そうすれば、集落内の掘立柱建物-1から約30m北側の側溝3区南に所在する規則的な配置の東西小溝群は、畠地等の生産域の可能性が考えられる。また、掘立柱建物-1から約40m南側の道路6区に所在する鍛冶炉-2、土壙、溝、凹地-2下位の柱穴群などは居住域の中心部分とまではいかないが、生産的な作業を行う範囲として存在し、5区Bとともに集落を形成した一要素と考えられる。

遺物は早島式土器の椀、土師器の小皿、土師器の土鍋・支脚、備前焼の擂鉢・甕、亀山焼の甕、東播系の須恵器コネ鉢、土錘、鉄製品、鐵滓、北宋錢（熙寧元宝）、獸骨が出土している。

津寺三本木遺跡の中世集落は、津寺遺跡の西川調査区、中屋調査区、高田調査区にみられたそれぞれの集落（遺構のまとまり）の単位に近い形状を持つものと考えられる。西川に1ヶ所、中屋に2ヶ所、高田に1ヶ所、三本木に1ヶ所の計5ヶ所のまとまりが認められ、それぞれの集落の開始時期は13世紀中頃以降である。そして、集落の下限は14世紀の中頃であり、それ以後継続する集落の形成を認める遺構、遺物は出土をしていない。墓では12世紀末と13世紀第2四半期の2時期が存在するが、他の時期の墓は確認できていない。

（高畠）



第140図 津寺三本木遺跡中世全体図 (1/400)

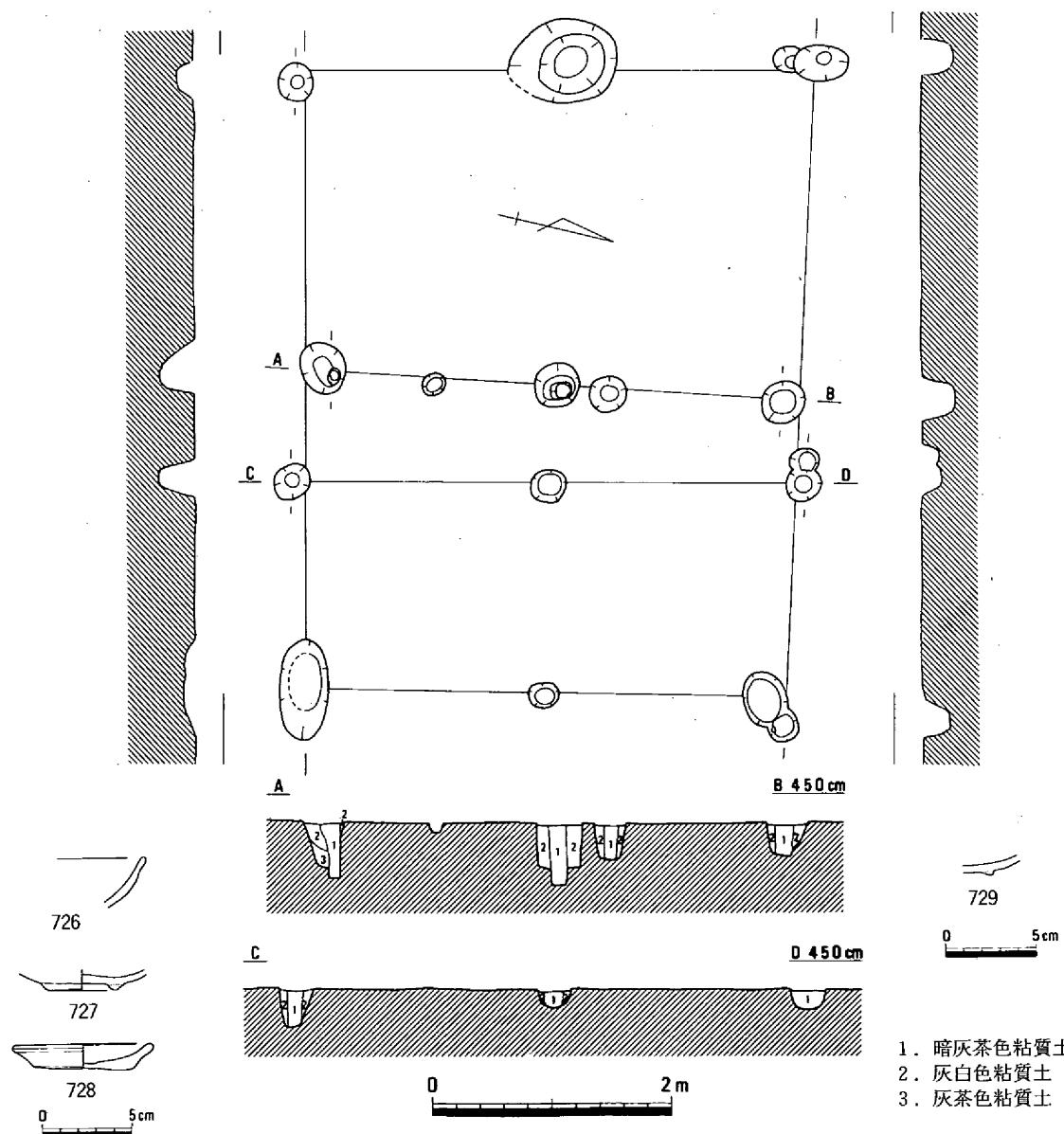
(2) 掘立柱建物

建物、柱穴列-1 (第141図、図版11-1・2)

5区Bの中央西側、側溝4区と道路5区Bに跨って位置する。長軸500~550cm、短軸405~445cmをはかる2×2間の掘立柱建物である。主軸の方位を東西にとり、桁の柱間が350cmと200cmをはかり、東側の柱間が狭くなる構造である。C・D断面を建物-1に伴う間仕切の柱穴列とし、A・B断面を柱穴列-1とした。柱穴列-1の柱穴は直径35cm、深さは28.4~53cm、底面海拔高373~398cmをはかり、建物-1よりしっかりしている。3穴間は370cmをはかる。両遺構の柱穴埋土は灰白色粘質土であり、直径15cm前後の暗灰茶色粘質土の柱痕がみられる。

遺物は早島式土器の椀の破片が両遺構から出土している。726、727、761が建物、765が柱穴列-1からであり、A・B、C・D断面北側柱穴内出土である。13世紀末から14世紀末の初頭の時期に比定できる。

(高畠)

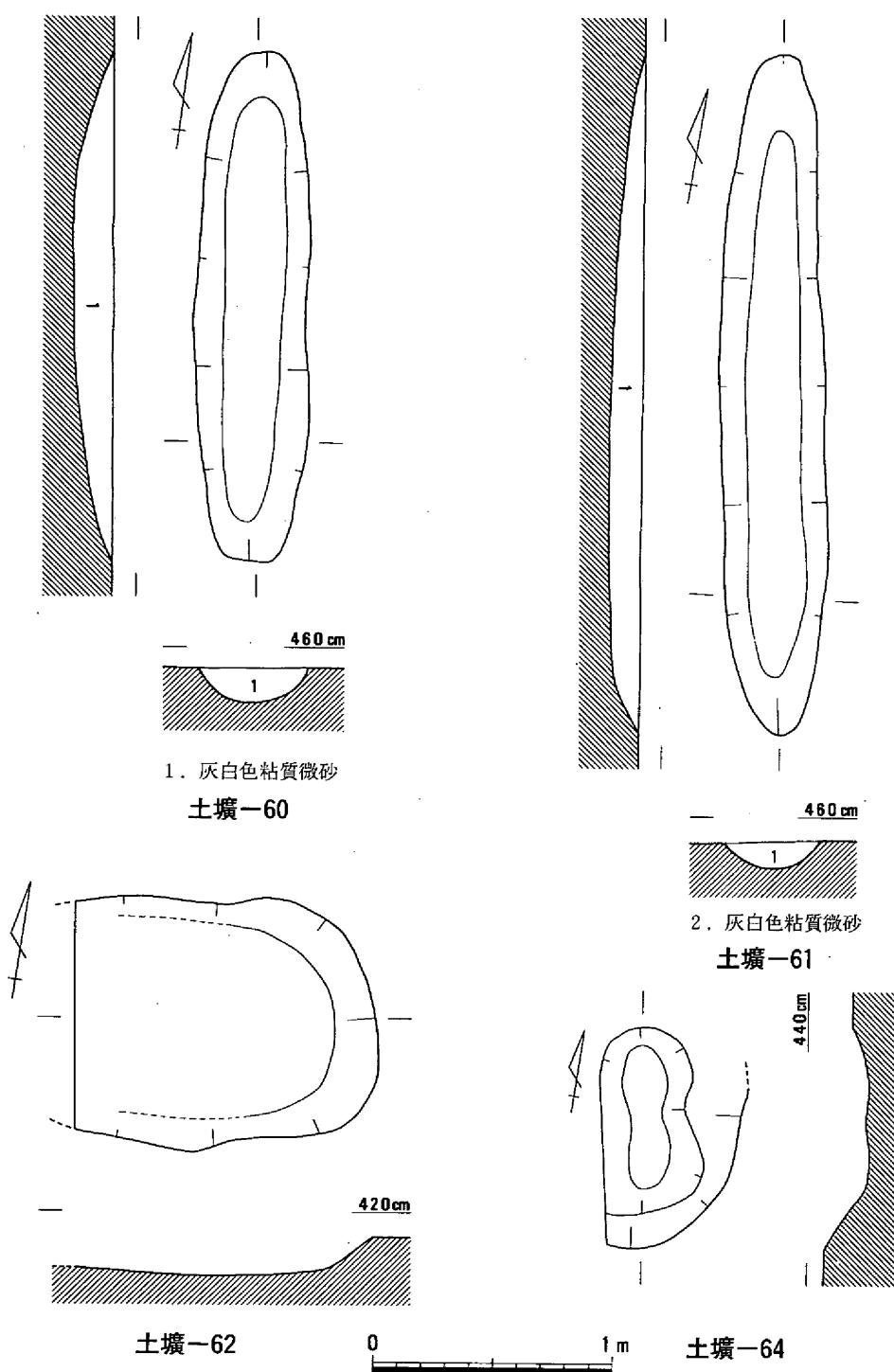


第141図 建物-1、柱穴列-1 (1/60)

(3) 土壌

土壌-60～64 (第134図)

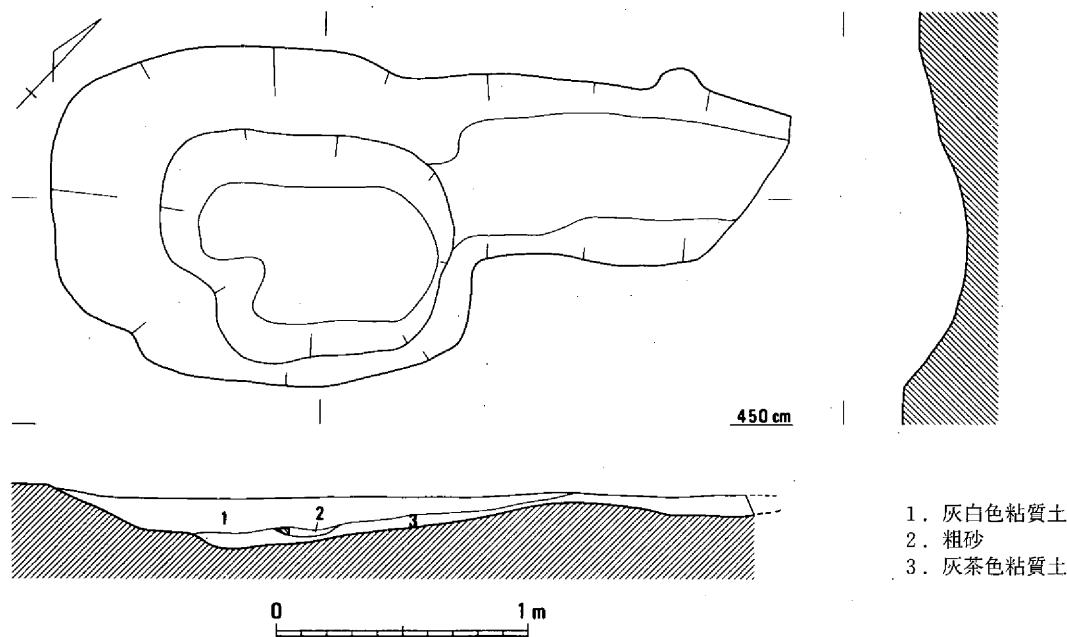
土壌-60、61は道路0区の南側に位置する。南北に長い土壌が並列しており、全長210～285cm、幅45cm前後、深さ10～14cm、底面海拔高435cmをはかる。断面は椀形を呈し、埋土は灰白色粘質微砂の1層である。



第142図 土壌-60～64 (1/30)

土壙-62は5区Aの北西端に位置する。東西120cm以上、南北105cm、深さ15cm、底面海拔高394cmをはかる楕円形の土壙である。

土壙-64は道路5区Bの中央西側、掘立柱建物の1.5m北側に位置するピーナツ形の土壙である。北側を低位部に削平されており、南北長92cm、東西60cm、深さ20cmまでが計測可能である。断面は皿形であり、海拔415cmをはかり、埋土は灰茶色粘土である。(高畠)



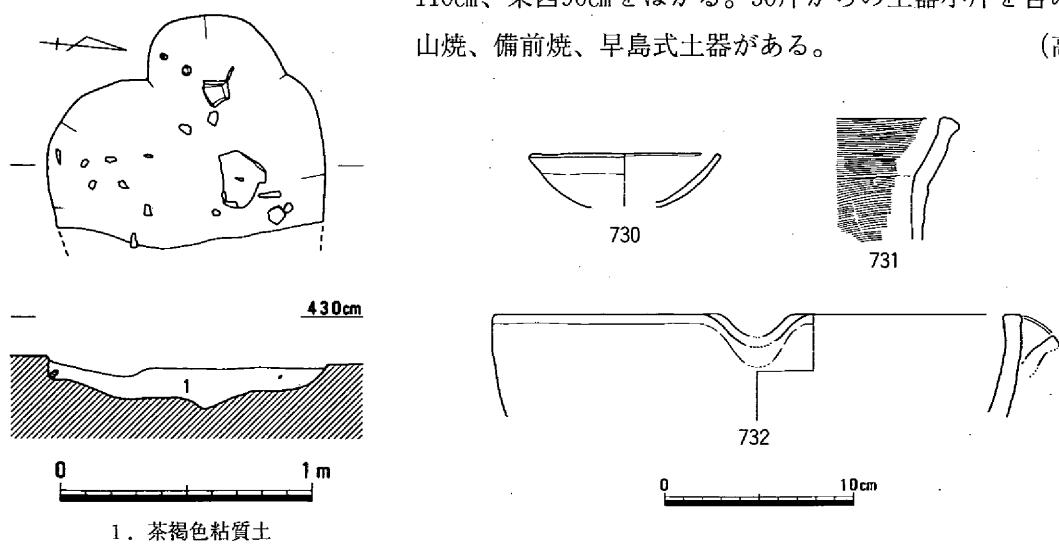
第143図 土壙-65 (1/30)

土壙-65 (第143図)

5区Bの中央、土壙-64、掘立柱建物-1の間に位置する。浅い土壙に溝が付設されたような形状であり、底面海拔高は402cmをはかる。約70片の土器小片が出土している。(高畠)

土壙-66 (第144図)

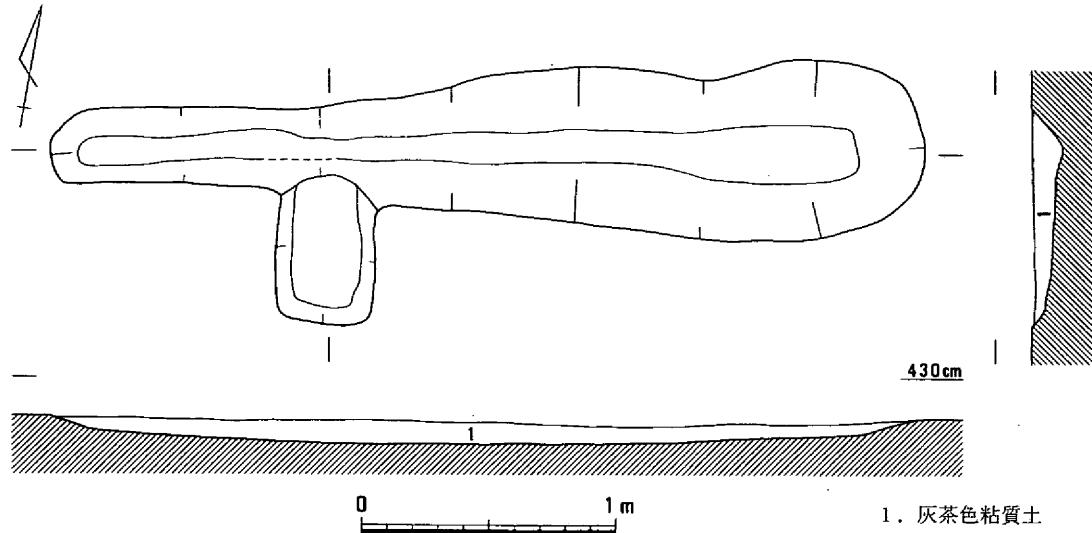
道路5区Bの中央東側、掘立柱建物-1の東隣に位置する。東側を用水路に切られており、南北幅110cm、東西90cmをはかる。50片からの土器小片を含み、亀山焼、備前焼、早島式土器がある。(高畠)



第144図 土壙-66 (1/30)・出土遺物

土壙-67 (第145図)

道路5区Bの中央南、掘立柱建物-1の南側に位置する。東西に長い土壙であり、東側の幅が少し広くなっている。長軸は345cm、西側幅30cm、東側幅70cm、深さ13cm、底面海拔高402cmをはかる。断面形は皿形を呈し、埋土は灰茶色粘質土の1層である。遺物は土器小片が含まれる。
(高畠)



第145図 土壙-67 (1/30)

土壙-68 (第146図)

道路5区Bの中央南側、土壙-67と土壙-69の中間に位置する。土壙-67・69と同一方向の東西に並んでおり、両土壙より小振りである。長軸226cm、幅35cm、深さ13.5cm、底面海拔高は420cmをはかる。断面形は椀形を呈し、埋土は灰色粘質土の1層である。遺物は埋土中から土器の小片が出土している。
(高畠)

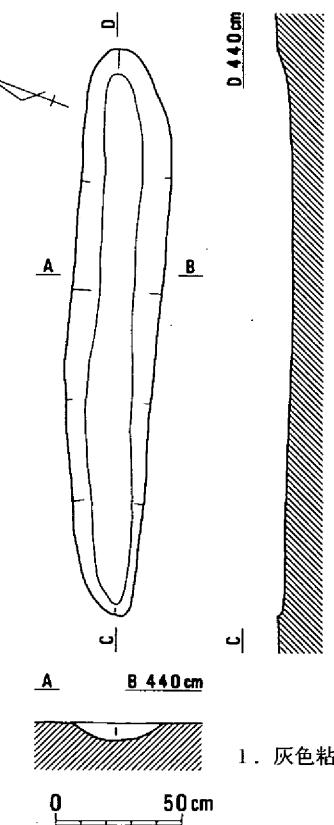
土壙-69 (第147図)

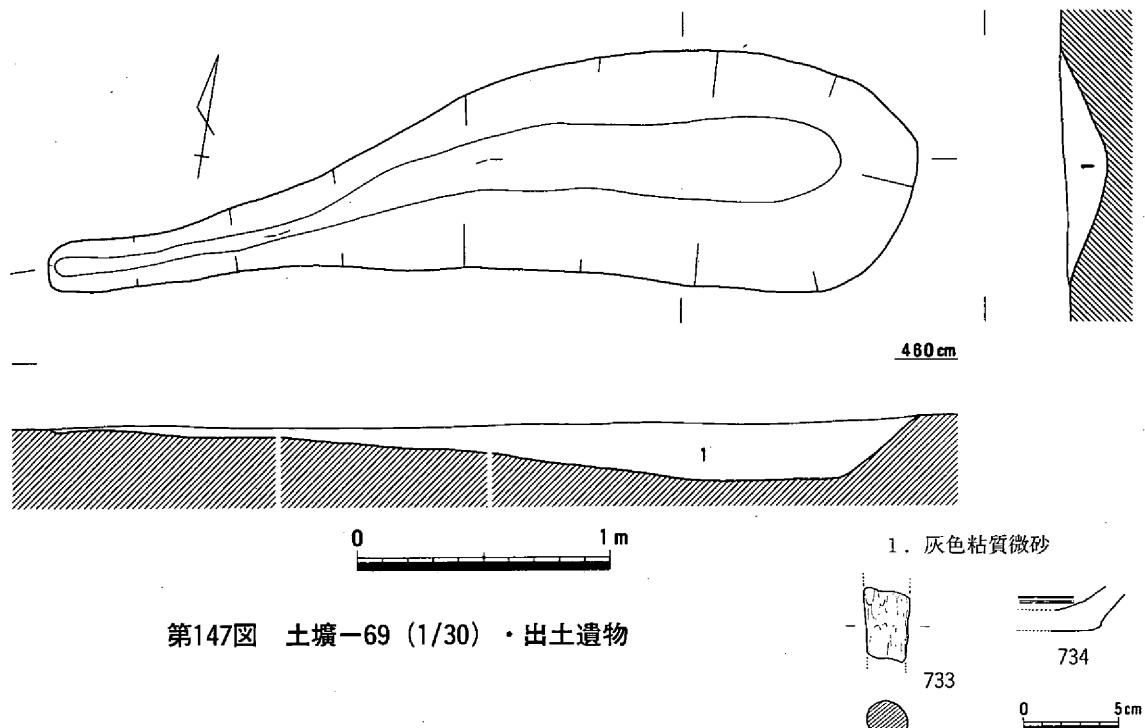
道路5区Bの南側中央、土壙-68の南隣に位置する。土壙-67に近い形状で東西に長く、土壙西側の幅が狭くて浅い、東側が広くて深い。長軸350cm、西側の幅20cm、東側の幅90cm、深さ17cm、底面海拔高は412cmをはかる。断面形は鉢状を呈し、埋土は灰色粘質微砂の1層である。

遺物は埋土中から約60点の土器片が出土しており、早島式土器小片、備前焼小片、土鍋の支脚等がみられるが、実測不可能なものが多い。周辺の関係等から本土壙も13世紀後葉から14世紀の前半の中で把握できそうである。

これらの土壙は周辺の建物、溝等と同じく、東西、南北の方位を意識しての配置計画が実施されている。ほとんどの遺構の時期は13世紀後葉から14世紀の前半であり、津寺遺跡の中屋調査区、高田調査区における中世集落との関連においても同様のことと言える。
(高畠)

第146図 土壙-68 (1/30)





第147図 土壌-69 (1/30)・出土遺物

(4) 溝

溝-35~42 (第148図)

側溝3区の南端、土壌-62の西側に位置する溝群であり、従来畝状遺構等と呼称されていたものである。東西8条、南北1条が海拔460cm付近で検出され、部分的な確認である。東西溝の中心間の距離は150~210cmをはかり、平均では200cm前後である。溝の上端部幅28~40cm、平均では約35cm、深さ6~18cm、底面海拔高は444~456cmの高低差が認められる。

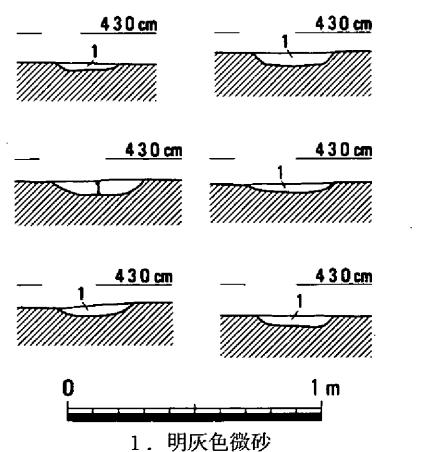
断面の形態は皿形を呈し、埋土は明灰色白色微砂の1層である。この種類の溝は津寺遺跡の中屋・高田調査区、津寺一軒屋遺跡でも確認されており、広い範囲で整地された畑の可能性がうかがえる。中世~近世の可能性がある。

(高畠)

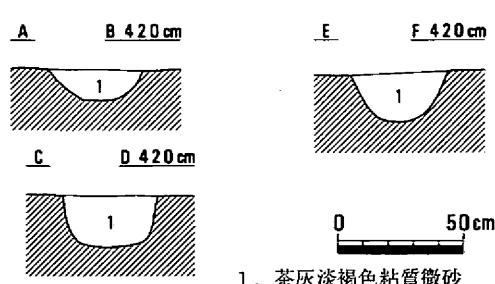
溝-44 (第149図)

側溝4区の北東隅から南西に向う溝であり、全長12.5mを確認している。従来の溝とは流走方向の異なるものである。溝の上端部幅40cm、下端部幅15cm、深さ20cm、底面海拔高は387cmをはかる。断面形は箱形に使い椀形状を呈する部分もあり、埋土は茶灰淡褐色粘質微砂の1層である。埋土は土器小片が含まれている。

(高畠)



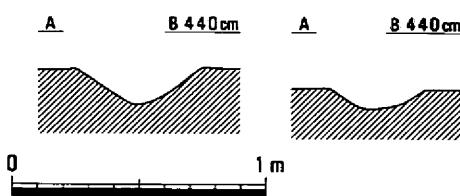
第148図 溝-35~40 (1/30)



第149図 溝-44 (1/30)

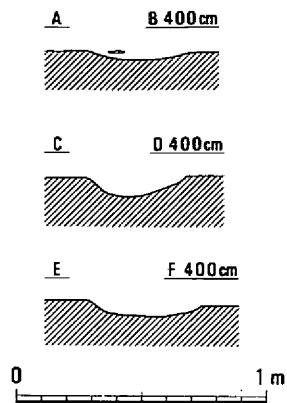
溝-45, 48 (第150図)

道路5区Bの北側、溝-47の下位に位置する。南北の溝-48が、南



第150図 溝-45, 48 (1/30)

北より東に振る溝-45に
より切られている。両溝
とも約30片の早島式土器
小片が出土している。溝
-48が床面海拔高が410
cmをはかる。(高畠)



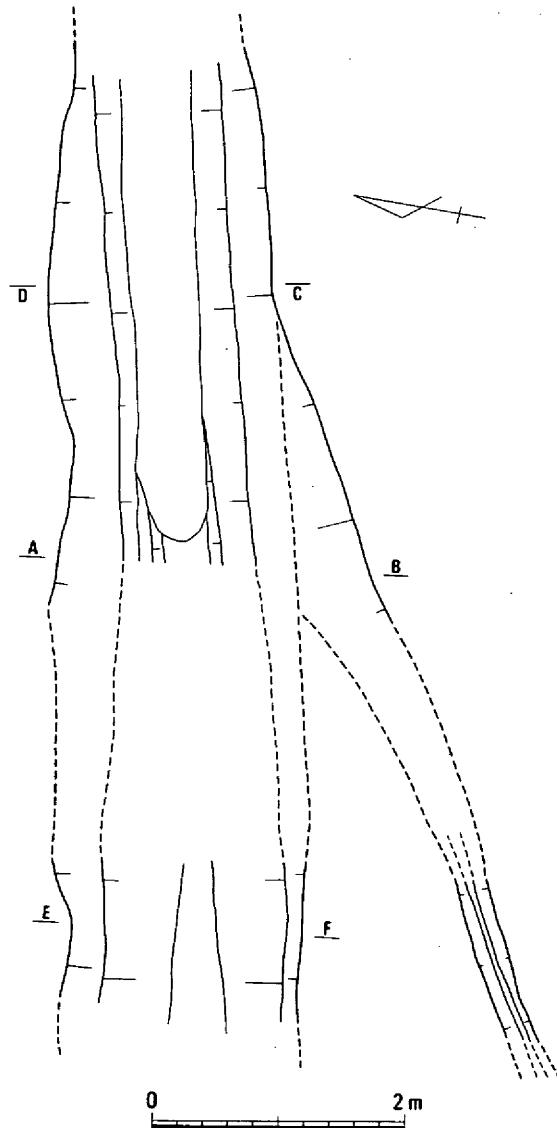
第151図 溝-47 (1/30)

溝-47 (第151図)

道路5区Bの北側、西辺に沿って走る南北溝であり、全長8.85 mを

はかる。流走軸を少し西側に振っており、上端部径28~45cm、下端部

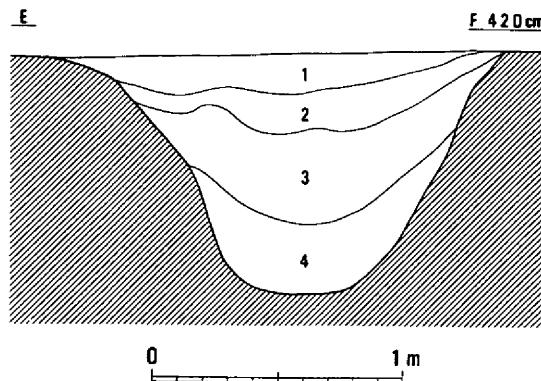
径8~24cmをはかり、深さ3.4~8.2cm、底面海拔高は385.3~382.6cmをはかる。凹地-1が上位に位置し、古代の瓦、奈良・平安の土器、早島式土器、亀山焼等の砂片が多く含まれている。(高畠)



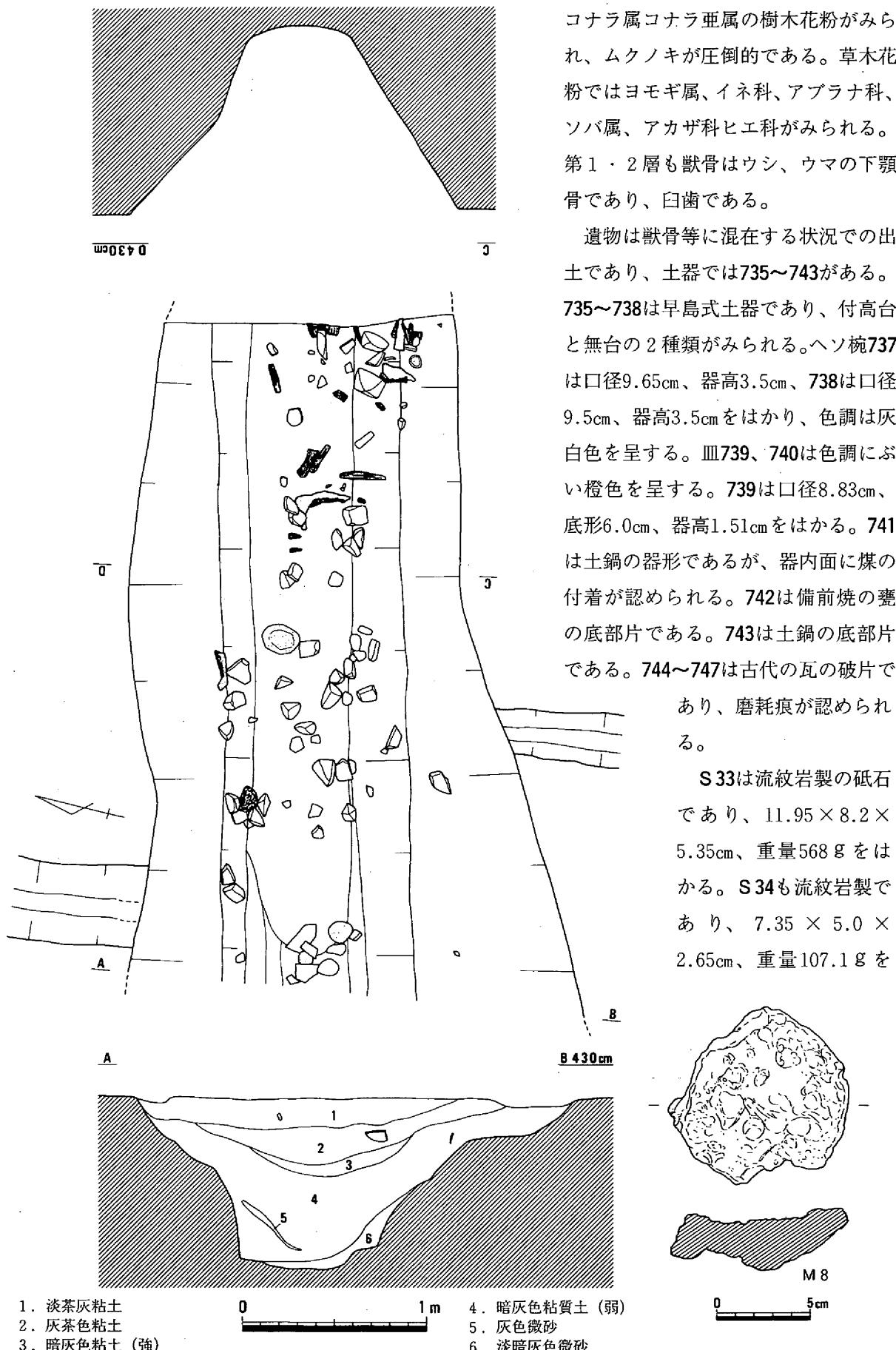
第152図 溝-49 (1/30, 1/60) • 出土遺物

溝-49 (第152図、巻頭図版3-2・図版12)

側溝4区、道路5区Bの中央北側、溝-47を切つてその南側に位置する東西溝である。本調査区の中世では最も大きい規模の溝である。上端部幅240cm、下端部幅50cm、深さ100cm、底面海拔高313cmをはかる。断面形態は逆台形を呈し、埋土は大きく4層からなる。粘性を帯びた土壤が多く、第1・2層(第153図)は粘土である。第4層中に種子を多く含み、第1・2層中の海拔376~410cm間に、土器片、獸骨、瓦片、砥石、鉄滓等を多く含む。第4層の花科分析結果はエノキ属ムクノキ、クリシイ属マテバシイ属、コナラ属アカガシ亞属、スギ、マツ属複維管束亞属、



1. 茶灰色粘質微砂 (Mn-多)
2. 灰茶色粘質微砂
3. 暗灰青色粘土 (微砂-含)
4. 暗灰青色粘土 (微砂-多く含)



第153図 溝-49 (1/30) ・出土遺物

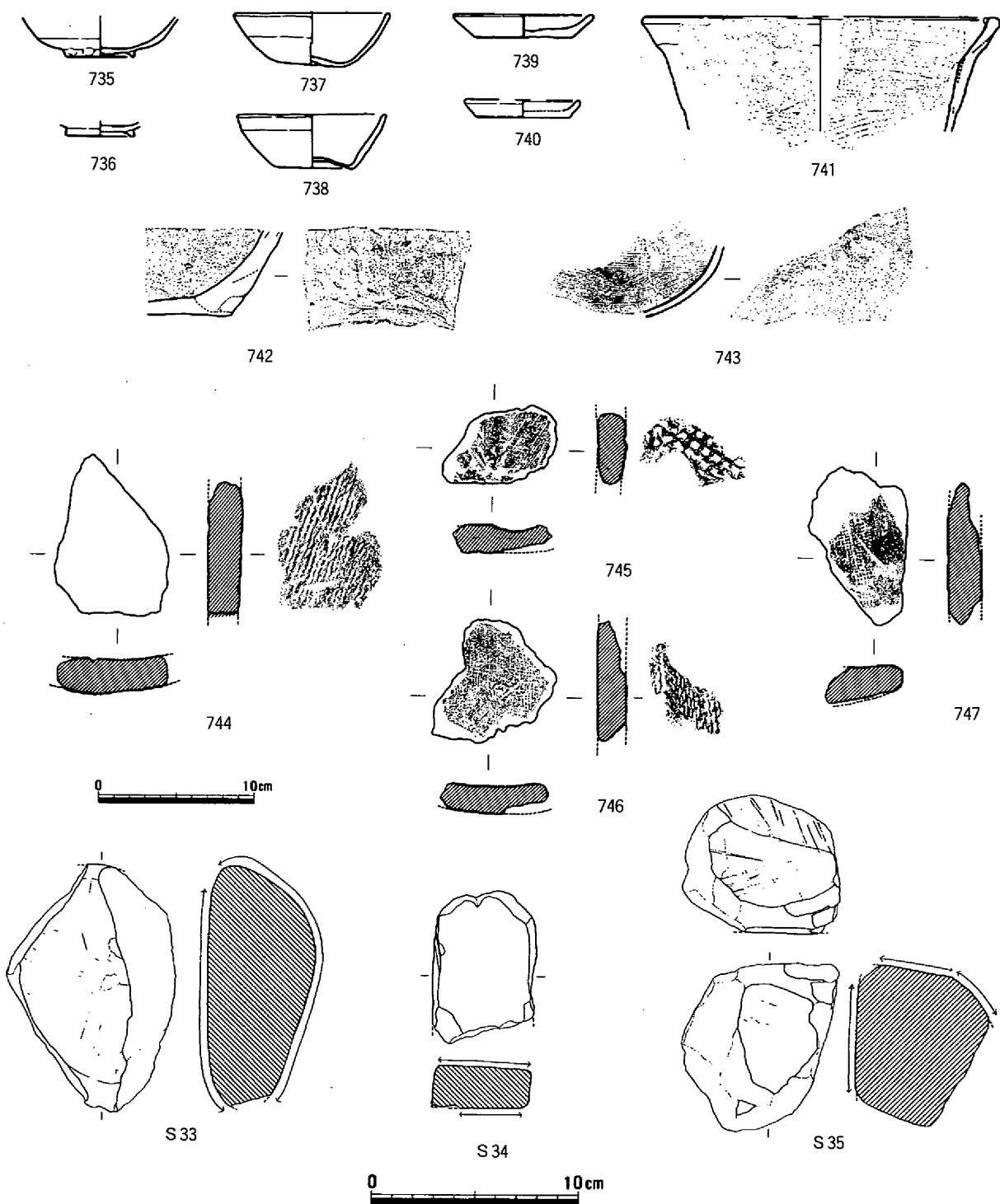
コナラ属コナラ亜属の樹木花粉がみられ、ムクノキが圧倒的である。草木花粉ではヨモギ属、イネ科、アブラナ科、ソバ属、アカザ科ヒエ科がみられる。第1・2層も獸骨はウシ、ウマの下頸骨であり、臼歯である。

遺物は獸骨等に混在する状況での出土であり、土器では735～743がある。735～738は早島式土器であり、付高台と無台の2種類がみられる。ヘソ椀737は口径9.65cm、器高3.5cm、738は口径9.5cm、器高3.5cmをはかり、色調は灰白色を呈する。皿739、740は色調にぶい橙色を呈する。739は口径8.83cm、底形6.0cm、器高1.51cmをはかる。741は土鍋の器形であるが、器内面に煤の付着が認められる。742は備前焼の甕の底部片である。743は土鍋の底部片である。744～747は古代の瓦の破片であり、磨耗痕が認められる。

S33は流紋岩製の砥石であり、 $11.95 \times 8.2 \times 5.35$ cm、重量568 gをはかる。S34も流紋岩製であり、 $7.35 \times 5.0 \times 2.65$ cm、重量107.1 gを

はかる砥石である。S 35も流紋岩製の砥石であり、 $7.65 \times 8.15 \times 6.65\text{cm}$ 、重量476gをはかる。M 8は楕円形溝であり、 $8.8 \times 9.5 \times 2.7\text{cm}$ 、重量304.7gをはかる。

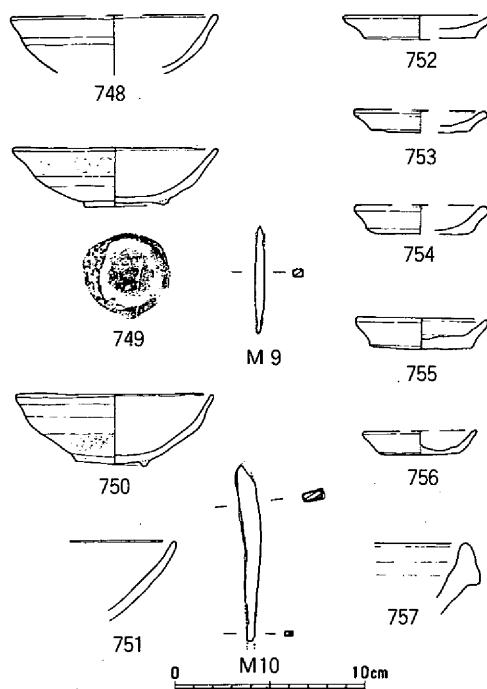
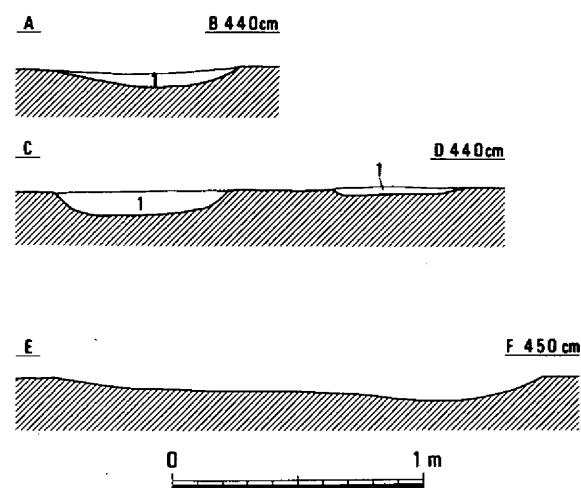
この溝の埋土状況から、用排水路としての機能は14世紀前半頃にはすでになく、堆積が進んでいたようである。第1、2層の埋没に合わせて、獸骨、土器、石等が投棄されており、あたかも牛馬等を用いた「雨乞い」等の行為が実施された可能性を暗示している。
(高畠)



第154図 溝-49出土遺物

溝-50~53 (第155図)

側溝4区、道路5区Bの南側、土壙-69の南側に位置する。東西方向に2条が並列しており、溝-52だけが側溝4区に向い北西方向に屈曲する。溝の上

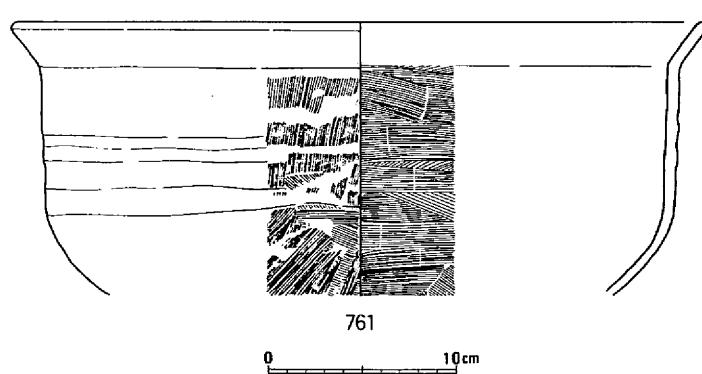
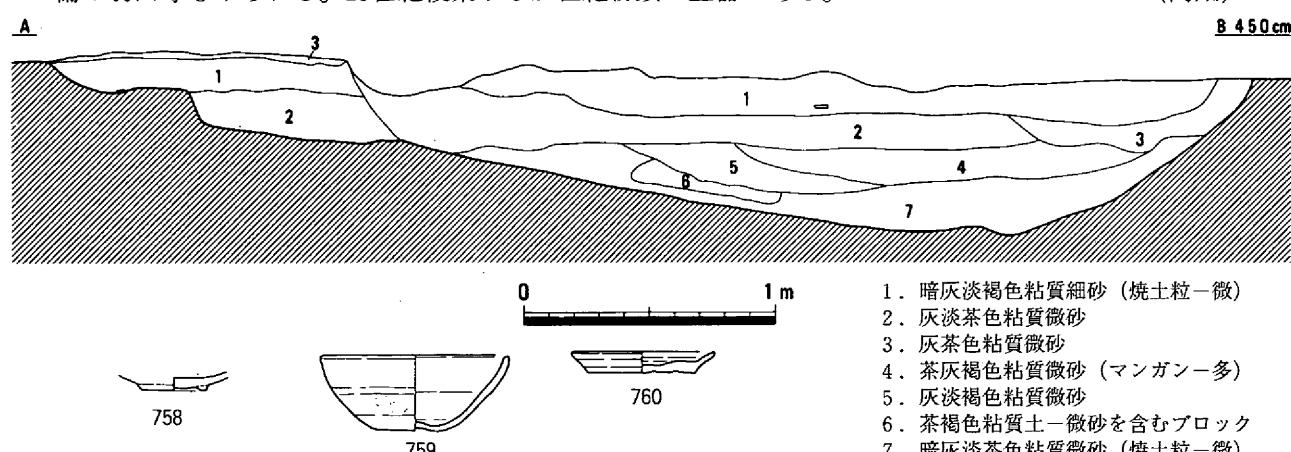


第155図 溝-50, 52 (1/30)・出土遺物

端部は35~70cm、深さ4.0~9.0cm、底面海拔高は418~425cmをはかる。

遺物は溝-50が土器小片40点、溝-52が100片以上の土器片、鉄器が出土している。東播系のコネ鉢、輪の羽口等もみられる。13世紀後葉から14世紀初頭の土器である。

(高畠)



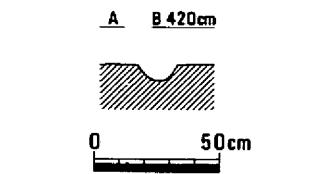
第156図 溝-54 (1/30)・出土遺物

溝-54 (第156図)

側溝4区中央、溝-52の4.5m南側に位置する東西方向の溝である。上端部幅335cm、深さ70cm、底面海拔高370cmをはかる。埋土は7層からなり、上層、下層に遺物を含んでいる。

遺物は椀758、759が早島式土器であり、759は口径9.8cm、器高

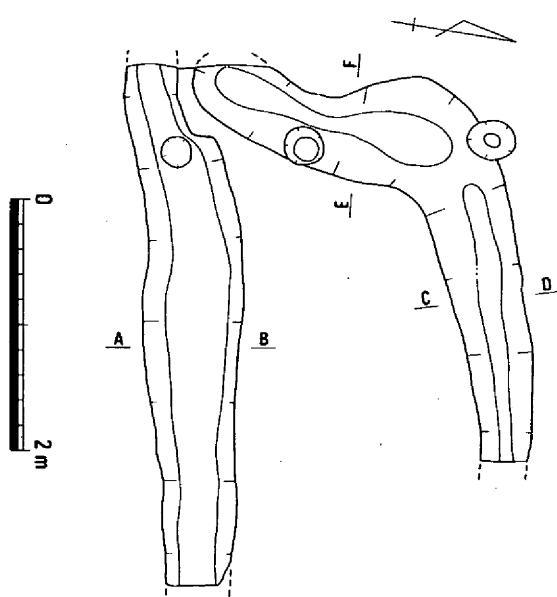
4.1cmをはかり、灰白色を呈する。小皿760は口径7.6cm、器高1.1cm、底径5.8cmをはかり色調にぶい黄橙色を呈する。土鍋761は口径36.4cm、残存高14.5cmをはかる。759が下層出土であり、他の3点は上層からの出土である。759は14世紀前半のヘソ碗である。
(高畠)



第157図 溝-56 (1/30)

溝-56 (第157図)

側溝4区の南側、溝-55の7.5m南西に位置する東西溝である。上端部幅16cm、深さ6~7cm、底面海拔高は397.5cmをはかる小溝である。断面形状は椀径を呈し、埋土中に土器小片を含む。
(高畠)



第158図 溝-55, 溝状遺構-2 (1/30, 1/60)・出土遺物

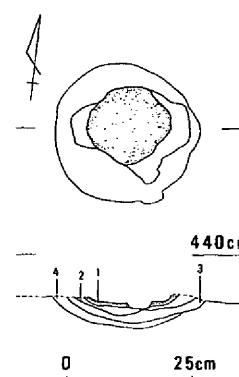
溝-55・溝状遺構-2 (第158図)

道路6区中央、土壌-70の1.0m南側に位置する溝-55と土壌-70の下位に所在する溝状遺構-2が接している。海拔415cmにて検出した遺構であり、両方の埋土中からは多くの土器片が出土している。溝-55では高台付の早島式土器、亀山焼がみられ、溝状遺構-2では60片ほどの土器片がみられる。すべてが細片であり、実測は不可能である。それらの口縁部の形状、高台の有無等の特徴から溝-55は14世紀初頭、溝状遺構-2が14世紀前半と考えられる。
(高畠)

(5) 鍛冶炉

鍛冶炉-2 (第159図、図版13-1・2)

道路6区の北側、溝状遺構-2の5.0m北側に位置する。凹凸を持つ炉底部が24



1. 灰青白色焼土 (硬質焼成)
2. 紅色焼土
3. 紅橙色焼土
4. 淡紅橙色焼土

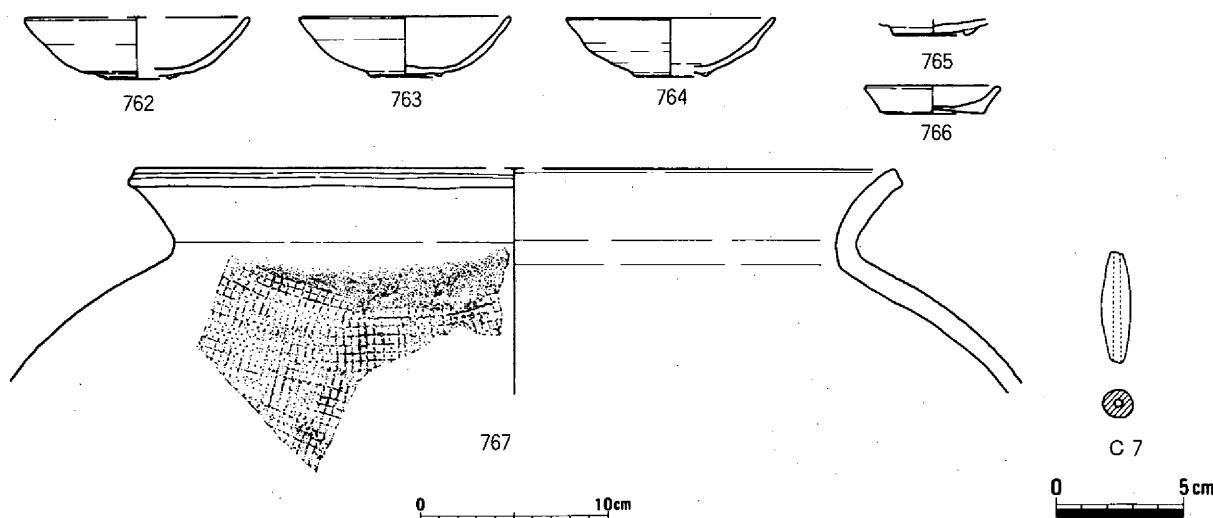
第159図 鍛冶炉-2 (1/15)

~20cm範囲に残存する鍛冶炉である。色調は灰青白色を呈し、非常に硬質に焼けている。炉底を中心とする被熱範囲は31~28cmであり、平面は円形を呈する。中心から被熱度による土色の変化がみられ、暗赤紅色、紅橙色と波紋状に認められる。その変化は炉底下位にも同様におよんでおり、被熱深度が5.0cmまで認められる。炉は自然堆積土を掘り込み作られており、炉底に粘土等を貼付した可能性がある。
(高畠)

(6) 道

砂利道-1 (第160図、図版13-3)

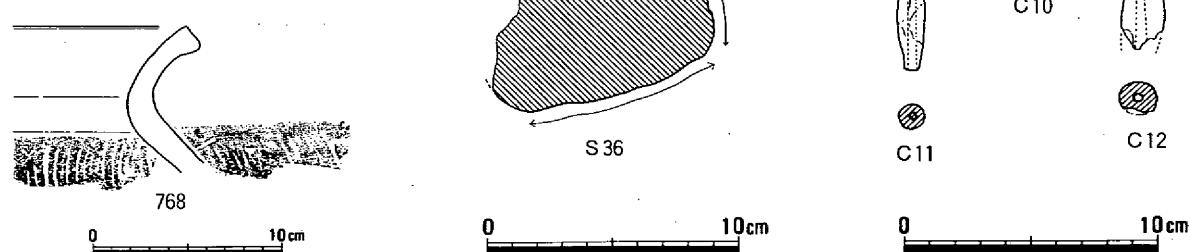
道路5区Bの南側、用水路に沿う南北の道である。幅約60cm、全長7.2mまでを検出しており、砂利が敷詰められている。河原石が利用され、敷石に混って古墳時代から古代にかけての須恵器片がみられる。道に伴う土器は13世紀後葉の早島式土器であり、763は口径11cm、器高3.2cmをはかる。(高畠)



第160図 砂利道-1 出土遺物

(7) 遺構に伴わない遺物

中世の遺物は道路5区Bから道路6区にかけて多くみられ、遺構の分布する範囲と一致をしている。種類は早島式土器碗、土師器小皿・鍋、備前焼擂鉢、亀山焼甕、土錘、銭、鉄製品、鐵滓、骨等である。なかでも、早島式土器の碗、土師器の小皿が多くみられ、集落の一部と考えられる場所である。785は亀山焼の甕であり、瓦質で胎土中に0.5mm~5mm前後の白色小砂粒を多く含む。外面にタタキメ、内面に當て具の痕がみられる。C8~C12は土錘であり、C8は長さ5.35cm、径16.5cm、重量12.47gをはかる。(高畠)



第161図 遺構に伴わない遺物

第6節 近世以降の遺構・遺物

(1) 近世の概要

近世以降の遺構・遺物は道路2、3区にかかる溝-60とその周辺、道路4、5区境の東側凹地、南流する糸田川底の3ヶ所から出土している。屋敷跡と直接結びつくような柱穴、土壙等はみられず、溝等の遺構のみが散見できる地区である。

まず、津寺三本木遺跡の近世は何時頃に機能していたのかを、溝-60から追跡をしてみる。

溝-60とその周辺からは18世紀後半から19世紀後半の肥前、関西系の磁器が比較的多く出土している。なかには溝底から出土した瓶784の白磁のように1640～1660年代を示すものもある。溝-60内の出土状況は、溝底から1780～1840年の肥前系染付碗（広東型）779、第7層から1780～1810年の肥前染付湯呑780、第5層から18世紀後半～幕末の肥前白磁（紅皿）785、第3層から19世紀の関西系灯明皿786、787、第1層から1820～1860年の肥前染付碗781、782等である。この層序を参考にすると、上・中・下層を通して18世紀から19世紀代の磁器が中心である。下層の肥前染付湯呑780を基準にすると、1780～1810年前後の項から機能した溝であり、肥前白磁785からだと幕末には廃絶した可能性が考えられ、約100年間の存続が推定できる。

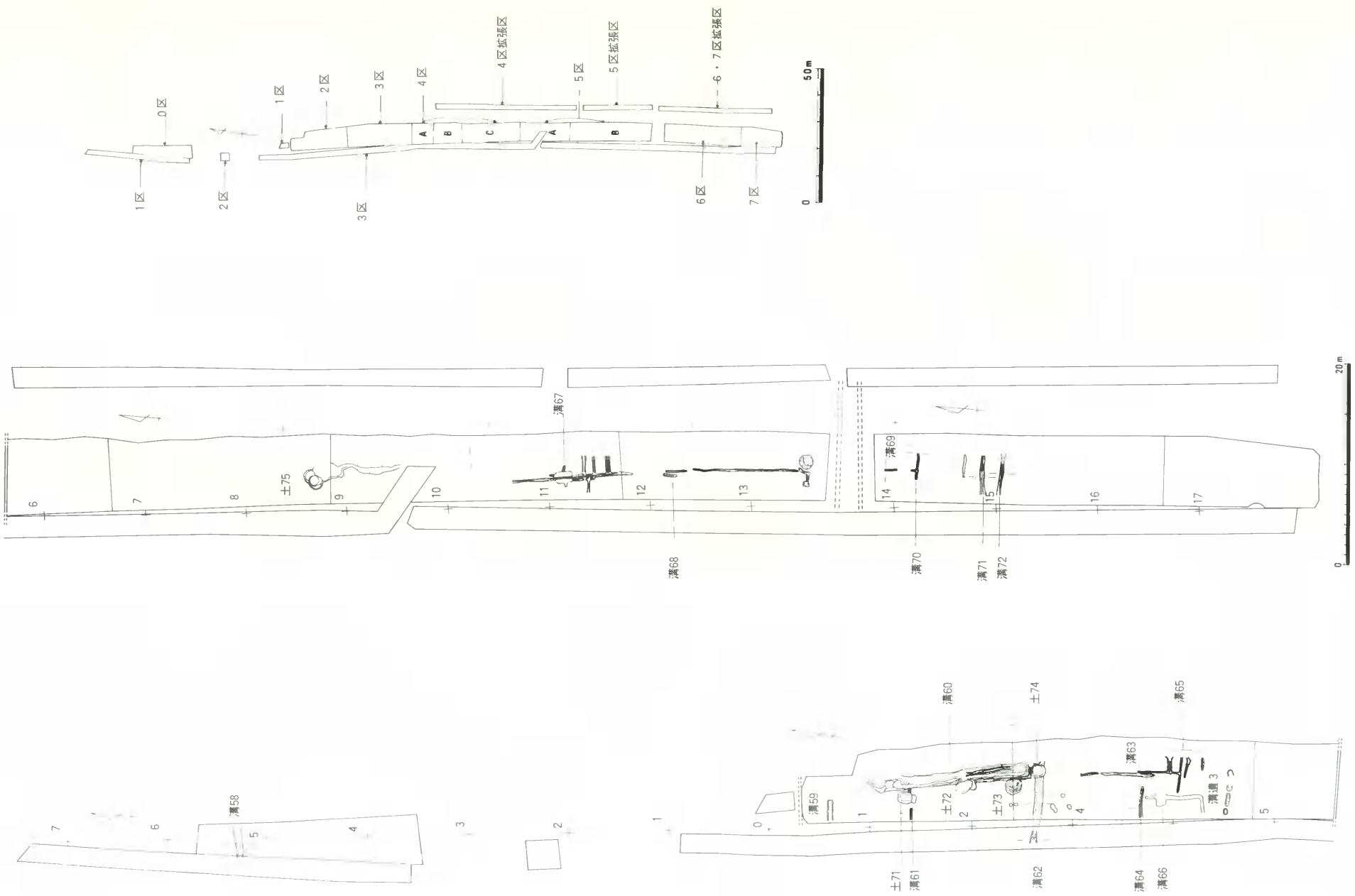
次に、4、5区境の凹地出土の陶磁器をみてみると、1780～1820年の肥前系染付碗（広東型）の蓋812、19世紀初頭～幕末の肥前色絵皿814、19世紀中葉～末の関西系染付碗の蓋813、19世紀の関西系陶器皿816、明治～大正の瀬戸美濃系染付碗817等がある。817を除けば、溝-60に年代幅は近く、18世紀後半から19世紀前半、幕末にまとまっており、ほぼ同時期に存在した遺構であることが判明している。おそらく、これらの陶磁器が伴う屋敷地等の遺構は、調査区の東側に所在する可能性が強い。また、調査直前まで農業用水路であった糸田川底出土の陶磁器も18世紀中葉から一部大正期までを含むが、おおむね18世紀後半から19世紀後半までのものが多いため傾向を示している。すなわち溝-60、凹地、糸田川の3遺構が18世紀後半から19世紀後半にかけて、同時に機能していたことを物語っている。あるいは、18世紀の中葉段階にこの地域では大規模な何らかの事業が実施された可能性も考えられる。

これらの遺構、遺物と関連を持つと思われる周辺の近世遺構をみてみると、調査区の北東約100m、現在の三本木部落の北端部に「津寺知行所」の比定地が所在する。

この知行所は、寛永2年（1625年）10月23日に榎原職直が父花房職之（助兵衛）の遺領のうち1000石（津寺知行所）を与えられたものであり、幕末まで代々継続をしている。

近年、調査された津寺遺跡でも西川、高田、中屋調査区では近世の集落が確認されており、3集落とも16世紀末から17世紀初頭の時期を共有するが、西川集落が17世紀初頭、高田集落が17世紀前半頃には放棄され、最後に中屋の集落が18世紀中葉には無くなっている。その後は農業用水路のみが残り、周辺は耕地化されていったようである。そうすると、津寺三本木の集落は津寺遺跡の中屋の集落が放棄後に形成された可能性も考えられる。あるいは、津寺知行所に関連する西端部の施設の一部である可能性も考えられる。

（高畠）

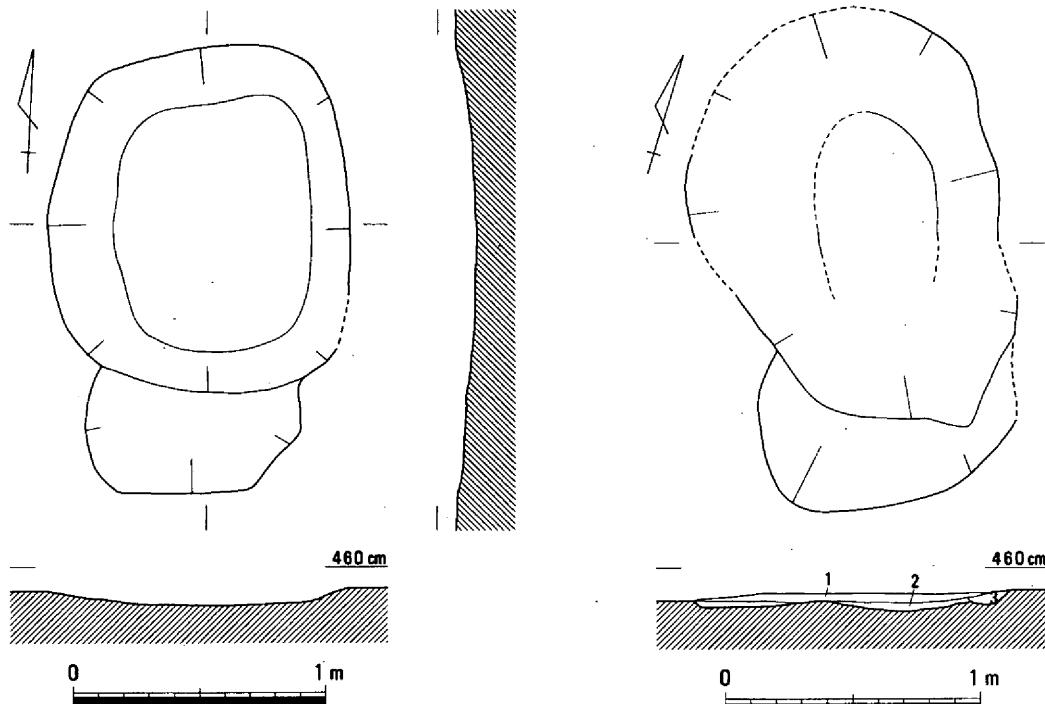


第162図 津寺三本木遺跡近世以降全体図 (1/400)

(2) 土壙

土壙-71 (第163図)

道路2区の中央あたりで、溝-60の北部の西側に位置する。楕円形状を呈し、長径176cm、短径122cm、



第163図 土壙-71 (1/30)

1. 灰色粘土（蘭草穴底）
2. 暗茶褐色微砂（Fe層）
3. 淡灰青色微砂

第164図 土壙-72 (1/30)

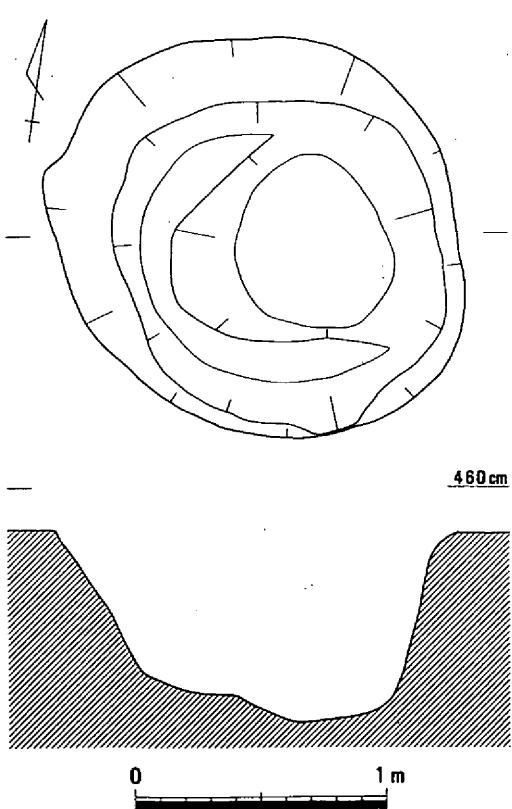
深さ7cmをはかる。近世以降の蘭草染めの際に使用した穴と考えられる。
(速水)

土壙-72 (第164図)

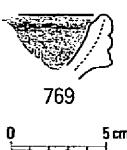
道路2区の中央よりやや南で、溝-60の西側に接するように位置している。楕円形状を呈し、長径約200cm、短径120cm、深さ8cmをはかる。近世以降の蘭草染めの際に使用した穴と考えられる。
(速水)

土壙-73 (第165図)

道路2・3区の境中央、溝-60の南西肩口に接して位置する土壙である。溝-60に付属する小溝を切って作られており、長径176cm、短径154cmの円形、深さ76.9cm、底面海拔高366cmをはかる。断面形状は2段で椀形を呈し、埋土は暗灰褐色粘質土である。溝-60を



第165図 土壙-73 (1/30)・出土遺物

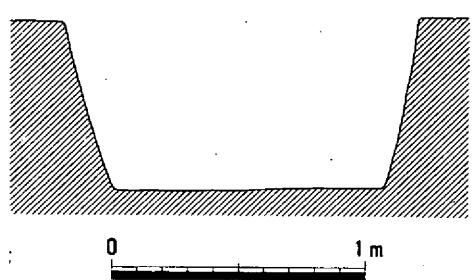
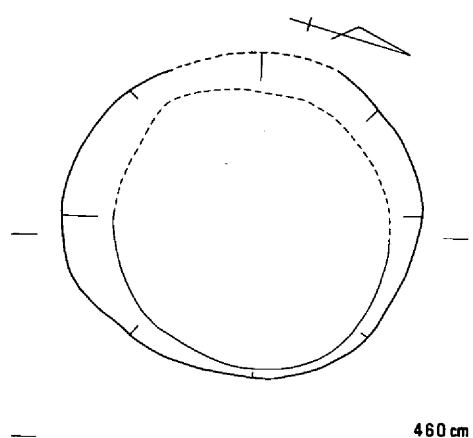


切っており、17世紀前半以降に掘削された
土壙である。 (高畠)

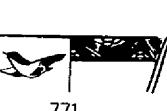
土壙-74 (第167図)

道路3区の北側、溝-60の南側に位置する
土壙である。長軸142cm、短軸130cm、深
さ68cm、底面海拔高は376.5cmをはかる円
形の土壙である。断面形態は箱形を呈し、
埋土は柔かい暗灰色粘質微砂である。

遺物は肥前染付の蓋770、碗771、丸瓦773
の3点である。碗771は1820~60年代の年
代が与えられる。 (高畠)



770

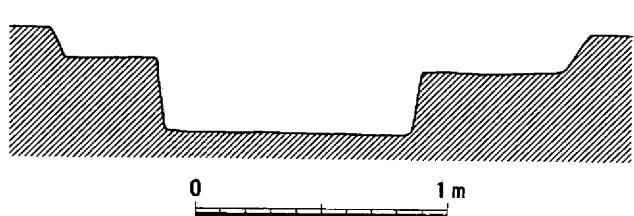
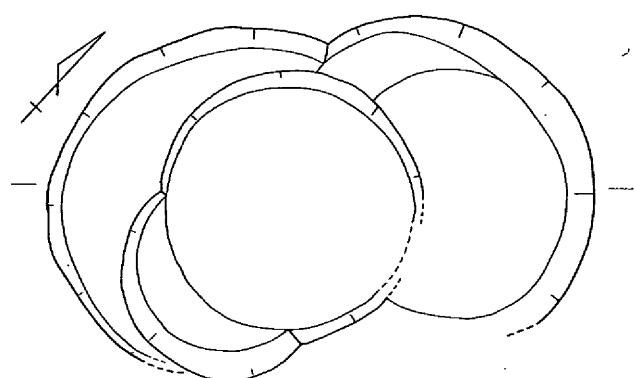


772



771

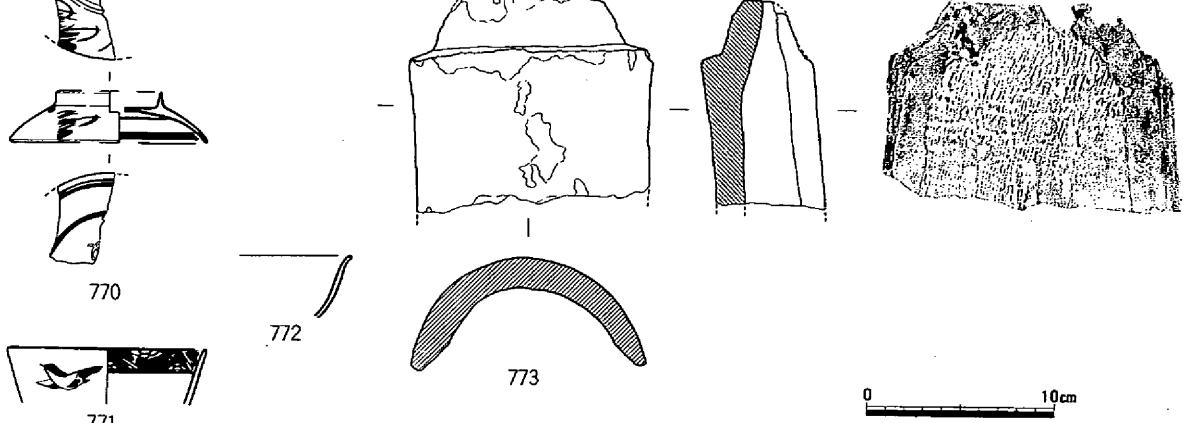
第167図 土壙-74 (1/30) ・出土遺物



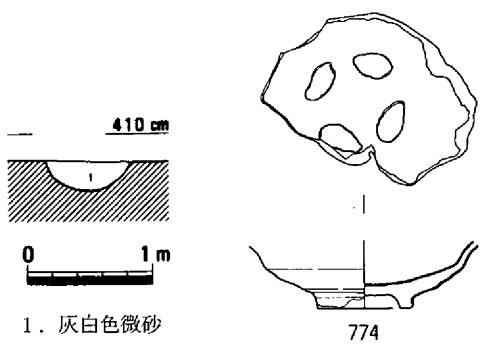
第166図 土壙-75 (1/30)

土壙-75 (第166図)

道路4区Cの南側中央に位置する円形の土壙群である。海拔410cmにて検出した土壙であり、ほぼ同じ場所で2~3回の作り替えが認められる。中央に位置する土壙が最も新しいものであり、上端部径約100cm、深さ41.8cm、底面海拔高368.2cmをはかる。断面形態は箱形を呈し、埋土は暗灰色粘質微砂を中心に蒿状の有機質を含む薄い層が認められる。他の土壙と若干の規模の相異はあるが、同一の目的のために作られたと考えられ、畑、水田に関連するものであろう。近世・代の可能性が強い。 (高畠)



(3) 溝



第168図 溝一58 (1/60)・出土遺物

溝一58 (第168図)

道路0区の北側に位置し、東西方向に流走する溝である。弥生時代後期の竪穴住居-2の上位を横切る格好になる。溝の東側は上端部幅85cm、西側55cm、深さ9.5cm、底面海拔高438cmをはかる。断面形態は椀形を呈し、埋土は灰白色微砂の1層である。

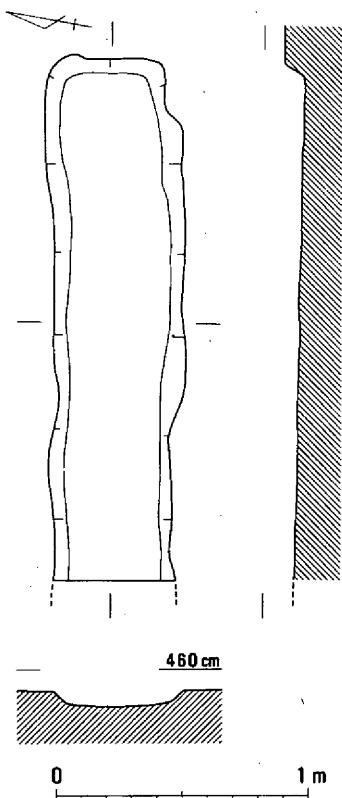
遺物は埋土中から皿774が出土しており、高台部分を残している。底径5.0cmをはかり、底部を除き施釉がみられる。肥前灰釉陶器皿であり、見込みに砂目がみられる。17世紀初頭の時期である。(高畠)

溝一59 (第169図)

道路2区の北側に位置する溝であり、東西方向に所在する。断面形体は皿形を呈し、上端部幅80cm、下端部幅60cm、深さ約6.0cm、底面海拔高は444cmをはかる。(高畠)

溝一60 (第170図、図版14-2・3)

道路2区から3区北側にかけて、東側を南北方向に流れている。調査当初からはっきりとその存在が確認され、近年まで重要な役割を果たしていたことが伺われる。溝の南辺は土壤-74の手前で完結しているが、北辺は北東方向へ蛇行して、調査区外へ進んでいる。溝の幅は、東側が後世の用水路によって削平されているため、はっきりとわからない。深さも東側の肩が現存していないので正確にはわからないが、約40cm程度と考えられる。断面形も東側が削平を受けているため、はっきりしないが、皿形及び逆台形状を呈するものと思われる。断面は、場所によって違うが、ほぼ5~6層からなる。このうち、E F、G H断面については、上部3層が新しい別の溝と考えられるが、今回は一括して取り扱った。ほとんどが微砂の堆積であるが、底部ではグライ化が見られた。溝内には、北側の溜まり状になっている部分を中心に杭の跡が38本程見られた。このことから、用水か環濠関係のものと思われるが、はっきりしたことはわからない。

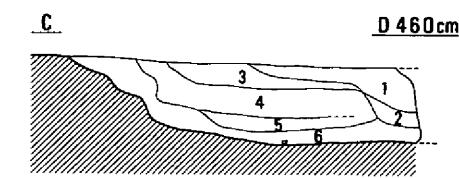
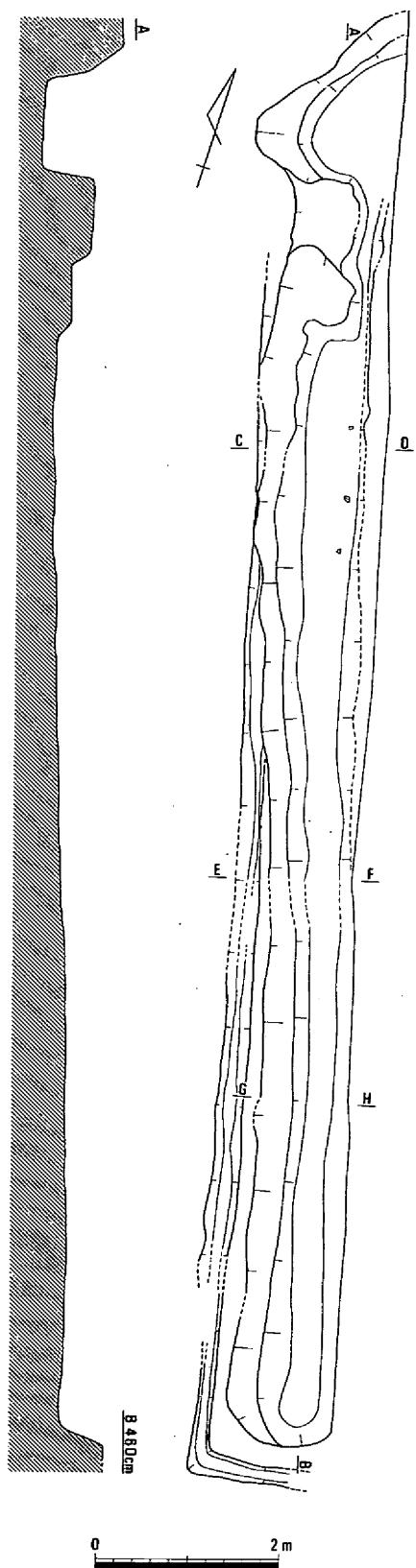


第169図 溝一59 (1/30)

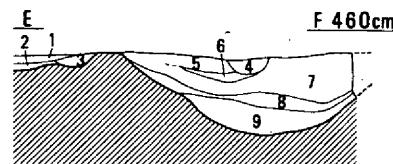
遺物では、多くの陶磁器が出土した。種類・用途ともに多種にわたっている。775は江戸時代のものと考えられる陶器の急須であり、鈍い赤褐色を呈している。776は備前焼の擂鉢である。777は備前焼と思われる小皿であり、表面に茶釉が付着している。肥前系の染付けは778~783である。778、779、783は、広東型碗であり、778、783は蓋にあたる。780は湯呑み、781は碗、782は鉢である。784、785は肥前系の白磁であり、両方ともほぼ全体に施釉されている。784は瓶である。785は小杯か小皿にあたり、部分的に褐色があるため、紅皿と考えられる。786、787は、関西系の陶器で、灯明皿である。

788の陶器、789の染付けの磁器については、はっきりとした種類は明確ではない。790、791は、内側に炭化物のようなものが付着しているところから、灯明皿と考えられる。792、793は備前焼の擂り鉢であり、792は古備前にあたる。794も擂鉢である。795は備前焼の大甕である。796は陶器の台付碗

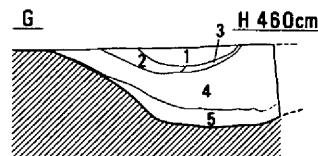
あり、内側と高台部にそれぞれ重ね焼痕がみられる。軒平瓦は797、798であり、798は三頭右巴の文様であることははっきりとわかる。799は軒丸瓦で三頭右巴の文様である。中世以前の土器は存在しなかった。鑑定の結果、陶磁器の時期も17世紀前半から幕末までの比較的長い時期にあたるため、近世を通じて存在した溝と考えられる。（速水）



1. 淡茶灰青色砂
2. 茶灰色粘土
3. 灰色砂（小石をかむ）
4. 茶褐灰色微砂
5. 茶褐灰色微砂
6. 暗灰色粗砂



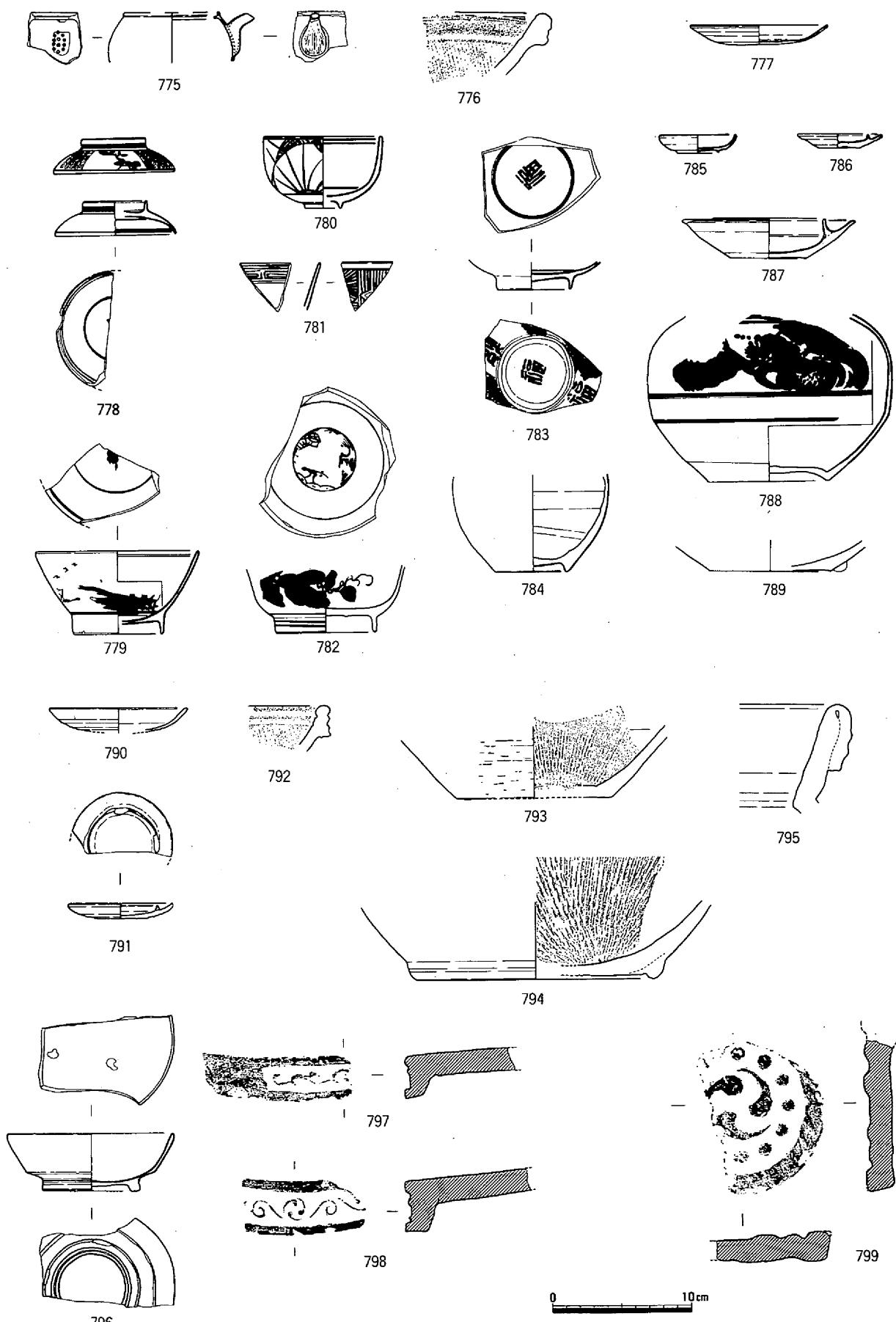
- | | |
|---------------|------------|
| 1. 灰色粘土（蘿草穴底） | 6. 青灰色粘質微砂 |
| 2. 茶褐色微砂（Fe層） | 7. 茶褐灰色微砂 |
| 3. 淡灰青色微砂 | 8. 暗灰色微砂 |
| 4. 淡青灰色粘土微砂 | 9. 暗青灰色粘質砂 |
| 5. 淡青灰色微砂 | |



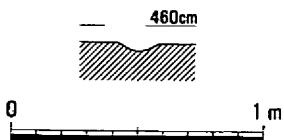
1. 青灰色粘質微砂
2. 淡青灰色粘質微砂
3. 橙灰色微砂
4. 茶褐灰色微砂
5. 暗灰青色砂



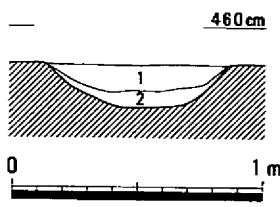
第170図 溝-60 (1/30, 1/80)



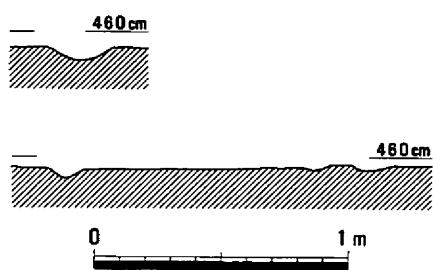
第171図 溝一60出土遺物



第172図 溝-61 (1/30)



第173図 溝-62 (1/30)



第174図 溝-63~65 (1/30)

溝-61 (第172図)
道路2区の北側、溝-60の北西に位置する東西溝である。上端部幅15cm、深さ3cm、底面海拔高450cmをはかる。断面形態は椀形を呈し、埋土は黄灰色微砂の1層である。溝-60より古い溝である。(高畠)

溝-62 (第173図)

道路3区北側、溝-60の南側に直交する格好で東西方向に位置する溝である。土壌-74により東側を切ら

れており、上端部幅120cm、深さ17.9~19.5cm、底面海拔高4.26cm前後をはかる。遺物は出土していないが、19世紀前半期の土壌-74に切られており、それより古いことがわかる。(高畠)

溝-63~65 (第174図)

道路3区中央、溝-62の3.5m南側に位置する溝である。南北が2条、東西が4条からなり、畑地等の畝溝、区画の溝とも考えられる。南側に直接継続はしないが、5区Bでも近い溝がみられる。幅10~26cm、深さ1.0~6.6cm、検出面は海拔446cmをはかる。南北溝-64は底面に凹凸が認められ、断面は皿形を呈する。古代、中世には遺構が確認されていない場所でもある。(高畠)

溝-67, 68 (第175図)

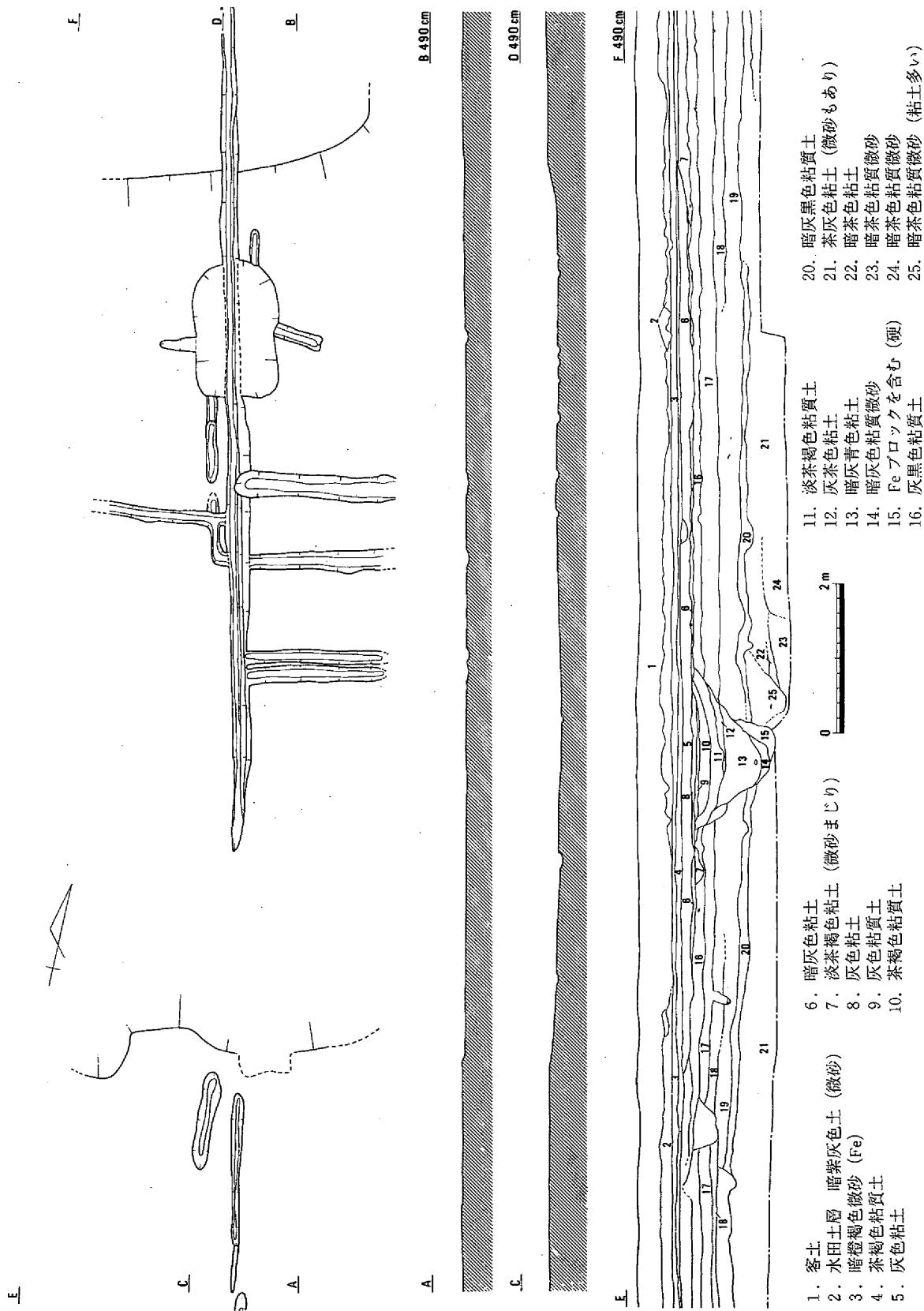
道路5区A南側、5区B北側に位置する溝群である。溝-67の南北全長は12m、東西が3.7mをはかり、南北溝は3条、東西溝は5条からなる。埋土の土質等から一時期には限定できない。これらの溝が所在する場所は南北幅11.5m、東西4.0m+αの凹地-1内であり、凹地の深さ約20cmをはかる。第5・6層が埋土にあたり、第5層が灰色粘土、第6層が暗灰色粘土であり、両層の底面にはマンガンの凝集がみられる。第5層中には奈良時代の須恵器片が多く、早島式土器、青花片が若干出土している。

両層のプラント・オパール分析ではイネの珪酸体密度は6,700個/gと高い値の結果がえられており、凹地-1および近傍で稲作が行われていた可能性が高い。溝-67, 68は第5層を掘り込んで作られた溝であり、近世遺構の畑、水田関連の遺構と考えられる。この種の素掘り溝は凹地-1の埋土上面(A B断面)と下面溝-46(C D断面)にみられ、同機能を有する小溝と考えられる。ちなみに、第6層下位の第16層を切って14世紀第2四半期頃に廃絶した溝-49が作られている。(高畠)

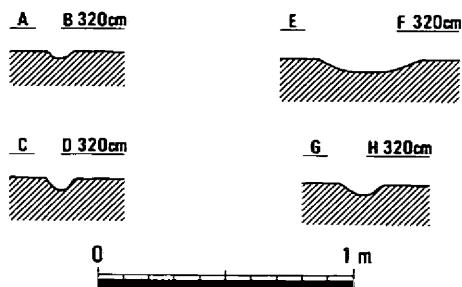
溝-69~72 (第176図)

道路6区の高所、北側半分に南北溝が1条、東西溝が4条所在する。海拔430cmの面で検出した溝であり、大きいものでは溝-71が上端部約40cm、深さ40~10cmをはかり、埋土は灰白色の1層である。

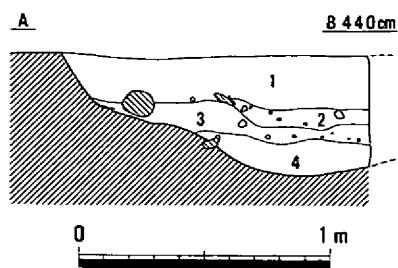
溝-72の南側に幅約11mの凹地-2が所在し、5区Bの凹地-1と同形状であるが、下位には素掘り溝ではなく柱穴群がみられる。早島式土器片を埋土中に持つ柱穴が多い。(高畠)



第175図 溝-67, 68 (1/80)

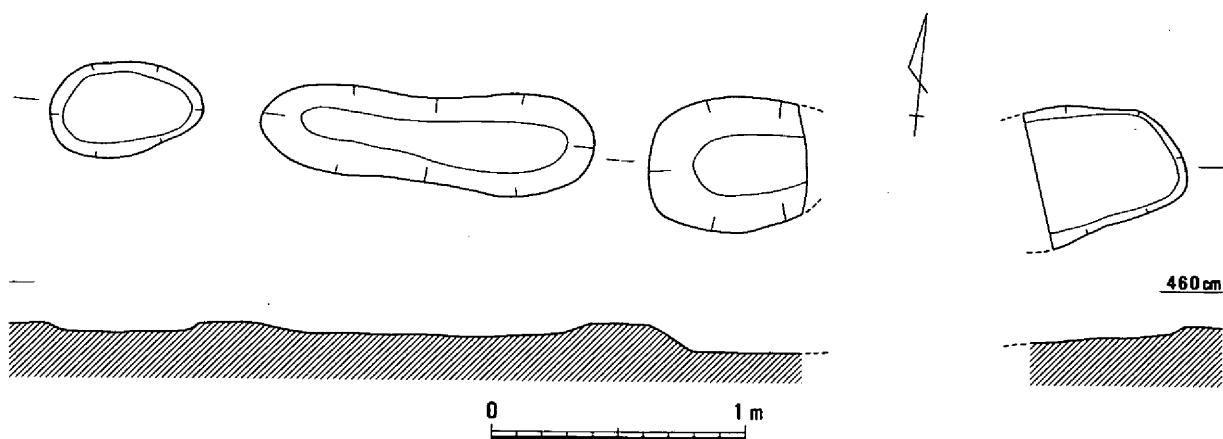


第176図 溝—69～72 (1/30)



1. 明茶灰色粘質微砂（腐植土の底が、2～3面みられる）
2. 粗砂・礫（円）
3. 粗砂・礫（須恵器混入）
4. 暗茶色粘土（粗砂混じり）

第177図 溝—73 (1/30)



溝—73 (第177図)

旧道路の西側を南北に流走していた糸田川（用排水路）である。第177図は5区Aに残る用排水路の右岸側であり、洪水等による掘り替え、川浚えが行なわれ、川筋の移動が認められる。最も西側に寄っていた時の溝の断面状況である。重機による表土掘削により、海拔430cm付近で検出されており、残存部幅120cm、深さ48cm、底面海拔高338cmをはかる。おそらく上部幅は200cm前後と考えられる。825～828、830～848、C13、M12～M15が上層から出土している。

(高畠)

溝状遺構—3 (第178図)



第178図 溝状遺構—3 (1/30)・出土遺物
約3.0cm、西から2番目が長軸130cm、短軸40cm、深さ約4.0cmをはかり、底面海拔高では西から3番目が434cmをはかり最も低く、深いものである。溝—63～66等に関連を持ち所在したと考えられる。(高畠)

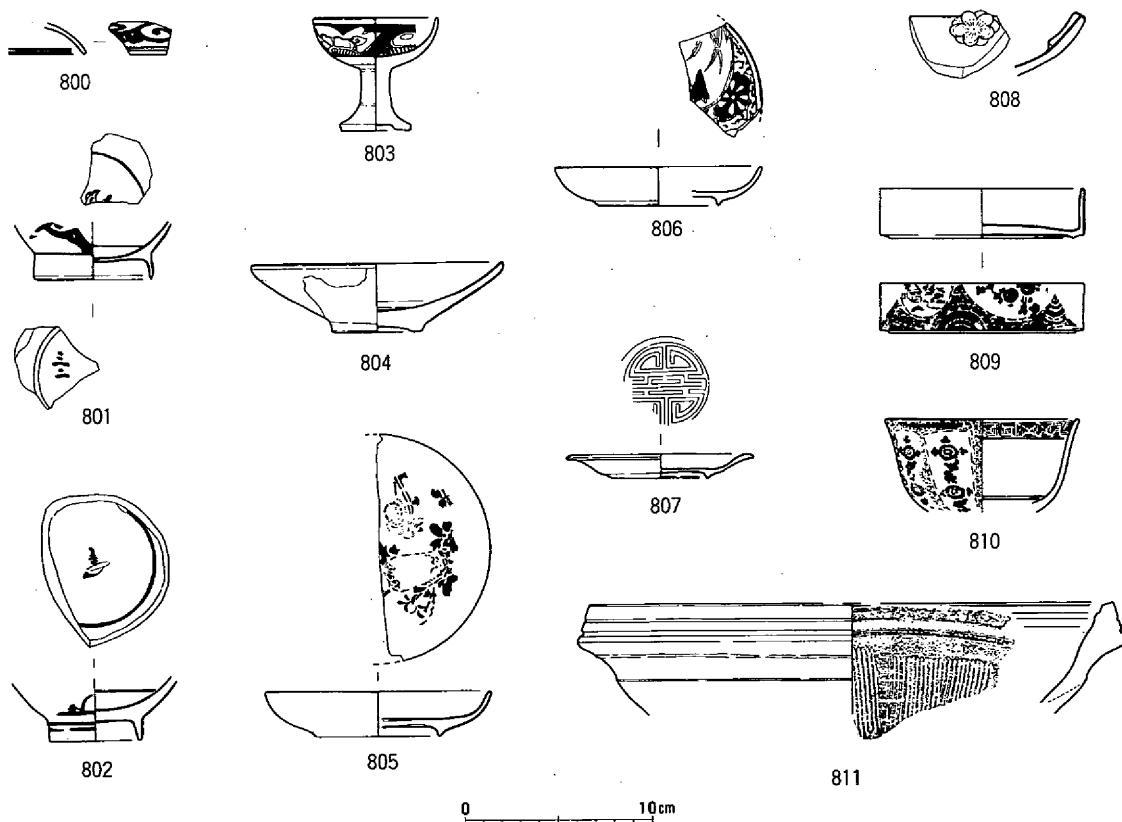
道路3区南側、溝—65の4.5m南側に位置する。全長で約4.5mをはかる繭状の土壙が4基、東西に並ぶ。西端の土壙は長軸60cm、短軸37cm、深さ434cmをはかり最も低く、深いものである。溝—63～66等に関連を持ち所在したと考えられる。(高畠)

(4) 遺構に伴わない遺物

近世を中心とする遺物は道路2区の溝-60の周辺、道路5区A・Bの凹地-1付近の2ヶ所に集中して認められ、全体では調査前まで機能をしていた糸田川（用排水路）川床からも出土をしている。土器の類が主であり、肥前、関西、瀬戸・美濃系の陶磁器がみられ、皿・碗・酒杯等が多い。他に備前焼の甕・擂鉢・小皿、土師器の土鍋・小皿、瓦等がみられる。木製品では漆塗りの椀、曲物の底板、下駄、金属製品では鎌、釘、鎖、鋤、襷の把手、杯、キセル等の吸口、銭、石製品は硯等がみられる。

陶磁器、800～848のうち肥前染付碗825が18世紀前半～中葉と最も古く、瀬戸・美濃系皿805、806、807、肥前染付809、810、817等が明治～大正期であり、型紙刷りである。826が銅版転写の肥前染付である。遺物では18世紀中葉～20世紀前葉までの時期幅が認められ、その中では18世紀後半から19世紀中葉までのものが多い。この状況は道路2、3区に所在する溝-60等の遺構の時期とも一致する現象である。津寺三本木遺跡の調査区は18世紀後半から19世紀中葉までの遺構・遺物がみられ、江戸時代の後期に集落などの何らかの施設が存在していたと考えられる。なお、糸田川（用排水路）の東側には溝-60に続く比較的大形の遺構の存在が想定できる。また、19世紀後葉から明治、大正の遺物は糸田川内からの出土であり、現在まで継続して利用された遺構からの出土である。

磁器以外では、811、821、844～848の7点が出土しており、そのうち擂鉢811、846～848の4点がある。848は口径36.62cm、残存高8.0cmをはかり、口縁端に片口部分が少し残る。卸し目は8条1単位、他に比べると粗であり、17世紀末頃であろうか。847は口径28.22cm、器高10.43cm、底径14.8cmをはかり、卸し目は8条で1単位となる。土器の回転方向は右廻りである。時期は最も新しく、19世紀の

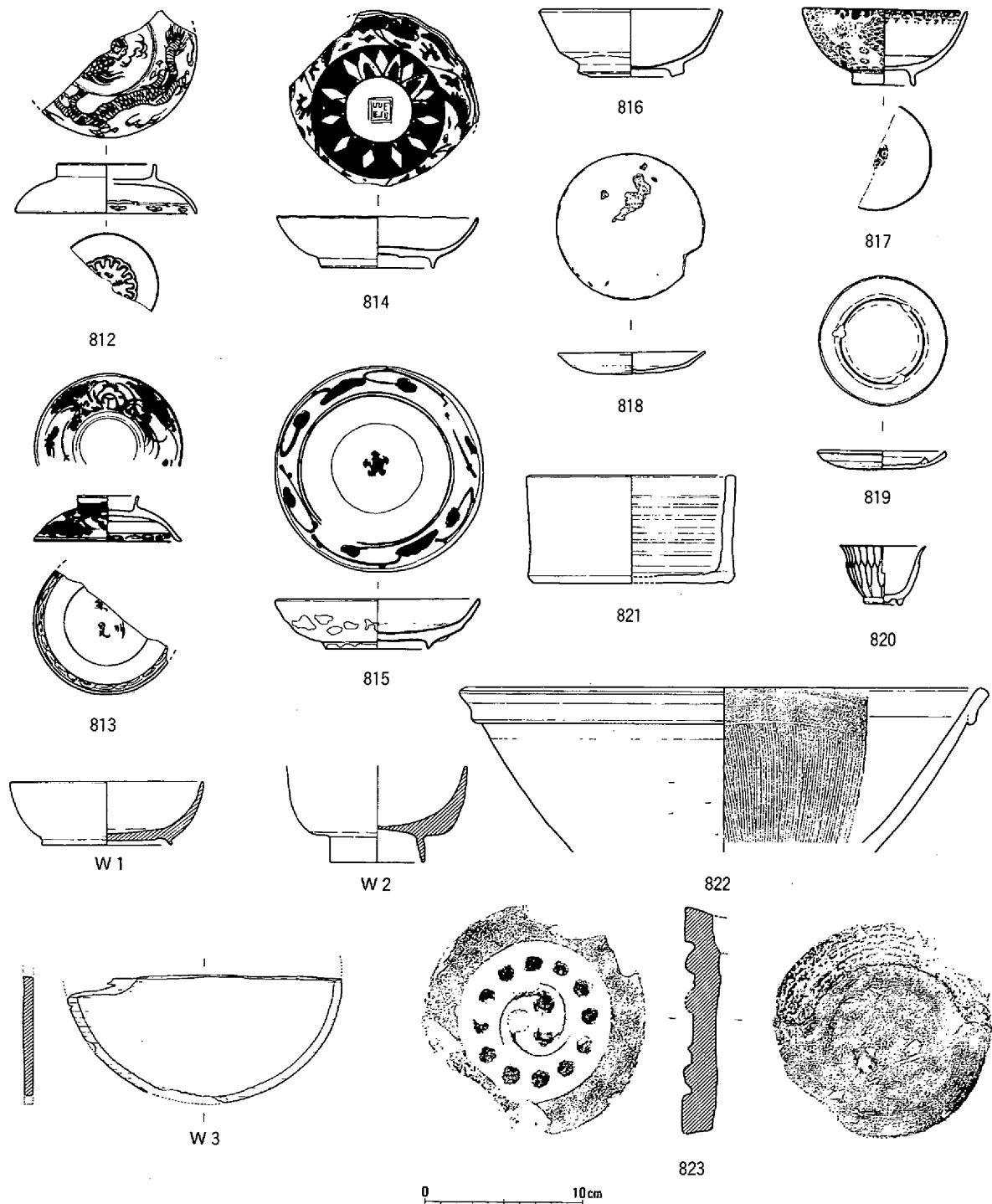
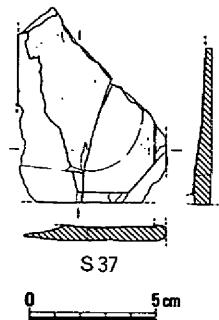


第179図 遺構に伴わない遺物（1）

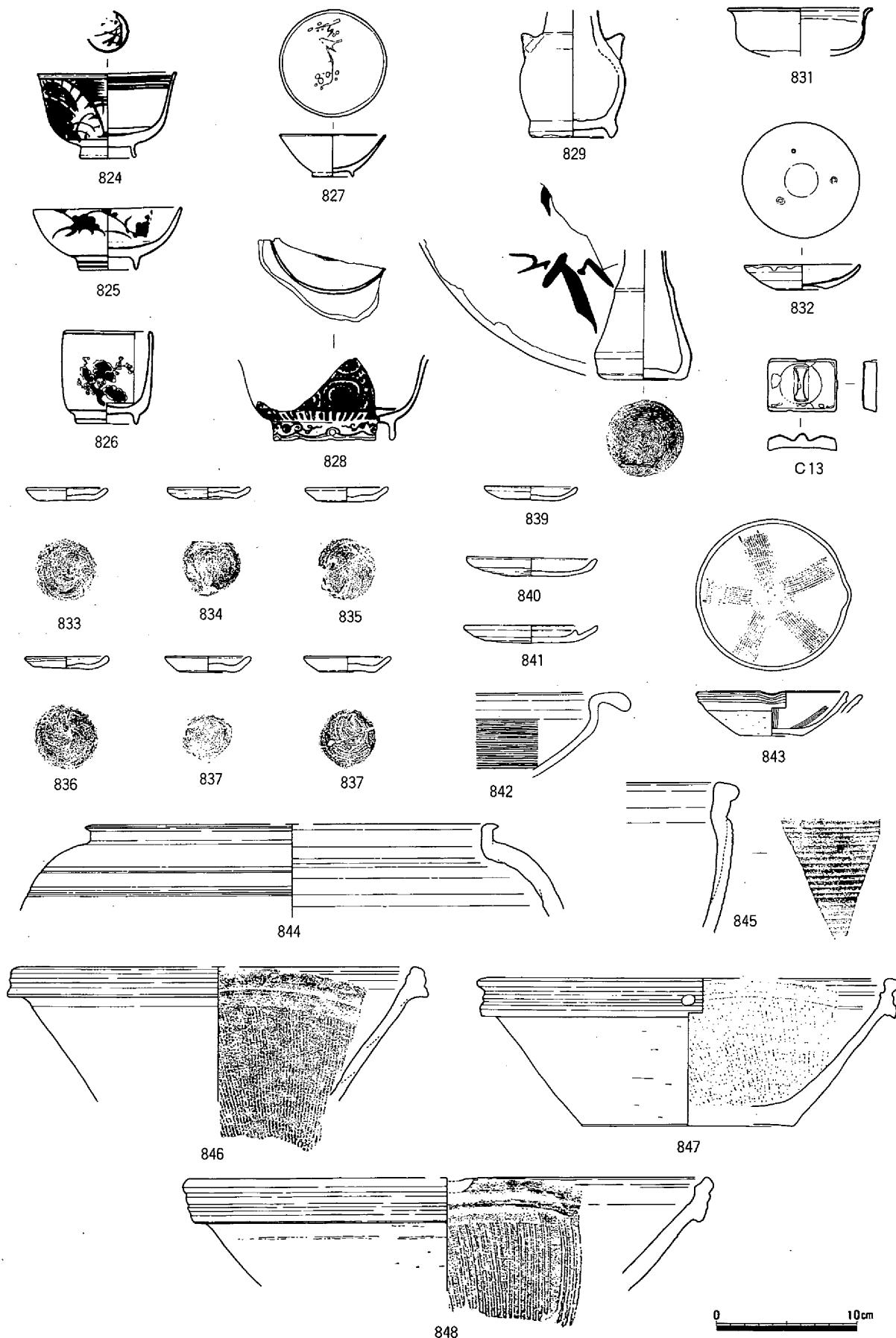
後半以降と考えられ、539、540より新しい特徴を持つ擂鉢である。

土師器の小皿は833～838の6点が出土しており、口径5.6～6.0cm、器高0.7～1.1cm、底径3.9～4.12cmをはかり、内面に仕上げナデ、外面底に糸切り痕が認められる。色調は黄橙、橙色であり、胎土中に0.5～1.5mm前後の白色小砂粒を含んでいる。焼成はすべて良好であり、834の底部に煤が付着している。小皿833、836、838の3点が完形品である。839、840はにぶい赤褐色を呈する灯明皿であり、燈心痕が認められる。

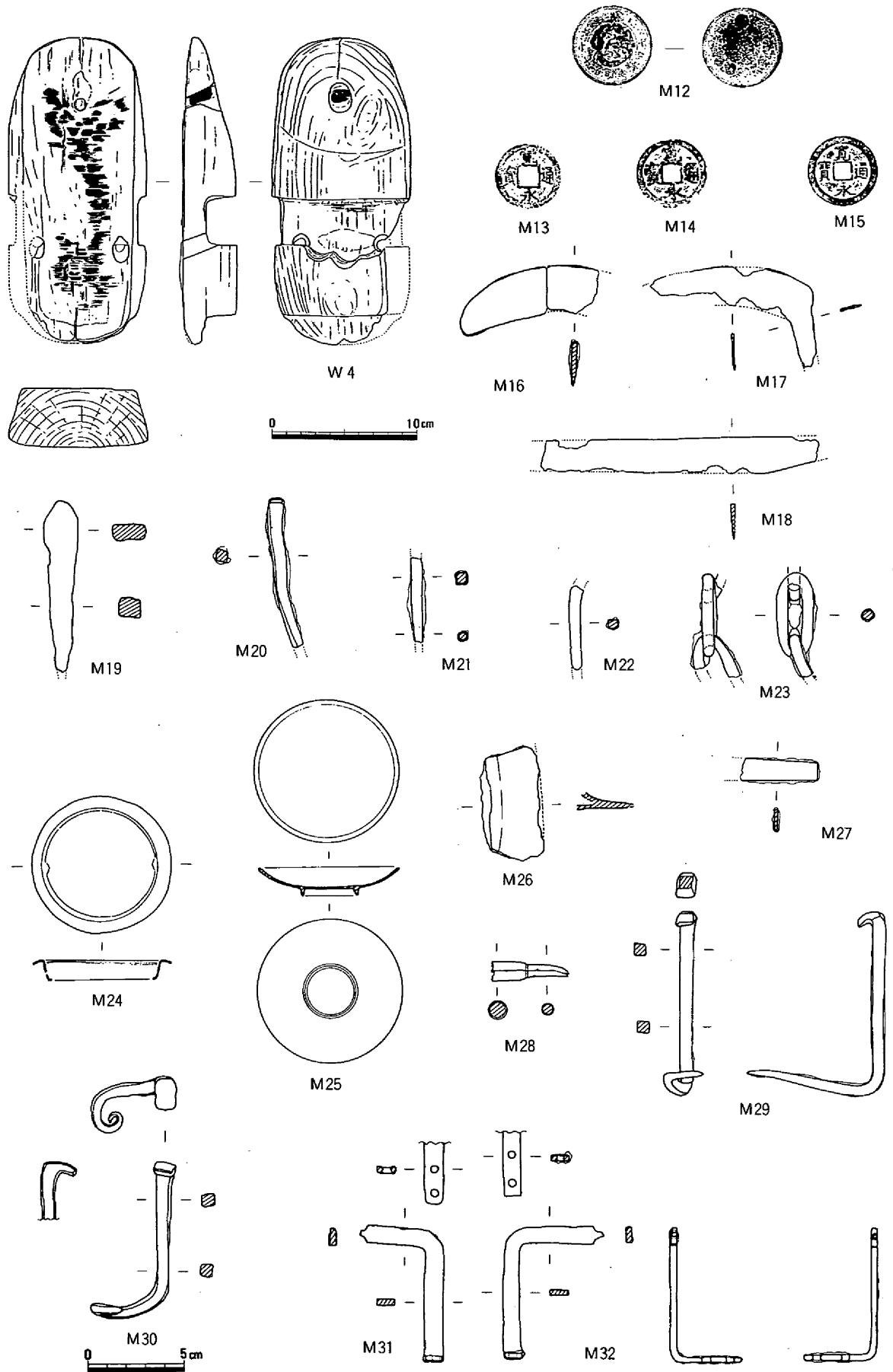
(高畠)



第180図 遺構に伴わない遺物（2）



第181図 遺構に伴わない遺物（3）



第182図 遺構に伴わない遺物（4）

第2章 津寺一軒屋遺跡

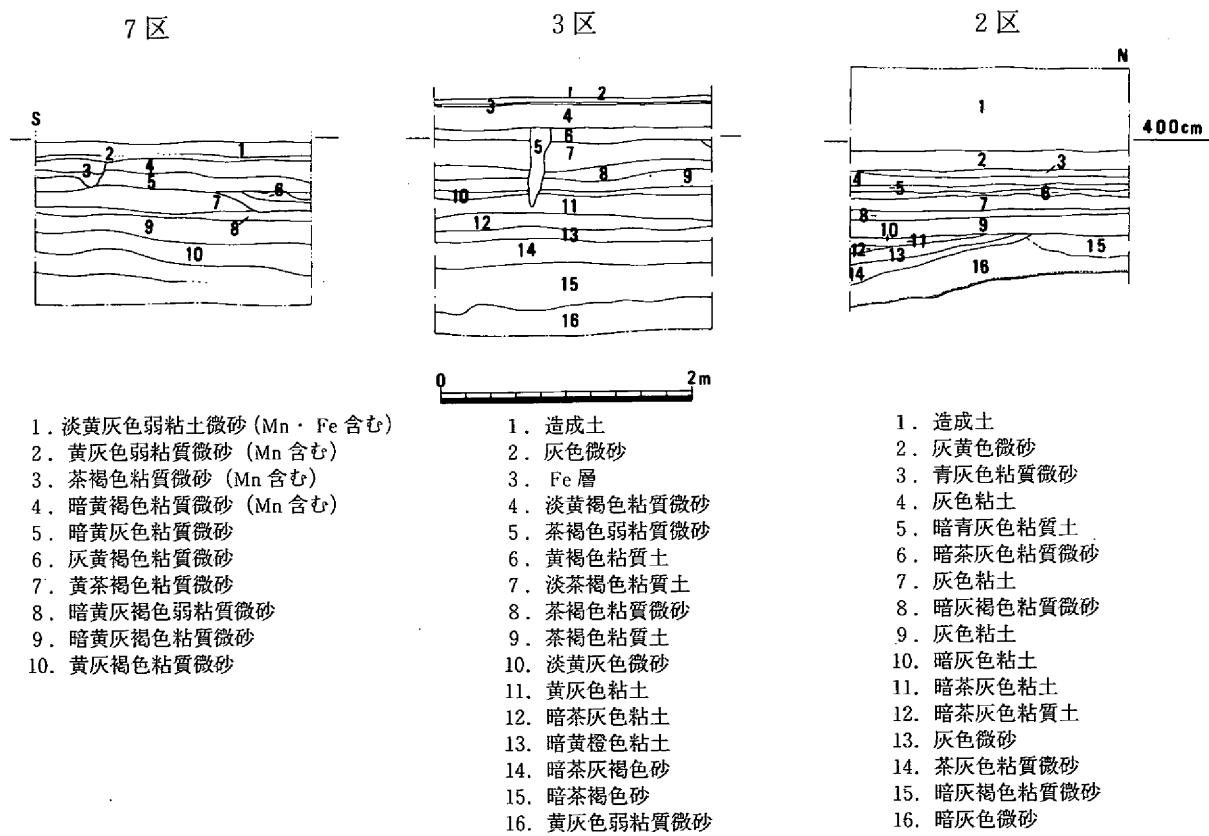
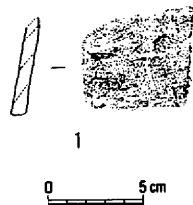
第1節 遺跡の概要と調査区

津寺一軒屋遺跡は足守川東岸に位置し、地形は北東から南西に高さを減じ、現地表では海拔4.0～4.5mをはかる。東側が一軒屋の集落であり、西側に水田景観が望める。

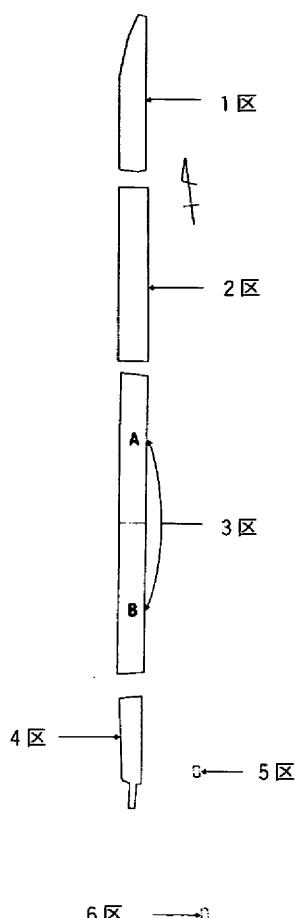
調査区は南北に長く、幅4.5～12m、延長250m、面積1024m²が調査対象地である。3・4区間、4区南側、5区、6区、7区以南については既成の建物、現有の道路との位置関係から現実面の機能・安全性を考慮し、小範囲の発掘調査にとどめざるを得なかった。7区以南、津寺用水路については立会の対応を行った。

基本層序は第183図に示しており、南から北に7区、3区、2区の順序である。7区の第4層が弥生時代後期後葉の土器溜り－1であり、それを切る第3層が古墳時代中期の竪穴住居－3の埋土である。第6層は弥生時代後期後葉以前の鍛冶炉関連の土層と考えられ、第9層（海拔343cm）が津寺三本木遺跡等でみられた基盤層に比定できる。

3区断面図は1区と7区のほぼ中間地点に位置する。表土層が海拔444cmをはかり、7区より高く、2区よりも約19cm高い状況である。現在の水田床土の第3層を除去すると、中・近世、近代の遺構が検出可能である。溝－4



第183図 2, 3, 7区土層断面 (1/60) · 出土遺物



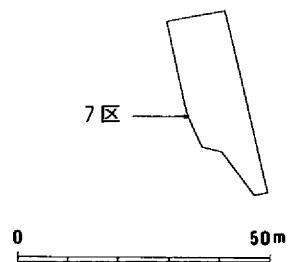
等の古代の遺構は海拔400cm付近、第7層の硬質な茶褐色粘質土を掘り込み作られている。そして、第8～10層の間層をおき、第11層の黃灰色粘土中には弥生時代後期前半、古墳時代初頭の土器片を含む。第12・13層中にも弥生時代後期の土器片、第14～16層中にも弥生時代中期末の土器片を含む。第15層は暗茶褐色砂の洪水層と考えられ、層中に弥生時代中期末の土器片を比較的多く含んでいる。第11層から第16層上位まで遺物が含まれており、7区にみられた基盤層は確認されていない。第16層は粘土であり、海拔262cmをはかる。そこから北に向い少しづつ高くなり、16m北側では海拔327cmをはかる。

2区の断面位置は3区から100m北側にあたる。第16層底には7世紀後半～8世紀初頭の土器が含まれており、古代の面は海拔325cmをはかる。第7層中には新旧の早島式土器片がみられ、海拔360cmをはかる。古代以降の微高地は安定をみせているが、それ以前の時期のものについては確認できていない。

弥生時代後葉、古墳時代中期の集落が7区を中心にまとまり、それ以降の平安時代前半までは溝、土壙等が3区Bに散見できる程度である。中世および近世では掘立柱建物、土壙、溝等の小規模遺構がほぼ全域に薄く分布をしている。
(高畠)

第2節 弥生時代の遺構・遺物

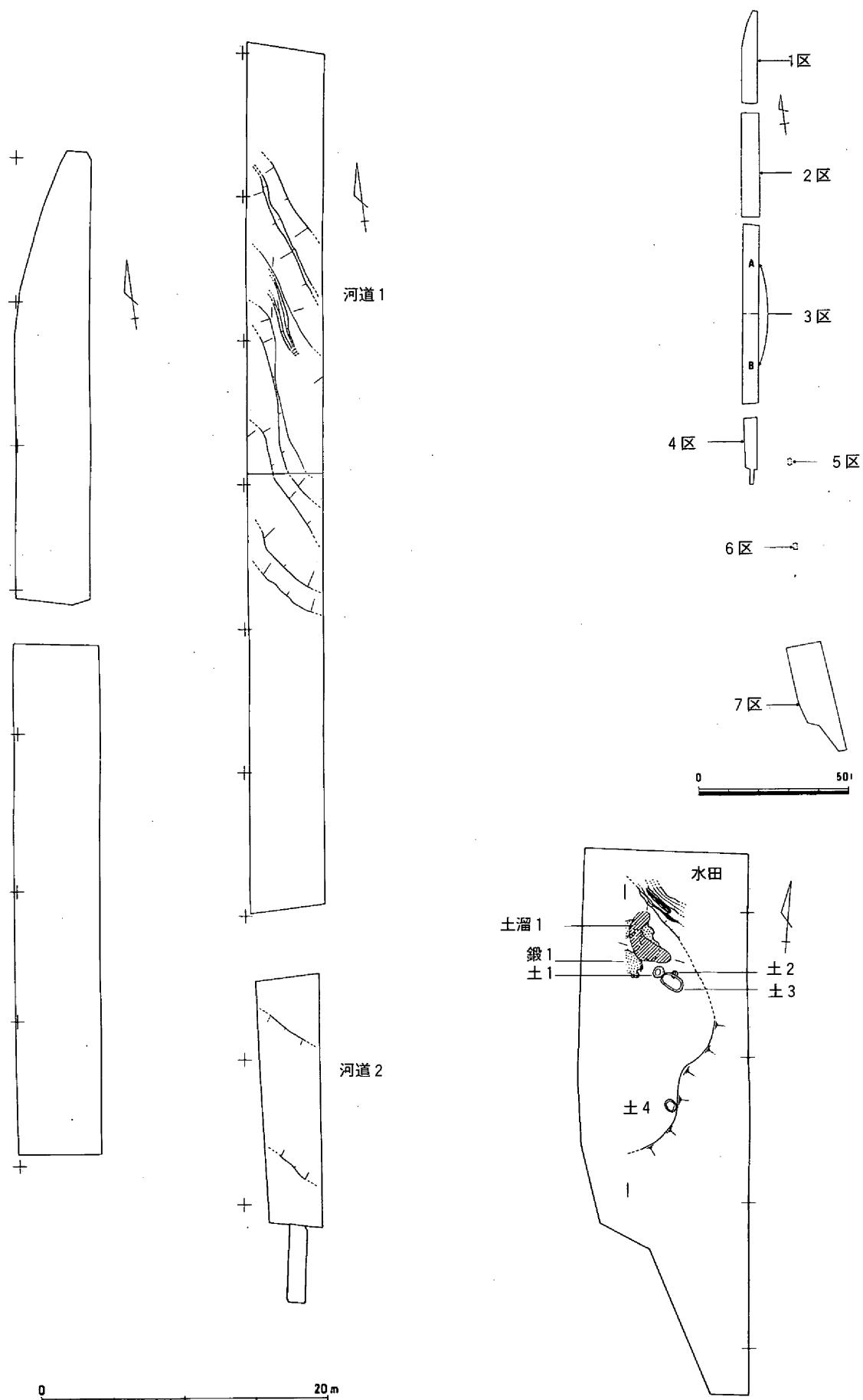
(1) 弥生時代の概要



第184図 調査区名称

弥生時代の遺構は7区に集中しており、それも弥生時代後葉に限定できる。土壙4基、鍛冶炉が1ヶ所、水田遺構の計6遺構である。1～6区間には遺構の存在は確認できておらず、3区では若干人の手が加わったかも知れない幅約11.0m、深さ1.76cmの河道－1、4区で河道－2が存在するのみである。

津寺一軒屋遺跡の弥生時代は南端部に所在する7区のみが海拔380cm前後をはかる微高地であり、1区～6区の間は低地と河道であった可能性が高い。河道－1の肩口から南に約6.0m以南の土層断面は北側土層断面の洪水砂とは異なり、粘質の強い土層が多い。従来、北に延びていた粘質土が大規模な洪水により掻き取られた状況を呈する。第196図を参考に遺物の包含状況をみてみると、海拔285～315cmの第32・33層に弥生時代中期後半・後期前半の土器片、海拔315～335cmに弥生時代後期の土器片、海拔325～366cmの第22層に弥生時代後期前半から古墳時代初頭の土器片を含んでいる。ここでは第22層の堆積を古墳時代の初頭頃に比定しておきたい。そうすれば、弥生時代中期以前は第33層からさらに下位に予想され、海拔285cm以下に存在する可能性がある。西側に所在する津寺遺跡での弥生時代の後期水田は海拔230～248cmであったことが気がかりであるが、本調査地区では後期水田の上位で確認されている古墳時代初頭の水田も存在していない。

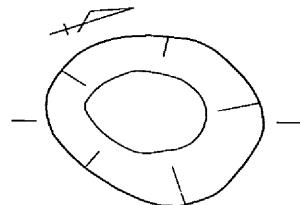


第185図 津寺一軒屋遺跡弥生時代全体図 (1/400)

7区では西側半分に微高地（海拔385cm）が存在し、北側の400~250cmの範囲内に焼土面（鍛冶炉）が3ヶ所確認されている。周辺からは加工鉄片、鍛造剥片、炭粒等が出土をしている。焼土面上位に10~20cmの間層をもって弥生時代後期末葉の土器溜り－1があり、県内では最古の部類に入る製鉄遺跡である。

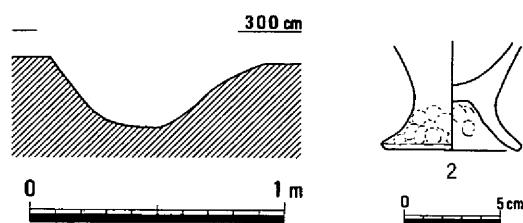
(高畠)

(2) 土壙



土壙-1 (第186図)

7区の微高地上の最終検出面で確認した。位置的には、鍛冶炉-1と竪穴住居-3の間で土壙-6-2, 3と若干重複する。平面形はほぼ円形を呈し、長径87cm、短径65cm、深さ26cmをはかる。断面はすり鉢状を呈し底面は若干カーブしている。検出面は海拔290cmである。



第186図 土壙-1 (1/30)・出土遺物
たため平面形が歪でいるが、本来は橢円形に近い形状である。長径190cm、短径100cm、深さ40cmをはかる。断面は椀状を呈し、検出面は海拔310cmで、鍛冶炉-1の下層に位置する。時期は出土遺物が皆無で確定しがたいが、検出面や埋土から弥生時代後期であろう。

遺物は埋土中から2の台付き鉢の台部分が出土している。時期は、出土遺物や検出面から弥生時代後期後半であろう。

(山磨)

土壙-2 (第187図)

7区の微高地上に土壙-1と若干重複して検出した。土壙の南半は20cm程掘り下げて検出を行ったため平面形が歪でいるが、本来は橢円形に近い形状である。長径190cm、短径100cm、深さ40cmをはかる。断面は椀状を呈し、検出面は海拔310cmで、鍛冶炉-1の下層に位置する。時期は出土遺物が皆無で確定しがたいが、検出面や埋土から弥生時代後期であろう。

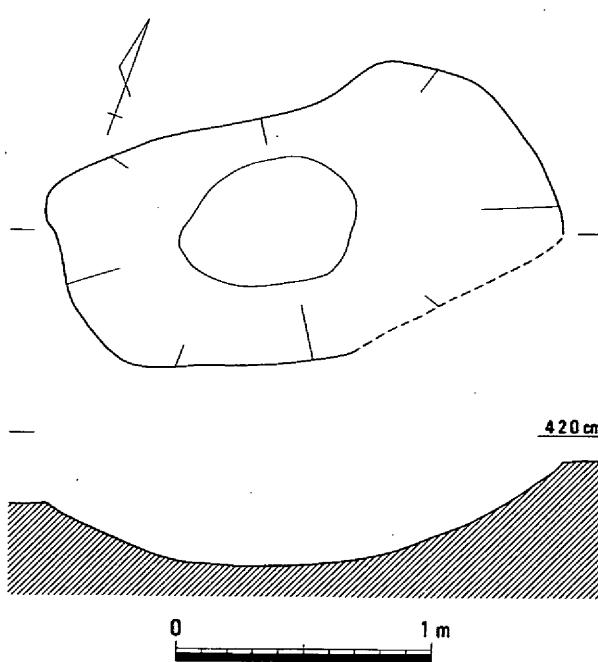
(山磨)

土壙-4 (第188図)

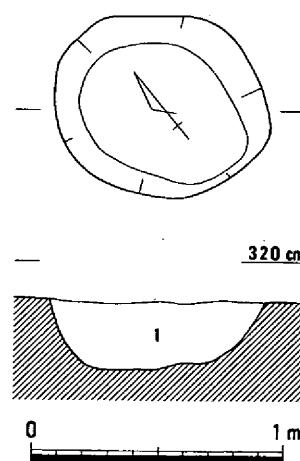
7区の微高地上の南端に検出した。平面形は円形を呈し、長径82cm、短径76cm、深さ26cmをはかる。

断面は深椀状を呈す。検出面は海拔305cmである。時期は検出面や埋土から弥生時代後期であろう。

(山磨)



第187図 土壙-2 (1/30)

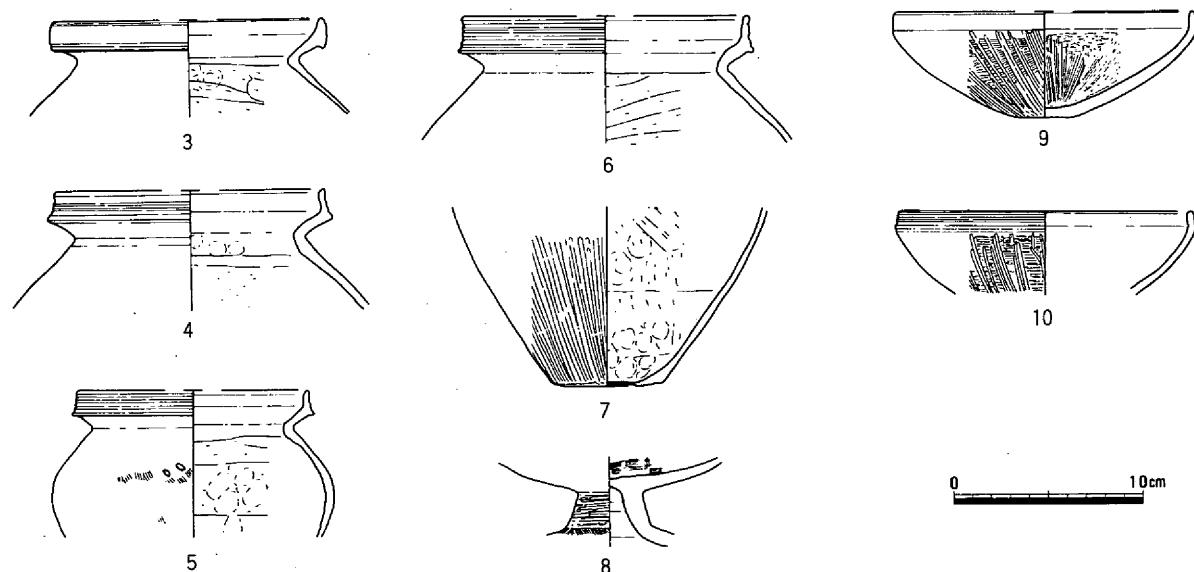
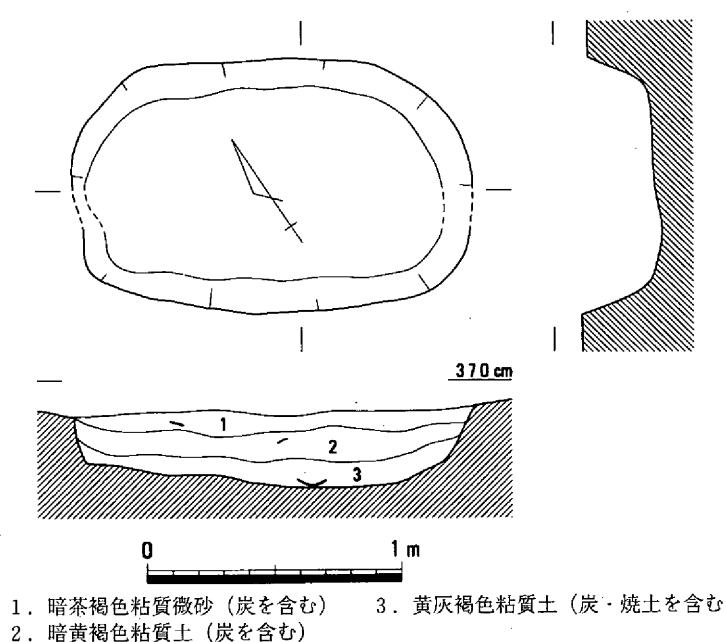


1. 暗茶褐色粘質土

第188図 土壙-4 (1/30)

土壙-3 (第189図)

7区の微高地上のやや北よりの鍛冶炉-1と竪穴住居-3の間に検出したやや大型の土壙で、竪穴住居-3と一部重複している。平面形は長軸を北西方向にむけるほぼ橢円形を呈し、長径160cm、短径100cm、深さ30cmをはかる。断面は逆台形状をなし、底面は若干南東に傾斜するがほぼ平面をなす。埋土は3層確認でき第1層は粘質の微砂層、第2、3層は粘質土である。2層には炭を含み、最下層の第3層には炭と焼土を含む。土器は各層から出土している。検出面は海拔360cmで、鍛冶炉-1の上層の焼土面とはほぼ同一で鍛冶炉の操業時期の前後に掘削されたと考えられる。出土遺物は弥生時代後期後半の甕、鉢、高杯が出土している。(山磨)

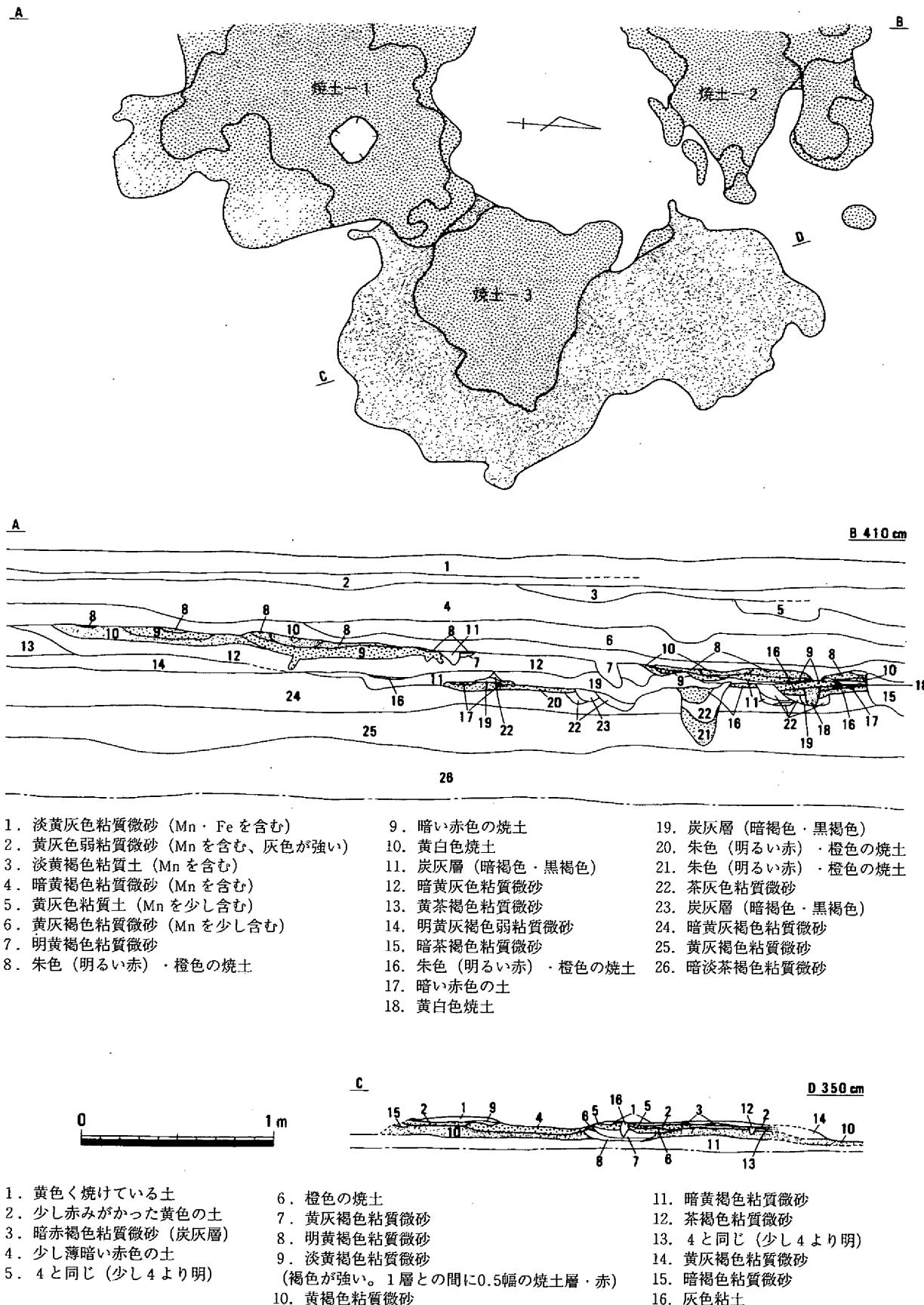


第189図 土壙-3 (1/30)・出土遺物

(3) 鍛冶炉

鍛冶炉-1 (第190~192図、図版27・29)

鍛冶炉は第7区の微高地東端部に大きく3ヵ所の焼土面を確認した。検出面は海拔333~360cmの間に位置する。焼土-1は焼土-3と20cm程の間層(第11、12層)を挟み一部重複して新旧関係にある。西壁の断面観察では、焼土-1、2の炉面は同一面で若干北に緩く下降している。また、平面では未検出であるが、焼土-1、2の間にも15cm程下層に焼土面が存在することから、西側にも別の炉面が広がるものと想定される。炉面の検出までには厚さ20cm程の土器溜まり-1(第193図)を形成する



第190図 鍛冶炉-1 (1/30)

第4層（暗黄褐色粘質微砂）が炉群の上面を覆っていた。

焼土-1は3ヵ所確認した炉のうち南側に位置する。焼土面は南北長さ210cm、東西長115cm以上の規模である。このうち中央の長径150cm、短径90cmの不定形な範囲が還元状態でよく焼き締まった黄白色を呈し、周囲は赤色の焼土面を形成している。但し、還元状態の炉面と赤色面との境は不明瞭である。断面観察では還元状態の黄白色の炉面は厚さ5cm程の粘土による炉床を形成していたと考えられるが、一度に炉面を造成したものか徐々に拡張したものかは不明瞭である。炉面は海拔352cm～359cm程でほぼ平坦で掘り方等は認められなく、炉面全体が北東方向に向かって若干下がっている。

焼土-2は焼土-1と80cmの間隔で北側に検出した。平面形は不正形で規模は南北長120cm 東西長90cm以上である。周囲がわずかに赤色を呈すが、ほぼこの範囲が黄白色の還元状態の範囲である。炉面は海拔343～340cmでほぼ平坦である。なお、炉断面の北端では10cmほど下層にも焼土面が認められることから、さらに別の炉面が想定されるが平面では確認していない。

焼土-3は焼土-1の東側に位置し、調査区内で全貌を把握した。炉面は不正形な形状を呈し、長径255cm、短径110cmの範囲が黄色及び赤色に熱変化した範囲である。ただ、焼土-1、2とはやや異なり還元状態の面は少なく、焼土-1との重複した付近と中央の赤色に熱変化した中に2ヵ所の合計3ヵ所が灰色の還元状態を呈していた。また、炉の南北の断面観察では、北半の炉面下部に炭灰層が明瞭に認められた。おそらく焼土-3での操業の継続時の炉面の拡張に伴い、それ以前の廃棄場所の整地を行ったものであろう。また黄色の粘土の炉床を3～4cm除去した段階では、炉床の若干厚い箇所が帯状もしくは円弧状に認められた。ただ炉の掘り方は焼土-1、2と同様に認められない。この他、焼土-3の東側に接し長径50cm、短径46cm、深さ10cmの炭、焼土を含む浅い落ち込みを確認した。

鍛冶炉関連の遺物は、炉周辺および水田層下層で鍛造剥片と加工鉄片が出土している。鍛造剥片は炉及び周辺の埋土の水洗選別により採集することができた。加工鉄片は、幅3～8mm、長さ2～3cm程度の鉄鎌の茎に類似した鉄片が多い。M4は幅5cm、厚さ3mmの板状の鉄片である。轍の羽口、粒状滓は出土していない。

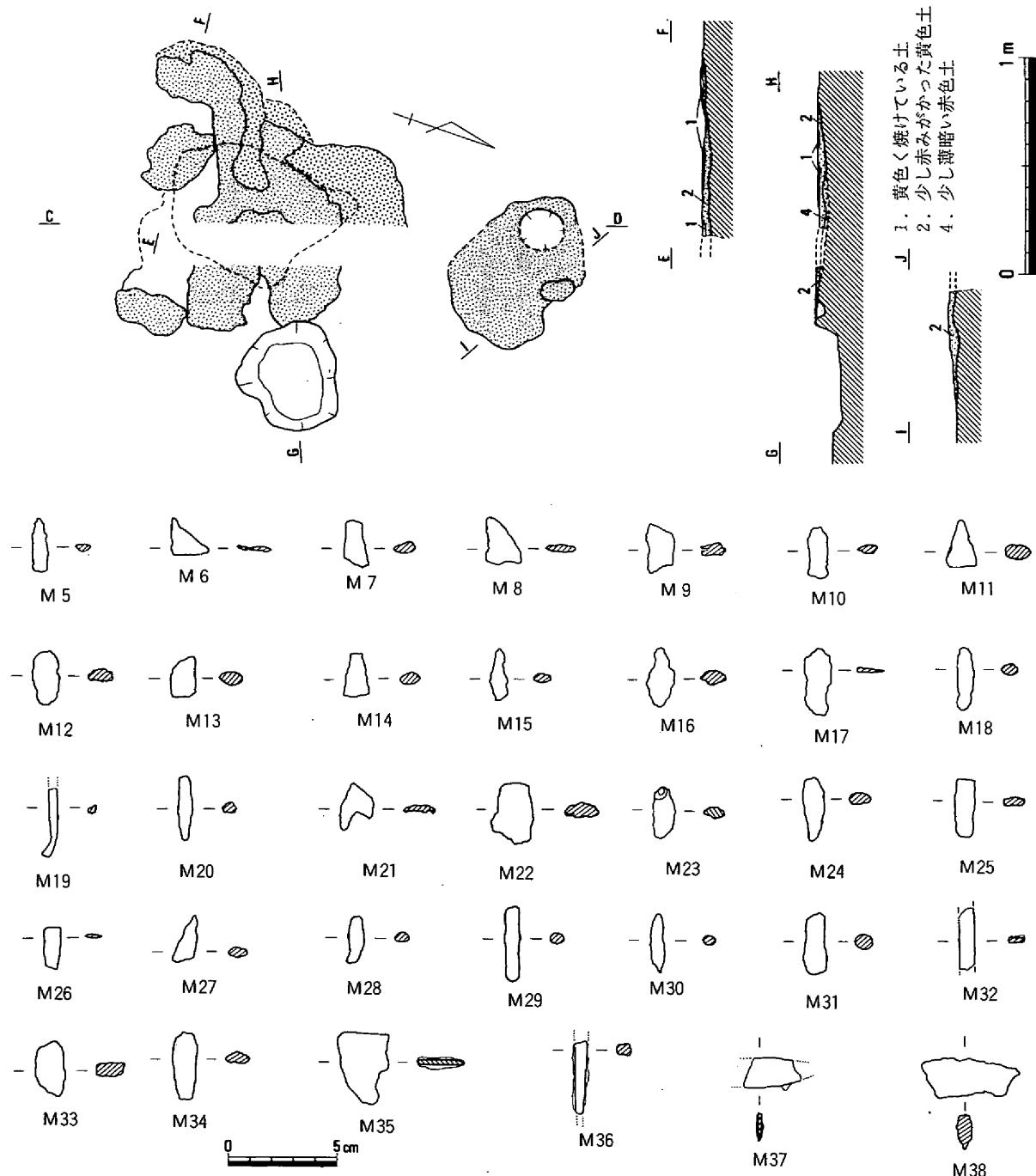
共伴する遺構としては、西壁断面と調査区内の2ヵ所に柱穴と焼土-3に接し浅い落ち込みを確認したが、土器は出土していない。また、出土遺物も鍛造剥片や加工鉄片のみで直接時期を確定する遺物に乏しい。しかし、鍛冶炉が微高地上に位置したために、堆積土の分層や遺構の新旧の切り合いを検討した結果、操業時期をかなり絞ることが可能となった。

鍛冶炉群は、炉群の平面形状から全体の東側2／3程度を第7区の北西部に検出したものと想定される。調査区西側壁がちょうど炉群を南北に切断する位置にあたり、土層の堆積を観察するに良好な状況であった。炉は重複しており、断面観察においても幅10cmの間に上下2層の焼土面が観察できることから、ある程度の操業期間を想定される。

断面の観察では、鍛冶炉周辺の最終遺構検出面は第25層上面で海拔310cm付近である。土壌-1, 2をこの面で検出しているが時期を断定する遺物に乏しい。この上面には20cmほどの弥生時代後期の

長脚高杯や長頸壺出土の包含層を形成し、鍛冶炉はこの包含層を基盤面としている。

炉面の検出までには上面を覆う土器溜まりー1（第4層）を検出している。土器溜まりー1は、東側の微高地の下がり付近まで広がりを見せ、微高地周辺に検出した水田層の埋土の一部をなしてゐる。また、炉の南東1mに検出した土壤3は海拔360cm程で鍛冶炉上面と同一面、もしくは土器溜まり1（第4層）の下部付近に位置する。出土遺物の特徴は2重口縁にヘラ描きの沈線を施す甕や、短脚の高杯の器種から弥生時代後期後半（才ノ町1）のほぼ同時期の遺構と考えられる。ただ、土壤ー3の埋土は未採集ため断定できないが、この時期を下限とする操業期間と考えられる。
（山磨）



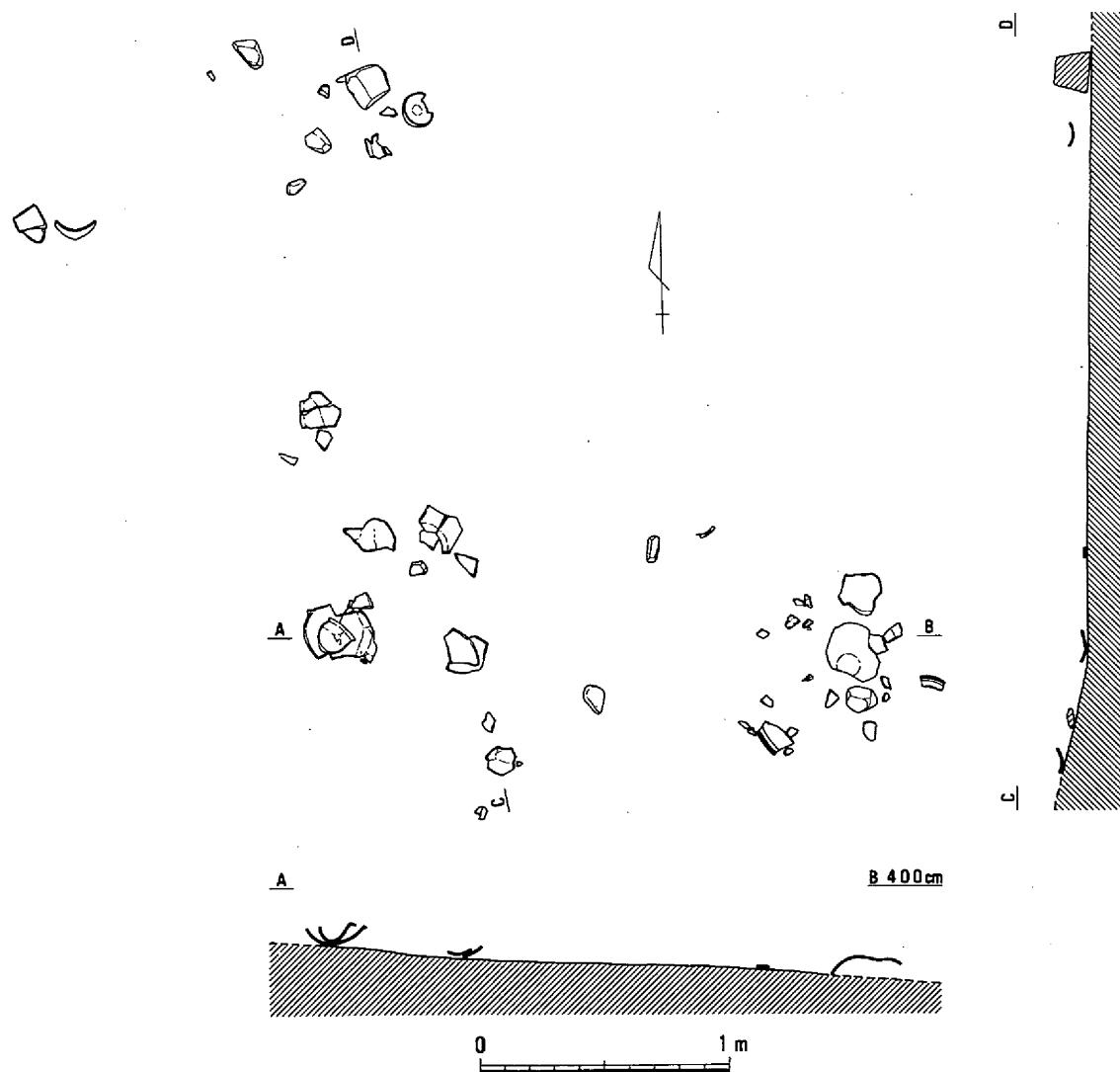
第192図 鍛冶炉ー1 (1/30)・出土遺物

(4) 土器溜り

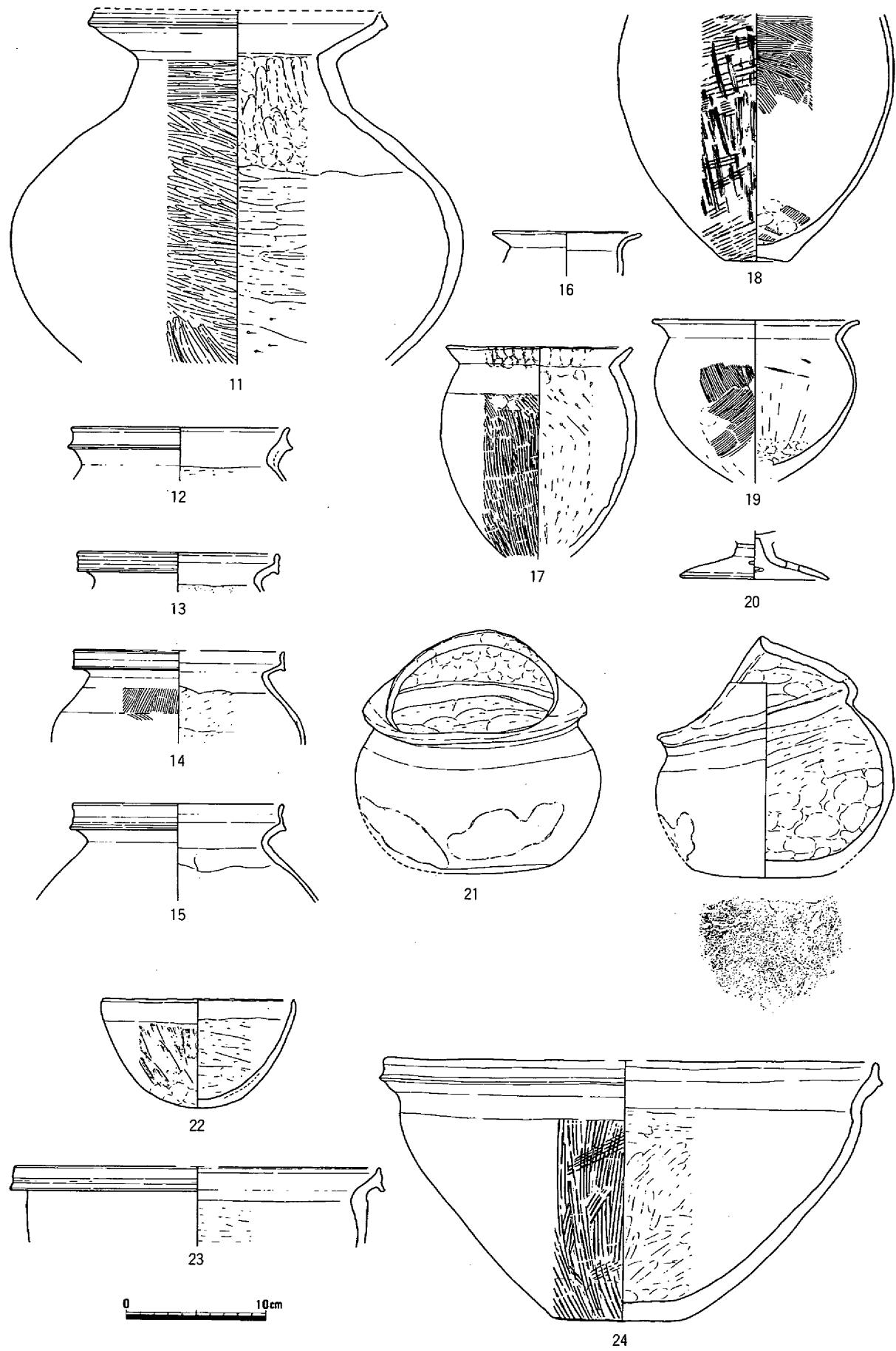
土器溜りー1 (第190図)

7区北西の微高地北西端に位置し、竪穴住居-3の北側に所在する。検出での明瞭な平面形は認められなかった。土器は微高地斜面の北西から南東に転がるように点在している。海拔360~380cmのところに所在し、竪穴住居-3より10~30cm低い。鍛冶炉-1から見るとほぼ直上にあたり、20~40cmほど高い位置にある。

弥生土器では、11の壺、12~19の甕、20の高坏、22~24の鉢が出土している。24の底には、藁によると思われる押圧がわずかに残っている。21は、手焙り型土器である。土器溜まりの位置より更に東の微高地縁辺付近から出土している。底に葉脈・種子・モミの圧痕と思われるものが残っている。弥生土器の型式から、弥生後期後半のものと思われるが、鍛冶炉-1よりは新しい時期のものと考えられる。鍛冶炉-1の廃絶後、少し時間をおいて形成された土器溜りと考えてよいであろう。(速水)

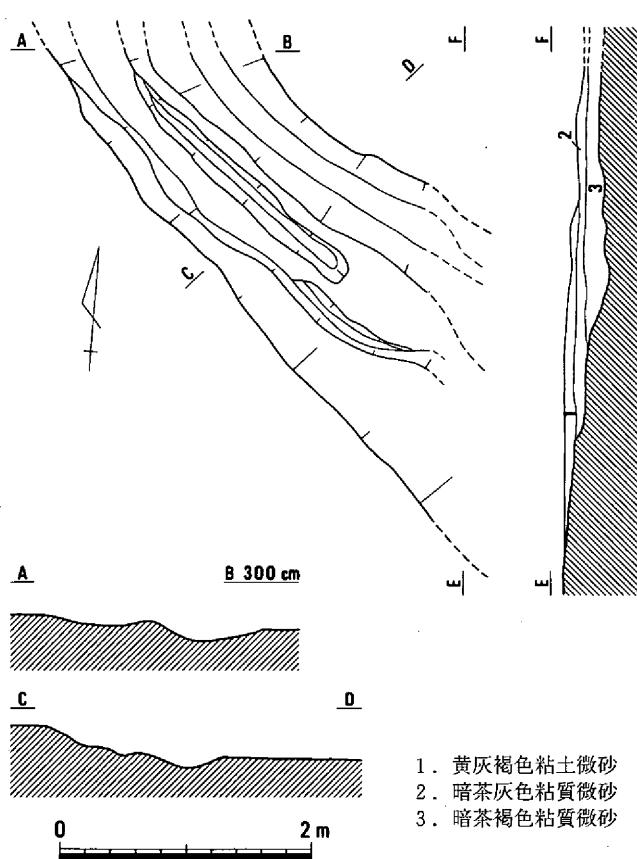


第193図 土器溜りー1 (1/30)



第194図 土器溜りー1出土遺物

(5) 水田



第195図 水田-1 (1/60)

水田 (第195図)

7区北西部の微高地縁辺部に水田層を検出した。調査区北端の微高地下がりの土層断面の観察では、第2層がほぼ水平な堆積をなしており水田層の可能性がある。畦は検出できなかったものの、この微高地を取り巻くように東半から南にかけて水田面が広がるようである。北端部の一部水田層除去後には、浅い複数の溝状遺構が微高地の下端を巡っている。水田の開削時に生じた痕跡であろう。

時期は、北端部の微高地上で確認した古墳時代前半の土器溜まりが、水田層の上面に落ち込んで広がっている状況から下限がこの時期と想定される。上限は、水田最下層に鍛冶炉-1の遺物（鍛造、加工鉄片）を検出したことから、弥生時代終末ごろから古墳時代前半期の水田と考えられる。

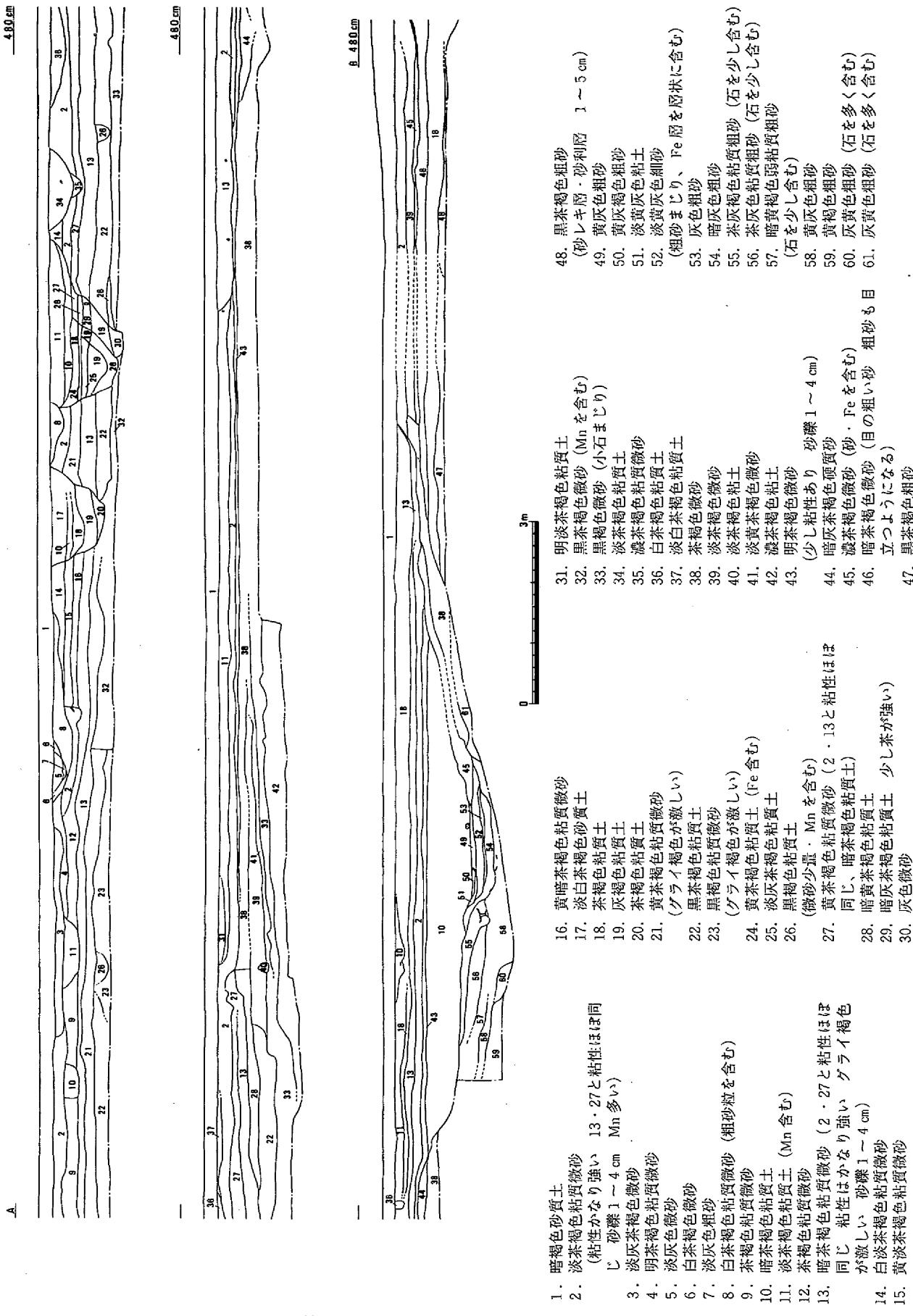
(山磨)

(6) 河道

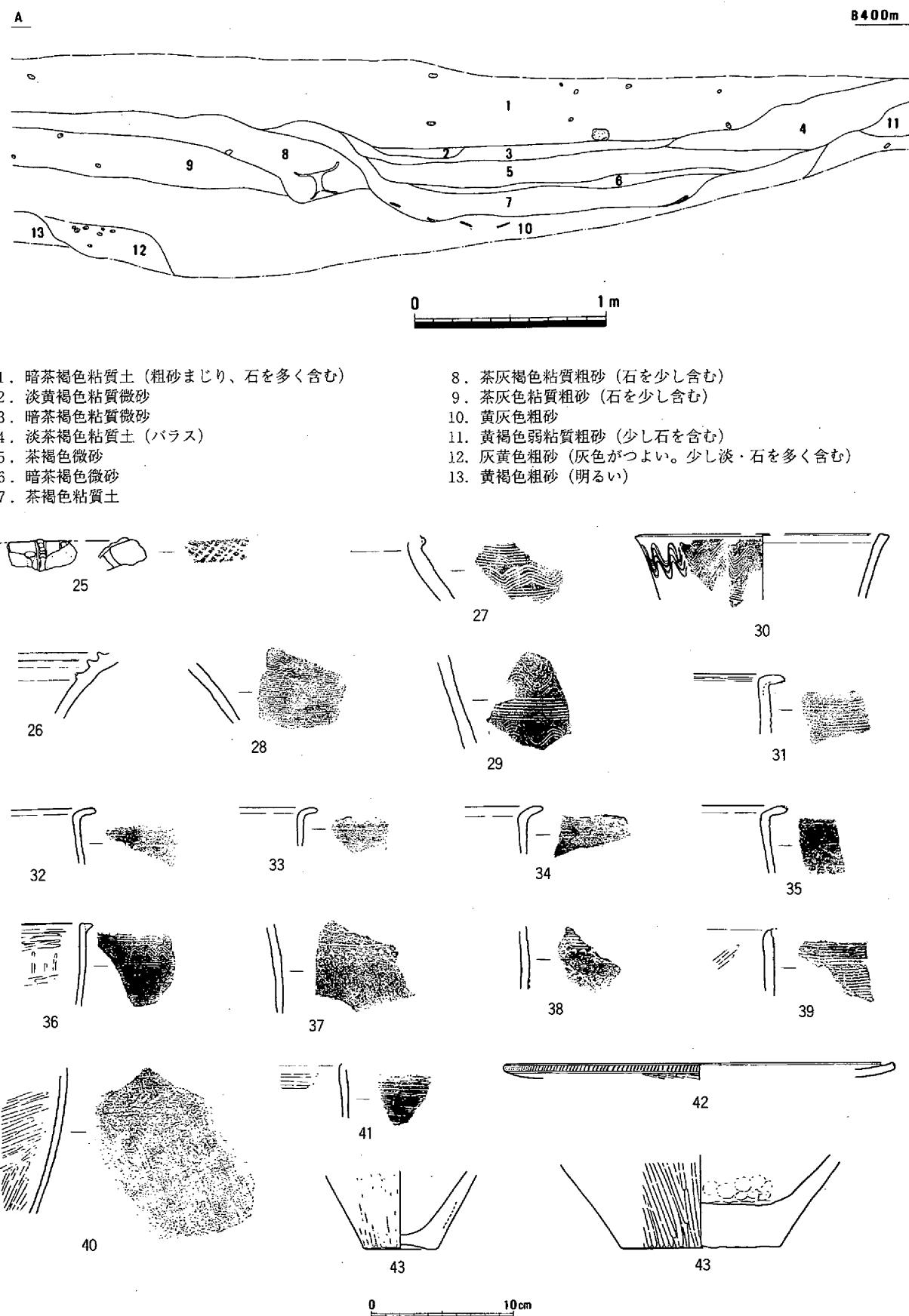
河道-1 (第196~200図, 図版26-2・3, 図版28)

3区Aから3区B北側にかけて所在し、北西から南東に流走する自然河道と考えられるものである。水田耕作土を除去すると海拔420cmにて河道肩口を検出することが可能であり、最大幅約11.0m、最深部高1.76m、底面海拔高250cmをはかり、河道内に数条の流路の切り合いが認められる。断面形態は椀形を呈し、埋土は第1層から第7層までの6層と第8層の1層(第197図)の堆積土からなる。第1、8、9、12層中に河原の小円礫を比較的多く含んでいる。

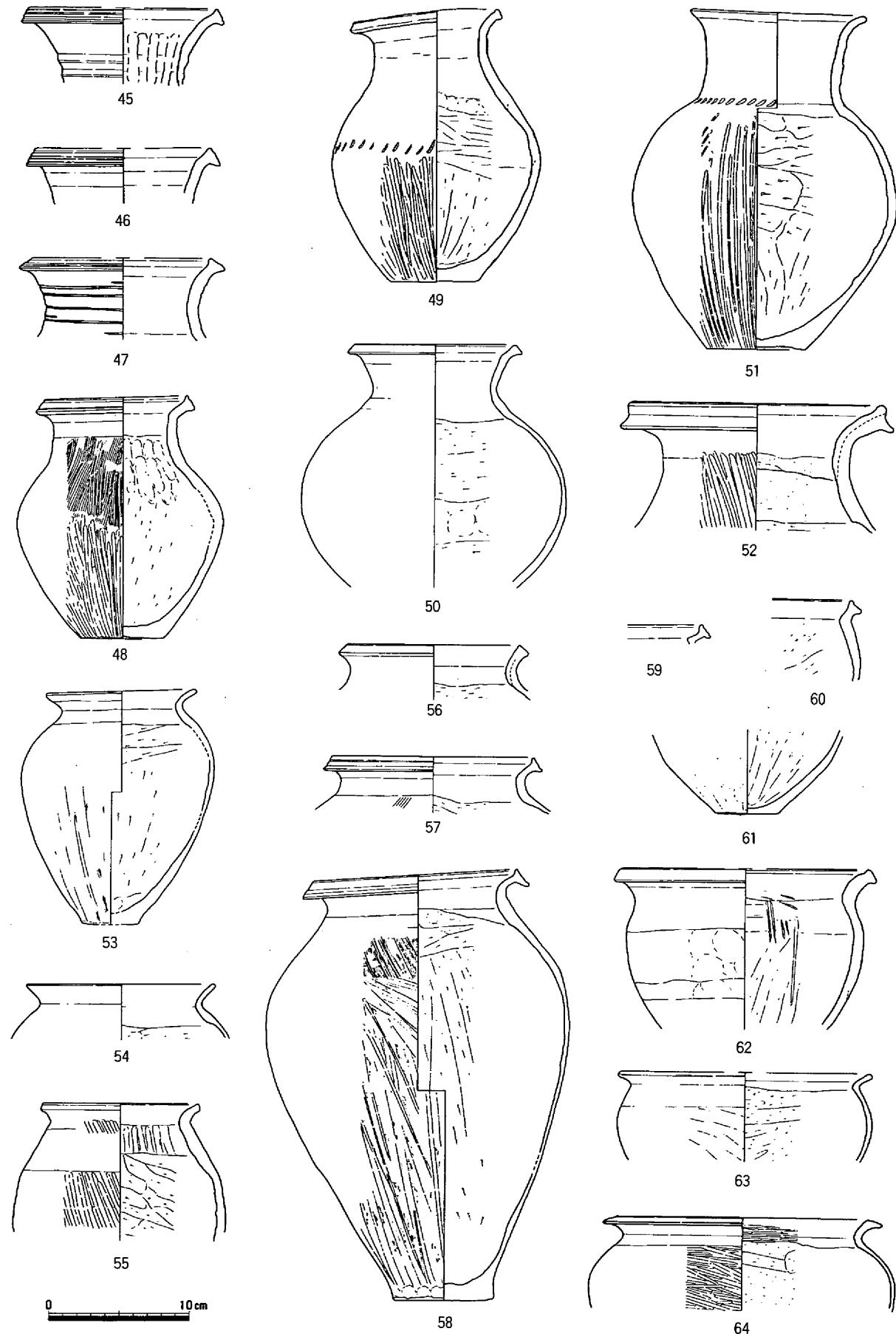
遺物は第1~8層中に包含されており、縄文時代晚期、弥生時代前期後半、弥生時代中期前半・後半、弥生時代後期前半・後半末~古墳時代前期初頭の土器がみられる。それらの出土状況は河道内第1層、第3・5層、第6・7層の上・中・下層からであり、東側の微高地から投棄されたものと、上流から運ばれたものがある。第1層出土のものが多く、25、26、30、36、43が弥生時代中期初頭、47、52、55、57、59、61、63、68、73、74が弥生時代後期前半、77~80が後期末~古墳時代初頭である。第3・5層は42、44が弥生時代中期前半、45が弥生時代中期後半、53、54、60が弥生時代後期前半である。第6・7層は37が弥生時代中期初頭、75が弥生時代中期末、46、49、58、64、66、69、72、76が弥生時代後期前半であり、58と76はセットとして出土している。第8層からは完形に近い高杯70が



第196図 3区西壁土層断面 (1/90)



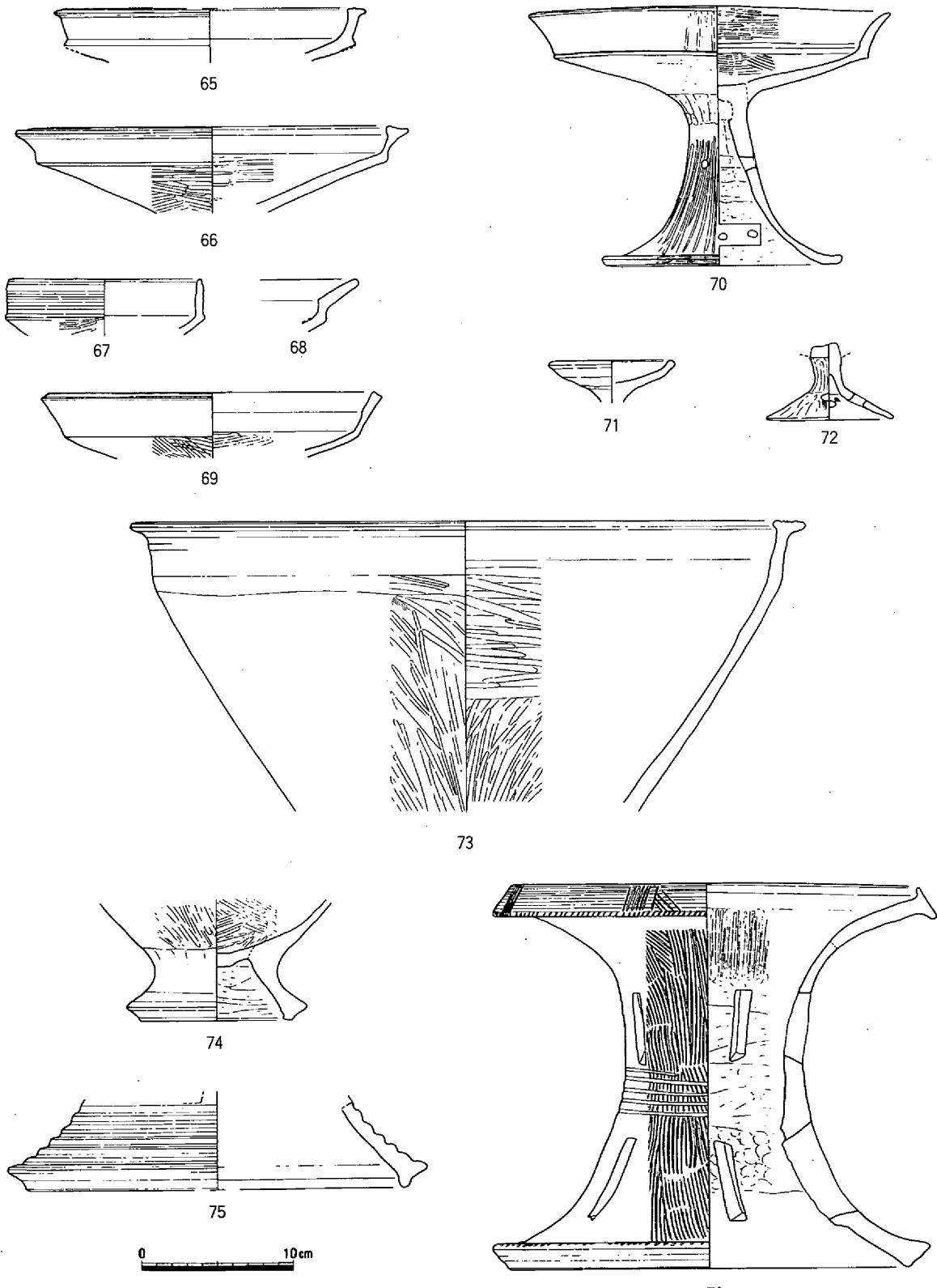
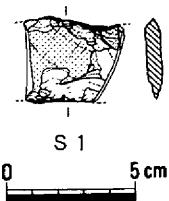
第197図 河道-1 (1/30)・出土遺物 (1)



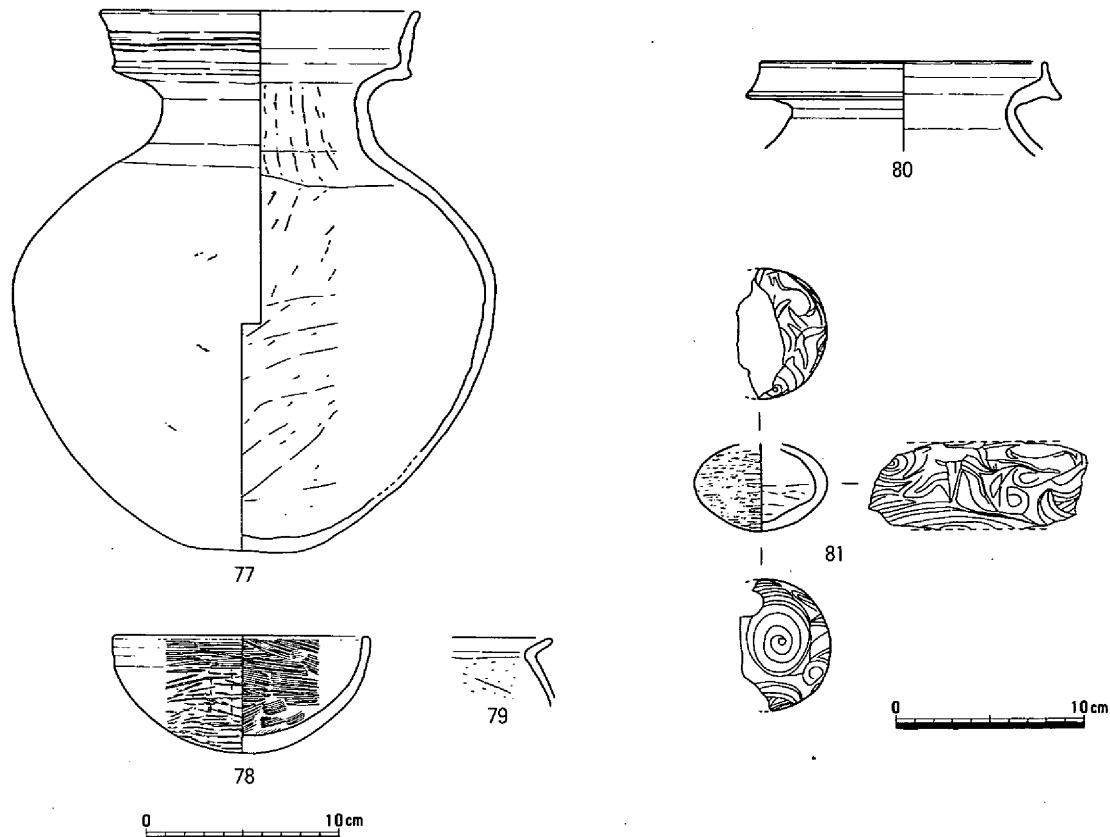
第198図 河道一1出土遺物（2）

出土しており、弥生時代後期中葉の時期である。

このように、約80cmの埋土中に縄文時代晩期の深鉢片1から古墳時代前期初頭の鉢78（海拔328cm）までが混在をして出土をしている。この河道の上流が機能したと考えられる弥生時代後期前半の土器が最も多く、次いで洪水等によ



第199図 河道一1出土遺物（3）



第200図 河道ー1出土遺物（4）

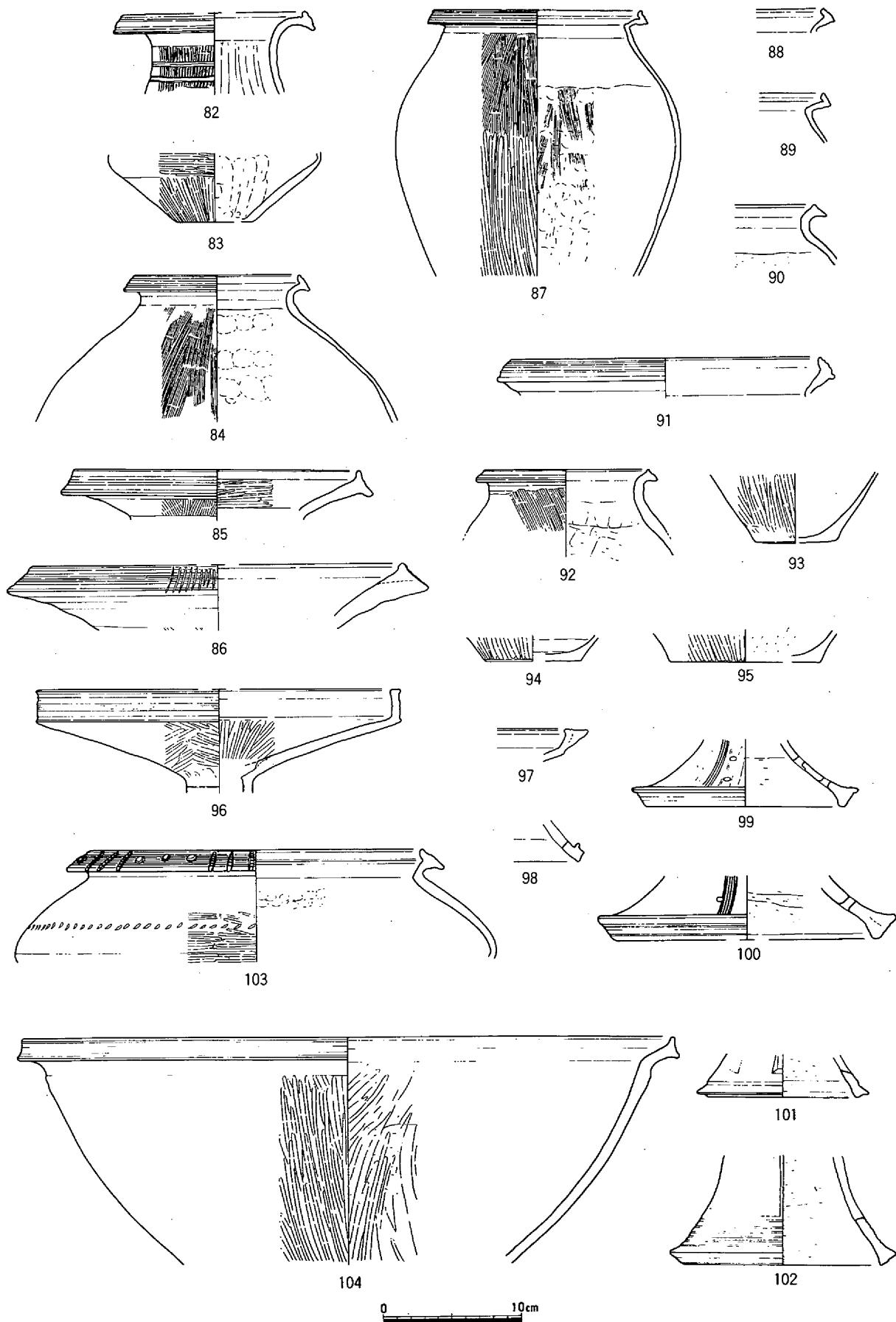
り流れ込んだと考えられる弥生時代中期初頭の土器小片、そして、河道の機能を失った最終段階の古墳時代の土器がみられる。従来、津寺遺跡周辺では弥生時代中期初頭の土器は少なく、今回の発見により本遺跡付近、あるいは上流域に遺構の存在することが想定できる。

弥生時代後期前半は本遺跡の周辺に所在する津寺遺跡、政所遺跡においても遺構数が急激に増加をしており、何らかの画期を求めることができる。また、古墳時代前期にあっても同様のことが考えられる。

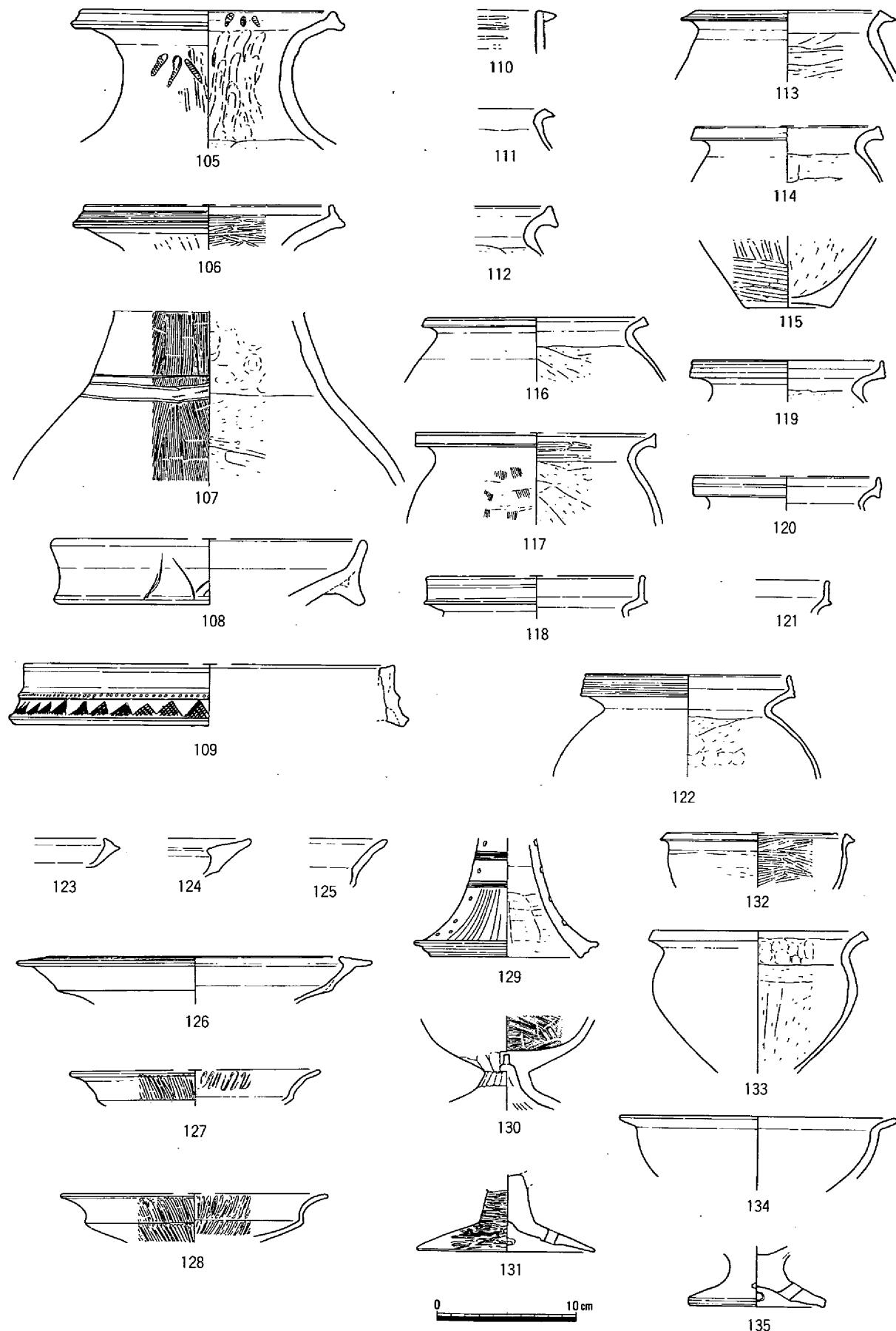
特筆すべき遺物では外面全体に線刻の施された壺形土器81がある。第1層下位の海拔300cmから出土したものであり、胴部の約半分を欠損している。推定復元では胴部最大径7.0cm、器高4.6cmをはかる。色調は橙色を呈し、胎土は精製粘土が使用されている。絵画、記号は太さ0.15mm位で線刻をされている。口縁部から胴部下位までに八尾市恩智遺跡のSD13でみられる竜（神獣）の抽象化されたものを中心にして、渦巻き文、バチ状文が展開されている。このバチ状文は県内の弥生時代後期末の墓地等でみられる特殊器台、集落出土の器台、高杯等に同様の文様が描かれたものがある。そして、底部中心から左巻きの渦巻き文が胴部下位まで延び、器外面の文様を構成している。 (高畠)

(7) 遺構に伴わない遺物

第201～203図がそれにあたり、第201図が3区の河道ー1南側から溝ー4間までに出土したものである。弥生時代中期末から後期前半にかけての壺・甕・高杯・鉢、石器ではS3石鏃・S4、6スクレイパーが4区、S7、8のスクレイパーが3区から出土している。河道ー1の肩口（海拔420cm）から南側約6.0mは河道ー1よりさらに古い時期の凹地になっており、上層から茶褐色粘質微砂、黄

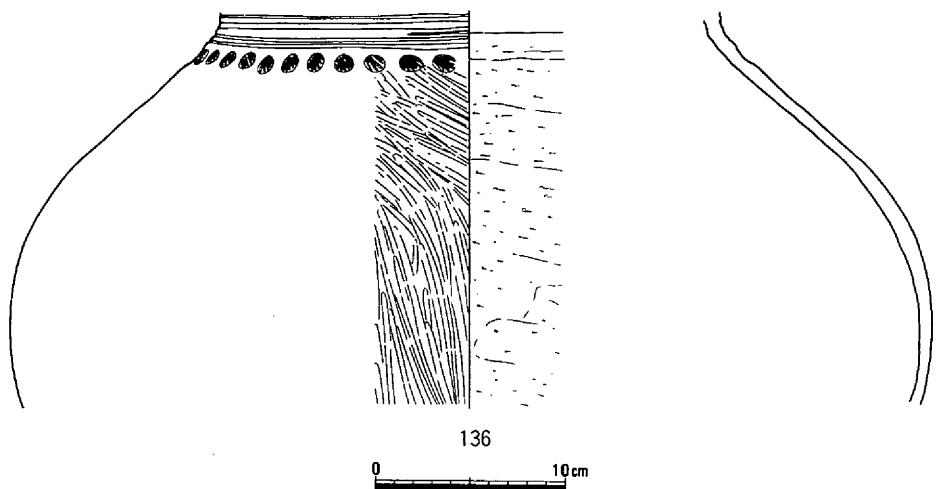


第201図 遺構に伴わない遺物（1）



第202図 遺構に伴わない遺物（2）

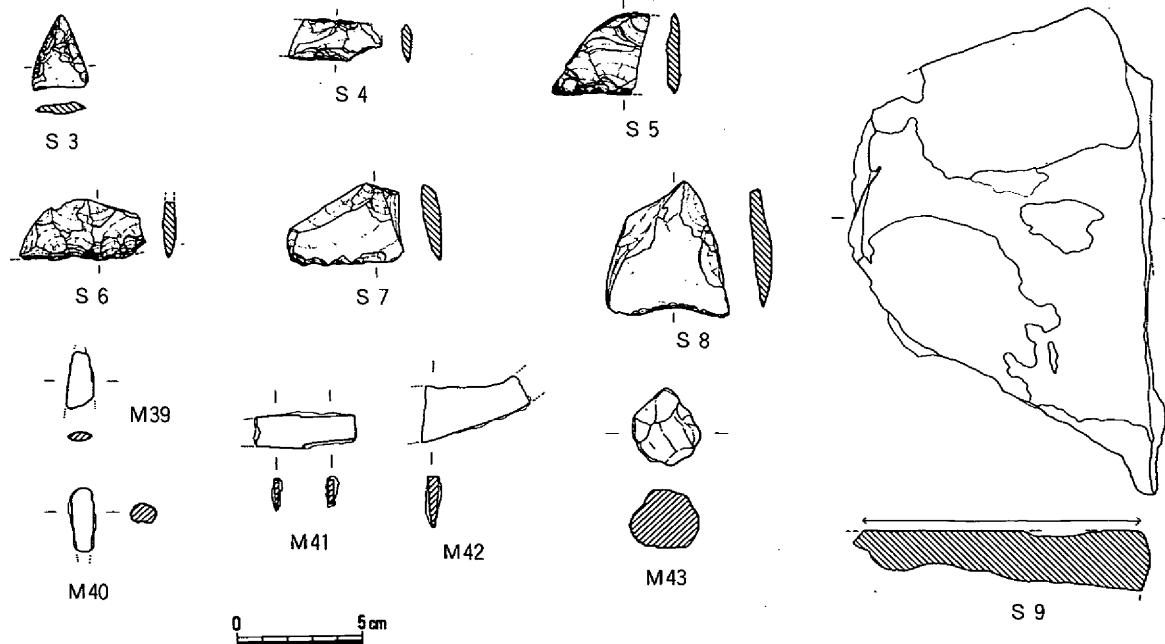
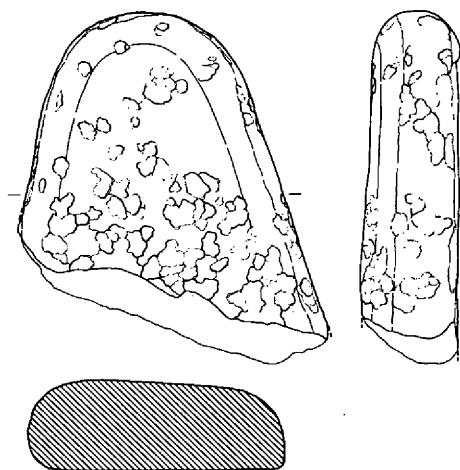
褐色粘質微砂、黄橙色弱粘質微砂の順で約60cmの堆積微砂が粘土上に認められる。埋土はすべて洪水の運搬によるものと考えられるが、砂中に遺物は認められない。



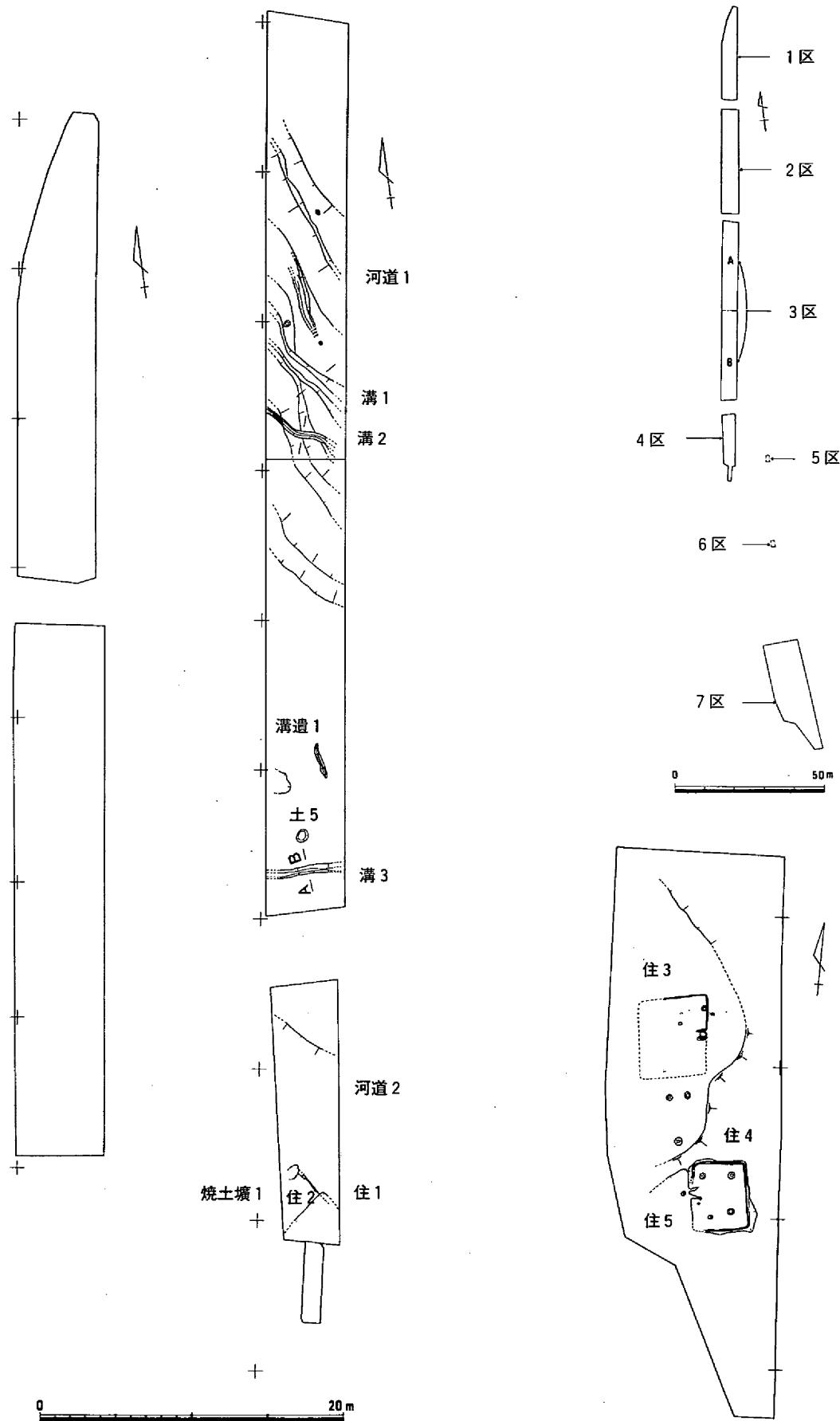
第202図が7区から出土した壺・甕・高杯・鉢であり、弥生時代前期後葉の甕110に始まり弥生時代後期前半～中葉、後期後葉までの時期が含まれる。3区と異なる点は高杯127、128等の後期中葉の土器がみられることと、後期後葉の土器が多いことである。

S 2は7区の包含層から出土した流紋岩製の金床である。側面と表面は被熱痕がみられ、敲打面が剥離をしているが、裏面は平坦で使用をされていないようである。長さ13.8cm、幅12.0cm以上、厚さ3.5cm、重量874.5gをはかり、鍛冶炉-1に伴う可能性が強い遺物である。

(高畠)



第203図 遺構に伴わない遺物（3）



第204図 津寺一軒屋遺跡古墳時代全体図 (1/400)

第3節 古墳時代の遺構・遺物

(1) 古墳時代の概要

古墳時代の遺構、遺物は1～6区に少なく、竪穴住居等は7区に集中傾向を示している。1、2区では遺構は確認できず、3区で土壙1基・溝3条・溝状遺構1、4区では竪穴住居状の遺構2と焼成土壙1基の計8遺構であり、およそ5世紀後半頃である。これに伴う遺物もあまり多くない状況である。

7区では竪穴住居が3軒、土壙1基であり、出土遺物は弥生時代後期末から古墳時代前半、古墳時代中期が中心である。これは、かつて微高地が7区から1区に向って高さを減じていた弥生時代の古地形の影響を受けており、微高地の安定度差による遺構の濃淡が顕著である。遺跡南端の7区の微高地が弥生時代から引き続き最も安定しており、弥生時代後期末から古墳時代初頭に存在した東側半分の水田域は堆積作用によって古墳時代中期には海拔約385cmの平坦面を形成している。4、3区に所在する同時期の遺構も7区遺構と同レベルにおいて確認されており、そこより2、1区に向かい緩やかに高さを減じて河道に至る。すなわち、北端の1、2区には河道が北東から南西に貫流し、河道南側の3区（旧低地）では北西から南東に枝溝2条が走り、土壙が散見する。4区もしかりである。そして、安定した微高地高所に集落の中心が占地する形態である。

弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺物は河道-1の上層に流入したものが10数点（第218図）、7区においては包含層から出土したもの（第219・210図）の一部（183、188、191～193、200）がある。しかし、この時期の遺構は検出できていない。次の時期の古・前・Ⅱの新相段階の遺物（185～187、190、194、204、208、209）は7区に集中をしているが、前時期と同様に遺構は確認できていない。古墳時代前期の7区は微高地の南東端にあたり、集落の外れに位置する場所と考えられる。おそらく、微高地本体部は7区から西側に広がり、南北に長い形状をしていた可能性が強い。

古墳時代中期では7区に切り合う竪穴住居、3区に溝、土壙等がみられ、溝-1、土壙-5、竪穴住居-4の埋土中に5世紀後半を中心とする須恵器小片がみられる。津寺遺跡の中屋調査区を中心にほぼ同時期の竪穴住居が30軒ほど確認されており、北西から南東に延びる分布である。南東に延びれば本遺跡の竪穴住居分布まで継続の可能性もある。

(高畠)

(2) 竪穴住居

竪穴住居-1、2（第204図）

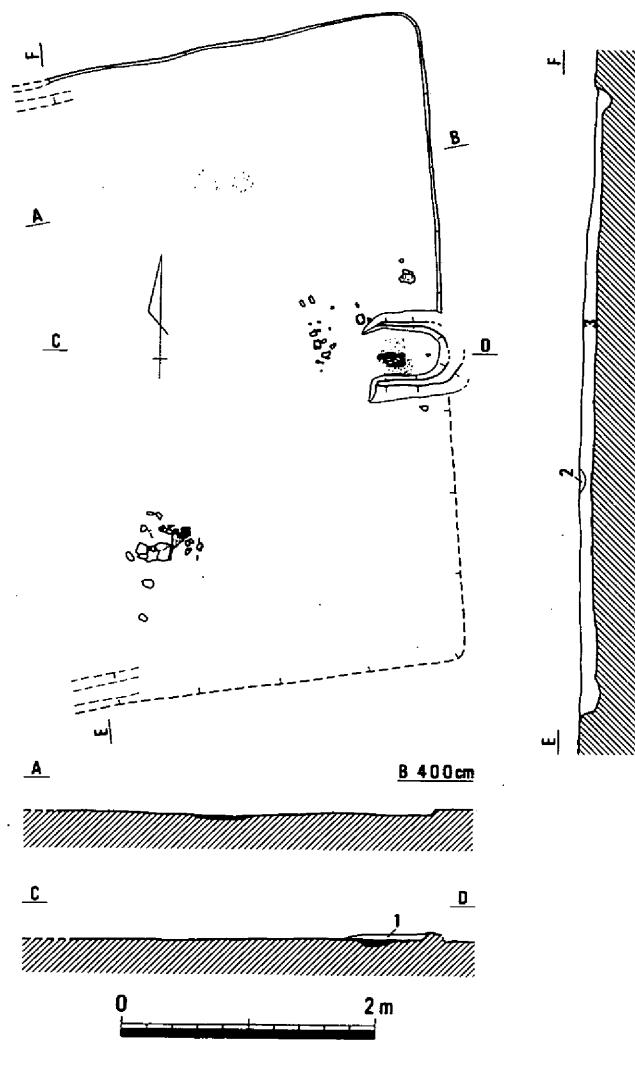
4区南側に位置し、2軒の竪穴住居の切り合いを考えたものである。海拔385cmの面にて茶褐色粘質微砂層を切り込む格好で確認できたものであり、住居内は暗茶褐色粘質微砂である。

南側の竪穴住居-1は北東の住居コーナー部分が確認でき、竪穴住居-2を切った土色の変化で検出を行った。しかし、掘り下げ時点では平・断面ともに明確な床面は確認できず、住居状遺構として扱った。竪穴住居-2の北側では焼土ブロックのまとまりや土器片が存在することなどから可能性も捨て切れない。住居内にみられる壁体溝、柱穴、方形土壙、土器等は確認できていない。

(高畠)

豊穴住居-3 (第205図)

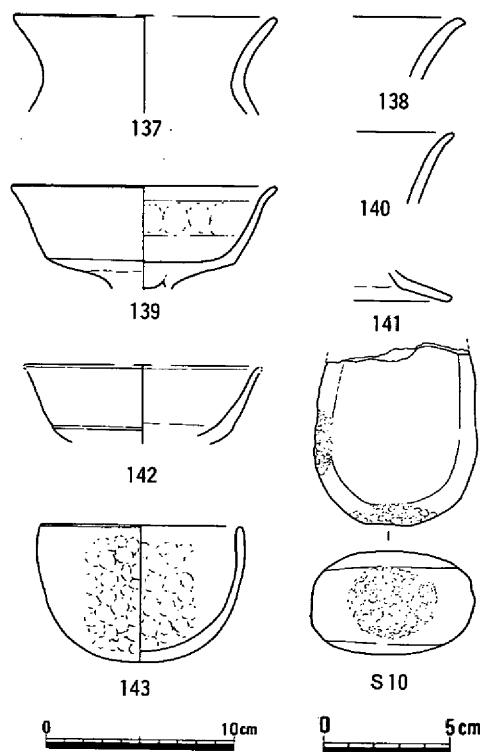
7区の微高地上のほぼ中央に検出した竈を有す豊穴住居である。鍛冶炉-1、土壙-3の南側のほぼ接する位置にある。平面形は方形もしくは長方形をなすと考えられるが西半は調査区外である。住居の掘り方も北東部ではかろうじて確認できたものの南半では検出できなかった。西側の土層断面の観察では、深さ10cmほどの掘り方と壁体溝が確認でき、一辺500cmの方形もしくは長方形の平面形と想定した。ただ壁体溝については平面では未検出である。住居の床面は海拔375cm付近で、掘り方は鍛冶炉-1を覆う土器溜まり層を切り込んでいる。作り付けの竈は掘り方の東辺のほぼ中央付近と考えられる位置に検出した。竈は内法で長辺65cm、短辺45cm、深さ8cmをはかり馬蹄形の形状を呈す。



竈内の底面は中央付近に被熱面が認められた。床面では竈以外に検出できなかった。

出土遺物は竈周辺とやや南に集中して検出した以外に西側の断面で139の高杯杯部が、埋土中からS10の敲石が出土している。時期は出土遺物の特徴から古墳時代中期前半と考えられる。

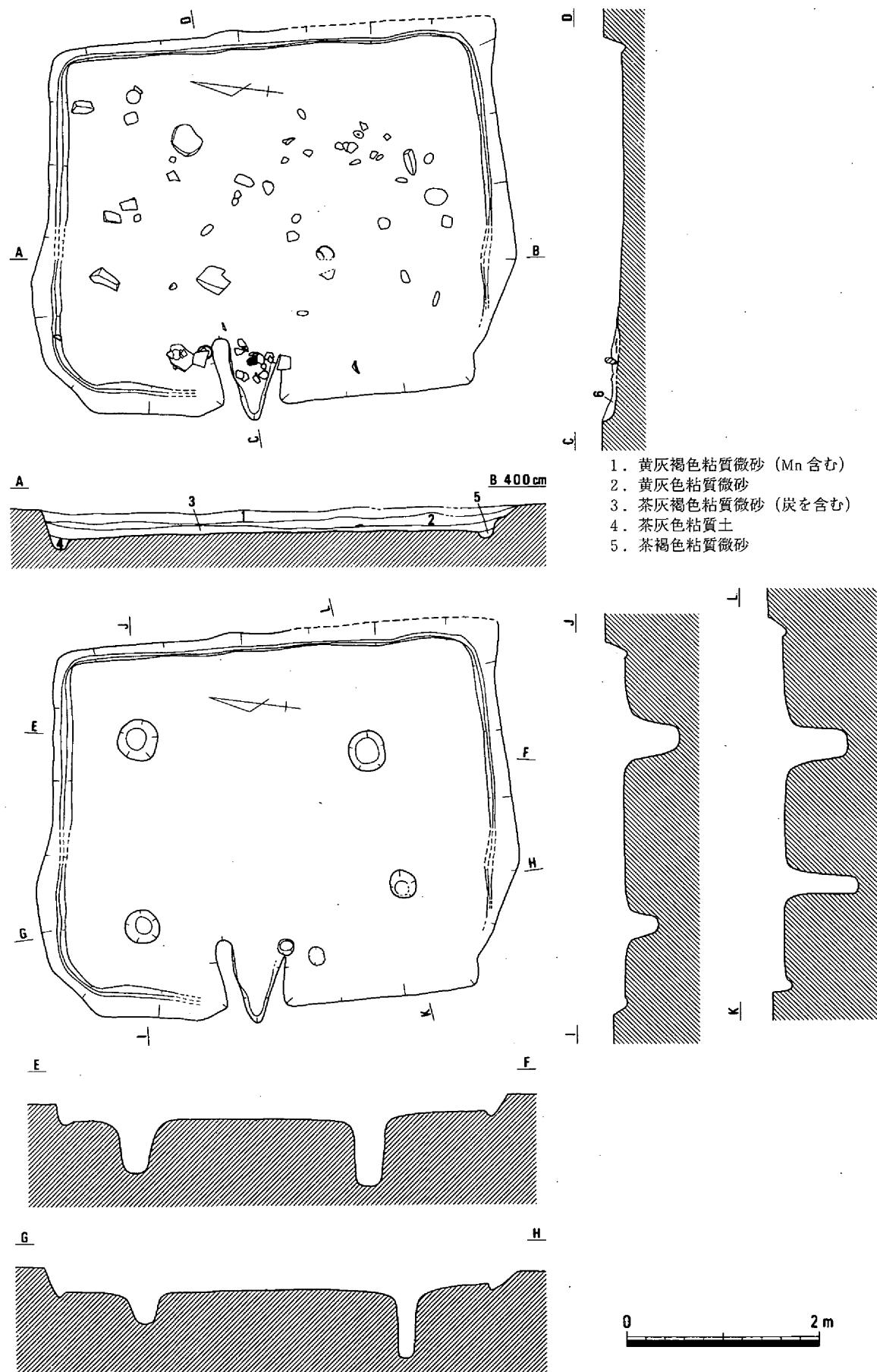
(山磨)



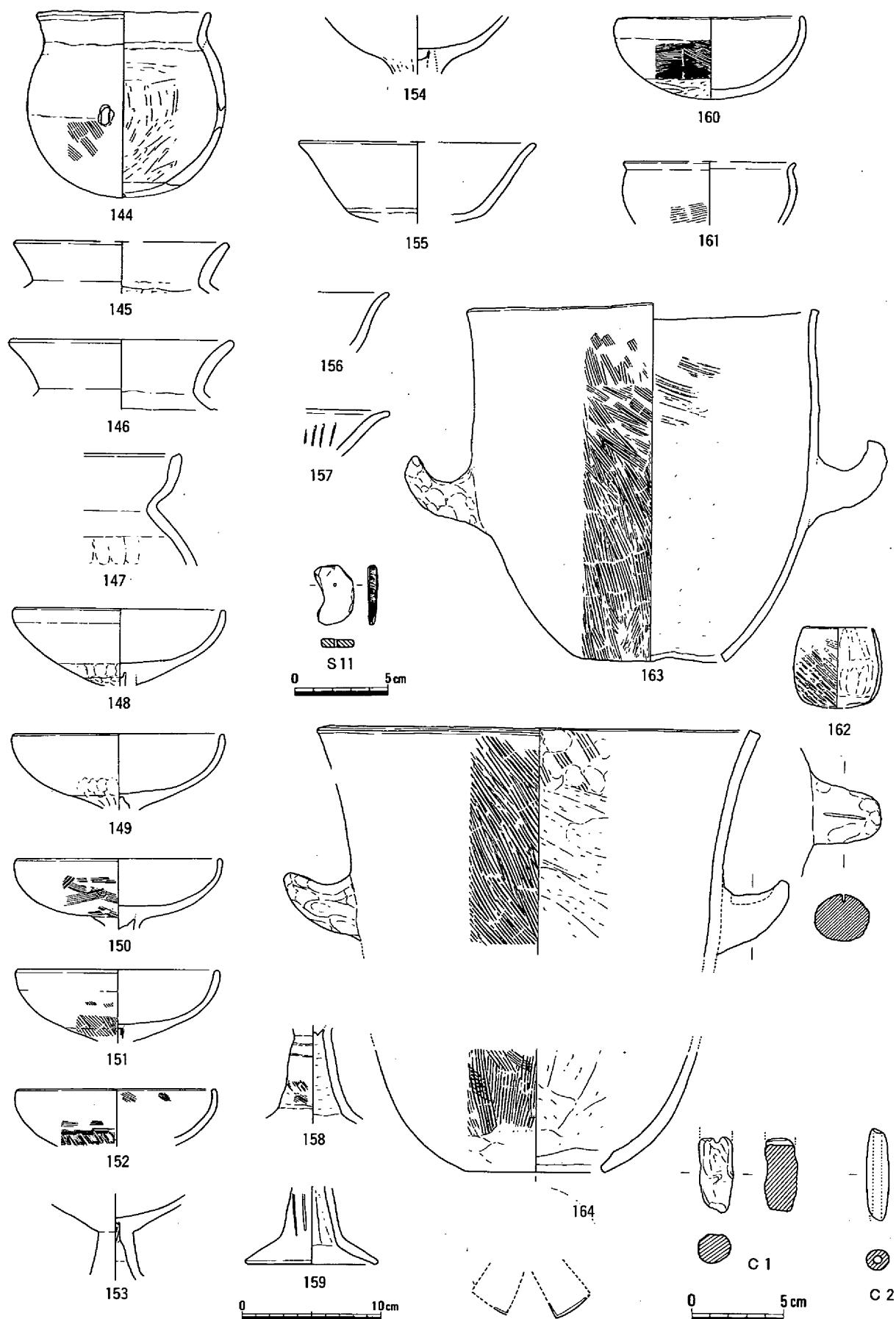
第205図 豊穴住居-3 (1/60)・出土遺物

豊穴住居-4 (第206~208図、図版25-2)

7区中央よりやや南に位置し、豊穴住居-5の東半部を切っている。平面は隅丸方形状を呈している。底面海拔高は350cmをはかり、底面には幅約20cm、深さ約3cmをはかる壁体溝がある。柱構造は4本柱で、柱間は147~275cmをはかる。柱穴掘り方は円形で、長径48~70cm、深さ36~60cmをはかる。中央穴及び柱痕跡は確認されなかった。埋土は5層からなり、床面に近い第3層に炭が含まれていた。西側の一辺中央部に作り付けのカマドが遺存していた。西壁の中央よりやや北よりに位置し、埋土は



第206図 積穴住居-4 (1/60)

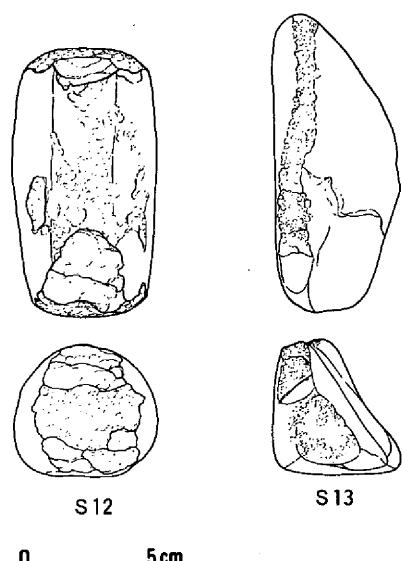


第207図 積穴住居-4出土遺物

焼土層の1層からなる。袖の部分はしっかりと残っており、カマド底面から20cmの高さで立ち上がる。カマド内の土器は破壊されて原型をとどめていないが、土器を支えたと思われる石が一部残っていた。

土師器は、144～147が甕、148～159が高杯、160、161が鉢、162が製塩土器、163、164が甌である。石器は、S11が滑石製の勾玉、S12が敲石、S13が敲石と磨石の併用である。C1、C2は土錘である。C1は1/2のみ現存し、C2は両端部が一部欠けている。カマド及び土師器の型式から、古墳時代中期と考えられる。

(速水)

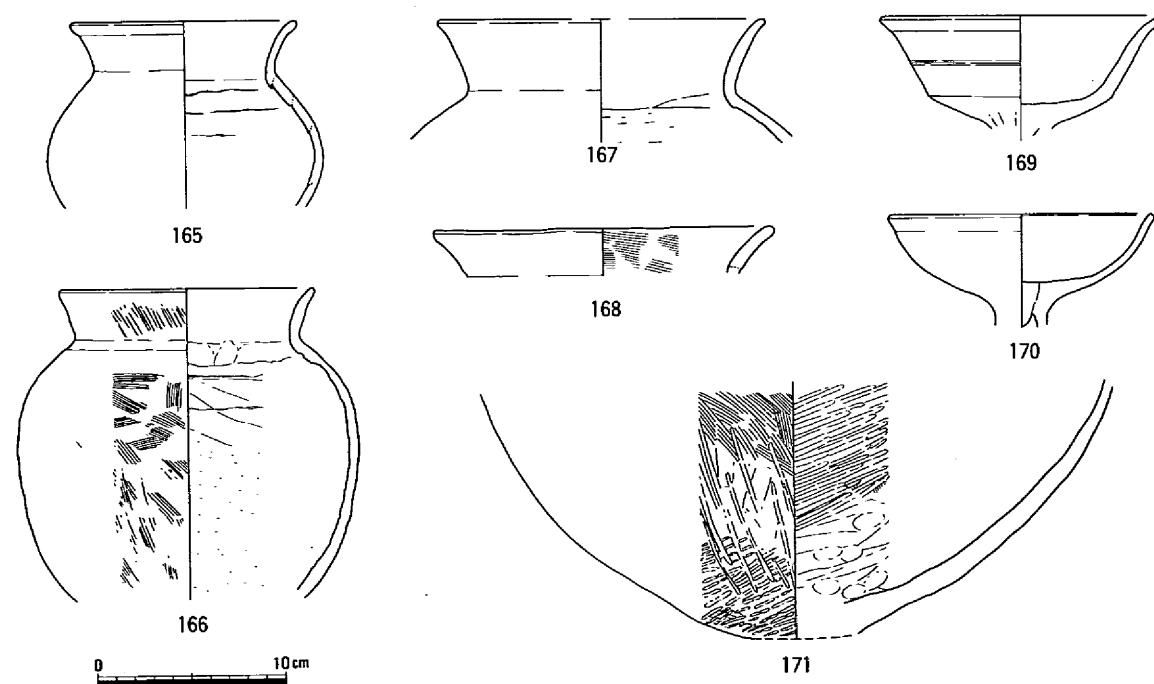
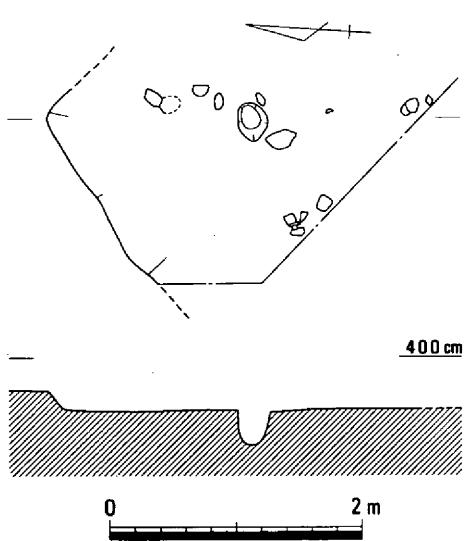


第208図 壇穴住居一4出土遺物

壇穴住居一5 (第209図)

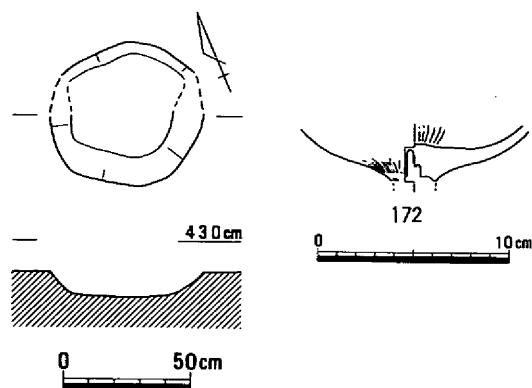
7区の南西端に壇穴住居4と重複して検出した。南側の大半が調査区外のため形状は不明瞭である。検出部分は方形の形状を呈す北東コーナー付近であろう。床面は海拔360cmである。壁体溝は検出できなかったが、検出床面の中央付近で直径25cm、深さ25cmの柱穴を検出している。遺物は埋土中から土師器の甕、高杯等が出土している。時期は出土遺物から古墳時代中期の前半と考えられる。

(山磨)



第209図 壇穴住居一5 (1/60)・出土遺物

(3) 土壙



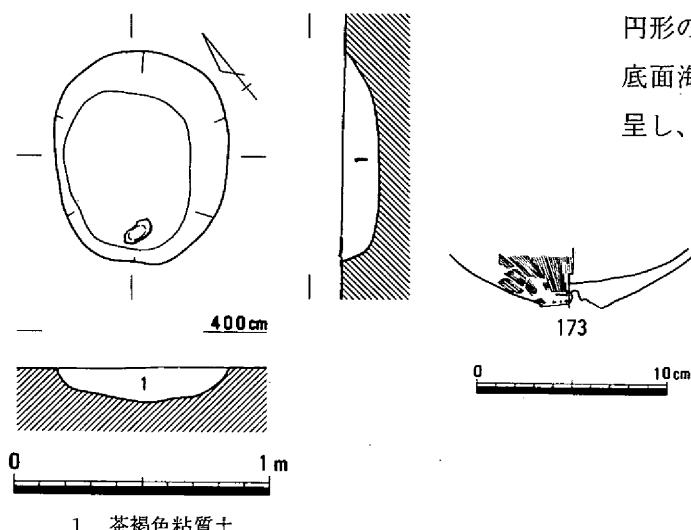
第210図 土壙-18 (1/30) ・出土遺物

土壙-18 (第210図)

7区の微高地上の北端に検出した。鍛冶炉-1と重複する位置にあるが掘り方の底面は炉面まで達していない。検出面は海拔420cmで平面形はほぼ円形をなし、長径62cm、短径58cm、深さ10cmである。皿状の断面をなし、底面はほぼ水平である。出土遺物は埋土中から内湾する高杯の杯部片が出土している。時期は埋土や検出面等から古墳時代の中期中頃であろう。
(山磨)

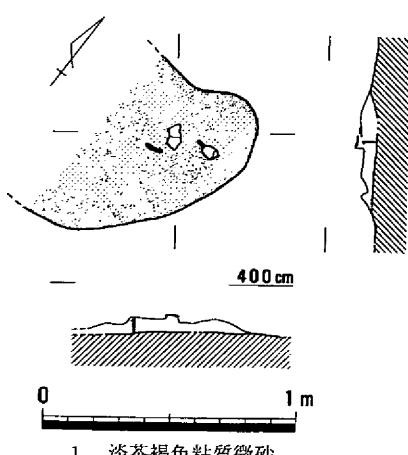
土壙-5 (第211図)

3区Bの南側、溝-3の1.5m北に位置する楕円形の土壙である。長径84cm、短径68cm、深さ14cm、底面海拔高は373cmをはかる。断面形態は椀形を呈し、埋土は茶褐色粘質土の1層である。



第211図 土壙-5 (1/30) ・出土遺物

遺物は須恵器、土師器が出土しており、須恵器は杯の小片である。高杯173は土師器であり口縁部を欠損している。土壙底より約15cm遊離して出土しており、土壙掘り方の傾斜に沿う格好である。器外面は被熱しており、煤が付着している。古墳時代中期に比定できる。
(高畠)



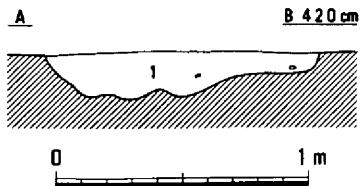
第212図 焼土壙-1 (1/30)

(4) 焼成土壙

焼成土壙-1 (第212図、図版25-3)

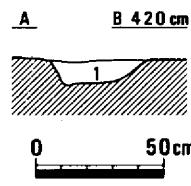
4区の南端、竪穴住居状遺構の北側に位置する楕円形の焼成部である。西側を側溝により切られており、残存の焼土分布の範囲は東西90cm、南北70cm、厚さ約6.0cmをはかる。海拔387cmが被熱の上面になり、そこには焼土ブロック、炭等と混在して土師器4片、骨片が出土しており、海拔381cm付近で焼土の分布が終了する高さである。その間は焼土粒、暗紅色の焼土、炭化粒が入り混り比較的硬土な面を形成している。竪穴住居遺構と関連を持ち、北東辺中央部分には付設されたカマドの可能性も考えられる。
(高畠)

(5) 溝



1. 暗茶褐色粘質土 (Mnが多い)

第213図 溝-1 (1/30)

1. 茶褐色粘質土
(微砂・粗砂まじり、Mnを含む)

第214図 溝-2 (1/30)

溝-1 (第213図)

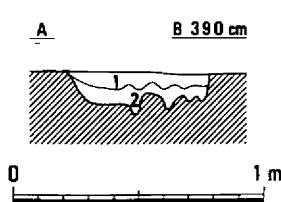
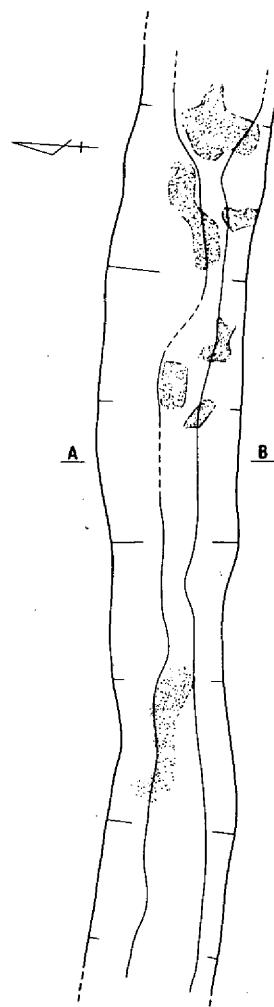
3区Aの南を溝-2とほぼ並列するように北西から南東に流れる。幅は80~156cmで深さは11cm~19cmである。底面海拔高は約390cmである。断面形は不整な皿型を呈し、1層からなる。土層内にはマンガンを多く含んでいた。検出層位などから、古墳時代のものと考えられる。
(速水)

溝-2 (第214図)

3区Aの南端を溝-1とほぼ並列するように北西から南東に流れる。幅30~45cmで深さは約8cmである。底面海拔高は約400cmである。断面形は皿型を呈し、1層からなる。検出層位などから古墳時代のものと考えられる。
(速水)

溝-3 (第215図)

3区Bの南端を東西に流れる。幅は44cm~56cmで深さは約13cmである。底面海拔高は約365cmである。断面形は不整な皿型を呈し、2層からなる。底面は凹凸が激しい。図中の範囲に示すように、底面付近から土器片が散らばるように出土しているが、極めて少量である。土器の型式及び検出層位などから古墳時代のものと考えられる。
(速水)

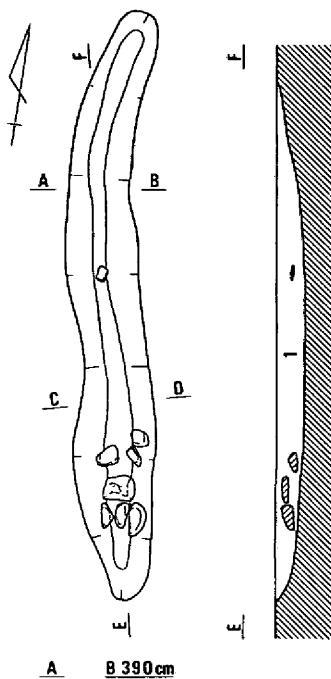
1. 暗黄褐色粘質土
2. 暗茶褐色粘質土

第215図 溝-3 (1/30)

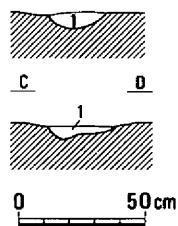
(6) 溝状遺構

溝状遺構-1 (第216図)

3区Bの中央やや南よりに位置する。南北に細長い溝状を呈する。長軸方向は約260cm、幅は約30cm、深さは約10cmである。底面海拔高は約385cmである。断面形は不整な皿型を呈し、1層からなる。遺構の南部から石が数個検出されたが、その性格についてははっきりとはわからない。石の底部は、遺構の底面よりも低いレベルにある。遺構の性格自体についてもはっきりとしない。検出層位などから古墳時代のものと考えられる。
(速水)



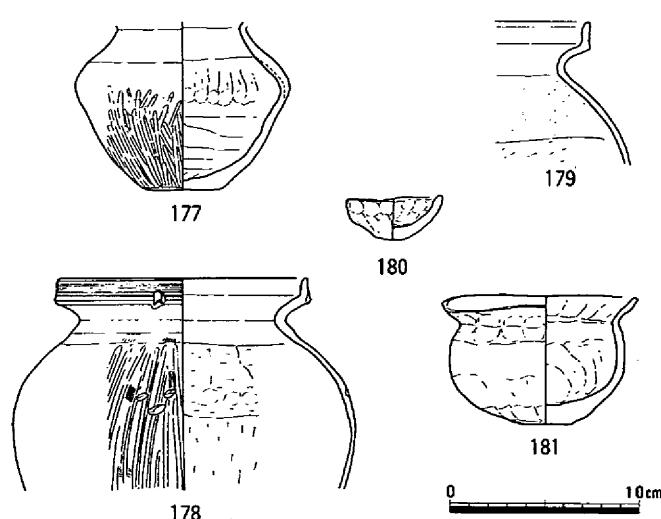
A B 390cm



1. 黄褐色粘質砂

第216図 溝状遺構-1 (1/30)

第219～221図が7区出土の遺物である。第219、220図が弥生時代後期末から古墳時代前期の土器であり、第221図が古墳時代中期の土器である。弥生時代後期末から古墳時代前期では182、183、189等が古い様相を持ち、184～187、190、194、196～199、201、204、207～209等が新しい様相をもつ。甕

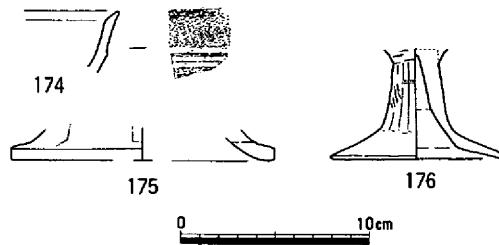


第218図 遺構に伴わない遺物 (1)

(7) 柱穴

古墳時代の柱穴は7区に所在する。遺物が存在することによってのみ確認できるものであり、今回は古墳時代中期の柱穴である。5世紀後半の竪穴住居-3・4の間に位置し、須恵器の高杯174、器台175、土師器の高杯176を持つ3穴である。

(高畠)



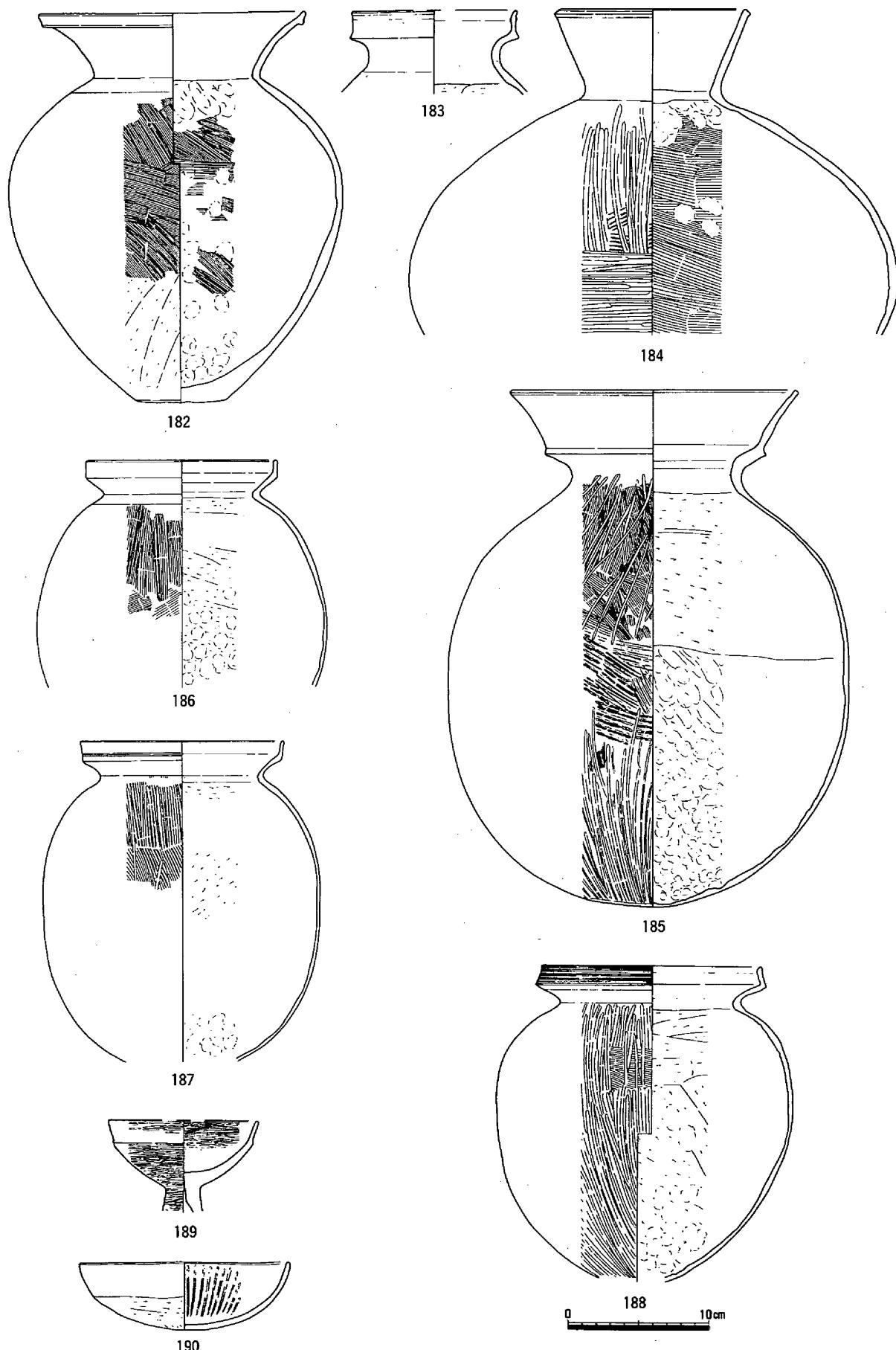
第217図 柱穴出土遺物

(8) 遺構に伴わない遺物

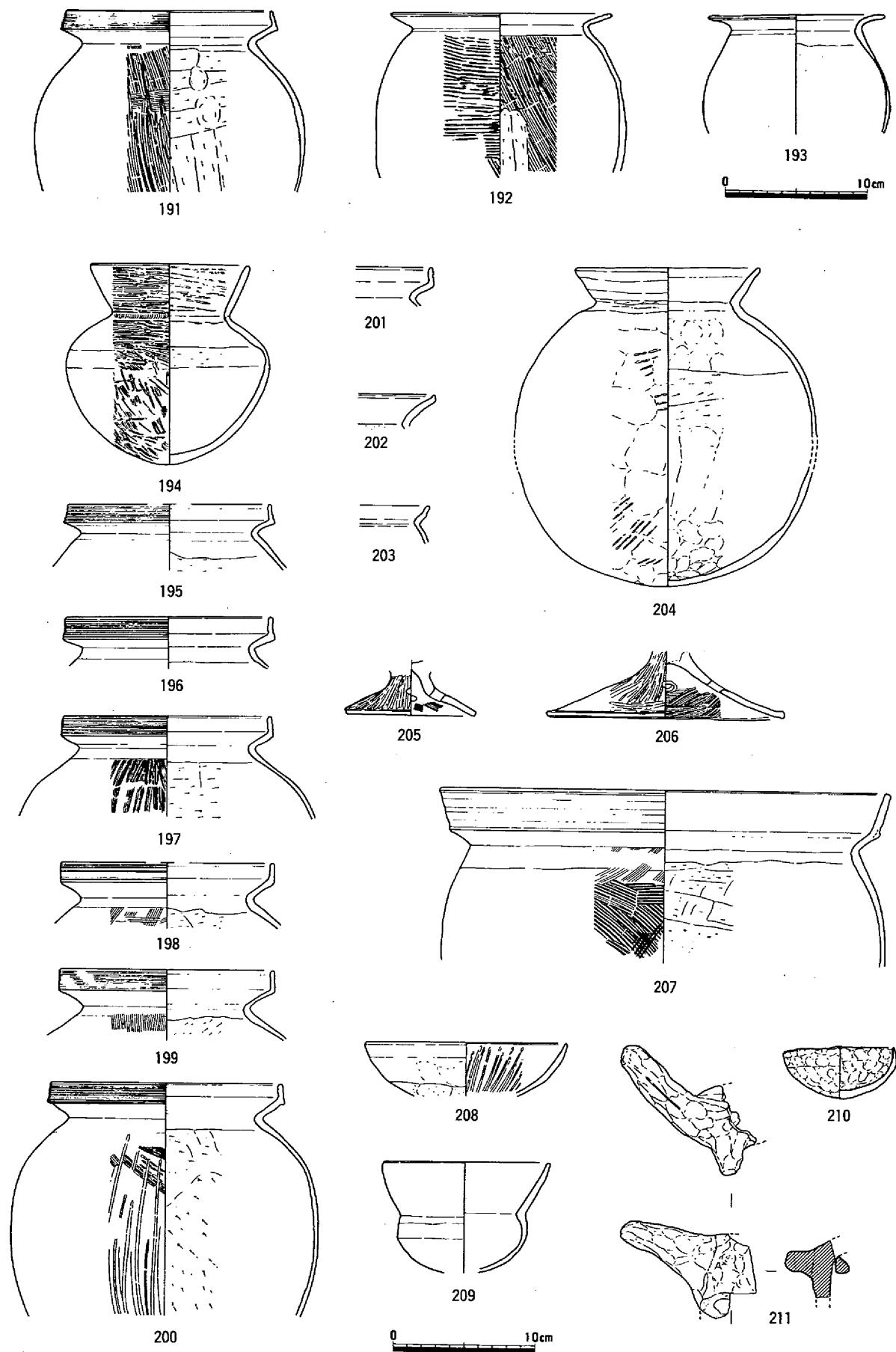
古墳時代の遺構・遺物は1～6区では非常に少なく、7区に集中をしている。第218図の土器は3区A・Bの包含層出土である。178、179は口縁部に5～7条の櫛描き沈線文をもつ吉備甕であり、外面に煤の付着が認められる。180の手捏ね土器は河道-1内、海拔350cmから出土しており、口縁部に2ヶ所の打ち欠きがみられる。

187は5世紀後半の竪穴住居-4の床面下位から出土したものであり、胴部中位に右下がりのタタキメが施されている。212～242、S13が古墳時代中期の遺物である。212～215が須恵器であり、出土量が少ない。土器の回転は左廻りである。他は土師器であり、竪穴住居-3～5に関連を持つものと考えられる。製塩土器240はほぼ完形であり、口径64cm、器高5.8cmをはかる。

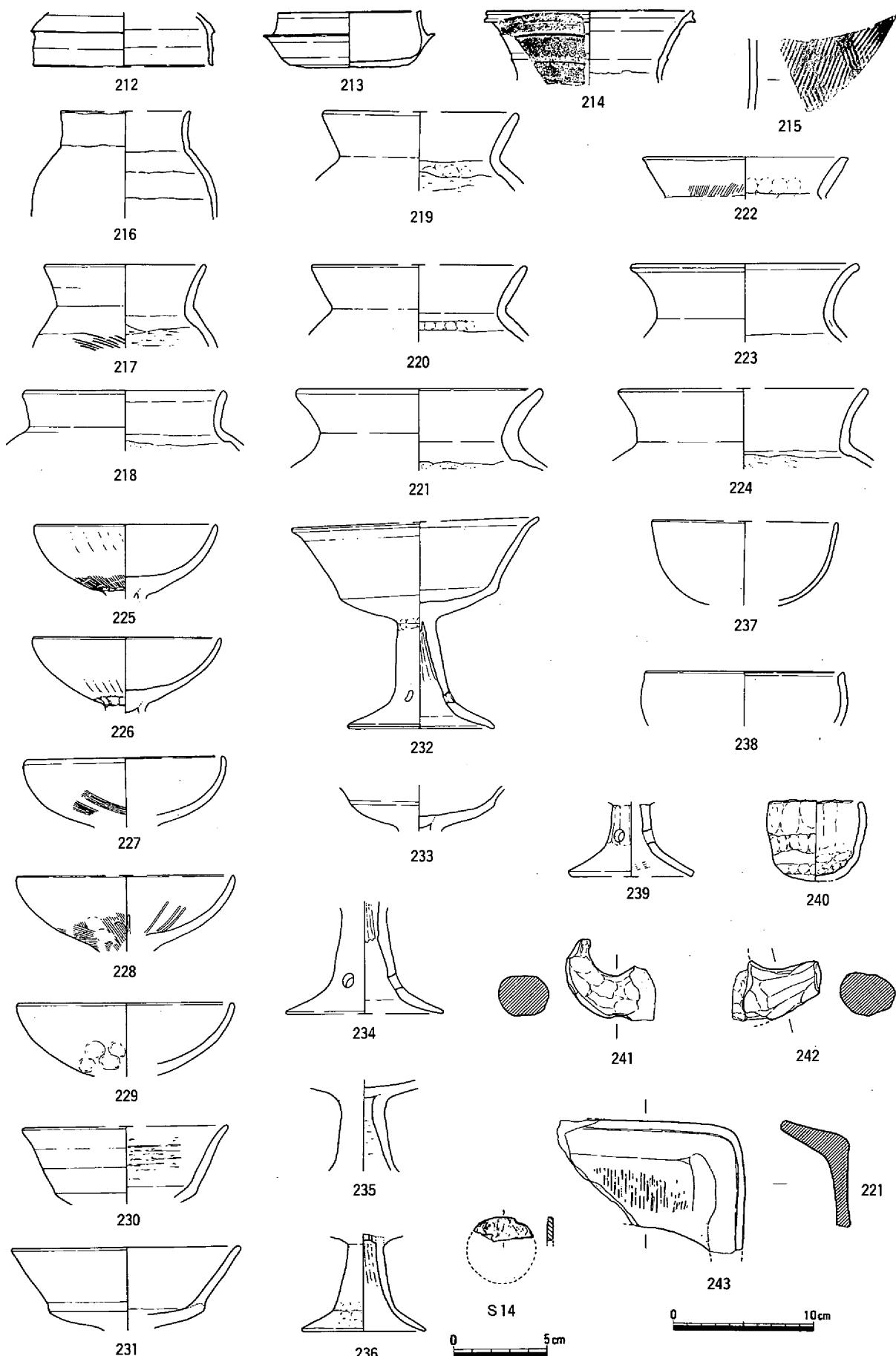
(高畠)



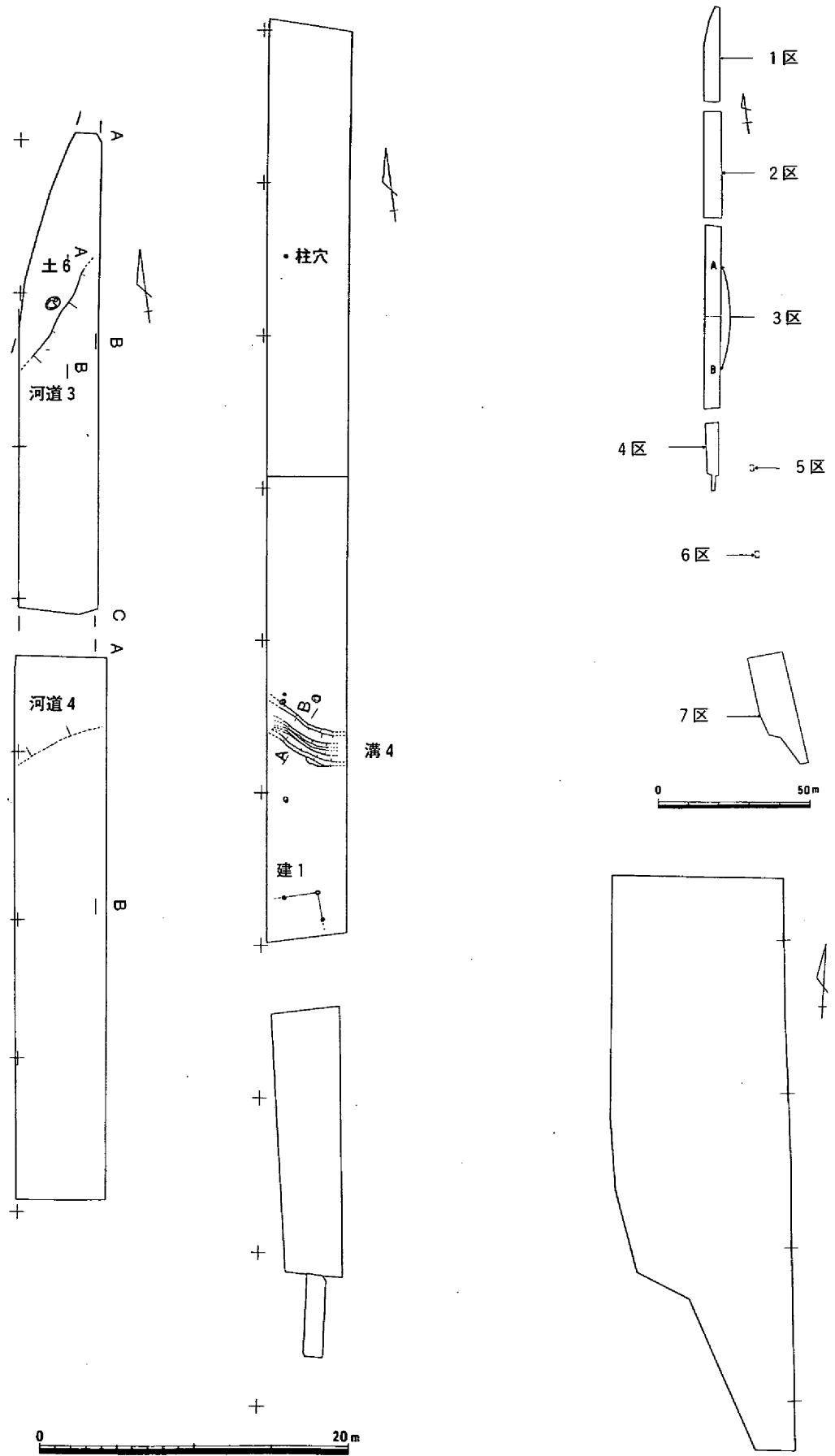
第219図 遺構に伴わない遺物（2）



第220図 遺構に伴わない遺物（3）



第221図 遺構に伴わない遺物（4）



第222図 津寺一軒屋遺跡古代全体図 (1/400)

第4節 古代の遺構・遺物

(1) 古代の概要

古代では7世紀後半から8世紀初頭、8世紀後半、10世紀前半、11世紀後半の遺物が散見できる程度である。これらの遺物が遺構に伴うのは、1区河道-3の右岸に接する7世紀後半の土壙-6と3区Bにて切り合う10世紀前半の溝-4の2遺構のみである。調査区の延長250m、面積1,024m²のうちを時代別にみると、7世紀代と10世紀代の2遺構が所在するのみである。古代には河道-3の影響を受け、居住には適さない安定性に欠ける場所であったことが考えられる。河道-3の幅は20m以上をはかると思われ、1区、2区とに跨がり北東から南西に貫流している。そして、河道-3の埋土第32層(第228図)中には7世紀後半から8世紀初頭の遺物(第229図)を含んでおり、北側の微高地から投棄された状況を呈している。調査区においては唯一古代の遺物がまとまって出土した場所である。土壙-6、河道-3の位置より136m西側には、津寺遺跡中屋調査区の8世紀中葉の長方形区画溝(123.80×94.00m)、20mほど北側には同遺跡の中屋、高田町調査区の掘立柱建物群等の近接する時期の遺構がまとめて所在する。土壙-6からさらに約100m南側には新旧の切り合いが認められる溝-4が所在する。北西から緩やかにカーブを描きながら南東に流走する溝であり、北東から南西に流走する河道-3とは反対の方向になる。溝幅は200cmをはかるが、この中で切り合いが認められ、南側の溝が北側の溝を切っている。南溝の幅は約150cm、深さ100cmをはかり、上・中層に遺物を含んでおり、北溝の幅は150cm以上、深さ110cmをはかり南溝より深い。遺物は小片が中心であり、8世紀代の丹塗り土器とか10世紀前半頃の土師器がみられる。

(高畠)

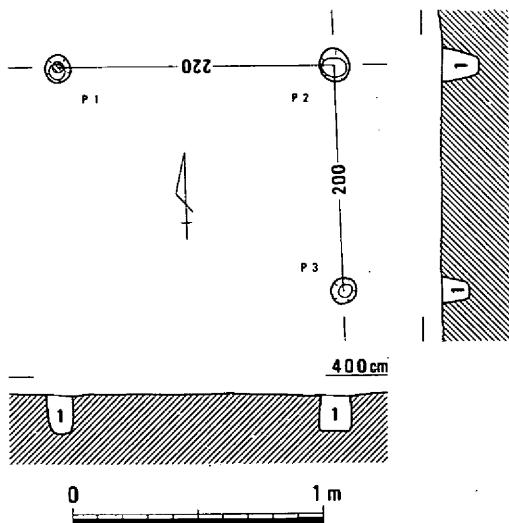
(2) 掘立柱建物

掘立柱建物-1(第223図)

3区Bの南端、溝-4から8.0m南側に位置する掘立柱建物である。発掘調査では用地外と道路の関係から1×1間までの確認であり、検出海拔高は385cmをはかる。硬質の茶褐色粘質土を切って作られている柱穴である。付近の土層断面でも同レベルにおける柱穴がみられ、淡茶褐色粘質土の埋土が認められる。

北辺のP1～P2間が220cm、東辺P2～P3間が200cmをはかり、建物方位は若干西に傾く。柱穴掘り方は円形にて直径22.0～26.0cm、深さ14.0～16.0cm、深いもので底面海拔高335cmをはかる。

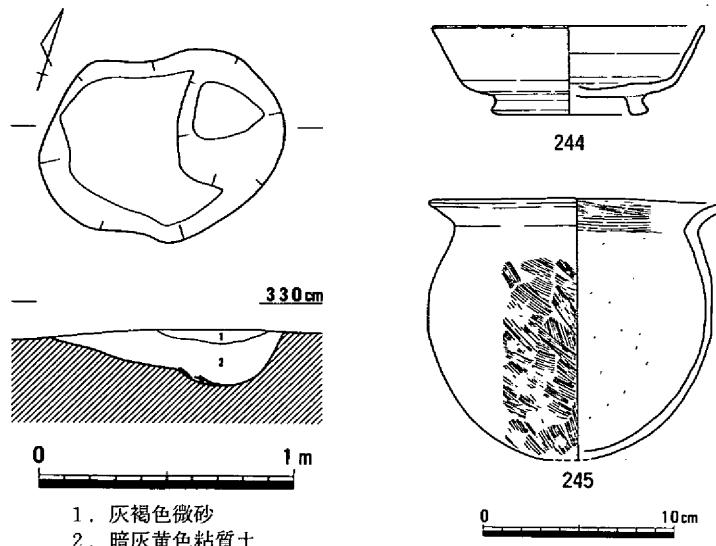
P1では直径9.0cmをはかる柱の土壙化した痕跡がみられる。柱穴内埋土は黄褐色粘質微砂の1層であり、土師器小片を含む。時期は古代末～中世か。



第223図 掘立柱建物-1 (1/30)

(高畠)

(3) 土壌



第224図 土壌-6 (1/30)・出土遺物

土壌-6 (第224図)

1区の北半で検出し、後述する河道-3北岸の肩部に位置する。その平面形は卵形を呈し、規模は長軸100cm、短軸75cm、深さ20cmを測る。底は東側が一段深くなり、埋土の第1層は河道-3の顯著な微砂層（第32層）と酷似する。

出土遺物には、図示した須恵器の高台椀244と、土師器の甕245のほか、製塩土器の小片等がある。

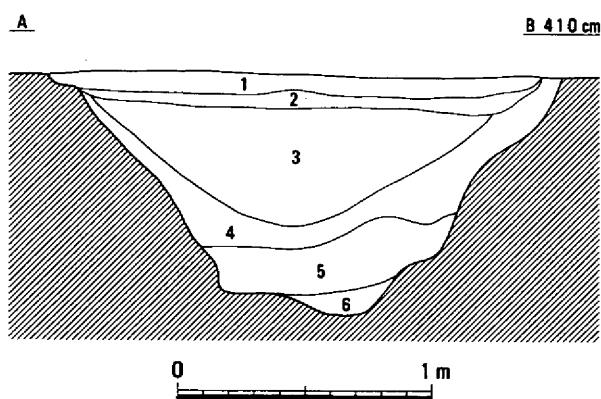
遺物の時期は、7世紀後半と考えられる。
(高田)

(4) 溝

溝-4 (第225図、図版24-2・3)

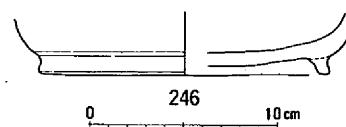
3区B中央やや南側を北西から南東方向に流れる。幅は350~550cm、深さは約75cmである。底面海拔高は約300cmである。弥生、古墳の時期の溝及び河道と同じような方向に流れているので、なんらかの関連性はあるものと考えられる。調査当初は浅い溝を想定していたが、掘り進めていくうちに、深い溝になることがわかり、また、一番底の部分が溝状になっていることも判明した。断面形は不整な皿型を呈しており、6層からなる。第1層と第2層はほぼ同じであるが、第1層の方にマンガンが多く含まれていた。

出土遺物については、第6層より多くの土器が出土した。246は須恵器の杯身であり、底部に窯印

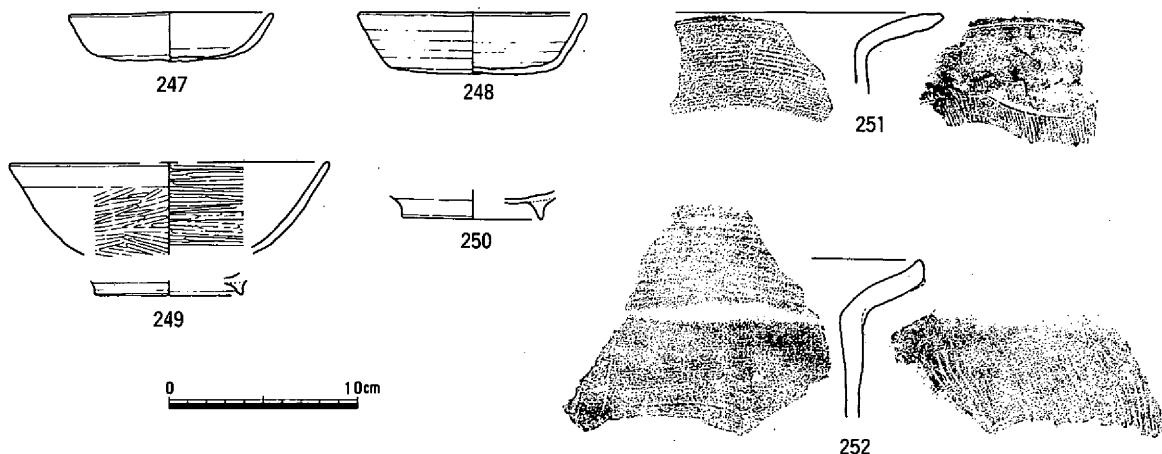


- | | |
|----------------------|-------------|
| 1. 黄灰色粘質微砂 (Mnを多く含む) | 4. 緑灰色弱粘質微砂 |
| 2. 黄褐色粘質微砂 | 5. 茶褐色粘質土 |
| 3. 黄灰色粘質微砂 | 6. 灰色粗砂 |

と思われる工具痕が認められる。247、248は土師器の皿である。247は内外面とも器面が剥落しており、底部は指押さえが著しい。249、250は内黒の碗である。249の土器の回転方向は左である。出土遺物より平安時代の時期と考えられる。
(速水)

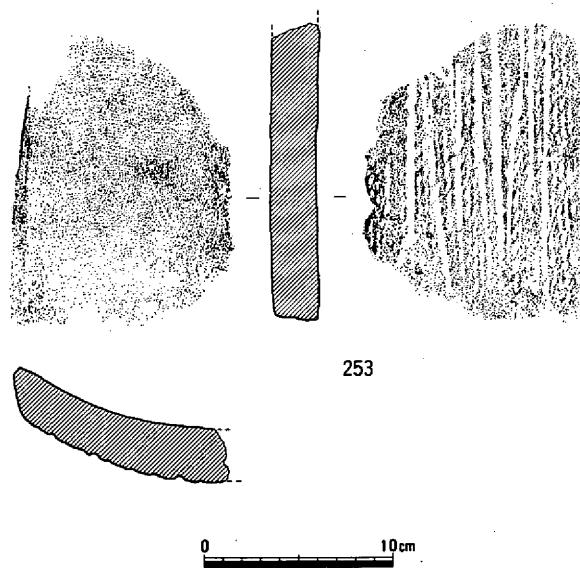


第225図 溝-4 (1/30)・出土遺物



第226図 溝一4出土遺物

(5) 柱穴



第227図 柱穴出土遺物

古代の柱穴はほとんど確認ができていない。平瓦253の出土した柱穴は3区Aのほぼ中央西、中世の溝状遺構-2の肩口から検出したものである。柱穴径約27cm、底径14cm、深さ17cm、底面海拔高405cmをはかり直径13cmである。円形の柱痕がほぼ中央にみられる。瓦は柱穴底から8.4cm上位で傾斜して出土しており、淡黄灰色砂質土とともに埋土として利用されている。瓦は全面被熱をしており、一部煤が付着している。凹面布目、凸面繩目痕跡がみられる奈良時代のものであるが、切り合いから溝状遺構-2よりも新しい柱穴と考えられる。(高畠)

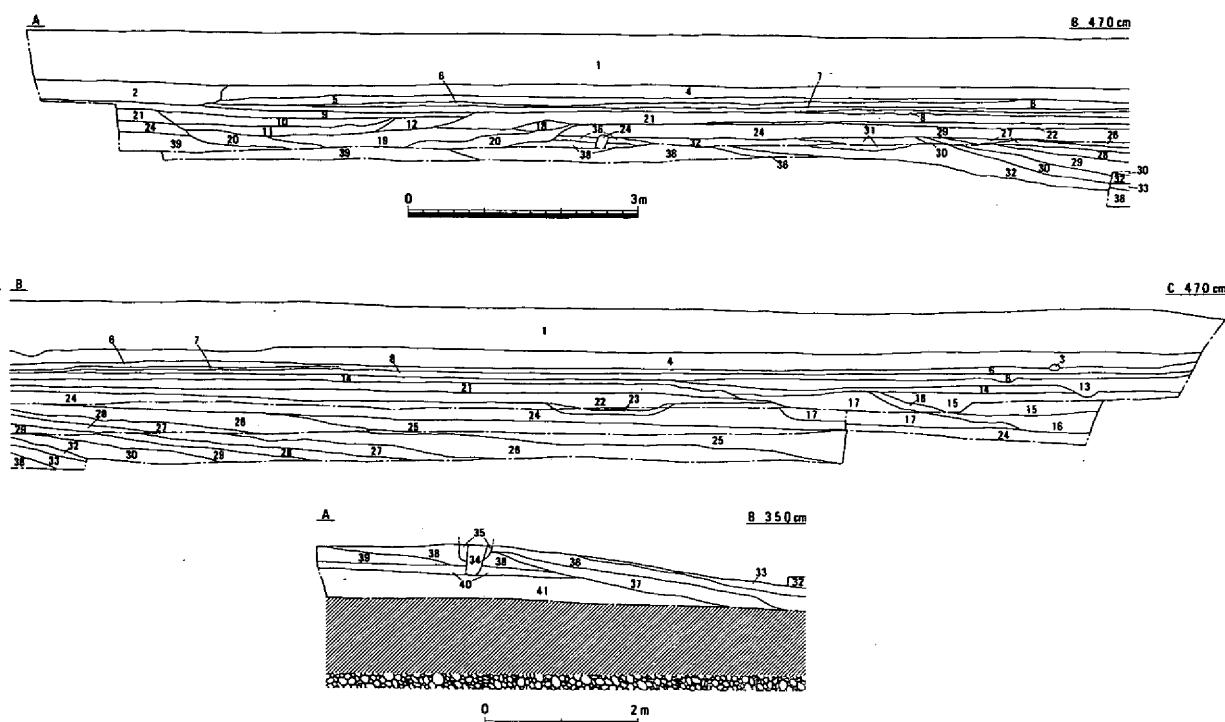
(6) 河道

河道-3 (第228・229図)

1区の北半において、北東から南西方向の北岸を検出した河道である。その埋没状況から、対応する南岸は2区以南に位置するものと考えられるが、激しい湧水のために確認出来ていない。

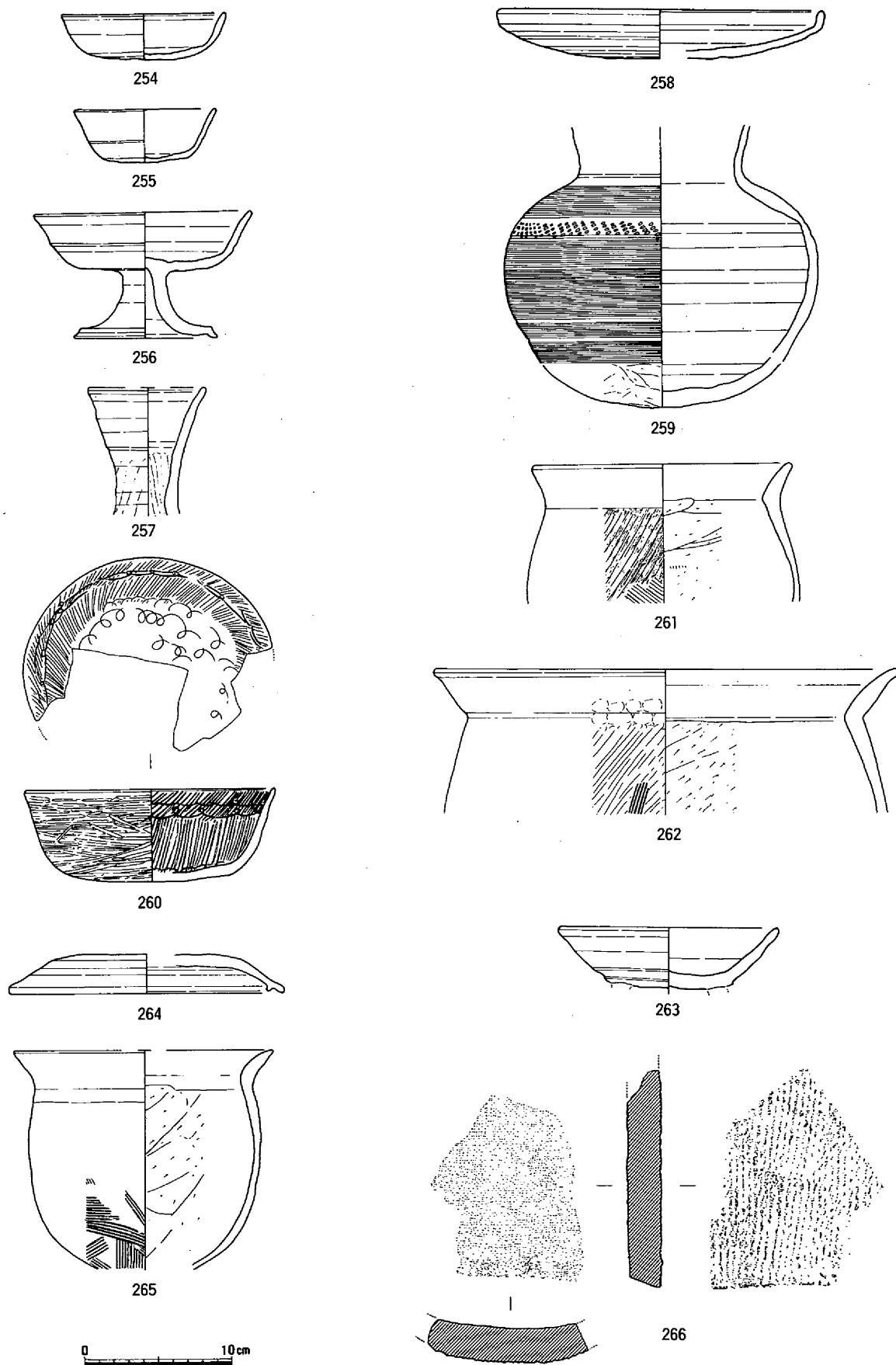
河道の埋土は、第228図の第25~32層である。このうち、第25・26層は粘土層で、第27~31層は粘質微砂を中心とする層である。肩口に堆積する第32層は、炭粒と植物遺体や貝殻等を多く含む微砂層で、下部には鉄分とマンガンが顕著に沈着している。これは河道の流水時の堆積と考えられ、上位の堆積とは明瞭な差がある。土器の多くが本層からの出土であり、北側から廃棄あるいは転落した状況を示している。なお、河道の最底面は海拔235cm前後での湧水のため未確認であるが、1区全体の海拔150cm前後に礫層が推定されることから、河道底面はこれより上位になると考えられる。

出土遺物のうち図示したものは、須恵器254～259、264、土師器260～263、265、平瓦266である。254～262が第32層からの出土で、263～266はより上層からの出土である。254、255は杯身で、254は口径9.8cm、底径5.8cm、器高3.7cmの小形の製品である。256は高杯で、外反気味に開く杯部の外面に浅い凹線がめぐる。257は長頸壺、258は皿、259は広口壺である。260はやや丸みを持った底面から直線的に口縁が開く杯で、口縁端部を内側に軽く巻き込む。内面に施す暗文は、底面部が螺旋文、口縁部が二段斜放射文で、さらに放射文の間に螺旋文、その上位に連弧文をつける。外面は底部がケズリ後ナデ、口縁部をヘラミガキする。261、262、265は甕で、大小がある。263は貼り付け高台を欠失した杯である。264は杯蓋で口辺内面に短いかえりがつく。

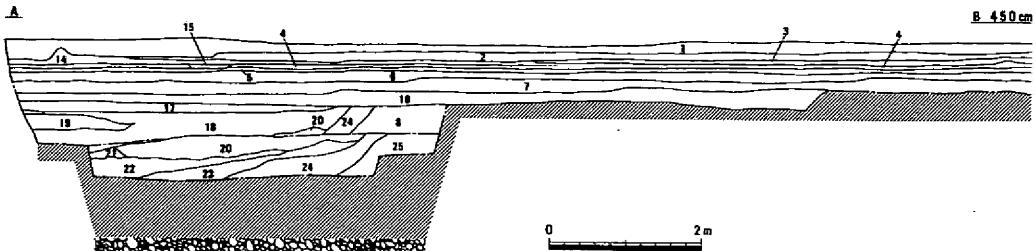


- | | |
|---------------------------|--------------------------------------|
| 1. 造成土 | 23. 灰褐色微砂 |
| 2. 青灰色粘土と暗青灰褐色粘質微砂のブロック充填 | 24. 灰色粘土 |
| 3. 青灰褐色粘質微砂 | 25. 暗灰色粘土 |
| 4. 灰黄色微砂 | 26. 暗灰色粘土（灰色微砂ブロック多く含む） |
| 5. 青灰色粘質微砂（黄灰色微砂多く含む） | 27. 茶灰色微砂～暗茶灰色粘質微砂（ビート層、炭粒・植物遺体含む） |
| 6. 灰色粘土 | 28. 暗茶灰色粘土（ビート層・炭粒・植物遺体含む） |
| 7. 暗青灰色粘土（炭粒少し含む） | 29. 灰色微砂と茶灰色粘土の互層 |
| 8. 青灰色粘質微砂（炭粒少し含む） | 30. 茶灰色粘質微砂 |
| 9. 明青灰色粘質微砂（溝埋土） | （ビート層・暗灰色微砂ブロック含む・炭粒・植物遺体含む） |
| 10. 灰緑色粘質微砂（溝埋土） | 31. 暗灰褐色粘質微砂 |
| 11. 灰緑色微砂（溝埋土） | 32. 灰～暗灰色微砂 |
| 12. 青灰色微砂（溝埋土） | （下部は鉄とマンガンの沈着顕著・炭粒・植物遺体多く含む・貝殻・鉄滓含む） |
| 13. 灰色砂～青灰色微砂 | 33. 暗灰緑色粘土（斜面肩口に砂粒多く含む） |
| 14. 暗茶灰色粘質微砂（中世水田耕土） | 34. 暗青灰褐色粘質微砂（微砂ブロック・炭粒含む） |
| 15. 暗灰褐色粘質微砂（炭粒含む） | 35. 暗灰褐色微砂（34層のブロック・炭粒含む） |
| 16. 暗灰褐色微砂～灰褐色砂 | 36. 暗灰黄色粘質微砂 |
| 17. 灰緑色粘土 | 37. 暗青灰色粘土 |
| 18. 灰緑色粘土（微砂含む） | 38. 褐灰色粘土 |
| 19. 暗灰色粘質微砂（溝-5埋土） | 39. 灰褐色粘土（炭粒含む） |
| 20. 暗灰褐色粘質微砂（微砂斑含む・溝-5埋土） | 40. 明灰黄色微砂 |
| 21. 灰色粘土 | 41. 灰黄色粘質微砂（層の上部に鉄分・マンガンの沈着） |
| 22. 暗灰綠色粘質微砂 | |

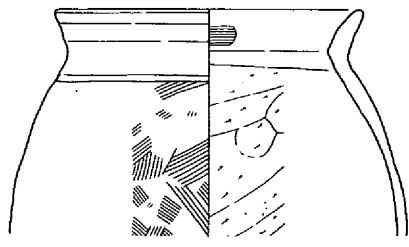
第228図 1区東壁・中央トレンチ (1/100)



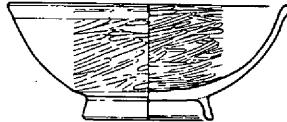
第229図 河道一3出土遺物



- | | |
|-------------------|-------------------------------|
| 1. 耕作土 | 16. 灰茶褐色粘質微砂（中世水田層） |
| 2. 灰黃褐色粘質微砂（粗砂含む） | 17. 明灰色粘質微砂（砂質強） |
| 3. 灰褐色粘質微砂 | 18. 暗緑灰色粘質微砂（下位微砂強） |
| 4. 暗青灰色粘質微砂 | 19. 暗灰色微砂～砂 |
| 5. 灰褐色粘質土 | 20. 灰～暗灰色粘土 |
| 6. 青灰色～灰褐色粘質微砂 | 21. 茶灰色粘質微砂（ピート層 植物遺体含む） |
| 7. 青灰色微砂（洪水砂？） | 22. 灰色粗砂 |
| 8. 灰色粘土～粘質微砂 | 23. 黒灰色～暗茶灰色粘質微砂（ピート層 植物遺体含む） |
| 9. 灰茶褐色微砂 | 24. 暗緑灰色粘質微砂と微砂の互層（植物遺体含む） |
| 10. 茶褐色粘土 | 25. 灰黄色微砂 |
| 11. 茶褐色粘質微砂 | |
| 12. 淡茶色微砂 | |
| 13. 淡黄灰色粗砂 | |
| 14. 灰褐色微砂 | |
| 15. 暗灰色粘質微砂 | |



267



268

第230図 2区東壁北半 (1/100) ・河道4ー出土遺物

出土遺物の時期は、第32層が7世紀後半から8世紀初頭と考えられ、より上層のものが平安時代までに比定される。河道の存続もこの期間内に収まるものであろう。また、先述した土壙-6とは埋土の一部が酷似し、出土遺物の時期も近いことが指摘できる。

(高田)

河道-4 (第230図)

2区の北端において、北東から南西方向の南岸を中世水田層(第230図第16層)除去後に検出した河道である。北岸については現代用水路等が存在することから確認出来ていない。

埋土は第230図の第17～24層である。堆積状況は基本的に砂と粘土の互層で、流水と滞水を繰り返しながら埋没したものと考えられる。南肩口は比較的急斜に落ち込むことから、水流の攻撃面となる岸であろう。最底面については、海拔240cm前後の激しい湧水のために確認出来ていない。しかし1区と同様、海拔150cm以下に礫層が推定されることから、これより上位に河道の底があるものと考えられる。

出土遺物には、図示した土師器の甕267と椀268のほか、少量の土師器や瓦片がある。268はしっかりとした高台を貼り付けるもので、口径14.8cm、高台径6.7cm、器高6.2cmを測り、体部内外面をヘラミガキする。遺物の時期は平安時代後期と考えられる。

(高田)

(7) 遺構に伴わない遺物

古代でも出土遺構の数に比例して遺物の出土量は少なく、どの地区においても遺構、遺物は希薄な状況である。河道-1、溝-4等の遺構に伴う遺物以外は3区Bと7区においてのみ出土している。杯蓋269、杯身270、甕271等の破片は掘り下げ途中において出土したものであり、海拔408cm面からである。茶褐色粘質土の上面において確認をしており、溝-4の掘り下げ面とほぼ同レベルである。

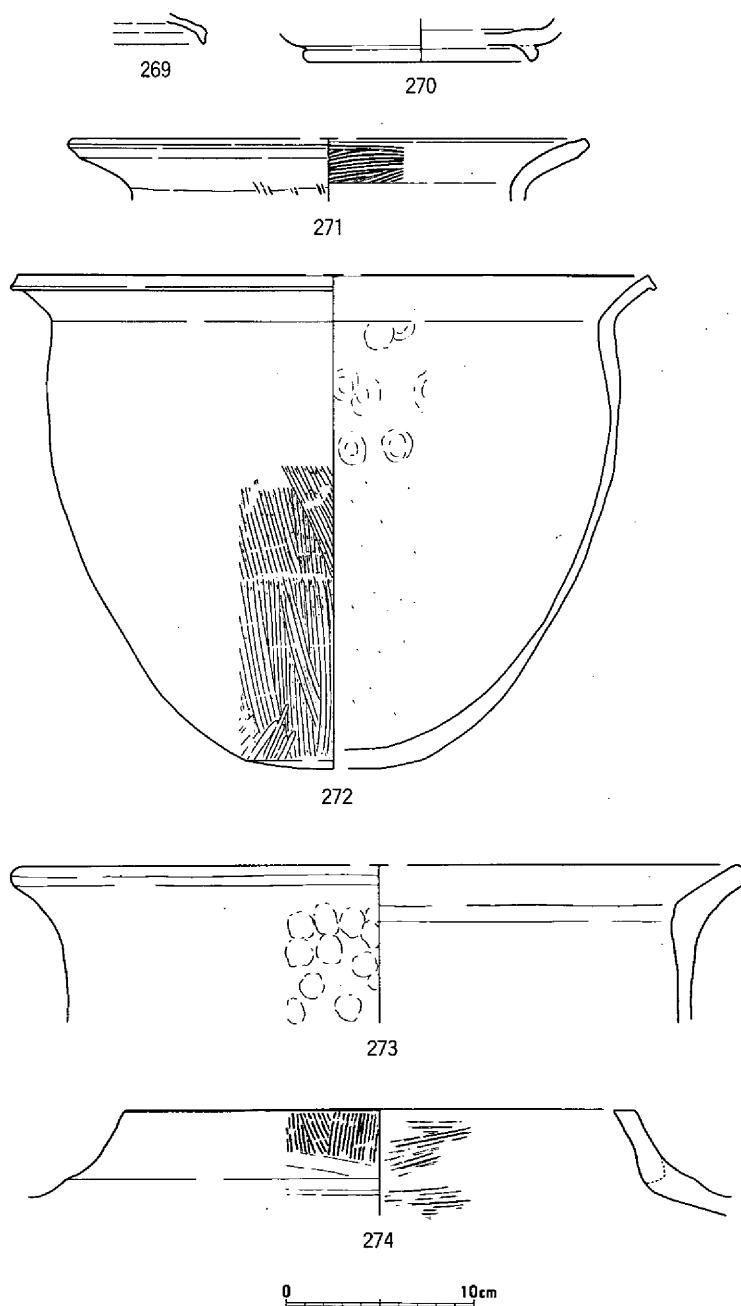
遺物は269、270が須恵器、271が土師器であり、3片とも小片にて計測不可である。270の推定高台径は11.8cmをはかり、土器の回転方向は右廻りである。色調灰白色を呈する。271は推定口径27.2cmをはかり、器内外面は荒いハケメの調整が残る。胎土中に石英、長石、角閃石を含み、色調は明赤褐色を呈する。これらの時期は8世紀の後半項に比定できる。

272は7区の北側から出土しており、口縁から底部にかけて約1/4が残存している。口径9.3cm、器高26.05cmをはかる甕(鉢)である。口縁部内外面ヨコナデ、器外面は縦位のハケメ、器内面は上位がユビオサエ、下位がヘラケズリ後に丁寧なナデが施されている。

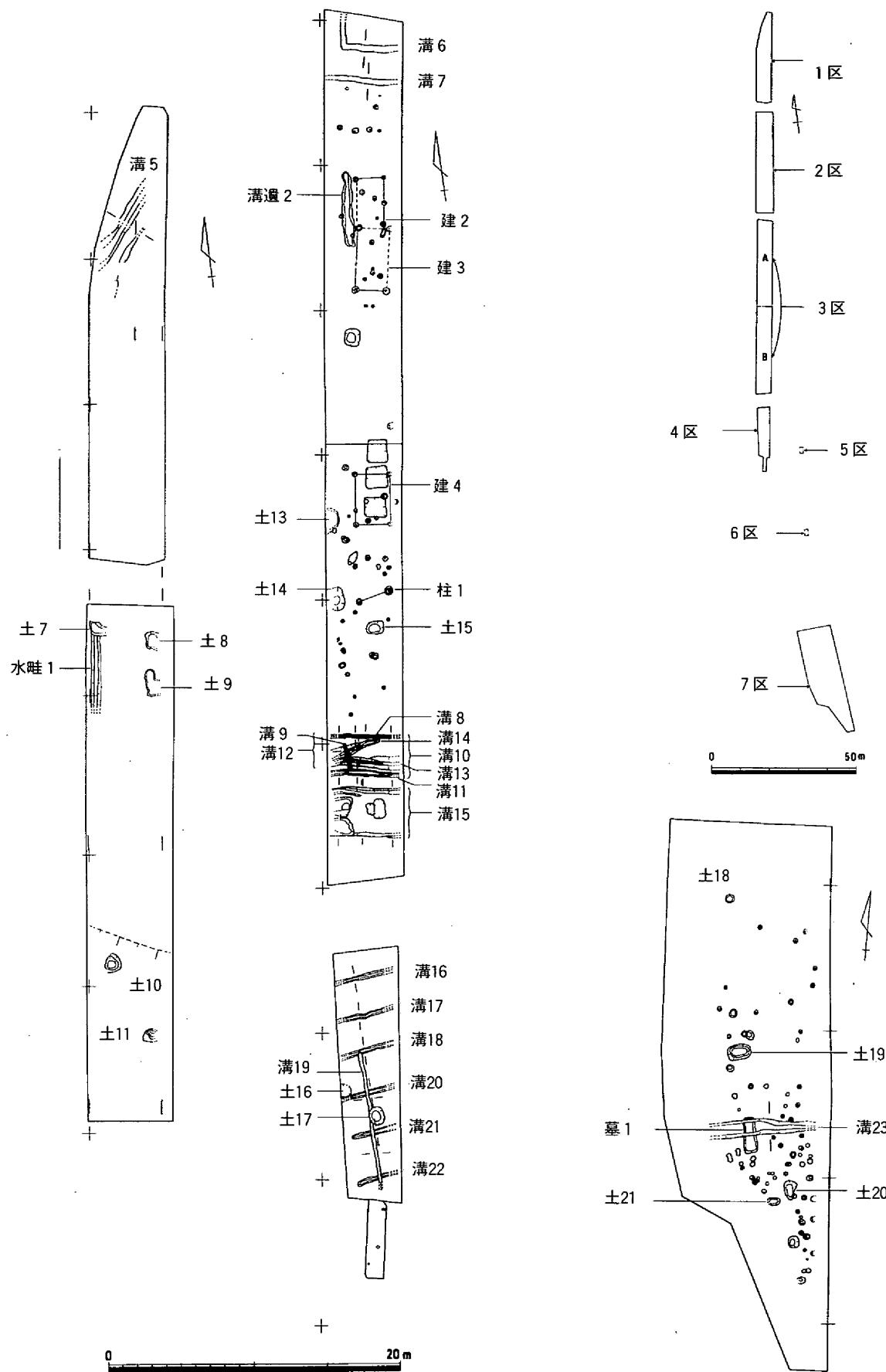
273、274は7区の溝-23南側の緩斜面において共伴しており、海拔395~405cmの位置である。2点とも破片であるが、大形の器形であり、甕273は推定口径38cmをはかる。274は器種が不明であるが推定口径25cmをはかり、内面下位の

煤の付着からカマドの可能性も考えられる。器内外面は荒いハケメの調整がなされ、口縁端部はヘラケズリが施されている。2点とも胎土中に金雲母を多く含む煮焼き具である。

(高畠)



第231図 遺構に伴わない遺物



第232図 津寺一軒屋遺跡中・近世以降全体図 (1/400)

第5節 中・近世以降の遺構・遺物

(1) 中・近世以降の概要

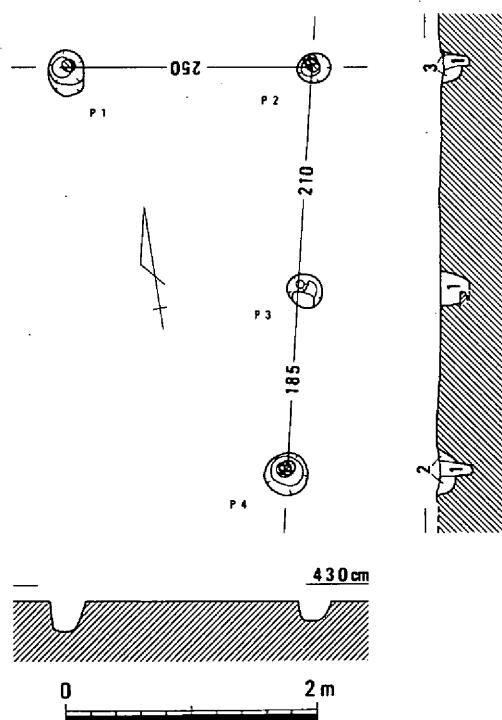
中・近世以降の遺構・遺物はほぼ全域に分布するが、3区、4区、7区以外は希薄な状況である。それぞれの時期の遺構は東西南北の方位に沿った格好で位置を決めているものが多い。

中世と考えられる遺構は1区に北東から南西に流走する溝1条、2区では水田畦畔1・土壙2基、3区では掘立柱建物3棟・柱穴列1・溝状遺構1・柱穴、4区では畝状遺構1、7区では土壙3基・土壙墓・溝1条・柱穴等が散見する。

近世以降については2区に土壙2基、3区に土壙5基以上・溝10条、4区に土壙2基とさらに遺構分布は希薄な状況である。

中世では3区B北半から3区Aと7区が居住域として機能をしているが、小規模な掘立柱建物、土壙等から集落の中心となる遺構配置とは考えがたい。居住域に挟まれた3区南側から7区の北側間は、整然と等間隔に並ぶ溝群から畠地等にあてられた生産域の可能性が強く、集落の周縁部にあたりそうである。3区Aの北端から1区までの地域についても河道—3の埋没過程にあたり、農業用水路として機能した場所と考えられる。出土遺物から全体的には12世紀後半から13世紀前半頃に利用された地域と考えられる。調査区東側には日蓮宗の宗蓮寺が位置し、寛政期の墓石もある。 (高畠)

(2) 掘立柱建物

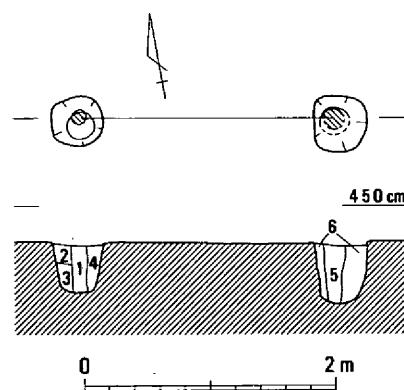


1. 淡黄灰色砂質土
2. 淡黄褐色砂質土（灰色混じり、Mnを含む）
3. 淡黄灰色砂質土（褐色混じり、Mnを含む）

第233図 掘立柱建物—2 (1/60)

掘立柱建物—2 (第233図)

端に位置するが、建物の北東隅にあたる柱穴4つを検出したのみで、建物の規模等ははっきりとしない。柱穴は、それぞれ柱痕を確認しており、そのうちの1つには根石も確認された。中世と考えられる。(速水)



1. 灰色砂 やや粘質
2. 灰色砂・粗砂（Mn含む）
3. 淡灰茶色微砂
4. 淡茶灰色土
5. 淡黄灰色砂土
6. 淡黄灰褐色砂質土

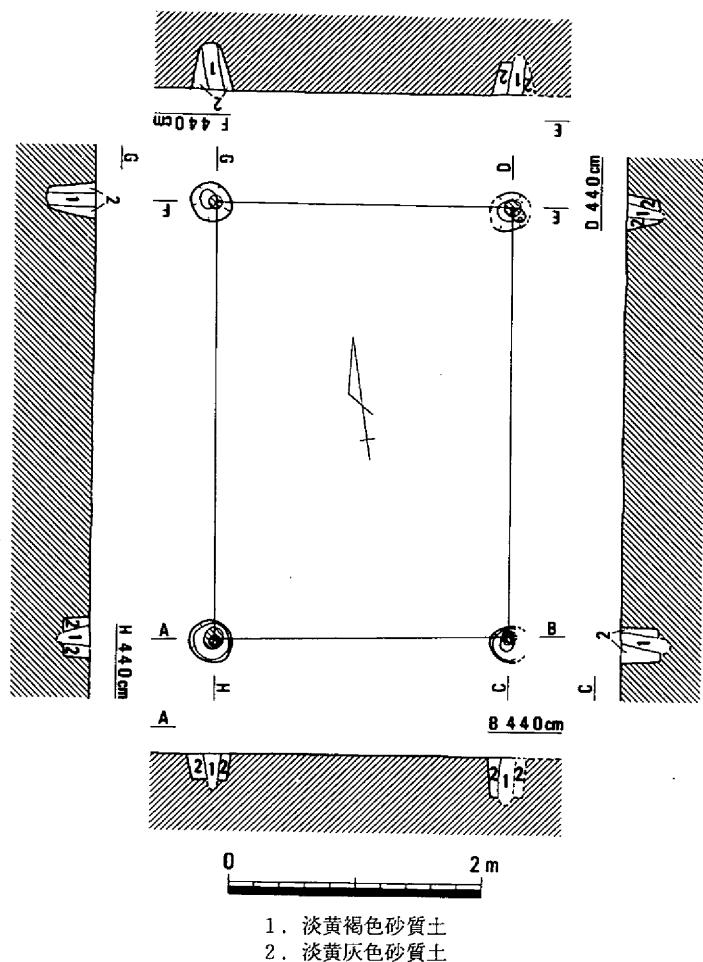
第234図 掘立柱建物—3 (1/60)

掘立柱建物－3（第233図）

3区Aの中央、掘立柱建物－2の南側に位置する。南北に長く、長軸420cm、短軸200cmをはかり、柱穴3本の確認である。短辺の柱痕間は200cm、長辺420cmをはかる。
（高畠）

掘立柱建物－4（第235図）

3区Bの北側に位置する南北棟の掘立柱建物である。桁行340～350cm、梁間230cmをはかり、4本とも直径約10cmの柱痕が認められる。中世の可能性が考えられるものである。
（高畠）



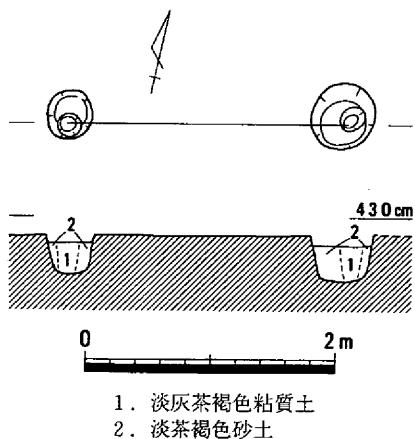
第235図 掘立柱建物－4 (1/60)

り、これらに関連する遺構とも考えられる。柱間は226cmをはかり、西側柱穴が直径35cm、深さ36cm、東側柱穴が直径54cm、深さ45cmをはかる。柱痕跡は明確には認められず、埋土は淡灰茶色粘質土の1層であるが、埋土周囲に淡茶褐色砂土が廻る。周辺にみられる柱穴埋土より暗い土色である。（高畠）

(3) 柱穴列

柱穴列－1（第236図）

3区Bの中央、土壌－15の1.5m北側に位置する2柱穴である。掘立柱建物－2～4の南北の主軸方位と異なり西側に偏る。4区にみられる溝－10～22等とほぼ同一方向をと



第236図 柱穴列－1 (1/60)

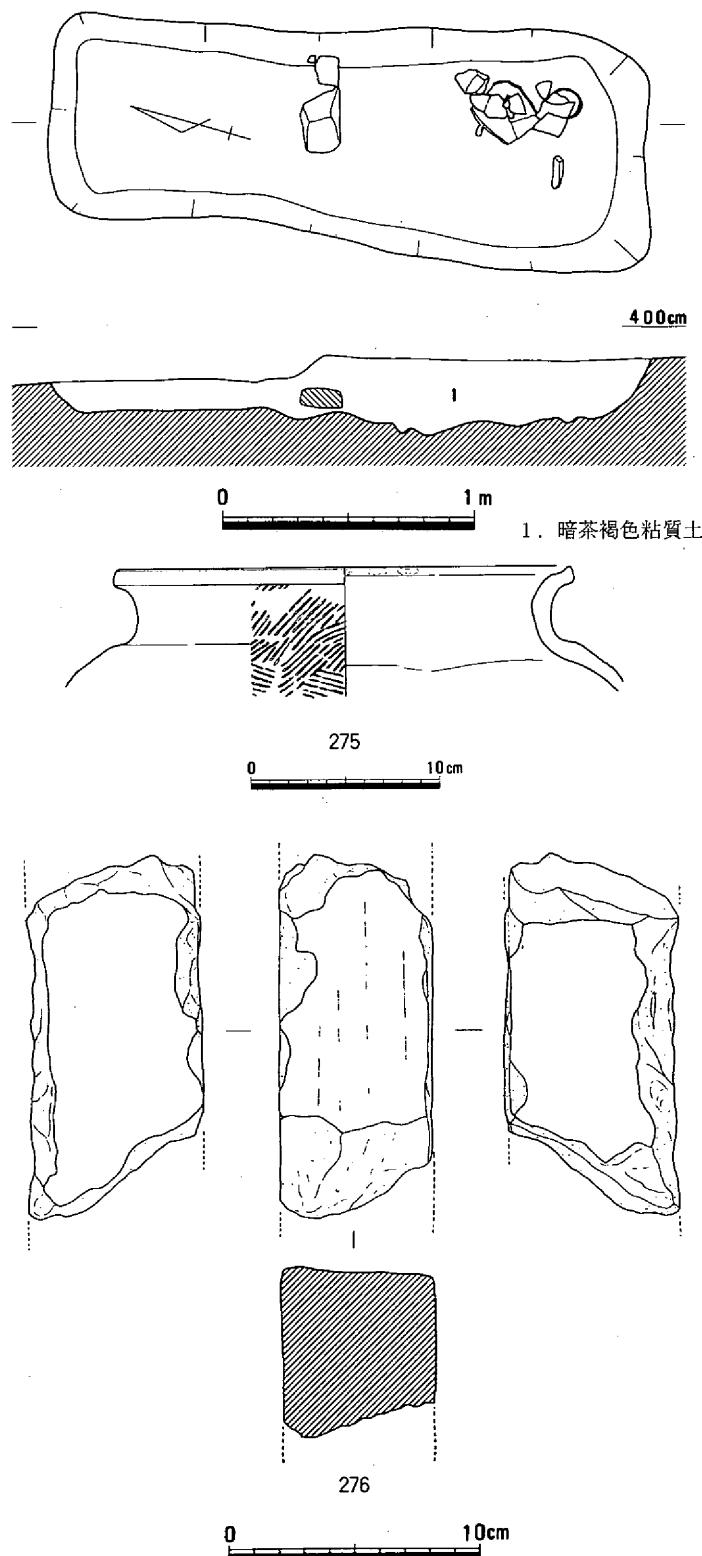
土壌墓－1（第237図）

7区中央よりやや南に位置する。溝－23の真下にあたる。当初は一般的な土壌を想定していたが、調査を進めていくうちに北側へも細長く伸びることがわかった。平面形は、長軸長238cm、短軸長75cmをはかる長方形を呈し、深さは約30cmである。底面は、南部が浅く平坦で海拔高約367cmをはかる。北部は深くなり海拔高約357cmをはかる。埋土は1層で厚さは11～30cmである。土壌墓内のほぼ中央東寄りに石が検出されている。石の墓内での役割ははっきりとしない。275は瓦器の甕と考えられ、276

は壺の破片で、切断面に工具痕か圧痕のようなものが見られ、火を受けた煤のようなものが見られる。骨・木棺及び副葬品らしきものは見つかっていないが、遺構の形態などから中世の土壙墓と考えられる。

(速水)

(5) 土壙



第237図 土壙墓-1 (1/30)・出土遺物

土壙-7 (第238図)

2区の北西隅に位置し、後述する土壙-8, 9, 11と同様、近世以降の堆積と考えられる灰褐色粘質微砂層を除去して検出した土壙である。

出土遺物には青磁碗片277のほか、少量の土器片がある。土壙の時期は中～近世と考えられる。(高田)

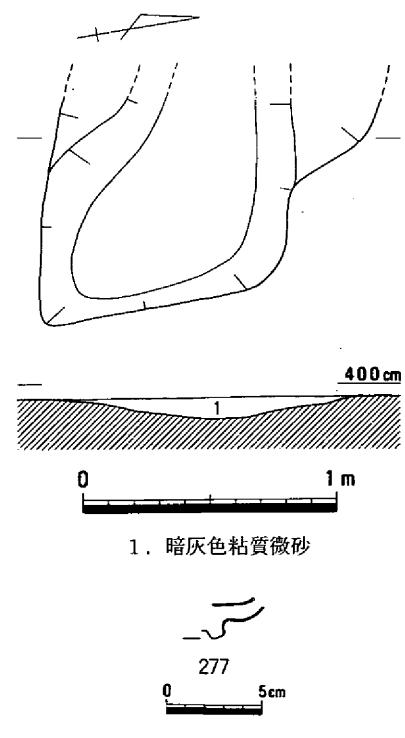
土壙-8 (第239図)

2区の北東隅に位置し、平面形は不整楕円形、ほぼ平坦な底面となる。

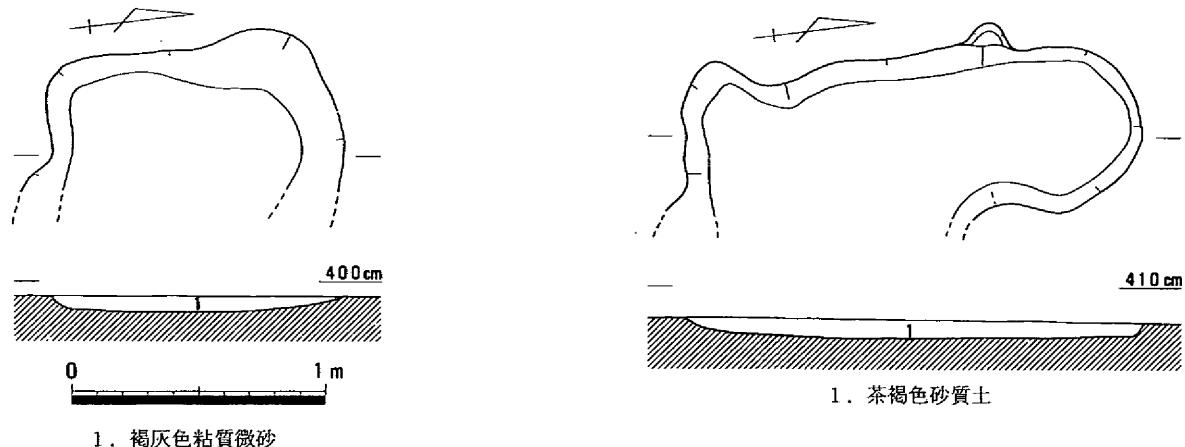
出土遺物には、少量の土師質土器片がある。土壙の時期は中～近世と考えられる。(高田)

土壙-9 (第240図)

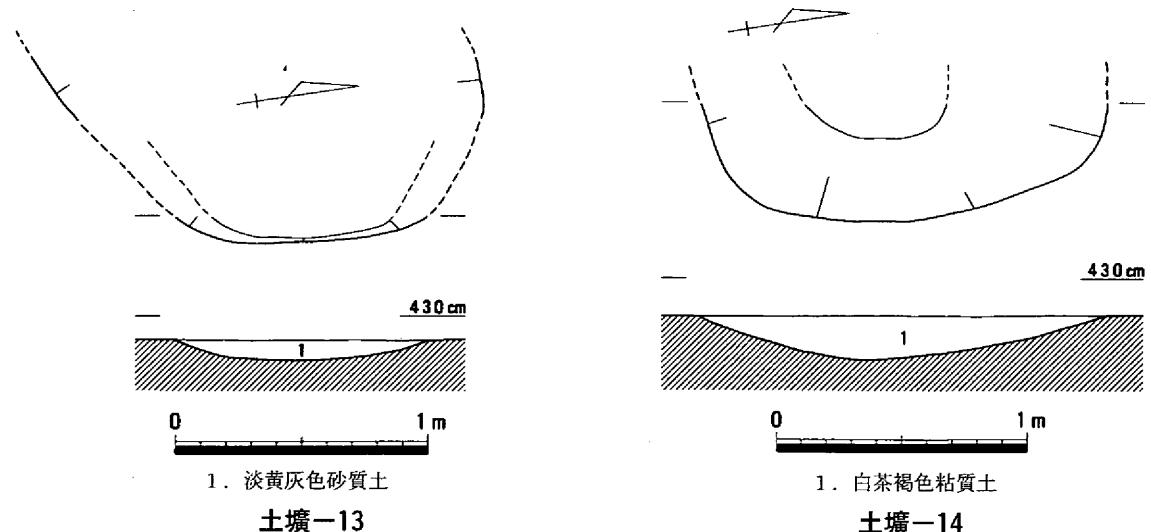
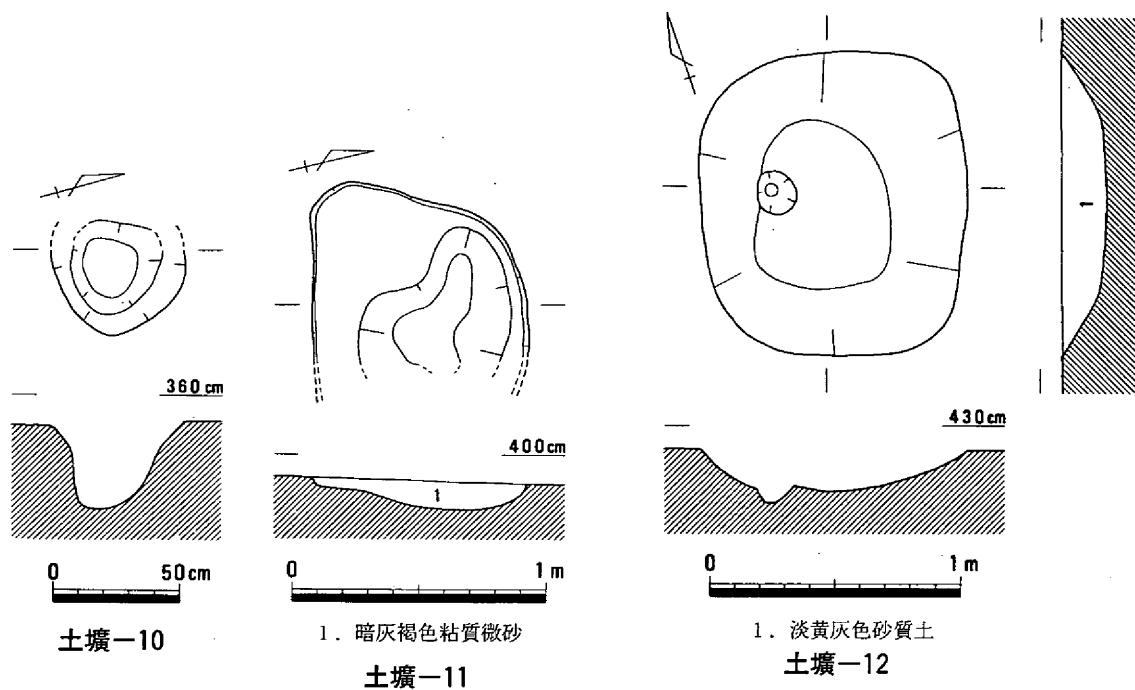
土壙-8の南側に位置し、平面形



第238図 土壙-7 (1/30)・出土遺物



第239図 土壌-8 (1/30)



第240図 土壌-9~14 (1/30)

は不整橢円形を呈すると考えられ、ほぼ平坦な底面をもつ。時期は中～近世と考えられる。(高田)

土壙-10 (第240図)

2区の中央やや南寄りの中世洪水砂除去後に検出した。埋土は青灰色微砂。時期は中世か。(高田)

土壙-11 (第240図)

2区の東南隅に位置し、不整方形の平面形を呈し、底面は二段に落ち込む。出土遺物は、瓦と土師質土器の小片のみで、時期を決するのは困難だが、主に検出層位から中～近世と考えたい。(高田)

土壙-12 (第240図)

3区Aの南側に位置する。平面形は隅丸長方形状を呈し、底面にピット状のものが一部見られる。断面形は、皿形を呈し、1層からなる。時期は、近世以降と考えられる。(速水)

土壙-13 (第240図)

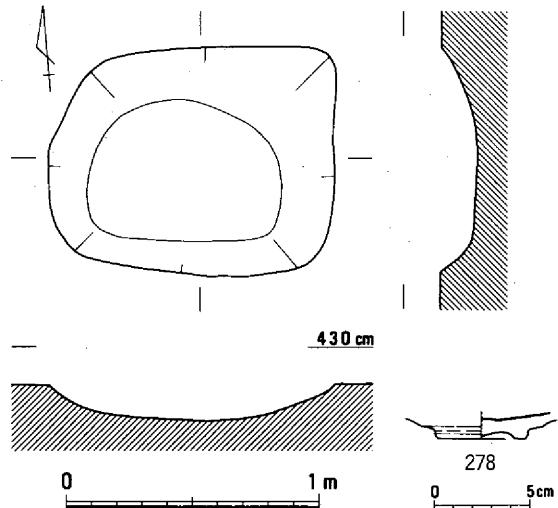
3区Bの北西隅で建物-4の西に位置する。調査区による制約のため、平面形及び規模ははっきりしない。断面形は皿形を呈し、1層からなる。近世以降のものと考えられる。(速水)

土壙-14 (第240図)

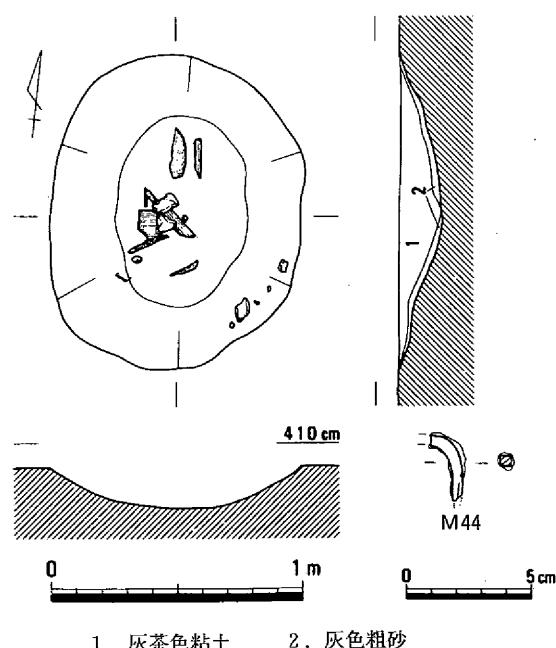
3区B中央の西端に位置する。平面形は橢円形を呈すると考えられるが、調査区による制約のためはっきりとしない。断面形は皿形を呈し、1層からなる。近世以降のものと考えられる。(速水)

土壙-15 (第241図)

3区B中央部に位置する。平面形は不整隅丸長方形状を呈する。断面形は皿形を呈する。規模は、長軸方向に114cm、短軸方向に91cmをはかる。深さは約14cm、底面海拔高は約400cmである。出土遺物は、278が肥前系の灰釉陶器の高台部である。これより、近世以降の時期と考えられる。(速水)



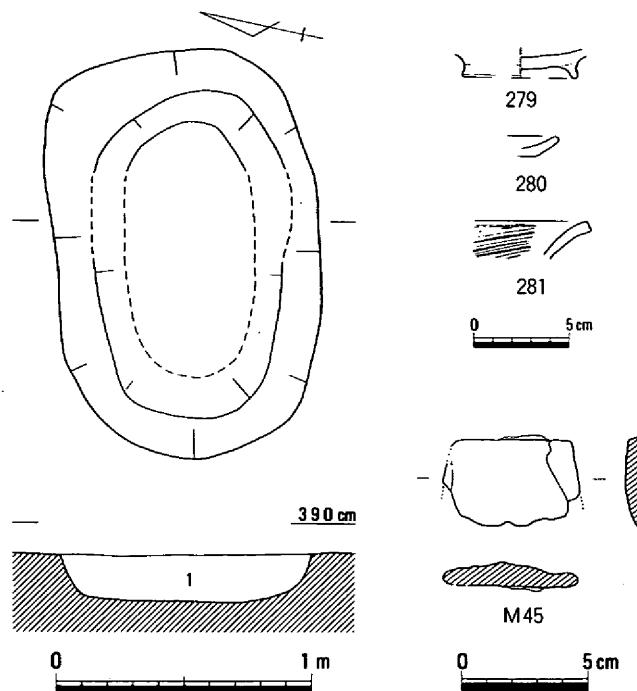
第241図 土壙-15 (1/30)・出土遺物



第242図 土壙-17 (1/30)・出土遺物

土壙-17 (第242図)

4区Aの中央やや南よりに位置し、溝-19を切っている。平面形は卵形である。断面形は皿形で、2層に分かれる。土壙内から多くの炭が出土している。出土遺物では、M45は釘の破片と考えられるものである。検出層位などから、中世以降のものと考えられる。(速水)



1. 暗茶褐色粘質微砂

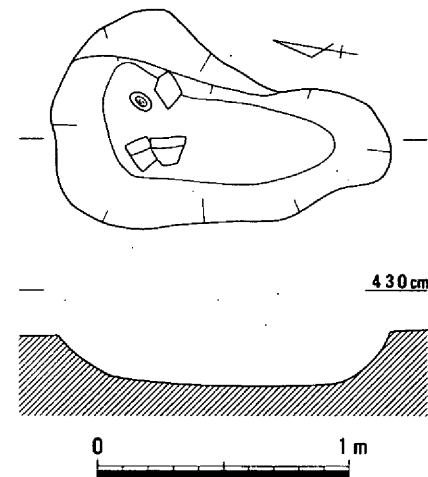
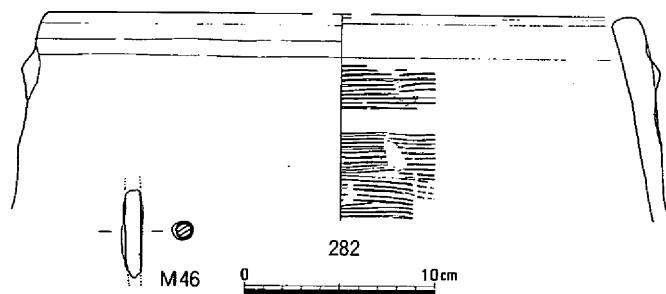
第243図 土壌-19 (1/30)・出土遺物

土壌-19 (第243図)

7区中央に位置する。平面形は不整な橢円形を呈する。長軸方向は160cm、短軸方向は100cm、深さは約20cmである。底面海抜高は、約360cmである。断面形は、皿状を呈し、1層からなる。出土遺物は、279は早島式土器の高台付き碗、280が土師器の皿、281が甕と考えられる。中世の時期と考えられる。(速水)

土壌-20 (第244図)

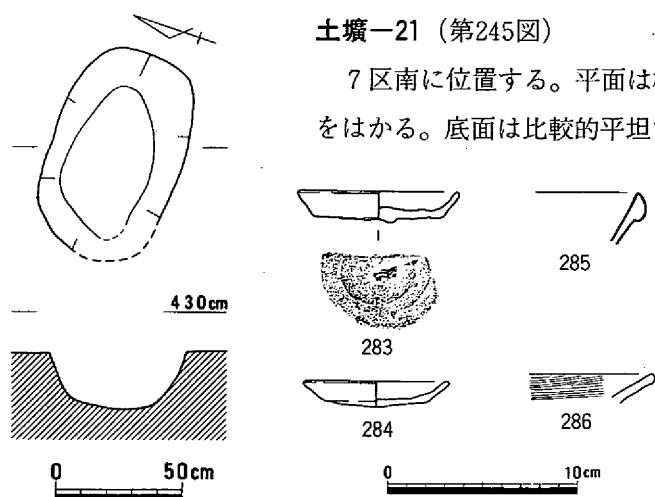
7区南に所在。平面は不整な橢円形を呈し、長径119cm、短径88cm、深さ20cmをはかる。底面は比較的平坦である。282はカマドである。中世と考えられる。(速水)



第244図 土壌-20 (1/30)・出土遺物

土壌-21 (第245図)

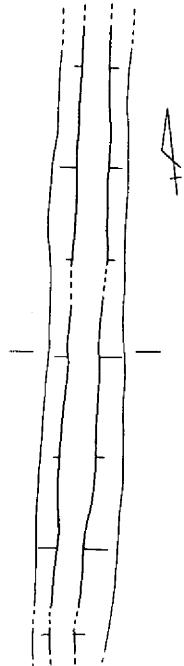
7区南に位置する。平面は橢円形を呈し、長径84cm、短径54cm、深さ22cmをはかる。底面は比較的平坦である。断面形は皿形を呈する。284、285は土師器の皿であり、両方とも横ナデ調整が丁寧に施されている。284の底にはヘラ切り痕が残っていた。285は、早島式に近いものである。286は表面に灰白色の釉薬が塗ってあり、白磁の碗と考えられる。287は土鍋と思われる。土師器の形態及び検出層・レベルその他の状況から、13~14世紀の時期と考えられる。(速水)



第245図 土壌-21 (1/30)・出土遺物

(6) 水田

水田畦畔-1 (第246図)

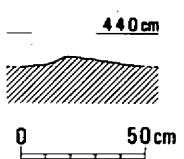


2区の北西隅で検出した南北に延びる畦畔状の高まりである。洪水砂と考えられる青灰色微砂層を除去し、灰茶褐色粘質微砂面上で確認したもので、両端は不明瞭であるが、検出した規模は長さ250cm、幅35cm、高さ5cmを測る。水田層と考えられるこの灰茶褐色粘質微砂層は、1区の南半から2区全体に広がる層(第230図第16層)で、上面の海拔高は2区の北端で350cm、南端374cmを測り、厚さは11~35cmとやや安定しない。

水田層からの出土遺物はないが、被覆する洪水砂層から亀山焼や土師質土器片等が出土している。層下に位置する河道-4の存在と合わせ、水田の時期は中世と考えられる。(高田)

(7) 溝

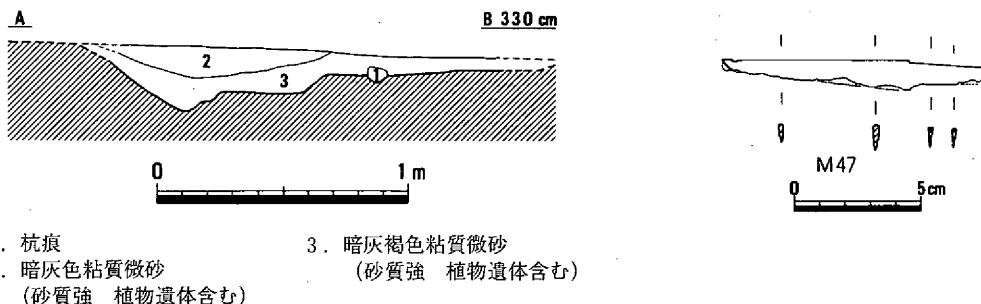
溝-5 (第247図)



1区の北隅に位置し、先述した古代の河道-3の右岸に平行する溝である。検出した規模は、長さ390cm、幅170cm、深さ15cmを測る。その断面形は、北側が急斜に落ち込むのに対し、南側は数段に落ち込む形状を呈す。

出土遺物には、図示した刀子M47のほか、備前焼、土師質土器、瓦質土器片がある。時期は中世と考えられる。(高田)

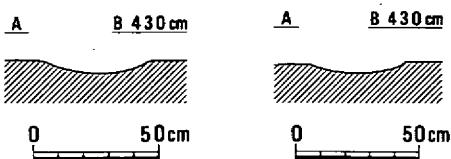
第246図 水田畦畔-1 (1/30)



- 1. 杖痕
- 2. 暗灰色粘質微砂
(砂質強 植物遺体含む)
- 3. 暗灰褐色粘質微砂
(砂質強 植物遺体含む)

第247図 溝-5 (1/30)・出土遺物

溝-6 (第248図)



3区Aの北端を、北から東へ直角に曲がって流れる。幅は36~44cm、深さは約3~5cmである。検出層位より、近世と考えられる。(速水)

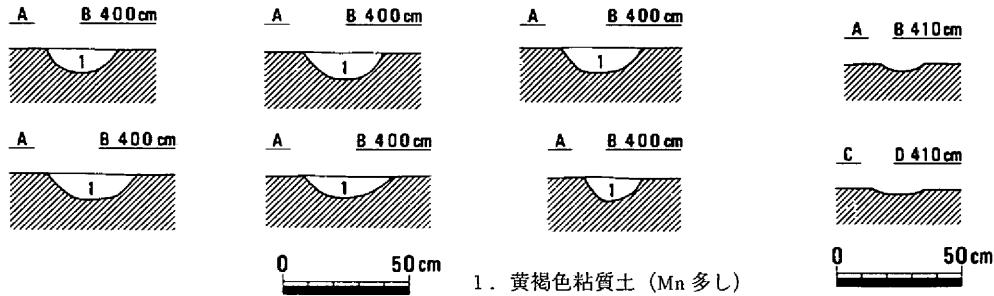
溝-7 (第248図)

3区Aの北部を、溝-6の東西方向とほぼ平行するように流れる。幅は28cm~44cm、深さは約3

第248図 溝-6, 7 (1/30)

～4cm、底面海拔高は約412cmである。断面形は皿状を呈する。溝-6と同じような幅、深さ及び形状であり、両者はなんらかの関係があると思われるが、はっきりとしたことはわからない。出土遺物がなく、時期の判定は難しいが、溝-6との関係及び検出層位のレベルなどから近世以降の時期と考えられる。

(速水)



第249図 溝-16～22 (1/30)

第250図 溝-19 (1/30)

溝-16～22 (第249図)

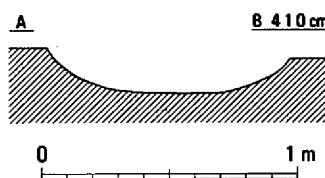
4区A内を、6条の溝がほぼ等間隔に平行するように流れる。どの溝もほぼ同じような規模及び形状であり、同じような性格を持つ一連の遺構と考えられる。幅は約12～16cm、深さは約10cm、底面海拔高は、約380cmである。断面形は皿状を呈し、1層からなる。埋土にはマンガンが多く含まれていた。検出層位等より、中世以降の時期と考えられる。

(速水)

溝-19 (第250図)

4区Aの中央付近から南端へ細長く流れる。幅は6～10cm、深さは約2～3cm、底面海拔高は約395cmである。時期は中世以降と考えられるが、遺構の切り合いから、溝-16～22よりは新しく、土壙-17よりは古い時期と思われる。

(速水)



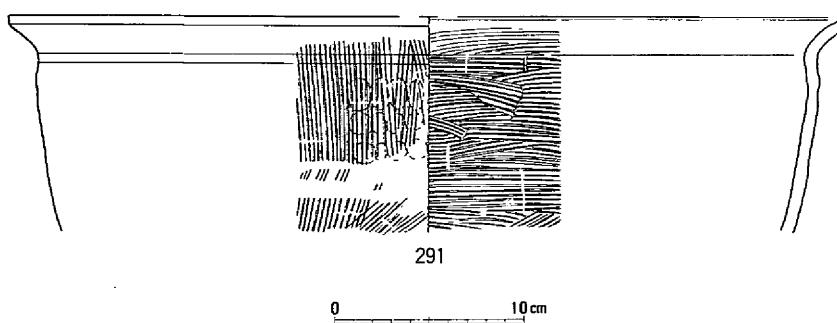
溝-23 (第251図)

7区中央よりやや南に位置し、東西を流路とする。幅約62～118cm、深さ約17cmで、断面形は皿形を呈する。溝自体の性格ははっきりし

ない。遺物は土師器が中心となる。287は皿で、横ナデ調整がある。289は「皿」、「小型鉢」「脚台」と呼ばれているものと思われ、底がヘラ切である。

288は椀で、早島式土器と考えられる。底はヘラ切りの後、ナデ消しがおこなわれている。291は、土鍋である。290は瓦器の甕である。13世紀前半の時期と考えられる。

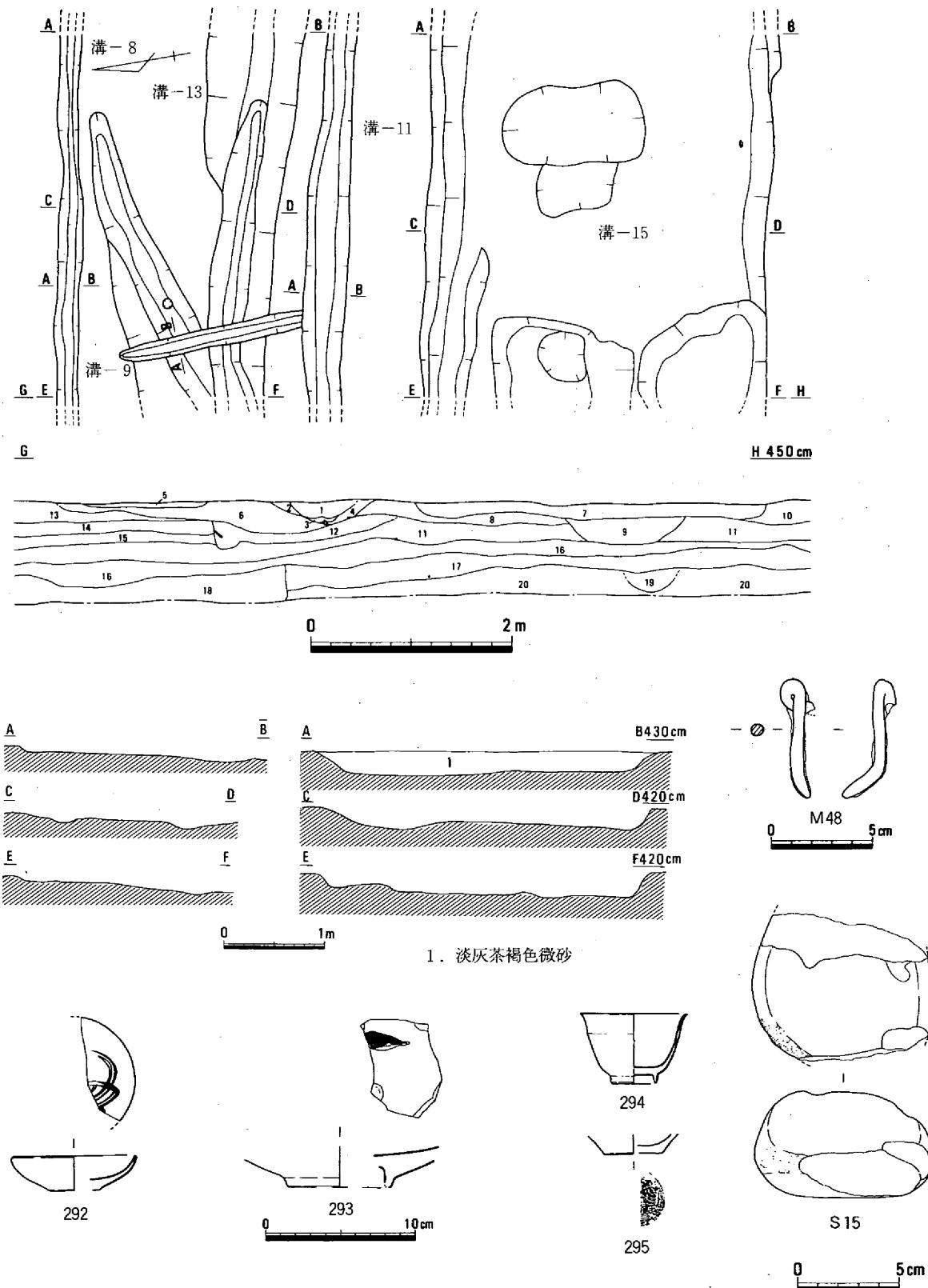
(速水)



第251図 溝-23 (1/30)・出土遺物

溝8～15（第252図）

3区・Bの南部を東西方向流れる。一連の遺構と思われる。出土遺物は、292～295が肥前系陶磁器である。292が染付けの小皿、293が染付けの高台部、294が肥前系の白磁、295が唐津である。M48の鉄器の種類は不明である。S14は敲石か磨石である。近世以降の時期と考えられる。（速水）



第252図 溝一8～15(1/60)・出土遺物

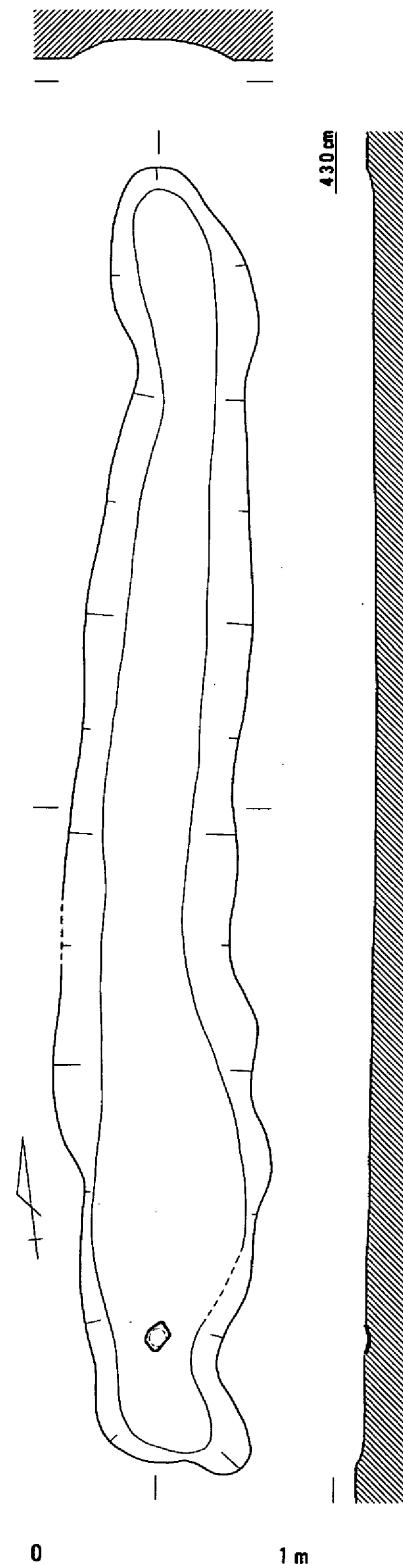
(8) 溝状遺構

溝状遺構—2（第253図）

3区A中央やや西よりに位置する。南北に細長い溝状を呈する。長軸方向は約510cm、幅は約50～80cm、深さは約7cmである。底面海拔高は約315cmである。遺構の性格自体は不明である。検出層位

などから近世の時期と考えられる。

（速水）

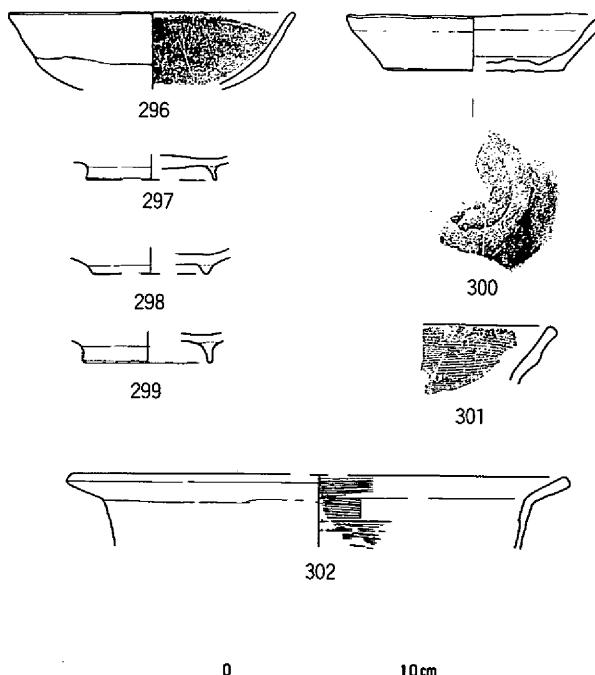


第253図 溝状遺構—2 (1/30)

(9) 柱穴

柱穴は1区、2区、4区にはほとんどみられず、3区A中央と3区B北半、そして7区に比較的まとまっている。3区では水田耕作土、床土を除去した面、海拔418cm前後で検出できるものがほとんどである。建物、柱穴列としてまとまらない柱穴総数は約70穴を数える。柱穴埋土は淡い黄灰色砂質土の入ったものが大半を占め、若干淡い灰茶褐色粘質土の埋土が混じる。299、301が3区Bの柱穴内出土の土器である。図化の不可能な中世土器片は溝-4の北側柱穴にみられ、早島式土器、土鍋等が混入している。299は早島式土器である。296～298、290、302は7区の柱穴内出土である。296～298が早島式土器の碗であり、色調灰白色を呈する。300は口径13.4cm、底径9.6cm、器高3.1cmをはかる土師器杯であり、色調はにぶい橙色を呈する。

（高畠）



第254図 柱穴出土遺物

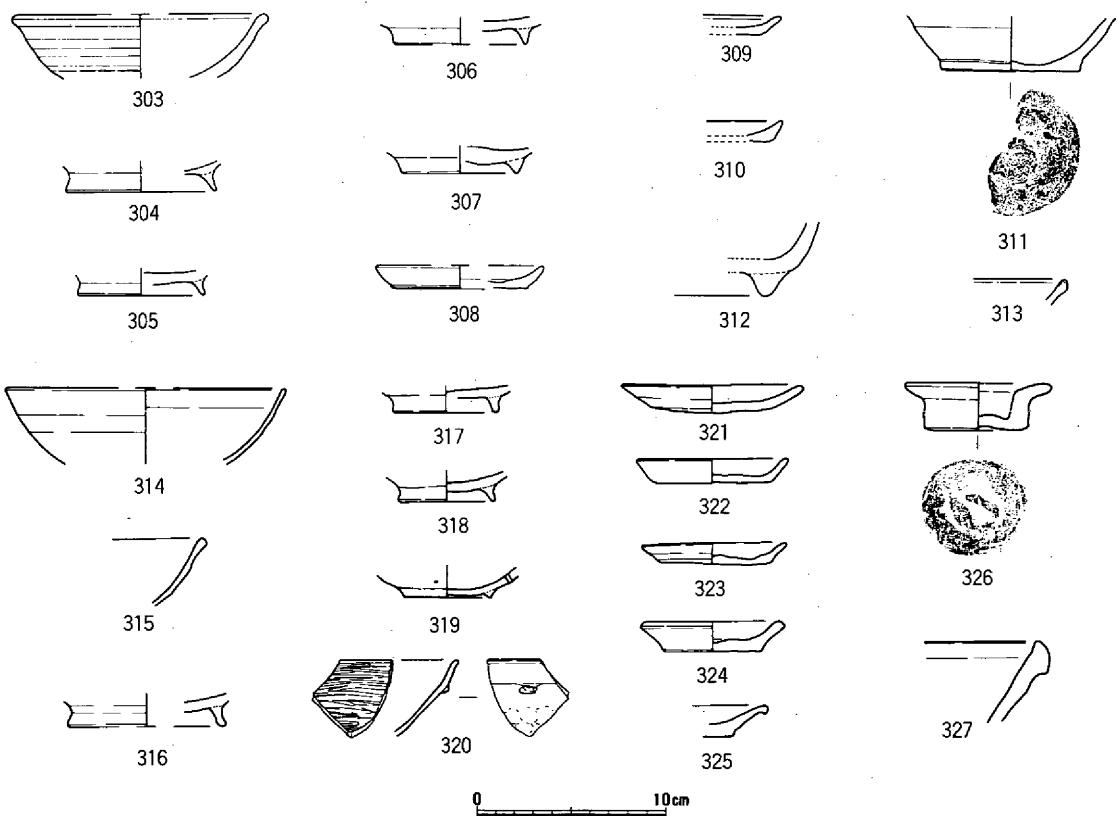
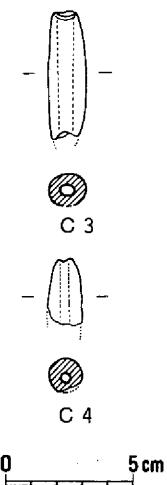
(10) 遺構に伴わない遺物

3区A・B、4区Aと南端の7区から出土した土器が主であり、他に土錐が2点みられる。

3区からは304~307、309~313、C3、4区から303・308、7区から314~327、C4が出土している。3区、7区の両調査区はともに柱穴、溝、土壙等の遺構が他の他区と比べて多くみられた場所である。

いわゆる早島式土器が多くみられ、303、305~307、314~319、323、325の土師器の碗、小皿である。すべて破片であるが、一応復元できる範囲での碗の法量を参考にのべる。碗303、314、は口径13.2cm、14.8cm、305~307の底径は6.6cm、6.9cm、6.0cm、316~319の底径は8.1cm、5.3cm、4.8cm、4.6cmをはかり、色調は灰白色を呈する。高台の造りは畳付きの部分に偏平な小さい面をもつものと、そのまま延びきる尖ったものとがある。底径の小形のものに後者の形状が多いようであり、すべて付高台である。319には焼成前の小孔が認められる。小皿323、325の2点であり、323は最大径7.66cm、口径7.5cm、底径5.9cm、器高1.3cmをはかり土器の回転は左廻りである。外面底には板目状の痕跡をとどめる。他の小皿308~310、321~322、324は総じて精製粘土が使用されており、(黄)橙色を呈するものが多い。324は胎土中に金雲母を多量に含む小皿である。321は口径9.2cm、底径5.4cm、器高1.55cm、322は口径7.7cm、底径6.15cm、器高0.8cm、324は口径7.0cm、底径5.15cm、器高1.6cmをはかる。312、320は瓦器であり、313が白磁碗、327が東播系須恵器のこね鉢である。

(高畠)



第255図 遺構に伴わない遺物

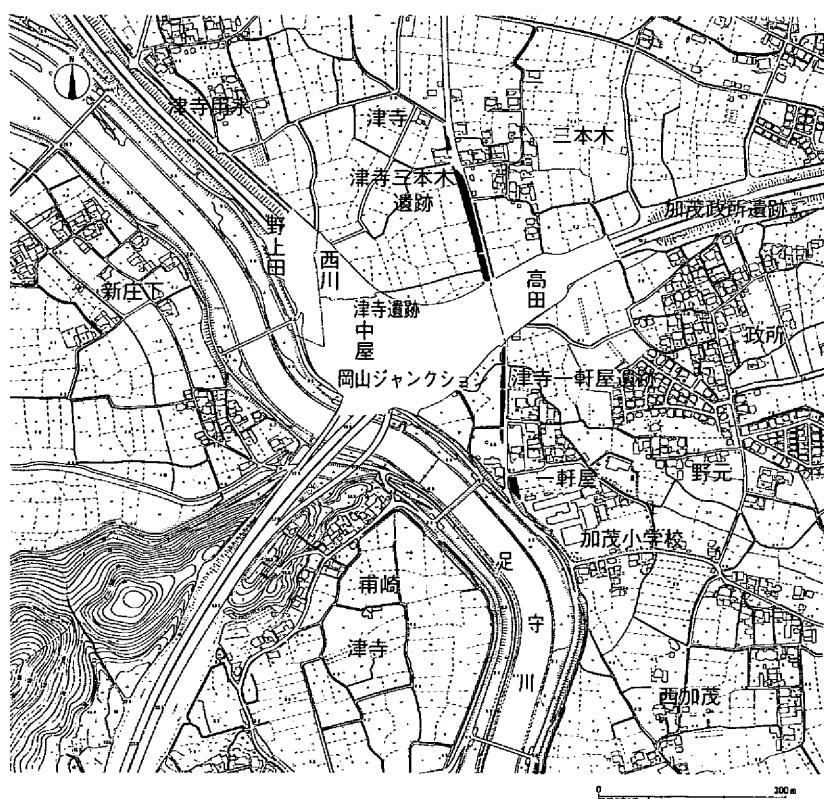
第3章 小 結

第1節 発掘調査成果の概要

本遺跡の所在する津寺微高地は、足守川の左岸に立地する微高地のなかでは大形の部類に入る規模である。

先年、山陽自動車道建設に伴い発掘調査を実施した津寺遺跡と同一微高地上を共有しており、岡山ジャンクションの北東に津寺三本木遺跡、南東に津寺一軒屋遺跡が所在する。これら3遺跡の関係がまったく変化のない平坦な微高地上に存在するかと言えば、そうではなく北から南に高さを感じる微高地の形状に即し、各所に河道や低地が介在をしている。たとえば、津寺遺跡の野上田、西川調査区の北側には北東から南西方向に大規模な河道が流走している。また、そこからの流水により軟弱な土層を浸食し南流する小形河道がみられ、中屋調査区の西側を南下して東西に分流をしている。中屋調査区の東端部に目を向けると、高田調査区境に東西幅約50mの低地が北東から南西に向かって開けており、旧足守川に向かっていたようである。津寺一軒屋遺跡の1、2区でも幅20m以上をはかる河道が北東から南西に流走し、旧足守川に注ぎ込まれていたと考えられる。これら3遺跡の調査から、大まかな微高地の規模は南北475m以上、東西400m以上を推定することができ、主軸を少し東に振った南北に長い形状である。

そして、本微高地では縄文時代後、晩期の土器片の散布が多少みられ、本格的に利用が開始されるのは弥生時代の前期後半の土壙、溝等の出現からである。次に弥生時代の中期前葉、中葉の竪穴住居



第256図 周辺地形図 (1/12,000)

が4軒、中期後葉の竪穴住居が13軒みられるが、津寺三本木・一軒屋遺跡ではこの時期までの遺構は存在していない。しかし、津寺一軒屋遺跡の河道-1では洪水等で流入した中期前葉の土器片が比較的多く出土している。弥生時代後期前葉では竪穴住居20軒、中葉では18軒と増加をしており、津寺三本木遺跡でも前葉が6軒、後葉が1軒の計7軒の竪穴住居が北側にまとまってみられる。この分布は津寺遺跡中屋調査区の集落と170～250mの距離を置くが、両者の分布が繋がる

可能性が高い。袋状土壙も後期前葉に最も多く分布するのが特徴である。津寺一軒屋遺跡では遺構は存在しないが、河道-1内より後期前葉、中葉の土器が比較的多くみられる。弥生時代後期後葉は微高地に遺構はほとんどみられず、津寺遺跡中屋調査区に竪穴住居が1軒のみであり、楯築弥生墳丘墓の所在する近くに集中をしている感を受ける。弥生時代後期末葉では14軒の竪穴住居がみられるが、津寺三本木遺跡は遺物がわずかに出土しているのみである。津寺一軒屋遺跡では土壙、鍛冶炉、土器溜り等の遺構が出土をしている。特に鍛冶炉については県内初見であり、広範囲な焼土面に被熱の著しい部分が3ヶ所認められるが、凹地形状は呈さないものである。周辺より加工鉄片、鍛造剥片の他に少量の花崗岩粒、炭粒、小土器片等と金床石がみられるが、粒状滓および鉄滓は出土をしていない。鉄板(M4)等を裁断し、熱を加えて鉄器の製作を行った場所と考えられる。

津寺遺跡の古墳時代前期は竪穴住居が252軒と非常に多く確認されており、古・前・Iの古、中、新相、古・前・Iの新相と古・前・Iの古相間、古・前・Iの古、新相の6期がみられる。長期間にわたる居住地域であり、時期を把握できる住居軒数は各期約30軒前後である。そのうち古・前・IIの新しい様相をもつものが数軒と少ない傾向がみられ、洪水等による古・前・IIの新相以後の集落の廃絶が認められる。津寺三本木遺跡でも5軒の竪穴住居が出土しており、古・前・Iの時期が大半である。この地区も津寺遺跡の野上田、西川、中屋調査区の集落と180~255mの距離を置くが、おそらく同一の範囲内に入る拠点的な集落の可能性が強く、弥生時代後期前葉、中葉の集落分布と重複するようである。津寺一軒屋遺跡で遺構の確認はされていないが、遺物では古・前・Iの新相の土器が目につく程度である。他に気づく点は、津寺三本木遺跡の北西から南東の同一方向に流走する溝-4, 7, 14, 16, 27~29の溝群であり、微高地の東側を南流するものである。津寺遺跡にみられる溝-3, 4, 5, 16は微高地の西側を南流する溝群であり、両方の溝に挟まれた地域内に竪穴住居の大半が納まっている。これらの溝は、微高地北側を北東から南西に流走する大形河道から取水を行い、微高地の東西に振り分けられた形状を呈しており、同時に存在をしていたようである。下流域の畑地、水田への送水等の農業用水路、また洪水等から集落を守る水利施設として存在した可能性が強い溝の配置である。

古墳時代中期では5世紀代から6世紀初頭の竪穴住居33軒が中屋調査区に分布し、再び前期以来の集落形態をとりつつある。津寺三本木・一軒屋遺跡でも、1~3軒の竪穴住居がみられ、すぐ南側に位置する加茂小学校地内でも同時期の竪穴住居の存在が確認されている。しかし、6世紀前半へとは

継続がみられず、6世紀後半に入って数軒の竪穴住居が散見できるのみである。そのなかに住居内中央に鍛冶炉をもつ竪穴住居-333が中屋調査区に1軒認められ、高田調査区の6世紀末から7世紀初頭の鉄製品・鉄滓等を持つ竪穴住居群の先駆的な役割を果たした住居の可能性が考えられる。

表-4 津寺三本木・一軒屋遺跡関連遺構・遺物消長表

遺跡	時代	縄文	弥 生	古 墳	古 代	中 世	近 世
津寺	遺跡		-	-	-	-	-
	遺物		-	-	-	-	-
津寺一軒屋	遺跡		-	-	-	-	-
	遺物		-	-	-	-	-
津寺 (野上田)	遺跡		-	-	-	-	-
	遺物		-	-	-	-	-
津寺(西川)	遺跡		-	-	-	-	-
	遺物		-	-	-	-	-
津寺(中屋)	遺跡		-	-	-	-	-
	遺物		-	-	-	-	-
津寺(高田)	遺跡		-	-	-	-	-
	遺物		-	-	-	-	-

第3章 小 結

6世紀末から7世紀初頭にかけての竪穴住居は中屋調査区に11軒、高田調査区に109軒、とくに高田調査区に集中をしており、小溝により住居単位が区画をされている。鉄製品、鉄滓の出土、鍛冶炉、製炭焼成土壙等の存在から鍛冶に関連する集団の集落と考えられている。7世紀中葉の遺構は微高地全体でも希であり、津寺三本木遺跡の土器溜り－1が近い時期のものであろう。7世紀末から8世紀前葉にかけての遺物は野上田調査区・津寺一軒屋遺跡の河道、包含層中に散見できるが、高田調査区の胞衣壺土壙・津寺一軒屋遺跡の土壙以外には明瞭な遺構の確認は把握できていない。8世紀中葉では津寺遺跡中屋調査区に官衙遺構と推定される、南北123.80m、東西94.00mをはかる長方形区画溝が確認されており、その内側には掘立柱建物14棟が整然と配置されている。ほぼ同時期と考えられる掘立建物は中屋調査区の東端、高田調査区にもみられるが、高田調査区の掘立柱建物に長方形区画溝内のものより若干新しいものがみられる。津寺三本木遺跡では長方形区画溝内に掘り込まれた繭溝(土壙)と同じ遺構が確認されている。長方形区画溝から北東約240mに位置し、主軸方位は西偏している。

この地域にさらに別の区画溝を形成するのか、あるいは中屋、高田調査区境にみられる道路の側溝と接続するものは不明であるが、長方形区画溝と関連を有して存在した遺構である。9世紀後半から10世紀前半の遺構もあまり多くなく、高田調査区の掘立柱建物、土壙等である。遺物は野上田調査区の河道内、高田調査区の包含層中にみられる。津寺三本木調査区ではまとまって数点出土した程度であり、中心分布は北方の丸田調査区周辺と考えられる。

中世段階では堆積により大部分の低地、河道が平坦形状を呈してきており、土壙墓等の遺構が作られ始めている。それは12世紀後半頃からであり、野上田、中屋にその傾向がみられる。13世紀中葉頃には集落の形態をとる掘立柱建物、土壙、井戸等があらわれ、およそ14世紀の中葉頃まで存在している。津寺三本木遺跡では14世紀前半の溝がみられ、中屋、西川調査区の溝に接続しそうである。水田、畠地、集落内外の用排水を目的とした溝は12世紀後半頃には計画整備が実施された可能性がうかがえる。

近世では16世紀末から19世紀中葉頃までの遺構・遺物があり、全域におよぶ広範囲の土地利用が行なわれている。遺構では掘立柱建物、井戸、溝、土壙、墓等があり、東西、南北の計画線に添った遺構配置となり、墓地は一ヶ所にまとめられている。西川、高田、中屋の集落が順次営まれており、最終段階では西川から中屋に向う灌漑用水路1条が流走し、集落は津寺三本木遺跡の東側、墓地等は津寺一軒屋遺跡の東側に中心を移しているようである。

(高畠)

参考文献

1. 浅倉秀昭ほか「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90』岡山県教育委員会 1994年
2. 大橋雅也ほか「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会 1995年
3. 亀山行雄ほか「津寺遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104』岡山県教育委員会 1996年
4. 亀山行雄ほか「津寺遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116』岡山県教育委員会 1997年
5. 高畠知功ほか「津寺遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127』岡山県教育委員会 1998年

津寺三本木遺跡遺構名稱對照表

報告名稱	調査区	調査名跡	調査担当者	報告名稱	調査区	調査名跡	調査担当者	報告名稱	調査区	調査名跡	調査担当者
聚穴住居-1	1区	聚穴住居1	氏平	土壤-61	4区	鄭秋遺構①	氏平	溝-58	4区	牌16	氏平
聚穴住居-2	4区	聚穴住居2	氏平	土壤-62	5区・A	No73土壤	高畑	溝-59	2区	No9溝	高畑
聚穴住居-3	4区	聚穴住居3	氏平	土壤-63	5区・B	No104土壤	高畑	溝-60	2区	No1、6~10溝	高畑
聚穴住居-4	3区	聚穴住居4	氏平	土壤-64	5区・B	No78土壤	高畑	溝-61	2区	No12溝	高畑
聚穴住居-5	2区	No50聚穴住居	高畑	土壤-65	5区・B	No65土壤	高畑	溝-62	3区	牌7	氏平
聚穴住居-6	3区	聚穴住居6	氏平	土壤-66	5区・B	No101土壤	高畑	溝-63	3区	No14溝	高畑
聚穴住居-7	2区	No40聚穴住居	高畑	土壤-67	5区・B	No102土壤	高畑	溝-64	3区	No18溝	高畑
聚穴住居-8	3区	聚穴住居8	氏平	土壤-68	5区・B	No66溝	高畑	溝-65	3区	No15溝群	高畑
聚穴住居-9	5区・A	No93聚穴住居	高畑	土壤-69	5区・B	No67溝	高畑	溝-66	3区	No23溝	高畑
聚穴住居-10	2区	No19聚穴住居	高畑	土壤-70	6区	No118溝状遺構	高畑	溝-67	5区・A	No75溝	高畑
聚穴住居-11	3区	聚穴住居11	氏平	土壤-71	2区	No2土壤	高畑	溝-68	5区・B	No76溝	高畑
	2区	No20聚穴住居	高畑	土壤-72	2区	No3土壤	高畑	溝-69	6区	No112溝	高畑
聚穴住居-12	3区	聚穴住居12	氏平	土壤-73	2区・3区	No4土壤	高畑	溝-70	6区	No110溝	高畑
聚穴住居-13	3区	No29聚穴住居	高畑	土壤-74	3区	No5土壤	高畑	溝-71	6区	No111溝	高畑
聚穴住居-14	4区・A	No65聚穴住居	高畑	土壤-75	4区・C	遺構番号なし	高畑	溝-72	6区	No114溝	高畑
聚穴住居-15	4区・B	No63聚穴住居	高畑	鐵冶炉-1	4区・C	No71鐵冶炉	高畑	溝-73	5区・A	西川	高畑
聚穴住居-16	4区・B	No64聚穴住居	高畑	鐵冶炉-2	6区	No113鐵冶炉	高畑	溝状遺構-1	4区・B	No53溝状遺構	高畑
聚穴住居-17	4区拡張区	住居跡	山形	鐵冶炉-3	1区	No66土器留まり	高畑	溝状遺構-2	6区	No116溝状遺構	高畑
聚穴住居-18	7区	No131聚穴住居	高畑	砂利道-1	5区・B	No92砂利道	高畑	溝状遺構-3	3区	No16溝	高畑
堆積-1	5区・B	No91堆積	高畑	砂-1	1区・4区	溝8	氏平	四地-1	5区・A・B	No77四地	高畑
柱穴列-1	2区	No34柱穴列	高畑	溝-2	1区・4区	溝18	氏平	四地-2	6区	No115四地	高畑
柱穴列-2	4区・C	No61柱穴列	高畑	溝-4	1区・4区	溝12	氏平				
柱穴列-3	5区・B	No60柱穴列	高畑	溝-5	3区	溝22	氏平				
袋狀土塊-1	2区	No49土壤	高畑	溝-6	3区	溝20	氏平				
袋狀土塊-2	2区	No51土壤	高畑	溝-7	3区	溝21	氏平				
袋狀土塊-3	3区	土壤1	氏平	溝-8	1区	No38溝	高畑				
袋狀土塊-4	3区	土壤4	氏平	溝-9	3区	No36溝	高畑				
袋狀土塊-5	2区	No28土壤	高畑	溝-10	3区	溝14	氏平				
袋狀土塊-6	3区	土壤10	氏平	溝-11	3区	No30溝	高畑				
袋狀土塊-7	3区	土壤22	氏平	溝-12	3区・4区・A・B・C	No60溝	高畑				
土壤-1	1区	土壤26	氏平	溝-13	2区	No27溝	高畑				
土壤-2	4区	土壤25	氏平	溝-14	3区	No28溝	高畑				
土壤-3	4区	土壤21	氏平	溝-15	3区	溝15	氏平				
土壤-4	4区	土壤20	氏平	溝-16	4区・B・C	No62溝	高畑				
土壤-5	4区	土壤19	氏平	溝-17	4区・C	No98溝	高畑				
土壤-6	3区	土壤7	氏平	溝-18	4区・C	No97溝	高畑				
土壤-7	3区	土壤8	氏平	溝-19	4区・C・5区・A	No96溝	高畑				
土壤-8	3区	土壤12	氏平	溝-20	4区・C・5区・A	No95溝	高畑				
土壤-9	3区	土壤22	氏平	溝-21	5区・B	No120溝	高畑				
土壤-10	3区	土壤9	氏平	溝-22	5区・B	No106溝	高畑				
土壤-11	3区	土壤6	氏平	溝-23	5区	S D - 9	松本				
土壤-12	3区	土壤5	氏平	溝-24	5区・B	No115溝	高畑				
土壤-13	3区	土壤13	氏平	溝-25	6区	S D - 10	松木				
土壤-14	2区	No43土壤	高畑	溝-26	6区	No127溝	高畑				
土壤-15	2区	No45土壤	高畑	溝-27	6区	S D - 11	松木				
土壤-16	2区	No41土壤	高畑	溝-28	6区	No128溝	高畑				
土壤-17	3区	土壤2	氏平	溝-29	6区・7区	No130・133溝	高畑				
土壤-18	2区	No48土壤	高畑	溝-30	4区・A	No54溝	高畑				
土壤-19	2区	No33土壤	高畑	溝-31	5区・A	No70溝	高畑				
土壤-20	2区	No65土壤	高畑	溝-32	5区・B	No94溝	高畑				
土壤-21	3区	No37土壤	高畑	溝-33	5区・B	No105溝	高畑				
土壤-22	3区	No25土壤	高畑	溝-34	7区	No124溝	高畑				
土壤-23	3区	土壤3	氏平	溝-35	3区	溝6	氏平				
土壤-24	4区・A	No58土壤	高畑	溝-36	3区	溝5	氏平				
土壤-25	3区	土壤14	氏平	溝-37	3区	溝4	氏平				
土壤-26	5区	S K - 4	松本	溝-38	3区	溝3	氏平				
土壤-27	6区	No121土壤	高畑	溝-39	3区	溝2	氏平				
土壤-28	7区	No135土壤	高畑	溝-40	3区	溝1	氏平				
土壤-29	2区	No188聚穴住居	高畑	溝-41	3区	中世撲No	氏平				
土壤-30	2区	No21土壤	高畑	溝-42	3区	中世撲No	氏平				
土壤-31	2区	No22土壤	高畑	溝-43	5区・A	No67溝	高畑				
土壤-32	2区	No42土壤	高畑	溝-44	5区	S D - 5	松木				
土壤-33	2区	No46土壤	高畑	溝-45	5区・A	No80溝	高畑				
土壤-34	2区	No67土壤	高畑	溝-46	5区・A・B	No79漆掘り溝	高畑				
土壤-35	2区	No44土壤	高畑	溝-47	5区・A	No74溝	高畑				
土壤-36	2区	No33土壤	高畑	溝-48	5区・A	No81溝	高畑				
土壤-37	2区	No32土壤	高畑	溝-49	5区	S D - 2	松木				
土壤-38	3区	No35土壤	高畑	溝-50	5区・B	No88溝	高畑				
土壤-39	3区	土壤24	氏平	溝-51	5区	S D - 6	松木				
土壤-40	3区	土壤23	氏平	溝-52	5区・A・B	No84溝	高畑				
土壤-41	4区・A	No56土壤	高畑	溝-53	5区	S D - 4	松木				
土壤-42	4区・A	No57土壤	高畑	溝-54	5区	S K - 1	松木				
土壤-43	4区・A	No59土壤	高畑	溝-55	5区	S K - 2	松木				
土壤-44	4区・C	No72土壤	高畑	溝-56	5区	S K - 3	高畑				
土壤-45	5区	S K - 3	高畑	溝-57	5区	S K - 4	松木				
土壤-46	6区	No129土壤	高畑	溝-58	5区	S D - 1	松木				
土壤-47	5区	S K - 2	松木	溝-59	5区	S D - 7	松木				
土壤-48	4区	土壤18	氏平	溝-60	6区	No122溝	高畑				
土壤-49	4区	土壤17	氏平								
土壤-50	4区	土壤16	氏平								
土壤-51	4区	土壤15	氏平								
土壤-52	3区	No17土壤	高畑								
土壤-53	4区・C	No65土壤	高畑								
土壤-54	4区・C	No11土壤	高畑								
土壤-55	4区・C	No68土壤	高畑								
土壤-56	5区・B	No106土壤	高畑								
土壤-57	5区・B	No100土壤	高畑								
土壤-58	5区・B	No69土壤	高畑								
土壤-59	7区	No132土壤	高畑								
土壤-60	4区	漏状遺構②	氏平								

付載 自然科学分野における分析・鑑定

付載1 津寺三本木・津寺一軒屋遺跡出土鉄滓の金属学的調査

大澤正己

概要

弥生時代後期に属する津寺一軒屋遺跡7区鍛冶炉-1出土遺物（鉄製品破片、鉄片、小鉄片、鍛造剥片=スケール）を調査して、次の点が明らかになった。

鉄製品と鉄片15点のうち、12点が、中国漢代（BC 1世紀頃）に開発された炒鋼製品に分類された。炒鋼材は銑鉄を加熱溶融し、空気中で攪拌脱炭した製鋼法にもとづく産物である。該品は銑鉄の中の炭素を酸化させ、炭素の含有量を徐々に低くし、鉄中の硅素（Si）、マンガン（Mn）が酸化した後に鍛打し、夾雜物を取り除いているので、非金属介在物は展伸し、組成はガラス質（Si、Al、Ca、Mg、K）の非晶質硅酸塩となる特徴を持つ。^①

また、残る2点は、低温還元の直接製鋼法にもとづく塊煉鉄製品であった。鉄中の非金属介在物（鉄の製造過程で金属鉄を分離しきれなかったスラグや耐火物の混り物）は、ヴスタイト（Wüstite : FeO）やファイヤライト（Fayalite : 2 FeO · SiO₂）などの共晶夾雜物が含まれる。一方、この時の鍛冶は、羽口の使用はあまりなく鉄滓は多くを発生しない低温作業であろう。半製品の鉄素材加工は、鋸切りや仕上げ研磨が主体で、炉は曲げ加工用の加熱であって、鍛打作業は施され、仕上げ段階時の鍛造剥片は派生する。

なお、中世に比定される利器刃先破片は、軟軟鋼（0.1% C）と半硬鋼（0.4% C）の合せ鍛え製品であった。また、古墳時代（5世紀末～6世紀初頭）の鉄滓は、砂鉄系鉄素材の鍛冶作業で排出された鍛練鍛冶滓である。

1. いきさつ

遺跡は、岡山市津寺一軒屋に所在する弥生時代後期から古墳時代・中世にわたる複合遺跡である。この遺跡内の弥生時代後期に推定される焼土遺構から多量の鉄製品破片や小鉄片が出土した。これらの遺物を通して、当時の鍛冶作業の実態を把握すべく目的から、金属学的調査を行なった。なお、当遺跡内で焼土遺構より若干離れた土壤-19（中世）出土鉄製品破片と、三本木道路2区出土の鉄滓（古墳時代）の調査を併せて実施している。

2. 調査方法

2-1. 供試材

Table. 1 に示す。TIK-1～15は、1個体であるが、TIK-12の小鉄片は直径2mm前後、長さ5

~10mm小棒破片10点の調査である。また、TIK-13は数十点以上の小鉄片と鍛造剥片の集合体を指す。

2-2. 調査項目

- (1) 肉眼観察
- (2) マクロ組織
- (3) 顕微鏡組成
- (4) ピッカース断面硬度
- (5) CMA (Computer Aided X-ray Micro Analyzer) 調査

3. 調査結果

3-1. 弥生時代後期出土品

(1) 塊煉鉄 (TIK-1, 2)

TIK-1は4.4cm幅の延板状の鉄素材、TIK-2は鎌茎あたりが想定される外観をもつ。前者は、展伸状の介在物で、カルシューム(Ca)、一磷(P)系組成をもち、極軟鋼のフェライト(Ferrite: 純鉄)である。また、後者の茎は、ヴスタイト系(FeO)介在物であり、こちらも粗大化傾向のフェライト基地の極軟鋼であった。(Photo. 1の①②にフェライト組織を示す)

(2) 炒鋼製品 (TIK-2B, 3, 5, 7A, 9, 10)

TIK-2Bは、鉄製品の鎌の破片、TIK-7A, 9, 10などは外観上鉄塊状を呈する試料である。しかし、後者2点は、いずれも錆膨れで不整形状にみえるが、断面は成形加工を受けた台形断面をもち、鉄片である。更に3者は、鉄中の非金属介在物は展伸状でガラス質の非晶質硅酸塩組成である。一方、炭素量は全面パーライト(Pearlite: フェライトとセメンタイト: Fe₃Cが交互に重なり合つて構成された層状組織)が析出し、僅かにフェライトを晶出する0.7%C台の材質であった。ただし、TIK-9は不完全な球状セメンタイトを析出し、炭素量は1%前後の過共析鋼で偶発的な焼なまし(727°C以上の高温に長時間加熱したのち、ゆっくり冷却する操作)を受けた素材である。TIK-2Bの組織は、Photo. 1の③に、TIK-7AはPhoto. 1の⑨に、TIK-10はPhoto. 2の③に示す。

次にTIK-3, 5は、極軟鋼に属する炒鋼品である。前者は鉄製品、後者は半製品破片の形状を呈する。鉄中の非金属介在物は、非晶質硅酸塩で、結晶が細かく均等なフェライトと、その交点に少量のパーライトを析出している。この2種類の炒鋼品は、板状半製品として検出された福岡市所在の比恵遺跡群第57次調査で出土した7.7×2.6×0.7cmの敲打痕を残す炒鋼品と金属組織(フェライト結晶粒、パーライト析出、介在物)が近似する。^②なお、TIK-3のフェライト結晶粒は、冷間加工による歪が残留しており、豊切りの痕跡とも考えられる。Photo. 1の④⑤を参照されたし。

(3) 不明製品 (TIK-4, 6A, 6B, 7B, 8, 11A, 11B, 12: 1~10)

標記17点は錆化鉄であり説明を割愛する。

(4) 鍛造剥片 (TIK-13④, 13A~13F)

鍛造剥片は、鉄素材を大気中で加熱、鍛打すると、表面酸化膜が剥離、飛散したものと指す。俗に

鉄肌やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により、表面荒れ肌の厚手から平坦薄手へ、色調は黒褐色から青味を帯びた銀白色（光沢あり）へと変化する。この剥片の検出は、鍛冶鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる。焼土遺構より、多くの鍛造剥片が出土した。その代表例を Photo. 2 の⑦に示す。この鍛造剥片は、製品仕上げの最終段階の派生品である。鉱物相は、微厚の白色外層ヘマタイト（Hematite : Fe₂O₃）、淡茶褐中間層のマグнетイト（Magnetite : Fe₃O₄）、内層非晶質ヴェスタイト（Wüstite : FeO）から構成される。当遺構内では、この種の鍛造剥片と共に、鉄片表面錆化物の疑似剥片も若干混在している。

鍛造剥片の検出から当鍛冶工房では鍛打折り曲げ鍛接作業は否定されるが、簡単な鍛打延しや、曲げ加工などが施された事は推定される。

3-2. 中世出土品

(1) 鉄製品 (T I K-14)

不整合形状の鉄片である。断面はV字状で中核部に金属鉄を残す。金属鉄は Photo. 2 の⑨でみられる様に、左側は極軟鋼（0.1%C）に対して右側は半硬鋼（0.4%C）の軟・硬2種鋼板の合せ鍛えであった。鉄中の非金属介在物は、ヴェスタイト（FeO）と暗黒色ガラス質成分からなる組成で、低温還元からなる塊煉鋼と想定される。

3-3. 古墳時代出土品

(1) 鉄滓 (T I K-15)

平面が不整合形を呈し、偏平な鉄滓の小片（5.6g）である。各面は破面で旧形を失っている。基地は赤褐色で大半は黒褐色で小気泡を露出する。鉱物組成は、淡灰色盤状結晶のファイヤライトと白色粒状結晶のヴェスタイト、これに茶褐色微小多角形結晶のヘーシナイト（Hercynite : FeO · Al₂O₃）、基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。鉄素材の折返し曲げ鍛接の高温作業で排出された鍛錬鍛冶滓に分類される。

4. まとめ

弥生時代後期に属する津寺一軒屋遺跡の7区鍛冶炉-1は、原始鍛冶を想定させる遺物群で形成される。^③鍛冶作業は、羽口や鉄滓の出土はなく、沸しは否定され、延板状や棒状の半製品を素材とした塙切り、研磨加工が主体となろう。ただし、焼土遺構があるのは、鉄素材の炙りによる曲げ加工や、簡単な成形仕上げの槌打ちが行われ、これを裏付ける鍛造剥片（スケール）までが出土する。この鍛造剥片の酸化膜相は、三層分離型で内層ヴェスタイトが非晶質で鍛打作業の最終段階を実証する。次に鉄素材の材質は、炒鋼製品と塊煉鉄である。前者は、中国の前漢中・晚期頃に開発された産物である。近代製鉄法でいうところのパットル法（Hand puddling process）の原理に近いもので、銑鉄から鍊鉄を得る一方法である。この間接製鋼法の高温還元法は高度の製造技術であって、当時の周辺諸国の製造は難しく、中国産の舶載鉄素材とみるべきで、朝鮮半島経由で搬入されたものであろう。

また、直接製鋼法の低温固体還元法による塊煉鉄が存在する。こちらは、鉄鉱石や砂鉄を比較的低温の半溶融状態で、木炭でもって還元した産物である。純鉄成分に近く炭素（C）、硅素（Si）、マ

ンガン (Mn)、硫黄 (S)、燐 (P) などの元素を含まない純鉄である。組織は粗く、柔軟で、孔隙中に鉱石自身が内蔵した幾多の酸化物が夾雜し合い、その主なるものは、酸化第1鉄 (FeO) - 硅酸塩が介在する。

こちらは朝鮮半島内での産物であってもおかしくない状勢である。特に、T I K - 1 の塊煉鉄は、鉄中の非金属介在物組成にカルシウム (Ca) - 燐 (P) 化合物が存在するので、これらの多い鉱石を賦存する地域が、産地同定の手掛りとなろう。弥生時代の鍛冶原料は、海外に依存している。それは、棒や板の范铸造の鋳鉄脱炭鋼（脱炭鋳鉄）であり、炒鋼である。後者は、福岡市の比恵遺跡出土の板状鉄製品と同系の材質が津寺一軒屋遺跡から発見されたことは大きな収穫である。今後の研究に展望が開けたといつても過言でなかろう。最後に弥生時代の鉄素材の一覧表を提示して筆を擱く。

弥生時代の鉄素材

I 鋳鉄脱炭鋼 (1) 三角形・方形・丸形・棒材……范铸造……間接製鋼法

(2) 板材……………

赤井手遺跡 (福岡)、奈具岡遺跡 (京都府)、名東遺跡 (徳島)

II 炒 鋼 (1) 成形は I の(1)(2)に類するもの…鍛造品…間接製鋼法

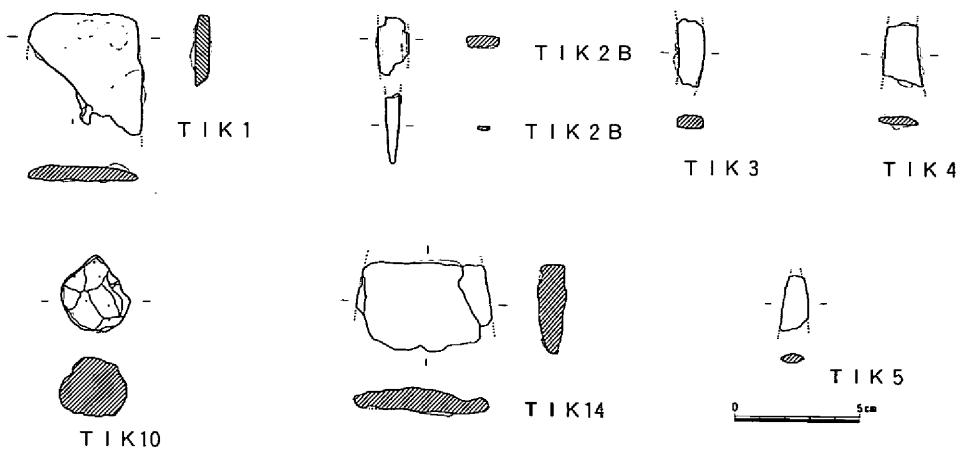
比恵遺跡 (福岡)、津寺一軒屋遺跡 (岡山)

III 鉄塊系遺物
(塊煉鉄) 極低炭素鋼から銑鉄まである。要高度鍛冶技術
(弥生時代の列島内では未検出)

韓国墳城洞遺跡 (原三国時代)

注

- ① 韓 汝玢「中国における早期鉄器の冶金学的特徴」『東アジアの古代鉄文化～その起源と伝播』(1993年たら研究会国際シンポジウム予稿集) たら研究会 1993
- ② 大澤正己「比恵遺跡第57次調査出土鉄製品の金属学的調査」『比恵遺跡群 (24)』(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第530集) 福岡市教育委員会 1997
- ③ 大澤正己「吉備の鉄」～金属学的見地からのアプローチ～(平成9年度埋蔵文化財担当者職員研究会講演資料) 岡山県古代吉備文化財センター 1998. 2. 13.
大澤正己「西日本における初期鉄器製作・鉄生産に関する金相学的研究」『西日本から見た製鉄の歴史』(社会鉄鋼工学部会1998年度秋季シンポジウム論文集) 日本鉄鋼協会 1998. 9. 29.



津寺一軒屋・三本木遺跡出土遺物 (S=1/3)

Table. 1 津寺一軒屋・三本木遺跡(鍛冶炉-1・土壙-19)出土供試材の一覧・調査結果

No	符号	整理No	器種	出土地区	出土遺構	出土年月日	剖面微構定項目							調査結果	
							大きさ (mm)	重量 (mm)	チャック バー	マクロ	後脱 離	ピッカース 断面硬度	CMA	製鋼法	鋼の種類
1	TIK-1	67	鉄素材(延板)	一軒屋7区	焼土面	93.05.21	45×44×4	23.3	L(●)	○	○	○	○	不明(Ca-P系介在物)	極軟鋼
2	TIK-2A	74	鉄製品(茶)	一軒屋7区	焼土-1	93.06.03	28×5×2	4.1	(L●)	○	○	○	○	塊鍛鉄(FeO)	極軟鋼
3	TIK-2B	74	鉄製品(鐵?)	一軒屋7区	焼土-1	93.06.03	23×12×5		H(○)	○	○	○	○	炒鋼(非品質佳焼塩)	半硬鋼
4	TIK-3	70	鉄製品	一軒屋7区	焼土面	93.05.21	26×10×5	2.6	M(●)	○	○	○	○	炒鋼(非品質佳焼塩)	極軟鋼
5	TIK-4	100	鉄片(鈍化)	一軒屋7区	焼土-1	93.03.21	24×16×2	2.7	△	○	○	-	○	不明	-
6	TIK-5	110	鉄片	一軒屋7区	焼土-2	93.06.03	27×10×5	10.6	H(○)	○	○	○	○	炒鋼(非品質佳焼塩)	極軟鋼
7	TIK-6A	101	鉄片(鈍化)	一軒屋7区	焼土-3	93.05.21		5.1	H(○)	○	○	-	○	不明	極軟鋼
8	TIK-6B	101	鉄片(鈍化)	一軒屋7区	焼土-3	93.05.21		2.0	△	○	○	-	○	不明	-
9	TIK-7A	68	鉄片	一軒屋7区	焼土面	93.05.21		3.5	L(●)	○	○	○	○	炒鋼(非品質佳焼塩)	半硬鋼
10	TIK-7B	68	鉄片(鈍化)	一軒屋7区	焼土面	93.05.21		1.8	△	○	○	-	○	不明	-
11	TIK-8	110	鉄片(鈍化)	一軒屋7区	焼土-2	-		7.7	△	○	○	-	○	不明	極軟鋼
12	TIK-9	-	鉄片	一軒屋7区	焼土	93.05.17		16.7	L(●)	○	○	○	○	炒鋼(非品質佳焼塩)	極軟鋼
13	TIK-10	88	鉄片	一軒屋7区	堅穴住居-3	93.05.11	32×27×22	21.7	△	○	○	○	○	炒鋼(非品質佳焼塩)	硬鋼
14	TIK-11A	-	鉄製品破片 (鈍化)	一軒屋7区	焼土-2	93.05.21		0.7	△	○	○	-	○	不明	半硬鋼
15	TIK-11B	-	鉄製品破片 (鈍化)	一軒屋7区	焼土-2	93.05.21		2.0	△	○	○	-	○	不明	半硬鋼
16	TIK-12	-	小鉄片(鈍化)	一軒屋7区	焼土面	93.05.25		0.7	△	○	○	-	-	不明	-
17	TIK-13	-	小鉄片と 鍛造鋳片	一軒屋7区	焼土面	93.05.25		-	-	○	○	-	-	鍛造鋳片	-
18	TIK-14	56	鉄製品	一軒屋7区	土堀-19	93.04.20	36×54×11	35.7	△	○	○	○	○	塊鍛鉄(合せ鍛え: 鋼 鉄質と半硬鋼)	-
19	TIK-15	-	鉄棒	三本木2区	堅穴住居-10	92.05.27	26×21×8	5.6	△	○	○	-	○	砂鉄系鉄素材? 鋼鋳鉄 溶接	-

注) 極軟鋼: C0.15%以下、軟鋼: 0.2~0.3%、半硬鋼: 0.3~0.5%、硬鋼: 0.5~0.8%、最硬鋼: 0.8~1.2%

Table. 2 津寺一軒屋・三本木遺跡出土遺物の調査結果

符号	器種	断面形状 (マクロ組織) (mm)	非金属介在物		鉄鑄錠型腔		ピッカース 断面硬度 (HV)	CMAによる介在物の定量分析値	製鋼法
			形状	組成	金相組織	炭素含有量 (%)			
TIK-1	鉄素材(延板)	板状	延伸	カルシウム・リン系	フェライト	0.005 (異常筋)	27% CaO - 37% P2O5 - 26% FeO - 5% SiO2	不明	
TIK-2A	鉄製品(茶)	棒状	延伸	ワットイト	フェライト	0.005 (正常筋)	100% FeO	塊鍛鉄	
TIK-2B	鉄製品(鐵?)	レンズ状	延伸	非品質佳焼塩	全面バーライト	0.4~0.7 246, 191, 231	55% SiO2 - 12% Al2O3 - 20% CaO - 2% MgO - 4% K2O	炒鋼	
TIK-3	鉄製品(鐵?)	長方形 (4×10)	延伸	非品質佳焼塩	フェライト・バーライト	0.15 106, 93.4, 117, 105	49% SiO2 - 5% Al2O3 - 30% CaO - 4% MgO - 1% K2O	炒鋼	
TIK-4	鉄片(鈍化)	V字状?	不明	-	-	-	基地分析: 0.5% P2O5 - 0.05% S	不明	
TIK-5	鉄片	台形 (5×13)	延伸	非品質佳焼塩	フェライト・バーライト	0.15 100, 95.9	71% SiO2 - 2% Al2O3 - 8% CaO - 2% MgO	炒鋼	
TIK-6A	鉄片(鈍化)	圓面指円 (2×18)	不明	-	フェライト痕跡	0.1	基地分析: 0.1% P2O5 - 0.03% S - 0.03% TiO2	不明	
TIK-6B	鉄片(鈍化)	不明	不明	-	フェライト痕跡	-	基地分析: 0.03% P2O5 - 0.03% S - 0.05% TiO2	不明	
TIK-7A	鉄片	長方形	延伸	非品質佳焼塩	全面バーライト	0.15~0.7 182, 5, 253, 252	65% SiO2 - 10% Al2O3 - 12% CaO - 3% MgO - 4% K2O	炒鋼	
TIK-7B	鉄片(鈍化)	不整形	不明	-	-	-	基地分析: 0.3% P2O5 - 0.3% S - 0.04% TiO2	不明	
TIK-8	鉄片(鈍化)	指円形	不明	-	フェライト・バーライト	0.15	基地分析: 0.07% P2O5 - 0.06% S - 0.06% TiO2	不明	
TIK-9	鉄片	台形 (9×15)	延伸	非品質佳焼塩	不完全球状セメントタイト	1.0 116, 139, 141, 101	47% SiO2 - 16% Al2O3 - 15% CaO - 3% MgO - 5% K2O	炒鋼	
TIK-10	鉄片	台形 (9×15)	指円形	非品質佳焼塩	全面バーライト	0.7 136, 151	32% SiO2 - 26% Al2O3 - 18% CaO - 12% MgO - 5% K2O	炒鋼	
TIK-11A	鉄製品破片(鈍化)	V字状 (4×14)	不明	-	バーライト痕跡	0.3%痕跡	13% FeO - 4.4% SiO2 (分在物測定)	炒鋼?	
TIK-11B	鉄製品破片(鈍化)	V字状 (2×9)	不明	-	フェライト・バーライト痕跡	0.3%痕跡	-	基地分析: 0.2% P2O5 - 0.03% S - 0.03% TiO2	不明
TIK-12	小鉄片(鈍化)	(小片10点調査)	不明	-	-	-	焼化粧しく分析不能	不明	
TIK-13	小鉄片と鍛造鋳片	-	不明	-	-	-	-	-	
TIK-14	鉄製品	V字状	延伸	ワットイト非品質佳焼塩	フェライト・バーライト	0.1%+0.4 89.3, 111, 107, 116	32% SiO2 - 16% Al2O3 - 31% CaO - 5% MgO, FeO		
TIK-15	鉄棒	-	-	-	ファイアライト+ワットイト+ヘーシナイト (無色相)	-	70% FeO - 30% SiO2 - 99% FeO - 50% Fe2O3 - 50% Al2O3 - 1.4% TiO2	-	

付載1 津寺三本木・一軒屋遺跡出土鉄滓の金属学的調査

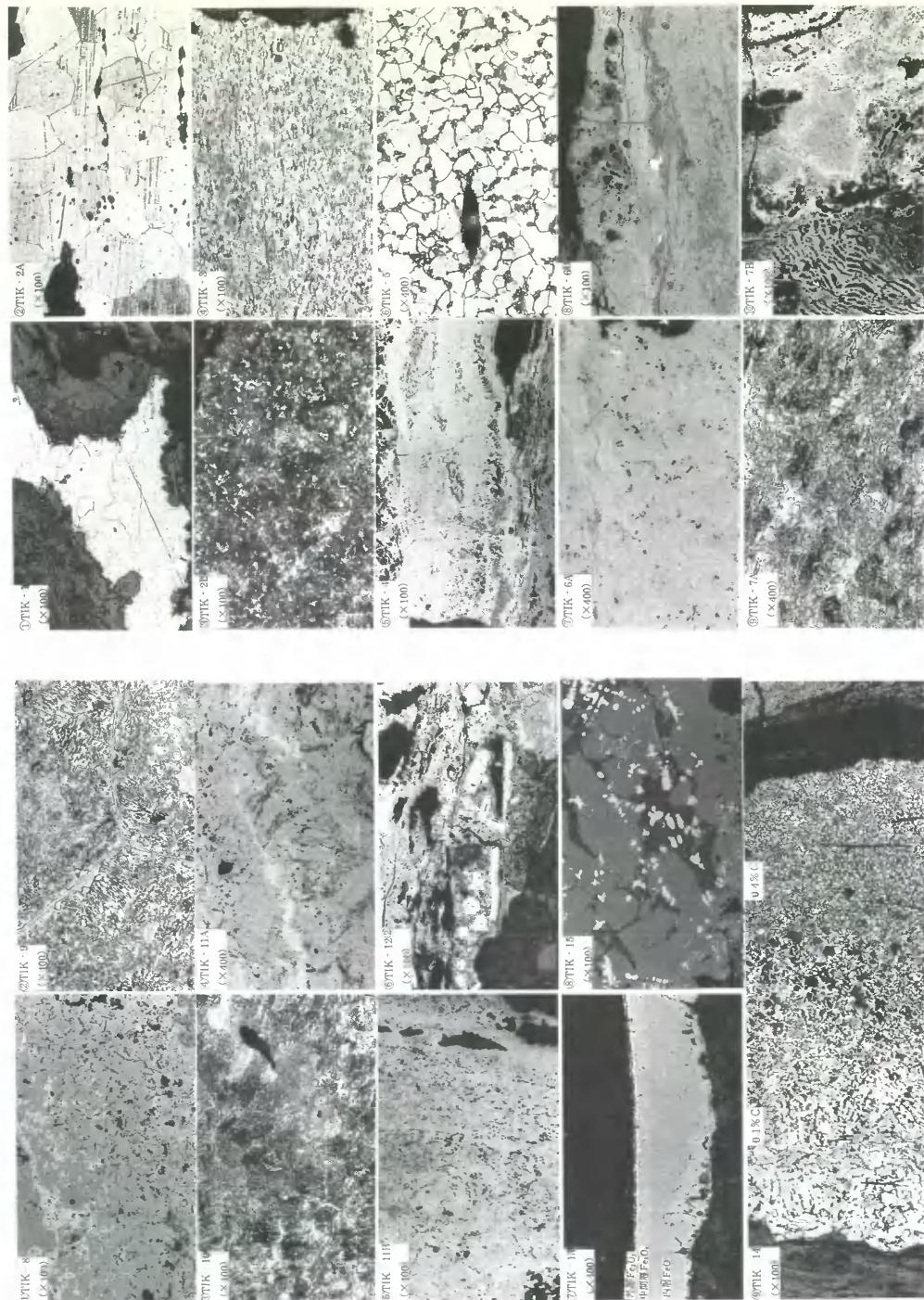


Photo. 1 供試材の顕微鏡組織

Photo. 2 供試材の顕微鏡組織



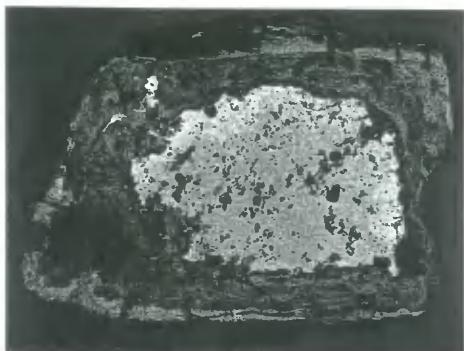
(TIK-8)



× 5



(TIK-9)



× 5



(TIK-10)



× 5

Photo. 3 外観写真とマクロ組織

標記3点の試料は当初鉄塊系遺物で挙げられていたが、断面切断した結果、半円形・台形の断面形を持つ半製品（鉄素材）の端切（切片）と判定した。

付載2 津寺三本木・津寺一軒屋遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白 石 純

1. はじめに

この胎土分析では、蛍光X線分析法による胎土分析で津寺三本木および一軒屋遺跡出土の古墳時代前期前半の土器(壺・甕・高坏・鉢)と奈良時代の瓦質土器を分析し、以下の課題について検討した。

- (1) 三本木、一軒屋遺跡出土の古墳時代前期前半の壺、甕、高坏、鉢がこの胎土分析で、どの地域(山陰、讃岐、畿内地域など)の胎土に類似しているか。
- (2) 三本木遺跡出土の奈良時代の瓦質土器と津寺遺跡中屋調査区⁽¹⁾出土の瓦との比較。

2. 分析方法、結果

分析は、波長分散型蛍光X線分析装置を用い、分析方法、試料調整、測定条件などは現在までに行っている方法で実施した。

分析の結果、K、Ca、Sr、Rbの元素でX-Y散布図を作成し差異について検討した。

- (1) 三本木・一軒屋遺跡出土古墳時代前期前半の土器の生産地について検討した。第2、3図の散布図のように各生産地の土器と比較すると、

- ・試料番号1、2、3、4、28、42、43(第1図)の7点の土器が畿内、讃岐の分布領域に分布している。
- ・試料番号5、32、56、60、64、77、78、82、83の9点が主に吉備南部の領域から外れて分布している。

- (2) 三本木遺跡と津寺遺跡中屋調査区の両遺跡から出土した瓦質の土器と瓦の比較では、第4・5図の散布図で検討すると、

- ・津寺中屋調査区出土の瓦質土器の分析値からAグループとBグループ(山手村末の奥瓦窯跡が分布する領域)に大きく分類できたが、この分析結果に三本木遺跡の瓦質の土器をプロットすると末の奥瓦窯跡が分布するBグループの領域に分布した。

3. まとめ

三本木・一軒屋遺跡出土の古墳時代前期前半の土器および奈良時代の瓦質土器の胎土分析を実施したが、この分析でわかったことを整理しまとめとする。

- (1) 古墳時代前期前半の土器の分析では、1、2、3、4、28、42、43の7点が畿内あるいは讃岐地域の胎土と類似していることがわかった。特に、1、2、3、4の土器は畿内地域からの搬入品と推定される。28、42、43の土器は現段階の分析データで比較する限り讃岐地域あるいはそれ以外の地域からの搬入と推測される。

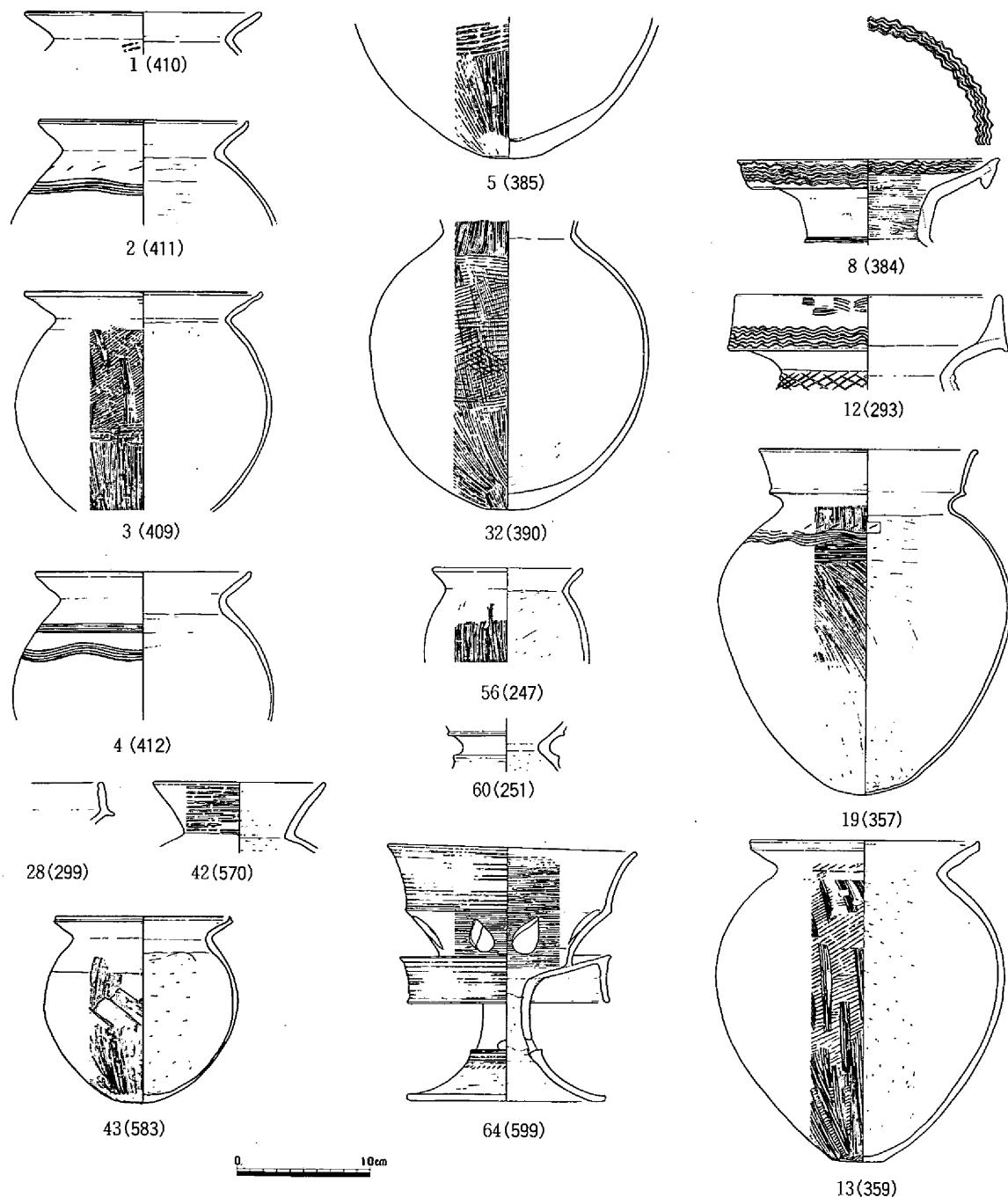
5、32、56、60、64、77、78、82、83の土器はK-Ca、Sr-Rbの両散布図で吉備南部の分布域に入らず主に山陰領域に分布しており、山陰あるいはその他の地域の搬入品と推定される。そして、このうち77、82はSr-Rb散布図からどの生産地の分布域からも離れて分布しており、生産地がはっきりしなかった。

(2) 奈良時代の瓦質の土器の分析では、三本木遺跡出土の瓦質の土器が末の奥瓦窯跡が分布する領域に入り、胎土的に類似していることが推測される。

この胎土分析を実施する機会を与えていただいた高畠知功氏をはじめ岡山県古代吉備文化財センターの職員の方々に、文末ではありますが記して感謝いたします。

註

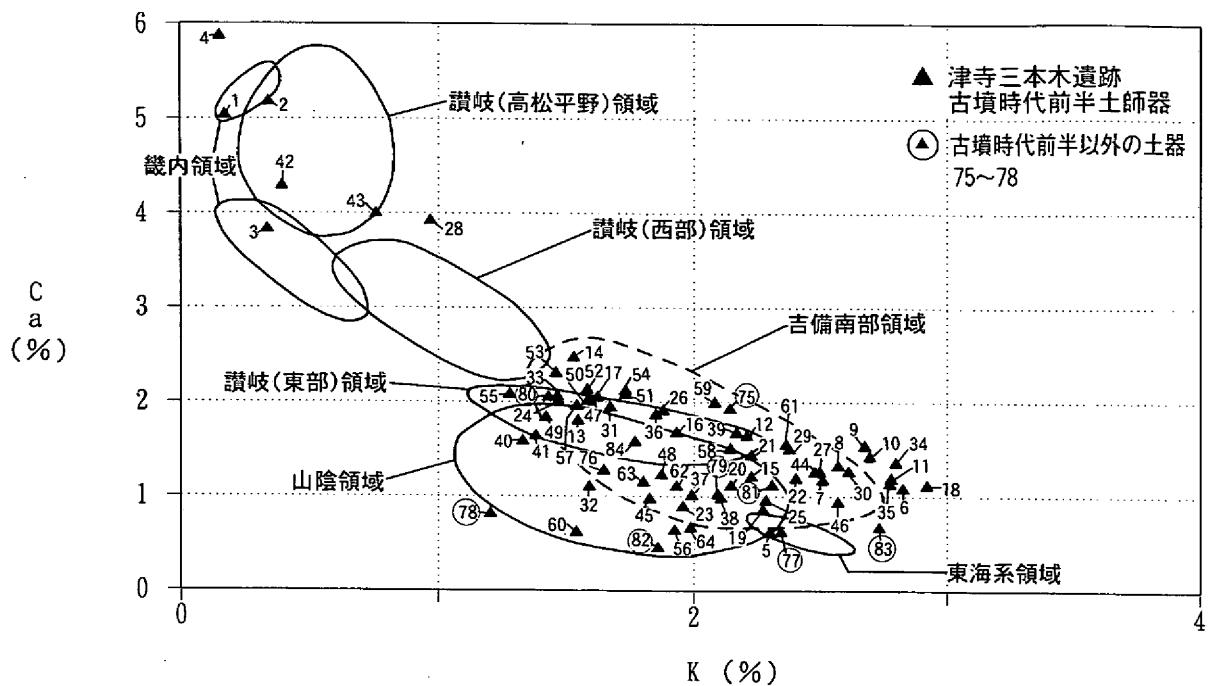
- (1) 白石 純 「津寺遺跡5出土土器の胎土分析」『津寺遺跡5 山陽自動車道建設に伴う発掘調査(第2分冊)』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127 岡山県教育委員会 1998.



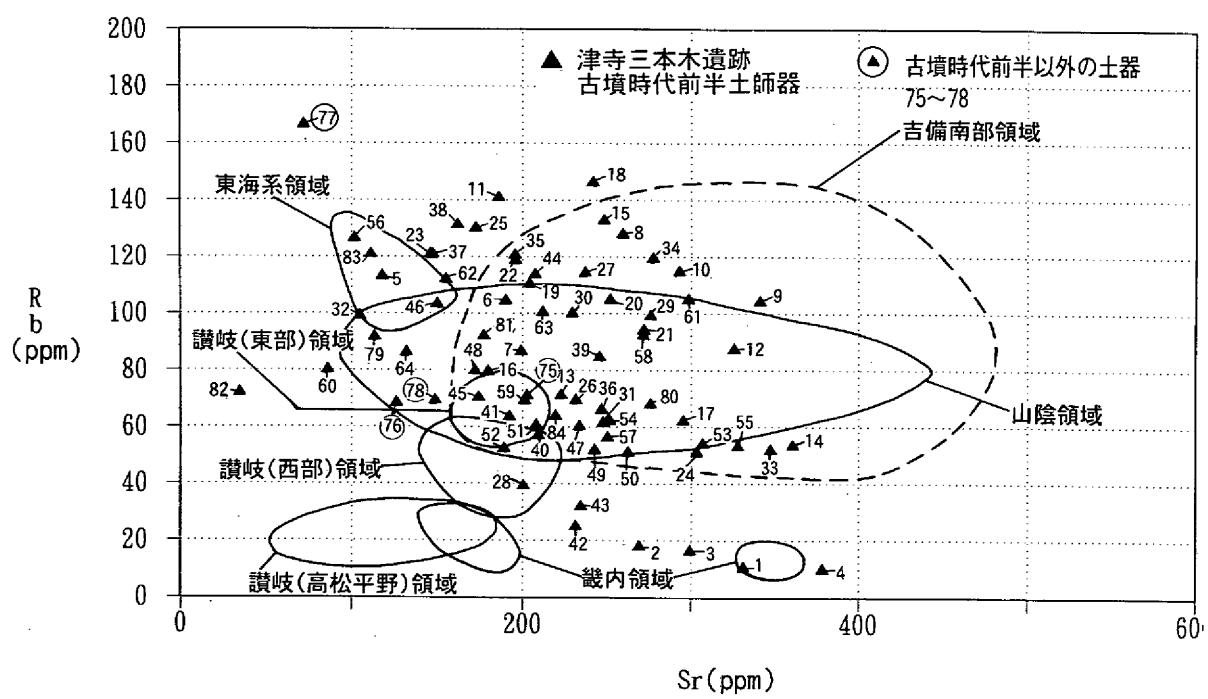
第1図 古墳時代前期の態度分析土器 (1/5)

第1表 津寺三本木、一軒屋遺跡胎土分析表 (%) ただし Sr・Rb は ppm

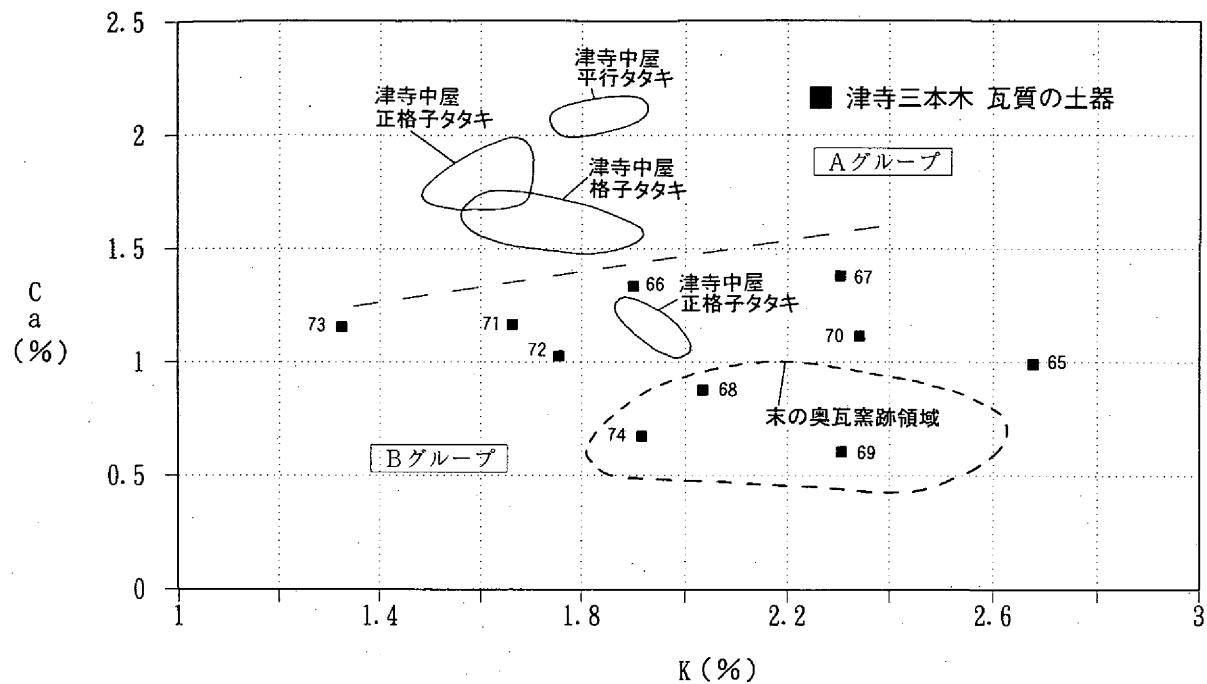
試料番号	掲載番号	遺跡名	調査区	遺構名	器種	K	Fe	Si	Ti	Al	Ca	Sr	Rb
1	410	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	甕	0.18	8.89	43.70	0.39	22.04	5.04	331	10
2	411	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	甕	0.35	9.71	41.73	0.44	20.06	5.22	269	17
3	409	津寺三本木遺跡	3区	溝-14	甕	0.34	9.73	43.45	0.48	24.29	3.84	299	16
4	412	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	壺	0.16	8.92	42.89	0.46	20.59	5.92	378	9
5	385	津寺三本木遺跡	3区	溝-14	壺	2.31	5.49	67.45	1.46	17.50	0.61	118	113
6	383	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	壺	2.83	4.92	67.02	0.63	16.59	1.08	190	104
7	384	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	壺	2.52	6.28	63.48	0.66	18.19	1.16	200	86
8	355	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	壺	2.58	4.69	63.73	0.68	20.92	1.32	259	128
9	289	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	壺	2.68	7.59	55.11	0.67	19.78	1.53	340	104
10	382	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	壺	2.70	7.23	57.05	0.64	18.19	1.42	292	115
11	292	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	壺	2.79	5.67	55.85	0.72	20.35	1.16	186	141
12	293	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	壺	2.22	5.50	57.93	0.59	18.71	1.62	325	87
13	359	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	甕	1.56	7.82	52.29	0.77	20.55	1.79	223	71
14	300	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	甕	1.54	6.34	53.96	0.78	20.10	2.46	360	53
15	358	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	甕	2.24	3.53	59.63	0.71	22.02	1.19	248	133
16	366	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	甕	1.94	8.65	54.87	1.11	18.67	1.65	180	79
17	363	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	壺	1.63	7.65	55.89	0.91	19.20	2.04	295	62
18	364	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	壺	2.93	4.27	59.38	0.63	19.44	1.09	242	146
19	357	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	甕	2.28	2.78	68.64	1.09	19.30	0.84	205	111
20	407	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	甕	2.16	2.59	66.39	1.03	17.68	1.08	252	105
21	442	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	鉢	2.24	6.58	55.70	0.66	19.04	1.42	272	94
22	439	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	鉢	2.42	5.69	52.81	0.70	20.82	1.17	197	119
23	415	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	高杯	1.97	4.01	64.93	0.65	20.14	0.86	147	121
24	434	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	高杯	1.48	7.66	54.21	0.90	18.64	1.99	303	51
25	360	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	甕	2.29	4.16	61.29	0.79	22.38	0.93	173	130
26	381	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	鉢	1.89	6.98	57.72	0.93	18.05	1.89	232	69
27	372	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	壺	2.51	5.91	52.37	0.64	20.90	1.23	237	115
28	299	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	壺	0.98	12.64	46.83	1.56	21.16	3.92	201	38
29	385	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	壺	2.39	6.47	59.61	0.47	17.01	1.48	276	99
30	386	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	壺	2.63	5.12	65.21	0.65	15.95	1.23	229	100
31	413	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	甕	1.68	6.86	52.18	0.82	20.33	1.95	248	62
32	390	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	甕	1.60	4.58	55.25	0.67	23.02	1.10	105	99
33	433	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-14	高杯	1.48	7.99	53.07	0.87	18.75	2.07	346	52
34	272	津寺三本木遺跡	3区	溝-7	甕	2.81	5.74	60.98	0.54	17.66	1.35	278	120
35	473	津寺三本木遺跡	3区	溝-16	壺	2.78	5.59	63.95	0.69	16.40	1.13	196	121
36	478	津寺三本木遺跡	3区	溝-16	甕	1.86	6.63	56.00	0.85	18.75	1.88	247	66
37	512	津寺三本木遺跡	3区	溝-16	甕	2.00	4.72	58.32	0.65	20.59	1.02	148	121
38	509	津寺三本木遺跡	3区	溝-16	甕	2.11	4.78	57.17	0.66	21.14	0.98	162	132
39	554	津寺三本木遺跡	6区・A	溝-28	甕	2.18	4.47	55.43	0.84	20.41	1.69	246	85
40	555	津寺三本木遺跡	6区・A	溝-28	甕	1.34	9.07	50.61	0.98	19.53	1.59	210	57
41	564	津寺三本木遺跡	6区・A	溝-28	鉢	1.39	9.46	51.33	1.00	18.59	1.63	193	63
42	570	津寺三本木遺跡	6、7区	東断面溝-20	甕	0.40	11.12	44.94	0.54	15.60	4.29	232	24
43	583	津寺三本木遺跡	6、7区	溝-29	甕	0.76	11.58	47.33	1.17	16.26	4.02	235	31
44	285	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-10	壺	2.49	7.24	59.05	0.71	20.60	1.23	208	113
45	284	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-10	甕	1.83	7.45	58.74	0.96	17.06	0.95	175	70
46	286	津寺三本木遺跡	2、3区	溝-10	高杯	2.58	6.54	63.26	0.86	17.89	0.92	150	103
47	274	津寺三本木遺跡	3区	溝-7	甕	1.60	6.47	57.44	0.87	19.41	2.00	234	60
48	273	津寺三本木遺跡	3区	溝-7	甕	1.88	9.13	55.05	0.84	17.70	1.21	173	79
49	246	津寺三本木遺跡	4区B	堅穴住居-16	甕	1.43	7.12	53.61	0.85	19.25	1.82	242	51
50	242	津寺三本木遺跡	4区B	堅穴住居-16	甕	1.59	8.31	53.30	1.00	18.49	1.99	262	50
51	241	津寺三本木遺跡	4区B	堅穴住居-16	甕	1.74	7.43	58.35	0.88	15.48	2.06	208	60
52	240	津寺三本木遺跡	4区B	堅穴住居-16	甕	1.59	6.75	55.32	0.83	19.47	2.10	190	51
53	239	津寺三本木遺跡	4区B	堅穴住居-16	甕	1.47	6.33	55.48	0.83	20.47	2.27	307	53
54	245	津寺三本木遺跡	4区B	堅穴住居-16	甕	1.74	7.07	54.96	0.85	18.26	2.09	251	62
55	244	津寺三本木遺跡	4区B	堅穴住居-16	甕	1.29	7.11	52.20	0.87	20.87	2.06	326	52
56	247	津寺三本木遺跡	4区B	堅穴住居-16	甕	1.93	3.53	63.15	0.86	18.28	0.60	102	126
57	243	津寺三本木遺跡	4区B	堅穴住居-16	甕	1.55	7.82	55.43	0.98	18.66	1.93	250	55
58	248	津寺三本木遺跡	4区B	堅穴住居-16	高杯	2.15	8.44	57.03	0.89	14.99	1.48	271	91
59	250	津寺三本木遺跡	4区B	堅穴住居-16	鉢	2.09	7.04	58.58	0.77	15.70	1.97	202	68
60	251	津寺三本木遺跡	4区B	堅穴住居-16	鼓形器台	1.55	7.12	67.19	1.09	16.69	0.58	86	79
61	252	津寺三本木遺跡	4区B	堅穴住居-16	製塩土器	2.37	4.06	53.19	0.69	22.47	1.52	298	105
62	604	津寺三本木遺跡	4区C	土器溜り-1	甕	1.94	4.30	55.57	0.76	19.55	1.06	156	112
63	541	津寺三本木遺跡	5区B	溝-24	壺	1.81	3.91	55.23	0.72	21.08	1.12	212	100
64	599	津寺三本木遺跡		側溝内	器台	1.99	6.59	62.30	0.86	20.28	0.62	133	86
65	715	津寺三本木遺跡	5区B	L = 4 m	甕	2.67	4.32	61.52	0.72	22.24	0.99	197	209
66	713	津寺三本木遺跡	5区B	L = 3.9 m	甕	1.89	5.86	53.23	0.90	24.84	1.33	300	165
67	699	津寺三本木遺跡	5区B	L = 3.9 m	高杯	2.30	4.81	55.69	0.68	23.83	1.38	310	173
68	703	津寺三本木遺跡	5区B	L = 3.95 m	高杯	2.03	6.54	55.01	0.85	24.77	0.87	190	166
69	700	津寺三本木遺跡	5区B	L = 3.9 m	高杯	2.30	4.35	57.01	0.78	26.00	0.59	132	188
70	689	津寺三本木遺跡	5区B	L = 3.9 m	杯蓋	2.33	4.31	57.09	0.68	24.46	1.11	248	189
71	679	津寺三本木遺跡	5区A	L = 3.95 m	杯身	1.65	5.62	52.56	0.92	22.61	1.16	264	110
72	692	津寺三本木遺跡	5区B		杯身	1.75	6.63	55.97	0.92	22.66	1.02	152	123
73	714	津寺三本木遺跡	5区B	L = 4.05 m	甕	1.32	6.56	53.30	0.67	23.58	1.14	162	97
74	677	津寺三本木遺跡	5区A	L = 3.87 m	甕	1.91	3.16	73.47	0.82	18.76	0.66	158	140
75	77	津寺一軒屋遺跡	3区A	河道-1	壺	2.14	6.40	60.25	0.72	17.63	1.92	203	71
76	203	津寺一軒屋遺跡		包含層	台付鉢	1.65	6.86	57.59	0.65	18.41	1.25	126	68
77	290	津寺一軒屋遺跡	7区	溝-7	瓦器	2.34	3.97	64.35	0.62	22.09	0.60	72	167
78	275	津寺一軒屋遺跡	7区	土壙墓-1	瓦器	1.21	5.59	66.00	0.84	16.06	0.79	149	69
79	193	津寺一軒屋遺跡	7区	堅穴住居-3	甕	2.09	10.09	55.13	0.91	20.46	0.99	113	92
80	182	津寺一軒屋遺跡	7区	包含層	甕	1.77	7.93	59.63	0.90	15.17	1.56	220	63
81	3	津寺一軒屋遺跡	7区	土壤-3	甕	2.30	6.75	64.36	0.68	16.32	1.09	178	92
82	175	津寺一軒屋遺跡	7区	P-75	高杯	1.86	6.05	65.50	0.81	19.86	0.42	34	72
83	183	津寺一軒屋遺跡	7区	住居4-5より北	壺	2.73	3.48	66.29	0.66	21.22	0.65	111	121
84	289	津寺一軒屋遺跡	7区			1.77	7.93	59.63	0.90	15.17	1.56	220	63



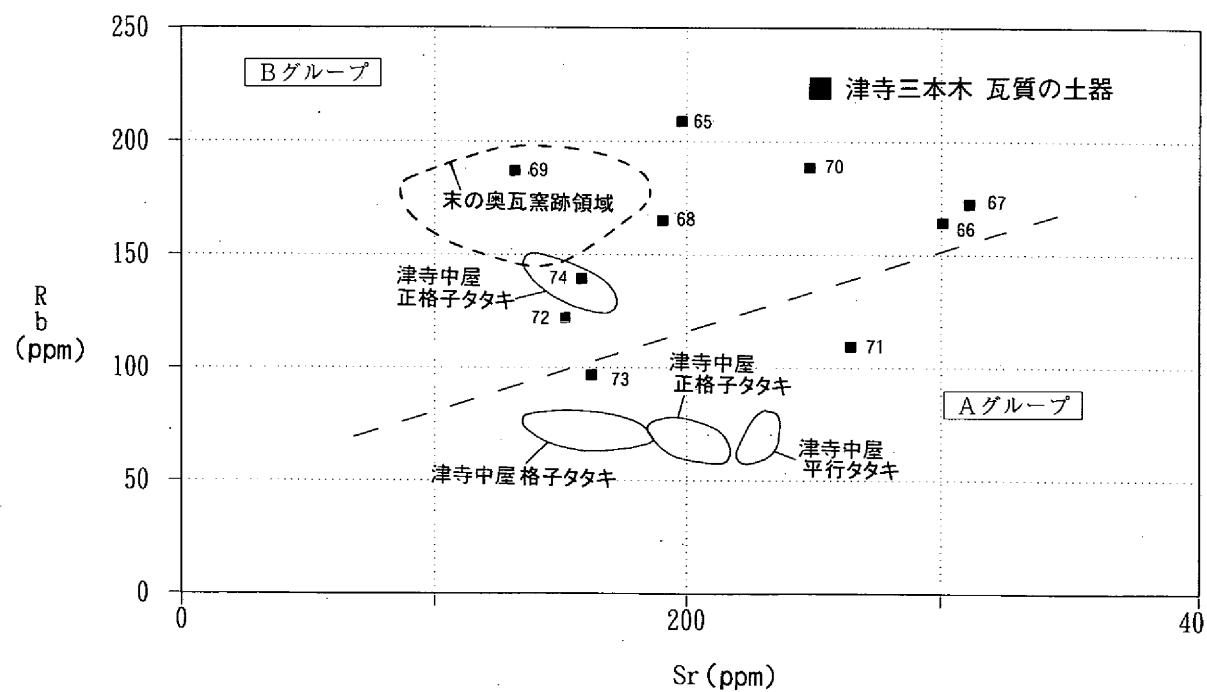
第2図 三本木・一軒屋遺跡出土土器（古墳前期）の生産地推定



第3図 三本木・一軒屋遺跡出土土器（古墳前期）の生産地推定



第4図 三本木遺跡出土瓦質の土器と津寺5中屋調査区出土瓦との比較



第5図 三本木遺跡出土瓦質の土器と津寺5中屋調査区出土瓦との比較

付載3 津寺三本木・津寺一軒屋遺跡出土の動物遺存体

岡山理科大学 理学部 富 岡 直 人

1. はじめに

本報告文は、1992年および1996年に岡山県古代吉備文化財センターにより岡山県岡山市津寺三本木遺跡と一軒屋遺跡から検出された中・近世に属する動物遺存体について記述するものである。

岡山県古代吉備文化財センター高畠知功氏、速水章人氏には資料の提供とともに、様々な御教示、御援助を頂いた。

2. 出土状況

分析資料は、発掘時に溝中にて確認・サンプリングされたものである。出土遺構は報告本文を御参考頂きたい。これらは、死亡したウマ、ウシ類が廃棄されたものと考えられる。

3. 出土動物遺存体の概要

出土動物遺存体の種名を第1表に掲げ、以下に各種動物遺存体の概要を記述する。

脊椎動物門 Vertebrata 哺乳綱 Mammalia

津寺三本木遺跡5区Bの室町時代初頭の溝-49から出土したNo.10・11・12は、いずれも破損が著しく種の特定が不可能であったが、共伴状況からウマ・ウシ類の四肢骨破片と推定される。

ウシ目（偶蹄目） Artiodactyla ウシ科 Bovidae ウシ *Bos taurus domesticus* Gmelin

津寺三本木遺跡室町時代初頭の溝-49では、ウシ右下顎骨が出土した（No.1：図版1の1）。いわゆる在来和牛の特徴を持つ小型のウシで、第2～4前臼歯、第1～3後臼歯が萌出している。残存状況は劣悪で、風化が進行している。また解体痕や火をつけた痕跡はみられなかった。咬耗面が観察された第3後臼歯は小窓連結状態で、臼歯最大長35mm、最大幅13mm、舌側歯冠高26mmであった。さらに、Driesch (1976) pp.56-57(7)の測定値に対応する臼歯列長は251.00mmであった。臼歯の萌出状況から2.5歳以上と考えられるが、咬耗から推定するとそれ以上の老齢であることが明らかである。

また、津寺一軒屋遺跡2区の中・近世の溝-5からは左橈骨（No.16-1：図版1の7）が出土した。本資料は遠位端を失い、その破損面に一部切痕がみられるが、大半は粗面で、風化後に破損した状況を示している。前位には斜方向に鋭利な刃物による切痕が6条観察される。このような傷は、皮を剥

第1表 津寺三本木遺跡・津寺一軒屋遺跡出土動物遺存体種名表

脊椎動物門	Vertebrata	ウマ目	Perissodactyla
哺乳綱	Mammalia	ウマ科	Equidae
ウシ目（偶蹄目）	Artiodactyla	ウマ	<i>Equus caballus</i> Linnaeus
ウシ科	Bovidae		
ウシ	<i>Bos taurus domesticus</i> Gmelin		

ぎとる作業では残らず、筋肉の切断と削ぎ落とし作業によって残されたと考えられる。具体的には食用として解体されたものであろう。

さらに、津寺一軒屋遺跡 2 区の中・近世の溝 - 5 出土の資料 (No.16-3 : 図版 1 の 8) は右脛骨骨幹部であった。本資料は近位端と遠位端を失っている。近位端・遠位端破損面には切痕がみられず、破断面は全て粗面で、風化後に破断した状況を示している。前位、後位、内側位に鋭い切痕が観察される。最大の切痕は深さ 2.3mm に達している。これも前記橈骨と同様、食用に筋肉の削ぎ落としを行なったものであろう。

ウマ目 Perissodactyla ウマ科 Equidae ウマ *Equus caballus* Linnaeus

津寺三本木遺跡の 5 区 B の室町時代初頭の溝 - 49 からは、ウマの上顎臼歯と下顎骨が出土した。最少で一個体分に相当する点数である。

同地点から出土した No. 4 左下顎骨 (図版 1 の 5) は、いずれも永久歯である第 3 前臼歯から第 3 後臼歯までそろっている保存良好な資料であった。第 3 前臼歯から第 3 後臼歯までの臼歯列長は 132.5mm で、津寺遺跡中屋調査区溝 - 18 で出土した古墳時代の左下顎群 (金子 1996) とはほぼ同じ大きさの個体である。萌出状況から推定すると 3.5 歳以上で、咬耗と歯冠高を参考にするとさらに数歳は年齢が上であることが推測される。日本在来馬の小型から中型程度の大きさと考えられる。

同地点から出土した No. 2・3 右下顎骨 (第 1 図版 4) は、第 2 前臼歯から第 2 後臼歯までが残存している。骨格全体が歪んでおり、現状では微妙に臼歯列長が異なるが、No. 4 左下顎骨と同一個体であったと考えられる。

同地点から出土した No. 7 上顎臼歯は、右第 2・3 後臼歯と左第 1～3 白歯のまとまりで、No. 8 上顎臼歯は左第 4 前臼歯と第 1・2 後臼歯のまとまりであり、本来 1 個体のものが解剖学的位置を失っている状態であると考えられる。萌出状況が 3.5 歳以上であることから、下顎骨の No. 2・3・4 の個体と同一個体である可能性がある。さらに、No. 9 の切歯破片も同一個体である可能性を考えられる。

津寺一軒屋遺跡の中・近世の溝からは、臼歯破片 (No. 13・14・15) が検出されたが、No. 15 が上顎臼歯であると判明した以外、部位の特定はできなかった。

上記の顎骨と臼歯、切歯類には解体痕や火を受けた痕跡はみられなかった。

2 区溝 - 5 から出土した左中手骨 (No. 16-2) は、貴重な完形資料であった。最大長は 195.8mm で林田・山内 (1957) の掲げる体高を求める式に当てはめると、117.52cm となり、トカラウマ程度の小型馬であることが明らかになった。これは、鎌倉材木座遺跡出土の中世ウマ (林田 1957) の小型のものに相当し、材木座遺跡での平均体高 129.44cm よりも小さい。遠位端縦稜には、2mm 幅の切痕が残されており、肉食あるいは皮革加工用に解体処理されたものと考えられる。

4. 津寺三本木遺跡・一軒屋遺跡出土動物遺存体の特徴

津寺三本木遺跡・一軒屋遺跡からは、ウマ、ウシが溝に廃棄された状況で検出された。四肢骨および頭部が出土し、顕著な偏りはなかった。四肢骨には解体痕がみられ、食用あるいは皮革加工原料として解体されたことが推定された。金子 (1996) が指摘するように、頭蓋および下顎骨を用いて溝内で祭祀が行われた可能性が考えられる一方、この資料群については解体痕が多いことを考慮すると、執拗に解体された体部と頭部が無造作に廃棄され、時間をかけて移動した結果解剖学的位置を失った可能性も考えられる。

動物遺存体属性表

津寺三本木遺跡

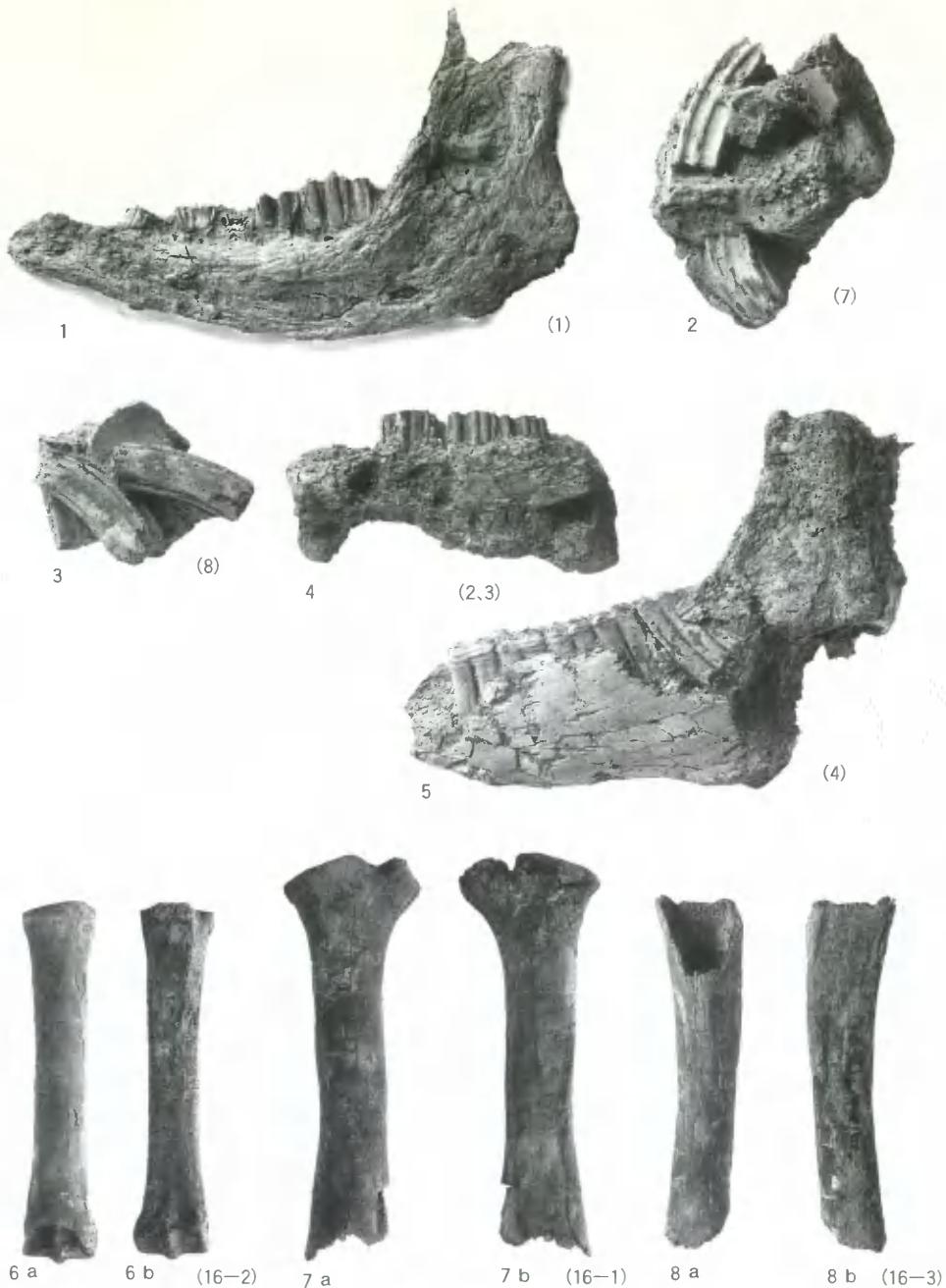
整理番号	図版番号	出土地区	遺構名	種別	部位	時期	備考
No. 1	1	5区・B	溝-49	ウシ	右下顎骨 (M ₁₂₃)	室町時代初頭	
No. 2	4	々	々	ウマ	右下顎骨 (M ₁₂)	々	No. 3と接合
No. 3	4	々	々	ウマ	右下顎骨 々 (P ₂₃)	々	No. 2と接合
No. 4	5	々	々	ウマ	左下顎骨 (P ₃₄ M ₁₂₃)	々	
No. 5		々	々	ウシ or ウマ	四肢骨骨幹部	々	
No. 6		々	々	哺乳類	不明	々	
No. 7	2	々	々	ウマ	右上顎後臼歯 (M ₂₃) 左上顎後臼歯 (M ₁₂₃)	々	
No. 8	3	々	々	ウマ	右上顎前後臼歯 (P ₄ M ₁₂)	々	
No. 9		々	々	ウマ	門歯	々	
No. 10		々	々	ウシ or ウマ	不明	々	
No. 11		々	々	ウシ or ウマ	不明	々	
No. 12		々	々	ウシ or ウマ	不明	々	

津寺一軒屋遺跡

整理番号	図版番号	出土地区	遺構名	種別	部位	時期	備考
No.13		1区	溝-5	ウマ	臼歯破片	中世(早島?)	L R ? ビビアナイト付着
No.14		2区	々	ウマ	臼歯破片	々	L R ?
No.15		々	々	ウマ	左上顎臼歯破片	々	
No.16 - 1	7	々	々	ウシ	左橈骨近位端	々	切痕
No.16 - 2	6	々	々	ウマ	左中手骨	々	
No.16 - 3	8	々	々	ウシ	右脛骨骨幹部	々	

参考文献

- 金子 浩昌 1996 「津寺遺跡中屋調査区出土のウマ遺骸」『津寺遺跡3 山陽自動車道建設に伴う発掘調査12』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104 : pp.282-285
- 金子 浩昌 1995 「津寺遺跡出土の動物遺体」『津寺遺跡2 山陽自動車道建設に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98 : pp.597-604
- 西中川 駿 1989 「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛・馬の起源、系統に関する研究－特に日本在来種との比較」(昭和63年文部省科学研究費補助金研究成果報告書)
- 林田 重幸、山内 忠平 1954 「日本石器時代馬について」『日本畜産会報』2 (2-4) : pp.122-126
- 林田 重幸、山内 忠平 1957 「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』6 : pp.146-156
- 林田 重幸 1957 「中世日本の馬について」『日本畜産会報』28 (5) : pp.301-306
- Driesch,A. 1976 "A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites" Peabody Museum Bulletin 1 (Harvard University)



第1図 津寺三本木・一軒屋遺跡出土動物遺存体 (Scale 1:3)

1, 7, 8:ウシ(1.右下頸骨, 7.左脛骨, 8.右脛骨); 2~6:ウマ(2, 3.上顎後臼歯, 4.右下頸骨, 5.左下頸骨, 6.左中手骨)
(a:前位, b:後位 () 内の数字は整理番号)



2. 津寺三本木遺跡全景（南から）



2. 竪穴住居 - 6
(東から)



3. 竪穴住居 - 7
(北から)

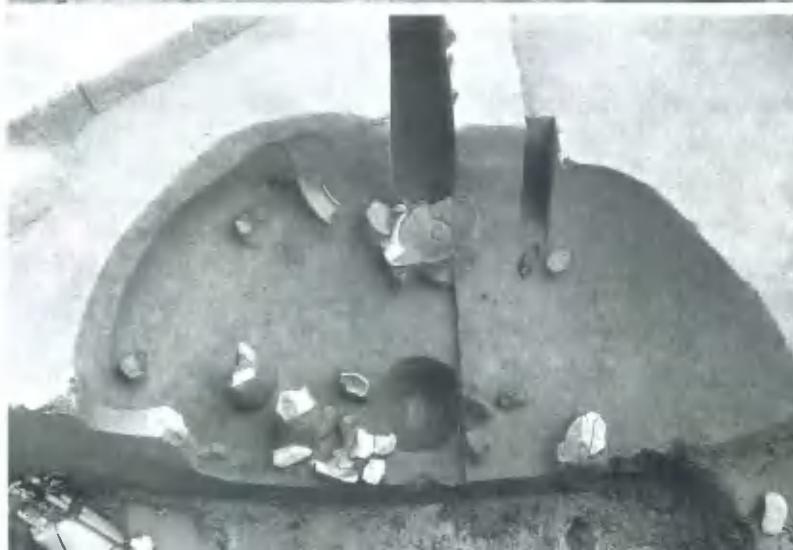
1. 袋状土壤 - 1, 2
(東から)



2. 袋状土壤 - 4
(南から)



3. 袋状土壤 - 5
(東から)





1. 竪穴住居 -13
(北から)

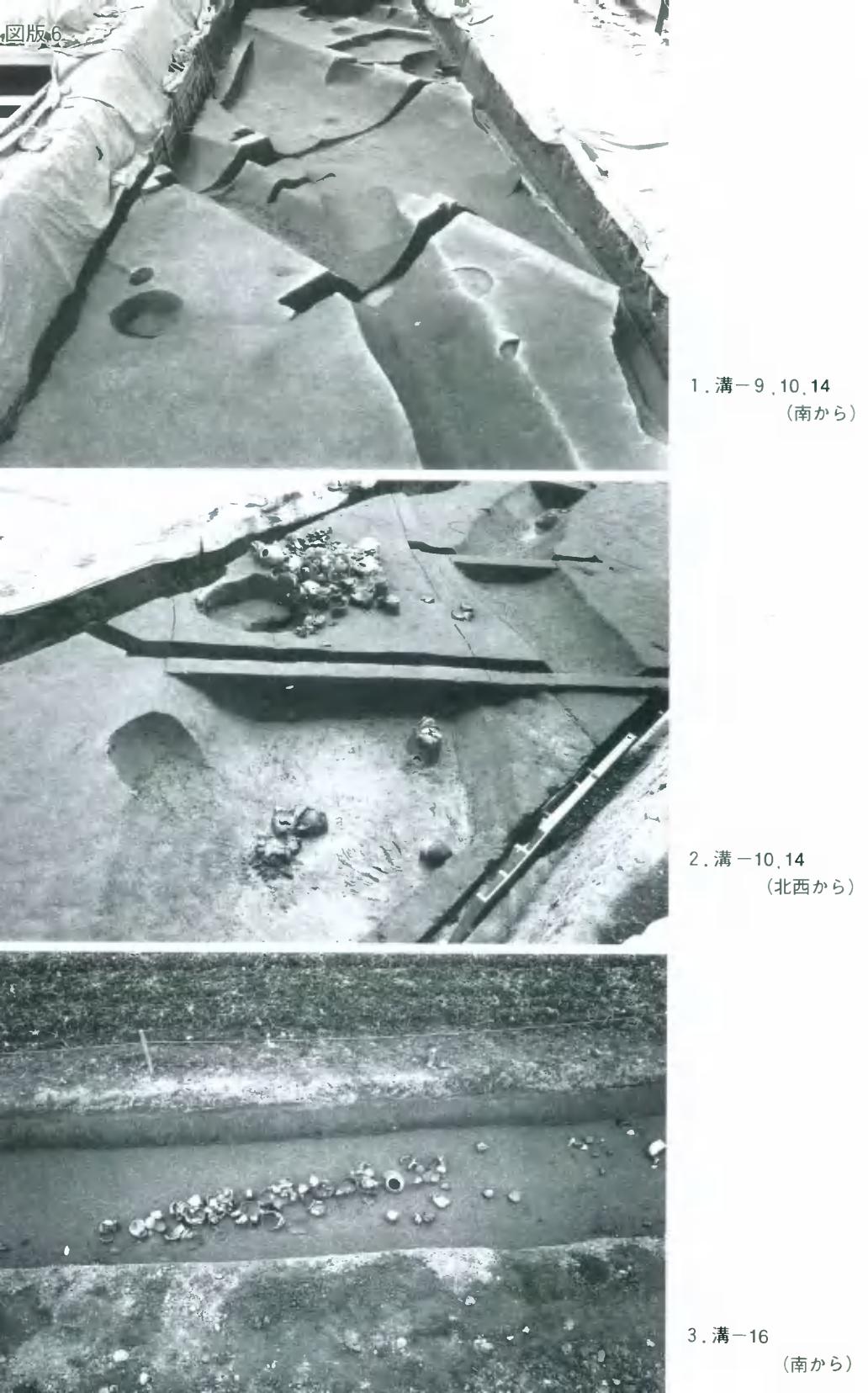


2. 竪穴住居 -14
(北から)



3. 竪穴住居 -15, 16
(南から)





1. 溝-9, 10, 14
(南から)

2. 溝-10, 14
(北西から)

3. 溝-16
(南から)





1. 溝-26

(南から)



2. 溝-26

(南東から)



3. 溝-26, 27, 28, 29

(北から)



1. 溝 -27, 28
(北から)



2. 溝 -32
(南から)



3. 土器溜り - 1
(北から)



1. 土壌-48, 49, 50,
51 (南から)



2. 土壌-51
(西から)



3. 土壌-49
(東から)





1. 溝-49

(北から)



2. 溝-49

(東から)



3. 溝-49

(東から)

1. 鍛冶炉 - 2
(北東から)



2. 鍛冶炉 - 2
(南から)



3. 砂利道 - 1
(北から)





1. 凹地-2
(東から)



3. 溝-60
(南から)



2. 溝-60
(南から)



8



95



93



108



94



111



112

図版16



287



380



288



388



390



291



392



363

溝一14出土遺物（1）



301



319



306



321



311



315



326

図版18



330



360



355



407



359



411



412

溝-14出土遺物（3）



334

420



366

433



421

443



442

350

図版20



341



342



343



442



369



446



447



449



450



371



346

溝一14出土遺物（5）



465



513



504



531



533



511



535

図版22



619



633



621



636



630



639



631



656



640

奈良時代の土器（土壤—49・51、溝—33）



804



816



807



805



818



809



829



814



819



830



815



832



827



M25

近世・近代の遺物



津寺一軒屋遺跡

1. 溝 - 3

(西から)



2. 溝 - 4

(北西から)



3. 溝 - 4

(東から)

1. 河道 - 1
(西から)



2. 壺穴住居 - 4
(南東から)



3. 焼成土壤 - 1
(北東から)





1. 土器窯 - 1
(西から)



2. 河道 - 1
(南東から)



3. 河道 - 1
(北西から)

1. 鍛冶炉 - 1
(南西から)



2. 鍛冶炉 - 1
(西から)



3. 鍛冶炉 - 1
(東から)



図版28



47



70



51



76



58



77

河道一1出土遺物



24

21

鍛冶炉-1 出土鉄片・上層出土遺物

図版30



144



163



149



162



160



C1



C2



164



S10

竪穴住居－4 出土遺物

報告書抄録

フリガナ	ツデラサンボンギイセキ ツデライッケンヤイセキ							
書名	津寺三本木遺跡 津寺一軒屋遺跡							
副書名	主要地方道箕島高松線改良工事に伴う発掘調査1							
卷次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	142							
編著者名	高畠知功・山磨康平・高田恭一郎・速水章人・氏平昭則							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3				TEL086-293-3211			
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒701-0824 岡山県岡山市内山下2-4-6				TEL086-224-2111			
発行年月日	1999年3月31日							
フリガナ 諸収遺跡名	フリガナ 所在地	コ一ド 市町村	北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
ツデラサンボンギ 津寺三本木	オカヤマケンオカ ヤマシツデラ 岡山県岡山市津寺	33201		34度 40分 32秒	133度 49分 29秒	19910101~19910325 19911202~19911217 19920401~19921228 19930401~19930412	1,936	主要地方道路箕島 高松線改良工事に 伴う発掘調査
ツデライッケンヤ 津寺一軒屋	オカヤマケンオカ ヤマシツデラ 岡山県岡山市津寺	33201		34度 40分 31秒	133度 49分 29秒	19930104~19930331 19930401~19930531 19960701~19960918	1,024	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
津寺三本木	集落	弥生	竪穴住居9 柱穴列1 袋状土壙7 土壙24 溝10		弥生土器・石製品(石鎧・石包丁・敲石・砥石・スクレイパー)・土製品(土玉)・金属製品		東九州系の土器	
		古墳	竪穴住居9 柱穴列1 土壙24 溝20		土師器・須恵器・石製品(敲石・砥石)・土製品(土玉)・金属製品(鉄鎧・銅鎧)		動物型土製品 他地域の土器が 目立つ	
		古代	土壙13 溝4 溝状遺構1 土器溜り2 鍛冶炉1		土師器・須恵器・瓦・製塩土器 輪の羽口		官衙関連の溝	
		中世～近世	掘立柱建物1 柱穴列1 土壙14 溝38 溝状遺構2 鍛冶炉1 砂利道1		早島式土器・陶器(備前焼・綠釉・灰釉・鐵釉・肥前系・関西系・瀬戸美濃系)・磁器(青磁・白磁・染付・肥前系・関西系)・石製品(砥石・硯)・土製品(土錘)・金属製品(キセル吸い口・鉄釘・灯明皿・銅錢・嘉永通宝・小刀)・木製品(漆器・下駄)			
津寺一軒屋	集落 水田 墓	弥生	土壙4 土器溜り1 鍛冶炉1 水田1 河道2		弥生土器・石製品(石鎧・石包丁・金床・スクレイパー) 鉄製品		最古級の鍛冶炉 (焼土3ヶ所)	
		古墳	竪穴住居5 柱穴1 土壙2 焼成土壙1 溝3 溝状遺構		土師器・須恵器・製塩土器・石製品(敲石)・土製品(土錘)・金属製品(鉄鎧)			
		古代	掘立柱建物1 柱穴1 土壙1 溝1 河道2		土師器・須恵器			
		中世～近世	掘立柱建物3 柱穴列1 柱穴1 土壙墓1 土壙14 水田畦畔1 溝19 溝状遺構1		早島式土器・埴・陶器(備前焼・灰釉・肥前系)・磁器(青磁・白磁・染付・肥前系)・金属製器(鉄釘・刀子)			

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告

**津寺三本木遺跡
津寺一軒屋遺跡**

主要地方道箕島高松線改良工事に伴う発掘調査 1

1999年3月24日 印刷

1999年3月31日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発 行 岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印 刷 サンコー印刷株式会社
総社市真壁871-2